「キモ男三人衆セカンド、変態黒女教師と永久屋敷の呪い？」

オハラハン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「キモ男三人衆セカンド、変態黒女教師と永久屋敷の呪い？」

【Ｎコード】
Ｎ２３６６Ｋ

【作者名】
オハラハン

【あらすじ】
黒いものしか身につけず、変態とも噂される某高校の美人女教師もとこが、
１０年前に猟奇殺人が起きた屋敷で学力強化特別合宿の名目でクラスから１０人の生徒を選抜した。
もとこが合宿を開催する理由がいろいろ噂される中、合宿は始まった。
そこでは、
同じ黒い服を着るもとこの妹で美人のもとめと執事のオオシマが

待っていた。　キモ男三人衆と呼ばれる生徒や四美将といわれる美少女たちが集まった屋敷で繰り広げられるちょっとHで、すこし不気味な長編コミカルミステリー。

「プロローグ1」

オンシラーズ高校の教師、花久素子（はなひさ　もとこ）は今度担任する生徒の名簿を眺めて愕然とした。

ホウセイ、オチタ、永久、
木太郎、アユメ、チウメ、アスカ？

１０年前に世間を騒がした猟奇的殺人事件の関係者にそっくりな名前が並んでいた。

もとこが
この４月から心霊研究会ＰＥＴを復活させることを決めたばかりだっただけに
運命的なものを感じたのだ。

別名永久屋敷からは
首のない遺体を含む多数の遺体が発見され、
今では名門となったオンシラーズ高校に在籍していた、
当時某大臣の孫や当時名門お嬢様高校の生徒が関係したこともあって、
前例のない猟奇的殺人事件として
ワイドショーでも毎日のように報道されたが、
結局は犯人不明のまま迷宮事件になり世間からも
完全に忘れ去られていた。

当時同じ年頃のもとこにとっては
非常に興味深い事件であったので、
事件ファイルやネット上の記事を集めたデータは
今も手元に残っていた。

もとこは懐かしそうに昔のデータを徹夜で読み返していた。

（続く）

「プロローグ2」

観月アユメが
「ヒトメ、私よ、
今少しいい？今日発表されたクラス分け見てきた？」
と親友の御夏ヒトメに電話する。
「見た。見た。一緒で良かったね。
それに、学年一の秀才でイケメンの永久浪人くんも一緒よ。」
「うん、
でも、噂の変態女教師と
１０代目キモ男三人衆がついてきっちゃたね」
「本当、それが余計よね。
キモ男三人衆が１０代目っていうことは
初代もいるっていうことでしょ」
「当然そうらしいけど
初代は何か訳ありらしいよ」
「何か知ってるの？」
「ちょっとだけ。
まだ、男子高時代の大昔のことでいろいろ噂があるけど、
とにかく初代は本当にキモかったらしい。
猿と豚と禿げだったらしい。
それに、猟奇的殺人事件にも関係していたらしいの」
「へー。キモいねえ。
それでその事件はどうなったの」
「結局、迷宮入りになったらしいよ」
「ふーん、それから、
月梅チウメと松波アスカも一緒なのよね。」
「ミスオンシラーズに選ばれたチウメとミス水着のアスカでしょ。
でも、ヒトメの方がずっとかわいいと思うよ」

「ありがとう。
そういうアユメは男子の中で一番人気あるみたいじゃない」
「そんなことないわよ。
それより自分でいうのも変だけどこのクラスに
美少女集めたっていうのは、
あの変態教師の噂が本当だっていうことかしら」
「噂って、どっちの」
「どっちもよ」
「そうだね。
どっちもそうじゃないと無理よね」
「だったら結構怖いわよね」
「あっ、メールが来たみたいだから、
明日会おうね」
「うん、また」

「プロローグ3」

アキバのとあるショップで
「ラッキー！」
オチタ中並は、
　オタク仲間でフィギュアを捜すのに
夢中の根雅くそたに嬉しそうに声をかける。
「おっ、びっくりするじゃないか。
どうしたんだよ。」
「新学期からのクラス替えだよ。
　クラス替え。
　オタク、気にならないのかよ」
「別に。
どうせ、俺たちのことだから、
　また不細工の集まりに入れられるか、
そうじゃなくても相手にされないさ」
と、
　くそたは冷めた顔で言う。
「俺も、そう思ってたら凄いぞ。
本当に凄い。
　全部で5クラスもあるのに、
あの四美将が同じクラスなんだ。
　オタクも一緒で
残念ながら木太郎も一緒だけどな」
「えっ、四美将って、
アユメちゃん、
ヒトメちゃん、
アスカちゃん、
チウメちゃんのこと?」

「他に誰がいるんだよ。
だから、
フィギュアなんて見てる場合じゃないぞ」
「だけど、木太郎も一緒じゃ、
どうせ１０代目とか陰で言われて
バカにされて相手にされないだけだろ」
「それでもいいじゃないか。
四美将が生身でみられるだけでも俺は満足だ。
今までのように隠し撮りをしなくてもいいし、
集合写真も一緒なんだぞ。
１０代目キモ男三人衆でもいいじゃないか。
かえって注目されるかもよ」
「楽天的な奴だな。
木太郎も知ってるのか？」
「ああ、あいつなんか。
発表の前から校門の前で待っていたんだぞ」
「何で知ってるの」
「一緒に並んだから」
「オタクらバカじゃない？」
「いやー、
昼間は買いもしないでフィギュアをわびしく眺め、
家に帰れば携帯ゲームに熱中のオタクのほうが、
よっぽど哀れだと思うけどね」
「そう？
でも何かあるんでしょ」
「まあ、俺たちには関係ないよ。
あの変態女教師が担任なことと
永久が一緒なことくらいかな？」
「変態女教師？
ああ、噂の女好きの黒女か。

でも、それは俺たちには関係ないね。
永久もどうせ次元が違うから。
でも、
四美将と一緒のクラスなのか」
くそたの顔はにやけていた。

「プロローグ4」

永久は凄く憂鬱だった。
新学期のクラス編成で変態女教師として
有名なあの黒女が担任になったからだ。
永久がそれを実感したのが昨日の夜のことだった。
どこから自分のメールアドレスを調べたのかも不気味だが、
送信されてきたメールの内容がさらに不気味だった。
「今度、
あなたのクラスを担任にすることになった花久素子よ。
よろしくね！
間違えてもあなただけはハナクソ先生なんて呼ばないでね。
もとこ先生でも、
もとこでもいいのよ。
私がこのまま三年生になっても担任を続けて
私立ならどこでも入れてあげるからね。
といっても永久くんなら自力で大丈夫よね。
あー、
それからあなたが女に生まれていたら・・・
どきどき・・・
なーんて冗談よ。
今後ともよろしくね！」
という恐ろしいメールだった。
ラブレターをもらうのには慣れていたが、
まだ、
クラス編制も発表されていないのに
こんなメールが来たのにはさすがの永久も驚いていた。
黒女は、
実は眼鏡を外すと、

凄い美人だとの噂もあるが、
毎日着ている妊婦服のような黒服に、
黒縁眼鏡、
黒みがかった唇は
すごく不気味だった。
実際、
永久は、
すれ違うときにイヤでも臭ってくる妖しい匂いと
あの独特の視線を思い出すとぞっとした。
女好きの変態女教師という噂があるのに
昨年の学園祭で女装してしまったことも
永久は後悔していた。

「プロローグ5」

ホウセイは新学期のクラス編制の掲示板を見て
思わずガッツポーズをした。
憧れのもとこが担任だったからだ。
知的な黒縁眼鏡や
一見まったく同じに見える黒服のセンスをまったく理解できず、
変態女教師などと噂する輩もいるが、
とんでもないおおバカ者だ。
あの黒い眼鏡と小顔、
小さな口元、そして、整った鼻、
そして、切れ長の程良いサイズの瞳が
絶妙なバランスで配置されている。
眼鏡も毎日同じようだが、
実は数えただけでも最低7つはある。
黒みがかった口紅も日によって微妙に違う。
黒服についてはいくつあるのか数え切れない。
あの絶妙なバランスとセンスを理解できないとは、
同じオンシラーズ高校の生徒として恥ずかしい限りだ。
あの黒服の下にはボテバラが隠されている
と噂をするバカ者がいるがとんでもない。
黒服の下から覗く、小さな足と折れそうで細い足首では、
とても噂されているような体重を支え切れるわけがない。
思春期の男子を惑わさないように
わざと妊婦が着そうな黒服でナイスなボディを隠しているだけなのだ。
ホウセイは本気でそう思っていた。
もとこが黒にこだわっているのも、
オカルト的趣味があるホウセイを魅了している理由の一つだった。

かように、ホウセイにとって、
もとこは彼の求める理想の女性そのものだったのである。

（続く）

「プロローグ6」

永久の奴今頃びびっているんだろうな。
これで奴がもとこに近づく危険性はない。
恐らくもとこの魅力に気づいているのは
この自分だけだろう。
そして、
今回のクラス編制を裏で仕切ったのが
自分だということは誰も知らないだろう。
女好きな変態女教師という噂や、
この学園の経営者の隠し子だ
という噂を流したのも自分であることも
誰も思いつかないであろう。
残りのキモ男や野郎どもにも
四美将がいるから、
万が一にも、
もとこに走ることはないだろう。

木太郎はボリボリと腹を掻きながら、
そんな思いに耽りながら、
にんまりと笑っていた。

「プロローグ7」

アスカは等身大の鏡に自らの裸身を眺め、
うっとりとしていた。
四美将？
どこのオタク連中どもが言ったかわからないが冗談じゃない。
チウメ、ふん、
ちょっと目鼻立ちが整っているだけじゃない。
アユメ、
あのたれめのパンダ。
シロズラで男に媚びを売りまくっているだけじゃない。
ヒトメ、
あれは仔猫。
仔猫がちょっと流行の服を着てチョコマカ動いているから、
可愛く見えるだけじゃない。
ペット。
おもちゃ。
大人になれば、ただの雌。

ナルシストで自信家のアスカは
今回のクラス編制が
自分の魅力を最大限に見せつける最大のチャンスだ
と思いこんでいた。

「プロローグ8」

今朝からとてもイヤな予感がする。
そう言えば、
今日は新しいクラス編制が発表される日だ。
イヤな予感と結びつけて考えると、
新しいクラスで何かとても恐ろしいことが起きるに決まっている。
それにしても恐ろしいこととは何だろう。
チウメは
自分にはイヤなことを事前に感じ取る特殊な能力があると思いこんでいる。
母や妹に話してもまったく信じてくれないが、
本当のことなんだ。
父が交通事故で死んだ時もそうだ。
あのときは朝早くからとてもイヤな予感がしたので、
家族みんなに外出をやめるように言ったくらいだが
誰も信じてくれなかった。
そういうイヤな予感がして、実際、不幸があったことは数あるけれど、
今日程のイヤな予感は父が死んでから以来だ。
いっそのこと学校行くのをやめようか。
そう思ったくらいだが妹の飼っていた小鳥が死んだという話しを聞いて、
思い直したチウメであった。

もちろん、
イヤなこととはそんなことではなかったことに
後日チウメは気づくのであろうか。

「初登校と黒教師登場」

「おはよう、くそた」
木太郎がにやけながら、
腹をボリボリ掻きながら、声をかける。
「おはよう」
オチタが二人の肩ごしに声をかける。
「おはよう、１０代目たち」
ホウセイがちらっと三人を見ながら、
声をかける。
くそたが言い返そうとするが、
オチタが止める。
「あいつの親父凄いらしいぞ、
元ヤクザからのし上がって今の会社〇〇〇をここまで大きくしたらしい」
「〇〇〇？ここはお坊っちゃん、
お嬢様が多いとは聞いたが、驚いたな」
３人がひそひそ話をしていると、
周りが３人を見ている気配を感じた。
「あれが１０代目。ついてないな」
そんな声が女子の間でとびかっている気がする。
「どこ座る。どうせ、後で席替えだから、適当でいいだろう」
とオチタが言うと、
木太郎が「どうせなら、一番前に座ろう」
と言うと、
「なんでさ」
「なんでも」と
木太郎のもとこへの思いを知らない二人はその意見に従う。

気がつくと、既に前の席の真ん中にホウセイが座ってる。
「オタクたちもそうですか」と訳のわからないことを言う。
「変態教師って実際どんなのかなあ。
毎日同じ黒服に黒眼鏡、それに臭そうな黒い靴だってさ」
「私何回か見たけど、そうだったよ。
近くに行ったら変な臭いがしたよ」
後からひそひそ声が聞こえる。
「四美将は3つに別れたぞ。
ヒトメちゃんとアユメちゃんは仲がいいみたいだけど、
他の二人は我かんせずって感じだぞ」
「永久さん、一番後ろにいる。
前の方がいいのになあ」
「後だがらいいのよ。顔が見えて」
いろいろな声が聞こえる中、
教室の前の扉が開きもとこが入室する。
入室の際、何か香のような独特の匂いがする。
「起立」
「礼」
「着席」
躾がよくされた生徒たちね。
もとこは内心思っていた。
黒服、黒眼鏡、黒靴、
腰の近くまでかかる黒髪で現れたもとこは、
いきなり、
「私が今度このクラスを担任することになった花久素子です。
よろしく」
と言うと、
いきなり出席をとり、
その際、顔と名前を確認する。
「えーっ、突然ですが、このクラスから10人前後、

優秀な生徒を選抜することになりました。
最初の合宿はゴールデンウイークを計画していますから、
早速ですが、これから選抜試験を行います」
と一方的に言うと、
問題用紙を配りだす。
「びっくりされてるでしょうが、
選抜された生徒の方には一流校への現役合格をこの私が保証しますので、
がんばってください。
問題は行き渡りましたかあ。
では、これから60分で解いてください」
クラスのほとんどの生徒がきょとんとする中、
もとこが、
「さあ、早く時間に限りはあるのですよ」
と変な気合いの入れ方をすると、
生徒たちは問題文に目を通した。

「突然のテスト」

木太郎は問題用紙が配られると、
気合いを入れて問題を読んだ。

「二つのテーマのうち、
一つを９００字から９９９字までの文字数（句読点含む）で
まとめなさい。
１，私花久素子の魅力について
２，私花久素子のイヤなところ」
うあー、凄い問題だ。
これって、踏み絵？それとも？
それにしても、いきなり、こう来るとは俺が流した変態だ
という噂もまんざらじゃないな。
クラスは全部で３５人。
残るのは１０人前後。
倍率は３．５倍さあ、どう書こう。
わざとけなすか、やっぱり本音で行くか？

木太郎は迷っていた。

他方、
ホウセイは文章をまとめるのに苦労していた。
魅力を書いたらきりがない。
この文字数で訴えるとしたら、
どう構成するか。頭を悩ます。

永久は恐ろしかった。

褒めても地獄、
けなしても地獄。
さあ、どうしよう。
白紙でだすか。

くそたとオチタは
質問の意図もわかっていなかったのに、
妙に自信をもって書いた。
くそたは質問攻め。
オチタは初対面なのでわかりません連続。

アユメとヒトメは
適当に褒めちぎってまとめた。

チウメは用紙から感じる
異様な何かに震えて何も書けない。

アスカはもとこを鼻から嫌っていたので
とにかくけなしまくった。

「テスト終了」

「はーい時間です。
そこもうお終いですよ。
前に答案用紙を回して」
もとこは
機嫌よく答案用紙を回収する。
「今日は
いきなりのテストでお疲れさま。
これで解散にしますよ。
明日からはびっしと行きますよ。
では、ごきげんよう」と、
もとこは一方的に言うと、
さっさと部屋を出ていった。
「何、あの女いきなり変な問題だして、
1時間でごきげんよう、
ふざけんじゃないわよ」と、
ある女子がもとこが出ていった後大声でいう。
その女子は当然、賛同者が出るものと思って行ったのだが、
「どうしよう、10人に入れなかったら、
もうあと2年は用なしになるの？」
「あの先生のことだから、
残れなかった生徒は因縁つけられて退学にされちゃうかもよ」
「ああ、もっとおべっかでも使っておけばよかった」などと、
後悔する声がほとんどだ。
もとこを非難した女には小声で「あの子お終いね。
盗聴器が仕掛けられているかもしれないし、
誰かがチクるかもしれないのにね。

とにかく、あの子にかかわるのやめましょう」
というわけだった。
女子には木太郎がでっちあげたもとこの噂が
相当プレッシャーになっているようだ。
「おちた、どうだった」
くそたの問いに
「やはり、正直に書くべきだろう。
字数制限は、同じ言葉でクリアすればいいさ」と、
とんちんかんな答えをする。
しかし、
くそたも
「そうだよな。
わからないことはわからないから教えてもらう。
それが生徒の義務だ。
よし、ばっちりだ」と、
二人は自信ありげに互いの顔を見合わせた後、
「しまった。
選ばれたら勉強しなきゃいけなくなる」
と互いにうつむく。
「心配するな。君たち、１０人だよ。
たった１０人、そんな簡単なことなら誰でも書けるよ。
やっぱり、褒めるとこは褒める。
褒め尽くす。これだよ。
君たち、大丈夫、君たちは選ばれないから」
ホウセイが偉そうに言うと、
木太郎が
「同意。オタクわかってるね。さすが・・・」
といいかけて、
木太郎は口ごもる。
「いいさ、オタクでも。

君は仲間になれそうだ、
えーなんだっけ残りの二人。
名前忘れたよ。
とにかく、１０代目の諸君、一緒に合格することを祈ろう」と、
ホウセイは偉そうかつ、
自信ありげに言うと、さっさと帰る。
木太郎はホウセイの後ろ姿を見て、
「あいつはただものじゃないぞ。
くそた、おちた。
これからはあいつを手本にしろ」
と木太郎も偉そうに言うが、
二人とも意味不明の会話に
イヤそうな顔をするだけだった。

「続く自習」

「只今、採点中、あと最低2週間待ってね。
その間各自、自習お願いね、先生真剣に選ぶから」
と書かれた掲示板に翌日学校に来たクラスのほとんどが固まった。
普通ならここで親が学校に抗議するだろうが、
噂が噂なだけに誰も抗議できない。
いや、下手に抗議して１０人に残れなかった場合を考えると
親にさえ言えない生徒がほとんどだ。
「やっぱり、変態」
「ううん職務怠慢」
「おバカ盗聴器があるかもよ」
噂が適当に拡大し、各自黙って自習する。
下手な話しをすると、
盗聴の一言でだまり込む生徒がほとんどの中、
アスカが最初こそ、
一人で悪口をいいまくったが、
誰も相手にしないどころかかえって、
人気があった男子にまで敬遠されてしまい、
おとなしくなる。
あの女悪魔だわ。
アスカは心の中で叫ぶのが精一杯になった。
他方、緊張がゆるんだのは永久だった。
声には出さないが自分だけがターゲットでなかったと思いこみ、
鼻歌を歌いながら推理小説に毎日没頭した。
不安だったのはホウセイと木太郎だった。
もとこ先生の魅力に気づいていたのは自分くらいだ
と思いこんでいただけに選考に時間がかかったことで、

他にも、もとこ先生の大ファンがいるものと思いこみ、
自分の見通しが甘かったと後悔していた。
くそたは相変わらず帰宅時に某ショップで某フィギュアを眺め、
ゴールデンウイーク前に発売される携帯ゲームソフトの発売を
心待ちにしていた。
オチタはもう少し選考がのびれば、
ゴールデンウイークで休みになると甘い考えを持っていた。

「合格通知」

ホウセイは黒い封筒に
白い文字で宛名を書かれた封筒が
机の上に置いてあるのを見て、
確信した。

もとこからの手紙だ。

と。

そして、
中身はもちろん合格通知だった。
封筒に傷を付けないように
スチームを使ってそっと開けると、
ちょっと変わった便せんが1枚入っていた。
合格通知という表題の下に、

合格おめでとう！
合宿がんばろうね！

と書いてあり、
下にもとこの直筆の署名もあった。

転校してきたばかりの巻駒レイカは
合格通知を受け取って動揺していた。
なんで、この私が。
特に褒めてもいないし、

けなしてもいない。
実際、頭もよくないし、大学なんてどうでもいい。
何故自分が？
レイカは例の噂を聞いていたので不安で一杯だった。

一番がっかりしていたのはくそたである。
せっかくあの名作ゲームをじっくりやれる
と思ったいただけに合格には自信はなくもなかったが
何か損した気がしていた。

オチタも合宿で休みがつぶれることに少しがっかりしていたが、
四美将の一人でも選ばれていればその子と仲良くなれる
といい方に考え直すことにした。

「１０人の合格者発表」

もとこのクラスの生徒たちは掲示板に釘付けになっていた。

合格者氏名

根雅くそた
鶴負ホウセイ
水木太郎
落田中並
永久浪人
観月アユメ
月梅チウメ
松波アスカ
御夏ヒトメ
巻駒レイカ

合宿期間

４月２９日から５月５日

合宿場所

旧小島邸

集合場所

本校正門前、午前８時
用意するもの
筆記用具その他、自分で考えなさい
以　上

「なんで、四美将と１０代目が」
「永久様と四美将は当然だけど」
「噂は本当よ。転校生のレイカも地味にしてるけど、よく見ると美人だもん。美少女５人以外は誰でもよかったのよ」
「盗聴されてるかもよ」
「いいよ、どうせ選ばれなかったんだから」
「ちょっと待って、以上の下に小さい文字が」

今回は以上の１０名を選出しましたが、
今回の合宿では成績上位者８名を選び、
次回の合宿までその８人を毎週土日特訓します。
次回夏休みの合宿は
残りの２名を再度テストを行って選出し直しますから、
今回不合格になった生徒もあきらめることなく
きちんと勉強すること。
「やばあ、余計なことを言ってしまった」
「あの先生よく考えてるね」
「しっ、盗聴されてるかもよ」

クラスメイトの小声をまったく気にせず、
ホウセイも木太郎も大満足だった。
２名落とされるということもまったく気にしていなかった。

女子のメンバーを見て噂がやはり本当だと確信し、
またまた憂鬱になった永久だが、
この合宿でどうにか落とされたいと何か方法を考えているようだった。

逆に、
チウメは次回の合宿はないような予感に襲われていた。

「合宿日当日」

合格した生徒たちが正門前で待つ。

一番乗りのホウセイと木太郎はあくびの連続だ。
多分、興奮して眠れなかったのだろう。

くそたは携帯ゲームに熱中している。
アユメとヒトメは何か楽しそうにおしゃべりをしている。

おちたはくそたがやってるゲームを覗いたり、
周りを見渡したりと落ち着きがない。

チウメはなにかびくびくしているようだ。

レイカも落ち着きなく周りをきょろきょろしている。

だが、アスカと永久は現れない。

集合時間の1分前、自分のスタイルの良さを誇示するかのように
白のノースリーブにショートパンツの格好でアスカが現れる。

テレた顔で最後に現れたのが永久だ。
皆の目が点になる。
　坊主頭に眉毛を半分剃り、
ジャージ姿でいかにも田舎者のアンちゃんって格好で登場したからだ。
　もちろん、永久には考えがあったのだが、
やはり皆の冷たい視線を浴び、

恥ずかしいようだ。

その時、
時間をはかったようにマイクロバスが正門前に到着する。
そして、
扉が開きやさしい感じのおじさんがバスから降りて来ると、
「おはようございます。
今回皆様のお世話をさせていただくことになりましたオオシマでございます。
よろしくお願いします」
と丁寧に頭を下げて
「席はたくさんありますからご自由にお座りください。
ゴールデンウイーク期間中で渋滞も予想されますが、
なるべく裏道を走りますので、
3・4時間程度で到着すると思いますがお手洗い等なにかありましたら、
お気軽にお声をかけてください」
と言うと、生徒を乗車するよう誘導する。

そう言われた瞬間、木太郎とホウセイが真っ先にバスに乗り込む。

その後、アスカ、アユメ、ヒトメ、レイカ、チウメくそた、おちたの順でバスに乗る。
バスが走り出すと木太郎とホウセイ、
アユメとヒトメが何か話している他はおちた以外は各自黙っていた。
おちたは誰にも相手にされないにもかかわらず、
一言づつ声をかけて周り、
最後はくそたが熱中するゲームを覗きこんだり、
四美将とレイカの顔を眺めたり、
勝手に持参したデジカメで写真を撮ったりと

相変わらず一人だけ落ち着きはなかった。

「旧小島邸到着」

バスは3時間程度で
目的地の旧小島邸に到着した。
「すげえ、
古い別荘と聞いていたからおんぼろかと思っていたが、
小さい城みたいだな」
おちたがはしゃいで言う。
「こんな立派な別荘で悲惨な事件が起きた
とはとても思えないよな」と、
今度は木太郎が呟く。
「何、それ」
おちたの質問に
木太郎は、
「オタク、知らなかったの、10年くらい前だけど、
ここで何人も殺されたみたいだよ。
なんでも、まだうちの高校が男子高時代に
うちの先輩も関係していたみたいなんだ。
詳しいことは誰も知らないようだけど、
その後、誰かがここを買い取って事件前と
ほぼ同じようにリフォームしたって聞いてるけどな」と、
木太郎が腹を掻きながら自慢げに話しているが、
ヒトメやアユメなどほとんどの生徒が屋敷の豪華さに喜んでいて、
木太郎の話なんて聞いていない。

門の扉の鍵は既に開いていて、
一行は広い庭を進み玄関の扉の前につく。

呼び鈴のようなものがあったので、
おちたが押すと、
すぐに
もとこと同じような黒服を着た
ショートカットの美しい女性が現れた。

「美しき妹もとめ」

「いらっしゃい、
姉がいつもお世話になっております。
妹のもとめです。」と、
にこやかに、
そして姉と違って爽やかに一行を迎える。
もとめが出てきた瞬間花のようなさわやかな匂いもした。

一行は中に入ると正面のリビングに通される。
「姉は今テストの準備をしております。
部屋割はもうしてありますから、
このまま、部屋に入られてちょっとお休みしてくださいね。
部屋にはトイレも浴室もあります。
あと、各部屋の冷蔵庫に冷たい飲み物を用意してありますから、
いくらでも好きなものを飲んでね。
うーん、まだ、１１時だから１２時に
ここに集合ということでよろしいですね。
それから、軽くお昼をとって午後からテストと聞いてます」
ともとめが明るく要領よく言う。
そして、
「えー、またテストかよ」
とくそたが呟くが、
もとめはくそたにかまわず、
「１０１号室、くそたくん、
１０２はおちたくん、
１０３は木太郎くん、

１０４は永久くん、
１０５はホウセイくん、
２０１はアユメさん、
２０２は、ヒトメさん、
２０３はアスカさん、
２０４はチウメさん、
２０５はレイカさん、
私は１０６、
姉は２０６、
教室は２０７ね、
執事のオオシマさんは管理人室を使ってもらいます」
と言って、
テキパキ鍵を一人づつ渡すと
「それから正面から見てリビングの左側の奥に、
露天風呂があるけど、まだ、清掃中だから入るのは夕方以降にしてね。
６時から９時が女子、
１０時から１２時が男子ね。
一応、入り口に表示はするけど間違えちゃだめよ、
あと今日は外出禁止。
いい、何か質問あるかな」と、
もとめが言ったものの、
とても質問できるような雰囲気ではなかったが、
「あの２０７号室って、昔事件があった部屋では」
と木太郎がずうずうしく質問する。
「よく知ってるわね。
でも、ちゃんとリフォームもしたしお祓いもしたから、
大丈夫よ。怖いの？」
「いえ、念のため」
「あと、この屋敷には地下室もあるけど

下手に入ると戻れなくなるから
ここと自分の部屋、露天風呂、
食堂以外には立ち入らないこと。
でも、地下室の入り口はそう簡単には見つからないけどね。
じゃあ、これで、一旦解散」と言うと、
もとめは
さっさっと食堂からキッチンの方へ向かって行ってしまった。
「来ている服は同じだけど、
お姉さんとはずいぶん感じが違うね。」
とおちたが言うと、
「本当、服さえ変えればもっと素敵なのにね」
とレイカも似たように褒める。
「でも、同じ姉妹だから意外に冷たいかもよ。
俺先に部屋に行くぞ」と、
くそたが一人移動始めると、
一行はそれに習うようにそれぞれ自分の部屋に向かった。

「いきなりテスト」

一休みを終え、
　くそたが２０７号室に着くと、
みな時間をもてあましていたのか、
名札が置かれた椅子にもう着席していた。
　正面には大きな黒板が壁に立てられており、
部屋には机が１０個、５、３，２の配列で並べられている。
　前が女子、次がキモ男３人、
後が永久とホウセイの席のようだ。
　黒板の前には机がひとつ、
部屋の左には何故かちょこんとベッドがひとつ置かれている。
　部屋の右側には浴室と扉の感じからトイレがあるだけだった。
くそたが着席して間もなく、
もとこがいつもの格好で現れた。
「起立」
「礼」
「着席」
「みなさま、おつかれさま。
本当なら午後は自習でもよろしいんですが、
時間に限りがありますので、早速、テストを始めます。」
もとこは挨拶もろくにせず問題用紙兼答案用紙を裏にして配る。
「えー、時間は６０分です、
今１時１分ですから、２時２分までとします。
終わったら、直接、私の所まで提出に来てね。
次の授業は２時３０分から始めますから、
早く終わった人は部屋に戻ってもいいわよ。
では、スタート。」と唐突にテストを開始する。

くそたは問題を開く。
問題の内容は
「今回、選抜された１０人の生徒の中で、
不合格となると思う生徒のフルネームを漢字で書いて、
その理由を簡潔に書きなさい」
というものだった。
くそたは周りを見ると、みな考えこんでいるようだった。
しかし、
くそたは、早くゲームをやりたかったので、
「根雅くそた、その他はわかりません。
理由、
僕は今回ゲームをやることに熱中しているので
一番やる気がないからです」と書いて、
もとこに提出するとさっさと部屋を出て、
ゲームをやりにいった。
「はやー」と、
おちたは声を上げそうになったが、
周りが真剣に考えているので口を押さえた。

「いきなりテスト2」

くそたが早く出ていったのを見ておちたは考えた。
よし、これだ。
「くそたと永久です。
くそたは
ゲームに夢中でやる気がないからです。
永久は
ある噂を信じていてやはりやる気がないですからです」と。
そこまで考えたはいいが、
くそたのフルネームはすぐ書けたが、
永久の名前が思い出せず、
悩みまくっていた。
永久は、
「僕とくそたです。
僕は何故かやる気がないからです。
くそたはゲームばかりやっているからです」と。
永久は漢字でフルネーム書いて提出した。

女子の方は
アスカ以外はかなり時間がかかった。　まず、
アスカが
「私以外です。
私の能力や美貌が抜けていることは間違いありません。
その他の方のことはよくわかりません」と、
問題文から絶対に不正解な内容の答案を書く。
そして、
チウメは悩んだあげく

「私と永久さんです。
私はここが怖いからです。
永久さんにはやる気が感じられません」
と二人のフルネームを漢字で書いて答案を提出した。
ヒトメとアユメはさらに悩んだ。
「あと１０分ですよ」と、
もとこに言われ、
ヒトメは、焦って、
「ホウセイくんとレイカさんです。
ルックスに特徴がないからです」
と結局フルネームでそう書いた。
アユメは、
「くそたくんと、チウメさんです。
くそたくんはゲームに熱中していて
明らかにやる気がないからです。
チウメさんはおどおどしているので、
体力がもたないと思うからです」と、
やはり漢字でフルネームで書いた。
木太郎とホウセイは答案が既に出来ていたので、
レイカだけがなかなか答案を書けなかった。
一人は決まっていたが、
もう一人がなかなか思い浮かばなかったのだ。
「あと3分です」
ともとこに言われ、
「自分です。
はっきり言って、
勉強には自信がないからです。
もう一人はくそたくんです。
ゲームに熱中してるから、
多分勉強は苦手だと思います」と、

どうにか答えを考え、
やはり漢字でフルネームで書いた。
木太郎とホウセイはまったく同じ。
「木太郎とホウセイ以外
ということしか答えようがありません。
理由はやる気が違うからです」
というような内容である。
本来なら、
問題文から絶対に不正解な内容であるが、
二人は提出時間ぎりぎりまで待ってから、
自信を持って答案を提出した。
もとこは
みんなの答案を見るとにやりと怪しい笑いを浮かべた。

「木太郎の部屋で」

おちたが木太郎の部屋をノックする。
「開いてるよ」
中に入るとホウセイもいる。
「訳わかんなくねえ。あの問題?」
おちたは二人に訊く。
「はあ、もとこ先生の問題に」
と言いかけた木太郎はホウセイの視線に気づき言葉をやめる。
「何?」
「おちたくんだっけ、
今は生徒のやる気とか従順度とか、
または、
その性格を見ているじゃないのかなあ」
ホウセイが横から口を出す。
「おちたでいいよ。
でも、そう言われてみればそうとも思えるなあ」
とおちたは妙に納得してしまう。
「すると、
今日はその辺をテストするのかなあ。
ありがとう」
とおちたはそう言って部屋を出る。
「あぶなかったなあ」
と木太郎が言うと
「うん、
彼みたいに意外に素直なのが、
結構、
先生の魅力に気がついたりするんだ。

しかもその後がしつこそうだからね」
「そうだな。
永久とくそたは大丈夫だと思うけどおちたは危ないなあ」
「ところで、
何の話ししていたんだっけ」
「妹さんのことだよ」
「そうだった。
何でもとこ先生は、
あんな綺麗な妹さんを
この合宿に呼んだんだろうって話しだよな」
「そう、四美将とレイカちゃんだけでなく、
きれいな妹さんまで集めて何する気なんだろう」
「自分への気持ちがぐらつかないか、
試しているのかなあ。」
「でも、
それだと不安が前提にあるということだろう。
もとこ先生には、
そんなの微塵のかけらも感じられないぞ」
「そうだな。
それとも噂が本当なのかなあ」
ホウセイがそう言うと、
「噂？」
木太郎は
自分がでっちあげたもとこが女好きだ
という噂の一つを思い出した。
「あれは、
噂で本当じゃないと思うよ」
と木太郎は自信ありげに言った。
「何で？」
「これは、二人だけの秘密だよ。

いいか。
他言は無用。
っていっても、
そう言うとみんなしゃべるんだよな。
今回の噂もそうさ。
だからやめておく」
木太郎は思い直してしゃべるのをやめると、
何故かホウセイも
「何かイヤなことかもしれないので聞くのを
やめておくよ」
と聞き出すのをやめる。
「じゃあ、話しをもどそう。
例の噂が嘘だとして、
何故妹を呼んだと思う」
「ルックスは関係ないんじゃないか？
妹だと雑用とかやらせやすいからそれだけじゃないか」
「そうかなあ」
「そうだよ。
男子はともかく、
女子のお世話は、
あのおっさんじゃやりきれないだろう？
違うか？」
「違うと思うけどな」
「おーっと、時間だぞ」
「さあ、行くか」

「二度目のテスト」（前書き）

第3弾ゾンビに間違って
投稿したものと同じです。

「二度目のテスト」

「木太郎くん、ホウセイくん1分遅刻ですよ」
ともとこに言われて、
慌てて席についたとき、黒板が目に入った。
なんと、さっきの答案用紙すべてが貼り付けてあったのだ。
「えー、これから、二問目を出しますが、
一問目のように黒板に貼り付ける場合もありますので
答案はよく考えて書いてください。
問題を解き終わったらですが、前にきてみんなの答案をみてよろしいですよ、
では、今2時33分だから、3時34分まで、
要領は一問目と同じ、終わったら部屋に帰っても、
黒板の答案を見ても好きなことしていいですよ。
では、机に既に用紙してある問題を始めなさい」
ともとこは一方的に話をして何かの本を読み始める。
自分の答案が他の生徒に見られるかもしれない
と思っただけでかなりの生徒が動揺したが、
くそただけはすぐ問題を見る。
「もし、今回選ばれた生徒の中からあなた以外の誰か一人に
生まれ変わらないといけないとしたら、
あなたは誰を選びますか。名前と理由を簡単に書きなさい」
くそたは
「永久です。もてるから、
ただし、合宿に来る前の彼です」と書いてすぐ提出し、
さっさとゲームをしに部屋に戻る。
続いて、
おちたも今度は素早く、
くそたと同じような回答をして提出する。

ホウセイは
「自分以外は絶対イヤです。何故なら自分が一番好きだからです。」
木太郎は逆に
「姿形は男なら誰でもいいです。理由は僕の心は普遍だからです」
と訳のわからない解答を書いた。
永久は周りを見回しながら
「ホウセイくんです。理由は僕の好きな顔ですから」
と書いてしまった。
実は、可もなし不可もなしの顔だからと書きたかったが、
黒板に張られるとまずいのでそう書いてしまったのである。

アユメとヒトメは黒板に張られるのを予想して、
互いに相手の名前を書いた。
理由はかわいくて、頭もよくて性格もいいからだと。
チウメは
「アスカさん。いつも堂々としているからです」
と正直に書いた。
アスカは
「永久くん。
男に生まれるなら彼しかないでしょう。
今はわざとダサくしてるようですよ。
誰かさんのせいで」と、
余計なイヤミまで書いてしまう。
レイカは迷い焦る。
「あと１０分です」
とのもとこ先生の声に冷や汗が出てきた。
「あと5分ですよ」
との声にしょうがなく、
永久とも思ったが、

やっぱり、
黒板の関係で女の方が無難だと、
「アスカさんです。きれいで抜群のプロポーションが素敵です」
と書いて提出した。
そして、木太郎、ホウセイはもとこの顔を見ていたいがために、
前回と同様、
答案は出来ているにもかかわらず、
ぎりぎり最後の五秒で提出した。
全員が部屋を出ると、
チウメを除く四人の女子と目的が明らかに違う
と思われる木太郎とホウセイが黒板を覗きに来た。
「全員かと思ったら違うのね。
じゃあ、みなさんどうぞごゆっくり。
そうそう、次は４時３０分、ここに来てね。
それまでゆっくり見ててもよろしいわよ」
とにやりと笑ってそう言うと、
もとこは下のキッチンに寄り、
オオシマに、他の４人にも次の集合時間を告げて回るよう言って、
今回の分の解答用紙をだけを持って教室を出ていった。
そして、
木太郎とホウセイももとこの後を追うように教室を出ていった。

「おちたの初恋ともとめ」

ゲームに夢中のくそたにも相手にされず、
木太郎、ホウセイが教室に残ったので、
おちたは一人寂しく食堂でジュースを飲んでいた。
そのとき何かいい匂いがしたなあと思うと、
「どうしたの、おちたくん、
誰も相手にしてくれないのかなあ」
とにこにこ笑いながら
もとめが自分の前の席にこしかける。
おちたは意外な展開に驚く。
また、正面から近くで見ると
その顔立ちがすごく整っていて、
肌が白くとてもきれいなことに感動する。
何か話さないと思うと余計言葉がでない。
とっさに出たのは、
「今日もいい天気ですね」の一言だった。
「あら、今日は雨よ」
「えっ」
「あっはは。冗談よ。緊張するでしょ。」と、
もとめは今度はにやにや笑って、
少しおちたをからかっているのだが、おちたは気づかない。
おちたは、
どこかもとことはタイプが違う気がしたので、
「先生、いや先生の妹さんは、
やっぱりいつも黒い服を着ているんですか」
と質問する。
「もとめでいいのよ。
君はどう思うの？」

とおちたの目を見つめて優しく訊いてくる。
「も、もとめさん、僕のカンでは
いつもはもっと普通の服を着ていると思います」
とドキドキしながら正直に答える。
「ピンポーンと言いたいところだけど半分正解ね。
そうね。いつもはアスカさんみたいな格好かな」
とにやりと笑って答える。
「あ、アスカさんの格好って凄くないですか」
とおちたが驚いたように言うと、
「今回は姉の命令で黒服だけどいつもはそうよ。
おちたくん、私のことデブだと思ってたの」
「いえ、いえ、そんな。
多分、スタイルいいんだろうなと思ったから、
普通の服でも充分素敵に着こなせると思って答えたんです。
でも、お姉さんってそれじゃあ、やっぱりデブなんですか」
と余計なことを言ってしまった。

「おちたの初恋ともとめ2」

「おせいじは上手だけど、
姉のことは余計ね。
そんなこと姉が聞いたら大変よ」
もとめは，
そう言っておちたをからかう。
「す、すいません。
お姉さまのことをデブだと言って」
と
おちたは顔を真っ赤にして頭を下げる。
「冗談よ。
姉が聞いたら．．．秘密。
ところで、
聞いていいかなあ。
なんで、
おちたくんは、
くそたくんや木太郎くんと
いつも同じような格好してんの？」
もとめは
結構きついところをついてくる。
「うーん、そこは．．．。
この顔と体型じゃ、
永久の格好じゃ似合わないし、
普通の格好はなんかイヤなので、
どうしてもこういうオタクっぽい格好になるんです」
「だから、

十代目なんていわれるんだぞ。
あはは。
冗談よ。
男はあまり格好を気にしちゃだめよ。　もちろん、
不潔はだめだけどね。
要はハートよ。ハート。
おちたくんはその点大丈夫。
だから、
姉は変わってて、
少し不快な思いをさせてしまうかもしれないけど
根は悪くないと思うから、
みんながあれこれ言っても、
がんばって、
最後まで付き合ってあげてね。
じゃあ、よろしくね」
と
もとめはにこっと笑って、
手を一度だけふって去っていく。

なにもかも素晴らしすぎる。

おちたは一方的ではあるが、
はじめて、
生身の人間に恋してしまった。
（続く）

「テスト3」

「今回はみんな時間厳守ね」
もとこは
最後に現れたおちたの顔を身ながらそういう。
「じゃあ、今日はこれで最後のテストよ。
でも、いい。
このテストで
一番に選ばれた人には
今夜午後１０時から明日の七時までこの部屋に泊まってもらいますよ。
いいわね。
でも、
今夜、逃げないでここに泊まりきれば、
得点を５０点あげます。
だから、わざと自分の名前を書いてもいいのよ。
ただ、これだけだとあまりにも
上手すぎる話しなので最初に話しておくわ。
まず、この部屋で１５年前に事故死または自殺した人がいます。
次に、１０年前くらいにこの屋敷の中で殺害された人の死体が
四体も放置されていました。
それだけ。
結構、怖いでしょう。
得点を穫りに行く。
それとも、怖いから逃げる。
自由よ。
くそたくん、何か質問あるの」
くそたが手を上げている。

「持ち込み自由なんですか」
「何でもこの部屋に入るものなら結構よ。
でも、一旦部屋に入ったら時間まで
原則としてどんなことがあっても出られないのよ。
ただし、どうしても怖くなった時は、
入る前に私にだけ聞こえるベルを渡すからそれを使いなさい。
その代わり、得点はプラス５０点じゃなくて、
マイナス５０点よ。
私が来たとき、考え直せば、
プラスマイナス０にしてあげるわ。
ちなみに今回の合宿の満点は特別ポイントを除くと
３００点だからマイナス５０点は結構致命的よ。
他にも質問ある？」
チウメが
「マイナス５０点でいいなら最初からやめてもいいんですか」
とこわごわ質問する。
「もちろんよ。
他にはないようね、
じゃあ、最後の問題、
時間は食事が午後7時からだから6時５５分まで、
でもそんなかからないと思うわ、じゃあ、スタート」
もとこは他にも手をあげようとしていた人物に気がついたにもかかわらず、
質問をうち切り強引にテストを開始した。

「テスト４」

この中で一番の恐がりのチウメは
おそるおそる用紙をひっくり返す。
「１０人の生徒の中で
一番自分に自信を持ってると思うのは誰だと思いますか」
チウメは問題を読んだ瞬間ほっとした。
そして、
「アスカさんです」
と書いてすぐ提出した。
相変わらず木太郎とホウセイは
答案が出来ているにもかかわらず、
時間ぎりぎりまで待つつもりのようだった。
今回は問題が簡単なだけに
二人以外はほとんどすぐ出ていった。
「君たち二人はまだかしら。
今回の問題は簡単なはずだけどなあ。
私、食事の前にお風呂とは言わないけど、
せめてシャワーだけでも浴びたいんだけどなあ?」
ともとこが甘い声を出してそう言ったとたん、
二人は争うように答案を提出した。
「すいません。お疲れのところ気がつきませんで」
と木太郎が謝って逃げるように教室を出かけ、
「今後は気をつけます。
つい。いえ。ごゆっくり」
と言いながら、
ホウセイも頭を下げて、
恥ずかしそうに部屋を出ていこうとすると、

もとこは出ていこうとする二人に
「二人とも見かけによらず優しいのね。
どうもありがとう」
とにこっと笑うと、
二人を追い越して走りながら、
先に部屋を出て行った。
後から部屋を出た二人は、
何故か二人とも同じことを考えていた。

「発表前の不安」

永久はすごく不安だった。

事故死、自殺、殺人。

そんな部屋に一人で泊まれだと。

あの先生はやっぱり変態だ。

けろっとした顔で言う。

質問もろくにさせないで。

逃げる時のためにベルを持たせる、

しかも、そのベルは先生だけに聞こえる。

それで考え直せばプラスマイナスゼロ。

これは怪しい。

それに、この問題じゃ他の男４人は

論外だから選ばれるのは女子の５人か自分しかいないじゃないか。

よく考えたら今回の問題は他人から見た場合だから

そう思える人間と言えば、自分かアスカのどちらかに

決まってるじゃないか。

きっと、怖い思いをさせてベルを鳴らさせて

「怖いの、先生も一緒に泊まってあげようか、

二人だけの秘密よ、

黙っていれば、５０点あげるわ」

なんて言いかねない。

そうやって、

俺かアスカを誘惑する気に決まってる。

そうか、６泊ということは

こういう風に問題をうまく作っていって、

６人全員あの部屋に泊まらせて誘惑する気だ。

変態の本性をもう見せたぞ。
ああすごい罠だ。
最悪だ。
とりあえず、自分はアスカに投票したが、
残りはどう投票するか。
女子は全員が自分だな。
男子は木太郎とホウセイがわからないが、
おちたとくそたはバカだから、
どっちかは俺に入れるかもしれない。
そうしたら、もう6票でお終いだ。
そうじゃなくても、男子全員がアスカに入れないと、
俺の勝ちになる。ああ、絶望的だ。
待てよ、そうだ、
チウメがいい質問していた、
逃げてもいいかと。
しかし、
「あいつはイケメンのくせに実は凄い弱虫なんだ」
と木太郎辺りが、
後で学校中にいいふらすに決まってる。
うーん、どうしよう?

永久はそう考えると、憂鬱でしょうがなかった。

「発表前の不安とご機嫌な女」

もう一人、不安な人物がいた。
アスカだった。

あの先生絶対におかしい。
事故死、自殺だけでもキモいのに、
殺された死体が４人放置されていた。
考えただけでも臭ってくる。
うじ虫。
白骨。
ああーぞっとする。
絶対に選ばれたくない。
でも、
自分は永久にいれたが、
自分に投票しそうなあぶない奴がいる。
まず、
チウメとレイカ、
それからくそたとおちた、
永久は絶対そうだ。
ヒトメとアユメは多分永久だから違うだろう。
木太郎とホウセイはあの先生狙いだから、
どうするだろうか。
多分、
永久か本人自身か。
そうすると、
今でも5票だから、
木太郎かホウセイがどっちも永久に入れない限り、

自分が一番だ。
やばい。
やばすぎる。
チウメが質問したように逃げるか。
でも、
そんなことをしたら、
私のこれまでの努力が水の泡。
この素晴らしい肉体も、
ただの弱虫女に。
私のプライドが絶対にそれだけは許さない。
でも、
あの部屋に一人で泊まるなんて。
何かいい方法はないかしら。
最初に問題がわかっていればうまく根回ししたのに。
でも、そんなこと思ってももう遅い。

アスカはそう考えると、凄く不安だった。

二人の不安をよそに、
もとこは自分の風呂の中で鼻歌を歌いながら、
ご機嫌だった。

今日のテストで全員の性格がほぼ掌握できた。
臆病者が少なくとも４人もいた。
度胸のあるのは、１人だけ。
あとは普通。
いや、あとの５人はわかりやすい。
でも、最後のテストは面白かった。
多分、いや、

絶対に選ばれた生徒は逃げることはないだろう。
どういじめてやろうか？
楽しみだ。

もとこはそう思っていた。

「ウジ虫リゾットうまー」

「今日は移動もあってお疲れでしょうから、
消化の良いものということで、
白身魚のムニエル、
温野菜のサラダ、
それから、
きのこたっぷりのリゾットよ、
カロリーも低めで、栄養もあるけど、
なんと言ってもオオシマの料理の腕は一流だから、
是非全部食べて見てね」
ともとめがいう。
席に座った１２人の前にオオシマは
手際よく料理を並べる。
「リゾット？」
くそたが首を傾げる。
「雑炊みたいなもんだよ」
おちたが言う。
「雑炊？」
くそたはまた首を傾げる。
「まあ、食べてみてよ。」
もとめはまるで自分が作ったように言う。
「うまあ」
くそたはいきなりリゾットを食べ始める。
「おいしいです。このムニエル」ヒトメが言うと、
「何の魚かは秘密よ」
ともとめはにやっと笑う。
「おなかがすいているとおいしく感じるんだよな」

と木太郎がいいかけたとき、
ホウセイがテーブルの下で蹴りを入れる。
もとこがじろっとその光景を見た
木太郎は慌てて、
「なんて、いうのは嘘ですよ、
メルシー、ボーノ」と、
とんちんかんなことを言って、
皆を笑わす。
「みなさん、露天風呂は入ってみた。」
もとめが聞くと、生徒全員が首を横にふる。
「そうね。時間がまだだったわね」
ともとめが忘れていたように言うと、
笑いが起こる。
「時間になったら僕は入ります」
おちたが言うと、
「時間がもったいないので風呂には入りません」
とくそたが答えて、
ブーイングを浴びる。
「不潔な人は私嫌いだからシャワーぐらい浴びなさいよ」
ともとめがイヤそうな顔をして言うと
「好きにしなさい。くそたくん。
もとめに嫌われたってどうってことないわよ。
初志貫徹よ」と言って、
もとこがにっこり笑う。
「どっちにしようかなあ」
とくそたは二人を試すように言うが、
姉妹はくそたの顔を見たあと、
にやりと笑ったまま、わざと黙る。
横から、おちたが
「これ嫌いなの」

とあまり食事に手をつけない永久とアスカに訊くが、
二人は黙って、急に食べ始めるがなかなか食が進まない。
「なんだ、猫舌か」
と木太郎はまたとんちんかんなことを言う。
「それより結果はどうでした。」
「結果は全員が食べ終わったら、発表します。
だって、選ばれた人は怖くてもう食べるどころじゃなくなるでしょう」
ともとこはにやっと笑って言う。
「やっぱり、何かあるんですね。
もう、びびっちゃってろくに食事が喉をとおらない人がいるみたいですよ」
とホウセイが余計なことを言うと、
「そんなチキンハートはこの１０人にはいないわよね」
と意地悪くもとこが言うと、永久とアスカは見栄を張って無理して全部食べる。
「はふー、おいしかったですう、
ごちそうさまでした、オオシマさん」
とヒトメとアユメが声を揃えて言う。
「おかわりないですか」
とくそたが言うと、オオシマが嬉しそうに
「リゾットでよろしければ、ありますが」
と言うと、くそたが嬉しそうに
「それが一番おいしかったです。お願いします」
というとおちたと木太郎も「じゃあ、僕も」
と声を揃えて言う。
「３人分ならちょうど足りますね」
オオシマはそう言うと鼻歌を歌いながら、
キッチンへ行き3人分のリゾットを持ってくる。
３人は嬉しそうにまた食べ始める。

「この3人は残念ながら今回の投票では選ばれなかったので、
3人が食べている間に結果を発表します」
ともとこはあっさり言うが、
3人も当然のような顔でまったく気にしていない。
不安になっているのは、永久とアスカだけだ。
特に、アスカはリゾットの米がウジに思えて
本当は吐きたいくらいの気分だったが、
それをおくびにも出さないで堂々としていた。

「２０７号室行きに選ばれるのは」

「えー、じゃあ、
　ランダムで行きますよ」
もとこは、手元のメモをみながら、
嬉しそうに言う。
「えー、まず、最初はヒトメさん、
１票入りました。おめでとう」
ヒトメがアユメをにっこりとした顔で見る。
「次に、アユメさん、
１票入りました。
おめでとう」
アユメもヒトメを同じように見返す。
永久とアスカは残り８票かと互いに票読みする。
まとめて票数だけいうのか、
一票づつ言うのか、ドキドキしていた。
「次に、永久くん、１票入りました。
おめでとう」
「また、永久くん、１票入りました。
おめでとう」
永久の額から冷や汗が出る。

やばい。
それにおめでとうとは意地悪だ。

と。

「次は、ホウセイくん、
１票入りました。おめでとう」

「えー、本当か？
やったあ。
ありがとう。
誰だかわからないけど。
本当にありがとう」
「ふざけて投票するなよな」
とくそたが言う。
アスカもあと5票しかない
ということで少し落ちつく。
「えー、アスカさん、
1票入りましたおめでとう」
「あっ、木太郎さん、
1票入りましたおめでとう」
「お、
俺が、誰だかしらないがありがとう」
木太郎はガッツポーズをした。
「うん、変人がいたもんだ」
とくそたがまた言ったので、
今度は木太郎に思いっきり頭をぼこられる。
「静かに、
くそたくんたちあまりふざけるとゲームを没収よ」
ともとこに言われたとたん、
姿勢を正しくして頷く。
「次は、
アスカさんに一票、おめでとう」
「わー、大接戦ね。
お姉ちゃん結果知っていて、わざと盛り上げてんでしょ」
ともとめがずばり言う。
アスカも永久もドキドキだった。

「２０７号室行きはアスカか永久か」

「今まで、８票中、
　最高が２票で永久くんとアスカさんが並んでいます。
同点ならオオシマさんに選んでもらいますね」と、
もとこはこれまた意地悪なことを言う。
永久もアスカも、
はたから見てもとてもうまそうには食べていなかったからだ。
それに、
もとこ自身が同点ではないことをよく知っていたからだ。
しかし、

同点かもしれないと不安に思った永久はしまったと思い、

同じく、
アスカも、あー、ウジなんて思わないで
おいしいフリして食べれば良かったと互いに後悔していた。

もとこはわざともったいぶって、
「では、いきますよ。
残りの２票のうち、
一票はくそたくん！
このおバカ！
自分で自分に投票よ。
はっきり言って無効だけど。
もう意味ないわね」と、
言うと、
アスカ、永久以外は大笑いする。

張本人のくそた自身、
ウケたと勘違いして笑っている。
「では、問題の最後の1票は、えー」と、
もとこが一呼吸おいた瞬間、
アスカはほっとし、
永久は心臓が破裂しそうになった。
「え、失礼。ゴホゴホ」
もとこはわざとらしくじらす。
「お姉ちゃん、
心臓に悪いから意地悪しないで、
早く発表しなさいよ」と、
もとめが言うと、
もとこは、
「本当、気の毒でむせたのよ」と、
訳のわからない言い訳とも、
意地の悪い言い方とも言えることを言って、
「あ」と、
言って、
またもとこが
「ゴホゴホ」と、
言った。

「207号室行きはアスカか永久か2」

「えー、失礼。
最後の1票は、え、
えー、
アスカさんでした。
おめでとう。
接戦で残念でしたが永久くん他の皆様、
明日もあるのでがんばってください」
ともとこが言い終えたとたん、
ほっとして水を一口飲んだ永久と、
吐くのを必死でこらえている二人を横目でちらっと見た後、
もとこはにこにこ笑って、
「みなさん、アスカさんに拍手を」
と言うと、
パラパラと拍手の音がした。
アスカは悔しいので、
吐き気をこらえて立ち上げると
「ありがとうございます。光栄です。
では、早速、準備にとりかかります。
お先に失礼させていただきます」
と挨拶して頭を下げると、足早に部屋に戻っていた。
その姿を見たもとこがにやっと笑っていたことを
永久は見逃さなかった。
永久は
「あいつは、変態ではなく悪魔だ」

と誰にも聞こえないような声でそっと呟いた。

「最悪なアスカ、不機嫌な永久、そして、のんきな奴」

アスカは部屋に戻ると
トイレに行き、食べたものを全部吐き出した。
ウジ虫を食べたようで、気持ち悪かったからだ。
しかし、
　アスカには恐怖よりもショックの方が
上回っていた。
あのもとこが意地悪なのは想定内だったが、
3票しか入らなかったからだ。
しかもその1票が永久だと考えると
実質2人しか自分のことを支持していないことに
大きな衝撃を受けていた。
　チウメとレイカが
自分に投票したことは前のテストから確信していただけに、
自分自身に投票したバカなくそたはしょうがないが、
木太郎、ホウセイ、おちたの男3人のうち、
最低一人くらいは投票するだろうと思っていただけにショックは少
なくなく、
あまりの人気のなさに吐いた後も落ち込んだ。

永久は部屋に戻ると少しほっとしたが気分は晴れなかった。
鏡を見る。
たしかに、この頭はひどい。
アスカの票を除くと実質1票というのもわからないではない。
でも、やはりひどすぎる。
あのホウセイや木太郎と実質同一の票しか入らない
とはどうしても納得できなかった。

アスカの圧勝なら納得できる。
でも、あのブ男二人と同じじゃ、
とても、くそたを笑えない。
しかも、あの笑ったときのもとこの顔、あれは悪魔の顔だ。
アスカだけでなく俺のことも嘲笑っているに違いない。
アスカが標的なら俺はただの撒き餌だったのかもしれない。
「おい、あの結果、やっぱり顔だよな。
坊主頭で顔がよくわかるというしなあ。
髪型でごまかしていた永久ももうおしまいだなあ。
これからは俺の時代だなあ」
とあの木太郎がデカイ鼻の穴をひくひくさせて、
笑っているかと思うとむしょうにむかついた。

他方、
おちたはのんびりと露天風呂に浸かっていた。
なんか、天国に来た気分だった。
自分には票こそ入らなかったが、
飯はうまいしもとめは綺麗だし、
風呂はいいお湯だし、本当にいい気分だった。
票のこともあの永久が自分の票を含めたたった2票で、
自分とは大差なく、個性の強いホウセイや木太郎にも票が入ってきたことで
不潔は駄目だけど
「要はハートよ」
とのもとめの言った言葉が今日の結果に出たようで、
なんだか、むしょうにやる気が出てきたおちたであった。

「気の合う木太郎とホウセイ」

「木太郎、いるか」
「ああ、ホウセイか、入れよ」
二人は顔を見合わせるなり、
「おまえか」
と互いに指を指し笑い出す。
「永久とアスカ、
あの二人はショックだろうな」
と同じように言葉を発する。
「うーん、でも意外だな。
くそたなんて自分に本当に入れたからなあ。
あいつはバカだから、
まさか、先生があの場では言うとは思ってもいなかっただろうが
単なるゲーム好きのバカかと思っていたら意外に度胸あるなあ」
とホウセイが言うと
「オタクも俺に入れるとは度胸があるぞ。
だって、
あとで公表されるかもしれないんだぞ、
変に誤解されたらどうするんだ。
くそたみたいに自分の名前を書けばいいじゃないか」
「それを言うならオタクもそうだろ」
「でも、
その顔じゃ変な誤解はないな」
「なんだと、オタクの方がひどい」
二人はまた笑いだす。
「でもさ、もしもだよ。
くそたもおちたもホウセイ、

オタクに入れていたら、オタクだよ。
あそこに泊まるはめになったのは」
「それは、オタクにも言えるだろ」
「そうだな、ははは、
そういえば、おちたは誰に入れたんだろう」
木太郎が言うと
「アスカじゃないの」
「そうだよな。
後で公表されるかもしれないからなあ」
「ということは、
今回、
おちたのせいで、
アスカはあの部屋に泊まらせられることになったのか」
「ということだろう」
「おちたを呼んでくっか」
「あいつ露天風呂行くとか言ってたぞ」
「じゃあ、
俺たちものんびり温泉につかるか」
「それにしても、もとこ先生の
あのイヤらしい発表の仕方も先生らしくて好きだなあ」
「そうそう、飯もうまいし、
明日もこういう感じなんだろうなあ、
なんてハッピィーなんだ」
木太郎はすごく幸せそうだった。

「正反対に見える姉妹」

「どうしたの、レイカさん元気ないなあ」
「先生の妹さん、どうしましょう？
後でアスカさんに恨まれるかなあ」
とレイカが神妙な顔つきで食堂でお茶を飲んでいる。
「アスカさんに票を入れたのね。
でも万一姉が公表しても絶対恨まれないわよ」
「どうしてですか」
「アスカさんは票は取りたいけど、
泊まりたくはないと矛盾した思いがあったはずだから。
アスカさんが恨むなら姉だけね。ううん、
今アスカさんが不満なのは票が少なかったことよ。
多分永久くんもね。
木太郎くんみたでしょ。
あの変な古くさいポーズ。
あれは嬉しかったの。
ホウセイくんも。
逆に、あなた寂しくなかった？」
「いえ、私なんて１０人に入れただけで、
とてもとても。」
「本音かなあ？ちょっとは期待してたんでしょう。
あなたわざと地味にしてるけど、すごく綺麗よ。
やっぱり、１票も入らないと寂しいでしょう。」
「いや、私は本当です。あまり目立ちたくないんです。
女ならそう思うのは当然でしょうけど、
私の場合、小学生の頃、男子にちやほやされたことがあって、

嫉妬した女子にいじめられたことがあったんで。これでいいんです。
くそたくんみたいに堂々とできればいいんですけど」
「くそたくん？」
「私はくそたくんが羨ましいです。
本当にマイペースで。他人の評価を気にしないで、
多分、私が昔いじめられたのは多分男子に媚びを売っていてそれで、
他の女子に嫉妬されたんだと思います。
私も、明日からはマイペースでがんばります。
先生、いえ、やっぱり先生ありがとうございます。では、」
とレイカは何かふっきれたように
もとめを残して部屋に戻って行った。
「どう、あの子。結構素直でしょう。
それにちゃんとした格好をしたら、
多分、アスカなんて問題じゃないくらい綺麗よ。
私見る目あるでしょう。」
そう後から声をかけられて、もとめはドキッとする。
「姉さん、聞いてたの」
もとこはもとめの問いに黙って頷く。
「ええ、それよりもう姉さんは残す8人決めてるの」
ともとめが言うと、
もとこはにやりと笑って
「あなたなら、今ならどう8人選ぶ。
じゃあ、私、忙しいから」
と言って、
もとこはさっさとどこかに行く。

「２０７号室とアスカ」

「アスカ様、もうすぐお時間です。
お部屋までオオシマがご案内させていただきます」
時間の3分前、オオシマがアスカを呼びに来た。
アスカは、着替えとＩ－ＰＯＤを入れたバッグだけ持って、
自分の部屋から顔を出す。顔色はよくない。
「大丈夫ですか。棄権するのも、一方法ですよ」
オオシマはもとこに指示されたとおり言う。
「いいえ、大丈夫です。さあ、行きましょう」
二人はオオシマが先頭になり、部屋に向かう。
「これが、特殊な無線ベルです。
このボタンを押せば、
もとこ様の受信機に大きな音がなります。
万一の場合は、
もとこ様が助けに来るそうですので、そのボタンを押してください」
オオシマは、またもとこに言われたとおりのことを言う。
「万一？
いいわ。そんなことはありえないから、でもお預かりしますわ」
アスカはわざと強気に見せてオオシマに言う。
「先生には迷惑をかけませんから、では、ここまでありがとうございました」
アスカは一方的に言うと、２０７号室の扉を開き、
さっさと部屋に入っていく。
オオシマは自分の部屋である管理人室に戻る途中、
今後のことを考えるとため息をついた。
アスカは部屋に入る。
机と椅子が壁際に並べられベッドが中央に置かれていた。

机の配置により、部屋が狭く感じられる。
そして、何か異様な臭いがする。
もとこの強い香の臭いで気がつかなかったがこの部屋には何か異臭がする。
アスカはパジャマに着替えると
電気をつけたままメリハリのきいたドラムとギターの早弾き
との軽快なコンビネーションで有名な
海外の某ロックバンドのアルバムが何枚も入っている、
ＩｰＰＯＤで音楽を聴きながら、
ベッドに横になり目を閉じる。
とにかく考えないこと。
音もこれならまったく気にならない。
恐怖をさけるためにアスカができる最善の方法のはずだった。

「２０７号室とアスカ２」

恐怖を紛らすために電気をつけたままにしロックを聴きながら寝ようとしたが、何かの異臭が気になりアスカは眠れない。
　臭い対策までアスカには気が回らなかった。消臭スプレーでも用意すれば良かった。アスカは最初恐怖を臭いのせいだと考えた。そして、そこから腐臭？
腐った死体。
ウジ虫。
白骨。
イヤな方向に考えが向いて行く。
アスカは何か落ちつかずベッドから出ると、浴室の排水溝を確かめる。
少しイヤな臭いがする気もする。
古い建物の場合排水溝から臭いがするときもあるので、排水栓を捜し排水溝にはめる。
１０年も前の腐臭が残っているはずはない。
アスカはそう自分に言いきかせた。
もう一度、ベッドに横になる。
駄目だ。
臭いが鼻についたまま消えない。
どんな死体だったんだろう。
また、イヤな方向に考えが行く。
どうせ電波が通じないと思って携帯電話を持ってこなかったので、時間がわからない。

時計も教室にあったような気がするが、見つからない。
どのくらいたっただろうか？
１時間くらいだろうか？
このくらいの時間なら、みんなは起きているだろう。
その時くそたを思い出す。
携帯ゲームでも持ってくれば良かったかも。
そういえば、
もとこの奴持ち込みは自由よとか言ってたっけ。
それはこのことを予想してのことだったのか。
それにしても意地が悪い。
わかっているなら教えてくれればいいのに。
アスカは恐怖とイライラの中のどが渇いてきた。
しまった。
飲み物も忘れた。
恐怖で食欲がなかったのでそこまで頭が回らなかった。
でも、洗面所の水を出す気にはならない。
多分、ずっと使っていないのだろうから、
錆び付いた水が出るに決まっている。
もとこは、そこまでも計算していたのか？
やはり、寝るしかない。
目をつぶって数を数える。
だめだ異臭が気になる、それに水がないとなったら
むしょうに喉が渇いてきた。
さらに、なぜか聞いていた音楽もいらいらさせる感じがする。
うるさい。
いらいらと恐怖、
恐怖といらいらが、交錯し、
アスカは少し息苦しくなってきた。
あれからどれくらい時間が経ったのか。
Ｉ－ＰＯＤの曲数から考えると、２時間くらいだろうか。

音楽にも飽きたので、ＩｰＰＯＤを耳からはずす。
静かだ。ん、何だこの小さな音は。
浴室の方から音がする。
しかし、浴室は見る限り異常はない。
トイレか、扉に耳を近づける。
かすかに水が落ちるような音がする。
水漏れ？
アスカはそっと扉を開けた。

「のんきな奴らと露店風呂」

木太郎、ホウセイ、おちたの3人は、
露天風呂から上がると、食堂で、コーラを飲み、
オオシマに作ってもらったアイスクリームで
できたデザートをほおばっていた。
「いやー、ここは天国だ。風呂はあるし
おいしい食べ物はある。それに」
3人はそれぞれ姉妹の顔を浮かべ、
にやつく。
もとこの話では、
授業に差し支えなければ自由に
この食堂やリビングを使っていいという。
さっきのように、
オオシマさんが声をかけてデザートももって来てくれる。
キッチンの冷蔵庫や棚には、
他にも飲み物もお菓子も大量にあり食べ放題だという。
カップラーメンなら自分でお湯を沸かして食べてもいいという。
試験も思った以上に簡単だし、
楽しくてたまらない。
しかも、
時折、妹のもとめがやさしく声をかけてくれる。
3人は
アスカが地獄に落ちるかもしれない
というのにデザートを食べながらのんきに笑っていた。
「ねえ、露店風呂どうだった?」
ヒトメたちが入浴の準備をして、

くつろぐ木太郎たちに訊く。
「もう最高。
これからもう一回入りたいくらいだよ。
マッサージ機もおいてあるよ。
それから、
風呂上がりのオオシマさんのデザートも最高。
ここは天国だよ」
木太郎は呑気そうにいう。
「じゃあ、早く行こう」
アユメが言うと、
「じゃあ、レイカもチウメも誘って来ようよ」
とヒトメが言うと、
「うん、みんなで入ると楽しいよ、
風呂も凄く広いしね」
おちたが言う。
しばらくして、
アユメ、チウメ、ヒトメの三人が戻ってくる。
「チウメちゃんは」
とおちた訊くと、
「今日はやめておくだって、
付き合い悪いよね」
とヒトメが言うと、
「じゃあ、私付き合おうか」
と後からもとこが顔を出した。

「露店風呂ともとこともとめ」

「姉さん、いいのそんなに呑気にしてて、
アスカさんあそこに泊まらせているのに」
もとめが呑気そうに
露店風呂に入ろうとするもとこに注意すると、
「大丈夫よ、あの子は。
ちょっと脅かすだけだから、
もとめも一緒に入って、コンテストやろうよ」
ともとこはすごく愉快そうだ。
「こ、コンテスト」
木太郎とホウセイがほぼ同時に声を出す。
「何、考えてんのよ」
とヒトメが、二人に軽蔑の視線を送る。
「い、いやなんでも」
と二人は口ごもる。
「どうせなら、二人も入る」
ともとこがからかうと、
「姉さん、酔っぱらってるんでしょう」
ともとめが注意すると、
「シラフよ。ここに酒はありません」
ともとこは凄く機嫌がいい。
「姉だけをこのまま一緒に入浴させるのもアレだし、
どうしようかしら」
ともとめは考え出す。
「そうだ、永久くんどこ行ったの、
ちょっと呼んでらっしゃい、チウメさんも」
もとこは何を思いついたのか、
二人を呼びに行かせた。

「露店風呂ともとこと永久」

呼び出された永久とチウメが食堂に現れる。
「まず、チウメさん、
何で今日露店風呂入らないの」
もとこはいきなり訊く。
「アスカさんが気になって」
チウメは正直に言うと、
「じゃあ、入りなさい。」
「はあ」
「そういう理由なら入りなさい」
「でも・・・」
「中にはバスタオルも
普通のタオルも浴衣もあるから入りましょう」
「ですが・・・」
「実はデブならやめておきなさい」
「そんなひどい」
「じゃあ、決まりね」
「じゃあ、永久くん、
アスカちゃん以外に誰が一票入れたかわかる」
もとこはまたいきなり訊く。
「そ、それは」
永久が口ごもっていると、
「僕です」と
おちたがもとこが言う前に言ってしまう。
「もう、早過ぎるわよ。
もう少し、この子を反省させない」と
もとこはが怒ったように言う。

「すいません」と
おちたが頭を下げると、
「冗談よ」と
もとこは笑いだすと
「永久くん、女子に人気がないのは、
髪の毛のせいだと思ってるでしょう」
永久の思っていることをズバリつく。
「そう思ってるなら明日の試験も負けるわよ。」
「ええ、明日もやるんですか」
永久はとまどう。
「そうよ。
だから、今日、一緒にお風呂入るの」
もとこが意味不明なことを言うと永久は何を勘違いしたのか、
「僕も一緒に入るんですか」と
とんちんかんなことを言いだすと
「どう、みなさん永久くんとも一緒に入らない?」と
もとこが言うと、
「別にいいですけど」と
ヒトメが言うとアユメたちも顔を見合わせて、頷く。
「ですって、どうする。度胸ある」
もとこがにやりと笑う。

「露店風呂ともとこと永久2」

永久は混乱した。
　これは悪魔の罠かもしれない。
「度胸ある」
　この言葉がひっかかる。
「いえ、遠慮しておきます」
と否定すれば、
「器が小さいとか、自信ないのね」
とかいろいろ言われそうだし、
かといって、
「はい」
といったら、
「きゃあ、変態」
とか騒がれそうな感じがしたからだ。
「さあ、どうする」
　もとこは
笑いながら永久に詰め寄る。
　もとめが助けてくれるかと思ったら、
もとめはどこかにいなくなり、
女子と男子が興味深げに
じっと永久を見ている。
　すると、木太郎が
「永久くんが悩んでいるなら、
僕が代わりに入ってあげます」
と言うと、
「ずるいぞ、木太郎」

とホウセイが言うと、
「あんたたち、二人は駄目。
そうよねえ」
とともとこが女子たちに訊くと、
みんな頷き、
冷たい視線を二人に送る。
「何でだろう」
木太郎は首を傾げると、
「おまえらいやらしい目してるからだよ」
とおちたが言うと、
女子たちは大笑いすると、
木太郎は慌てて、目を隠すと、みな爆笑する。
永久も実は結構バカなので二人の目をマネしようかと思い、
木太郎とホウセイの目を見るがよくわからない。
「永久くん。残念でした。時間切れ、
もうこんなチャンスは2度とないかもよ」
とともとこが言うと、
みんな爆笑する。
「おまえらバカだなあ、
先生にからかわれてやがんの」
とおちたが一人偉そうに、
3人の頭を順にはたく。
後からもとめが
「おちたくん何でわかったの」
と訊くと、
「さっき、
永久に票を入れたと言った時に怒ったフリをされて
先生にからかわれたんですが、
その時、口では怒っていても、
目だけは楽しそうだったんです。

だから、もとこ先生って人をからかう時、楽しそうな目をするんだと思ったんです」
と言って笑った。

「露店風呂でのコンテスト」

「さあ、みんなで入りましょう。
残念だったわね。
永久くん、またね」
もとこはそう言って、
右手を挙げて手をふると、
アスカを除く女性徒ともとめを連れて
露店風呂に向かおうとした。
そのとき
「先生、露店風呂で何のコンテストやるんですか」
とバカな木太郎がもとこに声をかける。
「あなた、審査員やる」
ともとこがまた笑いながら言うと、
「僕もやります」
と横からホウセイが口を出すが女生徒たちの視線は冷たい。
「じゃあ、あとでお願いね」
ともとこは二人にそう言うと、
さっさと露店風呂に向かってしまう。
「何？今の、あとでって」
と木太郎が言うと、
ホウセイたち三人もしばらく考え込む。
「そうか、写真だよ。写真」
と質問した木太郎がまたバカな考えを思いつく。
「そんな訳ないだろう。
もとこ先生にからかわれてるだよ」
とおちたに頭を叩かれる。
実は、木太郎の答えは正解だったのだが、

その時は誰もそうは思わなかった。

「露店風呂と意外なナイスボディとコンテスト」

「えー」
ある人物の抜群の
ナイスボディに他の５人は驚いた。

「コンテスト用に写真を撮るわよ」
「先生ダメですよ！」
「プリントアウトはどうするですか」
「それより、写真なんて」
「どっちも大丈夫！
背中だけの写真で、
変な写真じゃないから。
それにデジカメの背後のディスプレイで見せるから大丈夫。
はい。順番にとるから後向いたまま、
じっとしててね」
もとこは生徒達に有無を言わせないように、
生徒を後向きのまま立たせた。
「あー、私のはもとめとってね」
「わかったわ」

「遅いよな」
木太郎は鼻をほじりながら、コーラを飲む。
「コンテストなんてからかわれてんだよ。
くそたのやってるゲームでも見に行こうぜ」
おちたが落ちつきがなく、うろちょろしだす。
「カップ麺でも作るか」

永久が言うと、
「俺の分も」
と他の3人が手を挙げる。
「夜間一つだから、お湯が足りないかもしれないぞ」
「そうか？
じゃあ、二つ作って半分づつ、食べようぜ」
「わかったよ、種類は何でもいいな」
永久が言うと、
「俺は醤油系ならなんでもいいよ」
「俺は味噌味」
「俺は」
「もう、うるさいな。
醤油系と味噌系ね」
永久は、
わがままで怠慢な3人をおいて、キッチンへ行く。
「オオシマさんがこういうときいればなあ」
と永久はぶつぶつつぶやいた。

「風呂上がりの美女たちとコンテスト」

「ああー、気持ちよかった」
ヒトメを先頭に６人がもとこを覗き、
浴衣姿で食堂に戻ってくる。
もとめだけは
相変わらず似たような黒い服を着ている。
一番後から来た、
もとこはデジカメを木太郎たちに見せると、
「プリントできないから
このカメラのディスプレイで判断してね。
二人じゃ少ないから
４人で審査員やってね。
そして、二人選んで投票して、
一番多い人が勝ちよ」
驚いたのは、
おちたと永久で木太郎とホウセイはにやけていた。
「ほ、本当ですか。
じゃあ、紙とペンを取ってきます、
くそたが可愛そうなんで、
くそたも呼んできます。
いいですよね」
とおちたは答えも聞かず、
大喜びでさっさとくそたの部屋に行ってしまう。
「何だ、あいつ早く審査したいのに」
木太郎が腹を掻く。
「そう言えば、オオシマは？」
もとこが訊くと、
「さあ、さっきからいないんです。

僕がキッチンに行ったときもいなかったんです」
「外で覗きでもやってたんじゃないのか」
木太郎が言うと、
「バーカ、オタクじゃないんだよ」
とホウセイが木太郎の頭をはたく。
「私が今何か飲み物とデザートを用意するわ」
ともとめが言うと、
女生徒たちも後をついていく。

入れ違いくらいに、
にやけたくそたがおちたと共に現れた。

「風呂上がりの美女たちとコンテストとくそた」

「コ、コンテストだって？
俺も参加していいのか」
　くそたがにやけた顔でもとこの顔を見る。
「何、にやけているのよ。」
アユメが言うと、
「いや、勘違いしてるでしょう、
腕相撲よ」
　もとめがからかう。
「おちた、
この野郎、嘘つきやがったなあ。俺帰る。」
　くそたがおちたの頭をはたいて、
怒って帰ろうととすると、
　もとこがデジカメをちらつかせて、
「本当にいいのかなあ。」
とにやりと笑う。
「どっちが本当なんですか」
「もとめと腕相撲で勝ってからねえ。
もとめ」
　「そうね、
くそたくんは後から来たみたいだからねえ」
と姉妹は二人でくそたをからかうように笑った。

「コンテストと強腕もとめ」

「年上でも女に負けるなよ。」
永久が言うと、
「バカにするな。俺が負けるかよ」
「あの、くそただけですよね。
コンテストからはずされるのは」
ホウセイが訊くと、
「もちろんよ」
もとこがデジカメをぶらぶらさせながら言う。
「じゃあ、気楽だな」
木太郎が鼻をほじながらコーラをまた飲み出す。
「何回戦ですか」
「もちろん一回よ」
もとめが言う。
二人とも腕まくりをすると食堂にテーブルの腕で手を組む。
もとこが両手で中間に二人の手を持ってくると
「いい、3、2，1で始めよ。
いくわよ。3、2、1」
くそたが最初は優勢だ。
「行け、くそた。」
永久がくそたを応援する。
他は余裕で見ている。
「よし」
とくそたが声をだした瞬間、
あっと言う間にもとめが逆転勝ちをした。
「私をなめちゃいけんないわよ」
もとめはにやりと笑う。

「うー、情けない」
何故か永久ががっかりする。
「じゃあ、くそたくんは集計係ね」
もとこがにやっと笑っていうと、
くそたはうつむく。
「先生、早くしてくださいよ」
木太郎がにやにやしながら
デジカメを催促する。

「さあ、コンテストだ」

「じゃあ、誰から審査しようか」
木太郎が鼻をほじりながら言うと、
「そんな手で私のデジカメをを触らないでよ」
と木太郎はもとこにいきなり怒られる。
「手を洗って来いよ。
その前に三人でデジカメ見ておくから」
とホウセイが言うと、
「ちゃんと洗ってよ。
くそたくん同行してきちんと、
チェックしてくれる。
いいわね」
くそたはもとこに言われると、
「本当世話のやける奴だな。
さあ、来い」
と木太郎はくそたに睨まれながら、
うつむきながらくそたについていく。
「じゃあ、
木太郎は最後にして
残りの3人の順番はじゃんけんで決めようぜ」
と永久が言うと、
「じゃんけんぽん」と
いきなりおちたが言うが、
おちたの作戦は失敗し、
おちたが最初に負ける。
「その手は通用するか。
相手の手を見てから後出ししてインチキする気だろう」

ホウセイがおちたのいつもの作戦には騙されない。
「バレれたか。
相手が木太郎とくそたならひっかかったのになあ」
とおちたが悔しそうに言う。
「じゃあ、永久、いくぞ」
「じゃんけんぽい」
「やったー、俺の勝ちだ」
ホウセイが珍しく大喜びをすると、
何故か、皆の視線は冷たい。
「いやー、あのー、早いほうがいいと思って」
とホウセイは変な言い訳をする。
「はい。これよ。操作方法はわかる」
もとこがデジカメをホウセイに渡すと、
「僕のと同じですから」
ホウセイが答える。
「あら、偶然」
もとこはそう言いながら、にこりと笑う。
「各自1枚、計6枚しか画像はないわよ。
顔は写ってないから誰かはわからないから、
6枚の中から2枚を選ぶのよ。
番号は並んでいる順番だからね」
もとこの説明もろくに聞かず、
ホウセイは手慣れた様子で、
にやけるのをおさえるながらデジカメを操作すると、
1枚目を見て、いきなり、
「うあー、すっげえー」
とホウセイらいしくない言葉を発する。
おちたと永久が覗こうとするが、
「こっちへ来るな」
と二人から逃げる。

もとこはにやりと笑った。

「ディスプレイ上の半ケツ写真とコンテスト」

ホウセイが1枚目の写真を見ているところを
永久とホウセイが覗き込む。
「たしかに、凄い、しかし」
永久が考え込む。
「そうだよな。
そう甘くはないよなあ」
おちたは
想像していた程過激でなかったので、
がっかりしている。
「俺、これで充分、
明日はもっと凄いのにしてもらえばいい。
1回目から凄いと大変だ」
ホウセイはにやけている。
「たしかに、これはこれでいい」
永久も頷く。
「次、早く」
「まあ、ゆっくりと」
「最初にさらっと見て、
その後、ゆっくりと」
「じゃあ、次」
「うあー、半ケツだ」
「本当だ」
「え、でもちょっとだろう」
「だから、半ケツなんだよ」
「意味わかってんの？」
「次は全部かも、次以降」

「おおっと、これこそ半ケツじゃないか」
「前のに比べるとな」
「いい、次行こうぜ」
「あと3枚か」
「おお、
凄いくびれに4分の3ケツだだんだんと凄くなるなあ」
「あと2枚、次」
「あれ、また半ケツだあ。」
「でも、まあ、いい、最後」
「もとこ先生のことだから、きっと」
「出た。凄い」
「全ケツ出た」
にやける3人のところに、
くそたと木太郎が戻り、覗き込み、
いきなり凄いのを見て声を上げる。
「ずるいぞ、おまえらだけで」
木太郎が言うと、
「オタクがハナクソつけるからいけないんだぞ」
「そうだ、ハナクソ野郎」
「俺は鼻をほじってだけだ。」
「とにかく、俺たちにも見せてくれ」
「俺たちもゆっくりはまだ見てないんだ」
「最初からゆっくり見るから、
2枚選べよ」
とホウセイが言うと他の4人は頷く。
女子たちは何か食べて飲みながら、
「男子って単純よね。
背中くらいの写真で」
とヒトメが言うがもとこはにやけていた。

「半ケツ写真を2枚選ぶ」

「これは少しやばいから俺の部屋で選ぼうぜ」
くそたが言うと、
4人もすぐ頷き、くそたの部屋に行く。

「背中くらいでやばいだって」
今度はアユメも笑う。
もとこからは背中の一部だけ撮って、
肌のきれいさを競うと聞かされていただけに、
首の下からひどい場合は尻まで撮影されているとは
生徒は思っていなかったのだった。
知っているのはもとこだけだった。
「今度は前からおへそだけ撮りましょうか」
ともとこが言うと、
「それは」
とヒトメが言うと、
「ああ、でべそなんでしょう」
とアユメがからかい、みんな大笑いした。
「じゃあ、明日はおへそね」
ともとこはにやりと笑った。
「先生、イヤだ」
と今度はレイカが言うと、
「あなたもでべそだったの」
ともとこにからかわれて、
レイカの顔が真っ赤になる。
「ああ、本当なんだ」

とアユメが言うと、みんな大笑いした。
「明日はアスカさんにも参加してもらいましょう」
ともとめが真顔で言うと、
「えー、本当にまたやるんですか」
と言いかけて、
チウメは黙り込む。
また、
でべそだとからかわれると思ったからである。

「写真選択」

「最後の写真が多分もとこ先生だなあ」
とくそたが言うと、
「甘いなあ。
最初だよ。
最初のが一番肌の色が黒い。
それに、最初に誰かに自分の背中を撮らせて、
それを生徒たちに見せて安心させたんだよ」
とホウセイが言うと、
「なるほど、
どうりで女生徒たちが落ちついていて、
もとこ先生ともとめ先生だけがにやけていたわけだ」
と木太郎も同意する。
「でもさあ、これを持ち帰った時にバレるんじゃない？」
と永久がもっともな疑問を抱く。
「もとこ先生のことだから、
きっとその辺は何か企んでいると思うぞ」
とホウセイが言う。
「そうだとしたら、ぼやぼやしていると、
カメラ取り上げられるぞ。
早く、選抜しよう。俺は決めたけどな」
と木太郎はいう。
「そうだ。早く決めよう。俺は最後の1枚で悩んでいる」
おちたは言う。
すると、木太郎の予想のとおり、ノックの音がした。
ホウセイが扉を開けると、もとこがいて、
「後、5分よ」
と言いに来た。

「わかりました。5分だけお待ちください」
とホウセイがそう言うと、
扉を閉めてから、
小声で
「木太郎の言うとおりだ。
多分、時間が来たら、自分で取りにきて、
メディアを取り替えて、
全部消去したといって、
女生徒に確認させる気だ」
とホウセイが小声で言う。
「わかったけど、時間がない。
もうたった5分だぞ。
早く、早く」
とくそたがデジカメのディスプレイ上に現れる写真を、
何度もホウセイに言って、
画像を移動させて比較しながら、
まるで暗記するかのように真剣に見ていた。

「コンテストの結果発表前」

女子たちの中には、
今回のコンテストで
最下位の人間が明日２０７号行きではないか
と不安に思っている人間がいて、
表面上こそ不安を見せなかったが、
実は内心ドキドキしていた。

トントン
「時間よ」
「あいてまーす」
「じゃあ、そのデジカメ返してね。
それから、もう、ちゃんと選んだ。」
「はい」
「じゃあ、もう変えちゃだめよ。
いいわね。
ホウセイくんにそのメモ書きを私の目の前で渡して。」
男子達はもとこの言うとおり、メモをホウセイに渡す。
「ホウセイくん、いい。
全部集計した上で発表は楽しくやってよ。
優勝者は２０７号室行きは免除で、
最下位は明日２０７号室行きにしますから。
同点の場合は、
優勝者はくそたくん。
最下位はホウセイくんに選んで貰うことにするからね。
じゃあ、集計結果の発表の順を考える時間を１５分あげるから、
１５分たったら食堂に来てね」

「ああ、そう。
同点の場合の選択者に選ばれなかった三人は先に食堂にいってなさい」
もとこは万一変更を申し出たり、
意見を言いだす人間がいるかもしれないと思ってそう言った。
「早く」
もとこにせかされ、
おちた、永久、木太郎が先に食堂に戻る。
「じゃあ、
二人で集計と同点の場合の勝者と敗者を決めておいてね。
じゃあ、よろしくね」
ともとこは言うと、
デジカメをホウセイから受け取り、
くそたの部屋を出ていった。

「さすがだな。
もとこ先生、絶対に自分が敗者にならないように、
敗者の選択には俺を選んだな。
それから、インチキされたり、
情が入らないように真っ直ぐなくそたを選んでる」
ホウセイはそう呟いて感心している。
「そうか、おれは真っ直ぐか。
もとこ先生に信頼されているのか」
くそたはまんざらではないような顔をした後、
「でもさ、どの写真が誰かわからないんだから、
情は入らないんじゃないのかなあ」
とくそたが言うと、
「いや、俺はどの写真が誰かわかったよ。
多分、くそたくらいだと思うよ。

その辺考えていなかったの」
とホウセイは自信ありげに言うが、
くそたには何故わかるのかピンと来なかった。

「ホウセイの言ったとおりだな。
もとこ先生、一回部屋に戻ったよ。」
と木太郎が食堂に戻る途中、
小声で言う。
「でも、怖いよな。
今回のコンテストの結果で、２０７号室へ行くか、
その危険性がなくなるか決まるんだもんな。」
とおちたが言うと、
「俺はそうだと思っていたし、その後が怖くなったよ」
と永久が言う。
「男子もそのうち２０７号室行きが出るもんな」
とおちたが言う。
木太郎は少し不機嫌で
「畜生、鼻クソのせいで、ホウセイにいい役目とられた」
と悔しそうに呟く。
「そう言うのを自業自得っていうんだよ」
おちたが言うと、永久も頷く。
「小学生じゃないんだから、もうハナクソ食べるのやめろよ」
とおちたが言うと、
「バカ野郎、ハナクソはもう食べていないよ」
と木太郎は鼻をわざとほじっておちたの顔につける。
「き、汚ねえ」
「ほくろ似合ってるぞ」
永久がからかう。
「俺、顔洗ってくる」

おちたは食堂に行く前に自分の部屋に戻ってしまった。
「俺たちは先に行って、コンテストの結果のご褒美と罰を教えてやろう」
と木太郎は嬉しそうに食堂に歩いていった。

「コンテストの結果発表前2」

「あれ、二人だけ」
ヒトメが言うと、
「くそたとホウセイは集計中。
おちたはハナクソ洗いに行った」
と
木太郎が本当のことを言うと、
「おちたくんも木太郎くんみたいに鼻ほじるんだ」
と
アユメが言ったので、
木太郎以外は大笑いした。
「そういう俺をバカにした言い方をすると、
大変なこと教えてやらないからな」
と
木太郎がヘソを曲げたような顔をして言うと、
「ごめんなさい。
そういう意味じゃないのよ。
ねえ、大変なことって何？
謝ったから、
教えて、木太郎くん」
と
アユメが下手にでると、
「木太郎くんは大物だから、
そんなことくらいでヘソを曲げないわよね」
と
ヒトメが木太郎をおだてる。
「そうか。

俺って大物に見えるか。
さっきのは冗談だよ。
いいか、大変なことを教えるよ。
今度のコンテストで優勝すると
２０７号室行きはなくなる。
でも、
逆に最下位だと明日は２０７号室だ」
「えー、やっぱり。」
チウメが言うと、
「同点の場合は」
と
またアユメが訊く。
「その場合は、
優勝はくそたが、
最下位はホウセイが決めることになってる」
と
木太郎がさも自分だけ知ってる情報のように答えると、
「姉らしい、ずる賢しさね」
と
そばで聞いていたもとめがつぶやいた。

「さあ、発表だ」

おちたが戻ってくると、
女子は下を向いて笑っている。
おちたはすぐ気がつき、
「てめえ、話しただろう」
と木太郎の頭をはたく。
それと同時くらいにもとこが現れる。
「デジカメの画像は
ちゃんと消去したから安心してね」
と言って、
デジカメの裏を見せて
画像なしの表示を女性徒に見せる。
「そんなことより、
木太郎くんから聞いたんですけど、
２０７号室行きの罰と
そうじゃなくなるご褒美は本当ですか？」
とチウメが訊くと
「そうよ。
それじゃなきゃ、
つまらないじゃない。」
もとこは平然と言う。

そして、
ホウセイとくそたが大きめの紙を持って、
現れた。
「えー、これから集計結果を発表します。実は」
とホウセイが言いかけると、

「木太郎くんが説明済みみたいだから、集計結果だけ発表してくれればいいわ」
ともとこがホウセイを制して言う。
「そうですか。
では、全部で１２票を順不動で発表します」

「さあ、発表だ2」

「それでは、行きますよ。
番号は並んでいる順ですよ。
では、5番」
女性陣はしーんとしている。
匿名だからだ。
後で、
優勝者と
びりだけ誰だか判明する訳だ。
「えー続いて、4番」
また、誰も表情も変えない。
「ちょっと、先生たち、
少しは演技でもいいから反応してよ。
面白くないじゃん」
くそたがつまらなそうに言うと、
「そうだよ。」
と木太郎も同調する。
「ちょっと待ってね」
もとこは女性陣だけを連れて、
どこかの部屋に行く。
「少しは反応するかと思ったがなあ。
うーん。配列が悪いかなあ。」
とホウセイが言うと、
「もう一回、配列を考え直すか」
と永久も言う。
「よーし、俺たちも作戦会議だ」
とくそたが言うと、

5人は永久の部屋に行く。

「あれ、誰もいない」
アユメが言うと、
「多分、
私達の反応がないので配列を変えに行ったのよ」
ヒトメが言うと、
「とにかく、
優勝者とビリしか誰だかわからないようにするんだから、
さっきの打ち合わせどおりよ」
ともとめが言う。

男たちが戻ると、
早速、ホウセイが
「お待たせしました。
発表を続けます。5番」
すると、
今度は女性陣は拍手をするだけだ。
「やっぱりな」
くそたがさっきの配列替えの際、
木太郎の言っていたことが当たってたので思わず口にだした。
「いいから、続けろよ」
木太郎は言う。
「えー、また、5番。
5番の方にはリーチがかかりました」
「えーもう」
思わずレイカが口に出してしまう。
「へへへ。ひっかかったな。あはは」

木太郎が笑う。
「あー」
レイカが顔を赤らめる。
「おバカね。
レイカさん、
一人で二票だから、最高６票よ」
と
もとこが笑う。
「やるわね。
誰の案、それにしても、
何でリーチなんて麻雀用語知ってるの」
と
もとめが言うと、
「あのーリーチってなんですか」
と
チウメが訊く。
「なんだ。
ゲームやったことないんだ。
チウメちゃんが５番だったら、
ひっかからなかったな」
おちたが言う。
チウメにはアユメがその意味を教える。
「そういう意味でしたか」
チウメは恥ずかしそうに言った。

「さあ、発表だ3」

「では、続けますよ。
え－４番です。
次行きますよ。
おーっと４番。
これで
５番と並んで3票で今度こそリーチか」
「もうひっかからないわよ」
とアユメが思わず言ってしまう。
「えっ、今何か言いました」
とホウセイが笑う。
「おバカね、アユメ、
あんたバレたじゃないの」
と
ヒトメがホウセイの笑い顔をみて
勘違いしてそう言ってしまう。
「何よ、
あんたのせいでバレたでしょ」
「あー、ごめん」と
ヒトメが口をつぐむ。
「どっちもどっちだね。
木太郎の作戦だけど、
本当に、また、ここでひっかかるとは」
と
ホウセイが笑う。
「まずいじゃないの」
と

バラした本人のヒトメも少し慌てだす。
「いーい、もう絶対しゃべるんじゃないわよ」
もとめが真顔で言う。
「とりあえず、現在の状況を発表します。
4番アユメちゃん3票、5番レイカちゃん3票、
残りは6票です。
残りはあと6票です」
もとこは少し考えると、
「あー、これはまずいわ、
下手すると全員バレるわよ」
と言いながらも慌ててる様子はない。
かえって、
他の女性陣を動揺させている。
「えー、どういうことですか」と
またチウメが質問するが、
「とにかく、もうしゃべるのやめましょう」
と
もとめが唇に右手の人差し指をあてる。

「オケツを掘る」

「えー、では行きますよ。６番、
次、また、６番、
次はなんとまた６番、
さあ次、
５番のレイカちゃんか４番のアユメちゃんか、
謎の６番さんだと
本当にリーチですよ」
とホウセイが言うが、
さすがに今度はひっかからない。
「さあ、次は誰かな。
何番かなあ」
と木太郎が実はどきどきしている４人と
正体はバレたが違う意味でどきどきしているアユメと
レイカを冷やかす。
「さあ、次を行きますよ。
３番でした。
これで、あと２票です。
２番さん、１番さんは危ないですね。
２０７号室が近いですよ。
アユメちゃん、レイカちゃん６番さんはもうすぐ本当にリーチですよ」
女性陣は木太郎とホウセイの挑発に文句を言いたくなったが
必死にこらえる。
「えーでは、行きます。
うー、あー、あー、おー、えー、いー」
「じらさないでよ」

思わずアユメが言う。
「とにかくしゃべらないで、
挑発にのっちゃだめよ」
もとめが釘を刺す。
「えー、では、可愛そうだから言います。
おめでとう。
６番さん本当のリーチです。
そして、
１番さん、２番さん２０７号室行きの最短距離です」
明かに６人のうち、
もとこを除く２人が動揺しているのは、男たちからはわかった。
「さあ、行きますか。
最後は、そうですね。
今回の発表順番の配列に貢献してくれました木太郎くんに
発表してもらいます」
「えー、
最後を私木太郎が、
男らしく発表させてもらいます。
行きますよ。
言っておきますが、
私を恨まないでくださいね。
２０７号室行きを決めるのはホウセイですから」
「あーそれでホウセイくん」
と、
さんざん生徒にしゃべるなと言っていたもとめが
うっかりしゃべってしまう。
「その他人ゴトのような言い方、
もとめ先生はずばり３番ですね」
とホウセイが笑いながら言う。
「もとめ先生たら、

自らオケツ掘って」
「ヒトメ、それ、墓穴よ」
「何言ってるのよ。
アユメ、バケツ掘ってどうするのよ。
オケツでしょう」
「お二人いえ、
あともう一人がおバカなことは充分わかりましたので、
もう笑かさないでくださいね」
と木太郎が言うと、
男たちは爆笑する。
「現在、６番誰かさん、４票、
５番レイカさん３票、
４番アユメさん３票、
３番もとめ先生１票、
あっははは」
と木太郎は、
残りが何番かを知っているだけに
笑いが止まらなくなってしまった。

「オケツを掘ったバレバレおバカ女」

「何笑ってんのよ、
まだわからないでしょう」
ヒトメがムキになって言う。
「もう、あきらめなさい」
もとこは何故木太郎が笑ったのか
充分理解していたので、
冷静に言う。
「よく先生冷静でいられますね」
ヒトメはまだムキになる。
木太郎はますます笑いだす。
「引き算できるかよ」
横からおちたがバカにしたように言う。
「何私そこまでバカじゃないわよ」
木太郎は腹を掻きだす。
「ヒトメ、もうやめなさいよ。」
「うるさいわね。アユメ、
もとはと言えば、あんたが余計なこと言ったから
いけないんでしょう。」
「バラしたのはあんたでしょう」
「あー、私がみんな悪いのよ」
もとめが
横からヒトメをなだめるように自分のせいだと言うが、
木太郎がまだ笑っているので、
ヒトメは木太郎の方を見て、
さらに腹をたてて言う。
「あんたねえ！どうしてわかるのよ」

「あははは、だから、おちたが言ったじゃん。
引き算してみろよ。
自分の番号はわかってんだろう、
多分、後で泣くよ」
木太郎はそう言ってまた大笑いする。
周りの女子もヒトメを冷たい視線で見る。
ヒトメは周りの視線に気づき、
「えーと、誰かさんが4票でしょう。
レイカとアユメは3票でバレてるでしょう。
もとめ先生も1票でバレてるでしょう。
6－3は3人でしょう。
私ともとこ先生とチウメ。
まだ、わからないじゃない」
「あのさー、
木太郎は最後の票を知っていて、
ホウセイを恨めって言ったんだよ」
とおちたが今度は優しく助け船を出し、
「さらに言えば、
ビリはホウセイが決めるってことだよ」
と付け足す。
「だから、
ビリはホウセイくんが決める訳でしょう?
でも、
1位が同点の時はくそたくんが決めるんでしょう」
「ヒトメちゃん、
木太郎はくそたにはふれなかっただろう、
だから、
くそたの出番はないんだよな。
そうだよな、木太郎」
「おちた、もうこれ以上笑かすなよ、

そうだよ、オケツを掘ってよーく考えてくれ」
木太郎はさらに笑いだし、
「おなかが痛いと」
と言いだす。
「えー、
優勝はえー、
6番のえー、
じゃあ、
ビリをホウセイくんが決めるっていうことは、
えー、もとこ先生が残る、
そして、私が後で泣く、
えー」
ヒトメはやっと気づいた。
自分ともとこが0票で、
残りの1票が
6番かレイカ、アユメ以外
すなわちもとめなことに。
「えー、
残りは6番かもとめ先生なの本当?」
木太郎は
「さすが、オケツを掘る女」
とまたバカ笑いする。
「オケツを掘ったのはもとめ先生よ。
もう、勘違いしないで、
でも、ホウセイくんには
私かもとこ先生かはわからない、あっ!」
木太郎はまだ笑いが止まらない。
「そう、3−2=1だろう。」
おちたが補足する。

「えー、全員バレるんだ。
でも、まだチャンスはあるんじゃない？」
「可愛そうだから、
ホウセイもう言っちゃえよ
それに木太郎そのうち笑い死にするぞ」
と永久が言う。
ホウセイは頷くと、笑ってる木太郎の代わりに、
「優勝は6番のチウメさんおめでとう。
そして、ごめん、ヒトメちゃん、
ビリは2番。
そう、ヒトメちゃん、
２０７号室行き、
僕を恨むなよ、
恨むなら、もとこ先生の美貌を恨んでくれ」
と笑いながら言う。
「何でよ、何で、わかるのよ。
それに、そんなにいいなら、
なんで、もとこ先生に票入れないのよ」
「だから、
ビリはホウセイが決めるっていうルールだから、
誰もわざともとこ先生には入れなかったんだよ。」
おちたが言う。
「えっ、どうして、
1番がもとこ先生ってわかったのよ」
「はーい、もうおしまい。
ヒトメさんもうあきらめましょう」
ともとこが笑って話しをさえぎる。
「ヒトメちゃん、ごめん、
俺がもとめ先生にいれちゃたんだ」
とおちたが言う。

「ありがとう。おちたくん」
もとめも
今になって自分も危なかったことに気づいた。
「ねえ、一つだけ教えて、
どうして、
1番がもとこ先生って皆わかったの」
ヒトメは泣きそうな顔で言う。
男たちは顔を見合わせた後、
ホウセイが
「オーラが出ていたんだよ。
一人だけ、はっきりと」
と言ってごまかした。

「オケツを掘ったバレバレおバカ女の２０７号室行き」

「はい、はい、
今日のコンテストは終了。
優勝はチウメさん、
そして、ビリ、
明日の２０７号室行きは
掘りまくったヒトメさんに決定しました。
明日は、おへそコンテストをやります。
はい、今日はこれで解散します」
ともとこはそう言うと、
さっさと自分の部屋に戻っていった。
「えー、またコンテスト。
でも、おへそなの？」
「わー、どうしよう。私」
バレバレおバカ女ヒトメは
一人騒いでいるが、
「だから、
オケツを掘りまくるからだよ！」
木太郎は腹を掻きながら、
笑いながら
自分の部屋に戻っていった。
「明日は、
多分、
あんた関係ないじゃない。
ヘソコンテストに
参加させられないだけでもいいと思いなさい」

アユメが冷たく言うと、
生徒たちはちりじりと自分の部屋に戻っていく。

その頃、
アスカはトイレの扉を開けた瞬間、
あるものを見て、その場で驚き、
思わず失禁してしまっただった。

「バカにされるもとめと意外にもてるくそた」

レイカの部屋では、
もう仲直りしたヒトメとアユメが、
レイカがキッチンから持ってきたアイスクリームを食べていた。
ヒトメとアユメたちは自分のおバカを棚に上げて
最初は例のもとめのおバカ話しで盛り上がっていた。
ヘヤドライヤーを忘れたアユメとヒトメが
レイカに借りに来て、
そのままちょっとした雑談から、
話しが盛り上がり居座ってしまったのだ。
その後、
誰が好みかという話題になり、
レイカがくそたが一番いいと言うと、
「えー、レイカって、あのくそたくんが好みなの」
アユメの驚いたような顔に
「いえ、顔じゃなく、
ああいうマイペースなところに憧れているんです」
とレイカが真面目に答えた。
「でも、それって、好きってことよね、ヒトメ」
とアユメがヒトメにふると、
「そう、
そういうのが一番危ないのよ。
いつのまにか虜にさせられちゃうのよ。」
とヒトメは同意する。
「実はね、
ヒトメもくそたくん気になってるみたいなの」
とアユメが言うと、

「私の場合は違うのよ。
好きとか憧れじゃなくて、面白いだけ。
顔全体も猿がヘルメットかぶっているみたいで、
そのくせ男なのにひげがなくて可愛いじゃない」
ヒトメが言うと、
「猿がヘルメットかぶった顔ってどういう顔よ、
レイカ怒るわよ」
「いえ、
私もヘルメットとは思いつきませんでしたが、
あのきのこの山のような頭が変わってるなあと思います。
顔は確かに猿面ですね」
とレイカは笑う。
「どうする。
猿そっくりの女の子が生まれてきたら?」
とアユメがからかうと、
「そんな気の早い」
とレイカはまんざらでもない顔をする。
「ヒトメ、レイカは本気みたいよ。いいの?」
とアユメがヒトメを冷やかすと、
「私は違うって言ってるでしょ。
レイカを応援するわよ。本当」
「そう、ムキになるところが怪しいわね。
お膳立てをするとかいってくそたくんに近づく気でしょう」
とアユメまたヒトメを冷やかす。
「ヒトメさんには注意します」
とレイカがわざと言うと3人は大笑いした。
「ところで、アユメは誰本命?
やっぱり、永久くん?・・・じゃないわよね」
とヒトメが逆襲に走る。
「私は、純粋に勉強に来ただけですから男子なんて」

「そうね、おバカはわかったから、
もう部屋に戻って勉強しなさい」
とヒトメがからかうと
「はーい、誰かさんもね」
とアユメが先に部屋に引き上げる。

「１０代目キモ男３人衆」

「あのねえ、ここだけの秘密だけど、
アユメも、本当はやっぱり１０代目の中に気になっている子がいるのよ」
とヒトメがレイカに話す。
「１０代目って何ですか」
とレイカが訊く。
「レイカ、知らなかったの？
このオンシラーズ高校は、
昔は男子高で、
１０年くらい前に、
ある中学で「キモ男三人衆」
と呼ばれていたお互いに仲のよいキモ男３人が入学したらしいのよ。
それ以来、
毎年、キモ男３人がつるんでいると、
キモ男三人衆と呼ばれるようになって、
いつのまにか何代目とかがつくようになったらしいの。
で、
今回のくそたくん、おちたくん、木太郎くんで
ちょうど１０代目！
だから、１０代目キモ男三人衆ってわけ」
「そうなの？
でも、うちの高校にはもっともっと
キモいのたくさんいるじゃないかなあ？
それはひどくない？
それにくそたくんって全然キモくないじゃない？
確かに猿ヅラだということまでは否定しないけど」

とレイカが少しだけ憤慨する。
「やっぱりレイカくそたくん好きなんじゃない。
でもね、
ここ最近の3人衆はいわれるほど、
キモくもなく、
結構おもしろ路線で、
大体レイカみたいな隠れファンが結構いるみたいなのよ！」
「そうそう、
7代目の1人が元ミスオンシラーズ
と今付き合っているみたいよ。
在学中も多分こっそりと付き合っていた
との噂もあるのよ」
とヒトメは言う。
「へー、それじゃ、結構名誉なことなのね」
とレイカが真顔で言ったので、
ヒトメは大笑いする。
「それで、アユメが好きなのって」
2人はアスカの心配もせず、
明け方までくだらない話しをしていたのであった。

「食堂の3人と消えたオオシマ」

トントン

「アスカさん、お時間よ。
まだ、お休み」

もとめが
２０７号室をノックするが返事がない。
すると、
後からもとこが
「多分まだ寝てるのよ。
なかなか寝られなかったのよ。
鍵だけ開けておいてあげて、
後、１時間して食堂に現れなければ、
また起こしに来てよ。
あら？
そういえばオオシマどこ行ったのかしら？
昨日はみんな結構遅くまで起きていたみたいだから、
もとめが代わりに
朝食を適当に起きてきた子から食べさせて、
授業は１０時からにしましょう。
生徒が来たら伝えておいてね」

「はい」

もとめは昨日からいないオオシマが
少し心配だったがもとこに従った。
もとめが一旦自分の部屋に戻り、
食堂に行くとほぼ同時にチウメと永久が食堂にやってきた。
「おはよう。昨日はよく寝られた」
もとめがそう挨拶すると、

永久が
「最初はすぐ寝られませんでしたが、
知らない間に眠れました。
でも、6時には目が覚めてしまって。
おなかがすいたので少し早いかなと思ったら、
そこでチウメさんに会いまして」
と話しをした。
チウメは
「昨日はすぐ寝付けたのですが、
私は5時過ぎには目がさめてしまって、
7時を待ってここに来ようとしたら、永久さんと会って」
と、意外に元気そうだった。

もとめは
「オオシマがどこか行っちゃたから
朝はトースト、サラダ、目玉焼きでいいわね。
これからすぐ準備するから。
それまで、飲物は冷蔵庫から好きなものを選んで」
と、言いかけると、
もう二人はジュースを取りに行こうとしていた。
「なんだ。結構慣れるの早いわね。」

「昨日、オオシマさんが
飲み物は適当に飲んでいいとおっしゃてましたので」
と、永久が言うと
もとめは
「じゃあ、すぐ用意するわ」
と、二人の後をついてキッチンへ行く。

「みんな遅いね」

「そうですね。枕が変わって寝られなかったんのかしら」
「いや、おちたたちは、昨日、僕が眠れないので
牛乳をとりに来たときにここで何か飲みながら騒いでいましたよ。」
「元気いいですね」
二人が話してると
「お待たせ」と
もとめはサラダを先にすぐ持ってきた。
そして、
トースト、
目玉焼きの順に持ってきた。

二人が食事を終えた頃、
もとめが声をかけた。
「食後はコーヒー飲む?」
「私自分でやりますから永久さんもコーヒーでいい」
「じゃあ、お願い」
「はい」
チウメがキッチンへ行くと、
入れ替わりにもとめが座る。
「みんなも遅いけど、オオシマはどうしたのかしらね。
この辺、落とし穴多いっていう噂もあるから
落ちてなきゃいいけど」
「落とし穴ですか?」
「本当かどうかわからないけど、
この別荘の昔の持ち主がいたずら好きで
あちこちに落とし穴を掘ったという噂があるのよ。
だから、外出は禁止にしたのよ」
「へー、いたずら好きというか、
バカな奴もいるんですね。」
「そうね」

「２０７号室のアスカと食堂」

「お待たせしました」
チウメが３人分のコーヒーを持ってくる。
「ありがとう」
「どうもありがとう。
そうそう、今日は１０時から授業ですって」
「まだ、時間がたくさんありますねえ」
「そうだね。
暇だね。
散歩もそういう話しじゃだめみたいだから
露天風呂入れればいいんだけどね。
午前はどういう割り振りか、
もとこ先生に聞くの忘れちゃったよ。
朝風呂は結構気持ちいいんだよ」
「私は部屋へ戻って部屋でお風呂に入ります」
「午前は男子でいいわよ。
表示は昨日の女子のままだと思うから
表示をちゃんと変えておいてね」
もとめが笑顔で言う。
「ありがとうございます。
じゃあ、僕は用意してきます。
ひまだったら、また、ここへ来ます」
「私もそうします」
永久の言葉にひさめはそう言った。
「じゃあ、私だけ他の子を待つわ」
もとめが言うと、３人はバラバラになった。

アスカは気がつくと２０７号室のベッドの上で寝ていた。
時計を見るともう7時３０分だった。
昨日のあれは夢かしら。
その後の苦労を思い出すとぞっとした。
夢よ。夢。
さっさと忘れて自分の部屋に戻って
シャワーを浴びよう。
でも、鍵は開いてるかなあと思いながらも
おそるおそるドアノブを捻ると、鍵はもう開けてあった。
アスカは、
寝起き姿のまま、
周りを見回して誰もいないのを確認してから、
扉を開けると、
走って自分の部屋に戻った。

「露店風呂へ」

一方、食堂では、
「おはようございます」
とまるで時間を合わせたように、
アユメ、ヒトメ、レイカ、
木太郎、ホウセイ、おちたが揃って
食堂に現れた。
そこにはもとめがいて
「みんなも朝食同じでいいわね。
授業は１０時からよ」
と朝食のメニューも言わず、
また、キッチンへ戻っていく。
１０時集合と聞いて
「まだ寝ていれば良かった」
とおちたが言うと、
木太郎が
「また露天風呂行こうぜ」と言い、
ホウセイが
「午前はどっちだけ」
と言うと
「私たちもまた入りたい」
とアユメが言った。
「じゃあ、確認に行こうか」と木太郎が言ったところで、
永久が何か入れたビニール袋を持って、
露店風呂に向かおうと食堂をとおりかかった。
「なんだ。男子の時間なんだ」
アユメが言うと、

永久は、
「悪いね。
でも、もとめ先生がそう言ってくれたんだ。
木太郎、
オタクらも早く朝食食べて入って来いよ。
俺は時間がたっぷりあるから、
のんびり入っているから」
と言うと、
さっさと露店風呂の方へ行ってしまった。

「怖がる永久」

永久は露店風呂の表示を男に変え、
更衣室で裸になる。
露店風呂の入り口を開けるとたん、
露店風呂に浸かったもとこの顔が見えた。
普通はここでもとこが騒ぐところだが、
「うあー」と叫んだのは永久の方だった。
もとこはにやりと笑っていた。
永久はよほど驚いたのか小さいタオル1枚だけで
あそこを隠すと、
食堂の方へ逃げてきた。
今度はアユメたちが
「きゃあ、変態」と騒ぐと、
そのままの格好で
2階の自分の部屋へ向かおうとした。
すると、
今度は永久が逃げて行こうとした先に、
アスカが目の前にいて
「きゃあ、どうして」
と騒いだので、
永久は一旦転んで、
体勢を立て直すとすぐ自分の部屋へ逃げて行った。
アスカも訳がわからず、
自分の部屋に走って逃げて行った。

永久は部屋に戻って、
恥ずかしくなったが、

それ以上にもとこの怖さを改めて知った。
自分は露店風呂の外の扉を勢いよく、
開け閉めして、鼻歌を歌いながら脱衣した。
そして、中の扉も勢いよく開けた。
しかし、もとこは平然と湯船からこっちを見ていた。
ということは、
自分が来るのを承知だったということだ。
もし、あのとき、タオルがなかったら
と思うと永久はぞっとした。

「永久の喜劇と半ケツのたたり」

食堂では，
永久のマヌケな格好の話しで盛り上がっていた。
「永久があんなに驚くなんて、
露店風呂に誰が入っていたんだろうな」
と
木太郎が言うと、
おちたが
「アスカちゃんじゃないか」
と言うと、
ホウセイが
「もとこ先生に決まってるだろう。
永久は鼻歌を歌うクセがあるから、
露店風呂の中にいたって、
普通は更衣室の永久に気づくさ。
それでも、
堂々と中に入って
永久をあれだけ驚かすことができるのは
もとこ先生しかいないよ」
と自信を持って話すとみんな頷く。
「昨日の罰があたったのかなあ」
とおちたが口をすべらしかけたところへ
もとめが食事を届けに来た。
もとめは今の永久の話しを聞いて
すまなさそうな顔をした。
「永久くんには悪いことしちゃったわね。
まさか姉が朝から入っている

とは思わなかったの。」
「いや」
とおちたが口をすべらさせそうになったので、
木太郎がテーブルの下から足を蹴る。
「でも、永久くんのおしり可愛かったね。」
とレイカが笑って言うと、
「変態なんて言って悪かったわね」
とアユメが真剣な顔で言うと、
みんなお笑いした。
おちただけは半ケツ画像を見てしまったことのたたりだと思いこんでいた。

「湯上がりもとこ」

しばらくして、
もとこが湯上がりだというのに、
黒服姿で現れると、
開口一番、
「いきなり、
永久くんが素っ裸で入ってくるからびっくりしちゃった」
とわざとらしい演技をした。
「びっくりしたのは永久くんでしょう。
姉さん、
気づいてて声出さなかったんでしょう」
ともとめがずばり言うと、
「そんなあ！
もとめ、
どこかの変態じゃないんだから」
ともとめの顔を見て笑うと、
「いいお湯よ。
まだ、時間たっぷりあるから、
交代で入ってらっしゃい」
とだけ言って、
さっさと自分の部屋に戻ってしまった。
もとこがいなくなって、
すぐ、
「もとめ先生のおっしゃったとおりですね。」
とアユメが思ったとおりのことを言うと、
「ごめんなさいね。

姉はああいう性格なのよ」
ともとめが謝る。
「いや」
とまたおちたが何かを言いかけたので、
木太郎がまた足蹴りをする。
「さっきから、何二人でやってんのよ」
とヒトメが言うと、
「おちたが温泉入りたがっているからさ、
でも、先に女子入りなよ。
俺たち、一回部屋に戻るから、
出終わったら入り口の表示を変えておいてくれよ」
と木太郎はそう言うと、
おちたにこれ以上しゃべらせないために、
おちたとホウセイを連れて、
「ごちそうさまでした」
とその場を離れてしまった。
「じゃあ、先に私達入ろう。
ここに5分後集合よ。」
とアユメが言うと、
レイカとヒトメは頷いた。
「先生もどうですか。」
とレイカが言うと、
「まだ、アスカさんと
くそたくんの食事がまだだから、
午前中は遠慮しておくわ。」
ともとめは答え、
キッチンへ行ってしまった。

「くそたの部屋で」

木太郎は2階に上がると、
「永久をなぐさめに行こう」
と言うが、
「こういうときは
そっとしておいた方がいいんじゃないか」
とホウセイが言うので、
「じゃあ、くそたを起こしに行こう」
とくそたの部屋に行った。
くそたの部屋の扉が開いていたので、
ノックもせずに入ると、
そこにはくそたと永久がいた。
「おい、永久大丈夫かよ」
とホウセイが言うと、
「もとこ先生は怖いよ。
今、くそたにも注意してたところだ」
とくそたに励まされたのか、
永久は意外にも、
もう立ち直っていた。
「おい、オタクらも気をつけろよ」
とくそたは永久から聞いた話をした上で、
「女子も昨日のように半ケツ写真をとられているわけだから、
油断すると、
いや、よほど注意しないと何かいたずらや嫌がらせされるぞ。」
と注意すると、
「嫌がらせは言い過ぎだぞ」
と木太郎とホウセイが口を揃えて言う。
「まあ、まあ、二人とも落ちついて、

昨日のことも永久のこともあるから注意はしないと」
とおちたが言うと、皆頷いた。
「もとめ先生も共犯ってことないかなあ」
とホウセイが言いだすと、
「いやー、昨日のおバカぶりを見ると、
天然じゃないか、共犯だったら半ケツ写真を撮らせないだろう」
とくそたが言うと、皆頷く。
「そう言えばアスカちゃんどうしたかなあ」
とおちたが言うと、
「永久がぶつかりそうになったみたいだから大丈夫みたいだよ」
とくそたが笑って言うと、
「アスカちゃんは災難続きだなあ」
と木太郎が鼻をほじりながら他人事のように言うので、
「永久だから、まだ、いいけど、
裸だったのが木太郎だったら卒倒していたぞ」
とくそたが言って皆を笑わせる。
木太郎がそんな中また、
にやけだしたんで、
永久が
「オタク、人の不幸を笑いやがって」と木太郎の頭を叩くと、
「いや、ごめん。違うんだ。今日もコンテストだろう。
だから」
そう言って木太郎は昨日みたいににやけだした。

「楽しいもとこと憂鬱なヒトメ」

もとこは周りを見回して誰もいないのを
確認すると、自分の部屋を出る。
そして、
こっそりと２０７号室に行った。
あら、
あの子結構図太いわねと呟きながら、
扉の開いたドアを通り抜けると、
トイレの前の床が綺麗に掃除してあるのを見て、
にやりと笑った。
そして、
トイレの扉を開ける
と楽しそうにあるものを回収して袋に入れる。
そして、
同じように周りに注意しながら自分の部屋に戻った。

他方、
アスカは昨日の出来事と今の永久の裸の姿を見て、
頭が少し混乱していたが、
とにかく、
シャワーを浴び、失禁して汚した衣類を洗濯した。

露店風呂の中では、
楽しそうなアユメとレイカに対し、
ヒトメだけが憂鬱だった。

「ヒトメ、今日、怖いんでしょう。
でも、永久くん見たでしょう。
はっきり言って、
もとこ先生はいたずら好きだけだから、
たいしたことはないわよ。
あの話しだって嘘かもしれないわよ。
大丈夫よ」
とレイカが言うと、
「ああ、やめて、やめて。
永久くんがあんな恥ずかしいことを
やらかすんだから私なんて」
と耳を塞ぐ。
「レイカ、放っておいた方がいいわよ。
ヒトメのことだから
明日になればけろっとしてるわよ、
なんせ、オケツをほ」
と言いかけたところで、
アユメが自ら口を塞ぎ、
「はい、楽しくやりましょう」
と言い直して
ヒトメの方を見てにやりと笑ったので、
ヒトメは
なんとなくアユメを憎たらしく思った。

「2日目のテスト」

「起立」
「礼」
「着席」
もとこが教壇につくと、
　もう生徒全員揃っていた。
アスカも平然と座っていた。
「そう言えばこの部屋なんか臭くなーい。」
と言って、
　トイレの前まで
もとこは歩くとアスカの方をにやりと見て笑って、
「気のせいね」
と言って教壇に戻ると授業を始めた。
アスカはこのときひやっとしたが、
これがもとこの怖さだと思うと
今後のことが思いやられた。
しかし、
アスカを始め他の生徒の予想に反し、
１０時から授業は昼休みを挟んで、
ずっと数学の授業が真剣に続けられた。
これぞ、特訓にふさわしい内容に生徒たちは少し驚いた。
このまま、
最後まで授業かと思われたが、
もとこが午後４時になると、
最後に、また、テストを行うと言った後に、
このテストで最下位をとった生徒が、
明日、２０７号室に泊まるということを言いだして、

生徒は驚いた。
一番ぶるっていたのはやはりアスカだった。
もとこは
「昨日と違い、問題はこれから、口頭で言います。
わかった人はこれから配布する問題用紙に回答を書いて提出にきてください。
全員正解の場合は、一番提出の遅い人を、
全員不正解または、不正解者がいた場合は、
不正解者の中で一番提出の遅い生徒を最下位とします。
よろしいですね。
ただ、
この問題の面白いところは、
問題自体が複数あり生徒はその中から
一つだけ選び解答すればいいと言うことです。
今回のポイントは
いかに早く正解を解答用紙に書いて提出するかですが、
自分以外に一人でも不正解者がいると確信したなら
早く提出した方がいいわけです。
同様に、
自分以外に一人でも不正解者がいると確信したなら、
時間をかけて正解の答案を出してもいいわけです。
まあ、その辺は問題を聞いてから考えるといいわね。
尚、
解答用紙の提出はすべての問題を言い終わり、
５秒後、
私が秒数を数えた後とします。
時間制限は５時までです。
よろしいですね。」
ともとこは言う。

「2日目のテスト2」

もとめは、
どういうひっかけがあるのか興味津々だった。
もとこは
「では、
問題1、
昨日、露天風呂に入った生徒は誰でしょう、
全員フルネームで答えなさい。
問題2、本日露天風呂に入った生徒は誰でしょう、
全員フルネームで答えなさい。
問題3、この部屋のトイレに飾ってある絵は何でしょう。
以上の三問です。さあ、スタート」
すると、わずか1分くらいで、
くそたが答案を提出する。
続いて、オチタ、ホウセイ、木太郎、
アユメ、ヒトメ、レイカ、永久が続々と提出する。
残るはチウメとアスカだが、
少しして、チウメが答案を提出する。
アスカだけが、固まったまま考え込んでいる。
もとめは思った。
完全にアスカをはめていると。
アスカは昨日の露天風呂のことは、
わからないし、
今日も食堂にも寄らず
教室に来ているから今日の露天風呂のこともわからない。
そして、
この部屋のトイレに飾ってある絵については

昨日はあれがおいてあったので当然わからない。
アスカは3番目の問題を見てパニックになる可能性も大だし、
そもそも、
　くそたのような度胸がないから
1人は不正解者がいるとしてすぐに答案を提出する度胸はない。
チウメが何故考え込んだのかはよくわからないが、
チウメが提出した時点でアスカの負けは決定的だった。
「あと1分ですよ。
アスカさん、がんばって。
私はあなたが一番早いと思ったんだけど、
お手洗い、
この部屋の使わなかったの？
それとも意外に絵というのは気づかないかしら」
と凄く意地悪なことを言う。
アスカはしょうがないので、
3番目を花の絵と書いてぎりぎり提出した。

「もとこＶＳもとめ」

もとこは、
アスカにお疲れというと、
アスカの解答を見て、
ばかな子ねと思いながらにやりと笑った。
　そして、
トイレの中の絵を確認することもなく、
もとめを残して先に部屋を出る。
アスカの後でアスカの解答内容を見ていたもとめは
姉ってバカねとにやりと笑った。
最下位の発表は、
また、食事後行われた。
「それでは、今回のテストの発表をします。
まず、正解者は全部で８名。
名前を順に発表します。
順不同で、アユメさん、ヒトメさん、チウメさん、
レイカさん、木太郎くん、ホウセイくん、おちたくん、永久くん、
おめでとう」
この時点で、アスカの最下位は決まったようだったが、
その時、「姉さん、１人抜けているわよ」ともとめが口を挟む。
怪訝そうな顔で、
「もとめ、これで全部だけど、誰？私が忘れたのは」ともとこが
言うと、
「アスカさん忘れているじゃない」
ともとめが平然と言う。
「私、アスカさんの後にいたから解答を覗いていたけど正解よ。
２０７号室のトイレに飾ってある絵は花でしょ」という。

もとこの顔が急に険しくなる。
「あの絵はお城よ。それに背景に花もないわよ」ともとこが反論すると、
「それは姉さんの部屋じゃないの？
私、さっき確認したけど、
２０７号室のトイレの絵は確かに花よ。
厳密に言えばクロユリよ」
と反論する。
「もとめの方こそ勘違いよ」
と
もとこも譲らない。
「じゃあ、こうしましょう。
もとこ先生ともとめ先生で間違えた方が
明日２０７号室に泊まるということでどうですか」
と、
アスカが正解だと負けるくそたがずる賢く提案する。
「くそたずるいぞ」
と木太郎が言うが、
「いいわよ。
私はそれで私が正しいんだから」
ともとめが先に強気で言うと、
「私こそ、正しいのよ。それで結構よ」
ともとこもムキになって言う。
「ええ、くそたくんずるいわよ。どうせなら、今日の私に変えてよ」
とヒトメが言うと、
「今日はコンテストがこの後あるからねえ」
「じゃあ、
今日、もとめ先生が正しかったら
くそたに２０７号室に泊まらせればいいじゃないか」

と
おちたが言うと、
「おちたくん、ありがとう。
くそたくんは男でしょう。
ねえ、代わってよ。お願い」
と
ヒトメがくそたの顔をにっこりとした顔で見て
ぺこりと頭を下げる。
「うーん、
じゃあ。
コンテストが終わってからでいいのなら、
今日は俺が２０７号室に泊まってやるよ！」
「まるで、
もとめが正しいみたいじゃない。
じゃあ、もとめが正しかったら、
それでいいわ。
その代わり、あたしが正しかったら、
今日はもとめで明日はヒトメさん。
それでどう？」
もとこが言うと、
「わかりました」
とヒトメが頷いた。
「じゃあ、早速、便所に行こうぜ」
と木太郎が気楽に言うと、
「きたねえなあ。トイレだよ」
とおちたが言うが、
「どっちでもいいから、早く行こう」
と
くそたがもう歩き出す。
「あんた、覚えておきなさいよ」

と

もとこがもとめを睨むと、

「姉さんこそ」

と

もとめも睨み返した。

「もとこＶＳもとめ２」

くそたを先頭にもとこたちがぞろぞろとついてくる。
教室に入り、
トイレの前にみんなが揃うと、
「中立の僕が先頭で入ります」
とおちたが言うと、
「オタクは中立はじゃないだろうが」
と
もとこ先生の言ったとおりになって欲しいくそたが言うと、
「じゃあ、アスカさんは」
と
もとこが意地悪く言うと、
アスカは昨日の恐怖のため、首を横にふる。
「じゃあ、私が」
とチウメが手を挙げると、
誰からも異論が出ない。
チウメは中に入り、
トイレのドアを開ける。
アスカは思わず目をつぶったが、
中に飾ってあった絵は確かに花、
黒百合であった。
「わー、もとめ先生凄い、記憶力」
と
生徒たちはもとめの方を見る。
それに反し、
もとこはもとめを凄い顔で睨みつける。
「じゃあ、私の勝ちね。

約束どおり、今日はくそたくん、
明日は姉さんがここに泊まるということで、
いいわよね」
と
もとめはもとこを見てにやりと笑いながら言うと、
もとこは悔しそうに頷く。
そして、
もとこはもとめにそっと近寄ると
「あんた覚えておきなさいよ」
と
耳元で囁くが、
もとめはそれを無視して答えない。
もとこは
この時もとめにしてやられたことに気づいたが、
何を考え直したのか、
「ごめんなさいね。
私のミスでアスカさんにはイヤな思いを与えてしまって、
さあ、
今日は2回目のコンテスト楽しくやりましょう。」
と作り笑顔で言う。
「わーい、ヘソコンテストだ」
と呑気に木太郎は笑う。
「じゃあ、早く夕食にしましょう。
オオシマがどこかいなくなっちゃたから、
夕食はもとめお願いね。
そうね。
コンテストもあるから、
午後6時から夕食にしましょう。
だから軽いものでOKよ。
じゃあ、よろしく」

もとこは内心悔しいはずであるのだが、
何かに頭を切り換えたのか、
さっさと部屋に戻ってしまった。
（続く）

「ヘソコンテスト」

もとめにやられた。
アスカが意外に元気なのも
もとめがきっと昨日も何かやったに違いない。
今夜はくそただから、
放っておけばいいけど、
明日の私のときは用心しないと。
いや。
そんなことより、ヘソコンテスト！
仕返しをしてやる。
覚えてろ、もとめ！
もとこはもとめへの仕返しに燃えていた。

夕食を簡単に終えると、
もとこが
「ちょっと早いけど、
女子は午後７時に露店風呂に集合、
男子はそうね。
８時くらいにはここで何か飲んで待っててね。
２０７号室行きは今日は１０時からでいいわ」
と言うと一旦解散する。

「ヘソコンテスト」か、
くそたの部屋に解散後集まった男子の中で、
木太郎が鼻をほじりながらにやけている。
「コンテストの時はその顔やめろよ。

中止になったら困るだろう」
とおちたが木太郎の頭をはたく。
それでも、
木太郎の笑いは止まらない。
「くそた、
ちょっと木太郎をしめてくれ」
とおちたが言うと、
くそたは木太郎のすねを思いっきり蹴る。
「いてえー、
思いっきりやるなあよ」
木太郎は涙目になる。
「うん、その顔でいろ。
今度にやり笑ったら、倍にして蹴り上げるぞ」
とくそたが脅す。
「わかったから、もうやめてくれ」
木太郎はそう言いながら、
痛そうに足をさすっていた。

「ヘソコンテスト2」

木太郎はにやけるのを我慢しながら
食堂へ向かった。
後ろからくそたがぴったりついてくる。
その後をホウセイたちがついてくる。
食堂にはもとこだけがいた。
「あら、早いわね。
楽しみだったんでしょう。
木太郎くんにやけてるわよ」
と
もとこがわざと嘘を言ったとたん、
くそたが木太郎の尻に蹴る。
「おれ、いえ、僕は違います。
先生ひどいですよ」
「冗談よ。
はい、これよ。
あなたたちも露店風呂入るんでしょう？
だから、
9時までに選択を終えて、
ここにちゃんとデジカメ返しに来てね」
もとこはそれだけ言うと、
木太郎にデジカメを渡し自分の部屋の方に戻ってしまった。
「悪かったな。木太郎。
でも、恨むなら、もとこ先生を恨めよ」
くそたが謝ると
永久が
「だから、

もとこ先生は怖いって言っただろう。
木太郎、
先頭でここに来たのがそもそもの間違いだったよ」
と言うと、
「もとこ先生は犬みたいなもんだよ。
人の心の中が見えるんだよ」
おちたが笑いながら変なことを言う。
「おちたの言ってることの意味はよくわからないけど、
とにかく、
もとこ先生が恐いことはわかったから、
今度は後で隠れていることにするからな。
それから、
くそた。
今の蹴り一回分は、
今度仮に笑っても、
それとチャラにしてくれよな」
と、
木太郎がそう言うと、
くそたは
「考えておく」
とだけ答えた。
「それより、
早く、
くそたの部屋に行って審査しようぜ」と
ホウセイがにやけて言ったので
「ほら、こいつもにやけた」
と木太郎が蹴りをいれる。
「わりい。
でも、木太郎の蹴りはあまり痛くないなあ」
「くそたと違って、これでも手加減してるんだぞ」

木太郎は鼻をほじながら負け惜しみを言う。
「汚い手でデジカメ触るなよ」
と
くそたが木太郎からデジカメを取り上げると、
今度はくそたを先頭にして
くそたの部屋に男たちは歩いて行った。
くそたは、
部屋に入るなりベッドの上に座ると、
「俺からみる」
と言って、
いきなりデジカメの裏のディスプレイを見始めた。
「わっ！
いきなりデベソだ。
次行くぞ、えっ」
と、
くそたが言うと、
旧ににやけだしたので、
「この野郎、
人には注意したクセに」
と、
木太郎がくそたを蹴るが、
くそたはにやけたままだった。

「ヘソコンテスト3」

横から永久が覗くと
「これやばい。
あー、もとこ先生は怖い」
と言うと、
木太郎、ホウセイ、おちたと
次から次へと覗き驚く。
「もとめ先生への仕返しじゃないか」
と
永久が言うと、
「さっきの絵のことか。
あれってもとめ先生が取り替えたんじゃない」
と
ホウセイが自分の考えを言う。
「それより、次」
木太郎がにやけるのを我慢しながら言う。
「何かどきどきするなあ」
くそたが次の画像を見る。
「やばー！
でも、これは顔写ってない」
「やっぱり、
もとめ先生への仕返しだ」
と
永久は喜ぶより怖がる。
「次行こう」
木太郎がうるさい。

「やばー！同じだ」
「あと3枚」
「やばー！同じだ」
「また、やばー！」
「これで最後だ」
「あれ？これはヘソだけだ」
「うーん、何かの作戦か」
「でも、デベソじゃないぞ」
「ホウセイどっちがもとこ先生だ」
「うーん、最後じゃないかなあ。
でも今回はヘソのアップだけなんで、
自信はない」
「デベソがもとこ先生じゃないか？」
「そうかなあ」
「うーん、問題は投票だよな。
2番はもとめ先生で可愛そうだから、
4人いれてあげよう。」
と
おちたが言うと、
「じゃあ、ホウセイ以外でいいな」
と
くそたが言うと、
「俺は」
と
木太郎が言うと、
「オタクはすぐにやけるからバレないように一緒でいい」
と
くそたが言う。
「じゃあ、俺1票目は6番にする」
と

ホウセイが言う。
「じゃあ、残りの1票は自由にするけど、
ホウセイは2番にはいれるなよ」
「そうだなあ。
後でバレるとやばいから4票にとめて置こう」
ホウセイは頷いた。
こうして手持ち票2票のうち、
最初の1票は
ホウセイが6番に1票。
残りの4人は
2番のもとめに4票入れることになった。

「ヘソコンテスト4」

「あのさあ、
俺やっぱり2番やめておくよ」
と永久が考え直す。
「何でだよ」
とおちたが言うと、
「また、勝つともとめ先生が狙われるからだよ。」
「そうか、
それじゃあ、俺も2番やめておく。
2票で勝ちも負けもなければ、
カドがたたないだろう。」
とおちたが言うと、
「それなら、1票の方がいいんじゃないか、
今度は7人いるだからさあ、
1票でもビリにはならないよ。
それに誰が選ぶというルールでも
はずしてあげられるからな」
と木太郎も言う。
「じゃあ、1票な」
くそたがそう言って、
後はデジカメの奪い合いとなる。

「もう後15分しかないぞ」
「集計したけど、10票しかないぞ」
「5人だからあってるじゃないか」
「でも、前回は12票だったぞ」
「あれえ、おかしいなあ」

「誰か前回2重投票したなあ」
「俺してないぞ」
「オオシマさんかなあ」
「写真見ないでどうやって投票すんだよ」
「前の紙は？」
「そんなのちぎって捨てたよ」
「オオシマさんだったら、こわー」
「だから違うよ、
木太郎のバカだろう」
「俺じゃないよ、
いや、俺かなあ」
と木太郎が自分でわからなくなると、
笑い出す。
「まあ、こうしよう。
前回はオオシマさんも投票した」
とホウセイが言うと皆頷く。
「じゃあ、
ホウセイまたうまく発表やって、
誰が誰だがわかるようにうまくやってくれ」
と木太郎が言う。
「任せた。木太郎はにやけるなよ」
くそたがそう言うと蹴りのマネをする。

「食堂では」

「今度こそはあのホウセイくんにやられないようにね」
ともとめが言うと、
「先生が一番危ないです」
と
アユメがクールに言う。
「チウメさんはいいわよね」
と
アスカが羨ましそうに言う。
「ごめんなさい。」
「そんな意味じゃなく、本音で。
本当二度と泊まりたくないのよ、
あの教室には。
ヘソじゃなければこんなに心配しないんだけど。
なんてーね」
とアスカが少し笑顔を見せて本音を言う。
「とにかくね。
ホウセイくんとその側の木太郎くんは要注意よ」
とヒトメが言う。
「まあ、ヘソだからねえ。
気楽に考えることよ」とアユメが言うと、
「でも、
２０７号室へ泊まる、泊まらないと、
その写真が誰かというのがかかっているので、
けっこう緊張するのよね」
と
もとめが本音を言う。

「でも、今気づいたんだけど、
前回１２票だったでしょう。
オオシマも投票して消えたってことよね」
と
もとめが言うと、
「こわーい。
オオシマさんどうしちゃったんだろう。
明日も戻らなければ
警察に捜索願い出した方がいいんじゃないですか」
とアユメが真面目な顔で言う。
「そうね。姉さんと相談しておくわ」
と
もとめは答える。
「ああ、来た来た。
とにかく、ポーカーフェイスでね」
と
もとめが言う。
（続く）

「もとこの作戦とでべその嫌疑」

みんなが揃ったところで、
もとこが最後に現れる。
「お待たせね。
今回はこうしましょう。
まず、得点の多い人が同点の場合は、
おちたくんに選んで貰って、
その人は２０７号室行きはなくなるの。
いいわね。
次、
２０７号室はビリじゃなく、
ブービーの人にしましょう。
デベソで２０７号室行きはかわいそうだしね。
ブービーの場合はじゃんけんにしましょう」
と
もとこが変なルールを言う。
「なんでブービーなんですか」
と
アユメが訊くと、
「質問するとバレるから、もうしないで」
と
もとこが質問をうち切る。
女子たちも男子の一部も附に落ちないが、
もとこが怖いので黙っていたが、
「もしかして、デベソって」
と
木太郎が誰もが疑問に思っていたことを

口に出そうとして、黙り込む。
「じゃあ、デジカメ返してね」
と
もとこはくそたからデジカメを受け取ると、
「あっ、忘れ物」
と
わざとらしく言って、
「すぐ戻るからちょっと待っててね」と言って、
部屋に戻ってしまう。
もとこが食堂を出ていくと、
もとめがヒトメの耳元に囁く
とヒトメが驚いたように頷いた。
もとめがヒトメに囁いたのは
「姉さんがビリじゃなくブービーにしたのは、
姉さんがデベソだからよ。
私が撮ったのだから間違いないわ」
だった。
まさに木太郎が言いかけたことだったのだ。
ヒトメは、
もとこの度胸とずる賢さに驚いていた。
もとこは写真を見ているから他にデベソはいないことを確認していて、
ビリ確定だと確信できたわけだ。
だから、そういう断定的な言い方もできたワケである。
そして、
さっきのもとこのような言い方をすれば、
誰もまさかもとこがデベソだとは思わない。
今度はビリに２０７号行きはないから、
ブービーと優勝者だけは名前はバレるが
前回みたいなドジを踏まない限りそれ以外は名前が出ない。

結局、
バレずに残ったもとこ以外の誰かがデベソだ
と思われるわけである。
自分こそデベソのクセに、
ヘソコンテストを開いて、
わざとデベソで２０７号室はかわいそうでしょう
ともっともらしいことを言って、
自分だけ２０７号室行きを逃れる
というもとこの度胸とずる賢さにヒトメは恐怖さえ感じていた。
しかし、
ヒトメが一つだけ疑問に思ったことがあった。
それは、
もし、
仮に他に０票がいたらどうする気だろうかということだった。
もとこのことだから０票はビリ。
１票同志でじゃんけんで、
負けたのがブービーという気だろうか。
ヒトメはそう考えていた。
すると、
「ヒトメ、何考えてんの？」
アユメがヒトメの様子に気づいて、
そう訊いたので、
「なんでもないわよ」
と
ヒトメはとぼけることにした。
下手にしゃべると
アユメのことだから、
前回みたいなことになりかねないからだった。
「ねえ、
何で優勝者をおちたくんが選ぶの？」と

アユメは自分が優勝する気なのか
そっちへ頭が行っている。
「もとこ先生は自分が選ばれる自信があるんじゃない」
と
ヒトメは適当なことを言った。
「おちたくんはもとめ先生のファンのはずなのに。
そうか！
もとめ先生が一位になるはずがないということは、
もとめ先生がデベソなのか」
と
アユメが突然大声を出す。
「えー！
デベソはもとめ先生だったの」
と
木太郎は自分の考えていたこととは
まったく違うことをアユメが言ったので、
思わず、
また、
大声を出してしまった。
そして、
その声を聞いたヒトメとアユメ以外の生徒はみんな驚いた。
もとめは
「私は違うわよ」
と慌ててムキになって否定したが、
かえってみんなに疑われたのだった。

「ヘソコンテストの結果発表」

もとめが否定し始めたとほぼ同時に
「お待たせね」
ともとこが現れた。
この時点で、
女子の方は一部の人間を除いて
もとめがデベソだと思いこんでいた。
男子は、
もとめがデベソではないことを知っていたが、
さすがホウセイだった。
「じゃあ、発表します。
では、
今回はまずビリの方の番号から発表致します。
そうです。
ただ一人の0票です。
かわいそうですけど、
さっきアユメさんがバラしたデベソのもとめ先生、
1番です」
「私じゃないわよ。姉よ。姉」
「見苦しいですよ。もとめ先生。
デベソでもいいじゃないですか。
デベソで恥ずかしいのはかあちゃんだけ！
先生はまだ独身平気。平気！」
ホウセイが茶化すように言ったので、
みんな大笑いする。
「だから、姉なの！
今ここで見せましょうか！」

もとめはみんなにバカにされたように笑われたのでムキになる。
「もう！
もとめ！
あんた大人でしょ！
そんな子供みたいなこと言って、
だだこねないの。
そこで本気で真裸になるの？
見苦しいわよ！
人のせいにしないで黙ってなさいな！」
もとこが落ちつき払って、
もとめの顔を穏やかそうに見て、
だだっ子を諭すように言ったので、
女子のほとんどが信用してしまい、
もとめに冷たい視線を送る。
男子の方はデベソがもとめじゃないのを知っているだけに
笑いをこらえるのに必死だった。
「はい。もとめ先生。
これ以上騒がないでください。
くどいですが、
デベソでもいいじゃないですか。
それより、
そういう見苦しさの方が格好悪いですよ。
せっかくのファンも逃げますよ」
とホウセイがまたからかい気味に言うと
みんなが大笑いする。
「ホウセイくんの言うとおり。
そうよ。
もとめ。
デベソでもいいじゃない。
おちたくんがいるでしょう。

あんまりそう言うことばかり言ってる
とさすがのおちたくんもひくわよ」
ともとこがずうずうしく言ったので、
木太郎は自分で尻をつねって笑いを必死でこらえた。
もとめの方はこれ以上言っても
相手にされないと思ったのか、
涙を堪えて、黙っていることにした。

「結果発表と票読み」

「はい。
もとこ先生のおしゃるとおりです。
では、行きます。
えーまず、6番です」
ホウセイはもとめに入るはずだった6番を
最初に言う。
実はこの票がポイントだったのだ。
しかし、
誰も騒がない。
「では、次2番です」
もとめの番号を言う。
「では、5番です。
そして、また、5番です。
おめでとう。
残り6票ですからブービーなくなりましたよ。
5番さん」と言うと、
アスカが思わず、ため息をついてしまう。
「あー、だめよ、アスカ」
とまたアユメが余計なことを言う。
「だめなのわ、あんたもよ」
とヒトメに呆れた顔で言われると
アスカとアユメはうつむいた。
「では、次行きますよ」
「えーちょっと待ってね。
1番が0デベソでしょ。
2番、6番が1票でしょう。

5番が2票でしょう。
票が入ってないのが3番、4番、7番でしょう。
どうしてブービーなくなったの」
とヒトメのおバカがまた考えだす。
「あのねえ、
0票はデベソの1番だけだから、
3，4，7番に一票づつ入るわけ。
そうすると、
1番がゼロで5番が2票だから
2，3，4，6，7が1票で並ぶ訳。
1票が5人に対し、残り3票だから、
最低二人は1票そのままになるわけよ。
だから、2票この時点でとっただけでブービーにはならないのよ」
もとこがスラスラと解説する。
「もとこ先生頭いい。
さすが先生。
うーん、じゃあ、私、あと1票取ればいいんだ」
とヒトメが口をすべらす。
「あんた、またやったね」
「えー、あまりしゃべりますとバレますよ。
所詮ヘソですからいいですね。
ヒトメさんはズバリ6番でしょう」
と2番がもとめだと知っているホウセイがわざと言うと、
「何で、何でわかったの」
「あー、また、ひっかかった」
とアユメがヒトメの頭を軽くはたいた。

「結果発表と票読み2」

ホウセイは笑いながら発表を続ける。
「ははは、相変わらず、おバカさんですね。
ヒトメさん、油断は禁物ですよ。
もう、3票発表します。
もとこ先生のおっしゃるとおりです。
そうです、3番、4番、7番各1票です。
残りは3票です」
「えー、
一応この時点であと3票ですので、まとめます。
1番が0票でもとめ先生、
2票が5番でアスカさん、
6番が1票でヒトメさん、
2番、3番、4番、7番も各1票ですが誰だか不明です。
では、ゆっくり行きます。
えー、
次は6番ヒトメさんおめでとう。
207号室行きは完全になくなりましたよ。
それどころか、優勝の可能性も出てきましたよ。
本当におめでとう」
とホウセイがイヤミだか本気だかわからない顔で話す。
「やったわ。
もしかしたら、優勝できるかも。
優勝ならどうせバレてるから良かった」
とヒトメははしゃぎまわる。
「あんたうるさいわよ」
とアユメは不機嫌に言う。

「あと2票ですね。
チウメさんは既に207号室行きは免れていますから、
まだ1票の人は注意してくださいね」
「えーでは、行きます。なんとまた6番です。
ヒトメさんリーチです。
凄いですね、おめでとう」
「ほら、私優勝かもよ」
ヒトメはアユメの方を見て鼻
高々に笑う。
「次、アスカちゃんなら、
同点でおちたくんが決めるのよ」
とアユメがさらに不機嫌になって言う。
「いいもーん。
それよりアユメ危ないんじゃない。
チウメちゃんもまだ1票だから、
地獄行きの確率は高いわよ。
あんたじゃんけん弱いでしょう」
とヒトメが言い返す。
「まあまあ、
その辺にしておきましょう。
残るはあと1票です。
さあ、もう一度整理しますよ。
3票が6番ヒトメさん、
2票が5番アスカさん、
そして、
2番、3番、4番、7番が誰だか不明ですが1票です。
ちなみにデベソのもとこ先生は0票です」
と言ってホウセイはにやりと笑う。

「最後の1票」

「うあー、あたしどうしよう。
誰か1票いれてくれますように」
もとこはわざとらしく言うが、
木太郎はついに我慢できなくなり笑いだしたので、
くそたが蹴りを入れる。
「いてえ、ごめん、もう笑わない」
木太郎は慌てて尻を押さえながら頭を下げる。
「そうよ。
人の不幸を笑うんじゃないわよ。
アユメもレイカも顔が引きつっているじゃない」
とヒトメが二人の顔を見ながら言うが、
たしかに、
レイカとアユメの顔は明かにひきつっていた。
ホウセイは最後の票が意外だったので、
おかしくてしょうがないが笑いを必死でこらえていた。
木太郎はまたまた我慢できず笑い出してしまったので、
くそたにまた尻を思いっきり蹴られた。

「最後の1票2」

ホウセイも木太郎がくそたに殴られるのを見て、
思わず笑い出してしまった。
「あははは、すいません。
今回もすべてバレたようですので、
あははは」
くそたが今度はホウセイに蹴りを入れる。
「真面目にやれ」
「す、すいません。
では、真面目に行きます。
最後の1票は2番です。
ということは、
優勝はなんと3票の6番ヒトメさん、おめでとう」
「やったー、地獄から天国よ」
ヒトメが不機嫌なアユメに抱きつく。
「やめてよ。これから私はじゃんけんなんだから」
「そうです。
2票が5番のアスカさんに、
最後に助かった2番の誰かさん。
そして、
ブービー候補が3，4，7番です。
その方は前に出てきてください」
その時、
わざとらしくもとこが笑う。
「えー、私」
とアユメがそう言って、前に出る。

続いてレイカもうつむいて前にでる。
「あれ、もう一人は誰ですか。正直に前に出てくださいよ」
「そうだよ。インチキはだめだよ」
少し笑いがおさまった木太郎が鼻をほじりながら言う。
「あのー私なんですが」
とチウメが言うと、
「何番ですか」
「あのー7番なんですが」
「そういうことですか、
チウメさんは207号室行きはなしですから、
3番さん、4番さんの
アユメさん、レイカさんで、
じゃんけんで決定ということになります。
尚、幸運な2番はもとこ先生ということになりますね」
とホウセイがわざと言うと、
もとこはわざとらしく、
「私に投票してくれた生徒さんありがとう」
とにっこり笑って手をふる。
木太郎だけでなく、
このときは
永久もおちたもくそたも
もとこの堂々とした嘘つきぶりに笑いを堪えきれず
思わず大笑いしてしまった。
「お返しだ」
木太郎はくそたのケツに思いっきり蹴りを入れた。
「いてー、すまん、俺まで」
「何、男子たち、
人の不幸を笑ってんのよ」
と笑いの理由を勘違いしたヒトメが偉そうに言う。
このとき、もとめが凄い顔で

もとこを睨みつけていたが誰も気づかなかった。

「２０７号室行きをかけたじゃんけん」

「えー、アユメさんは３番ですか」
「そうよ」
アユメは不機嫌に言う。
「では、まとめます。
１番０デベソのもとめ先生。
２番２票のもとこ先生、
３番ブービー１票のアユメさん、
４番同じくレイカさん、
５番２票のアスカさん、
そして、
６番４票で優勝のヒトメさん。
そして、
７番１票も運良く２０７号室を免れたチウメさん、
では、アユメさん、
レイカさんブービーの座をかけて、
そして２０７号室行きをかけて、
じゃんけんしてください。
さあ、前に出ましょう」
「二人ともがんばって」
もとこがずうずうしく言う。
「あのー何回戦ですか」
とレイカが訊くと、
「まだ時間あるから、３回戦にしましょう」
ともとこが言う。
「それでは、さんまということで、用意してください。
二人とも、私が合図しますよ。じゃんけんぽん」

「勝った」
アユメが手を叩いて喜ぶ。
「アユメ、じゃんけん強くなったじゃない」
ヒトメが声をかけると、アユメはにっこり笑う。
「では、続けます。じゃんけんぽん」
「勝ちました」
今度はレイカが嬉しそうに言う。
「では、続けます、じゃんけんほい」
「勝った」
アユメがまた喜ぶ。
「あー」
レイカがうつむく。
「あのーじゃんけんほいはふざけてるよ」
と木太郎が笑いながら言う。
「ふざけた顔したオタクが言うな」
おちたが木太郎の頭を叩く。
「えー、じゃあ、ちゃんと言います。
さあ、これでアユメちゃんが勝てば、
２０７号行きはレイカちゃんです。
えーじゃんけんぽん」
「あー、負けた」
先にアユメが言うと、
「はー、危なかった」
とレイカがほっとため息をつく。
「さあ、同点です。
運命のじゃんけん。
これが泣いても勝っても最後です。
いきますよ」
「ちょっと、待って、何か飲み物頂戴よ」
とアユメが少し青ざめた顔で言う。

「ジュースでいいですか」
とおちたが訊くと
「はい」
「レイカさんも飲みますか」
「私は結構です」
「じゃあ、私も」
「俺も」
結局、レイカ以外は皆ジュースを頼んでので、
おちたと永久が
キッチンへジュースを取りに行った。

「恐ろしいもとこ」

キッチンでは
「今回も全員バレたね。
それにしてももとこ先生は怖いね。
女子は完全に騙されてるもんね」
とおちたが永久の耳元で囁くと
「だから、俺が言っただろう。
それにしても俺たちにバレてて、
ああ平然と嘘をつくんだから
恐ろしい先生だよ」
と
永久は大げさに身体を振るわせて言うと、
「なーに、誰がおそろしいの」
と後からもとこが声をかける。
「えー、何でもありません」
「僕もです」
「いい、あなたたちも共犯だからね」
と
もとこはにやりと笑って言うと、
一緒にジュースを選び、
食堂へ持って行くのを手伝う。
「ねえ、どっちが負けると思う」
ともとこが二人に小声で訊く。
「俺はレイカちゃんかな」
と永久が言うと、
「僕はアユメちゃんかな」
と言うと、

「そうじゃあ、
当たった方に面白い写真、
後で見せてあげるわね」
と
もとこが妖しげに笑った。

「２０７号室と写真がかかったじゃんけんぽん」

もとこたちがジュースを持ってくると、
早速、
おちたとレイカ以外は飲み始めるが、
ずうずうしくも
「腹も減ったな」
と木太郎が鼻をほじり始める。
「ハナクソでも食っておけ」
とくそたが冗談を言っても、
しーんとしている。
レイカとアユメが
異常に緊張した顔をしているからだ。
「えー、バカはおいておきまして、
喉も潤ったことですから、
最後の決戦行きますか。
それにしても、
今日２０７号室行きのくそたくんは落ちついてますねえ」
とホウセイがチャカすように言うが、
誰も笑わない。
「では、最後です。
行きます。
じゃんけんぽん」
「あぶなかった」
「ふー」
「何とあいこですね」
「でも、もう一度、じゃんけんぽん」
「ふー」

「またか」
「同じことをお二人とも考えてますね。
間を置かずに行きます。
じゃんけんぽん」
「あー」
「ふー」
「やったー」
「負けちゃったか」
勝者はレイカだった。
「戦の前に水分取っちゃ駄目よ」
ともとこはぽつりと言うと、
写真を見る権利を得たおちたの方を向いて
にやりと笑った。

「２０７号室行き」

「えー、
結果はご覧のとおり
レイカさんが勝ちました。
従いまして、
明日の２０７号室行きは3番のアユメさんに決まりました、
みなさん拍手を、
と言いたいところですが、
それはやめましょう」
とホウセイが言ったところで、
「じゃあ、くそたくん早く支度して、
１０分後呼びに行くわよ。
それから、
トイレに入って行くといいわよ。
トイレの中で殺されたという噂もあるから」
ともとこは意地悪く言う。
「ありがとうございます。
でも、さっきトイレ行ったばかりだし、
俺ベッドに横になったら、
すぐ寝ちゃう方だから大丈夫ですよ。
ゲームをやって疲れたらすぐ寝ますよ。
ご心配いりません」
と
くそたはもとこの意地悪をいい方に考えて
頭を下げた。
他方、
アユメは

ほとんど怖がっている様子がないくそたを見てうらやましく思った。

「でべそにされたもとめと秘密の写真」

「私、今日はなんか疲れたので先に寝ます」
と
もとめはそう言って、自分の部屋に戻る。
「女子は
ともかく男性生徒にでべそがバレたのはショックよねえ」
と
優勝したヒトメは呑気そうに言う。
木太郎が何か言いかけたところで、
「俺たちも露店風呂行こう」
と
ホウセイが
おしゃべりの木太郎をひっぱるように2階へ連れていく。
おちたもホウセイたちと一緒に
2階の部屋に戻って風呂の用意をしに行こう
としたところを、
もとこが二人をつかまえ
「さっきの写真は明日の楽しみね」
と耳元でささやくと、
もとこも男子生徒を追い抜くようにして
一旦部屋に引き上げる。
「なんだよ。今のささやきは。」
木太郎が訊くとおちたには珍しく
「木太郎くんが、
風呂の中でハナクソを捨てないように気をつけてね！
だってさ」
と大嘘をつく。

「えー、そんなこと言われてんの」

と

木太郎はそう言いながらまた鼻をほじる。

「だから、それやめろよ」

「また、つけてやろうか」

「おい、行くぞ」

ホウセイに大声で言われると、

おちたと木太郎の二人は

ホウセイに慌ててついていった。

トントン
「くそたくん、私、もとこ。
準備はいい」
と
もとこがくそたの部屋のドアを叩くと、
もう準備をしていたのか、
ジャージにトレーナー姿で、
携帯ゲームだけ持ったくそたが出てきた。
「えーと、もう１０時近いけど、
朝は7時までででいいわ。
7時になったら、
私が外から鍵を開けておくから、
何にも言わずに部屋に戻っていいわよ。
それから、
非常用のこの無線ビル一応渡しておくわ。
どうしても怖くなったら、押しなさい。
私が助けにくるからね。
でも、これを使うと減点よ」
「じゃあ、一応。
でも、アスカちゃんが大丈夫だったんですから、
俺も平気ですよ」
とくそたは笑ってそのベルを受け取ると、
２０７号室へ入っていった。

もとこは部屋に戻ると、
どう、

もとめを懲らしめようか考えていた。
でべそや男子にあの写真見せたくらいでは、
もとこのもとめへの恨みは、
まだまだ消えることはなかった。

もとめは部屋に戻ると、
あまりにも汚い姉のやり方にショックを受けていた。
女子だけならともかく男子にまで、
でべそと思われ、
しかも実はバカだと思われてしまい、
悔しくて悔しくて、
しょうがなかったのだ。
でべその方は、
女子だけしかいないのならば、
あのとき見せてやれば済んだことだったが、
男子生徒のいる前ではそうもいかない。
もとこはそれを計算してやったのだ。
もとめは自分が２０７号室の絵を取り替えたことへの報復で
姉がああいうことをやったのだ
と確信していた。
それだけでなく、
もとめはもとこのことだから
これ以上の仕返しを目論んでいると考えていた。
そこで、
もとめは、

ここで逃げては逆にやられる。
守るより、攻めだ。

姉にも弱点がある。
こうなったら、
この合宿にいられなくなるほどの屈辱を味あわせてやる。

そう思いながら、
もとめなりに復讐計画を練っていた。

その頃、
露店風呂では、
呑気に４人の男子生徒が湯に浸かっていた。
永久はこそっと、
おちたのそばにより、
「おい、
さっきのもとこ先生の言葉嘘だろう。
木太郎の話じゃなく、
本当は例の写真の話しだろう。
いつ、見せてくれるって」
と訊いた。

「朝とおちたと写真」

おちたは例の写真のことで早く目が醒め、
朝の６時から食堂で、
もとこを待っていた。
しかし、
最初に来たのはくそただった。
「どうだった？」
「何が」
「何がって？
２０７号室だよ」
「ああ、
昨日は何か疲れてすぐ寝たよ。
そして、
目が覚めて時間を見たらもう7時だからすぐ起きて、
喉が渇いたからここに来たんだよ。
ジュースでいいから持ってきてくれよ」
くそたが偉そうに言う。
「わかったよ。
その代わり、もとこ先生が来たら、
俺がキッチンに行っていると言って、
すぐ戻ってくるから、
ちょっとだけ待ってもらってくれよ。
約束だからな」
おちたはそう言うとキッチンへ走って行く。

入れ違いにもとこが来る。

「おはよう、大丈夫だった？」
「大丈夫じゃなかったら、
ここにはいませんよ」
「それもそうね」
「ああ、おちたが用があるようで」
「そう、写真のことね。
露店風呂へ入ってくるからここで待っててね
と伝えておいて」
「写真」
「じゃあね、また」
もとこはそれだけ行って、
露店風呂に向かう。

おちたがジュースを持って戻ってくると、
「今もとこ先生、来たけど、
写真って何だよ」
「えっ、もとこ先生は」
「露店風呂に行った。
出るまでここで待ってろってさ。
それより写真だよ。
もとこ先生はそれだけしか言わなかったんだけどさ」
「いいんだよ。
たいした写真じゃない。
くそたはさっさとジュースを飲んで
風呂入った方がいいぞ。
何か臭うぞ。
昨日風呂入ってないだろう」
「臭いか？
じゃあ、風呂入るか」

くそたは一気にジュースを飲み干すと、
露店風呂の方に行こうとした。
「バーカ！
風呂って、部屋のだよ。
今は、
もとこ先生が入っているんだろう。
自分で言ったじゃないか」
「永久のマネしようと思ったんだよ」
「本当バカだね。
永久は知らないで入ったんだよ。
知って入ったら大変だぞ」
「冗談だよ。
じゃあな」
くそたは
本当はマジだったくせにそう言うと部屋に戻って行った。

入れ代わるように今度は永久が来る。
「もとこ先生待っているんだろう？」
いきなり永久が核心をつく。
「オタクもみかけによらず、
エロガキだねえ」
「違うさ。
気になるだけだよ」
「また、
もとこ先生露店風呂？」
「そうみたい」
「みたい？
「くそたがそう聞いたって」
「くそた無事だったのか」

「あいつすぐ寝て起きたら7時だって」
「あいつらしいね。
俺キッチンでジュースと食べ物とって
部屋に戻るよ」
「何ですぐ戻るのさ?」
「いいだろう、じゃあ」
永久はそう言うとキッチンへ行った。
(続く)

「昨日の回想、露店風呂の４人」

永久はキッチンへ行くと、
昨日の露店風呂でのことを思い出していた。

永久がおちたに例の写真のことを訊くと、
「バレてたか。
明日だってさ。
でも、時間とはわからない」
と
おちたが答えた。
「何だろうな」
「永久、そこでにやけるなよ」
「いや、そういう意味じゃないんだ！
もとこ先生のことだから、
エロい写真かと思わせて、
実は、
結構、恐ろしい写真じゃないかと思ってさ。
それで、いひひ」
「おい、
俺がちびるとでも思ってにやけてるのか。
イヤな奴だな！」
「もしかして、
例の昔ここであった事件の死体の写真とかな」
「やめてくれよ。
それじゃ、
予想を当てた方が悲惨じゃないか？」

「いや、あのもとこ先生だぞ。
俺もやられたんだぞ。
女子なんてひどいもんさ。
もとめ先生なんかデベソにアレだぞ！
今度はおちたの番だな。
ああ、
その前にくそたがいたか」
「永久は実はイヤな奴だったんだな。
もう、やめてくれよ。脅かすの。
俺は楽しみにしてるんだから」
「わかった。もうやめる。
だから、
俺だけには写真の中身を教えてくれよ」
「わかったよ！
でも、もう脅かすな！
それから、他の奴には内緒だぞ！」
「ああ、わかってる。
木太郎にでも言ったら、
すぐバレて
俺またもとこ先生に何かやられるかもしれないからな」
永久とおちたがひそひそ話しをしていると、
「おい、
おまえら、
何ひそひそ俺の話をしてるんだよ」
木太郎が自分の話しをされていると勘違いして訊く。
「いや、
万一、
木太郎がハナクソをお湯に入れたら、
もとこ先生はどういう罰をするのかなって思ってさ」
「そうそう。

もとこ先生は凄く怖いぞ。
神聖なお湯を汚してとか怒鳴られて、　もしかしたら、
素っ裸にされて授業を受けさせられるかもよ」
永久とおちたは木太郎を脅かした。
「やめてくれよ。
俺はそんなことはしないよ」
「ちゃんと見てないようで見てるんだからなあ」
「わかったよ。
そう言えば、
明日はコンテストやらないのかなあ」
「今度は、
どこをコンテストするんだよ」
「足とかどう？」
「足か」
「足の裏とかは」
「やめてくれよ。
でべそはいいけど、
水虫がいたら、
なんか気持ち悪いし、
ショックだよ」
「それはそうだな」
「たしかにでべそとは大違いだな」
「もとめ先生も可愛そうに」
「あははは、
でべそはもとこ先生なのになあ」
男子４人は、
バカ話で盛り上がっていた。

永久は、冗談ではなく、

もとこがおちたに見せる写真はおちたが考えているようなエロ写真ではなく、
とんでもなく恐ろしい写真だと思っていた。
だから、
永久はおちたのソバにいたら、
自分もその写真を
「今回だけはおまけよ」
なんて、
もとこに言われて見せつけられるのではないかと内心びびっていたのだった。
（続く）

「平和な朝？」

おちたがもとこを待っていると、
レイカ、ヒトメ、チウメ、
アユメが揃って食堂に来る。
「おはよう、早いね」
「おはよう一人？」
ヒトメが訊く。
「うん、そっちはアスカちゃんだけいないね」
「ちょっと一人浮いてのよね」
とヒトメが余計なことを言う。
「あんた余計なこと言うんじゃないの。
それより、
くそたくんは」
アユメが今日２０７号室に泊まるのが自分なので
心配そうに聞く。
「ああ、あいつはビンビン」
「何ビンビンって」
「凄く元気っていうこと。
しかもバカなことに、
もとこ先生が入っているの知って、
永久のマネして露天風呂に入ろうとしたんだ」
「くそたくんらしいわね。
でも、
そうなら、
２０７号室ってたいしたことないみたいね。
気持ち次第ってことね」
とヒトメが気楽そうに言うと、

「あんたも
ちょっとくそたくんに似ているところあるから、
代わってよ」
「イヤよ」
そこへ、
湯上がりのもとこが
「おはよう！
みんなずいぶん早いわね。
あなたたちも朝食を取ったら入るといいわよ」
「はい、そうします」
とレイカが言うと４人はキッチンへ向かった。
「おちたくん、
これから見に来る？」
ともとこがそう言ったところへジャマが入った。
木太郎とホウセイが来たのだ。
「じゃあ、後でにしましょう」
と
もとこは言うと自分の部屋に戻ってしまった。
「ずいぶん、朝早いじゃないか」
おちたがジャマされたので、
不機嫌そうに言うと、
「何だよ。
そのイヤそうないいぐさは」
木太郎がおちたの頭をはたく。
「いや、悪かった。
俺部屋にもーどろう」
と言うと、
おちたは逃げるように部屋に戻ってしまった。
「なんか？
おちたともとこ先生怪しいなあ」

勘の鋭いホウセイが言う。
「確かに、何か企んでいるな」
木太郎が鼻をほじりながら言った。

「おちたの部屋に来るもとこと写真」

おちたが部屋に戻ってしばらくすると、ノックの音がした。

「誰」

「私、もとこよ」

「先生ですか」

「早く開けて、誰かに見られるとまずいでしょう」

「はい」

もとこはおちたの部屋に入ると、

「いーい。このことは誰にもしゃべっては駄目よ。いーい」

と

もとこが念を押す。

「はい」

「じゃーん」

「何ですか。この不細工なデブは」

「そんなこと言っていいの」

「はあ」

「このほくろ見て、右目の下よ」

「どこかで見たようでないようで」

「最近、毎日見てるでしょう？このデブ」

「うーん？」
「そうよね。
まさか、
こんな不細工なデブがここにいるとはね」
「ここ？」
「えー、
じゃあ、もとこ先生ですか」
「ぶっ殺すわよ」
「すいません」
「じゃあ、もとめ先生」
「ピンポーン」
「えー、そんなあ……」
おちたが落ち込む。
「実はあの子とは、
父が同じだけで、
母は違うの。
この写真は、
ダイエットかつ整形前のあの子なの」
「整形？」
「秘密よ」
「はい」
「いい子にしてたら、
また、
面白い写真見せてあげるから」
もとこはそう言うと、
落ち込むおちたを残して、
周りの様子をうかがいながら
おちたの部屋を出ていった。

「おちたと笑うもとこ」

おちたは
憧れのもとめが
昔デブでしかも整形していた
ということをもとこから聞かされ
相当なショックを受けていた。

一方、
もとこは部屋で大笑いしていた。
もとめとは腹違いの姉妹
というのは本当の話しだが、
おちたに見せたあの写真は
もとめとはまったくの別人だったのだ。
もとこの友人に、
ほくろの位置がもとめと一緒の友人がいたので、
その写真を見せたのだ。
後は、
うまくおちたが誰かにしゃべってくれればいい。
永久でもそそのかすか。
デベソ以上のレッテルをもとめに貼ろうと、
もとめはにやけていた。

他方、
もとめは、
今日の夜は、

自分の得意のゲームをやって、
もとこをうまく罠にはめて
２０７号室に泊めようと企んでいた。
もちろん、
後で整形デブと呼ばれることなど
この時点では知る由もなかった。

「おしゃべりおちた」

トントン
「入るぞ」
返事も聞かず、
永久がおちたの部屋に入る。
「見たぞ、見たぞ、俺は見た。
もとこ先生がオタクの部屋に入るのを」
永久がにやけながらおちたの顔を見てそういう。
「なんだよ。
どこかのババアみたいだなあ」
「それで、何の写真？
その顔は怖い奴だったのか」
「うるさいなあ。
どうでもいいだろう。
オタクが、
期待していた死体とかのグロい写真とは全然違うよ」
「いいよ。
話さなくても、
その代わりみんなにばらすぞ」
「何をだよ？」
「もとこ先生が、
こそこそおちたの部屋から出てきたって。
みんなどう思うかなあ」
永久はにやりと笑っていう。
「俺を脅迫するのかあ」
「違うよ。事実を述べてるだけだよ」
「そういうのを脅迫っていうんだよ」

「そうか。じゃあ」
「待った。内緒にできるか」
「内緒？」
「うーん、秘密だよ」
「聞いてから考える」
「頼む。
可愛そうだから、黙っててくれ」
「可愛そう？」
「うん、もとめ先生が」
おちたはしょうがなく、
もとこから見た写真ともとことのやりとりを話してしまった。
「整形デブ。
あのきれいなもとめ先生が。
怪しいなあ」
「本当だって、
俺整形前の写真見たもん」
「そうか、腹違いの姉妹だもんな」
「へへへ！
俺たちも聞いちゃった」
永久の後から、
木太郎とホウセイがほぼ同時に声を揃えてそう言うと、
にやっと笑って顔をのぞかせた。

「整形デブ美人」

もとめの整形デブの噂はあっという間に広まった。
もとめだけは知らずに。
また、何故そういう噂が広がったかも知らずに。

もとめが朝食等を終え教室に行くと、
既に生徒たちは座っていたが、
何か生徒の視線が変だった。
珍しく時間がたっても、
もとこは来ない。
余計生徒の視線がもとめに集まる。
もとめが視線に気づき、
その方を向くと生徒は視線をそらす。
もとめは最初はデベソのせいかと思ったが、
どうもそういう感じではない。
顔に何かついてるのかと、
顔を触ると、
うつむいて木太郎が笑っている。
「木太郎くん、何笑ってんの？」
もとめには珍しく少し怒った感じで言うと、
木太郎の足をくそたが蹴る。
「くそたくん何今のは？」
もとめの声はさらに厳しくなる。
かなり気まずい雰囲気になる。
そこへ、
もとこが教室に入ってくる。
「あら、

もとめそんな怖い顔して、
もしかして、おちたくん」
もとこがおちたの方を見ると、
おちたは思わずうつむいた。
「まあ、
ここは私がなんとかしておくから、
もとめあんたは一旦部屋に戻って昼食の準備をしておいて、
早く」
もとこは追い出すようにもとめの肩を叩く。
もとめは、
怖い顔をしたまま教室を出た。
もとこは、
しばらく生徒達を睨みつけた後、
教室の扉に近づくとそれを開けて、
もとめがいなくなったかを確認にしに行く。
そして、
もとめがいなくなったのかを確認してから、
教壇に戻ってくると、
「もとめの話しを聞いたのね。
いい。
多分大げさに伝わっている
と思うから、
真に受けないようにわかったわね。
それから、
話した張本人わかってるわね。
約束を破ったから後で覚えておきなさい」
とわざと怖い顔をして言う。
おちたも
永久も
怖くなってうつむく。

「じゃあ、
もとめのことは忘れなさい。
授業を始めるわよ」
と
もとこは内心はうまくいったと思いながら授業を始めた。

「悩むもとめ」

もとめは昼食の準備をしながら悩んでいた。
生徒の視線が異様に冷たかったからだ。

木太郎相手に自分もムキになって悪かった
と反省もしていた。
木太郎だけならでべその話しかもしれないが、
女子の視線を見ると
もっと深刻な話のようなだともとめは思っていた。
自分が顔を触ったら、
木太郎が笑ったから顔に関係する話しで、
かつ、
白い目で見られる話しだ
ともとめは考えた。
もとめは、
部屋で鏡を自分の顔を見たが、
別に変わったことはなかった。
それとも、
もとめが誰かの顔をバカにしたのだろうか。
もとめが思い出そうとするが思い当たることはなかった。
もとめは憂鬱だった。
そんな考えに耽っていたので、
もとめは調理中包丁で指を切った。

本当、ついてない。
気になる。
そうだ。

こっそり、おちたに聞いてみるか。
それしかない。

もとめはそう決めた。

「変わったしりとり」

その日は、
普通に昼食をとり、
午後も普通に授業が行われた。
試験は行われなかった。
もとめは夕食の準備をしていて、
教室に今日は来なかった。
もとめは、
おちたに接触しようとしたが、
そのチャンスは来なかった。

もとこは授業の終わりに、
「今日は明日の２０７号室行きを決めるために、
夕食後すぐに変わったしりとりのゲームをします。
この後、一旦部屋に戻って、６時３０分から夕食をとって、
みんなの食事が終わり次第、ゲームをします。
ルールはその時説明します」
と言うと、
「先生、
今日はコンテストやらないんですか」
「コンテストねえ。
今日はもとめのことがあるからやめておきましょう。
まあ、
ゲームでもやって仲良くしましょう。
もとめもしりとりは好きなので元気になるでしょう」
ともとこはにっこり笑ってそう言うと教室を先に出ていった。

「どういうしりとりかなあ」
と木太郎が言うと、
「多分、もとこ先生が得意なやつだろう」
とずばり永久が言う。
「もとめ先生の話ばらしたの誰なの」
と
ヒトメが言うと、
「ヒトメ、もうその話しはやめ、いーい」
と
レイカが言うと、みんな頷く。
「はい、ちょっと気になるけど、わかりました」

夕食が終わると、
もとこが
「これから変わったしりとりをするから、
女子たちは洗い物して、もとめはお疲れだから、
一回部屋に戻って、着替えてもっと楽な格好に着替えてらっしゃい」
と
もとこはそう言って、
一旦、女子ともとめを食堂から追い払った。
女子ともとめがいなくなると、
「おちたくんから聞いた話を女子にしたのは誰?」
と
男子たちに訊く。
「ホウセイです」
と
木太郎が言うと、
「オタクもいただろう」

と
ホウセイが言い返すと、
「でも、話したのはホウセイです」
と
木太郎が股間を掻きながら言う。
「おちたくんから訊いたのは」
「永久と僕とホウセイです」
と
木太郎が言う。
「きたねえ。
オタクらが僕と永久を話しを盗み聞きしたんだろう」
と
おちたが言うと、
「そう、まあ、そういう事情ならしょうがないわね。
今度からは秘密よ。
もとめにもよ！
これは絶対だからね！
いい。じゃあ、みんながきたら
もう忘れてゲームを楽しみましょう」
とともとこは意外にも怒らなかったので、
おちたはほっとした。

「変わったしりとり2」

もとこはもとめや女子が食堂に戻ると
「今日はみっちり勉強したから、
楽しくしりとりしましょう。
優勝はなし。
3回負けた人が、
明日、207号室に泊まるのよ。
いいわね。
それで、変わったしりとりってさっき言ったけど、
結構簡単よ。
「普通は、テストって言ったら、
次の人はトンネルとか答えるでしょう。
でも、このしりとりは最後の文字を無視するの。
テストならトを無視して、スから始まる言葉、
例えばスイカと答えるの。
そして、次はイから、
イカでもいいの。
そして、また、イから始まる言葉を言うの。
でも、
この後、インクとかイチョウとかその言葉から
始められない言葉や一般のしりとりと同じで
インカンとか最後にンが付いたら、負け。
また、
7数えて言葉が出なくても負け。
いい。
簡単でしょう」
と変わったしりとりのルールを説明する。

「あの人の名前はいいんですか。
例えば、木太郎とか」
とホウセイが質問する。
「それは基本的に駄目よ。
人の名前は結構いい加減だから。
とにかく人名以外の単語よ。
だから、
みんなが知ってる地名や国名はいいわよ。
じゃあ、
まず輪になって座って」
もとこが言うとみんな従いテーブルをどけて椅子だけにして、
輪のようにして座る。
もとこの隣に、
もとめ、くそた、永久、ホウセイ、
木太郎、おちた、アスカ、アユメ、ヒトメ、
レイカ、チウメの順に輪になる。
「では、誰から行く。早ければいいというものじゃないわよ」
と
もとこが言うと、
木太郎が
「僕から行きます」
と言うと、
「ずるいなあ」
と
おちたが言ったが、
もとこが何故かおちたを睨みつけたので、
「いえ、木太郎でいいです」
と
おちたは写真のことを話した負い目があるので俯いた。
「じゃあ、木太郎くんからでいいわね」

と

もとこは言った。

「変わったしりとり開始」

「では、僕木太郎から行きます。
アメリカ」
「いきなりリかよ。
えーと、リス」
「おちたくんだって」
アスカが考える。
「リカ」
「ず、ずるい、アスカ自分まで」
と
アユメがうろたえる。
「じゃあ。リシ」
「ず、ずるい。恐怖のリ責め」
と
ヒトメがうろたえると
「言っておくけど、
一回のターンで同じ言葉を言っても負けよ」
と
もとこが口を挟むと
「もちろんです。リね。リレキショ」
と
ヒトメが渋いことを言う。
「シリ、リレキショとは結構やるわね」
と
もとこが笑って言う。
「シでよかった。シリトリ」
と
レイカがすぐ言う。

「トンネル」
と
チウメがあっさり言う。
「ネコ」
と
もとこが言う。
「また、ネ。
えーと」
もとめが考えだすと、
もとこが
「7，6，5，4」
と
生徒には優しいクセに急にカウントをしだす。
「ネンガジョウ」
と
慌ててもとめが言うと、
「ブー」
と
もとこが言うと、
「あー、そうだった」と
もとめが頭を抱える。
木太郎がホウセイに
「同じ姉妹でも腹違いだ
と頭も顔も違うんだなあ」
と言ったので、
ホウセイが思わず笑いそうになる。
「そこの二人、何こそこそやってんのよ。
1回ミスったくらいでもとめをバカにするんじゃないの」
と
もとこに怒られたが、

その言葉が余計もとめにプレッシャーを与えた。

「もとめの苦戦」

「じゃあ、ミスったもとめからどうぞ。
これでリセットよ。さっきの言葉はまた使っていいからね」
と

もとこが言うと、
もとめはいきなり
「トウキョウ」
と言って、
「ブー」
と

木太郎に言われて、
みんなに大笑いされた。
「あーそうだった。同じミス。あー」
と

もとめは完全にパニくった様子だ。
「もう、大人なんだから、
高校生に負けてどうすんのよ。
みんななんて計算してリ責めとかしてんのに、
最初から間違えてどうすんの。
だから、受験も失敗するのよ。
少しは考えなさいよ」
もとこは意地悪く責める。
「ごめんなさい」
もとめは悔しいがそのとおりなんで
うつむくしかなかった。
木太郎はまた下をむいて笑いをこらえる。
「じゃあ、悪いけど、もとめを飛ばして、

くそたくんから始めてくれる」
「はい。では、リス」
「また、リ責めか、じゃあ、リカ」
と
永久は覚えていたとおりに言う。
「リシ」
と
ホウセイも覚えていたとおりに言う。
「リレキショ」
と
木太郎もワンパターンで安全策を行く。
「はい、シリトリ」
おちたも同様だ。
「固いわね。それに記憶力いいわね。みんな」
もとこがにこにこして言う。
「トンネル」
と
アスカも固い。
「ネコ」
と
アユメが言う。
「また、ネですか。ネクタイ」
と
ヒトメがあっさり言う。
「タコ、
ごめん。誰かさんじゃないわよ」
と
レイカは木太郎のつもりで言ったが、
もとめは自分が言われたと思って

顔には出さないがすごくむっとした。

「ピンチのもとめ」

「タですね。タイセイ」
と
チウメが言う。
「どのタイセイ？」
と
もとこが訊くと、
「制度の方です」
「わかったわ。セね。セイケイ」
と
もとこが言うと、
木太郎が先に笑い出し、
その後、永久を除くホウセイたち男子陣が笑い出す。
女子たちはうつむいている。
もとめは何故笑っているか。
理解できない。
「もとめの番だからって笑わないの。
今度はがんばるのよ。
もとめ、
今度間違えたら、
本当におバカよ」
と
もとこの意地悪攻撃が続く。
「ケですよね。ケイケン、ええーまだよ、
ケイケンダン。わー」
と
もとめは頭を抱える。

「あんたねえ。
ケなんて一杯あるのにもう」
と
もとこが言うと、
木太郎が腹を抱えて笑っている。
くそたも蹴りを入れたいが
自分は笑いを抑えるので一杯だった。
「もう3回で終わるなんて、思っても見なかったわ。
それに、
もとめが負けるなんて。
もとめあんたは風呂にでも入って頭をクリーンにしてらっしゃい。
私達はまだゲーム続けるから」
と
もとこはもとめにわざと呆れた顔で言うと、
もとめは
「すいません」
と言うと、逃げるように部屋に戻る。
「ごめんなさいね。もとめはちょっとだけおつむの方が」
と
もとこはそう言って、
右手をパーの形にして、
また、
木太郎たちを笑わせる。
「さあ、今度はこうしましょう。負けた人が抜けて行って、
最後に残った人には私がご褒美をあげるわ。どう」
と
もとこが言うと、
「先生、私は、何時に２０７号室に行けばいいんでしょう?」
と
アユメが質問する。

「そうね。もとめがすぐ負けたから、まだ、時間がたくさんあるからゲームが終わってお風呂に入ってからでいいわよ」

と

もとこがやさしく言った。

「楽しいしりとりと悲惨なもとめ」

もとこと生徒は楽しくしりとりをして遊んだ。
もとめがいなくなったとたん、
なかなかみんな見かけによらず強いので
一回のしりとりもなかなか終わらなかった。

他方、もとめは悲惨だった。
自分も違うしりとりは得意なのだが、
姉のルールになれるだけの柔軟性がなく、
完敗だったけに少しショックを受けたが、
それ以上に生徒たちに完全にバカにされた方が悔しかった。
姉に仕返しをしようと思っていたが、
先に自分が２０７号室行きになってしまい、不安が先行した。

しりとりの方はなんと木太郎とホウセイが最後まで残り、
時間切れで両者が優勝となった。
「ご褒美は何がいい」
もとこがにやけて言うと、
「あの、一晩考えてもいいですか」
と
ホウセイが言うと、
「もちろん、一晩でも一週間でもいいわよ」
と
もとこが笑って答えたので、
「僕もいいですか」

と
木太郎も訊くと、
「あたりまえでしょう」
と
もとこは優しく笑った。
アスカと永久以外は、
完全にもとこに騙されかけていた。
「じゃあ、アユメさん準備して。
そうね、お風呂もまだだから、
これから一時間後に部屋に呼びに行くわ。
朝は七時になったら鍵を開けておくから自由に部屋に戻っていいわよ」
と
もとこは自分の部屋に戻りかけて、
「今日は男子が先に露店風呂でいいわね」
と言うと、
女子達はうなづいた。
「じゃあ、男子全員出たら、
私の部屋に来て、声かけてね」
と
もとこはそう言って部屋に戻ると、
女子たちも各自部屋に戻った。
この日もオオシマの存在は忘れ去られていた。

「２０７号室行きのアユメと呑気な木太郎」

トントン。
「アユメさん、
私、もとこ。準備はいい」
と
もとこがアユメの部屋のドアを叩くと
もう準備をしていたアユメがパジャマ姿で出てきた。
「えーと、もう１１時近いけど、
さっきお話ししたとおり朝は７時までででいいわ。
あとは、さっき言ったとおりね。
それから、非常用のこの無線ビル一応渡しておくわ。
どうしても怖くなったら押しなさい。私が助けにくるからね。
でも、これを使うと減点よ」
「はい。がんばります」
と
アユメは内心怖かったが笑ってそのベルを受け取った。
そして、２０７号室へ入っていった。

もとこは部屋に戻ると、にんまり笑った。
今日はすべて計画とおり、もとめを完全にはめてやった。
もとこが予想していた以上にもとめはもろかった。
これなら、明日の計画もうまく行くに違いないと確信していた。

露店風呂では、
木太郎とホウセイがもとこに何のご褒美をもらおうか相談してい

た。
「コンテストの時のＳＤカードは」
と木太郎が言うと、
「消したことになっているから、無理だろう」
と
ホウセイが答えると
「いや、消去したＳＤカードが欲しいんですと言えばいいんだよ」
と
木太郎が言う。
「そうか、もとこ先生のことだから、
とぼけてくれるかもな。木太郎、見かけによらず、賢いな」
「バカにしてるのか、褒めてるのか」
「両方だよ」
と
ホウセイが言うと、二人で笑い出す。

「明日もゲームやりたいなあ」
と後からくそたが顔を出す。
「僕も」
おちたもにやりと笑っていう。
永久だけはぼんやりしている。
「大丈夫だよ。永久はもう。ケツだしたから」
と
木太郎が冷やかすと、
「いや、油断はできない」
と
永久は真顔で答える。
「じゃあ、ゲーム参加しないのか」
と
くそたが言うと、

「参加はするよ」
と言って少し笑う。
「でもさあ、もとめ先生にはがっかりだよな。整形デブにおバカだもんな」
と
木太郎が鼻をほじりながら笑うと、
「おい、もとこ先生に言いつけるぞ。バレたら、ご褒美なくなるぞ」
と
おちたが脅かしたので、
木太郎は慌てて、浴槽を出ると、つるんと滑って転んだ。

「207号室のアユメと笑うもとこと変態アスカ」

アユメにはあれで充分ね。
明日のもとめのためにとっときましょう。
もとこは自分の部屋でにっこり笑った。

アユメは異臭と何か変な音がするのでよく眠れなかった。
しかし、
アスカもくそたも乗り切ったので、自分も乗り切れると自己暗示をかけた。

露店風呂では、ヒトメ、レイカ、チウメだけでなくアスカも楽しく雑談していた。
例のゲームのせいか、
それまで完全にういていたアスカもヒトメたちの中にとけ込んでいったのである。
「ヒトメ、頼むからおへそ見せてよ」
アスカが言いだす。
「アスカって、なんかとっつきにくかったけど、実は変態だったのねえ」
と
レイカが横から言うと、
「変態でも何でもいいから見せてえ」
と
アスカはヘソを隠す、ヒトメに迫る。
「もとこ先生以上の変態かもね」
チウメも呆れてみている。
「じゃあ、私のヘソ見せるから、交換で」

と
アスカはしつこい。
「いいわよ、あたし、そういう趣味ないわよ」
「見せて、見せて、見せて」
アスカはヒトメの首をくすぐり出した。
「やめてよ。もう、変態。見せるから、くすぐるのはやめて」
ヒトメがついに観念する。
「わーい、早く」
「たいしたことないわよ」
「どれどれ」
と
レイカとチウメも覗き込む。
「うーん、ちょっと臭いわね」
と
レイカが言うと、
「えー、本当」
「冗談よ」
「たしかに、きれいね。肌もきれい」
と
アスカがヒトメを見つめる。
「いやー、その目やめて」
「うそ、冗談」
「冗談じゃないでしょう」
「えへへへ」
と
またアスカはヒトメの首をくすぐり始める。
「こういうのに変態が多いのよね。
これでもとこ先生ともとめ先生がいればもっと面白かったのにねえ」
と

レイカが笑いながらチウメにそっと囁いた。

「ご褒美をもらいに行く木太郎とホウセイ」

結局、アユメは無事に２０７号室での宿泊を乗り切った。
ゲームで疲れたのか意外にすぐ眠れたのだ。

早朝、木太郎とホウセイはもとこの部屋をノックする。
「はい、はい」
「おはようございます。ホウセイです」
「おはようございます。木太郎です」
「開いてるわよ、入りなさい」
木太郎とホウセイが部屋に入るとお香のにおいがした。
もとこは相変わらず、黒い服を着ている。
「ご褒美ね、何に決めた」
「えー、あの今回は持ってきてないんですが、
携帯カメラのＳＤカードが欲しいですけど」
　ホウセイがおそるおそる訊く。
「もうあの画像は消したわよ」
「そんな、ＳＤカード自体が欲しいんです」
「本当？」
「本当です」
「そう」
もとこは考える。
「僕はデジカメごと欲しいんですけど、
もちろん合宿が終わってからでいいんですけど」と
木太郎が突然ホウセイとは打ち合わせ
と違ったことを言う。
「それはいいわよ。合宿終わったら、あげるわよ」
とあっさり言う。

「でも、ＳＤカードは自分で買ってね。
ホウセイくんにあげることにするから」
「えーいいんですか」
「しょうがないじゃない。
デジカメがなければ、ＳＤカードもいらないじゃない」
「パ」
と
木太郎が言いかけると、ホウセイが木太郎の足を踏んだ。
「ありがとうございます。楽しみにしています。では」と
ホウセイが一言余計なことを言う。
「楽しみ？」
「僕の家は木太郎の家と違って、ＳＤカードも買えないんで」
と
ホウセイはごまかすが、
「何でもいいわ。喜んでもらえるなら」
と
もとこは笑っていう。
「では、失礼します」
二人は頭を下げると、もとこの部屋を出ていく。

ホウセイと木太郎はホウセイの部屋に行くと、
「どうだ、俺の機転は」と
木太郎が鼻をほじりながら偉そうに言う。
「さすが、ずる賢い木太郎だ。今回は感心したよ」
「でも、オタクが楽しみになんて余計なこと言うから、
ひやっとしたよ」
「ごめん、うっかり」
嬉しそうなエロガキ二人だった。

「またまたゲーム」

その日は平穏に授業が終わった。
夕食を取った後、また、
もとこがゲームをやることを提案した。
もとめだけが不安だった。
「今度は逆さしりとり。
というより、頭とりね。
例えば、ジゴクと言ったら、クじゃなくて、
ジから始まる言葉を言うの。
もちろん、次にジカンと言ったら、負けよ。
また、昨日みたいに、ゴから始まる言葉を言ったり、
通常のしりとりのようにクから始まる言葉を言ったら、負けよ。
それだけだと、簡単すぎるので、
最初の人が禁止の文字を選べるの例えば、セとかね。
この場合、ジゴクのあとにジンセイと言ったら、負け。
最初の人は頭をうまく使えば結構有利よ。
並び方は昨日と一緒。今回は可愛そうだから、
最初はもとめでいいわよね。
それから、３回負けたら、２０７号室に泊まるのよ。
いーい」
もとこが言うと、みんな頷く。
もとめはもとこがジゴクとかジンセイとかジカンとか
なんとなくイヤな言葉を使ったので、かなり不安に思っていた。
もとめは禁止用語を「る」に自分で設定し、
ショウリと言った後にこのゲームの落とし穴に気づいた。
この逆しりとりは最初の言葉がずっと続くことに。

シのつく言葉は非常に多いので、
あっという間にもとこの番に回ってきてしまった。
「しりとりか、じゃあ、しまね」
もとこが言うと、
「しまって誰か言わなかったでした？」
と
もとめが言うと、
「島根県のシマネですよ」
と
ヒトメがバカにしたように笑っていう。
「7，6，5，4，3」
またもとこが数を数えだす。
焦ったもとめは慌てて、
「えー、しけん」と言ってしまった。
「ブー」
生徒達は大笑いした。もとめは真っ赤な顔になる。
「あんたよく考えなさいよ」
もとこにおでこを指ではじかれる。
「先生、最初なんだから、
最初の文字が少ない言葉に、
それに「ん」かその言葉から連想できる言葉の多いもの中の1文字を
禁止用語にすればいいんですよ」
と
ホウセイが簡単に言うが、
それがかえってもとめにプレッシャーを与えたのだった。
もとめは他の文字を考えていたのだが、
「早く」
と
もとこにせかされて、やってしまった。

「では、りから始めます」
「おー」
「禁止用語はごです」
「ふーん」
「行きます。りんご」
「・・・」

「もとめまたまたバカを晒す」

「あんたね。完全に生徒にバカにされてるわよ。
笑いもでなくなちゃったじゃないの。
どうふざけてもそれはないでしょう」
もとこが怒ったように言うが目は笑っている。
「あのー、動揺しちゃって」
もとめは言い訳する。
「じゃあ、ここでおバカのために休憩しましょう」
もとこが言うと、
「何か飲み物持ってきます」
と
レイカが言うと、
「俺、コーラ」
と
木太郎が鼻をほじりながら偉そうに言うと、
「僕も」
と
おちたが言う。
「コーラ以外の人」
と
レイカが言うと、
他は全員手を挙げる。
「私、ジュース」
と
ヒトメが言うと、
「俺も」

と
くそたが言う。
「他は」
「ジュースでいいわよ」
と
もとこが言うと、
「じゃあ、コーラ二つと他はジュースね」
と
アスカが言って、レイカと二人でキッチンへ行く。
「こういう時にオオシマがいるといいのにねえ。
どこいっちゃたのかしら」
と
もとこが言うと、
「落とし穴に落ちているじゃないですか」
と
アユメが言う。
「もとめと違って、
そんなバカじゃないでしょう。
暇だと思ったのか、
何か忘れ物でもして一回帰ったのかもね」
やっと、
もとこもオオシマの心配始めたように見えた。
「もとめ、何ぼさっとしてるの。
チャンスをあげたんだから、
今のうちに、考えておきなさいよ。
もし、次負けたら、
今日、明日だけじゃなく、
最終日も２０７号室行きよ。
いい、１回くらいは勝ちなさいよ」
「はい」

もとめは、
自信なさそうに小声で答えたのだった。
（続く）

「3日連続の207号室行きか」

もとめは貰ったジュースも飲まずに後悔していた。
今度負けたら最終日も207号室行きよ
という姉の言葉に思わず、同意してしまったからだ。
これがいつものずる賢い姉の手なのだが、
つい、ひっかかってしまう。
とにかく、この回だけは勝たないと、
姉への復讐計画もパーになり、
姉の生徒達からの信頼もゼロになる。
とにかく、一巡しないうちに終わらせるような言葉はないか、
考えまくっていた。

他方、
もとこは余裕しゃくしゃくだった。
今回もとめが負ければ面白いが、
もとめが勝ってもまた明日も明後日も楽しめる。
もとめの焦っている顔だけでも見ても楽しかった。
もとめが整形デブというのは大嘘だが、
もとこともとめが腹違いの姉妹だというのは本当だった。
父の後妻がもとめとその妹もとえの母で、
その義母からは結構いじめられたのでもとめが憎たらしくてしょうがないのだ。

「じゃあ、そろそろ再開しましょう。

いいわね。
そこまでバカだとは思わないけど、
もとめ、念を押すけど、
今回負けたら最終日も２０７号室行きだからね」
と
もとこが言うと、
「２度あることは３度あるってさ、あはは」
と
木太郎が股間を掻きながら笑うと、
「やめろよ。そんなこと言ってると、オタクがそうなるぞ」
と
おちたが木太郎の頭をはたくと、
「俺には三度はありません」
と
木太郎が笑って、今度は鼻をほじる。
「もうその辺にしなさい。
それより、いい、もとめ、生徒にバカにされてるんだから、
悔しいと思って今回くらいは勝ちなさいよ」
もとこはプレッシャーを賭けるような言い方をした。
（続く）

「3度目の正直なるか、もとめ」

もとめは自分なりに考え、
ある程度、自信を持った選択をしたつもりであった。
「はい。では、いきます。
ルから始めて、禁止ワードは「ン」で行きます」
「少しは考えたわね」
「えー、では、ルビー」
「えへへ、ルス」くそたがすぐ答える。
永久はわざと困ったフリをして、
カウントが始まったとたん、
「ルー」と答えた。
「何それだけ？」
と
ヒトメが訊くと、
「あんた黙ってなさい、
多分芸能人の名前想像してんでしょうけど、バカ丸出しよ」
と
アユメがヒトメのあたまをこずく。
「あれ、違ったんだ」と
言ってヒトメが舌を出す。

「えー、僕ですね、えー、じゃあ、ルッコラ」
と
ホウセイが言うと
「こいつ生意気にイタリアンか」と
木太郎が鼻をほじりながら言う。
「じゃあ、えへへへへ、もうだしちゃおう。

ルリカケスだ、どうだ」
と
木太郎が余裕で言うと
「そんなの定番だよ。珍しくもないよ」と
ホウセイが木太郎を見てにやりと笑う。
意外にルについては、みんな余裕があったので、
もとめは少し焦ってきた。
自分が考えていたのは
「ン」がついている言葉ばかりだったからだ。

「ルの恐怖」

「木太郎、ホウセイの言うとおり、
定番過ぎるよ、まだ甘いな。
　では、ホウセイがイタリアンなら、
僕は画家で行きましょう、ルノワール、
あはは、どうだ」
　おちたもにやりと笑ってクリアする。
「下の名前だけど、
高名な画家だからＯＫにしましょう」
　もとこが言う。
「そう。私はねえ、
こう見えても子供の頃かっこいいと思ってた、
ルーズソックス、らしくないでしょ」
　アスカも楽しんで言う。
「うーん、らしくない。
黒のストッキングて感じねえ。
アスカは。じゃあ、私はねえ、
これで苦労したのよ。ルート」
と
　アユメが笑っていう。
　もとめはみんな余裕を持って
楽しんで言葉を選んでいるので危ないと思ってきた。
　チャンスはこの中で
一番バカなヒトメしかないと思って、
祈るようにヒトメを見つめる。
「もとめ先生なんで、私の顔じっと見てるのよ。
バカだと思ってるんでしょう。うーん」

「7，6，5，4，3」

とカウントが迫ると、

「でも、残念でした。えへへ、月の女神よ、そうルーナ、」

と

ヒトメが勝ち誇ったようにもとめの方を見て笑った。

（続く）

「ルを楽しむ」

今度はレイカの番だ。
「高名な人物で外国人だったら、
下の名前だけでもいいんですよね。
関係ないですけど、ブッシュとか」
「それはいいわよ。
でも、太郎はだめよ」
と
もとこが言うと、
ヒトメ以外はみんな大笑いする。
「先生、それ、
ルから始まらないじゃないですか」
と
ヒトメがもとこのジョークがまったくわからず、
とぼけたことを言う。
「だから、あんたは黙ってなさい。
せっかく、もとめ先生に一歩リードしたところが、
今のでイーブンよ」
と
アユメがヒトメのおでこを指で
ピーンとはたくとみんな大笑いする。
「えー、何で後で教えて」
と
ヒトメがアユメに小声で訊く。
「じゃあ、私はアメリカで行きます。ルーズベルト」
と
レイカが違う人物を考えていたようだが、

ブッシュのヒントを得て、言いかえたようだ。
「あら、ヒント教えちゃったわねえ。
ごめんなさい。もとめ」
もとこがそう笑って言った後、
「もとめ、ルは失敗だったかもねえ」と
もとめの方を見る。
「じゃあ、私は、そうですね。
仲の良い友達が欲しいんで、ルームメイト」
チウメも余裕で答える。
「あら、私でもう1周ね。それからチウメさん、
ヒントありがとう」
と笑って言うと、
もとこはチウメの方を見て頭をわざとらしく下げる。
「私は、
将来お金持ちと結婚してこういう人を雇いたいなあ、
ということで、じゃあ、ルームメイド」
と
もとこがゆっくり言うと、
生徒達は隣でもとめが青ざめているので、
下を向いて笑いをこらえていた。

「ルの恐怖2」

もとめは完全にパニくっていた。
実は答えはすぐそこにあるのに。
ルクセンブルグもルスバンデンワもルバンもだめ、
あー、しまった、
禁止用語をンにしなければよかった。
もとめは後悔していた。
「7，6，5，4，3」
もとこではなく、
生徒たちが今度はカウントを始める。
「2，1，ブー」
生徒達は大笑いする。
「まいりました」
もとめは泣きそうな顔でうつむく。
「先生、
ルームがあったじゃないですか」
木太郎がからかうように
鼻をほじりながら鼻くそをおちたの顔につけると、
「きたねえな」
と
おちたがハンカチで顔を拭くと、
みんな大笑いする。
「あのー、
今日・明日はしょうがないとして、
最終日もでは気の毒だと思いますが」
と
チウメが小声で言うと、

「そうだね。
これじゃ、先生可愛そうだよ。
木太郎の鼻くそで勘弁してやろうよ。
嘘、冗談、へへへ。
何か次のゲームがつまらなくなるから、
チウメちゃんの意見に賛成」
と
くそたもチウメに同意すると
「わかったわ。
もとめ。
くそたくんとチウメさんに感謝するのよ。
最終日のことは、なしにしてあげる。
その代わり、
今日２０７号室でしりとりの勉強をするのよ。
いいわね」
と
もとこが言うと、
みんな笑って拍手する。
「ありがとうございます」
もとめはうつむきながら、
小声でお礼を言う。
「鼻くそはどうしましょう」
と
木太郎がふざけて言うと、
「もとめ、顔を出しなさい」
「えっ」
「冗談よ」
と
もとこが意地悪そうに笑う。
「先生、しりとりに勝ちたいなら、

最低３０は単語覚えておかなきゃ、
いや、１１人いるから３４はね」
と
木太郎が今度は股間を掻きながら
偉そうに言う。
「まあ、そこまではおおげさだけど、
２３くらいは覚えておかないとね」
と
もとこは笑う。
「はい、わかりました」
もとめはそう言って頷くしかなかった。
（続く）

「お漏らし疑惑のもとめと笑うもとこ」

もとめは結局その後、
２０７号室に泊まらされた。
そして、
異様なニオイと変な音で一睡もできなかった。
しかも、
怖いのでトイレも行けず、
苦しいし、
それまでのことを考えると悔しくて、
ただただ泣いていたのだった。

朝７時になると、
もとこが来て
「あら、何その顔、
寝られなかったの。
そんな顔生徒に見せられないじゃない。
それに、なんか臭うわね。
おしっこでももらしたか、
おしっこ我慢して汗から出てきたのかしら。
とにかく、
こそっと部屋に戻って、
シャワーを浴びて休みなさい。
今日は教室に来なくていいし、
昼食の準備もいいから、
夕食の準備だけしなさい」
と笑って言ったので、

もとめは身体のニオイを自分で嗅いだ後、
逃げるように自分の部屋に戻った。

「バカな子」
もとこはそう呟くと薄ら笑いを浮かべた後、
２０７号室に入って行った。

「もとめ先生、
おしっこ漏らしたみたいよ」
早起きして、
レイカの部屋に遊びに来ていたヒトメが
中途半端に盗み聴きして、
そう言いふらしたので、
もとめの話しは
あっという間に広まってしまった。

その日の授業も普通の授業だった。
そして、夕方になり授業を終えると、
もとこは、
「えー、
今日も、
最終日の２０７号室行きを賭けて、
ゲームしましょう。
あと、
優勝者にはご褒美あげるわ」
とにこにこしながらそう言うと、
永久を除き、

生徒たちは大喜びしました。
永久だけはまだ不安だった。
「そうそう、
今日はしりとりじゃないわよ。
内容は後のお楽しみね」

「夕食後の新ゲーム」

もとめは生徒の何かバカにした視線を感じながらも、
夕食を作ったが凄く不安だった。
多分、この後、ゲームで、
その後、また、
２０７号室に泊まることが決まっていたからだ。
もとこは女子生徒に洗い物の手伝いを指示すると、
ひとりでにやけていた。
「先生、どうかしたんですか」
ホウセイが声をかけると、
「昨日の思い出し笑いよ」
と言って、
もとこは大笑いした。

もとめと女子生徒が戻ると
「ああ、
今日もオオシマ、
帰って来なかったわね。
もう帰ってこなくていいわよね。
それじゃ、
今回のゲームのルールの説明よ。
しりとりプラス言葉の変換ゲームよ。
まず、私はの次にです。
で終わる言葉を最初の人は考えるの。
しかし、
「で」は「だ」に返還しないといけないの。

例えば、
私はバカですなら、
私はバカだす。
というの。
ちょっとおかしいでしょう。
そしたら、
次の人は、
私はの次に、
カから始まる言葉をいれて「だす」を言うの。
簡単なようだけど、難しいのよ。
それから、
中に入る言葉はンが最後でも駄目だし、
でがついたら、
でをだに変換して言わないと負け。
わかった？」
もとこはにやにやしながら、
ルールを説明した。

「新ゲームとヤンキーもとこ」

ルールを聞いたとたん、
生徒達はまた輪になって座る。
順番はしりとりと同じだった。
すなわち、
もとこのとなりにもとめ、
くそた、永久、ホウセイ、木太郎、
おちた、アスカ、アユメ、
ヒトメ、レイカ、チウメの順に輪になった。
そのとき、
木太郎が手を挙げる。
「はい、木太郎くん。
何か質問あるの？」
「今度のゲームは、
例えば、私はスズキだす。
というのもいいんですよね。
また、
私はスズキキタロウだすでもいいんですよね」
「そうね。
名前とか氏名とかも原則としてありにしましょうか。
でも、
疑わしい氏名は多数決にしましょうね」
「私はハナクソコだす、
とかですか」
と
木太郎がわざと鼻をほじりながら、
くそたの方を見て言うと、

「クソタがあるんだから、
クソコもいいじゃないか」
と
おちたも木太郎と同じように、
くそたをバカにするような言い方をすると
「てめえら、
俺の名をバカにしてるなあ。
先生は多数決と言ったじぇねえか」
と
くそたは怒鳴ると、
おちたにいきなり蹴りを入れた後、
木太郎の頭を思いきりはたく。
「いてえな、このくそ野郎」
と
木太郎が立ち上がったとき、
「あんたら喧嘩するならさっさと帰んな」
と
もとこが
いつもと違うヤンキー言葉で3人を怒鳴りつけると、
3人とも驚いたようにうつむく。
「やっぱり、こわー」
と
永久が小声でつぶやく。
すると、
もとめがおそるおそる手を挙げた。
「あんた何?」
「いえ、姉さん、
順番を逆にしてくれないかと・・・」と
もとめが小声で言いかけると、
「あら、私の次が怖いの?

いいわよ。
でも、
順番変えてもどうせ同じでしょ」
と
もとこは
さっきまでの鬼のような顔を笑顔に変える
とあっさり了解する。
「はい、チェンジ」
もとこに促されて、
もとめは立ち上がるとチウメの隣に座り直す。
「じゃあ、
姉さん早速私からでいい？」
と
もとめが言うと、
「あら、あんたまだ元気ね。
いいわよ。
どうぞ、どうぞ」
と
もとこはバカにしたように笑う。
「では、早速行きまーす。
私はタコだす」
と
いきなり
もとめが笑わせるようなことを言ったので、
みんな笑った。
「あははは、
あんたにぴったりね。
そう、いいじゃない。
じゃあ、私はコネコです、
あっ」

油断したのか、
いきなり、
もとこがしくじった。

「新ゲームの恐怖」

「油断したわ。
あんたも少しは賢くなったじゃない。
まあ、いいハンデね」
もとこは内心ムカついていたが、
余裕のあるフリをしてにやりと笑う。
「じゃあ、いくわよ。
私はもとめだす。
あはは」
「めか、
俺はめだかだす」
「ブー」
「バーカ」
木太郎が腹を抱えて笑う。
「何でだよ、この野郎」
くそたがまた怒鳴る。
「私はでしょう、
く・そ・た・く・ん、
次、怒鳴ったら覚悟は、いーい」
もとめの言葉自体は優しいが、
目は笑ってない。
「あー、そうでした。すまん」
「すまんで済んだら、
警察いらねえよ」
木太郎がまたチャカす。
「き・た・ろ・う・く・ん、
あんたまだわかってねえのかよ」

ともとこが凄むと、
「すいません」
と木太郎が頭を下げたところで、
おちたは
「す」
と言いかけたが、
もとこが睨みつけたので、
うつむく。
「あははは、1敗二人ということで、
行かせてもらいます。
私はパンダだす」
くそたは
さすがにもとこが怖くなり笑ってごまかすが、
顔は少しひきつっていた。
「私はダチョウです、あー」
と永久もひっかかる。
「バー」
と木太郎は言いかけたところで自発的に口を閉ざす。
「意外に難しいでしょう」
と機嫌が少しよくなったのか、
もとこが笑って言う。
「私はオカマだす」
と永久がもとめの手をつかおうとしたが、
誰も笑わない。
「私はマネキンだす、あー」
とあのホウセイまで失敗する。
「ねー、難しいでしょう。
でも、マネキンって悪趣味ね」
ともとこの機嫌はよくなっていった。

「新ゲームの恐怖2」

「えー、私はコウコウセイだす」
と
ホウセイが赤い顔をして言う。
「イか、そうだ、
私はイカだす、あはは」
と
木太郎は笑いかけたが、
もとこが睨んだのでそこでやめた。
「私はカニだす」
おちたは無難にこなす。
「ニね。
私はニンゲンだす。
あー、やちゃったあー」
アスカはだすに気をとられたのか、
頭を抱える。
「最後がだすだから、
以外にンのつく言葉いっちゃうのよねえ」
と
もとこの機嫌はさらによくなる。
「私はふつうだす、ふー」
アスカはすぐに立ち直る。
「私はウン、
あーごめんなさい」
アユメが顔を真っ赤にしてうつむく。
木太郎が
「可愛い顔してウン」

と突っ込もうとしたが、
もとこがぎょろと
睨んだので思わずうつむいた。
「すいません。
私としたことが。
いえ、何でもないです。
えー、行きます。
私はイイコだす」
アユメの顔はまだ真っ赤だが、
どうにかクリアした。
次に
「私はコタツだす」
と
ヒトメが言うと、
木太郎がおそるおそる手をあげる。
「ありえないというか？
おかしいのですが・・・」
と
小声で言うと、
「でも、
タコもしゃべれないでしょう」
と
ヒトメも小声で反論した。

「新ゲームの恐怖3」

「くだらないことは大声で言って、
大事なことは小声。
まあ、そんなことはいいわ。
ありえないというよりそれはおかしいわねえ。
なんというのかなあ。
意味がわかるようじゃないと駄目じゃないのかな。
そう、こういうときは、多数決ね」
と
もとこが言って、
「駄目だと思う人？」
と訊くと、
永久とヒトメ以外が手を挙げる。
「残念ね。
たしかに、
タコがしゃべることはありえないけど、
コタツはおかしいわね。
でも、
若いのに、
何でコタツなんか選んだの。
ううん、
そんなことどうでもいいわ。
余計、
このゲームややこしくなったけど、
その方が面白いわね。
そう、そう、
さっきのマネキンも駄目よね」

と
もとこが言うと、
「ンがつくから駄目ですよ」
と
レイカが言うと、
「そういうことじゃなくて、
生き物じゃないからということですよね」
と
アユメが言った後、
「人形はどうなのかなあ」
「しゃべる人形もいるからいいんじゃないの。
擬人化できるものはいいんじゃないかなあ」
と
ホウセイが言う。
「擬人化ね。そうしましょう、
とにかく意味がわかることね」
と
もとこが言うとみんな頷く。
「あー、なんとなくわかりました。
そういうことだすね。
あー違う、違う」
ヒトメの言葉に、
木太郎は必死に笑いをこらえる。
ヒトメはしばらく考えて
「私はオカメだす」
と言い直す。
しかし、
誰も笑わない。
「えー、私はメイドだす」
レイカはうまく切り抜ける。

「ド？えー、ドは、そうだ！
私はドイツジンだす、あー」
と
チウメもミスる。
「ねえ、
焦るとンで終わるのがいけないことを
どうしても忘れちゃでしょう。
ねえ、
本当、難しいでしょう」
もとこは、
またくどく難しいと言ったが、
その機嫌はますますよくなる。
「えー、行きます。
私はヒトだす」
チウメもどうにか次はクリアする。
そして、
次は注目のもとめの番だった。

「新ゲームの恐怖４」

みんなはもとめに注目した。
また、
やらかすなという顔で。
しかし、
「私はトンビだす、
これはＯＫよね」
ともとこの方を見てほっとしたような表情をしやのだった。
「まあね。
ビかあ。
ビね。
そう、私はビジンだすなんて。
あっ、また、やっちゃた」
ともとこが自分で自分の頭をはたく。
「姉さん、リーチね」
ともとめが今度はにやっと笑ったので、
また、
もとこは不機嫌になって、
「たまたまよ。
あんた二度も負けてるくせに、
生意気ね。
あんたにぴったりだからトンマにすれば良かったわ」
ともとめを睨みつけた。
「まあ、いいハンデよ。
トンマ相手にはねえ。
じゃあ、私はビリだす。
今の私よ」

ともとこはもとめの挑発に乗らず、
頭を切り換える。
「リ？私はリスだす」
くそたがうまくクリアしたが、
「くそたがリスかよ」
と木太郎が鼻をほじりながらそう言いかけると、
もとこがまた木太郎をじろっと睨む。
隣のおちたが
「またもとこ先生の機嫌悪くなったから、
もうしゃべるなよ、
怒ると怖そうだから今度こそ覚悟しろよな」
とおちたが脅かすと木太郎はうつむいた。
くそたも、
もとこが怖いのか木太郎を相手にしない。
「えー、では、私はスリだす」
と永久も無事クリアする。
「また、リか？あっ、私はリカだす」とホウセイが言うと、
「男なのに、女の名前でもいいんですか」
とヒトメが訊く。
「それはいいと思うけど、
ホウセイくんはさっきマネキンと言ってみたりで
オカマか変態かもしれないしね」
ともとこが言うとみんな笑って頷く。
「そんな先生ひどい」
ホウセイが苦笑いする。
「えーでは、私はカイチョウだす」
と
木太郎もうまく言う。
「どっちの？」
と

おちたが訊くと
「社長の上に決まってんだろう」
と
木太郎は乱暴な言い方をしたが、
もとこの視線に気づき、また、うつむいた。
「そっちね」
「じゃあ、私はウジムシだす」
と
おちたが気持ち悪いことを言うが、
誰もが無視する。
生徒たちのほとんどが、
このゲームは集中力が大事なことに気づいたので、
言葉尻に注意して
あまり内容に関心をもたないようにしていた。

「新ゲームの恐怖5」

「私はシラトリレイコだす」
アスカがあっさりとクリアする。
女生徒は今度はひっかからず、
次々にクリアする。
今度はまたもとめの番だ。
「カね。私はカビだす」
「ブー」
と木太郎が言うと、
「カビは生きているのよ」
ともとめが言うと、
「じゃあ、多数決で、駄目だと思う人」
ともとこが訊くと、全員手を挙げた。
「はい、そういうこと。
あまり調子に乗るからよ。
カバなら正解なのにね。
でも、
あんたその逆だもんね」
もとこはイヤミたらしく、そう言って笑う。
「どうせ、バカですよ。
じゃあ、お言葉どおり、
私はあほだす」
ともとめは言い直すが誰も笑わない。
「ホね。そうね、私はホタルだす」
ともとこがもとめの方を見ながら楽勝よ
といった顔つきでクリアする。

「私はルミコだす」
くそたが言うと、
「あなたもオカマなの」
と機嫌が直ったのか、
もとこが笑うと、
「俺の母ちゃんの名前だす、あー」
とくそたもだす癖がついてしまった。
結局、
生徒はまたどうにか全員クリアして、
また、
もとめの番になった。
「また、カね。」
「カビは駄目よ。
カビは、
あと、
カバももう出たからね」
ともとこが挑発的に笑った。

「新ゲームの恐怖６」

「カでしたよね。
えー、では、私はカメだす」
もとめはどうにかクリアする。
「ドン亀ね。メか。私はメグミだす」
と
もとこも軽くクリアする。
さすがに、
このゲームに慣れたのか。
誰も躓かない。
もとこが一巡後、
クリアした段階で、
「ねえ、もっとルール厳しくしない」
と言うと、
みんな頷く。
「私はを、
おらは、に変えて、
最後はだすを、
ですに、
変えるの。
さらに、
中の言葉は逆しりとりにするの。
これだと、凄く難しいわよ」
と
もとこが言うと、
「賛成」
と

木太郎がもとこに媚びを売るように手を挙げ、
他の生徒もつられるよに手を挙げる。
「じゃあ、決定、
くそたくんからだけど大丈夫？」
もとこがわざと優しく言う。
「一回練習させてください。
おらはオトコです。
で、大丈夫？」
「ＯＫ。すぐできたじゃない」
「じゃあ、始め！」
「じゃあ、無難に、
おらはオトコです」
「オだよな。
うん、おらはオンナです」
永久はすぐクリアする。
「やーい、オカ・・・」
と
木太郎が言いかけてすぐ黙り込んだ。
「木太郎ありがとう。
おらはオカマです」
と
ホウセイが言うと、
「ほら、やっぱりホウセイくん、
オカマじゃない」
もとこは機嫌がよく冷やかす。
逆しりとりは、
もとめが苦手なことをよく知っていたからだ。
他方、
そんなもとこにからかわれて、
「そんな」

と

ホウセイは意外にショックを受けている。

結局、
生徒は次々クリアして、
チウメが
「おらはオヤジです」
と軽くクリアして、
もとめの番になる。
「ジじゃなくて、オよね。
えー、おらはオクサマだす。
あー」
と
もとめはやっぱりひっかかった。
「これで先生二人ともリーチですねえ」
と
ヒトメが言った。
（続く）

「新ゲームの恐怖7」

「あんた、やっぱりだめねえ。
もうハンデはなくなったわよ」
もとこが挑発的に言うと負けずにもとめが、
「これで5分よ。
今度こそ、勝つわよ」
と言い返す。
「いいわよ。どうぞ、
がんばって、はい、あんたよ」
「えー、おらはるりこです。
いいわよね」
「また、る攻め、懲りているクセに」
「今度は違うわよ。
駄目な言葉は多いわよ」
「そう、じゃあ、おらはルミです、
はい、クリア」
と
もとこはもとめをバカにしたように笑う。
「へへへ、
おらはルイ14セイです。
太陽王だよ」
くそたが知ったかぶりでいばる。
「ははあ、
じゃあ、おらはルイ13世です」
と
永久も簡単に言う。

「この子たちをなめたら駄目よ」
と
もとこは笑う。
「じゃあ、おらはルイ１５セイです」
と
ホウセイも続く。
「しょうがないなあ。
おらはルイ１６セイです」
と
木太郎も続く。
「えー、僕はせこくありませんから、
では、
おらはルパン３セイです」
と
おちたが偉そうに言うと、
「どこがだよ」
「それありかよ」
「まあ、まあ、
有名なアニメだからこれはＯＫよ」
もとこは機嫌がいいので怒らず優しくいう。
かえって、
それが不気味で木太郎もくそたも黙り込む。
「じゃあ、
おらはルミコです。
さっきのルミですし、
くそたくんのはもうクリアされてますよね」
と
アスカが言う。
「おらはルーズベルトです」
と

アユメが言う。
「ずるい、アユメ」
と
レイカが言うが、
「早いもん勝ちよ」
と
もとこが笑っていう。
「おらはルナです」
と
ヒトメが笑顔で言う。
「おらはルーズです」
と
レイカが言うと、
「それありですか」
と
おちたが言うと、
「時間にルーズとか言うから、
いいんじゃないの」
と
アスカが言うと、おちた以外頷く。
「あら、もうすぐもとめねえ」
と
もとこはにやりと笑う。
「おらはルカです」
と
チウメもあっさりクリアする。
「えー」
と
もとめは明かに動揺していた。
（続く）

「新ゲームの恐怖8」

「えー、これはどうかなあ。
よーし、おらはルーオオシバです」
と
もとめが首を傾げながら言う。
「これありなの」
「まったく問題なし」
「ダメよ」
「ありあり」
「濃すぎるわよ」
「そういう問題じゃないだろう」
何故か、まっぷたつに意見が別れる。
「じゃあ、多数決にしましょう」
と
もとこが言うと、
生徒は5対5にやはりまっぷたつに意見が別れた。
「あー」
と
もとめがうなだれる。
もとこはそのとき考えた。

次の私は大丈夫だけど、
生徒もそろそろやばい。
しかし、
ここで終わらせては何かあっけなく、
つまらない。

もう少し、困らせたい。
何かないか。

もとこが悩んでいると、
「先生も微妙ですか」
と
レイカがタイミングよく言ったので、
もとこ自身は実はありだと思っていたが、
最初に異議を唱えたアユメを例にだすことにして
「アユメさんが最初に異議を唱えたように、
本来はアウトでしょう。
しかし、
これだけ意見が割れたので、
もとめに復活のチャンスを
もう一回与えたいと思いますがいかがですか」
とずる賢い言い方をすると、
「もとこ先生の寛大な裁定に賛成でーす」
木太郎がまた媚びを売るような言い方をして手を挙げ、
みんな拍手する。
「じゃあ、みなさん、
どういうチャンスを与えましょうか」
もとこは笑って言った。

「恐怖のチャンスゲーム」

「本来だったら、
もうアウトだったんだから、
厳しくしないとなあ」
と
木太郎が
鼻をほじりながら偉そうに言うと、
「まあ、そうだなあ」
ホウセイも同意する。
「オタクら、
二人は
実はさっきセーフの手をあげていたクセに」
と
永久は言いかけたが、
もとこが怖かったので
「でも、それは別にして、
木太郎の話は筋は通っている」
と
もとこの機嫌をうかがう言い方に変える。
「そうよ。
本当はアウトだったんだから
、厳しくしない」
と
アスカが言うと、
「それはそうね」
と
アユメも頷いたので、

「じゃあ、
厳しくするということでみんないいのね」
と
もとこが言うと、
生徒全員頷く。
すると、
チウメが手を挙げる。
「どうぞ」
「厳しくするのはしょうがないと思いますが、
明日の話しなので、
明日まで、
みんなでそれぞれ考えておき、
明日、
多数決で決めるというのはどうでしょう」
と
チウメが珍しく自分の意見を言う。
「そうね」
と
もとこが腕を組んで考え出すと、
他の生徒も
もとこの機嫌をうかがうように考え始めた。

「ご機嫌なもとこ」

逆しりとりなら生徒は強いから、
ここで一気に傷めつけられる。
でも、そうしたら、明日の楽しみがなくなる。
楽しみは明日にとっておこう。

と

もとこは考えた。

そこで、
もとこが、
「せっかく
おとなしいチウメさんが意見を言ったのですから、
続きは明日にしましょう」
と言うと、
「そうですよ。
楽しみは明日に」
と
木太郎が調子よく言うと、
みな頷いた。
「じゃあ、お風呂にしましょうか」
と
もとこが言って、
「今日は女子が露店風呂先でいいよわね」
と
ヒトメが言ったので、

「そうだね、出たら誰か呼んでよ。
多分、くそたの部屋にいるから」
と
永久が他の男子の意見も聞かず、そう答えたのだった。
「じゃあ、私も仲間に入れてね」
と
もとこも、
露店風呂に入りたそうにそう言うと、
「へへへ、コンテストやらないの」
と
木太郎が鼻をほじりながら言うと、
もとこが笑ったので、
「私最初はメンバーに入ってないもんですから、
また、
背中コンテストやりませんか」
と
アスカがもとこの機嫌をとるように言うと、
「そうね。
審査は明日にして、やりましょうか。
ちょっと私にいい考えあるの」
と
もとこは機嫌よさそうに、
「もとめ、
あんたも付き合いなさいね。
２０７号室はその後でいいから」
と
もとめに命令するように言ったので、
「はい、ありがとうございます」
と
もとめは頭を下げた。

「審査は明日なんですか」
と
今度はホウセイがにやけた顔で言った。
「そうよ。
だから、男子とは今日はこれで解散。
じゃあ、
女子陣は各自用意して露店風呂に入りましょう」
と
もとこはにやりと笑って、
自分の部屋に戻って行った。

木太郎とホウセイはそれを聞くと、
笑いをこらえながら、
「俺たち、一回部屋戻る。
みんなはくそたの部屋に行っていてくれ。
女子が出てから一緒に露店風呂行こう」
と言うと、
二人で走るように部屋の方へ消えて行った。
「何だ、あの二人、にやけて」
と
おちたがつぶやいた。

「にやける木太郎とホウセイ」

「アスカちゃん、さまさまだなあ」

と

ホウセイの部屋に入って扉を閉めると、
木太郎とホウセイは気持ち悪くも抱き合った。
「審査が明日というのも楽しみだなあ」
「ＳＤカード３枚持ってるといいなあ」
「持ってるよ。
多分、俺たちついてるなあ」
「木太郎、
今日みたいにもとこ先生の機嫌、
損なうなよ。
もとこ先生、
根はヤンキーみたいだからなあ」
「わかったよ。
俺も途中で気づいたから態度変わっただろう」
「まあ、そうだけど、オタクはつい口が出るから、

まあ、
くそたもおちたもわかったようだし、
永久は最初からびびってるから、
明日は木太郎さえ、ヘマしなければ、
あのカードは俺たちの物だぞ、いいか、わかったな」
「ホウセイ、しつこいよ。
わかったって後１日我慢するよ」

「それにしても、もとめ先生は頭悪いよなあ。
ヒトメの半分くらいの脳しかないんじゃないか」
「オタクも口を慎めよ。
その一言でカードがパーになるかもよ。
姉妹は姉妹だから」
「わかった。あと1日、がんばろう」
「何がんばんの？」
「わーびっくりしたー、永久！
なんだよ、聞いてたのかよ」
「くそたとおちたには内緒だぞ。
あの二人は危ないからな」
「木太郎ほどじゃないと思うけど、
あはは、だから、後で俺にもね」
「わかったよ。
口止め料だぞ。
だから、とにかく、しゃべるなよ。
バレたら、すべてパーだからなあ」
「だったら、
ちゃんと部屋の鍵閉めておけよ」
木太郎、ホウセイ、永久は
3人で大笑いした。

「撮影終了ともとこの悪巧み」

「先生、
明日までにちゃんと選ばせてね」
「わかったわよ、アスカさん」
「そうだ、男子に声かけて来よう」
「今日のは内緒よ」
「わかってます、
ヒトメも付き合ってよ。
くそたくんの部屋に行くの」
とアスカがすっかりヒトメになついている。
「いいけど、べたべたしないでよ」
とヒトメがアスカの手を払いのける。
「いいじゃない」
「じゃあ、よろしくね」
女子たちは解散する。

「もとめ、
３０分したら部屋に呼びに行くから」
そう一方的に言って、
もとこは部屋に戻る。
もとめも憂鬱そうに部屋に戻る。

もとこは部屋に帰ると楽しくてしょうがなかった。

今日の写真修正も楽しみだし、

明日の審査結果も楽しみだ。
もちろん、
今日のもとめいじめも、
明日のゲームも楽しみだ。
実はもとこはノートパソコンを持ってきていた。
だから、
明日は面白いことをやってやろうと考えていた。
それとは、
別に今日のもとめいじめもどうしようか考えていた。
とっておきのいじめを今日やるか、
明日も２０７号室に泊めるよう
うまくゲームかコンテストを仕組んで明日最後にやるか？

もとこはそうにやにやしながら考えていた。

「写真いじりと呑気な女生徒たち」

「ああ、オオシマ！
今日実行するのはやめにするわ。
実行は明日。
だから、
今日は明日のためにゆっくり休んでいいわよ。
じゃあ、おやすみ」
もとこは楽しみは最後にということにして、
明日、
確実に２０７号室にもとめを泊まらせることを考え、
明日の深夜もとめをやっつけることに決めた。
そして、
もとこは撮影した写真をパソコンに取り込む
とにやにやしながら修正をはじめた。

ヒトメの部屋では女生徒たちが集まって楽しそうに
雑談をしていた。
「ねえ、ヒトメ、
明日コンテンスとで誰が優勝すると思う？」
と
別人のようになったアスカがヒトメにベタベタしながら、
猫のように甘えて言う。
「やめてよ！もーう」
と
ヒトメはそう言いつつも少しづつ慣れてきたみたいだ。
「最初がチウメでしょう。

次が私、今度はへへへ」
と
ヒトメはみんなの顔を見ながらあえて言わない。
「また、
自分だと思ってるでしょう？あんた」
アユメが言うと、
「バレたか」
と
ヒトメが笑う。
「でも、あれはヘソだからねえ」
と
アユメがバカにしたようにいう。
「私はやっぱりアスカかなあ。
今度は、
審査前に写真を選べるからねえ。
そうしたら、
あの長い足のキレイなアスカじゃないかあ」
と
レイカが言う。
「おしりならチウメかなあ」
と
ヒトメが言うと、
「やーよ」
と
チウメが言うと、
「私もそれにしようかなあ」
と
アユメが言う。
「えー」
と

チウメが言うと、
「Tバック着てると思えばいいんだから、
それに私将来モデルになりたいの」
と
アユメが言うと、
レイカとヒトメが何か考えている。
「まさか、二人も」
と
アスカが言うと、
「えっへへ」
と
二人とも笑う。
「ねえ、
優勝者には何か男子からプレゼントさせようよ」
と
ヒトメが言うと、
「それいい」
と
アスカが言って、
「じゃあ、
アユメは男子をおだてるのうまそうだから、
うまく持っていってよ」
と
レイカが言って、
「豚もおだてりゃ木にの登るね。
わかったわ。
任しておいて」
と
アユメが笑った。

「平穏な合宿？」

もとめは２０７号室では、前日から何もなく終わったので、ほっとしていた。

そして、授業は不気味なくらいに普段どおり始まった。

もとこの最終授業が終わると生徒たちは拍手した。

「ありがとう！

最終試験は明日やりますが、

今日の夜は楽しくね！」

「料理の方は最終日なので

私達ががんばっておいしいの作ります」

ヒトメが調子よく言うと女子陣は頷くと

男子が拍手する。

すると、

アユメが手を挙げて、

「今日のコンテストで優勝者には

優しくて男らしい男子から

プレゼントくれると嬉しいんですけど」

とにっこりと笑いながら男子陣を見回して言うと、

「アユメちゃんの頼みだから、

俺はわかった。オタクらはどうする」

と

くそたが言うと

他の４人も

「俺も」

「僕も」とすぐ頷く。
「わーい、楽しみだなあ。
いいもの頂戴よ」
「どうせなら、まとめた方がいいよなあ、
オタクら俺の部屋に来い、審査の前に賞品決めようぜ」
と
くそたが言うと、
他の４人男子は頷く。
「先生が優勝してもくれるのよねえ」と
もとこが言うと、
「もちろんです」
木太郎がすぐ言う。
「木太郎くんは大金持ちだから期待してるわよ」
と
もとこが言うと、
女子たちも拍手をす。
すると、
木太郎は股間を掻きながら頭も掻く。
「じゃあ、一旦解散」
と
もとこが言うと、
もとこともとめは
自分の部屋に
女子はキッチンへ、
男子はくそたの部屋に
それぞれ別れていった。

「くそたの部屋と景品選び」

「くそたがアユメに乗せられて余計なこと言うから、
何かプレゼントしなきゃいけなくなっちゃたじゃないか、
木太郎は金持っているからいいけど、俺金欠だぞ」
と
おちたが愚痴を言う。
「いいじゃないか。
あれだけ楽しませてくれたんだから」
と
ホウセイがにやけて言うと、
「おちた、心配するな。
金は俺が出してやるよ」
と
木太郎が、
鼻をほじりながらそう言うと、
「本当？ありがとう！
さすが3人衆のホコリ！
友の中の友だ」
と
おちたは
調子よくハナクソのついた木太郎の手に握手する。
「どうせなら、ドーンと行こうぜ。
世界一周とか」
と
くそたがバカなことを言う。
「高校生が一人で世界一周してどうすんだよ。
それにいくら木太郎でもそんな金はないだろうが」

と
永久はクールに言う。
「商品券がいい。
金でもいいが、
女はそういうのを喜ぶ」
と
ホウセイが言うと、
「そ、そうだな。
で、いくらにする」
と
金のないおちたが言う。
「俺１万だすよ。
母ちゃんから
この合宿の食費でもらったのが３万だから」
と
くそたが言うと、
「ずるい奴だなあ。
うちの母ちゃんなんて
事前に食費のかからないこと訊いてたから３０００円しかくれなかったよ」
と
金のないおちたが言う。
「俺も１万ならＯＫ」
と
ホウセイが言うと、
「俺は２万でもＯＫ、
うちは６万食費で貰ったよ」
と
永久が言う。
「さすがみんな金持ちだね。

とても高校生とは思えないねえ。
天下のオンシラーズ高校万歳」
と
金のないおちたが、
やけくそ気味に言う。
「じゃあ、
トータル１０万の商品券ということにしよう。
それから準優勝に５万の商品券でどうだ。
俺が１１万出してやる。
おちたはゼロ負担。
それでみんないいな」
と
木太郎が偉そうに今度は股間を掻きながら言う。
「太っ腹、さすが議員の子孫。
いや、将来の総理は違うねえ」
と
おちたはハナクソのついた手も気にしないで
木太郎をおだてる。
「よーし、それで商品券は」
と
おちたが訊くと、
「合宿終わってからに決まってるだろう。
そうすれば、また、会えるさ」
と
木太郎が言うと、
「じゃあ、表彰式は学校へ戻ってからということで、
木太郎の屋敷でやるか」
と
ホウセイが言うと、
「いいねえ」

と

みんな頷いた。

「女子たちの写真選び」

女子たちは夕食の準備を終えると、
もとこの部屋に集まって写真選びをしていた。
「なんだ。
先生、ノートパソコン持っていたんだ。
早く言ってくれればいいのに」
と
アスカが言うと、
「これは最後の夜用に秘密にしてたのよ。
今日のコンテストはこのＰＣ上に全員いるところで、
写真を発表するの。
どう、面白いでしょう」
ともとこが言う
と、
「はい、でも、ヒトメがバカだから、
発表中にバレないかなあ」
と、
アユメが言うと、
「そこまでバカじゃないわよ。
私は黙ってます。
そうだ、マスクしていくわよ。
それなら、文句ないでしょう」
と
ヒトメがアユメを睨みつけながら言う。
「それより、早く写真選びなさい。
紹介は私がやるから」
と

もとこがにこにこして言う。
「わーい。
でも、賞品は何かなあ。
ケーキとかかなあ」
と
ヒトメが言うと、
「せこー、
せめて1万くらいのものはねえ」
と
アユメが言うと、
「私は優勝するだけで満足よ」
と
アスカが言うと、みんな笑った。

果たして、
この話はこのまま
うまくハッピーエンドで終わるのだろうか。

「ラストコンテスト」

夕食を終えると、
「えー、
最後の合宿の夜は楽しくやりましょうね。
まずは、コンテストね。
今回は新しい趣向でいくわよ。
男子の方、賞品はいい」
と
もとこがにやりと笑って言うと、
「えーでは、
審査委員長の私木太郎が発表します」と
木太郎が偉そうに話しだすと、
「いつから審査委員長になったんだよ」
と
おちたがチャチャを入れると、
「一番金を出すのはあいつだから、
そのくらい我慢しろ、
特に何も出さないオタクはな」
と
ホウセイが、
おちたの耳元で小声で言うと、
そうだったというように、
おちたは頭を掻いた。
「えー、
おちたくんを無視しまして続けます。
優勝者あるいは準優勝者が同点の場合は、
審査委員長の私木太郎が決めさせていただきます」

「前置きはいいから、
賞品言いなさいよ」
と
ヒトメが言うと、
「いいんですか。私が審査委員長ですよ」
と
木太郎は鼻をほじりながら偉そうに言うと、
「賞品次第よ」
と
ヒトメが言い返す。
「うーん、おバカちゃんは無視しまして、
まず、準優勝の賞品から、
えー、
なんと5万円の商品券です」
と
木太郎がさらに偉そうに言うと、
「えー、凄い」
と
女子達は驚く。
「木太郎くん、ごめんね。さっきのなしにしてえ」
と
ヒトメが調子よく、頭を下げる。
「はいはい。
前向きに検討しておきますよ。
では、優勝者の賞品は、そうです。
ご想像どおりです。
えー、１０万円の商品券です。
天下のオンシラーズ高校男子は太っ腹ですよ」
と
木太郎が周りを見回すと、

女子たちがニコニコしながら拍手をしている。
「木太郎さん、ごめんなさい。
もう忘れてね」
と
ヒトメがまたしつこく言うと、
「あんた、調子良すぎるのよ。
何が木太郎さんよ、
いつもはハナクソ王子って呼んでるクセに」
と
アユメが大声でチクる。
「何よ、アユメだって、
そう言ったら笑ったじゃない、
あっ」
と
そう言った後、
ヒトメがうつむくとみんな笑う。
「ハナクソ王子？
ハンカチ王子の間違いですね。
まあ、王子だけ覚えておきましょう」と
木太郎はそう言いながら、
鼻をほじると不気味な笑いを浮かべた。

「ラストコンテスト2」

「先生、デジカメはどこですか」
と
ホウセイが訊くと、
もとめはいつの間にか
テーブルの上にノートパソコンを置き、
指をさして、
「今回は、
この画面でみんなで見ながら、
その後、投票してもらいます。
面白いでしょう。
それにデジカメより画面も大きいので、
余計わかりやすいでしょう」
と
もとめはにやりと笑うと、
パソコンを起動して、
「紹介は私が言うから、
ちゃんと番号をチェックするのよ。
それから、
アユメさん、
ヒトメさんの口に猿ぐつわをかましておいて」
と言う。
「えー、マスクじゃだめなの」
「当たり前でしょう。
今だって、
余計なおしゃべりしたでしょう」
と

アユメは言うと、
ハンカチを二つ使って、ヒトメの口を塞ぐ。
「あー、ハンカチ王女だ」
と
木太郎が言い返すと、
みんな大笑いした。
「じゃあ、
ハンカチ王女も静かになったことだし、行きましょう。
えー、
これから7つの写真を順番に3回お見せします。
男子一人2票づつ投票してください。」
「ビリの罰はどうします?」
と
ホウセイが訊くと、
「そうねえ。
今夜はまたゲームもやりたいから、
今回のビリとゲームのビリの人が罰ゲームやって、
負けた人が207号室にしましょう。
女子が少し不利ですけど、
賞品もらえるからいいわよね」
と
もとこが言うと、
女子たちは頷く。
「じゃあ、
ビリが同点の場合は
私木太郎が選びますので、
恨まないでください」
と
木太郎が言うと、
みんな頷いた。

「ラストコンテスト3」

「では、
男子5人は、
ノートパソコンが見える位置に
そう、
私の両端に別れて座ってね。
女子はそうねえ。
男子の後ろに椅子を持っていって座っていて。
顔色で誰かわかるといけないからね。
いいわね」
もとこがそう言うと、
そのとおり、みんな移動する。
「男子はちゃんとメモをとってよ。
後ろの女子に見えないように
メモをうまくとりなさい。
後で恨まれると怖いから。
えへへ、
それは冗談よ」
「いや、それはありうる」
と
永久がぼそっと呟く。
「えー、みんな準備はいい、
アユメさんはハンカチ王女の面倒よろしくね」
「はい、騒いだり何かやったら、
首絞めて殺しますから」
と

アユメが怖い冗談を言うと、
みんな笑う。
「では、一番です。画面を見てね」
と
もとこが言うと、
「えー」
と
男子が一斉に驚きの声を出した。

「衝撃のラストコンテスト1」

なんと画面にはお尻だけしか写っていなかった。
「先生、冗談ですよね」
おちたがいきなりの画面に思わず、
質問する。
「ピンポーン、永久くんのお尻です、
って言ってもらいたいワケ？」
と
もとこは永久の方を見て笑う。
「えー、これ、こんなにでかくないよー」
と
永久は画面を見ながら自分のケツを触る。
「永久、ケツを出せ」
くそたが言う。
「何いってんだよ？」
永久が真に受けてとまどってる姿に、
女子達は大笑いする。
「早くしろよ。
じゃないと脱がすぞ」
とくそたはからかう。
「違うよ。見ればわかるだろうが」
と言った後、
永久が追いかけるくそたから逃げ回る。
「はい、お遊びはそこまで。
で、
他の男子はどういう意見なの？」

もとこは笑う。
「くそた、
これは永久のケツじゃないよ」
と
ホウセイが言うと、木太郎も頷く。
「そうだろう。はー」
と
永久がホウセイと木太郎の後ろに隠れながら、
ため息をついた。
「ピンポーン。
ホウセイくん、木太郎くん、正解。
プラス各1、
くそたくん、マイナス1。
次のゲームでとっておくわよ」
と
もとこは笑った。

「衝撃のラストコンテスト2」

「じゃあ、2番行くわよ」
と
もとこが言うと、
「本当ですか」
と、
しつこくくそたが訊くと、
「マイナス2にされたい？」
「いえ、どうぞ」
くそたは固まる。
「じゃあ、もう一度、2番よ」
「おー」
と
今度は衝撃から賛美に声が変わる。
そこにはきれいで長い足が写っていた。
「じゃあ、3番行くわよ」
「わーお」
次は衝撃かつ賛美の声だ。
そこには、
きれいな背中からお尻が写っていた。
「これで驚いているようじゃ、
甘いわね。
4番」
「ほー」
完全にもとこのペースに
男子生徒ははまっている。
そこには頭を除く後ろ姿が全部写っていた。

「えー、今までの冗談です」
と
もとこが笑って言うと、
男子達はがっくとうなだれる。
「俺が言ったのは
半分合ってたじゃないかよ」
と
くそたが大声をあげると、
「というのが、冗談よ」
と
もとこは笑う。
「えー」
「どっちなんですか」
男子生徒は少しワケがわからなくなってきた。
「じゃあ、次、5番」
「わおー」
これには男子全員びっくりした。
そこには
正面からのいわゆる手ぶら姿の首なしの上半身が写っていた。
「えー、次、6番」
「すげえー」
くそたが思わず声を出した。
そこには、
首から下を右斜めから写した写真が写っていた。
「えー、次、7番」
「なんだ?」
「汚ねえケツだな?」
「本当、冗談これは」
と
もとこが笑う。

「永久、オタクのケツだろう」
と
くそたが言うと、
永久の顔は真っ赤になりみんな笑う。
「じゃあ、本物の7番行くわよ」
「うわー」
そこには首の下から
大事なところだけを複数の手が隠している写真が写っていた。
「どーう?凄いでしょう!
アユメさんに感謝しなさい」
と
もとこが言う。
「どういうことですか」
と
おちたが訊くと、
「アユメさんがTバックはいてる
と思えばいいわと発言したことから、
こんなに過激になったのよ。
みんな負けたくないからね」
と
もとこは笑った。

「投票の前に」

「先生、
４番もう一度見せてください」
「バカ、１番だよ」
「俺は６番」
「俺も６番」
そんな男子のやりとりに、
もとこや女生徒だけでなく、
もとめまで楽しそうに笑っている。
「私は５番」
「あんた女子でしょう」
「おバカ」
「おバカはハンカチ王女よ」
食堂に笑い声が響く。
みんな楽しそうに、
ノートパソコンに釘付けになった。
「オオシマもいればもっと楽しかったのにねえ」
と
もとめが言うと、
「おいしものつくってくれたのになあ」
と
木太郎も言う。

「はい、もういいでしょう。決まったかなあ」
と
もとこが言うと、

「はい、もちろん」
「もう一回」
「何度見るんだよ」
「はい、じゃあ、投票して、
発表はまたホウセイくんやれば、
楽しいから」
と
もとこが言うと
「ありがとうございます。
じゃあ、
くそたの部屋で集計して、
発表順検討しますので、
ちょっとお待ちください」
ホウセイはそう言うと、
「えーもう1回だけ見せてくれよ」
と
だだをこねる木太郎を引っ張るようにして、
残りの3人を連れて、
くそたの部屋に行った。

「優勝は１０万よね」
と
アスカが言うと、
「もっと凄いのにすれば良かったかなあ」
と
アユメが言う。
ヒトメは何か言いたいようだが、
相変わらず、
ハンカチ王女のままだった。

「投票の前に2」

ハンカチ王女ヒトメは、
どうしてもしゃべりたいらしく、
何か方法を考えたのか
席を立ち上がろうとするが、
「ヒトメ、おとなしくしてなさい。
コンテストが終わったら、
ハンカチはずしてあげるから」
アユメに言われ、ヒトメはおとなしくまた席につく。
「遅いわね。接戦なのかな」
とアスカが言うと、
「接戦だと木太郎くんが決めるのよねえ」
と
もとこが笑う。
「先生、自信ありそうですね」
と
アユメが言うと
「へへへ、それほどでも」
と
もとこは不気味に笑う。
「でも、もとこ先生いい線行くと思いますよ」
と
レイカがもとこをおだてるように言うと、
「そうかしら」
と
もとこは本気にして笑う。

そして、
数十分後、男子達が現れた。

「ラストコンテストの結果発表」

「えー、厳正なる投票の結果、
審査は終了いたしました。
私ホウセイが光栄にも、
もとこ先生のご指名を受けましたので
発表役をやらせていただきます。
その前にヒトメさん、
そのハンカチはお気の毒ですね。
せっかくの美少女も、
それでは、ただのマヌケな、えへん」
と
ホウセイがそこで話しを一旦わざとやめて
女子陣の様子を伺う。
ヒトメはホウセイの言葉を聞いて、
身体を動かすが、
「そう言って、
ハンカチをはずさせて、
ヒトメにまたおしゃべりさせる気でしょう。
ヒトメもおだてられちゃダメよ。
それじゃ豚よ。
このまま我慢しなさい。
もう少しの辛抱だから」
と
アユメが言うと、
「その格好も可愛いわよ、ヒトメ。
男子がマヌケと言おうが、
私はそういうヒトメも大好きだから」

と
アスカがヒトメの頭をなでなでする。
ヒトメはイヤそうに頭をかわすが、
アユメとアスカが、
両脇からガードする。
「先生、ヒトメさんが泣きそうな顔してますよ。
もう勘弁してあげたらどうですか」
と
ホウセイが言うと、
「ヒトメちゃん可愛そうだよ」
と
おちたも言う。
「そうねえ、ハンカチ王女はねえ。
ちょっと、よだれもでてるしねえ」
と
もとこは考えた。

「変な仮面？」

もとこが考えていると、
木太郎が変な仮面を差し出して、
「たしかに、
そのハンカチ王女は可愛そうだから、
この仮面を被ってもらうということで手打ちをしたらどうですか」
と優しいようで、
実は面白半分な提案をした。
すると、
アユメが
「その方が可愛そうよ。
ねえ、ヒトメもう少し、
そのままで我慢するわよね」
と言うと、
ヒトメは考えるしぐさをした。
「そうよ。
ヒトメ、そうした方がいいわよ」
と
アスカも言うと、
ヒトメはようやく頷く。
「こっちの方が楽だと思ったんだけどな」
と
木太郎が鼻をほじりながら言うと、
「仮面ならしゃべれるからじゃないの」
と
アユメが疑いの目で見ると、
木太郎はうつむく。

「まあ、
ハンカチ王女のことはそのぐらいにして、
さあ、早く発表始めましょう」
と
もとこが言うと、全員頷いた。
「じゃあ、行きますよ」
ホウセイがにやりと笑って言った。

「ラストコンテストの結果発表2」

「えーまずは、優勝候補かもしれない、４番です。
おめでとう！」
相変わらずのホウセイ流だ。
しかし、
ヒトメがしゃべれないので、
少し盛り上がりに欠ける。
「次はこれも優勝候補かもしれない７番、
おめでとう」
女子たちはまだ表情にでない。
「さあて、次も優勝候補かもしれない３番、おめでとう、
ここまで大接戦まだ複
数票はありません」
「では、行きます。これも優勝候補かもしれない６番。
おめでとう、見事に割れてますね」
「ケツじゃないんだから」
と
木太郎が冗談を言ったが、まったくうけない。
どうやら女子陣は今度は無口かつポーカーフェイスで通すことで
決めてるみたいだ。
「えー、ヒトメさんよだれがひどいですよ。
アユメさんふいてください。
あれ、ハナクソも見えますよ」
と
ホウセイがチャカすと、
ヒトメが耐えきれず動きだしたところで、
椅子から転げ落ちてしまった。
そして、ヒトメは顔から転んだので、

鼻をぶつけてしまったらしく鼻血を出していたので、
その顔にみんなは大笑いしてしまった。
　すると、ヒトメの目から涙がこぼれ落ちた。
「あー、ヒトメちゃん可愛そうに、
だから仮面にしておけばよかったのに」
と
　木太郎は笑いをすぐ抑えてそう言った。
　アユメは慌てて、ヒトメを抱き起こすと、
顔を拭き、ハンカチをはずすと、
「ちょっと、ヒトメを部屋に。ごめん、ヒトメ」
といいながら、
　泣いているヒトメをヒトメの部屋に連れて行ってしまった。
「ヒトメ！」
と
　アスカも何故かその後を追いかける。
「とんだハプニングですね。
しばらく中止しましょうか。
　そうだ、先生、その間、今呼ばれた番号を
もう一度再現してくれませんか」
と
　ホウセイが言うと、男子陣は拍手した。

「ラストコンテストの結果発表3」

「あらあら、ハンカチ王女を巡って三角関係ね。パソコン適当に見てていいわよ」

と

もとこが男子生徒たちには訳のわからないことを言うと、レイカとチウメを連れて、ヒトメを追いかける。

そして、

もとめも、もとこの後をついていく。

「何だ？」

「何が三角関係？」

「今のうちだ、パソコンは俺が預かった」

と

木太郎がノートＰＣを一人占めしようとして誤ってＰＣを床に落としかける。

「おっと、セーフ。抜け駆けはいけませんな」

と

ホウセイがぎりぎりＰＣの落下を防ぐ。

「あぶなかったなあ」

と

永久は額をハンカチで拭く。

「うん、もし壊していたら、あー、怖」

と

おちたも想像だけでぶるってしまった。

くそたも、

もとこの性格を知ってるので、

「木太郎、今度こんなマネして、
PC壊したら殺されるかもしれないぞ」
と
脅す。
木太郎は鼻をひくひくさえながら、
股間を掻いてごまかす。
「さあ、先生が来るまでゆっくりみよう」
と
ホウセイが気を取り直して声をかけた。

「やっと戻ってきた」

「それにしても、みんな遅いなあ」
「もう飽きてきたよ」
数十分たつが、女子たちは現れない。
「見てこようか」
と
おちたがそう言ったとき、
もとこ、もとめ、レイカ、チウメ、
そして、
キレイに化粧し直されたヒトメを挟むように
アスカとアユメが現れた。

「ごめんなさいね。痴情のもつれで」と
もとこが笑って言うと、
レイカとチウメも笑う。
「私は無実です」
と
ヒトメがしゃべると、
「せっかく可愛くしてあげたのに、
また、ハンカチ王女になりたいの」
と
アユメが言うと、
ヒトメは慌てて口を閉じる。
「いいのよ。別にしゃべっても」
と

アスカがヒトメを擁護すると、
「ヒトメに媚びを売っても無駄よ」
と
アユメはアスカを睨む。
「何よ」
「さっき、もう喧嘩しないって言ったでしょう。
今度、喧嘩したら、3人とも坊主にした後、
素っ裸にして、
その辺につるし上げるって言ったでしょう」
と
もとこが3人を睨みながら、強い調子で言うと、
3人ともうつむいた。

「さあ、おバカというよりエロ女3人は放っておいて、
続けましょう」
「私は違います」
と
またおしゃべりヒトメがしゃべると、
「うるさいわね、
あんたのおしゃべりがもとなのよ、
だから、あんたも同罪」
と
もとこがそうぴしゃりと言うと、
ヒトメはおとなしくなった。

「おしゃべりヒトメと結果発表」

「とんだハプニングで、
長い間中止しておりましたが、
無事、
ヒトメちゃんも笑顔で復帰したので、
結果発表再開しますよ。
ちょっと時間がたったので、
これまでの中間結果を。
え、3番、4番、6，7番角1票の計4票です。
今のところ、
全員にチャンスありですよ。
では、行きます」
「ドキドキしちゃう」
「ヒトメ、しゃべるな、おバカ」
「ごめん」
「そのくらいいいじゃない」

と

アユメに怒られたヒトメをアスカが擁護する。
「うん?
3人とも裸で吊されたいの」

と

もとこが睨むと静かになる。
「何か痴情のもつれがあるようですが、
続けます。
えー、6番です。
おめでとう。
これで　5票開票ですが、
6番さん優勝に近づきましたよ。

えー、次行きます。
えー、7番です。おめでとう。
やはりエロイのが強いのか。
まだ、
1番、2番、5番はいませんねえ。
時間が押してきましたので、
もうゲームがないということになれば、
207号室行きですね」
と
ホウセイが意地悪く言う。
「えー、そんな聞いてないよー」
と
またヒトメがしゃべる。
「アスカさん、
そのおしゃべり王女口を塞いでおいて」
と
もとこが言うと、
アスカが嬉しそうに頷き、
ヒトメの後ろから抱きつき、
ヒトメの口を塞ぐ。
ヒトメの抵抗する姿とアユメの視線が鋭いので、
木太郎は下を向いて笑いをこらえている。
「はい、
おしゃべり王女はおいておいて、続けます。
えー、2番です。
正統派美脚に初投票ですね。
えー行きます。
続いてまた2番、
これで、
全8票で2番、6番、7番が2票で並んでいます。

大接戦です。
しかし、
1番5番ゼロ票です。
この時点で、
このふたつの番号の方は単独優勝はありません。
逆に地獄行きが見えてきましたよ」
と
ホウセイが笑って言うと、
明かに動揺している人間がいることに
ホウセイは気づいた。

「結果発表と偉そうな木太郎」

「うーん、
このまま行くと同点となり、
木太郎の意見で決まる可能性が出てきましたね。
女性のみなさん今のうちに、
木太郎に媚びを売っておくといいだすよ。
というのは、冗談です」
と
ホウセイが言うと、
木太郎は偉そうに鼻をほじる。
ヒトメは何か言いたそうだが、
アスカに口を押さえられている。
「では、後2票、一気に行きますよ。
えー、3番です。
おめでとう。
大接戦ですので、まとめます。
これで、2番、3番、6番、7番各2票、
4番が1票です。
これで、
1番、5番の優勝はなくなりました。
地獄行き目前です」
と
ホウセイが言うと、
また、
ヒトメが何か言いたそうに動くがアスカが止める。
木太郎はますます偉そうに鼻をほじりだすと

ハナクソをヒトメに投げる。
しかし、
ヒトメもアスカも
木太郎が最終判断権を握っているのを知っているので、
苦笑いして我慢する。
「じゃあ、
ゲームもやりたい気がしますので、
さっさと発表しますか、よろしいですね」
と
ホウセイが言うと、
女たちは息を止め、頷いた。

「最終結果と木太郎の選択」

「では、最後の1票、行きます。
えー、なんと4番です。
おめでとう。
その結果、2番、3番、4番、6番、7番
各2票となりました。
そして、1番、5番は0票
という凄い結果になりました」
と
ホウセイが言うと、
木太郎は鼻をほじった後、
立ち上がり、
「えー、
ということですから、
僕が優勝者、準優勝者、
そしてビリを決めさせていいます」
と偉そうに言う。
「先生、この後、ゲームやりますか？
それとも、
これでビリの207号室決めますか」
と
木太郎は何故かもとこに訊く。
「木太郎くんはどうしたいの？」
と
もとこが逆に訊くと、
「合宿最後の夜ですから、

できればゲームをやりたいです」
と
木太郎が正直に言うと、
「そうね。
最後の夜だもんね。
じゃあ、こうしましょう。
この後、
ゲームをやって、
今回のビリとゲームのビリとで
２０７号室行きゲームをやりましょう。
ダブルゲームよ？
どーう？」
と言うと、
みんな意外にも
嬉しそうなに拍手する。
「やったあ！
じゃあ、
僕にちょっと時間をください」
と
木太郎は鼻をほじりながら、何か考えている。
「早くしろよ」
と
おちたが催促すると、
「うーん、結構悩むな」
と
木太郎が今度は股間を掻いた。

「悩む木太郎と視線」

優勝者と準優勝者は問題ない。
問題はビリだ。
はっきり言って、
ホウセイたち男子全員の意見が一致したとおり、
０票の１番と５番は、
もとこともとめのどちらかだ。
そこまでは間違いない。
実際、
二人とも視線がかなりきつい。
大胆さだと１番がもとこのようで、
肌の若さだと１番の方が若い。
しかし、
ここでビリに、
もとこを選んでしまうと後々困る。
どちらも、
私以外にしてね
という視線を送ってくるのはよくわかっていたが、
当たり前だが、
番号のヒントがわかるような
はっきりしたサインは送ってくれない。
ホウセイは、
１番がもとこで５番がもとめだと言っていたが、
他は逆の意見だった。
ホウセイの意見のように、
もとめにお尻を出す大胆さがあるか

という点ではお尻を出した1番が
もとめだというのは疑問だった。
しかし、
肌の若さでは1番の方が明らかに若そうで、
そうなると、
1番もとめ、
5番もとこ
ということになる。
しかし、
そんなに二人の歳は離れていないし、
ケアやストレスの差かもしれない。
だとすると、
やっぱり、
ホウセイの意見も捨てがたい。

木太郎はそう悩んでいた。

「木太郎、さっさと決めろよ」
と
くそたが催促する。
よし！

木太郎は覚悟を決めた。

「木太郎の決断」

「それでは、
ビリの方から、
私木太郎が発表させていただきます。
えー5番です。
さあ、どなたでしょうか」
と
木太郎がそう言ったとき、
「理由は？」
と
もとめが怖い顔で訊く。
木太郎はホウセイの勘が当たったとほっとしたが、
本当のことを言うこともできなかったので、
「それは、
どちらも良かったんですが、
5番より1番の方が素晴らしかったからです」
と答える。
「本当に」
と
もとめはまたしつこく訊く。
「私木太郎は嘘をつきません」
と
木太郎が鼻をほじりながら言うと、
「あー、負けた。
やっぱり、
もっと大胆に行けば良かった」
と

もとめがうなだれる。
「まあ、しょうがないわよ。まあ、次のゲームもあるんだから」
と
もとこは木太郎を見てにやりと笑ってから、もとめの肩をたたく。
「早く、優勝者を発表してよ」
と
アスカが催促した。

「マヌケな木太郎」

「では、長らくお待たせしました。
私木太郎が優勝者と準優勝者を
発表させていただきます。
えーまず準優勝は・・・
あれ？ない、メモがない」
木太郎はうろたえる。
「何やってんのよ。
番号も覚えられないの？」
と自信があるのか、
アスカが呆れた顔で言う。
「１番、５番以外はたしかなんだから、
こうなったら適当に言っちゃえよ」
と
くそたが言うと、
女生徒たちが一斉にくそたを睨む。
「冗談」
と
くそたはうつむく。
「木太郎、
自分で選んだのを言えばいいんだよ。
まさか違うのにしようと思ってたの」
と
ホウセイが言うと、
「それが結構迷ったんだよ。
その前にビリも迷ってたから訳わかんなくたってさ」

と
木太郎が鼻をほじりながら言い訳をする。
「じゃあ、
ホウセイくんに譲ったらいいじゃない」
と
今度はアユメが面白い意見を言う。
「そうだ、木太郎、そうしろ」
と
くそたが言うと、
「それがいいんじゃないの」
と
永久が言うと、
「やだよ！
自分で決めたいよ。
ほとんど俺の金だもん」
と
木太郎がわがままを言う。
「木太郎くん、
じゃあ、
もう一回写真を見せてあげるわよ」
と
もとこはどういう魂胆があるのかやさしくそう言うと、
にやりと笑った。

「あやしいもとこ」

「じゃあ、
もう番号はいいでしょう。
今から5枚写真みせるから、
その中から選びなさい、
見れば思い出すでしょう」
もとこはノートPCを起動し、
先に何か操作をすると、
順番に写真を見せる。
「じゃあ、最初、これかなあ」
「うーん、違うなあ」
「じゃあ、これかなあ」
「これそうかも、後でもう一度」
「いいわよ」
「3枚目のこれかな」
「違うな」
「じゃあ、最初のとこれ消すわよ」
「はい」
「4枚目よ。これ？」
「うーん、これが準だったかも」
「じゃあ、残すわよ」
「最後、これ？」
「うーん、こっちだったかな」
「じゃあ、3枚もう一度いくわよ」
「最初、うーんこっちだったかな」
「次」
「これだ、準優勝は」

と
木太郎が言うと、
アユメが嬉しそうに手を挙げる。
「これがアユメちゃんか」
と
木太郎は言う。
周りを見ると、
アスカとチウメが
真剣に木太郎の顔を見ている。
「じゃあ、こっち」
「うーん、こっちかなあ」
と
木太郎は迷う。
「もう、どっちよ」
と
アスカがじれったそうに言うと、
もとこがにやりと笑って、
「これかな」
と言って、
木太郎だけに向けて、
写真を見せた。

「木太郎の選択」

木太郎は、
もとこが
最後に示した写真を見た瞬間
少し違和感を覚えたが、
もとこが
これを選んで欲しそうだったので、
「これが優勝だったかな」
と
試しに答えてみた。
「本当にこれでいいの」
と
もとこは笑って、
みんなにその写真を見せた。
そのとき、
ホウセイがセキをしたので、
ホウセイの方を見ると、
ホウセイは
女生徒たちの方を見ていた。
すると、
女生徒が、
木太郎に冷たい視線を送っていることに
木太郎は気づいた。
木太郎は考えた。
どっちかを選択したら、
どちらかに絶対嫌われる。
下手すると・・・

そこで、
木太郎は、
金なら、
どうにかなるとふんぎり、
「えー、いろいろ考えましたが、
甲乙つけがたいので、
両方優勝と致します」
と答えた。
「えー、本当。
商品券半分っていうのはイヤよ」
と
アスカが先に言うと、
「いいじゃない。それでも」
と
準優勝のアユメは気楽に言う。
しかし、
「両方優勝なら最初の金額よねえ」
と
もとこが言うと、
まったく関係ないのに、
「そうだよ、木太郎」
と
ホウセイとおちたが、
口を揃えて言ったので、
「もちろんです」
と
木太郎は答えるしかなかった。
すると、
もとこは
「じゃーん、後のは私でした。

でも、優勝よね。
アスカさんいい？」
とずうずしく言うと、
「もちろんです」
と
アスカはにこにこして答え、
「アユメさんもいい」
とさらに
もとこがしつこく訊くと、
「もちろんです」
と
アユメも答えたので、
結局、
アスカとインチキしたもとこが
優勝ということになったが、
木太郎のこの選択に対しては、
誰も文句を言う人間はいなかった。

「最後のゲームの前に」

「じゃあ、
コンテストも無事終わったことだし、
ビリを決定するためのゲームをやりましょうか」
と
もとこはにこにこしながら言う。
「あのー、
　商品券はいつもらえるの？」
「そうね。それ大事ね」
「えー、
私木太郎が合宿から戻りましたら、
我木太郎邸でお口に合うかわかりませんが、
夕食と共にお渡し致します」
「わー、凄い。
木太郎くんのおじいさまは大臣で、
お父様は議員なんでしょう」
と
やっと自由にしゃべられるようになったヒトメが
羨ましそうに言う。
「そうだ、木太郎。
夕食会は全員参加にしよう」
と
ホウセイが言うと、
「いいね」
と
おちたも笑って言うと、
みんな拍手する。

「私フランス料理がいい」
「俺は焼肉かな」
「俺はハンバーグ」
「おちた、せこいぞ」
みんな楽しそうに笑う。
「わかりました。
私木太郎、
とにかく、
がんばらさせていただきます」
と
木太郎は鼻をひくひくさせて言った。
すると、
ヒトメが
「もとこ先生が入れ替えたの誰の写真だっけ」
と
小声でアユメに訊く。
「えーと、優勝が2番のアスカ、
で、
入れ替えたのが3番でチウメのよ。
私は6番。
忘れたの?」
「へへへ、
で、チウメ怒ってないみたいだけど、
どうして?」
「最初から優勝する気がないし、
多分、
もとこ先生のインチキだ
と木太郎くんもわかったから、
両方優勝にしたのよ。
だから、

いずれにせよ、
チウメはダメだったのよ」
「そういうことか、頭いい」
「おバカはあんたよ」
「何、
ヒトメとアユメでこそこそ話ししているのよ」
と
アスカが小声で言うと、
二人は舌をぺろりと出した後、
口をつぐんだ。

「最後のゲーム」

「じゃあ、
最後はしりとりでも真ん中シリトリ、
そう、
3文字だけの言葉しか選べないの。
そして、
いつもは並んだ順番どおりなんだけど、
今度は答えた人が、
次に答える人を指名するの。
結構、ドキドキするわよ。
それから、
指名される人の名前に答えた文字が
一つでも重なったらだめということにしましょう」
もとこがにやにや笑って言うと、
「えー、なんか難しそう」
と
ヒトメが言うと、
「例えば、
私がトマトと言ったとします。
5カウントする間に
例えばヒトメさんを指名したら、
トが重なるからそれだけで負け。
もとめでも同じ。
でも、アスカさんならOK。
ここまではいい」
皆うなづく。

「そして、
アスカさんがマから始める3文字の言葉を
10カウントする間に答えなければ、いけないの。
例えば、
マヌケならOKだけど、
マンガならアウトよ。
また、
マシンのように最後にンのつく言葉もアウト。
それで、
今度はアスカさんが例えば、
アユメさんを指名して続けるってわけ。
そして、
3回負けた人がビリ決勝戦進出よ。
どう？」
と
もとこが言うと、
「先生、
何度も同じ人を指名してもいいんですか」
と
アスカが訊く。
「それは自由、
これも作戦で面白いわよ。
下手に意地悪な人を指名すると、
逆にやり返される可能性もあるから」と
意地悪なもとこが言ったんで、
木太郎たちは下を向いて笑いをこらえていた。
他方、
もとめはかなり不安だった。

「もとめＶＳ木太郎」

「じゃあ、もとめ、あんた弱いし、
さっきビリだから、
ハンデのためにも、先にやりなさい」
と
もとこが命令するように言う。
「ありがとう、姉さん」
と
もとめは一応礼を言う。
「では、マネをしまして、
トマト、アスカさん」
「じゃあ、
私もマネ、
マヌケ、木太郎くん」
「俺がマヌケかよ」
「バカ、そういう問題じゃないだろうが」
と
おちたに頭を叩かれる。
「へへへ、時間稼ぎだ。
まいったか、ヌリエ、もとめ先生」
と
木太郎得意のインチキだった。
「また、リンゴ。
あー、また、あー」
と
もとめは頭を抱える。

「あんたねえ、本当に私の妹なの」
と
もとこは今のにはさすがに呆れた。
「また、あんたからやる？
それともやめとく」
「やめておきます。
頼むから私を指名しないで」
「やだよー」
と
木太郎が、
アッカンベーをするとみんな大笑いする。
「死んだら道連れにしてやる」
と
もとめは本気か冗談かわからない言い方をする。
「冗談でーす」
と
木太郎はごまかすが、
冗談か本気かはそのうちわかる。
「じゃあ、木太郎くんから」
もとこに指名されて
「では、ゴリラ、もとめ先生」
と
木太郎は笑ってもとめをまた指名し、
「鬼、本当に死んだら道連れよ」
と
もとめはいいながら、
「リスト、木太郎くん、仕返しよ」
と笑う。
「僕とやる気ですか。
よし、

スリムでスリムになったもとめ先生」と
木太郎がまたもとめを指名すると、
「スリム？それいいの？」
と
もとめが首を傾げると、
全員が
「セーフ」
と言う。
「また、
リかこのハナクソ王子め」
もとめもだんだん興奮してくる。
「リコウ、
ハナクソ小僧の木太郎くん」
と
もとめも挑発するように言う。
「さすが、
お利口なもとめ先生、
僕を怒らせましてね。
では、コリス、
はい、リスより可愛いもとめ先生」
「うーん、クソガキ。
また、リ？うーん、リ」
「１０，９，８，７，６，５，４」
「うわー、リース、あー」
もとめはまた頭を抱える。
「何が、クソガキだ。
クソガキ相手に負けるな。
元おデブさん」
と
木太郎が言うと、

くそたが木太郎のすねを蹴る。
「元おデブ？
あーそんなことより、あと1回」
もとめはパニっくていたので、
元おデブでピンと来なかった。

「木太郎にひれ伏すもとめ」

「もとめ、木太郎くんは相手が悪いわよ。今のうち、謝っておきなさい」

と

もとこが言うと、

おちたも、

「もとめ先生は大人の女性なんですから、こんなクソガキ相手にしちゃだめですよ」

と言うと、

木太郎は今度はおちたの頭を叩く。

もとめはしばらく考えたが、

「ごめんなさい。木太郎くん、今まで言ったこと水に流して」

と言って深く頭を下げた。

全員が木太郎のことを見る。

「いえ、僕の方もムキになって失礼なことを、お詫びに先生の負け1回僕につけてください」

と木太郎も頭を下げる。

「さすが、木太郎、それでいいんだ」

と

くそたが偉そうに言う。

「もとこ先生、いいですよね」

と

おちたが言うと、

「私の忠告も聞いたことだし、いいハンデだから、もとめ、木太郎くん1回づつ負けたことにしましょう。でも、木太郎くん、あんたは見かけより偉い。

見損なったわよ」
と
もとこが言うと、
「先生、それ言うなら、見直したでしょ」
と
ホウセイが言うと、
「わざとよ、もとめのマネよ」
と
もとこが冗談か本気で笑いながら言ったので、
みんな大笑いした。
「じゃあ、今度はもとめより大人のおちたくんから始めましょう、
みんないいわね」
と
もとこが言うと、全員うなづく。
「じゃあ、何か褒められたので、
メイヨ、名誉とはまったく無縁のくそた行け」
と
おちたが笑って言う。
「この野郎、ちょっと褒められたからって、
じゃあ、イルス、居留守の得意そうな永久だ」
と
くそたが言った。

「休憩と大接戦」

「ルね？
　ルビー、じゃあ、もとこ先生」
永久はもとこへの指名は
まずかったかと思ったが、
つい指名してしまった。
しかし、
そう問題ではなかった。
「ブー、ンと同じでアウト」
と
おちたが言うと、
「しまった」
と
永久が自分の頭を叩く。
「もとこ先生を指名しようなんて
考えるからだよ」
と
木太郎が偉そうに鼻をほじりながら、言う。
「それどういう意味？」
もとこが訊くと、
「だって、
もとこ先生に勝てるわけないでしょう」
と
木太郎が調子よく言うと、
もとこはまんざらでもない顔で
「そんなことはないわよ」
と言って笑うと、

「木太郎くんが譲ってくれたおかげで、結構接戦で時間かかりそうだから、ここで一回休憩しましょう、そうね１５分」

と

もとこが言うと、皆頷いた。

もとこはそれを確認して、

一人で自分の部屋に戻って行った。

「１５分だから、大の方かな」

と

木太郎が言うと、

「多分な」

と

くそたが言うと皆笑い出した。

「再決戦開始」

もとこが戻ってくると、
皆何故かにやけていた。
「何か顔についている」
もとこは訳がわからなく、
自分の顔を手持ちの手鏡で見る。
もとめが、
そっともとこに耳打ちすると、
「違うわよ。あんたが言ったの！」
「ち、違うわよ」
と言って、
木太郎の方を見る。
「僕も違います」
と
木太郎が鼻をひくひくさせながら平気で嘘をつくが、
皆笑い出す。
「あんたねえ。
何でも自分と同じに考えちゃだめよ」と
もとこが言うと、
「すいません」
と
木太郎が素直に頭を下げる。
「まあ、いいわ。さあ、再戦よ」
と
もとこは思ったほど怒らなかった。
「じゃあ、
さっき負けたおちたくんからでいいわね」

「じゃあ、オカシで、
おかしなヒトメちゃん」
「何よおかしなって？」
「おバカよりいいじゃない」
「もう、アユメまで」
「じゃあ、カカシで、
役にたたないアユメね」
「何よ、役にたたないって」
「そうじゃない！」
「まあ、喧嘩しないの」
「じゃあ、カカオで、
色黒のクソタくん」
「俺はそこまで黒くない。
まあ、いいや。
でもカ攻撃はあまり効果はないと思うぞ。
えー、カオリで、
いいにおいのチウメちゃん」
「何で、
チウメちゃんは褒めるのよ」
「まあ、
おバカなヒトメじゃ褒めようないしね」
「そんなことないわよ。
ヒトメ、あたしがいるからね」
と
アスカが言うと皆笑う。
「オですね。
オヤジ、
で、オヤジっポイ、ホウセイくん」
「うわー、
チウメきつい！

あたしもそう思っていた」

と

ヒトメが言うと、

「どうせ、そうですよ。

でも、

もっとひどいのは、

たくさんいますから。

じゃあ、

ヤクザで、

ヤクザより怖いもとこ先生」

と

ホウセイが言うと、

「あら、ホウセイくんも言うわね。

でも、

褒め言葉と受け取っておくわ。

クジラ、

でかいだけが取り柄のくそたくん」

「ひでえ、

何か悪口しりとりになってきたぞ。

まあ、それなら、ジジイで、

性格も顔もジジイの木太郎」

「オヤジよりひでえじゃないか」

と

木太郎はそう言うと、

「ジコウ、

過去のことはもうジコウです。

もとめ先生」

と

木太郎がなかなか終わりそうもないので、

ついにもとめを指名してしまった。

木太郎が皮肉を込めて、
元デブと整形のことを暗に過去
と言ったことがわかったので、
もとこは下を向いて笑っていた。

「悪口しりとり」

もとめは、
過去とは、
木太郎にボロ負けしたことだ
と思って、
　また、
木太郎にリベンジしてやろうか
と思ったが、
　とても勝てそうにないので、
「コドモ、
コドモ並の知能のヒトメさん」
と
一番おバカなヒトメを指名した。
「もとめ先生まで悪口、いいわ。
ドね。ドブスのもとめ先生」
と
ヒトメが整形のことを念頭において言う。
みんなは気づいたが、
必死に笑いをこらえてる。
もとめはヒトメの挑発と理解して、
「ヒトメちゃんも自信家ね。
私がドブス。
ふーん。
じゃあ、
ブキヤ、
私がおばかと思ってるからって殺さないでね、
ヒトメちゃん」

もとめはもとめなりに、
どうやらヒトメにターゲットを絞ったようだった。
「人殺し？
何でなの？
ドブスの考えることは私にはわからないわ。
えー、キね。
キツネ。
よく見ると、
キツネ顔のもとめ先生」
ドブスでキツネ顔
と言われたもとめもヒトメと勝負することを決めたようだ。
「あら、
私キツネよりタヌキが好きよ。
ツよね。
ツツミ、
ちょっとその頭包んで歩いた方が
バカが伝染しないんじゃない？」
もとめも、
ヒトメを完全にバカ扱いして挑発する。
「ありがとう。先生。
ついでに、マスクもするわ。
じゃあ、ツマミ、
話しのツマミにもとめ先生のおバカネタがグー！
わーこのネタ、
古すぎね」
ヒトメもしつこい。
「私って話題豊富かしら。
そうだ、
リセットされてるから、
マヌケ、

マヌケなヒトメちゃん」
もとめも負けない。
「マヌケでわるうございました。
ヌリエ。
もっとお化粧すると、
若く見えますわよ。
その皺どうかされたら、
もとめ先生」
ヒトメがにやりと笑うと、
ついに、
もとめの苦手な「リ」攻撃に出た。
「リで来たか。
でも、木太郎くんとは違うわよね。
えー、
もう余計なことといわずにスピーディーに行くわよ、
リスト、
ヒトメちゃん」
「ブー、ひっかかった、きゃは」
と
ヒトメが大笑いする。
「えー、何で」
「おバカ。
リストのト、
ヒトメちゃんのトが一緒でしょう」
と
もとこがもとめの頭を叩いた。

「ピンチのもとめ。トイペがない場合の凌ぎ方」（前書き）

やや下品ですので、食事中はおすすめしません。

「ピンチのもとめ。トイペがない場合の凌ぎ方」

「あんた、
もう何回「リ」で負けてんの？
それに相手を選びなさい。
ヒトメさんはおしゃべりなだけで、
本当におバカなわけじゃないのよ。
それに、
木太郎くん以上に負けず嫌いだから。
その辺理解しなきゃ」
と
もとこがもとめに説教する。
「さすが、もとこ先生わかってる」
と
アユメとアスカが口を揃えて言う。
「そうですよ。
狙うなら永久かくそたのどっちかだな」
と
木太郎が言うと、
「なんでだよ」
と
くそたが木太郎を睨みつける。
「いや、
そういう短気なところが
この勝負ではダメなんだよ」
と
木太郎が鼻をほじりながら偉そうに言う。
「じゃあ、永久は？」

と
くそたが訊くと、
「ああ、永久はちょっと頭が」
と
木太郎が言いかけたとたん、
永久の蹴りが入る。
「ありがとう、木太郎くん、
今度からくそたくんか永久くんにするわ」
と
もとめが真面目な顔で言ったので、
くそたと永久を除く皆は大笑いした。
「覚えてろ、木太郎。
調子に乗ってるとな」
と
くそたがそう言った後、
永久の耳元で何か囁くと、
永久は頷いた。
「あの、
姉さんちょっと休憩していい」
と
もとめが言うと、
「あら、ウンコ」
と
もとこが言うと、
皆大笑いする。
「姉さんとは違うわよ」
と
もとめがムキになったので、
「あら、ごめん。
冗談だったのに怒るとこ見ると、

本当だったかしら」
と
もとこが、
しらっとした顔で言うと皆また笑う。
「もう、どうでもいいです」
もとめは不機嫌そうに言うと、
自分の部屋に走って戻って行った。
「図星ね」
と
もとこが言うと、
またまた皆大笑いする。
もとめはすぐにトイレに入って、
どうにか出し切ったところまでは良かったが、
トイレットペーパーがないことに気づいた。
「あー、ついてない」
いくら改装された古い屋敷とはいえ、
ウォシュレットなんてものはついてないので、
仕方なく、
ペーパーの芯を尻に挟むと、
隣の浴室で、
尻の穴の周りなどを洗った。
「そうだ、新しいのを出さないと」
周りを探すと、
なんとトイレに座ると後で見えない水槽タンク上に
いくつものトイレットペーパーが積んであった。
「何だ。
損したわ。
あれ、Tシャツが濡れてる。
あー、どうしよう。
そうだ、

リーチがかかったから、
頭を冷やしたことにして、
シャワーを浴びたことにして、
着替えよう」
もとめは一人でぶつぶつ言うと、
Tシャツも脱いで、
全身シャワーを浴びてから着替えた。

「あの子、遅いわね」
「何か便秘みたいですよ」
と
木太郎が余計なこと言う。
「何で知ってるのよ」
「いえ、なんとなく」
木太郎は口ごもる。
「あの子、
リーチかかってるから、
先に始める？」
「もう合宿も最後ですから、
ゆっくりやりましょうよ。
今、デザート持ってきます」
と
アスカが言うと、
女生徒たちは
もとこの返事も聞かずにキッチンへ行く。
「負けはもとめに決まったようなものだもんね。
それにしても遅いわね。
そうね。
おちたくん、
私と一緒にもとめの部屋付き合ってくれる」

「僕がですか？」
「そう一番真面目な子がいいから」
「どうせ、俺たちは」
と
木太郎は言いかけて黙り込んだ。

「もとめ再びピンチ」

「がーん」
もとめが
もとめがシャワーを浴びて、
着替えようとしたとき、
着替えるものが水浸しになっていた。
下着は各6枚、
Tシャツも各6枚、
黒いワンピースも6枚用意してきたのだが、
今日の夕食前、
もとこに
「帰った後、洗濯するもの出して」
と言われたので、
今日と明日の分以外、
全部もとこに渡してしまったのだ。
そして、
今、浴槽の横にさっきまで来ていたのと、
新しい着替えを置いておいたら、
浴そうの脇のビニールシートに隙間が出来ていて、
置いておいた着替が
全部水びたしになってしまったというわけだ。
まさか、
着替えを取りに行こうにも、
食堂から見えるので、
すけすけの黒いネグリジェに着替えて、
姉の部屋まで行くわけにはいかないし、
濡れた着替えのまま食堂に行くわけにはいかないからだ。

もとめは
身体にバスタオルを巻いたままの姿で途方にくれていた。

「あの子ドジだから、
慌てて走って行って、
転んで、
頭でも打ってるんじゃないかしら、
いくらアレでも遅すぎるわよね」
「ウォシュレットがないから、
お尻をシャワーで洗ってるじゃないですか」
と
おちたが言うと、
「あんたそうなの」
と
もとこが訊くと、
「えっ？違うんですか」
と
おちたが驚く。
二人がそんな呑気な話しをしながら、
もとめの部屋に向かっていることを
もとめが知るはずもなかった。

「戻らない3人」

「あれ、もとこ先生は？
そう言えば、おちたくんも」
アユメが訊くと、
「もとめ先生が遅いんで、二人で見に行ったんだ」
と
木太郎が鼻をほじりながら言うと、
「もとめ先生、
負けそうだから逃げちゃったんじゃないの？」
と
さっきまでライバルだったヒトメが笑って言う。
「こんな遅くにそれはないでしょう。
それに、食堂を通らないと、外には出られないでしょうが」
と
アスカが言う。
「じゃあ、苦戦してんかなあ」
と
木太郎が言うと、
「何を苦戦してんのよ」
と
ヒトメが訊くと、
チウメが小声でヒトメの耳元で囁く。
「知らなかった。
そんなに時間かかるんだ。
でも、何でチウメ詳しいの」
と
ヒトメが訊くと、

チウメの顔が赤くなる。
「おバカ、声でかい」
と
アユメがヒトメのおでこをはたく。
「もうそんな話しやめて、
せっかく作ったデザート先に食べてましょうよ」
と
アスカが言う前に
もうくそたはデザートをうまそうに食べていた。

「ラッキー」

トントン。

もとこがもとめの部屋をノックしても返答はない。
もとめは、
相手が誰だかわからないので、
居留守を使った。
すると、
もとこが
「やっぱり倒れてるのよ」
と
鍵をかけ忘れたもとめの部屋のドアを開けて、
おちたと共に飛び込む。
びっくりしたもとめは身体に巻いていた
バスタオルを落としてしまった。
驚くもとことおちた。
もとめは慌てて、
バスタオルを拾いしゃがみ込む。
「見たな？」
もとめではなく、
もとこが何故かおちたを睨む。
「はい」
と
おちたは嘘をついている様子もなく、すんなり頷く。
「本当に見たの」
「はい、もとこ先生の驚く顔を」
それを聞いたもとめは安心してバスタオルを身体に巻くと、

「ちょっと姉さんに頼みがあるから、
みんなにもう少し待つように食堂に戻って言っておいてくれる」
と
もとめが言うと、
おちたは素直に
部屋を出ていく。

「あんた何やったのよ。
あら、
あそこに転がってるの、
トイレットペーパーの芯？
うあー汚い。
どういうこと」
もとこが冷ややかな目でもとめを見ると、
もとめはうつむきながら事情を話す。
「しょうがないわね。
私が多めにドレスや下着用意してあるから、
貸してあげるわよ。
でも、おちたくん、
あのペーパーの芯に気づいてないかしら」
と
もとこが言うと、
「あの子は正直だから、多分」
と答えた。
「じゃあ、今すぐ持ってくるから早く着替えて来るのよ、
あんたがビリだからゲームはじまらないでしょう」
と
もとこは言って、
もとめの部屋を出ていった。

「にやけるおちたともとこの提案」

「何にやけてるんだ」
と
木太郎がおちたの顔を見て言うと、
「思い出し笑いさ」と言って、
また、おちたはにやける。
「で、もとこ先生ともとめ先生は？」と
ヒトメが訊くと、
「シャワーを浴びているとき、
着替えを少し濡らしたみたいで、
もとこ先生のを借りに行った」
と
おちたは簡単に言った。
「ウォシュレットがないですからねえ」
と
チウメがぼっそり言うと、
ヒトメが
チウメのおでこをちょこんと叩いた。

しばらくして、
もとこともとめが揃って現れた。
「お待たせね」
ともとめが言うと、
「ウォッシュレットがないと不便ですね」
と
チウメがまた言う。
「え？やだー、違うわよ」

と
もとめは本当のことは言えないので、
笑ってごまかす。
「あっ、もうこんな時間、ビリ決戦までできるかしら、
もとめが負ければ、それでいいけどね。
そうだ。みんなもう一泊しない。まだ、休みあるし」
と
もとこが言いだす。
「でも、電話もないのに、
どう家族に連絡するんですか？」
もとこは少し考えて、
「あー、もしかしたら、オオシマのバカ、
明日、迎えに来ると勘違いしてるのかもしれない。
明日、オオシマが来たら、町まで行って連絡させるというのは、
どうかしら、オオシマが来なかったら、
誰かが町まで電話しにいくの」
と
もとこが言うと、
「賛成」
と
まっさきに木太郎が手を挙げるともとめ以外はみんな頷く。
「今日の２０７号室行きはどうするんですか」
と
もう無関係なアスカが訊くと、
「もとめがまた負けたら決定。
もとめが勝ったら、明日ビリ決勝戦というのはどう？」
と
もとこが言うと、一人を除いて、
みんなうなづく。
「どうしたの？木太郎くん」

「木太郎の提案」

もとこに理由を聞かれた木太郎は、
「ゲームはここまでにして、
明日の２０７号室行きの人を怖がらせるために、
僕の知っている怖い話しを聞いてくれません」
と
突然言いだす。
「そんな怖い話しなの」
と
ヒトメが少しびくつく。
「噂ですけど、
たぶん、この話しを聞いて２０７号室に泊まったら
おしっこ漏らしますよ」
と
木太郎がおおげさに言うと、
「面白いわねえ」
と
２０７号室に泊まることのなくなったヒトメ、チウメ、アスカが
言いだすと、
もとこやホウセイ、くそた、おちたも頷く。
「ええ、それは・・・」
と一番危ないもとめが言うが、
「じゃあ、反対はもとめだけで、
多数決で決まりね、
じゃあ、木太郎くん、思いっきり怖い話ししてね。
あっ、
その前に私もおトイレ、

誰かさんと違って、
大じゃないからね。
みんなもちびらないように、
おトイレ行ったら」

と

もとこは機嫌良く部屋に戻って行った。
もとこに言われたせいか、
木太郎を除く生徒のほとんどが
一旦自分の部屋に戻って行った。

「もとことオオシマ」

「オオシマ」
「あー、お嬢様。
ずっと、
連絡、お待ちしておりました。
予定より遅いので、
心配しておりました」
「あのね、オオシマ。
今日の計画は
明日に延期することにしたから、
それで、明日のそうね。
朝の9時頃、
隠した車に乗って、
間違えて迎えに来たフリしてくれる」
「そんな、もう1日。
こんなとこに泊まるんですか？」
「たった1日じゃない」
「何か、
ここイヤな空気がするんですよ。
ここにいるだけで、
なんか、
頭が狂いそうな気がして」
「何、その図体で言ってのよ」
「それに、
万一、
例の計画がもとめさんにバレて逃げられたら、
どうするんですか？」

「その点は大丈夫。
あの子、私が考えた以上におバカよ」
「じゃあ、
明日、もとめさんを
２０７号室に泊められなかったらどうするですか？」
「それも大丈夫よ。
もうリーチかかっているんだから、
それに、
木太郎
という子が怖い話ししてくれるんだって」
「私は怖い話しは嫌いだから、
もう二度と、
リビングの音は聞きません。
というより、
みんな楽しそうなのでなるべく聞かないように、
ベッドの方で横になってますが」
「それでいいわよ。
私からの無線だけ受けてくれれば、
じゃあ、もう寝なさいよ。
明日は下手すると徹夜よ」
「お嬢さん、本気なんですね」
「あら、まだ、納得してないの。
そうねえ。
やめたいなら、
一人で帰ってもいいわよ。
でも、
もう二度と私にその顔見せないで」
と
もとこがわざと怒って見せる。
「す、すいません。

お嬢様にご意見なんて申し上げまして、
かしこまりました。
明日早く起きて、
こっそり車を取りに行って、
９時頃とぼけて迎えにまいります」
もとことどこかに隠れているオオシマとの間で、
密談が行われていた。
（続く）

「ゲーム再開前の出来事」

「お待たせね」
もとこが言うと、
「ずいぶん長かったわね」
と
もとめが言うと、
「やっぱり大か」
と
木太郎が言うと、
「あんたじゃないんだから、
余計なこと言うと、あのことバラすわよ」
と
もとこが木太郎ではなく、
もとめの方を見ると、
もとめはうつむく。
「あのことって何ですか？
おちたがにやけて戻ってきたことと
関係あるんですか」
と
木太郎が言うと、
「おちたくんにやけてたの」
と
もとめがおちたを睨む。
「何、いってんだよ。
食堂に戻れたから安心したんだよ」
「もとめ、
あのことバレたんじゃない」

「もう、やめてよ」
「あのことって」
「やめてってば」
もとめは
真っ赤な顔でもとこにきつい口調で頼む。
「さあ、お遊びはここまで、
木太郎くんも余計なこと言わないこと」
もとこはそう言うと、
木太郎にウインクする。
「はい」
「じゃあ、続き始まるわよ。
誰からにしようかな」
もとこは嬉しそうに
もとめと生徒たちの顔を見回した。

「ゲーム再開」

「じゃあ、私からいっちゃうわ」
と
もとめが言うと、
皆しょうがなく頷く。
「じゃあ、
トイレの側で何かを見たおちたくん」と
もとこは意地悪く質問する。
木太郎が
「トイレの側でおちたは何を見たんだ」
と
つぶやいて口を押さえる。
もとめはうつむき、
おちたはトイレ？と首を傾げる。
「イジメ、
イジメの得意なもとこ先生」
と
おちたは言って、
しまったと思った。
「おちたくん覚えておくわよ。
嘘、冗談」
しかし、
もとめの目はあやしい。
「ジゴク、ジゴク行きかももとめ」
と　笑って言う。
「うーん、ゴジラ。
ゴジラに似ているくそたくん」

「ひでえ」
「ゴリラよりいいじゃん」
と
木太郎が言うと頭をはたかれる。
「ジか、ジコク、
デートには遅刻しそうもないチウメさん」
「誰がくそたとデートすんだよ」
と
言いかけて
木太郎は慌てて口を押さえる。
「コオリ、
コオリのように冷たそうな永久くん」
「俺、冷たい？そんな。
オトコ、
なんだかオトコ嫌いみたいなアスカさん」
「あら、何でわかったの？
トンマなヒトメ」
「ブー」
「あー油断した。でも、いいわ」
２０７号室行きがないので安心している。
しかし、
「２０７号室行きがないのは今日までよ。
明日はもうリセット」
と
もとこはそう言うと、
にやりと笑った。

「ずる賢いもとことピンチのおちた」

「えーそんな」
２０７号室行きのなくなっていたアスカたちが
文句を言うが、
「ルールは確かに今日だったもんね」と
ピンチのもとめがそう言うと、
２０７号室行きの可能性のある生徒たちも
「そうだ」
と言い、
「その方がおもろいじゃん」の
木太郎の一言で、
もとこの提案は了承された。
「じゃあ、気合いを入れないとね」
と
アスカがつぶやく。
「次、誰行く。アスカさん行く？」
「私行きます。
前のゲームから時間経ってますから
全部リセットでいいですよね。」
「いいわよ」
「じゃあ、マヌケ、
マヌケで可愛いヒトメ」
「何でよ。
私が強いの知ってるでしょ。
えー、
ヌリエでもとめ先生はやめてアユメ」
「私なの。リか？

リユウで、
にやけていた理由が今もわからないおちたくん」
おちたは、
何も言わずアユメをじろっと見る。
他方、
もとこともとめもおちたをじろっと見る。
「ユスリ、
何かユスリが得意そうなアユメさん」
「何でよ？
やっぱり何かあったんでしょう。
スケベ、
見かけによらず、
一番スケベはおちたくん」
「何でだよ。
スケベはホウセイか木太郎だろう」
と
おちたが言うと、
二人に羽交い締めにされる。
「いてー、わかった。
やめてくれ。
えー、
アユメさんは怖いので、
ケイジ、
推理力ならホウセイ、
これで俺を開放してくれ」
「甘いな。
おれをスケベと言っただろう。
イクジ、
子供を育てる方だよ。
でも、

違う意味でイクジのないおちたくん」
「また、
もう言わないから、勘弁。
クジラ、
クジラのようにでかいというのは嘘、
くそた」
「ふーん、ジコウ、
スケベにジコウはないよ、
おちたくん」
「またかよ。
もう勘弁。
コリス、
コリスのように可愛い、
ヒトメちゃん」
「ごますってもだめよ。
それに、
リね。
リコウ、
とてもリコウには見えないおちたくん」
「えー、何で」
おちたはバチがあたったのか、
この回は完全に狙われたようだった。

「おちたのふんばりと失言」

「ヒトメちゃんまで、
こうなったら意地でも耐えてやる。
このおちた様をなめんなよ」
「誰が、
そんな汚い顔を舐めるかよ」
と
木太郎がからかうと皆笑いだす。
「木太郎め、
えー、コだろう。
コジマで、
離れコジマで、
ハナクソでも喰ってせいぜい長生きしろ、
木太郎！」
「ほう、俺様に喧嘩を売る気か」
「嘘、今回だけ。
でも、勘弁してくれないとアレばらそうかなあ」
「えっ、
何でおちたが知ってるの」
と
木太郎が思わず、
ＳＤカードの話しだと思ってうっかりしゃべってしまった。
木太郎は、
怖い話しをするのを忘れて
すっかりもとこのペースにはまっていた。
ホウセイは蹴りを入れたくても、

下手に動くとバレそうなので、動けない。
ホウセイは合宿の延長は、
木太郎の怖い話を訊くのが目的ではないのではないか
と考えていたが、
誰も言いださないので黙っていた。
誰もが、
合宿延長だけで喜んでいたのかもしれない。
「何よ、木太郎くん」
と
ヒトメが疑わしそうな目で見る。
木太郎はヒトメの耳もとで
「例のもとめ先生の整形前のアップの写真のことだよ」
と
大嘘をつく。
「ああ、それはやばいわよ。
おちたくんとは喧嘩をしない方がいいわよ。
あの子、
もとめ先生に惚れてたから」
「今でもかなあ」
「何、二人でこそこそやってんの」
と
アスカが二人を睨みながら、言う。
「アスカ心配しないで、この木太郎くんの顔じゃあねえ、
ふっふっふふ」
ヒトメは、
木太郎に目でごめんと合図してごまかす。
「可愛い子に限って、
不細工な男にひっかかるから、
ちょっと心配でね」
「そう言えば、

ヒトメはくそたくんじゃなかったっけ」
「えっ、俺、へへへ」
「あのねえ！、
今はゲームの途中なんだけど」
と
もとこがじろりと睨むと、皆おとなしくなる。
「はい、木太郎くん。
今度余計なことをしゃべると退場よ」と
もとこは木太郎を睨みながら、
注意する。
「すいません。
では、ジスイで、
このままでは一生独身で、
自炊でしょう。
もとめ先生」
と
おちたを放免して、
早く勝負をつける方向に木太郎は作戦を変えた。
「なんでよ。
また、私なの。
えーもう悪口やめます。スジコ。
で、くそたくん」
「あの、先生、俺、スジコ大嫌いなんですけど、
あのつぶつぶ見るだけで、オエー」
と
くそたが怖い顔して不機嫌そうに言うと、
「し、知らなかったのごめんなさい」と
もとめは謝るが、
「ジナリ、わかるかな、この意味、
もとめ先生」

くそたが机をドンと叩くと、むっとした顔で言う。
「あー、また、私か」
もとめは周囲を見回した。

「もとめ再び大ピンチ」

「えー、ナよね。
ナマリで、
えーと、ホウセイくん」
「マかマイクで、もとめ先生」
「わー、わたし、イ」
もとめはイクラを思い浮かべたが、
くそたのさっきの恐ろしい顔を思い出し、やめることにした」
「イラク、えー、永久くん」
「うーん、どうしようかな。
ライム、で、やっぱりもとめ先生」
「私が負けると、ビリゲームなくなってつまんないわよ」
と
もとめは遊びたがってる生徒の心を利用としようと考えた。
「そうか。
じゃあ、面白いところだけど、
ここで中断して木太郎くんの怖い話し聞く」
と
もとこがみんなに訊くと、
「せっかく、合宿延長が決まったし、
面白いところだから、
もう少し続けましょうよ。本当は俺の話より、
みんなゲームがいいんだろう」
と
張本人の木太郎が言うと皆頷く。
「木太郎は本当は合宿延長が狙いだったりして」
と

ホウセイが言うと、皆笑った。
「じゃあ、そうね。
ここでまたもとめが負けたら、
今日もとめに２０７号室に泊まらせて、
明日もコンテストかゲームやって負けた人を
あそこに泊まらせましょう」
と
もとこがもっと生徒が喜ぶようなことを言う。
「なら、気楽に行こうぜ」
と
木太郎が言うと、皆頷く。
「それ、ずるいわよ」
「じゃあ、多数決、賛成の人」
もとめ以外、全員手を挙げる。
「ふー、勝つしかないのね。イか」
また、イクラが浮かんだが、くそたがなんとなく、
怖い。
「あそうだ、イセイ、で、アスカさん」
「セか、簡単すぎるわ。セカイで、あっ」
と
アスカは何かに気づいた。
「あのもとめ先生って先生なんですか」
と
急に訊く。
「ああ、そういうこと、違うわよ。
それに、敬称は関係ないわよ。
ねえ、もとめ」
「じゃあ、セカイでもとめさん」
「アスカちゃん、鋭い！
もとめ先生だとセが重なるもんね」

と
木太郎がアスカをおだてる。
「見た目はバカそうだけど、
そうじゃないのよ」
アスカは、
木太郎のおだてにのってしまった。
「カか？
もう誰か許して。
カメオで、あっ、危なかった」
「おちたくんを使命しようとしたんでしょう」
と
もとこがじろっともとめを見る。
「ひどいな。
もとめ先生は、
さっき僕がいじめられたばかりなのに」
と
おちたが少しヘソを曲げる。
「ち、違うのよ。
チウメさんを使命しようとしたのよ」と
もとめが弁解すると、
「私ですか」
「チウメさんは優しそうだから」
「そんなあ」
と
チウメが照れると、
「ふーん」
と
もとこはそれだけ言う。
「じゃあ、あっ」
「どうしたの？

アユメさんを使命しようとしたんでしょう」
と
もとこが言うと、
もとめはうつむく。
「私だったら怖いですよ」
と
アユメはわざと脅かす。
もとめは困っていた。
くそた、木太郎、ホウセイは怖い。
アスカ、ヒトメも怖い。
レイカはカがつくからダメか。
「5，4，3」
「じゃあ、永久くん」
「ここで怖さを見せないとな」
と
永久は笑った。

「もとめのトイレとウォシュレット」

「えーと、メだっけ。
簡単過ぎだから、言葉を選ぶか」
永久は何か考えている。
すると、
もとめの顔は少し青ざめて、
「ご、ごめんなさい、
ちょっとだけ、席はずさせて、ごめんなさい」
と言うと、
「また、ウンコ、
ちゃんとトイレットペーパー確認してしなさいよ」
と
もとこが、
もとめにはきつい一言を言う。
「はい」
と
もとめは言うと走って部屋に戻る。
「なんか、
もとめ先生て、
もとこ先生の子供みたいですね」
と
木太郎がまた調子よいことを言うと、
「俺、子供の頃ペーパー確認しないでアレやって、
大声だしてかあちゃんに、
持ってきてもらったから、
よく母ちゃんに怒られたよ」
と

もとこがいなくなったせいか、
さっきまで不機嫌だったくそたが笑わす。
「俺のところはウォシュレットがあるから問題なし」
と
木太郎が言うと、
「バーカ、簡単に拭いてから、ウォシュレット使うんだよ」
と
ホウセイが言う。
「そうなの？」
と
ヒトメも首を傾げる。
「簡単に拭かないと飛び散るだろう」と
ホウセイが言うと、
「何でですか」
と意外なことに
チウメが真面目な顔で訊くと皆笑いだした。
「なんかチウメちゃんらしくないから、
この話しはやめよう。
イメージ崩れるよ」
と
永久が言うと、
「私ならいいの」
と
ヒトメは、
ちょっとムッとして感じで言う。
「おバカは何訊いてもいいの」
と
アスカが、
ヒトメの頭を犬の頭のように撫で回して言うと、
皆大笑いした。

ＢＡＤＥＮＤ２連発ＢＡＤＥＮＤ「おもらしもとめＡ」おまけ（前書き）

＊おまけですので、
読み飛ばしてください。
「もとめのトイレとウォシュレット」に続きます。

BADEND2連発BADEND「おもらしもとめA」おまけ

もとめは焦っていた。
何故かおなかの調子が悪かった。
ゲームの際、
緊張しすぎて、
喉が渇いたので飲み物を飲み過ぎたせいか、
ストレスで胃がやられているせいかもしれない
と思っていた。
もとめには、
腹が痛く、
部屋までの距離が凄く長く感じられた。
やっと部屋についたと思ったら、
鍵がなかった。
探したがなかったので、
試しにドアノブを開けたら、開いた。
そのときだ。
やってしまったのは。
ドアが開いた瞬間、緊張感がなくなったのだ。
もとめは部屋に戻って泣いた。
しかし、
そうもしてられないので、
前のようなことがないように、
部屋に鍵をかけた後、とりあえず、
シャワーを浴び、洗濯した。
姉が呼びに来るまで待つしかない。
また、
バカにされるに決まっているが、

待つしかなかった。

しかし、
もう３０分も立つのに呼びに来ない、
姉の意地悪か？
洗濯物はないと言ったのも意地悪だったのか、
でも、そんなことを考えてもしょうがないと、
もとめは思い直した。
そして、
後で聞かれたら、
体調崩したということにして、
寝てしまおうかと考えていた。
すると、
もとめはトントンとドアをノックする音に喜んだ。
やっと来てくれたと。
問題は誰を連れてきたかだ。
とりあえず、
頭が痛いと言おうと思った。
「はい、どなた」
「私よ」
「あのね。頭痛くて」
「嘘でしょう。また、漏らしたんでしょう」
「本当、頭痛くて」
「じゃあ、今日はそのまま寝てなさい。
明日もずっと」
「えー」
もとめはとりあえず焦った。
でも、
明日になれば、

服も下着も全部乾くから、
それで済むと思って、寝てしまった。

もとめは目覚めた。
何かが違った気がした。
周りを見回す。
部屋が立派だ。
とりあえず、
２０７号室ではないようで、
もとめは安心した。

オンシラーズ高校の合宿は無事終わった。
生徒たちは大満足のようで
合宿中の面白いエピソードが学園に広がった。
中でも、
ゲームで負けそうになって逃げ出したという、
もとこの妹のバカなエピソードが
生徒の間で大ウケだったという。
（終）

ＢＡＤＥＮＤ２連発２ＢＡＤＥＮＤ「もとめに謝れ」おまけ（前書き）

＊こちらもおまけですので、
スルーしてください。

「もとめのトイレとウォシュレット」に続きます。

BADEND2連発2BADEND「もとめに謝れ」おまけ

生徒たちがバカ笑いしている中、
もとこはおちたと二人でその場を離れた。
「さっき見たんでしょう」
もとこはいきなりおちたに詰め寄る。
「いえ」
「正直にいいなさい！」
「はっ」
「はいっていったわね。
私聞いたわよ」
「ひどい」
「ひどいのは、嘘つきのあんたよ」
「す、すいません。つい」
「つい、見ましたで済まされるの」
「はい」
「じゃあ、
これからもとめに謝りに行きましょう」
「はい」

トントン
トントン
「おちたです」
もとめは慌てた。
「頭が痛くて」
おちたは、
もとこに言われたとおりに謝る。

「すいません。
僕がアレを見てしまったせいですね。
誰にも話しませんので、
許してください。
恥ずかしいことですが、
珍しいことではありません」
もとめは、
もとこが意図したとおり、
トイレットペーパーの芯を見られたと思い、
「いいのよ。私が悪いの」
「いえ、僕が」
「もう、許してあげなさい。
もとはといえば、
あんたが悪いのよ」
「はい、姉さん、
でも、
おちたくんに顔を合わせる勇気がなくて」
「もう忘れました」
「そんな」
「もとめ、
じゃあ、おちたくんを許すのね」
「許すのなんて」
「何て子なの、
こんなに謝ってるのに」
「あの違う意味で」
「おちたくん」
「姉さん」
もとめが声をあげても、
返答はなかった。
もとめは落ち込んだ。

言い方を間違えたと。

一方、
「残念だったわね。
あの子、根に持つタイプだから。
悪いのはあの子なのに、
私が代わりに謝るから許してね」
「いえ、
僕が最初に嘘をついたばかりに、
それについ気になってじろじろ見たばっかりに」
おちたも落ち込んだ。

もとこは、
おちたが落ち込んだ理由を、
トイレットペーパーの芯を見たせいにして、
おしゃべりなヒトメに話した。

ヒトメは、
あっと言う間に生徒全員に話し、
その結果、
もとめは生徒全員から冷たい目で見られることになり、
心を病んだ。

現在も、
もとめは入院治療中である。
一方、

おちたは、
数年後、
何故か年上のもとこと結婚することになったが、
それも、
もとこの策略であったか否かは定かではない。
（終）

「木太郎の怪談」（前書き）

「もとめのトイレとウォシュレット」に続きます。

「木太郎の怪談」

もとめはなかなか戻らなかった。
「負けそうだから、
逃げたんじゃない」
と
ヒトメが言うと、
「いや、おなかこわしたのよ」
と
もとこがしらっと言う。
「これじゃ、ゲームできないねえ」
と
永久が言うと、
「じゃあ、合宿延期の理由のとおり、
俺の話を訊いてくれ」
と
木太郎が鼻をほじりながら、言う。
「もとめがいない
とつまんないわね」
と
もとこが言うと、
ホウセイがボイスレコーダをもとこに見せて、
これで録音して訊かせてあげるといいですよと、
お節介なことをする。
「何で、こんな用意を？
まあ、いいわ。
木太郎くん、お願い」
「では、

もとこ先生のＯＫが出ましたので、
お話します。
絶対に悲鳴を上げないでください」
「そういうこと言う奴の話に限って、
怖くないんだよな」
と
くそたが言うと、
木太郎はにやりと笑う。
「みなさんは
まだ我が母校が男子高のオンシラーズ高校と
ファンタ女子学園に分れていたことをご存じですか」
「そんなのみんな知ってるよ」
と
ホウセイがいきなり木太郎の話のコシをおる。
しかし、
木太郎は平然と、
「そう、
まだ、
男子校と女子校と分かれていた時代、
ちょうど１０年前、
この屋敷で本当に猟奇的殺人事件が起きたのです。
しかも、
まだ、
犯人はつかまっていません。
その中の登場人物の名前の一部を話しちゃいます。
えー、
敬称は略させていただきます。
では、
びっくりしないで黙って聞いてください。
まず、

ホウセイ、
次にオチタ、
そして永久、
それに木太郎アレ、
みんな驚かないですね。
それだけじゃないんです。
えー、アユメ、
うん、チウメ、
そして、アスカ、
また、一文字違いで、
ヒトメにヒラメです。
そうです、
くそたとレイカちゃん以外はほぼ同じ名前なのです。
そして、
もし、
今夜か、
明日、
同じことが起きるといけませんので、
敢えて名前を特定しませんが、
このうちの多くが首を切断されて殺されているのです」
しかし、
木太郎が予想した以上に、
生徒たちは冷静だった。

「木太郎の怪談2」

「そして、
先生がお話したとおり、
　２０７号室にも死体があったということですが、
そこのキッチンにも死体があったのです」
ここで少しだけ、
びくっとした生徒がいた。
「さらに、
そこの露店風呂の更衣室にも
首無しの死体が転がっていたのです。
それだけでは、ありません。
そこのリビングにも死体があったのですが、
消えちゃったのです。
信用してませんね。
さあ、
ついてきてください。
凄いものをお見せします。
しかし、
決して、声を上げたり、
その中に入らないでください。
いいですね。
では、
管理人室で懐中電灯をとってから、
行きましょう。
後を離れないでついてください。
それから、
一切、声を出さないでくださいよ」

木太郎はそう言うと、
管理人室で懐中電灯を取ると、
キッチンへみんなを連れて行く。

木太郎はキッチンの奥を懐中電灯で照らすと、
プレートがあることをみんなに示す。

「あっ、本当だ」
と声を上げたおちたに向かって、
「しー」
と
木太郎が小声で口にひとさし指を当てる。
木太郎はプレートを
ポケットからだしたドライバーではずすと、
その下の数字が並んだ部分を懐中電灯で照らす。
そして、
ポンポンポンポンとボタンを押すと、
その上の方でカチッと音がした。
「うあー」
とまたおちたが声を上げると、
今度はホウセイがおちたの口を押さえる。
木太郎はプレートの上の方にある穴を懐中電灯で照らすと、
「絶対に声を上げないでくださいね。
地下にいる悪魔が上がってきますから」
と
木太郎は言ってから、
その穴に腕を突っ込んだ。

「ゲーム再開ともとこの油断」

木太郎が穴の中の取っ手のようなものを引くと、
扉が開いた。
「おー、すげえー」
と
くそたが大声をあげると、
いきなり、
木太郎に頭を思い切り叩かれる。
「ごめん」
木太郎がくそたを殴った拍子に、
取っ手を放したので、扉がしまりかける。
慌てて、
ホウセイが足を扉の隙間に入れて、
扉が閉まるのを防ごうとしたが、
扉が閉める力の方が強く足を挟まれてしまった。
「いてて」
今度はくそたが頭をはたき、
木太郎が慌てて、
また、取っ手を引いた。
「しー、
悪魔が上がったくると困るから閉めます。
あれ、何だ」
木太郎が何かしていたが、
みんな気づかなかった。

もとこは、
木太郎の話しを聞かず、
もとめの部屋に行っていたので、
木太郎が隠し扉を開けたことなどを
まったく知らなかった。

木太郎たちが戻ってすぐ、
もとこたちも戻ってきた。
「木太郎の怪談って全然怖くなくて、
つまらないから、また、ゲームやろうよ」
と
ホウセイが言うと、
他の生徒が全員頷いた。

ゲームは再開されたが、
なんと負けたのはもとこだった。
油断したせいもあったが、
もとこは、
実は、
明日の夜のある計画を練っていたのだ、
そのことで頭が一杯なせいもあった。
そして、
明日、
もとめともとこが対決することになった

「最終日前夜」

そして、
　何事もなく、
合宿1日延長後の最後の夜が来た。
「姉妹対決ですね」
アユメが言うと、
「何で対戦するのが面白いかなあ」
と
木太郎が言うと、
「相撲」
と
おちたが言って、
皆笑う。
もとこのある計画が待っていることを知らないので、
生徒たちは気楽だった。
もとこは、
二つのパターンを考えていた。
ゲームに勝った場合と負けた場合だ。
どちらの場合も、
計画自体は実行する予定でいたが、
内容はパターンが変わるので、
早めにゲームを決着したいと考えていた。

もとめは何かイヤな予感がしていた。
特に、

オオシマが消えたきり、
早朝来て、
何も食事を作らずに
すぐ戻って行ったというのが何かしっくりこなかった。
何となく、
オオシマがもとことつるんでいるような気がしていた。

オオシマは実はあるところにいて、
とても不安だった。
合宿を一日延長したということは、
もとこに迷いがあるのではないか
といい方にも考えてみたが、
言ったことは実行するのがもとこの性格なので、
本当にある計画を実行するのではないか
と心配でしょうがなかったのだ。
実際、
オオシマ自身もとこの命令するとおりにしたらよいか、
迷っていた。
もとこが、
早々と自分をもとめや生徒と遠ざけたのは、
自分に迷いが生じないようにするためだ
とオオシマは考えていた。

その日は早々と、
交代で露店風呂に入ると、
早めに皆食事を終えた。
そして、
ゲームの内容を最初に提案したのは、

もとこだった。
「今日は1対1なので、
5文字真ん中取りはどうでしょう?」
と
「以前は3文字だったけど、
それが5文字に変わるということですか?」
と
ヒトメが訊く。
「おバカ、
そうに決まってるじゃない」
と
アユメがヒトメのおでこを
指でピーッンとはじいた。

「姉妹対決１回戦」

「じゃあ
３回負けた方が２０７号室に今日泊まるのよ。
　いいわね。
じゃあ、最初、もとめから言う。
それとも私から、
もとめ、あんた決めていいわよ」
と
もとこが言うと、
「じゃあ、私から言わせてもらうわ」と
もとめが言う。
「どうぞ」
「じゃあ、なつやすみ」
「や、か、そうね。やきにくや」
と
もとこが言うと、
「何か先生らしくないよ」
と
木太郎が腹を掻きながら大笑いする。
「しー」
と
ホウセイに軽く頭をはたかれる。
「に、ね。にんきもの」
「あんた、少しは強くなったわね、
き、か、きんけんや」
「もとこ先生、
何とかやが好きだね」

と
また、
木太郎がしゃべると、
今度はくそたに頭を思いっきり叩かれる。
「いてー」
皆お笑いする。
「け、ね。けんちくや」
と
もとめがマネをすると、
木太郎は必死で笑いをこらえている。
「マネっ子ね。
ち、か。じゃあ、ちょうせい」
「いいの？」
と
ヒトメが言うと、
「真ん中じゃなきゃいいのよ、
おバカ」
と
今度はヒトメはアスカに言われる。
「う、ね。ねんきんか」
「やの次は課か」
と
ホウセイが小声でつぶやく。
「き、か。きょうかい。
チャペルの方よ」
「これは意外に長くなりそうだな」
と
永久が小声で呟く。
「う、ね。うんそうや」
「また、屋か」

と

木太郎がこらえきれず、

大笑いして、

また、くそたに叩かれた。

「そ、か。そうかいや」

木太郎はもう笑いがこらえきれなくなり、

「あの、僕席はずします」

と

小声で言って、

自分の部屋に戻って行った。

「女の意地」

「か、ね」
もとこはそう言うと、
「かくざとう」
と
すぐ言う。
もとめも、
「ざ、ね、ざっしだな」
ときり返す。
「しぶといわね。
洒落じゃないわよ」
と
もとめは時間稼ぎをしながら、
「しんでれら」
と
カウントが始まる前に言う。
「こんなに真剣に二人でやられると、
疲れるなあ」
と
永久がホウセイの耳元で囁く。
「コンテストの方がいいよな」
と
ホウセイが永久の耳元で囁く。
「何、二人こそこそやってんの？
あれ、木太郎くんは」
と

もとこも、
もとめの意外な抵抗に疲れてきたのか
イライラしたような感じで言う。
「すいません。
木太郎はウンコだと思います」
と
ホウセイは適当なことを言って笑わそうと思ったが、
誰も笑わない。
「でりけーと」
と
もとめはゲームに集中し、またすぐ言う。
「け、か?けいさんき」
と
もとこもすぐ切り返した。
「さるまわし」
と
もとめが真面目な顔で言う。
木太郎がいたら笑っただろうが、
今はそういう雰囲気ではない。
「ま、か、まくのうち」
「の、ね」
「のみねーと」
と、
また、
もとめがすぐ言い返す。
「ね、か、ねこのみみ」
「それはダメよ」
「何でよ」
「さるのみみとか、
たこのくちでも、よくなるじゃない。

インチキするんじゃないわよ」
と
もとめも実はいらついていたのか、
はっきり、
もとこに言ってしまった。
「さるのみみでも、たこのくちでもいいじゃない。
単語よ。
それに、
んとか最初から始まらないことばじゃないのよ。
どこがインチキなのよ。
負けそうだからって、因縁つけるんじゃないわよ。
そうだ。
じゃあ、生徒たちの意見訊きましょうよ」
「いいわよ、姉さん」
「木太郎くんがいないから、
9人でちょうどいいしね。
多数決で文句なしね」
「もちろんよ。
あたしが勝っても生徒をいじめないでよ」
と
もとこももとめも、
何故か自信をもって言った。

「生徒固まる」

困ったのは生徒だった。
もとめの言うとおり、
５文字でそれをやるのはインチキくさい
と生徒は誰もが思っていたが、
下手に、
もとこの機嫌を損なうと怖いし、
一応、言葉にはなっているので、
理由を聞かれるとつらいと思った。
こういうときに木太郎がいたら、
うまく引き分けに持っていけたのに
と生徒たちはみんな思っていた。
しかし、
木太郎は戻って来なかった。
「いてて、腹が痛い」
と
永久が逃げようとしたが、
仮病だ
とすぐわかるクサイ演技だったため、
全員の視線が冷たかったので、
永久は
「うーん、まだ、大丈夫です」
と言い直した。
「じゃあ、
ねこのみみでもＯＫだという人」
と
もとこが訊くと、

ホウセイ、永久、アスカ、アユメが手を挙げた。
もとこの顔が急にひきつり、
もとめはにやりと笑うと、
「じゃあ、
ねこのみみはダメだと思う人手を挙げて」
と
もとめが自信満々で言うと
くそた、おちた、レイカ、チウメが手を挙げた。
とたんに、
もとこの顔が笑顔に変わり、
もとめの顔が引きつった。
そして、
ヒトメが真面目な顔で
「私、
こういうことはバカだからわかりません」
と真顔で言ったので、
生徒たちはほっとした。
もとこも、
実はインチキだと思っていたのか、
急に機嫌がよくなり、
「もとめ、
これだけ意見が別れたんだから、
インチキだ
と言ったことは謝りなさい。
私もねこのみみはやめて、
ねじまわしに代えてあげるから、
OKにしてた方があんたも楽だったのにね」
と
イヤミたらしく、
にやりと笑って言った。

生徒がここは謝った方がいいと感じで
もとめに視線を送ったので、
もとめは悔し涙を堪えながら、
「ごめんなさい。
姉さん、私が悪かったわ。
それから、ちょっと、
疲れたので休憩させてください
みんな本当にごめんね」
と言って、
自分の部屋に帰ってしまった。
「あの子、いつもああなのよ。
すごく自分勝手で。
ごめんなさいね。
それに、まだすごく子供なの。
本当にバカでどうしようもない
妹だけど許してね」
と
もとこは謝る気もないのに、
もとめの悪口の意味でそう言った。
しかし、
今のやりとりで生徒の多くが、
もとこの性格が極悪で、
かつ、
嘘つきであることを確信し、
もとめが、
元デブで、
整形した
と言うのも、
もとこの嘘ではないか
と思うようになってしまったことに、

もとこは気づかなかった。

ＢＡＤＥＮＤ「好奇心と改悛」おまけ（前書き）

「女の意地」に続くＢＡＤＥＮＤです。一応載せましたがたいした内容ではないので、スルーください。

ＢＡＤＥＮＤ「好奇心と改悛」おまけ

抜け出した木太郎は笑いながら、
自分の部屋に戻ろうと思ったが、
問題の夜の２０７号室が気になって、
見に行こうと２階へあがっていった。
すると、
２０７号室の手前のもとこの部屋が少し開いていた。
もとこがしっかり閉め忘れたのだ。
木太郎は周りを見回すと、
もちろん、誰もいないので、
そっともとこの部屋に入った。
中は黒ずくめで、
しかも、
今回はもとめの写真にナイフが刺さっていたので、
びっくりした。
そのとき、
「もとこさま、もとこさま、オオシマでございます」
との声がテーブルの上にあった無線機から聞こえて来た。
「ゴホッ」
と
木太郎がセキのフリをすると、
「お嬢様、大丈夫ですか。
私よく考えたんですが、
やはり、
殺人はよろしくないと思います。
もとめ様を憎むお気持ちはよく理解できますが、
そのために、
生徒さんまで犠牲にするのはおやめになった方が

よろしいかと思います」
と
オオシマは木太郎が腰を抜かすようなことを言ってきた。
そのとき、
木太郎は地下室へ行く隠し扉に、
何故、
ガムテープが貼ってあったのか理由を理解した。
「そうね」
と
木太郎はわざと女のような声をして言うと、
「わかっていただけましたか」
と
オオシマはすごく喜んでいたようだった。
「明日呼ぶまで一切連絡しないように」
と
また木太郎は女っぽい言葉で言うと、
「そうですね。
気づかれたら、やばいですからね」
と
オオシマはマヌケなことを言ったので、
「誰かに聞かれたら困るから」
と同じような声で言うと、
「かしこまりました」
と
オオシマは言った。
びっくりした木太郎は、
対戦に夢中のもとこともとめの目を盗んで、
まず、
ホウセイを呼び出して、
すべてを話した。

ホウセイも、
腰を抜かしそうになったが、
このままではやばいので、
今度は、
木太郎が戻って、ホウセイが永久とその場を離れた。
こうして、
生徒が順に抜け出して、
もとこの計画を全員が把握した。
そして、
もとこの後にしりとりの強い木太郎やヒトメが座り、
もとめにサインを送って、
結局、
もとめが勝利した。
もとこは凄く悔しがったが、
もとこが負けると
「もう時間はとっくに過ぎてますよ」と
ホウセイが言って、
嫌がるもとこを２０７号室に強制的に連れて行き、
外から鍵を閉めて閉じこめた。
その後、
もとめにすべての事情を話した。

もとことオオシマの処分は、
もとめにゆだねられることになった。

もとめは、
もとこのフリをして、
無線機でオオシマの真意を試すつもりで、
「やっぱり、実行よ。早くきなさい」と

それだけ言った。
オオシマは少し考えいたのか、
すぐ返事はしなかったが、
結局、
オオシマは
「かしこまりました。
お嬢様に従います」
と
答えてしまった。
もとめは、
「じゃあ、
あんたはそこで餓死しなさい」
と言うと、
無線機の電池を抜いた。

生徒たちから、
合宿の最終日に、
もとこがオオシマと駆け落ちしてどっかに行ってしまったため、
生徒たち全員が歩いて帰る他なかったというクレームで、
学校は生徒たちの親への謝罪に追われたという。
また、幸い、屋敷がその後使用されることもなかったので、
もとめたちの幼稚な犯行は一生バレずに済んだという
（終）

「チクりたいおちたと止めるくそた」

「じゃあ、もとめが戻ってくるまで、
あたし、露店風呂入ってくるわ。
みんなも入る」
もとこが言うと、
女生徒は
「今は結構です」
と言うと、
「そう、また入ってもいいのよ」
もとこは言うと、
着替えも持たずに一人で露店風呂へ向かった。
「また、入る気かしら」
と
アユメがつぶやく。
「俺、
ちょっともとめ先生のとこ行って来る」
おちたがそう言って、
走っていくと、
くそたが慌てて追いかける。
「待てよ」
と
くそたがおちたに声をかける。
「何故止めるんだ」
「例の整形デブのこと、
もとめ先生にチクる気だろう。
下手に話すと喧嘩になるぞ」

「チクるって、
そうじゃなくて確認に行くだけだよ」
「さっきのやりとり見てわかったんだろう。
もとこ先生の嘘だって。
多分、みんなもそうさ。
だから、
わざわざチクる必要ないって」
「チクるんじゃないって」
「まあ、いいや。
いちいち確認しないでいいよ。
知らぬが仏とも言うだろう」
くそたらしくないことを言う。
「うーん、でも」
「よーし、それじゃあ。
俺の部屋にみんなを集めて意見を聞こうじゃないか。
それなら、文句ないな」
「ああ」
おちたは納得していないが、
くそたの勢いに押されて渋々うなずいた。

くそたとおちたは食堂に戻ると、
「ちょっと、
ここでは話しが出来ないことで、
みんなと相談したいことがある。
悪いが俺の部屋に集まってくれ」
くそたが言うと他の生徒は
うすうす感づいていたのか、
黙って頷くと、
くそたとおちたについて行った。

ＢＡＤＥＮＤ「お背中流します」（前書き）

「生徒固まる」に続きます。二日続けてのＢＡＤＥＮＤです。

BADEND「お背中流します」

「じゃあ、
もとめが戻ってくるまで、
あたし、
露店風呂入ってくるわ。
みんなも入る」
もとこが言うと、
女生徒は
「今は結構です」
と言うと、
「そう、また入ってもいいのよ」
もとこは着替えも持たずに一人で露店風呂へ向かった。
「また、入る気かしら」
と
アユメがつぶやく。
「俺ちょっともとめ先生のとこ行って来る」
おちたがそう言って、走っていくと、くそたも追いかける。

トントン
「だーれ」
「おちたです」
「くそたです」
「どうしたの。
重要な話しがあります」
「そう。でも」
「5分でいいから聞いてください」

「わかったわ」
もとめは二人を部屋に入れる。
「率直に聞きます。先生が元デブで、顔を整形したって嘘ですよね」
と
くそたがおちたの言おうとしたことを先取りしていきなりそう言う。
「えー、そんなでまかせが・・・。
姉の奴ね。
道理で、
みんなの視線が、
途中から変だと思ったのよ」
もとめは冷静そうに言うも、
手を強く握り絞め、
顔は明かに怒っていた。
「やっぱり、嘘だったんですね」
「あたりまえよ」
「この顔のどこが整形なのよ」
「すいません」
おちたが思わず謝ってしまう。
「いいのよ。
姉の奴が悪いんだから、
で、あいつは」
「露店風呂です」
「露店風呂！呑気にあの野郎」
もとめが急にキレた。
おちたとくそたは怖くなって、
「じゃあ、失礼します」

と言って、
逃げるように出ていった。
「ごめんなさい。ありがとうね」
と
もとめはすぐ気づき、優しく言い直したが、
二人とも明らかにもとめが怒っているのがわかっていたので、振り返らず、そのまま部屋を出た。

「やばかったかな」
「やばかったかもよ」
「部屋でじっとしてようか」
「その前にみんなに言って、
俺の部屋で成り行きを待とう」

おちたとくそたが食堂に行くと、
他の生徒たちも、
これは大げんかになると思ったのか、　くそたの部屋に避難することにした。

一方、
もとこは、
いい気分で湯に浸かっていた。
まさか、
おちたとくそたが、
もとめにチクリに行くとは思ってもいなかったからだ。
しばらくすると、
もとめが湯に入ってきた。
もとこは少し驚いたが、

「姉さん、ごめんね。
お詫びにお背中でも流します」
と
いかにも自分が悪かったような言い方をした。
「いいのよ。
反省していれば」
と
もとこはずうずうしく言うと、
「じゃあ、
あんたも今来たところだし、
もうちょっとしたらお願いするわ」　と
にやりと笑った。

「今日で最後なのね」
と
もとめが呟くと、
「あっという間の合宿だったわね」
と
もとこはある企みを持っていたので、　ただそう言った。

しばらくして、
もとめはもとこの背中を洗いながら、　「そう言えば、
姉さん、だいぶ痩せたわね」
と言った。
「そうね。
昔はもうちょっと太っていたけど、
母さんが死んでから痩せたのよ」
と

まるで、
もとめの母親がろくに食べ物を与えなかったので、
痩せたかのような言い方をした。
もとめは自分こそすごいデブだったクセにと思いながら、
背中を洗いあげると、
「ねえ、姉さん、
私って、整形したっけ」
とわざと訊いた。
「あら、そんなことないんじゃない？　誰がそんな噂流したのかしら」
と
もとこはすっとぼけた。
「姉さんじゃないの」
と
もとめが言うと、
「何で、私が」
と
また、すっとぼけた。
すると、
もとめは
「あら、背中に何かあるわ、
ちょっとじっとしててね」
と言った。

生徒たちは、
くそたの部屋でふざけあって遊んでいたが、
2時間くらいたっても、
二人とも呼びに来ないので心配になって、
代表のおちたとくそたが、

まず、
もとめの部屋に行った。
もとめは顔を出したが、
相変わらず、
調子が悪いと言っていたので、
「お大事に」
と言って、
すぐ帰ってきて、
みんなに報告した。

みんなは喧嘩にならなくて良かったと安心した。
もとこの方は、
みんなあんまり心配してなかったので、そのまま、生徒だけで遊んでいた。
結局、
深夜まで生徒たちは遊んでしまい、
そのままその日は解散となった。

翌朝、
女生徒が露店風呂に行くと、
何故か、
もとこが、
全裸で首をつって死んでいた。
結局、
生徒が何も余計なことを言わなかったので、
理由不明のまま、
自殺として処理された。
尚、
オオシマもそのまま消えたので、

オオシマによる他殺だという噂もたったが、
しばらくすると、そんな噂も皆忘れてしまったのだった。
（終）

「もとめの整形デブ」

くそたの部屋に全員揃うと、
くそたは部屋の鍵まで閉める。
「実は、
みんなもうすうす感じていると思うんだが」
と
そこまで言いかけてから、
「おちた、オタクから話せ」
くそたはおちたに話しの中身をふる。
「えー、
実は、
もとめ先生が元デブで、
しかも整形した
というのは、
もとこ先生の嘘だと思うんだ。
だから、
直接もとめ先生に訊こうと思ったら、
くそたに白髪がなんとかだと言われて」
「バカヤロー、知らぬが仏だよ。
白髪の後の意味がわからなくて、
考え込んだのかよ」
と
くそたが怒った。
ここで、
いつもなら木太郎が大笑いして、
逆に頭をくそたに叩かれるところだったが、
木太郎はいない。

ヒトメがくそたの反応を見て、
木太郎を探していなかったので、
「あれ、木太郎くんは？」
と言ったので、
他の生徒も初めて木太郎がいないことに気づいた。
「あいつ、
逃げたきりどこ行ったんだろう。
大事な話なのに」
と
おちたが言うと、
「いいよ。
あいつがいると話しが途中で止まるから、
みんなで話しあってから木太郎を呼びに行こう」
と
ホウセイが言う。
「じゃあ、
えーと、
くそたのことわざは抜きにして、
とにかく、
もとめ先生に真実を訊いた方がいいと思うんだけど、
どう思う？」
と
おちたが真面目に訊く。
「バカじゃないの
と言いたいところだけど、
おちたくんがもとめ先生を好きなのがわかるので、
はっきり言うわね。
絶対訊いちゃだめ。
もとこ先生は怖いわよ。
さっきも、

あんた、
どこかに連れて行かれてたじゃない。
あんたがバラしたら、
何されるかわからないわよ」
と
アスカが言う。
「それだけじゃなく、
もとめ先生ももっといじめられるよ」と
永久が言う。
「でも、
このまま整形デブのままにされてて可愛そうだよ」
と
おちたは言う。
「みんな、
それが嘘だとわかってるわよね」
と
アスカがもう一度言うと、
おちたを除く他の生徒は全員頷く。
「おちたはバカだから、
説明してやるが、
くそたの諺が、
この場合適切がどうかは疑問だが、
くそたが言いたかったのは、
みんなも、
もとこ先生の嘘がわかってるから、
もとめ先生が、
もとこ先生が整形デブだ
と言っていたことを知らない方がもとめ先生の気分も害さないし、
丸く治まるということなんだよ」
と

ホウセイが言うと、
「うーん、
あの諺ってこの場合適切じゃないかもしれないのか。
でも、
言いたいことは、
そのとおりだ」
と
くそたは言う。
「なるほど、そういうことか」
と
おちたもようやく理解したようだ。

「木太郎を呼べ」

「そうだ。木太郎を呼ばない」

と

おちたはそう言うと、

木太郎の部屋に向かった。

「おちたくんも理解したようね。

万一、木太郎くんが

しゃべったら大げんかになることにね」

と

アユメが言う。

しばらくすると、

おちたが木太郎を連れてきて、

集まった理由を説明した。

「オタク、バカだな。

でも、くそたが止めてよかったな」

と

木太郎は笑う。

「いいか！

重要なのは、

今日明日、何事もなく過ごして無事に帰ることだ。

おちたは悔しいだろうが、

合宿中はもとこ先生の機嫌をとっておいて、

さっさっと家に帰ればいい。

そして、

もとめ先生の話は学校で一切しなければいいのさ」

と

ホウセイは言う。

「そうよ。それが無難よ。
もとこ先生は怖いから」
と
アスカも同意する。
「そうしよう。おちた、いいな」
と
永久が言うと、
他もそうだという顔で頷いたので、
「わかった。我慢するよ」
と
おちたも納得した。
「で、この後、どうする?」
と
永久が言うと、
「ここで待つのが無難だよ」
と
ホウセイが言うと、
「そうね。
もとこ先生が風呂から上がって、
呼びに来たら、
食堂に戻って適当にやりましょう」
と
アスカも言う。
「しつこいけど、
もとこ先生の機嫌を損ねないように」
と
ホウセイがまた言う。
「もとめ先生、大丈夫かなあ」
と
おちたがまた言うんで、

「大丈夫だよ。
姉妹だから慣れてるよ」
と
くそたが言う。
「そうそう」
それだけヒトメが言った後、
「あのさあ、やっぱりやめよう」
と
口を閉ざす。
「何だよ。気になるなあ」
と
木太郎が鼻をほじりながら言う。
「私ももとこ先生のことで思うことあるけど、
合宿ももう終わるんだから、やめた方がいいわよ」
と
アユメが余計な一言を言って、
「何あんた余計なこと言ったのよ。
もとこ先生のことだとバレたじゃない」
と
ヒトメがさらに余計なことを言う。
「二人とも、おバカ」
と
アスカに言われ、
アユメとヒトメは
お互い顔を見合わせて舌をだした。
（続く）

「もとこの秘密」

「もとこ先生には、
何か秘密があるんだなあ」
と
木太郎がヒトメとアユメの顔を交互に見て言う。
「私イヤだ」
「私も」
二人はもとこが怖くてしゃべりたがらない。
「じゃあ、もとこ先生が来たら、
言い付けようかなあ。
二人が何か先生の秘密知っているって」
と
ずる賢い木太郎が言う。
すると、
「やめて、それだけは。
言うならアユメだけにして」
「ああ、ヒトメずるい。
木太郎くん最初に言いだしたのはヒトメよ。
それだけはちゃんと言ってよ」
「何よ。
もとこ先生が元デブだった何て、
私言った?
あっ・・・」
ヒトメは慌てて口を押さえたが、もう遅かった。
「おいおい、
余計なこと聞かせるなよ」
と

木太郎ががっかりした顔で言うと、
「オタクがこの二人のおバカを脅かすからだろう」
と
ホウセイも怒っているのか、
ショックなのか、
微妙な顔で言う。
「あー、いやだ。
変なことを聞いてしまった。
明日まで我慢できるだろうか」
と
永久は、
はたからみれば、
おおげさに頭を抱えるが、
本人はいたって真面目だった。
「あー、あー。
おしゃべりがここは多いから怖いなあ。
特にヒトメとアユメと木太郎くんは」
と
アスカも憂鬱そうな顔をする。
「何で俺がおしゃべり何だよ」
と
木太郎が言うと、
「おまえなあ。
二人を脅かしておいて、
何がおしゃべりじゃないだ。
それに、すぐ笑うだろう。
おまえが一番怖いんだよ」
と
くそたが木太郎の頭を叩く。
「はい、もう笑いません」

と

木太郎は頭を下げるが、

みんながすごく憂鬱だったので、

何故、

もとこが元デブなのかまで聞かずに、

もとこ＝元デブを確定的事実にしてしまった。

「木太郎をどうにかしろ」

もとこ＝元デブ
という生徒全員の認識は誰もを無口にした。
そして、奇妙な沈黙が続いている時、
トントン
そう、もとこの呼び出しである。
生徒は扉を開ける前にそれぞれ平静を装うと、
バラッバラと食堂に戻って行った。
食堂に生徒たちが着くと、先にもとめが来ていた。
「ごめんなさいね。私のせいで、時間をつぶさせて」
もとめは立ち上がって、頭を下げる。
生徒たちは事情がわかってるんで、
「いえ」と同じく軽く頭を下げてから、
パラッパラッと着席する。

ゲームはまさに女の意地を賭けた熾烈な争いだった。
もとめも相当タフだった。
生徒も止めるに止められない雰囲気だった。
が、二人だけのやりとりなので、みんなあきてきた。
そういう状況だったので、
もとこが
「う、ね」
と
言った後、
すぐ、
「すもうとり」
と

言ったとたん、
木太郎が大笑いしてしまったのだ。
しかし、
そこはホウセイ
「誰かさんじゃあるまいし」
と
木太郎の方を見て呟くと、
もとめが次の言葉を考えている間に、
もとこの方を見てウインクをした。
もとこは、
木太郎がもとめのことを笑ったんだと勘違いして、
ホウセイにウインクして返したので、
生徒たちは顔には出さないが、
木太郎以外の全員、
ほっとしたと共に、
どうにか木太郎をこの場から追い出さない
といけないと思い始めた。
しかし、なかなかチャンスはなく、
もとこともとめの熾烈な争いはまだまだ続いていた。
ホウセイが、
木太郎を見ると、
どれだけ自分が危ないことをしたのか
まったく自覚がないのか、
鼻をほじくりながらアクビをしたりしていた。
永久も、
やはり木太郎を観察していたが、
次に、
どちらかデブに近い言葉を言ったら、
また、
大笑いしそうな緊張感のなさがぷんぷんしていたので、

どうにかこいつをこの場から追い出さないといけないと考えていた。
しかし、
二人とも、
自分が木太郎を誘ってどこかに連れて行っても、まだ、
他に少しだけ危ないヒトメとアユメもいたので、
自分がこの場を去ることは危険だと思っていたので、
木太郎を誘って例えばトイレに行くとかの方法をとれずにいた。
そして、
二人が心配していたように二度目の危機が来た。
もとこが
「じ、ね？」
と言いながら、
うーんと唸りながら、
「たいじゅう」
と答えたとたん、
また、
木太郎が
「あまり笑わせないでくださいよ」
と言って、
大笑いしてしまったのだ。
もとめは何で木太郎が笑ったのか気がつかなかったが、
もとこが生徒の方を見たので、
今度は永久が、自分の口を押さえた後、
生徒の方を見てわざと笑わないようにとの仕草をして、
最後にもとこに向かって、
もとめを横目でそっと見ながら、
人差し指を口に当てて、
しーという合図をした後、

両手で、
もとめに見えないように、
×を作って、
もとこの笑いを誘い、
どうにか切り抜けた。

「まさかのくそた」

もとこは、
木太郎やホウセイ、
そして、
　永久の行為がとても嬉しかった。
もちろん、
もとめのことを笑っていると思っていたからである。
だから、
意地悪なもとこのこと、
もっと笑わせようと考えるようになっていた。
他方、もとめの方はしりとりの回答に
必死でそれまでは
まったく木太郎の笑いの意味を理解していなかった。
そして、
ついに3度目の時が来てしまった。
もとこが、
「ぐ、か」
と言うと、
にやりと笑って
「やせぐすり」
と言ったのだ。
その瞬間、
くそたが木太郎の左のすねを思いっきり蹴ると、
「てめえ、さっきから、
人にハナクソ投げつけて汚ねえんだよ」
と
わざと怒ってみせた。

木太郎はキレた時のくそたの怖さを知っていたので、
「ごめん、許してくれ。
おちたにぶつけようと思ったんだ。
本当だ」
と
言い訳したので、
「そんなにハナクソ投げたければ、
自分の部屋でやってこい」
と
くそたが大声で怒鳴ったので、
木太郎は蹴られた足をひきづりながら、
泣きそうな顔で自分の部屋に帰って行った。
「てえめ、二度と来るなよ」
と
くそたが言うと、
「まあ、くそたくん、
そんなに怒らないで」
と
もとこが演技するくそたをなだめ、
もとめも
「そうよ。あの子のクセなのよ。
あれくらいで勘弁してあげなさい」
と言ったので、
「すみません。
つい、
かっとなってしまいまして、
せっかく、
緊迫したゲームに水を差してしまい」
と
くそたは土下座までして謝った。

このくそたの行動と土下座は
ヒトメをますます虜にすると共に、
ホウセイや永久をはじめとする他の生徒たちを感心させた。
そして、
その後、
キモ男３人衆の評判を著しく高めることの１要素
となったのである。

「ひとときだけのやすらぎ」

「くそたくん、もう頭を上げなさい」
「そうよ」
「ねえ、もとめ、少し休憩しない」
「いいの」
「明日で最後だから1時間休憩しましょう」
「じゃあ、姉さん、
一緒に風呂入ろう」
「そうね、
みんなお疲れだけど一時休憩しちゃっていいかしら」
と
もとこがいやに下手に出たので、
「どうぞ、先生方こそお疲れで、
僕たちはホウセイの部屋に行ってますので、
ゆっくりお休みください。
明日で終わりですから」
と
永久が言うと、
「そうですよ。
先生、今日が最後の夜ですから、
のんびり楽しくやりましょう」
と
ホウセイも言う。
「じゃあ、お言葉に甘えて」
もとこはそういう調子のいいことを言うと、
もとめと二人で露店風呂に向かって行った。
二人が露店風呂の中に入るのを確認すると

生徒たちは、
いっせいに木太郎の部屋に向かった。

おまけＢＡＤＥＮＤ「木太郎の反省？」

＊少し前の９月３０日分の「木太郎をどうにかしろ」に続きます。

もとこは、
木太郎やホウセイ、
そして、
永久の行為をとてもおもしろがっていた。
もちろん、
もとめのことを笑っていると思っていたからである。
だから、
意地悪なもとこのこと、
もっと笑わせようと考えるようになった。
他方、
もとめの方はしりとりの回答に必死で
それまではまったく木太郎の笑いの意味を理解していなかった。
そして、
ついに3度目の時が来てしまった。
もとこが、
「ぐ、ね」
と言うと、
にやりと笑って
「やせぐすり」
と言ったのだった。
すると、
木太郎がまた大笑いした。
そこで、

また、
ホウセイと永久がフォローを考えているとき、
何も知らないもとめが
「イヤだ。
木太郎くん、知ってたんだ。
だから、さっきから笑ってたんだ。
誰から、
姉さんが元デブだって聞いたの」
と
思わず、本当のことを言ってしまったのだった。
これに対し、
木太郎は腹を抱えながら、
「ヒ、ヒトメちゃんと、
ア、アユメちゃんから、
聞きましたが、
痩せ薬で、
もとこ先生痩せたんですか」
と
とんでもないことを言ってしまった。
すると、
もとこはどこに隠し持っていたかナイフを取り出すと、
「ヒトメ、アユメ何で知ったんだ！」と凄い形相で怒鳴ると、
もともとバカなので、
2階へ逃げ出し始めたヒトメとアユメを追いかけて行った。
「そっちは」
と
ホウセイは言ったものの、
「早く逃げないと、
帰りにやられるぞ」
と

永久が言ったので、
ヒトメとアユメ以外は玄関から外へ逃げた。

結局、
　木太郎のせいで、
ヒトメとアユメはもとこに殺され、
もとこは殺人犯として逮捕された。
その後、
世間的には、
自分のせいでヒトメとアユメが殺されたと思いこんだ失意の二人、
すなわち、
自分の愚かな行為に恥じ、そして、反省した、
もとめと木太郎が互いになぐさめ合い結婚するに至った
といわれているが、
木太郎が、
本当にあの後反省していたとは、
今でも、
そこにいた他の生徒は誰も思ってはいないのである。
（終）

「木太郎に厳しく」

生徒たちが木太郎の部屋に行くと、
木太郎はいなかった。
「くそたの部屋かもな」
と
おちたが言うと、
「怒鳴られた奴の部屋に行くかなあ」と
ホウセイが首を傾げると、
「あいつバカだけど、
ずる賢いから、
ごまをするために部屋の掃除でもしてるんじゃないか？」
と
おちたが言い返す。
「そうかもな。木太郎の性格なら。
じゃあ、
くそたの部屋に行ってみよう」
と
永久がおちたの意見に賛成したので、
くそたの部屋に行くことになった。
しかし、
くそたの部屋の鍵は閉まっていた。
「ほらな」
と
おちたが言うと、
「でも、何で、鍵を閉めるんだよ」
と　永久が首を傾げる。
「そうだよ。
鍵開けたまま出たんだぞ」

と
くそたが言うと、
「そういう問題じゃなくて、ごまをするのに、何で、くそたの部屋に鍵をかけるんだよ」
と
ホウセイが言う。
「あー、そうか？
もしかしたら、
自分が何で怒られたのか理解してないで、すねってんじゃないのか」
と
おちたが違うことを言いだしたので、
「俺が怒り過ぎたかな」
と
くそたが言うと、
「やだー！
中で首吊ってるんじゃない」
と
ヒトメが不吉なことを言いだす。
「そうかも。止められないように、鍵をかけたのかも」
と
アユメまで言いだす。
「いやー、
あいつはそんなヤワじゃないよ」
と
おちたはまったく心配していない。
「それより、
早く、鍵。
仮に自殺しようとしてたって、

まだ、
間に合うかもしれないじゃない」
と
アスカが言うと
「そうよ」
と
レイカも言う。
「木太郎くん、生きていて」
チウメが祈るように手を合わせる。
「いや、心配ないよなあ」
おちたが女子が不吉なことを言いだしたので、
少しだけ不安になって言うと、
「ああ、あいつが自殺するわけがなあ」
くそたも首を捻りながら、鍵を開ける。
「よし、開いたぞ」
くそたを先頭になだれこむように、
皆がくそたの部屋に入ると、
木太郎は、
腹を出したまま、
いびきをかいて寝ていた。
「やっぱりな。
起こされたくないから、
鍵をかけたのか？
本当、
こいついい根性してるよ」
と
おちたが呆れた顔をして、
起こそうとすると、
「寝かしておいてあげましょう」
と

チウメが言うと、
レイカ、アユメ、ヒトメも頷いた。
「だめだめ、
こういう奴は甘やかしちゃだめ」
と
くそたが反対のことを言うと、
「そうそう、
こいつに下手な優しさは禁物」
と
女には優しいおちたが、
いつもハナクソをつけられているせいか、
木太郎には厳しい。
「デコッピン1」
「デコッピン2」
「いてて」
と
おちたとくそたの攻撃に木太郎は慌てて起き上がる。
「何だよ。
せっかく一人でのんびり寝ようと鍵まで閉めたのに」
と
木太郎はさっきのことは忘れたかのように、
生意気な口を聞く。
「ほらね。
反省してないだろう。
こいつが自殺するはずないじゃん」
と
おちたが笑うと、
「心配して損しました」
と
チウメが笑顔で舌を出してみせた。

BADEND?「木太郎にもやさしく」

＊「ひとときだけのやすらぎ」に続きます。

生徒たちが木太郎の部屋に行くと、
木太郎はいなかった。
「くそたの部屋かもな」
と
おちたが言うと、
「怒鳴られた奴の部屋に行くかなあ」と
ホウセイが言うと、
「あいつバカだけど、ずる賢いから、
ごまをするために部屋の掃除でもしてるんじゃないか」
と
おちたが自分の考えを言う。
「じゃあ、行ってみよう」
と
永久が言って、くそたの部屋に行くと、
鍵が閉まっていた。
「ほらな」
と
おちたが言うと、
「でも、何で、鍵を閉めるんだよ」
と　永久が首を傾げる。
「そうだよ。鍵開けたまま出たんだぞ」
と
くそたが言うと、
「そういう問題じゃなくて、

ごまをするのに、何で、くそたの部屋に鍵をかけるんだよ」
と
ホウセイが言う。
「変だよな、自分が何で怒られたのか理解してないで、すねってんじゃないのか」
と
おちたが言うと、
「俺が怒り過ぎたかな」
と
くそたが言うと、
「やだー、
中で首吊ってるんじゃない」
と
ヒトメが不吉なことを言いだす。
「そうかも。止められないように、鍵をかけたのかも」
と
アユメまで言いだす。
「あいつ、
意外に気が小さいかもしれないなあ？」
と
おちたまで急に変なことを言いだす。
「俺のせいか」
「くそた、アレは立派だったよ。
木太郎は土下座をしたことしらないんだよ。
運が悪いのさ」
と
永久がなぐさめる。
「そうよ。
あそこで木太郎くんのバカ笑いを止められたのは、

くそたくんだけよ」
と
ヒトメが言う。
「そう、
木太郎くんもそれがわかれば成仏するわよ」
と
アユメも言う。
「それより、早く、鍵。
まだ、間に合うかもしれないじゃない」
アスカが言うと
「そうよ」
と
レイカも言う。
「木太郎くん、生きていて」
チウメが祈るように手を合わせる。
「よし、開いたぞ」
くそたを先頭になだれこむようにみんながくそたの部屋に入ると、
なんと、
木太郎は、
たしかに泣いたあとはうかがえるが、
腹を出したまま、
もういびきをかいて寝ていた。
「何だよ、こいつ」
と
くそたが起こそうとすると、
「寝かしておいてあげましょう」
と
チウメが言うと、
皆頷き、
ホウセイの部屋に行った。

「やっぱ、あいつは大物かもしれないなあ」
と
おちたは呟いた。
ホウセイの部屋では、
木太郎の笑いでひやひやしたことや、
くそたの土下座話、
そして、
木太郎が自殺した
と全員思いこんでいたことなどの話しで、
さっきまでの緊張感など忘れたように、
盛り上がっていた。
特に自殺した
と思っていた木太郎が腹を出したままいびきをかいて寝ていたところになると、
皆腹を抱えて笑っていた。
そんな話しをしていると、
トントンとノックの音がし、
返事もしないうちに、
「何か楽しそうね」
と
もとこともとめが入ってきたので、
ホウセイが木太郎の話しだけしてごまかした。
「木太郎くんらしいわね」
と
もとめが言うと、
意地悪くもとこが
「でも、何で木太郎くん、
その前も2度ほど笑っていたのかしら」
と言った。
もとことしては、

もちろんもとめのことを思いださせて
生徒に笑わせるつもりだった。
鋭いホウセイが、
「木太郎のことで笑わせないでください」
と
また同じようにもとめに見えないように
ウインクをしたので、
もとこはその時は上機嫌だった。

しかし、
ゲームは意外にも
上機嫌になって油断したもとこが負けてしまった。
そして、
勝ったがために油断したもとめが、
つい、
「姉さん、
そういう風に油断すると、
また、デブに戻るわよ」
と
言ってしまったのだった。
結局、
その言葉にキレたもとこが、
どこかに隠し持っていたナイフでもとめを刺した後、
自らも首すじを切って自殺した。
悪運が強いのか、
もとこが油断負けした原因を作った、
木太郎だけはその悲惨な光景を目撃しないで済んだのであった。
（終）

「木太郎には説教」

＊「木太郎に厳しく」に続きます。

ホウセイの部屋に行って、
おちたとくそたが、
木太郎に説教しようとすると、
「さっきまで、ヒヤヒヤしていたんだから、
楽しい話ししようよ」
と
ヒトメがわざと甘い声で言ったので、
まず、
ホウセイが、
「木太郎も懲りただろうからもういいんじゃないか」
と
言った後、
「そうだな。
お迎えが来るまでバカ話でもして楽しもう」
と
くそたが言ったが、
「ここが大事なんだ。
くそたオタクなんか土下座までしたんだから、
ここはきちんと説教しておかないと、
ほら、
木太郎またハナクソほじくってるぞ。
こいつ絶対反省してないから、
このままだとまた懲りずにやらかすぞ」

と
おちたが強行に反対したので、
結局、
おちたとくそたが部屋の片隅で
木太郎に説教をすることになった。
他方、
キモ男3人衆以外は、
木太郎の笑いでひやひやしたことや、
くそたの土下座話、
そして、
木太郎が自殺したと女子たちが思いこんでいたことなどの話しで、
盛り上がっていた。
そんな話しをしていると、
トントンとノックの音がし、
返事もしないうちに、
「何か楽しそうね」
と
もとこともとめが入ってきたので、
ホウセイが木太郎の話しだけしてごまかした。
「木太郎くんらしいわね」
と
もとめが言うと、
木太郎がもとめのことを笑っていたと思いこんでいる、
もとこが、
意地悪く、
「でも、
何で木太郎くんその前も2度ほど笑っていたのかしら」
と
言った。
すると、

木太郎は最初何か言いかけたが、
おちたとくそたの説教に懲りたのか、
「先生、今はその話しやめましょう」
と言って、
にやりと笑ったので、
もとこは満足して笑うだけですんだ。
一瞬ドキリとしたおちたとくそた以外の生徒は、
おちたの言うとおり二人が説教しておいて、
正解だと思った。
「じゃあ、お待たせしたけど、
行きましょう」
と
もとこがやけに優しく言って、
先に部屋を出て行くと、
おちたに肩を叩かれたくそたが木太郎の耳元で
「今度笑ったら、この程度じゃ済まないからな」
と囁くと、
木太郎は黙って頷いた。

「変な声」

おちたとくそたに説教された上、
　ホウセイの部屋を出る際に、
くそたに脅かされた木太郎は、
内心ふてくされていた。
そこで、
食堂には行かないで自分の部屋に戻ろうか
とも思ったが、
また、
あの二人に説教されるのもうざいと思い、
どうしようか迷って、
２階をうろちょろしていた。
すると、
誰もいないはずのもとこの部屋の前を通ると、
変な声のような音がかすかだが聞こえた。
周りを見回し、
扉を開けようかと思ったが、
あいにく鍵は閉まっていた。
ドアに耳を押し当ててみるが、
変な声がしているくらいで何を言ってるのか
さっぱりわからなかった。
テレビもラジオもないはずだし、
木太郎は疑問に思ったが、
管理人室まで鍵を取りに行ったら食堂の連中に
見つかってまた何か説教されそうだし、
もとこに訊くのもまずい気がして、

結局、
薄気味悪くなって、
みんなのいる食堂に渋々ながらも行くことにした。

食堂では、
相変わらず、
二人の熾烈というか滑稽な戦いが続いていた。
木太郎は、また笑うと、
くそたのことだから今度は本当に思いきり殴られる
と思い、
後の方でなるべく二人の声を聞かないよう、
まったく別のことを考えていた。

どっちもさすがに疲れてきたのか、
ケアレスミスが続き、
最初にもとめが2敗したが、
すぐもとこもミスってしまい、
結局、
2敗づつで並んでしまった。
生徒たちは、
もとこが勝てば丸くおさまると思っていたが、
また、
もとこが、
「チョンボの連続でつまらないから、休憩しない」
と言いだし、
「私はいいけど、みんなは」
と
もとめが生徒たちに訊いてきたので、
生徒たちは本音はうんざりしていて、

このまま二人とも疲れているところで勝負を続けてもらい、さっさと終わらせて欲しいと思っていたが、

「もちろん、

ここまで接戦できた訳です。

最後の1戦ですからフルパワーで闘ってください」

と

ホウセイが調子のいいことを言ってしまったので、全員頷く他なかった。

「これからどうする？」

もとこともとめが
また露店風呂にでも入るのかと思っていたら、
もとこともとめはキッチンへ行って、
軽食と缶コーヒーを取ってくると、
「ちょっと部屋で横になってくるからそうね。
後1時間だけ待っててくれる」
と言って、
もとこが先に部屋に戻って行った。
もとめも
「悪いわね」
と一言だけ言って、
同じように部屋に戻って行った。
「俺たちもまた何か喰おうぜ」
と
くそたが言うと、
ヒトメが
「じゃあ、男子は待ってて、
適当に何か持ってきてあげる」
と言うと、
女子たちがキッチンへ入って行った。

木太郎はホウセイの肩をそっと叩くと、
くそたたちに気づかれないように、
ホウセイを自分の部屋に連れて行き、
もとこの部屋の外で聞いた、
変な声の話しをした。

すると、
ホウセイが、
「下手に話すとまずいと思って黙っていたんだけど、
俺は変な声は聞いてないけど、
もとこ先生が電話で誰かと話しているような声を聞いたんだ、
でも、
電話はないよな」
と
真面目な顔で話した。
「やっぱり変だよな」
と
木太郎が言うと、
「今、みんなは何か食べてるだろうから、
聞きに行ってみようか」
と
ホウセイから言いだした。

そこで、
二人でもとこの部屋の戸に耳を当てると、
二人とも、
もとめの話し声とかすかだが変な声が聞こえるのを確認すると、
二人はすぐ逃げるように、
木太郎の部屋に戻った。
「聞いたか？」
「ああ、間違いない」
「もとこ先生が電話か何かで誰かと話してた」
「もう少しだから、
寝ないで待ちなさいって、
聞こえなかった」

「俺は、待ちなさいくらしか」

と

ホウセイは木太郎の問いに答える。

「どうする？」

「うーん、不気味だな」

「でも、ここに電話ないよな」

「どうする？」

二人はどうしようか、互いに腕を組んで考え始めた。

「木太郎とホウセイの妄想？」

木太郎とホウセイは
考えながらも、
もとこがとんでもない計画をしているのではないか
と少し恐ろしくなっていた。
「あのさ、
オオシマさんが消えたことと関係ないかなあ」
「実は俺もあの変な声
ってオオシマさんかなあと思ってたんだあ」
「うーん、じゃあ、そうかな」
「あっ、地下室憶えているか」
「ああ」
「あそこに、
ガムテープが貼ってあったから、
ホラ、
これ剥がしたんだけど、
これ戻した方がいいかなあ」
木太郎が言うと、
「難しい問題だな」
また、二人は腕を組んで考え始める。
「もとめ先生をいじめるだけなら、
こんな手の込んだことはしないよな。
もうずいぶんいじめてるもんなあ」
ホウセイが、
木太郎の目をじっと見つめると、
「いいか、

びっくりして大声だすなよ。
もちろん、腰を抜かすなよ」
と
言う。
木太郎がゴクリとツバを飲む。
とても、
ハナクソをほじる余裕はないようだった。
「例えばだよ、
俺たちを、
オオシマさんが皆殺しにする。
そして、
もとめ先生のせいにする」
「じゃあ、
もとこ先生とオオシマさんはどうするだよ？」
「だから、
オオシマさんが消えているんだよ。
いいか、
もとめ先生がいじめに耐えられなくて暴れ出して、
俺たちを殺し回ったことにして、
オオシマが、
もとこ先生だけ助けだしたことにして、
正当防衛を理由に、
もとめ先生を殺し二人だけ助かるんだよ」
「オタク、
よくそんな怖いこと考えられるなあ。
俺は、
せいぜい、
もとめ先生と、
もとめ先生を好きなおちたあたりだけが殺されるのかと思ったんだけど、

でも、
おちたは、
何だかんだ言ってもいい奴だから
それがかわいそうでなあ」
「甘いなあ。
いいか。
俺とオタクだけだよ。
今もとこ先生が味方だと思ってるの。
アスカちゃんや永久は、
最初からもとこ先生を怖がっているし、
ヒトメとアユメはおしゃべりだから、
後日の事情聴取で何喋るかわからないから危険だろう。
なら、
全員殺しといて、
オオシマがずっといたことにして、
二人で口裏合わせできるだろう」
「オタク、
頭いいねえ。
そうか。
整形疑惑や元デブだけでもしゃべったら、
警察が調べたら、
すぐわかるもんなあ」
と
木太郎は、
ホウセイの考えがそんなに鋭くもないのに、
しきりに感心しながら、鼻をひくひくさせた。

「悩む木太郎とホウセイ」

「問題はオタクが剥がしたガムテープだよ。
おそらくそれを貼っておけば、
オオシマさんは、
地下から出て来られるんだよ」
「じゃあ、剥がして正解じゃないか」と
木太郎はとたんに鼻をほじりだす。
「またまた、甘いなあ、いいか。
オオシマさんか、
もとこ先生が気づいたらどうするんだ？
多分、
二人は無線機のようなもので話しているから、
どっちかが気づけば、
もとこ先生がまた貼り直し、剥がした奴を探すよ。
そして、先に殺すよ」
「えー、俺が？」
木太郎は鼻をひくひくし始めたかと思うと、
一瞬身震いまでした。
「待てよ！
落ちつけ。
それは一つの可能性だろ。
もし、
逆にオオシマさんも、
もとこ先生も気づかなければチャンスはある」
「なるほど、そうか・・・
ふー」

木太郎はまた鼻をほじりだす。
「さあ、どうするかだな」
ホウセイは、
うつむいてまた考えこんだ。
一方、
木太郎は、
もう一人、
頼りになる知恵者がいないか
と候補を考えていた。

くそた、絶対だめ。
おちた、危ない。
永久、いいかも。
ヒトメは論外。
アユメちゃん、ちょっと危ない。
アスカちゃん、いいかも。
チウメちゃん、
気が小さそうだから可愛そうだ。
レイカちゃん、いいかも。
さあ、誰にしようか。

木太郎は迷っていた。

「もう一人の知恵」本道（前書き）

＊「悩む木太郎とホウセイ」に続きます。
以下表記のないのが本道です。
その他はおまけですので適当にどうぞ。

「もう一人の知恵」本道

「誰かもう一人呼んで相談しよう」
ホウセイも
同じことを考えたのかそう話し出すと、
「俺的には、
永久か、
アスカちゃんか、
レイカちゃんだな。
役に立ちそうなのは」
と言う。
「そうだ、もとめ先生は？」
木太郎が鼻をほじながら言うが、
「もとめ先生はゲームしなきゃならないだろう」
と
すぐホウセイに却下される。
「やっぱり、
さっきの3人だけど、
よく考えると、、
永久とアスカちゃんは、
もとこ先生には弱いからなあ」
と
木太郎が言うと、
「じゃあ、レイカちゃんか？」
と
ホウセイが言い、木太郎も頷く。
「じゃあ、
レイカちゃん呼んでくるよ」

ホウセイがまずレイカの部屋に行くが、
レイカはいないようだった。
食堂も見るが、レイカはいない。
誰かの部屋に遊びに行っているらしかったので、
ホウセイが戻ってくる。
「レイカちゃん、いなかったぞ」
ホウセイがそう言うと、
「もしかしたら、
これは二人で考え直せということかもしれないぞ」
と
木太郎は鼻をほじりながら言いだす。
「そうか。
下手にこの話しをして、
信じて貰えなかったら、大変なことになるしな」
と
ホウセイも同意する。
「そうすると、
まずは、
証拠の無線機のようなものを捜さないとな。
よし、
今のうちに管理人室から合鍵をとってくる」
「そうだな。
ゲームが終わるまでに証拠を確保しなければ、
最悪の場合、
オオシマさんに皆殺しにされて悲惨な結末になりそうだ」
「オオシマももとこも呼びつけでいいよ」
「しかし、クセになると」
「そうか、
一応さんと先生をつけておくか」
「じゃあ、

ゲームの途中で、
俺の部屋に、こそっと集合だ」
木太郎が言うと、
ホウセイは頷いた。

「もとこともとめの対決再開ともとこの部屋捜索」本道（以下略）

休憩が終わり、
もとこともとめの対決が再開された。
ホウセイが先に抜け出し、
木太郎も
「ウンコ」
と言って、
食堂を抜け出した。

ホウセイが木太郎の部屋で待っていた。
「すぐ行こう、
もとこ、いや、もとこ先生の部屋に」
二人がもとこの部屋に行くと、鍵は開いていた。
「しまった。
下手に合い鍵なんてもってこなければ良かった」
「いいよ。
何かで役に立つかもしれないから」
二人が部屋に入ると、
木太郎はいきなりタンスを調べたが、
予想どおり黒い下着ばかりだった。
「何やってるんだよ。
そんなとこにあるかよ。
木太郎」
「悪りい、ちょっと気になって」
木太郎が股間を掻きながら謝る。

「あれだ。
ベッドの上の枕元に小さめの黒い無線機の端末がある」
ホウセイはそう言うと、
携帯を一回り大きくしたくらいの無線機を手にとった。
ホウセイが耳を寄せて聞いてみたが、
スイッチが切ってあるようだった。
ホウセイは裏を捜して、
わかりにくい場所にあったスイッチを見つけた。
「どうする？」
「下手にしゃべっても、
俺たちは男だから、
もとめ先生のマネはできないな」
「ホウセイ、
オカマみたいにできないか」
「無理無理」
「そうだ、木太郎、
じっと黙ってろ。
スイッチだけ入れてみる。
向こうがスイッチ入れていれば、
何か聞こえるかもしれないから」
ホウセイはスイッチを入れた。
「お嬢さん、まだかなあ。
人殺しなんてやめて、
もとめさんをいじめるだけにしておけばいいのに」
オオシマは独り言を言っていた。
木太郎が声を出すと困るので、
ホウセイは、
無線機のスイッチを切った。
そして、
「やっぱりだ。

木太郎の部屋にすぐ戻ろう」

と

ホウセイが言ったので、

二人はホウセイが無線機を持ったまま、

木太郎の部屋に戻った。

「殺人をどう防ぐか」

「ゲームが終わったら、
もとこ先生は、部屋に戻る。
そして、
無線機がないことに気づき、
慌てて、
多分、俺たちを疑うだろう」
「何でだよ」
木太郎が鼻をほじりながら言う。
「抜け出していたのが、
俺たち二人だからだよ」
と
ホウセイが答えると、
「俺はちゃんとウンコって言ってきたぞ」
と
木太郎が平気な顔で言う。
「じゃあ、俺か？疑われるのは」
「多分な」
「でも、それより怖いのは、
もとこ先生がそれに気づいて、
犯人を追及せず、
知らないフリして、
オオシマさんを地下から出してしまった場合だ」
と
ホウセイは言う。
「そうか。

もとこ先生を取り押さえれば、
いいのか」
木太郎はそう言う。
「それはそうだが、
どうやってやるかだ」
「あー、
さっきの携帯のボイスレコーダーにとっておけば良かったな」
「もう一回聞くか」
「同じことは言わないだろう」
「じゃあ、
オオシマさんのマネして録音しておこうか」
「無線だし、
声はあまりわからないからな」
結局、
二人が試してみて、
ホウセイの方がうまかったので、
ホウセイの声で録音しておいた。
「多分、
この無線機とボイスレコーダーがあれば、
みんなもわかってくれる。
特に永久やアスカちゃんはな。
おちたももとめ先生も大丈夫だろう」
ホウセイがそう言うと、
「じゃあ、今これからいくか。
ゲームが終わって、
オオシマさんが出てきてからじゃ間に合わないぞ」
木太郎がそう言うと、
ホウセイが少し考え込んだ。

「もとこの処刑をどう防ぐか」

「でも、そうなったら、
もとこ先生殺されないか」
ホウセイが言う。
「自業自得だろう」
「でも、俺たちまで犯罪者だぞ、
このボイスレコーダの声は俺のだし」
「そうか！
まだ、
殺人を犯してないわけだからなあ」
木太郎も首を捻る。
「一番いいのは、
もとこ先生を縛り上げて、
自首させて後は警察に任せることだ」
ホウセイがそう言う。
「それもそうだなあ」
木太郎が同意する。
「自白するかなあ」
「それより、
みんな黙ってその方法で納得するかなあ」
木太郎とホウセイは考え込んだ。
そこへ、
おちたがいきなり入ってきた。
「ウンコにしては長いからなあ」
おちたはまだ事情を知らないので、
二人でさぼっていると思って、
笑っていた。

「バーカ、
3人も抜けたら目立つだろう。
今、真剣な話しをしてるんだぞ。
俺たちの命がかかっているんだ。
それだけじゃなく、
殺人を俺たちの仲間がやるかもしれない」
木太郎はそう言うと、
おちたにボイスレコーダーを聞かせながら、
事情を話した。
「大変じゃないか。どうすんだよ?」
おちたは頭を抱えた。
「だから、考えてるんだって」
木太郎は鼻をほじりながら、
そう言った。

「隠し扉の封鎖と、もとこ対策」

「まず、
　オオシマさんを
一階にださないようにしないとな。
もとこだけならどうにかなるが、
オオシマさんは強そうだ」
と
ホウセイが言う。
「あのプレートを壊すしかないな」
木太郎が言うと、
「あのプレート？」
首を傾げるおちたにプレートの意味を説明した。
「わかった。
でも、ゲーム中は無理だぞ」
おちたは言う。
「チャンスは、
もとこ先生が
ゲームが終わって部屋に戻ってすぐだ」
「よし、
もとこ先生が部屋に戻ったら、
すぐ壊そう」
三人はそう決めた。
「もとこ先生の方はどうする」
ホウセイが訊く。
「その後、話しがあるって言って、
もとこ先生の部屋に行って、
そこでもとこ先生を縛り上げるんだ、

みんなに気づかれないようにな」
木太郎が言うと、
「そうだな！
そして、
部屋に閉じこめておいて、
警察を呼べばどうにか丸く治まるな」
3人はそんな甘い考えでいた。

「ゲーム開始」

ホウセイたちが食堂に行くと、
しりとりはまだ続いていた。
「もとめ先生、結構しぶといわ。
2敗してから2連勝」
ヒトメがホウセイたちに小声で言う。
しかし、
ホウセイたちに一瞬気をとられた、
もとめがミスをし、
もとこが勝った。

もとこは
「もとめ！
もう遅いから、
すぐ207号室よ。
10分後に迎えにいくから、すぐ用意しなさい」
「シャワーくらい浴びさせてください」
「身体だけ浴びれば間に合うわよ」
もとこはそう言うと、
もとめの手を引っ張るようにして、
部屋に戻って行った。

ホウセイは管理人室へ行くと、
ハンマーを持って、
服の下に隠すと、

「女子が先に露店風呂入れよ。
今日が最後だからな」
と
女子をキッチンに近い食堂から
他の場所に移動させる目的でそう言った。
女子が着替えを取りに行った隙に、
ホウセイが
「くそたと永久は、
くそたの部屋で待っていてくれ。
面白いことがあるんだ」
と
騙して、
永久とくそたも食堂から、
くそたの部屋に移動させた。
そして、
おちた、木太郎、ホウセイの三人は
予定どおりプレートを叩き壊した。
木太郎が他に隠し扉を開けようと試したが、
扉を開ける方法はなかった。
とりあえず、
3人の作戦のひとつは成功した。

「ここまで予定どおり」

もとこは、
　部屋に戻ると、一息いれた。
オオシマと連絡しようとも思ったが、
まだ、
生徒がうろちょろしているので見つかる
とまずいので、
もとめを２０７号室に閉じこめ、
生徒を寝かしつけてから、
オオシマを呼ぶことにした。
だから、
無線機がなくなっていることには気づかなかった。

木太郎たちは、
女子が着替えを持って、
露店風呂に向かうのと入れ違いに、
くそたの部屋に行き、
もう少し待つように言った後、
もとこの部屋に向かった。
この間は7分程度だった。
もとこは、
３人が神妙な顔で来たので部屋に入れた。
木太郎がドアを素早くしめ、
オチタが、
ぬれタオルでもとこの口を押さえると、
ホウセイが暴れるもとこの手を縛ろうとしたが、

簡単にはいかなかった。
そこで、
木太郎がもとこのスネを蹴り、
痛がっている隙に、
ホウセイが、
もとこの両手を後ろで縛り付けた。
それから、
もとこにさるぐつわをかますと、
最後に両足を縛り付けた。
そこまでも、
予定どおりうまく行った。
「あとはもとめ先生を２０７号室に閉じこめて、
夜が明けたら、
屋敷を飛び出して、
携帯の電波が届くところまで走ればいい。
完璧だ」
木太郎は変なポーズをした。
「そうだ、
もとこ先生の代わりに、
早くもとめ先生を呼びに行かないと」
おちたが言う。
「おちたオタク行け、
俺とホウセイで見張っている」
木太郎が言うと、
おちたは素直に従った。

「順調」

トントン、
「姉さん、あと1分待ってね」
「あの、
僕が先生を呼んできて、
２０７号室にお連れするように言われました」
「そう、あと1分だけ待って」
「は、はい」

もとめは、
やっぱり髪まで洗ったらしく、
髪をバスタオルで巻いていた。
「姉さん、自分は風呂入ってんのね」
「さあ」
「まあ、
姉さんが意地悪するなら、
きっと真夜中ね」
もとめは、
実はとんでもない計画がなされたことを知らずに、
気楽そうに２０７号室に入っていった。
おちたは予定どおり鍵を外から閉めた。
「うまく行ったぞ」
おちたが戻ってくると、
「もとこ先生、
結構暴れたから、
ベッドに縛りつけた、

猿ぐつわも二重にした。
目隠しもしたぞ。
もうこれで逃げられない」
と
木太郎が鼻をほじりながら、
偉そうに言う。
「完璧だ」
ホウセイも何故か偉そうに言った。
「あとは、
くそたと永久を上手く寝つかせれば」
おちたはそう呟いた。

「くそたと永久の相手」

「くそたと永久を、
上手く寝付かせるのは誰がやる？」
「おちたじゃ、心配だな」
と
木太郎が言う。
「そうだな。
嘘が下手だからな。
こういうときは、
うーん？
　木太郎も嘘をつくと、
鼻をひくひくさせるしなあ」
ホウセイがそう言うと、
「オタクしかないんじゃない」
と
おちたがホウセイに言う。
「でも、ここも心配だなあ」
「おちたも木太郎も、
女に甘いからなあ」
と
ホウセイはまた首を傾げる。
「そうだ。
さらに、
こうやって、
顔のところに毛布をかけておけば、
目隠しになって、

泣いてもごまかされないぞ」
「窒息しないかなあ」
「毛布なら、空気通るさ、
むしろ、そのフリに騙されそうだ」
ホウセイはそう言うと、
もう一度、
ベッドによく縛りつけて、
どんなことがあっても、
自分が来るまでは、
縛った紐をほどかないように二人に言った。
「あっ、
ちょっとウンコしたくなった」
と
木太郎が変なことを言いだす。
「そこのトイレでしろよ。
速攻でな。
ケツもふけよ」
ホウセイが真顔で言った。
「ここは俺だけで大丈夫だから、
早く、
くそたと永久に寝るように行ってこいよ」
おちたが言うと、
「寝るかなあ。
露店風呂行こうなんて、
いいださないか」
ホウセイが心配する。
「じゃあ、
今日は疲れて風呂もめんどいから、
朝風呂にしようって、
言えよ！

木太郎と俺は寝たことにして」
「そうだ、それでいいな。
露店風呂へは起きた奴から入ることにして、
一応集合時間を8時くらいの目安にすれば、
どうにかなるだろう」
おちたが言うと、
ホウセイもそう言って頷く。
「じゃあ、おちた、頼んだぞ！
木太郎も早く出てこいよ」
「まだ、できらねえ」
木太郎が大声で、
とんちんかんなことを言う。
「まあ、
木太郎はこの調子だから、
おちた頼んだぞ」
「ああ」
ホウセイは、
おちたが右手の親指と人差し指で
丸を作ったのを見ると、
同じく自分も丸を作って、
くそたの部屋に向かった。
ここまでも
3人の計画はうまくいっていた。

「くそたと永久とホウセイと予定の狂い」

「なんだ、ホウセイ遅かったなあ」
「もとこ先生が眠いっていうから、
２０７号室のベッドの移動とか頼まれちゃって」
と
ホウセイは適当な嘘をつく。
「今日、
変なことが起きなきゃいいんだけど、実は」
と
永久がそう言いかけると、
「こいつ、
今日、
俺たちの誰かが、
殺されるんじゃないか
と言うんだぜ」
と
くそたが言う。
ホウセイは図星なので、
ドキッとしたが、
「まさかあ」
と
ごまかした。
「永久の話しなんだけど、
もとこ先生の部屋で話し声が何回も聞こえたんだって」
と
くそたはホウセイがびっくりするようなことを言いだす。
「本当なんだよ。

昨日の夜、
もとこ先生の声は普通なんだが、
相手が男のようだが声が変なんだ。
それだけじゃなく、もとこ先生が殺すとか、
もとめを自殺にみせかけるとか言ってたんだよ。
前後はよく聞き取れなかったんだけど」
永久は真面目な顔で言うと、
「盗み聞きしたのかよ」
と
ホウセイが訊くと、
「そういうわけでもないんだけど、結果的には」
と
永久はあっさり認める。
「これが木太郎なら眉唾もんだが、
永久だからなあ。
本当だよ。
俺はオオシマさんが共犯だ
と思うんだ。
どこかに隠れているんだよ。
もとこ先生の部屋かもな」
と言うと、
くそたはナイフを見せる。
「来たら、これで闘うしかないなあ。
他に武器ないかあ」
「外にスコップあるぞ」
と
永久が言う。
「とにかく、
まず、
木太郎とおちたを呼んで対策だ。

先手を打つ手もいいなあ」
と
くそたは言う。
「先手？」
「殺される前に殺すんだよ」
と
くそたは言う。
「おい、証拠はまだだろ。
せいぜい、
捕まえる程度でいいんじゃないか」
「それで、済むか？」
と
永久が言うと、
「済む訳ないだろう。
本当なら俺なら殺すね。
まあ、
みんなに迷惑かかるから
女子の意見次第ということかな」
「今、もとこはどこかな。
眠いとか行って、
ホウセイをこき使って、
露店風呂か、
それとも部屋か」
「ゲームで疲れて寝たんじゃないか」
と
ホウセイは適当なことを言って、
この場をどうしのごうか考えていた。

「ホウセイ、懸命のごまかし」

「でもさあ、人殺しするなら昨日したんじゃない」
と
ホウセイは永久の話しを否定する方向で
くそたを納得させようと考えた。
「でも、合宿が延びたんだから最終日だろう」
と
くそたは
まったくホウセイの言っていることにはのってこない。
「でも、
そんなテレビのドラマみたいなことするかね」
ホウセイはまた否定的なことを言う。
「女子の意見を訊くしかないな。
女の方が勘が鋭いから」
と
永久が言う。
「そうだな。
木太郎やおちたじゃなあ。
やっぱり、
アスカちゃん、
レイカちゃんあたりかなあ」
と
くそたが言う。
「でも、違ったら大変なことだぞ」
ホウセイは尚も否定的意見を言う。
「オタクがもとこ先生好きなのはわかってるけど、
命がかかってるからさあ」

と
くそたはホウセイの意見を聴く気がないようだ。

「行くぞ、永久」
くそたはそう言うと、
さっさと部屋を出ていってしまった。

ホウセイはうろたえた。
あのくそたさえ、
いいくるめられなかったのに、
女子をいいくるめる自信がまったくなかったからだった。

木太郎は、
やっとアレを出し終わり、
すっきりした顔でなんとも言えない臭い匂いと共に、
トイレから出てきて、
おちたと二人で、
もとこの見張りを再開した。
もとこは、
どうにか、
見張りがこのマヌケそうな二人だけの間にどうにかならないか、
必死で考えていた。

「食堂で大騒ぎ」

くそた、永久、ホウセイが食堂に行くと、
女子が風呂から上がり、ジュースを飲んでいた。
そこへ、
くそたが、神妙な顔で、驚かないで、
永久の話しを聴いて欲しいと頭を下げた。
そして、
永久は昨日自分が盗み聞きしたことを話してしまった。
「ああ、やっぱり、
オオシマさんがいないのおかしいと思ったのよ」
と
アスカが言う。
「そうね。どこかに隠れているのね」
と
アユメも言う。
「そうかなあ」
と
レイカとチウメは半信半疑だが、
ヒトメは
「もとめ先生が整形美人だとか、
元デブとか嘘ついてたし、
ありうるわよ」
と言う。
「これから、もとこのとこへ行きましょう」
と
アスカがいきなり言う。

「その前に武器を用意しないと」
と
アユメが言うと、
「そうだ。これだけじゃ」
と
くそたは
ナイフをホウセイに渡すと玄関を出て、
倉庫に行った。

そして、
スコップを４つ取ってきた。
ヒトメが管理人室からハンマーを
アスカとアユメが包丁をそれぞれ持ってくる。
永久も包丁を持ってくる。
「レイカとチウメは」
と
アスカが訊くと、
「私たちは」
と
二人は尻込みする。
「先にやられてもしらないからね」
と
アユメが脅す。
「そうだ、木太郎くんとおちたくんは」
と
アスカが訊くと、
「もう寝たよ」
と
嘘をついた。

「起こしてきなさいよ」
と
アユメが言うと、
「かえって、
バラバラにいた方がいいだろう」
と
ホウセイがあまり理由になっていないことを言うと、
「ああ、信用してないのね。
永久くんの話」
と
アユメがホウセイの方を見て言った。

「じれるオオシマともとこと最悪のケース」

オオシマはじれていた。
もとこから連絡はないし、
もとこの無線に連絡しても、
電源が切れているようだからだ。
1階に上がって様子を伺いたかったが、
万一バレたら、
後でもとこに自分が殺されかねないので、
じっと連絡を待っていた。

もとこはホウセイにきつく縛られたので、
動きがまったくとれなかった。
ただ、
マヌケ二人の話を聞いてオオシマと同じように
じっと我慢しているだけだった。
「あと7時間くらいかな」
「8時間じゃないか」
「ちょっとでも明るくなったら、
ホウセイに警察を呼びに行ってもらおう」
「そうだな。
俺たちがここでガードしていれば、
もとこにも殺されることはないだろう」
「いや、
それより怖いのは、
くそたと女子だよ。
あの連中が知ったら
自殺に見せかけて殺しかねないぞ」

「この辺りの落とし穴見つけて落とすかもな」
「オオシマさんは地下で餓死か」
「最悪だなあ」
「でも、
餓死するとミイラになるのかなあ」
「それより、
もとこは腐るのかなあ」
「その前に、
この辺のカラスの餌になるんじゃないか」
「野良犬に喰われるじゃないの」
「ああ、そうか」
「でも、
その前に俺たち捕まらないかな」
「何で」
「俺たちは殺人を阻止しただけだぞ」
「そうか」
「とにかく、
このままホウセイがうまくやってくれれば」
「ダメなら、俺たち殺人の共犯？」
「まさか。
そういうケースにはならないだろう。
レイカちゃんもチウメちゃんもいるし」
「そうだよな。
二人をみんなで殺して全員が捕まったら最悪だなあ」
実は、
今、
その最悪のケースになりそうなのに、
二人は呑気に話していた。

さすがのもとこも二人の話を聞くと、恐ろしくなってきていたのであった。

「もとこを裸にして吊す？」

「もとことオオシマはいつ動くかしら」
アユメがみんなに訊く。
「そうね。
みんな寝てから、
一人づつ、殺す気でしょう」
と
アスカが答える。
「じゃあ、
まだ、２時間くらいは余裕あるわね」と
アユメが言う。
「あのさあ、
これからもとこの部屋に遊びに行くフリして、
もとこを捕まえない。
そして、
万一、武器を隠し持たないように、
素っ裸にして２０７号室に吊すのよ」
アユメはさらに、
「そして、
もとこの部屋に２０７号室に来てとメモを置いて置けば、
２０７号室にオオシマが来るんじゃない。
オオシマはもとこが吊されているところ見たら
すぐ助けに行くはずだから、
そこをスコップでガーンと一撃で殺すのよ。
後は、
二人をどっかに埋めちゃって、

二人が心中したことにすればいいのよ。
どう、いい考えでしょう」
と
アユメは結構残酷なことを言う。
「それいい考え！
吊されたもとこに驚いたオオシマが入ってきたところを
スコップで思いっきり頭を叩く。
そして、
死体をきちんと隠して、
お嬢さんと使用人との
心中に見せかける。
いいわね」
と
アスカも同調するが、
「あれっ？
心中じゃ、
死体隠したらダメじゃない？」
アユメも、
ちょっと勘違いしていたので。
「ごめん、駆け落ちの間違い」
と
アユメがアスカに言う。
「わたしもごめん。
気づかなくて、そうだったわね。
でも、
相当深く埋めないとね。
死体が見つかったらやばいもんねえ」と
アスカが言うと、
「どこかに落とし穴があったっていってたじゃん。
そこに落とせば」

と
くそたが言うと、
「だめよ。穴じゃむき出しじゃない。
くそたくん力持ちなんだから、自分で掘ってよ」
と
アユメが少しくそたをおだてるように言うと、
「おお、そうか。掘る掘る。深くな」
と
くそたは頷く。
「二人とも頭いい」
バカなヒトメが二人を賞賛する。
「もとめ先生は？」
ヒトメが訊くと、
「正直に話せば、
絶対に賛同するわよ」
と
アスカが言う。
「じゃあ、
これから、
もとこの部屋に行って、
もとこを縛り上げて、
それから、
もとめ先生のいる２０７号室に行きましょう」
と
アユメが真顔で言ったので、
ホウセイは本当のことをここで言おうか、
迷っていた。

「ホウセイ、レイカの意見と反論」

「あのさあ、まず、今回、二人を殺して埋めて、
バレたら、俺たち、殺人犯になって大変なことになるぞ」
と
ホウセイが前置きすると、
「そんなのわかってるわよ」
と
実は深く考えていないヒトメが言う。
「問題は、バレるかだよ。
もとこやオオシマの親や学校が
駆け落ちで納得するかがポイントだけど」
と
ホウセイが言いかけると、
「ああ。
もとこにはもとめしか身内いないみたいよ。
それから、
学校は大事にしたくないから、
駆け落ちですますんじゃない」
と
あっさり、アスカが否定する。
ホウセイが次何と言おうか考えていると、
「ホウセイくんが言ったことより、
やっぱり死体よ。
この近くに埋めるしかないけど、
埋めたところは見ればわかるわよ。
だから、
万一、誰か通って掘られでもしたら、

まずいし、
犬だって危ないわよ。
それより、
殺さないで
とっちめるだけの方がいいんじゃない。
素っ裸で吊して脅して、
人殺しの件、
自白させて、
携帯に録音して、
写真も撮っておけば、
それでいんじゃない」
と
レイカが言うと、
「私もそう思う」
と
チウメも同意した。
しかし、
「そっちの方が危ないわ。
あのもとこのことだから、
後でゆっくり復讐されるわよ。
それに、
人殺しの件は未遂で終わるし、
証拠がないんだから、
もとこが、
逮捕されることはないでしょう。
きっと、
あのもとこのこと、
あとで逆に、
生徒に暴行された
とか言いだすんじゃないかしら」

と
アユメが反論すると、
レイカもチウメも黙り込んだ。
「殺すしかないわよ。
いい、懲らしめればいいなんて甘すぎるわよ。
絶対、
あの女のことだから、
黙ってないで、
後で私たちを殺すわよ。
いい！
私たちの命がかかってるのよ。
バレる危険は埋め方さえ工夫すればいいのよ」
と
アスカがレイカとチウメを説得にかかった。
彼女たちのやりとりを聞いていて、
ホウセイはやはり本当のことを話し、
木太郎たちを交えて再度話し合うしかない
と覚悟を決めた。

「ホウセイ、白状する」

ホウセイはもう嘘をつききれないと思い、
いきなり、
土下座をすると正直にすべて話して、
どうにか殺人だけはやめて欲しいと頭を下げた。
「証拠があるのか」
と
永久が言うと、
「見せて」
と
アスカが無線機を取り上げた。
「スイッチはどこかしら」
「だめよ、
下手にスイッチを入れちゃ」
アユメがさらに奪い取る。
「ここね。
わかりにくいけど、
みんなちょっと静かにして、
誰か。
ボイスレコーダー付きの携帯持ってる?」
アユメが訊くと、
数人手を挙げたので、
「じゃあ、録音初めて、早く。
それから、みんな黙って、いい」
アユメはそう言うと、無線機のスイッチを入れて、
「オオシマ、起きてる」
と

もとこを真似て高飛車に言った。
「お嬢様、待ちくたびれましたよ。
どうですか。
考えは変わりましたか？
恨みはもとめお嬢様だけですから、
もとめお嬢様だけにして、
生徒さんを犠牲にするのはやめましょう。
それに、
もとめお嬢様を犯人に仕立てるとしても、
警察はそう甘くありませんよ。
考え直してくれませんか」
と
オオシマはベラベラとよく喋った。
「警察ねえ？
考えてみるわ。
じゃあ、また、連絡する」
アユメは一方的に電話を切って、
無線機のスイッチを切った。
見事な演技だった。
「これで、証拠は揃ったわね」
「オオシマはそんなに悪くないのね」
「もとこだ。悪魔は」
「でも、オオシマは地下室で餓死。
問題はもとこをどう始末するかね」
アユメがそう言うと、
ホウセイ、レイカ、チウメを除く、
その方法を真剣に他の生徒は考え始めた。

「もとこの弁解を防ぐか？」

「それより、
木太郎くんとおちたくんだけじゃ心配だから、
早く行ったら」
と
ヒトメが言うと、
アユメが
「もとこが言い逃れできないように、
作戦たててから行った方がいいでしょう」
と言うと、
アスカが
「それより、
もとめ先生と先に話したら」
と言い、
意見が別れる。
「やっぱり、
あの二人ともとこの方が心配だよ。
もとこの言い逃れなんて、
無線機をうまく使えばどうにでもなる」
と
くそたが言ったので、
8人はもとこの部屋へすぐ向かった。

もとこの部屋に行くと、
木太郎とおちたは座り込んだまま居眠りしていて、
もとこが必死にロープをほどこうともがいていた。
「やっぱり、こいつら」

と
くそたが二人のおでこを叩くと、
慌てて目を覚ますと、
木太郎とおちたはみんなが来ているので、
びっくりしていた。
「もう少し、
遅ければ、
もとこにやられていたかもしれないぞ。
もっとちゃんと見張りをしろ」
くそたは二人を怒鳴った。
くそたは、
バカ力で、
もとこをもっときつく縛り直した。
「これなら、
もとこでもほどけないだろう」
くそたはにやりと笑った。

「もとこを自白させる？」

くそたは、
もとこの猿ぐつわをはずすと、
「生徒を殺して、
妹のせいにするなんて
よくも教師が考えたもんだな」
と言って、もとこを睨みつけた。
「そんなあ。
木太郎くんたちの勘違いよ。
人殺しなんか知らないわ。
多分それはもとめがあたしをはめたのよ。
そう、もとめよ」
と
もとこは、
アユメが心配していたようにシラをきった。
「じゃあ、先生。
オオシマさんはどこ」
と
アスカがわざと知らないフリをして訊くと、
「家でしょう。違うの」
と
また、シラをきった。
すると、
アユメが
「オオシマは地下に閉じこめたわ。
そして自白したのよ。
あんたに命令されたって」

と言うと、
もとこが一瞬ひるんだように見えたが、
「わかったわ。
本当のことを言うわよ。
オオシマが主犯なの。
あいつは悪魔なの。
オオシマは私を犯して、
美少女ともとめを
この屋敷につれてくるよう私に命令したの。
アイツは獣！
従順な執事の仮面を被った悪魔なのよ」
と
もとこは口からでまかせを言った。
「主犯が先生って言うのは嘘なの？」
と
アスカがわざと訊くと、
「嘘よ。
アイツは大嘘つきなのよ」
と
またデマカセを言う。
「あのー、先生、俺は男なんですが、
俺も犯されるんですか？」
と
永久がふざけて言うと、
皆大笑いした。
「いえ、
男子は女子をここに集めるためのおまけみたいなもの」
もとめはまたデマカセを言った。
「ふーん。
じゃあ、オオシマが主犯で、

先生はその命令に従っていただけなのね」
と言って、
アユメが念を押した。

「もとこを自白させる？2」

「くそたくん、
もとこにもう一度猿ぐつわ噛まして、
一切、
音が出ないように抑えていてくれる」
と
アユメが言うと、
「任せておけ」
と
くそたはそう言って、
もとこに猿ぐつわを噛ませると、
身体全体でもとこを抑えつけた。
「ＯＫ、
くそたくん。
みんなちょっと静かに。
それから、
ボイスレコーダーも用意して」
アユメはにやりと笑って、
無線機のスイッチを入れた。
「オオシマ、起きてる」
「はい、お嬢様」
「やっぱり、
生徒は皆殺しの方が安全よ」
と
もとこのフリをして言う。
「でも、お嬢様、それだけは・・・」
「一人以外の生徒を生かしておくと、

もとめを自殺に見せかけても、
その死因に、
誰かが疑問を抱くかもしれないでしょう。
違う？」
「それはそうかもしれませんが、
できれば避けた方が、
もし、
死因が疑われたときは、
私がもとめお嬢様にふられたので、
自殺に見せかけて殺したと自首しますので、
どうか人殺しは・・・
やるなら、
もとめお嬢様だけにするとか・・・」
「そんな弱気なこと言ってるなら、
あんたいざとなったら裏切るんじゃないの？」
「いえ、そんなことは。
私はお嬢様に人殺しをさせることに・・・
わかりました。
もとめお嬢様は私が自殺に見せかけて殺しますので、
もとこお嬢様は生徒さんたちと
アリバイをうまく作っておいていただければ。
どうしても、
もとめお嬢様が憎いとおっしゃるなら、
それが一番よろしいかと」
「そう、じゃあ、少し考えるわ」
アユメはそう言って、
会話を打ちきって、
無線機のスイッチを切った。

さすがのもとこも顔が青ざめていた。
「どうする？　この猿ぐつわ」
くそたが訊くと、
「また、下手な嘘言うだけだから、
そのままでいいわよ。
ねえ、もとこお嬢様」
アユメは
イヤミをこめてもとこに向かってそう言った。
すると、
アスカが
「ごめんなさい。
私はみんなを殺そうとしました。
頭を丸めて出家しますので、
どうか助けてください、
と言えば、
命は助けてあげるわよ」
と言った。
くそたはアスカの意図がわかり、
猿ぐつわをはずすと、
もとこは泣きながら、
「本当にごめんなさい。
私はみんなを殺そうとしました。
頭を丸めて出家しますので、
どうか命だけは助けてください。
お願いします。
みんな」
と言った。
くそたはそれを聞くと、
にやりと笑って、
また、

猿ぐつわを噛ました。
「この最初の部分だけ、
もとこの携帯に録音させて、
後は、
焼身自殺でもしてもらえばいいわよね」
と
アスカはにやりと笑いながら言った。

「オオシマの遺書代わり？」

「ねえ。
どうせなら、
オオシマに
もとこを殺させて自殺させることにしない。
その前に遺書代わりにもとこの携帯に録音させて」
アユメがそう言うと、
「そうねえ。その方が確実ねえ」
と
アスカが言った。
アユメは
レイカとヒトメの携帯を借りて、
オオシマの声を録音したものを
再度録音して試してみた。
「大丈夫そうね。
もともと無線機だからね」
「じゃあ、
今、
先に遺書代わりのメッセージを
オオシマに言わせるわ。
録音準備して」
アユメはそう言うと、
無線機のスイッチを入れて、
「オオシマ、わかったわ。
でも、条件がある。
私が捕まるのはイヤ。
でも、

もとめは私が殺したい。
だから、
あんた、
遺書代わりに、
今から言うこと話してよ。
録音するからね」
「思い直してくれたんですか。
それで済むなら私はやります。
いえ、話します」
「私が、
お嬢様にふられた腹いせについ寝てるところを襲おうとして殺してしまいました。
もとこお嬢様、お許しください。
生徒の皆様もお許しください。
私オオシマは死んでお詫び致します。
いい、憶えた」
「えー、だいたいわかりました。
私オオシマが、
お嬢様にふられた腹いせで、
つい、
寝ているお嬢様を襲おうとしたのですが、
抵抗されて殺してしまいました。
もとこお嬢様、生徒さん、
どうか、お許しください。
死んでお詫び申しあげます。
本当にお許しください。
で、
よろしいでしょうか」
「ちょっと、違うけど、
また、連絡するわ」

アユメはそういって、
無線機のスイッチをいきなり切った。
「完璧ね」
「うーん」
と
首を傾げる永久に、
「どうしたの永久くん」
と
アスカが訊くと、
「よく考えたら、
オオシマから見たら、
もとこが、
もとめを殺すつもりでいるから、
それでいいんだけど、
実際、殺されるのは、
もとこだから、
オオシマが殺したはずのもとこに
連絡するはおかしいよ」
と
永久はあたりまえのことに気付いて、
そう言った。

「オオシマの遺書2」

永久の言葉に、
アスカが、
「そうね。
つい、
私も勘違いしてそれでいい
と思いこんでしまったわ。
でも、
オオシマが殺すのはもとめ先生じゃなくて、
もとこだもんね。
オオシマは、
もとこがもとめを殺した
と思って身代わりに死ぬんだから、
遺書を携帯に残すのは駄目ね」
と
アスカが言うと、
アユメが、
「ああ、
危うくドジを踏むところだった」
と
自分で自分の頭を叩く。
「そうすると、
遺書を書いてもらうしかないんじゃない」
と
アスカが言いだす。
「内容は、
謝る相手にもとこを入れないで、

私オオシマが、
お嬢様にふられた腹いせで、
つい、
寝ているお嬢様を襲おうとしたのですが抵抗されて、
殺してしまいました。
みなさん、どうか、お許しください。
死んでお詫び申しあげます。
本当にお許しください

の方がいいかな」
と言うと、
「さすが、アスカね。
それなら、
お嬢様が
もとこかもとめ先生かわからないからね。
オオシマにとっては、
二人ともお嬢様には違いないし、
相手がみなさんなら問題ないしね」
と
アユメが感心したように言う。
「問題は、
どうやって、
地下にいるオオシマに遺書を書かせて
自ら自殺させるからだな、
それから凶器の指紋もだな」
と
永久が最大の難問を指摘した。

「オオシマの遺書3」

「こうしたら、
もとこを殺した後、
オオシマにもとめを殺した
と連絡して、
生徒に疑われた場合のために遺書、
書いといて
と言ったら、
どうかしら？」
と
アスカが言うと、
永久が
「その後と
さっきも言ったけど凶器の指紋はどうするんだよ」
と
核心的なところを訊く。
「うーん、
まず、また、オオシマに連絡して、
もともと反感を抱いている生徒たちが
もとめの死で私を疑っているみたいなの。
助けてと、
オオシマに連絡すれば、
多分、
オオシマは自殺するわよ。
凶器の方は、
もとこの手首を切って、
同じ刃物で、

自殺したように見せかけて殺せばいいんじゃない」
と
アスカが言うと、
アユメは頷いたが、
永久はまだ首を傾げている。
「もし、
オオシマの気が変わったり、
その生徒を殺すと言いだしたら？」
「その場合は、
地下に閉じこめたままで・・・
あー、
でも、
そうだと、遺書の内容が？」
と
アスカが頭を抱える。
「そう簡単につかまらない殺人計画なんてないよ。
捕まったら、
バカらしいから、
もとこを殺すのはやめておこうよ。
丸坊主にするとか、
その程度の懲らしめで勘弁すればいいんじゃないか」
と
ホウセイが言うと、
おちた、木太郎、レイカ、チウメは頷いたが、
他は納得していないようだった。

「アスカの提案」

新作ディープ（？改）「アスカの提案」

「ねえ、結構、難しい問題だから、
少し、そうねえ。
1時間くらいおいて、
もとこ殺人賛成派と反対派に別れて、
話し合わない」
アスカのその提案に、
「いいわね。
反対派はこのもとこの部屋で見張りをして、
賛成派は私の部屋に来ない」
と
アユメもそう言って賛成する。
「そうだな。その方がいいかもな」
と
ホウセイが言うと、
全員頷く。
そして、
アスカ、アユメ、永久、くそたが
部屋を出ようとしたところ、
ヒトメだけがどうしようか迷っていると、
「あんたはこっちよ」
「そうよ」
と
アユメとアスカに言われて、
ヒトメは3人について部屋を出て行った。

「５：５か」
と
ホウセイがつぶやくと、
「５：４：１というところだろう」
と
ヒトメを意識した木太郎が言うと、
「ヒトメちゃんは
多分アユメちゃんとアスカちゃんの方につくだろうから、
五分と五分だよ」
と
おちたが言うと、
「そうなると、
もとめ先生に決めてもらうしかないかなあ」
と
ホウセイがつぶやくように言った。
もとこは身体を動かして何かいいたそうにする。
「先生の意見はとおりませんよ」
と
それを見たおちたがとんちんかんなことを言うと、
もとこはまた何か言いたそうに身体を動かす。
「でも、
もとめ先生の意見を聴くことにしたら、
多分、
もとこ先生は殺されるわよ。
場合によっては、
もとめ先生は私達を先に帰して、
もとこ先生をやるかもね」
と
レイカが冷静な意見を言う。

もとこはレイカの意見を聴いて、
また身体を動かしている。
「それは、それでいいのかなあ」
と
木太郎が言うと、
「もとめ先生を人殺しには絶対させたくないよ」
と
おちたが言った。

「アスカの部屋で」

「5：5ね」
「私はまだ」
アスカの言葉に、
ヒトメが迷っているかのように言うと、
「ダメ、あんたは私達に従うの」
と
アユメに頭を撫でられる。
「もうー」
ヒトメはそう言っただけで、
黙り込んだ。
「いーい。
こうなったら、
多数決にして、引き分け、
もとめ先生に、
もとこの処遇を
一切任せるということにしちゃわない」
と
実は、
レイカが考えていたようなことを
アユメが言いだす。
「それなら、
もとめ先生はもとこを殺すわよ。
絶対に」
アスカも賛成するが、
「でも、そうしたら、
もとめ先生一人で殺すのか」

と
くそたが言ったので、
「そうなっちゃうかもしれないけど、
それじゃあ、
もとめ先生可愛そうだから、
私たちも手伝わない。
それに、
私もこの手で殺したい」
と
アスカが言うと、
「私も手伝う。
他は逃げていいわよ」
と
アユメもわざと突き放すように言う。
「わかった。
俺たちも付き合うぜ。
とにかく完全犯罪を考えてくれ」
くそたがそう言うと、
永久、ヒトメも渋々うなずく。
「あー、凄い、いい方法考えた」
と
アスカが何か閃いたようだった。

「アスカの閃き」

アスカは、
「いーい、
今までは自殺に見せかけるとか、
殺人を隠蔽することを考えていたわけよ。
でも、
堂々と殺人をすればいいのよ」
「堂々と」
永久が首を傾げると、
「もとこを開放するの。
そうしたら、
もとこは、
すぐ襲いかかってくるわ。
これ見て」
アスカは、
ナイフのようなモノを見せる。
「あたし、
演劇部なんだけど、
小道具の偽物のナイフ護身用に
いつも隠し持ってるのよ。
これを、
もとこを解放して
すぐ見えるところにおいておくわけ」
アスカがそう言いかけると、
「そうか、
もとこはそれで襲いかかってくるから、
そこを正当防衛で殺すんだ」

永久が言うと、
「ピンポーン」
と
アスカが嬉しそうに言う。
「でも、
誰がその殺す役をやるの」
と
ヒトメが言うと、
アスカ、アユメ、くそたが
ほぼ同時に
「あたしが」
「私」
「俺」
と
声を出したのだった。
（続く）

「正当防衛」

「じゃあ、
3人で一緒にスコップで叩こうぜ」
と
くそたが言うと、
「えー、怖い」
と
ヒトメが、
3人を恐ろしそうな顔で見た。
「ヒトメ、
あんたは現場から離れていなさい。
下手すると、
あんたが足手まといになるかもしれないから」
と
アユメが言うと、
「足手まとい何て」
と
ヒトメが、
すこしむっとした顔で言うと、
「アユメは心配してるのよ」
と
アスカが言うと、
「俺が証人やるから、
ヒトメちゃんは、
現場にいない方がいい。
万一、
もとこに殺されたらイヤだろう」

と
永久もそう言ったので、
「あー、ありがとう。
みんな心配してくれてるのね。
じゃあ、そうする」
ヒトメは素直に従うことになった。
「そうすると、
問題は、
反対派をどう口止めさせるかね」
「もとめ先生のところに相談に行かない」
「もう？」
「だって、
気持ちが揃ったところの方がいいでしょう。
正当防衛
ということで」
「そうだ。正当防衛だ」
くそたがそう言うと、
５人はもとめのいる２０７号室に向かった。

「驚くもとめ」

もとめが、
うとうと眠りかけたところへ、
「先生、起きてください。
大変なんです」
と
誰かの声がした。
夢かと思って、
目を開けると、生徒が5人もいて、
真面目な顔をしている。
やっぱり夢かと思って、
自分で顔を叩くと痛い。
「先生、
寝ぼけないで起きてください」
アスカがそう言うと、
もとめも現実に戻ってきた。
「ちょっと、先生、これ飲んで」
アユメが缶コーヒを渡す。
「ありがとう」
もとめは一気に缶コーヒを飲み干す。
「先生、驚かないで聞いてください。
オオシマと組んで、
もとこ先生が先生や私達を殺そう
としています。
もとこ先生のフリをしているのは
私ですが、
聞いてください」

アユメはそう言うと、
オオシマの声を録音した携帯の声を
もとめに聞かせた。
「そんなあ。
姉さんはともかく、
あのオオシマが」
もとめは怒るというより、
悲しそうな顔をした。
そして、
そんなもとめに、
アスカが二人の計画が発覚した経緯を説明した。

「もとめの決断」

もとめは、
アスカから
すべてのもとこの計画を聞くと、
悲しそうな表情をして、
「今姉の部屋に行ってもいい」
と言った。
アスカたちは突然そんなことを
もとめが言いだすとは思わなかったので、
少し驚いたが頷くしかなかった。

もとめたち6人が
もとこの部屋に行くと、
一番驚いたのは、
もとこだった。
誰の目から見ても、
もとこは明かに動揺していた。

「みんな、二人だけにしてくれる」
もとめのその言葉に
生徒全員が黙って頷くしかない程、
もとめの目は怖かった。

「おちたの覚悟？」

おちた以外は、
もとめの迫力に押されて部屋を出て行った。
しかし、
おちただけは違った。
「僕は絶対にここから離れません。
例え、もとめ先生に殺されても」
「何言うの。
もういいの。
ありがとう。
でも、
頼むから、二人にして」
「いやです。
先生はもとこ先生を殺して、
ご自分も死ぬ気です。
僕にはわかります。
だから、
僕は動きません」
「そう。なら、私が先に死ぬ。
だから、おちたくん、
その後で、
姉、
いえ、この悪魔を殺して、お願い。
私のことを思うなら、そうして。
私はこの悪魔と同じ血が流れている自分がイヤなの。
わかって」
もとめがそう言った瞬間、

おちたがどこに隠し持っていたのか、
ナイフのようなものを取りだして、
もとこの胸を刺した。
「おちたくん、やめて」
もとめがそう叫んだ瞬間、
ホウセイと木太郎がもとこの部屋に入ると、
わめく、
もとめを押さえつけるようにして、
二人で抱きかかえると、
もとめを部屋の外に連れ出した。

「悪魔は消えた？」

「くそた、永久、もとめ先生を頼む、
みんな、
俺と木太郎で、
おちたをどうにか落ち着かせる」
「早く行ってあげて」
チウメが叫ぶ。
「任せたぞ、くそた、永久」
ホウセイと木太郎だけが、
おちたがいる部屋に戻る。

「どうする？」
アユメが心配そうにみんなに訊く。
「こっちは、
もとめ先生をどうにかしないと、
死んじゃうわよ」
と
レイカが言う。
「わかってる。俺の部屋に行くぞ」
くそたは、
永久と二人で
わめきながら泣いているもとめの腕を押さえつつ、
抱きながらそう言う。
「おちたくんが、あんなことするなんて」
ヒトメが動揺して、
ぶつぶつ言うと、

「あんたまで、動揺してどうするのよ、
とにかく、行くのよ」
アスカがヒトメの手を引っ張って、
くそたの部屋に連れていった。

「疑惑？」

「ちょっと、アユメ」
「何、アスカ」
アユメとアスカは小声で囁く合うと、
もとめを心配するヒトメたちの目を盗んで、
部屋をそっと出た。

「ねえ、なんか怪しくない？」
「何が」
「だから、あの３人」
「えっ？どの３人？」
「もーう、
おちたくんとホウセイくんと木太郎くんよ」
「何が怪しいの？」
「だから、さっきのよ」
「ナイフ刺さってたでしょう」
「でも、血が出てなかったじゃない」
「ナイフを抜かないと、
血は出ないんじゃない」
「そうかなあ？
あれ、
おちたくんたちの演技じゃないの」
「おちたくんはわからないけど、
演技じゃないわよ。
もとこの顔を見たでしょう」

「見てないわよ」
「私、見ちゃった。
凄い顔してた」
「嘘言わないでよ。
目隠しされて、
口も猿ぐつわ、
されてたでしょう」
「だから、顔よ。
私見たもん。
思わず、見ちゃったんだもん」
「だから、
顔は見えないでしょう」
「顔全体は見えるでしょう。
目と口が塞がれてだけでしょう、
何か凄いとしかいいようがなかった」
「もーう。
じゃあ、本当にやっちゃったとでも言うの？」
「でしょう。
あの顔はぞっとする顔」
「そうかなあ、
何かおちたくんクサイというか、
もとめ先生も、
今思うと、
何か変で怪しかったなあ
それにあのナイフちらっと見てけど、
演劇用のナイフにそっくりなのよ」
「演劇用？
な、
はずないでしょう。
あの顔は。

疑うなら、
あんた、
確認しに行きなさいよ」
「えっ、あたしひとりで？」
「あたしは、
もとこに呪い殺されそうで、
怖いからやだもん」
「そんなあ」
「その顔、
あんただって、
半信半疑なんでしょう」
アユメに言われたとおり、
実は、
アスカもアユメに言われるまでもなく
最初から半信半疑だった。

「おろおろ」

「どうしよう」
「先生！」
「やばいぞ」
「せんせーい」
「顔を叩いてみたら」
「いやー同じだよ」
「ナイフも刺さってるよ」
「そんなあ、
おかしいぞ」
「木太郎くん」
「あっ、
アユメちゃんにアスカちゃん」
おろおろする、
おちた、木太郎、ホウセイに、
部屋にそっと入ったアユメが声をかけた。
「ほら、アスカ、死んでるじゃない」
「うん。ごめん。
演技だと思ったのよ」
「おちたくん、
今頃慌てているの？
でも、
しょうがないじゃないのよ。
もとめ先生を救うため必死だったんでしょう」
「あのときはパニックだったのよね」
アユメとアスカに、
おちたはそう言われて、

余計おろおろする。
「問題は、
もとこの死体をどうするかよね」
「そうねえ。
これじゃ、
自殺に見せかけるのは無理よねえ」
「やっぱり、
埋めるしかないんじゃななないの」
「そうよねえ」
そう二人に言われて、
おちただけでなく、
木太郎、ホウセイも完全に動揺してしまった。

「感心するアユメとアスカ」

「何でそんなに動揺してるのよ」
「それは動揺するわよね。
おちたくん。
あたしも、
人殺しを初めて見たけど、
テレビドラマで見てる以上に怖かったもん」
アスカとアユメは
何も知らずそんな話しをしていた。
「人殺し？」
おちたはますます動揺する。
「まあ、
その言い方は悪いけど、
人殺しには違いないわよね」
アスカが、
冷たくそう言うと、
「もとめ先生を人殺しにしないため、
おちたくんは、
勇気をもって、
あんなことしたんだから。
アスカは、
おちたくんの態度が、
何かくさかったって言うけど、
あたしは感動したわよ。
本気の愛
っていうのはああいうものなのよ。
私もそんな彼が欲しいなあ」

アユメが呑気そうに言う。
「やっぱり、くさかったか」
と
木太郎が鼻をひくひくさせながら、
アスカの方を見ると、
「くさい？
でも、
そうね。
現実の人殺しって、
あんなものかと、
あたしも今になって、
初めて思い知らされたわ。
最初は何か凄くおおげさで、
大根役者の芝居かと思ったの。
現実はテレビドラマとは違ってそういうものなのね。
ごめんね、おちたくん」
と
アスカは素直に頭を下げる。
しかし、
「あー、
騙すはずが騙されたあ」
と
ホウセイが声を上げたのだった。

「騙した犯人は？」

「騙された？どういうこと」
アスカが訊くと、
ホウセイが慌てて口を押さえたが、
もう遅かった。
「アスカちゃんの言うとおり、
アレおちたの演技だったんだ」
と
ホウセイがごまかそうとする前に、
木太郎がアスカに訊かれて
正直に答えてしまったからだ。
「でも、死んでるじゃない」
アユメがもとこの死体を指さすと、
「だから、騙されたんだよ。
おちたが可愛そうだ」
ホウセイが、
少し震えているおちたの方を見ながら言う。
「ちゃんと説明してよ」
アスカのきつい言葉に、
「わかったよ。
実は、あの後、
俺たち5人は考えたんだよ。
多分、
多数決になったら、
もとめ先生はもとこを殺す方に味方するって、
そこで、

どうにか殺人だけは防げないか？
考えたんだ」
木太郎がそこまで話すと、
「俺が悪いんだよ。
多分、
もとめ先生が殺すということになるだろうから、
その前に、
こっちで殺してしまえば、
いいって提案したんだ。
そうしたら、
おちたが手を挙げて、
俺がいざとなったら、
その役引き受けると言ったんだ。
それで、
チウメちゃんが演劇部だから、
演劇用のおもちゃのナイフなら護身用に持ってきたと言ったので、
チウメちゃんとレイカちゃんが
チウメちゃんの部屋に行って、
そのナイフを持ってここに戻ってきたんで、
それを使うことにしたんだ」
と
ホウセイが木太郎の説明の途中から、
いかにも自分が悪かったという顔をして説明する。
「それじゃあ単純な話しじゃない。
レイカとチウメが騙したのよ？
それしか考えられないんじゃない？」と
アユメが、
ホウセイが考えていたことと同じことを指摘した。

「そんなあ、
レイカちゃんとチウメちゃんは殺人なんて、
大嫌いなはずだぞ」
と
おちたが感情的になってアスカに言い返す。
「だから、男は甘いな！
ああいう、おとなしそうな女の方が危ないんだって」
と
アスカも感情的に言い返す。
「そうかもね。
あの二人。
自分だけ
表向き反対のフリしていい子ぶるタイプかもね。
ヒトメみたいに純粋で正直じゃないのよ」
と
アユメもアスカの意見に賛成すると、
「俺も、
実はそんな感じがしたというか、
それしか可能性はない。
だってさあ、
あのナイフは、
あの二人が俺たちの目の前で、
おちたに渡したんだから、
それしかありえないって」
ホウセイは理屈で考えてそう言う。

このホウセイの言葉には、
おちたも言い返せないで黙り込む。
「ぎょー！
それって、
よく考えたら凄く怖いよなあ」
と
木太郎が他人事のように鼻をほじりながら言う。
「オタクなあ、
こういう事態にそれはやめろよ」
ホウセイが睨むが、
「わりい、
何か、こうして現実から逃げないと怖くてなあ」
と
木太郎が本音を言う。
「これが現実かあ」
と
おちたは言うと、
もとこの方を見た後、
倒れてしまった。

「殺される？」

木太郎とホウセイは、
倒れたおちたのほっぺたをたたくが、
おちたは完全に気絶していた。
「怖い話しするからだよ」
自分から言いだした
木太郎が、
ホウセイの顔を見ながら言う。
「わりい。
おちたは気が小さいから、
あえて否定すべきだったなあ」
ホウセイが、
今頃気づいたように言うと、
「そうねえ。
おちたくんを先にどこかで休ませてから、
話しをすればよかったわねえ」
と
アスカもすまなそうな顔をする。
「おちたくんには悪いけど、
気絶して良かったんじゃない。
その方が、
もっと怖い話しできるでしょう」
アユメがみんなを慰めているのか、
自分が楽しんでいるのか、
わからない言い方をしたので、
「あんた、
下手すると殺されるかもよ」

と
アスカがアユメを脅かす。
「えー、何でえ?」
と言いながら、
アユメが少し震えだした。
「わかったのね」
「うん」
アスカとアユメは、
二人だけわかったような言い方をする。
「どういうこと?
殺されるって」
木太郎が訳がわからないので、
アスカに訊く。
「木太郎くん、
このことを知っていたのは、
本当は、
あなたたち、3人だけ、わかる?」
アスカが木太郎にそう言うと、
ホウセイが初めてその恐ろしさに気づいたようだ。
「もしかして、
俺たちもレイカちゃんとチウメちゃんに
殺されるということ?」
と
何故か声をひそめてアスカとアユメに訊く。
「そうだったのよ。
でも、
二人でここにきちゃったから・・・」
アユメはアスカの方を見て、
そう言いかける。
「ああ、

あのときやめておけば良かった」
アスカが後悔したような言い方をするが、
「よーし、
じゃあ、やられる前にやるか、
こっちの方が人数多いぞ」
と、
木太郎が恐ろしいことを言いだした。

「やられる前に？」

「本気かよ？」
ホウセイが、
珍しく真面目な顔で
おちたの方を見ている木太郎に訊く。
「あたしもそれしかないと思う」
と、
木太郎が答える前に
アスカが少し震えた声で言うと、
「そうよ、
やられる前に、
やるしかないわよ。
今なら、
数で勝てる。
バラバラになって行動したら、
やられるわ」
と
アユメまで、
おちたと死んだもとこを
相互に見ながら言う。
「ちょっと3人とも冷静に。
なんでやり返さないと、
いけないんだよ。それに・・・」
ホウセイは
そこで恐ろしい考えが浮かんでしまい黙り込む。
「ああ、
ヒトメ大丈夫かしら」

アユメが言うと、
「違う。
ホウセイくんが黙り込んだのは、
くそたくんが、
レイカとチウメに騙されること
を怖れているのよね」
と
アスカがホウセイの恐ろしい考えを察して言った。
しかし、
木太郎が、
「くそたが元気ならそんなことはありえない。
くそたなら、
自分の目ですぐ確認にくる。
でも、
まだ来ないんだぞ。
ということは、
もうアイツはこの世にはいないと思うよ。
多分ヒトメも」
と、
暗い顔で、
とんでもないことを言いだした。

「くそたはもういない？」

木太郎の言葉に、
「くそたが、いくら二人が相手でも、
女二人にやられるはずないだろうが？」
と
ホウセイがそんなバカなという顔で言うと、
「いや、
もうくそたはこの世にいないよ。
何度も言うが、
アイツが元気だったら、
もう、
こんなに時間が経っているんだから、
おちたが心配でここに来るはずなんだ！
それに、
ホウセイが怖がったように、
あの二人にとっても、
くそたが一番怖いはずなんだよ。
だから真っ先にやられているよ。
くそたをおだてて油断させて、
後から刃物で刺すとかすれば、
あの二人でもくそたをやれるんだよ」
木太郎が泣きそうな顔でややうつむき加減で話す。
「ああ、そうか？
俺としたことが・・・」
「ああ、
あたしもそこまで考えなかった、
でも、

そうだったらヒトメも？
それに永久くんともとめ先生まで」
ホウセイとアスカがそれぞれそう言うと、
「絶対、殺してやる！
勝てるわよ、
こっちは４人で、
あっちは、
たった２人なんだから」
と
アユメが興奮気味に大声を上げた。

「ドアの向こうの敵？」

「ちょっと、待てよ！
相手を倒すと言っても、
こっちは何も持ってないじゃないか」
「ああ、そうだった・・・。
はー・・・」
と
木太郎がため息をつくと、
「それもそうねえ。
でも、このまま、
この部屋にいてもどうにもならないでしょう？」
と、
アスカが3人の顔を見たとき、
トントンと、
ノックの音がした。
「静かにしてよ」
と囁くように言った後、
アスカは人差し指を口に当てる。
アスカはそうしてから、
素早く部屋の鍵を閉める。
すると、
今度は、
ドアを開けようとする音がした。
「木太郎くん、
そのナイフだけでも」
アスカが木太郎の耳元まで近づき、

もとこの胸に刺さったナイフを指さして、
囁く。
「俺が戦うの？」
と
木太郎がびびりながら、
アスカの耳元で囁き返すと、
ホウセイが、
そっともとめの胸に刺さっていたナイフを抜く。
死んでから時間が経っているせいか、
あまり血はでなかった。
ドアは、
しばらく、
ガッシャガッシャと動いたが、
あきらめたか、
それとも別のことを考えたのか、
ドアの向こうの相手はドアをいじるのをやめた。
「貸して、
あたしがヒトメの仇をとる」
と
アユメがホウセイの耳元で囁くと、
「今はダメ。
武器がひとつしかないから、
ここはホウセイくんに任せて、
あたしたちは、
今、
この部屋で武器になるもの探すのよ。
早く！」
横からアスカがアユメに囁き、
アスカに促されたアユメも考え直して、
部屋の中を探し出した。

「ドアの鍵」

「そう言えば、この部屋の鍵は？」
「あー、管理人室にある・・・」
木太郎の囁きに
ホウセイが囁き返すと、
同じことに気づいたアスカが、
「木太郎くんも武器を、
一緒に探して。
管理人室にここの合い鍵があるなら、
時間の問題よ。
あのドアが開くのは」
そう言って、
入り口のドアを指さす。
ドアの前に一人だけ立って武器を構えるホウセイは、
「このナイフを、
あのとき、
みんなで、
何故、
確認しなかったんだろう」
と、
もとこの死体から抜き取ったナイフを見つめながら
後悔するように小声でつぶやいた。
一方、
アスカたちは、
もとこの部屋で武器になりそうなものを探していたが
何も見つかっていなかった。
「もとこの奴、

全部、オオシマにやらす気だったのかしら、
ろくなもんないじゃない」
「本当に！
ろくなもんないわね。
黒い服や下着ばかりじゃないか」
「木太郎くん何にやけてんのよ！
そんなの見てないで真面目に探して！」
「いや、別に・・・
うーん、でも、ないなあ？」
「本当、どうしてないの？
おかしいわよ。
絶対、あるはずなのに」
「早くしないとやられちゃう」
アスカたちは小声でぶつぶつ言いながら、
とにかく焦っていた。
ホウセイは、
みんながあきらめないように、
3人に近づくと、
小声で、
「絶対あるはずだよ。
でも、
見つかるまでしょうがないから時間稼ぎだ。
探すのはアスカちゃんとアユメちゃんに任せて、
木太郎は、
こっちへ来て鍵を開ける音がしたら
ドアを押す体勢をとってくれ。
奴らが来たら、
少しでもドアを押していてくれれば、
開くスペースが小さくできるから、
俺がそこを攻撃する」

と言った。
すると、
「そうか、ドアか？」
と、
木太郎は何かひらめいたようだった。

「木太郎の妙案」

木太郎は、
「そうだ！
ベッドを
ドアのところに横に置けばいいんだ。
この部屋の広さなら、
　ベッドをドアの前に横に置けば、
ドアは全開しない。
それに、
ベッドの重さで、
ドアが開くにも時間がかかるようになるからな」
と小声で言うと、
「でも、
もとこの死体をどけないと行けないんでしょう」
と
アユメがもとこの死体を触るの嫌がって、
そうアスカの耳元で囁くと、
アユメの不安を理解したホウセイが、
「そのままでいいんだよ。
みんなでベッドを引けば大丈夫。
４人もいれば、
どうにかなるから。
そして、
引けるだけ、引いて、
それで反対側に、
回り込んで押せばどうにかなるぞ」

と小声で言った。
「そうね、もうそれしかない」
アスカがそう言うと、
他の二人も頷いて、
いっせいにベッドを引く。
４人で引いたので、
思った以上に楽にベッドは動いた。
「あー」
そして、
ベッドを半分以上移動させたところで、
その下にナイフのようなものを
アユメが最初に見つける。
「もとこの奴、
こんなところに隠して」
「とにかく、
周り込んで早くベッドを押そう」
４人は今度は反対側に周り込んで、
ベッドを押して壁とドアに寄せた。
「よーし、これなら、
ドアはゆっくりしか開かないし、
それに、
せいぜい三分の一くらいしか開かないから、
敵も簡単には入れないから、
ナイフ二本もあれば、
いくら相手に凄い武器があっても、
入ろうとしているところを部屋側から攻撃できるぞ」
木太郎は、
急に元気になって落ちているナイフを拾う。
それまで、
焦っていたアユメは、

今度は、
逆に、
「うーん、でも、遅いわねえ」
と言う。
「こっちも４人もいて怖いんだから、
向こうだって、
二人だけだから、
何の武器を持っていたって怖いんでしょう。
もしかしたら、
部屋の前で待っているかもしれないわよ」
アスカも急に強気になる。
しかし、
このとき、
木太郎だけはある不安を感じたのだった。

「木太郎の不安」

奴らは
最初からこの部屋に入る気はなかった、
つまり、
ドアをノックしたのも、
部屋を開けようとしたのも入るためでなく、
部屋から出させないするようにするための罠ではないか？
と、

木太郎は、
ふとそんな不安を感じたのだった。
木太郎が黙り込むと、
ホウセイが、
「いいかい。
ここから肝心だ。
みんな落ち着こう。
問題はこれからだ。
アスカちゃんも、
アユメちゃんも、
まず、
相手が攻めてきた場合は、
俺と、
木太郎でこのドアの隙間めがけて、
相手を攻撃するから、
相手が来たら、
二人はベッドの後側で、
押し続けてくれ」

と言うと、
「それは、わかっている。
攻めて来なかった場合は？」
アスカが少し冷静になって言う。
「そう、
その場合も考えられるね。
敵が来なかった場合、
実はこの場合こそ難問だ。
ひとつの可能性は、
このドアの向こうで、
敵が俺たちが出てくるのを待って、
武器を構えている可能性だ。
これが一番厄介なんだ。
で、
もうひとつの可能性は、
既に逃げた場合だ。
この場合は、
もう心配はない。
そして」
と
ホウセイが言いだすと、
「もう言わないで。
わかってる。
アユメも覚悟は出来たでしょう」
と
アスカはアユメの方を見る。
「閉じこめられた場合でしょう」
と
アユメは覚悟を決めたようにそう言うと、
「何だ。

みんな気づいてたのか？
気づいてないのはこいつだけだな」
と
木太郎は少し安心したような顔で言うと、
気絶しているおちたの方を見た。
そして、
木太郎が、
ちょうどおちたの方を見たとき、
「うーん？
あれー？」
と
おちたが目を覚ました。

「おちた目覚める」

「あれ？夢か」
おちたは、
この緊急事態にとぼけたことを言う。
「おちたくん？」
「おちた、気分はどうだ？」
「アレ、うーん」
「おい、俺が誰だかわかるか？」
木太郎が訊くと、
「木太郎だろ」
おちたはすぐ答える。
「じゃあ、思い出したな」
「ああ……。」
おちたはもとこの方を見ないように、
ベッドの位置から顔を背けて、頷いた。
「よし、おちた。
もう大丈夫だな？
いいか、落ち着いて聞けよ。
レイカちゃんとチウメちゃんから、
このナイフを渡されたとき、
二人のどちらから
ナイフを渡されたか憶えているか？」
と
ホウセイはおちたが目覚めたばかりなのに、
いきなり、おちたに訊く。
「今そんなこと訊かなくてもいいじゃない」
と

アスカが言うと、
「いや、
本当の敵が誰だか確認したいんで、
訊いているんだ」
と
ホウセイが強い口調で言うと、
アスカは黙り込む。
「それは、
レイカちゃんだったと思う」
と
おちたは
さっきまでと違って落ち着いて答えた。
「そうか！」
ホウセイは考え込んだのち、
「もしかしたら、
俺たちは
とんでもない勘違いをしているかもしれないぞ。
おちたの記憶が正しければ、
例の二人も、
もうこの世にはいないかもしれない」
と
真顔で言った。

「真犯人？」

「どういうことだよ」
木太郎がホウセイに訊く。
「もしかしたら、
あの二人も騙されたんじゃないのか？」
「レイカとチウメが？」
ホウセイが答えると、
アユメが首を傾げる。
「じゃあ、騙したのは？」
今度はアスカが訊くと、
「もとめ先生じゃないかな」
と
ホウセイが答える。
「でも、動機は？」
「皆殺しさ」
木太郎の質問に答えた、
ホウセイのその一言にみんな驚いたが、
一番驚いたのはおちただった。
「まさか、あのもとめ先生に限って」
おちたは、
また頭がクラクラしてきた。
「そういえば、
おちたくんの演技もクサかったけど、
もとめ先生の演技もクサかったのよ」
アスカがそう言うと、
「おちたほどクサくはないけど、
ちょっと、おおげさだったあ」

木太郎が鼻をひくひくさせながら言う。
「じゃあ、この後どうなるのよ」
アスカがそう言うと、
「俺たちが事実上閉じこめられている間に、オオシマが動く！」
と
ホウセイが
またとんでもないことを言いだした。

「オオシマ？」

「いいか、俺たちは、
もとことオオシマが組んでいた
と思ってただろう？」
ホウセイが言うと、
「違うの？」
アスカとアユメがほぼ同時に言う。
「しかし、
実は、
もとめ先生とオオシマが組んでいたとしたら、
どうなる？」
ホウセイの言葉に、
木太郎たちは凍りついた。
「そ、そんなあ」
「もとめ先生とオオシマが、
もとこを騙していたということか」
木太郎が、
鼻をひくひくさせながら言う。
「騙されていたのは俺たちもな」
ホウセイが言うと、
「じゃあ、
私たちこれからどうしたらいいのよ」
アユメがかなり動揺して言うと、
「あのもとめ先生に限って、
それはないんじゃないかなあ」
もとめを信じるおちたはそう言い張る。

「しかし、
ナイフがすり替えられて殺されたのはもとこで、
もとこに一番恨みをもってるのがもとめ先生だ。
それから、
俺たちももとこに騙されて、
もとめ先生を元整形デブだ
とバカにしていたんだ」
ホウセイがそう言うと、
みな黙り込む。
「それに、
オオシマを
よく知っているのはもとこともとめ先生しかない。
真犯人はもとめ先生とオオシマだ！」
ホウセイは断言するように言った。

「演劇用のナイフ？」

「ホウセイ。
でも、
オオシマは地下から出られないぞ。
隠し扉のプレートを壊したんだから。
それに、
もとめ先生は、
おちたが同行して
２０７号室に一応閉じこめたんだろうが、
自分の意思では、
どうしようもできなかったはずだよ。
レイカとチウメがナイフを探しにこの部屋を出たときに、
もとめ先生と接触した場合以外に犯行の可能性はない。
だから、
やっぱり、犯人はあの二人だけか、
それにもとめ先生が加わったのかいずれかだよ」
と
木太郎が反対する。
すると、
ホウセイが持っているナイフを見て、
「レイカちゃんは演劇部じゃないから、
これを演劇用のナイフだ
と言われれば、
　信用するんじゃないかなあ。
アスカちゃんどう？」
「そうね。
確かに、

よく似てるから知らなければ信用するかもね。
でも、
こうやってよく見ると違うわね。
彼女が犯人じゃないなら、
思いこんだっていうことになるわよね。
私も護身用に持ってきたけど、今は？
あれっ？
あー、あの騒ぎの際、
くそたくんの部屋に置いてきたかも。
そういえば、
実は、
あたしたちのグループで相談したとき、
あたしの護身用のナイフを使おう
と考えていたのよ。
もとこにそれを持たせて暴れさせて、
正当防衛で殺そうと考えたの。
チウメも演劇部だから持っていたのは本物ではなく、
護身用ナイフのはずなのよ。
でも、
結果的におちたくんが違うナイフ
を持っていたということは、
チウメが、
わざと違うナイフ
をレイカに渡したということしか考えられないわね。
問題は、
レイカともとめ先生がチウメに加担してるかどうかね？
それと、オオシマがどうかね？
私も木太郎くんと同じで
多分オオシマだけは関係ないと思うけど」
ホウセイの考えに対し、

アスカは木太郎に近い意見を言う。
「私は、
チウメともとめ先生がグルで、
レイカは利用されただけだと思うけど？」
アユメが新しい意見を言う。
「もとめ先生が皆殺しなんて、
そんなひどいこと考えるかなあ。
もとこが考えるのは理解できないでもないけど、
悪いのは、
チウメちゃんだけだと思いたいなあ」　おちたはそう言う。
「女だけが犯人ならどうにかなりそうだ。
だから、俺からすると、
オオシマが共犯かどうかが問題だな」と
木太郎が言うと、
「もし、
オオシマがどうにかして地下からもう出てきていたとしたら、
とっくにここに来ているはずよ。
強そうだもん。
でも来てないでしょう。
オオシマはまだ地下よ！
それに、
仮にオオシマが共犯だとしても、
最終的には、あたしたちを殺して、
もとこのせいにしないといけないんじゃないの？
そうだったら、
早くあたしたちをどうにかしないと死亡推定時刻で、
そういう偽装もできなくなるんじゃない？
だから、
こんなにもたもたしていないわよ」
アスカがそう言った。

このとき、
また、
ドアがガッシャガッシャと動いた。
（続く）

「鍵を持ってない？」

ドアは何回かガッシャガッシャと動いたが、
鍵を開けた形跡はない。
「誰だ？
チウメか？
もとめ先生か？
オオシマか？」
ホウセイが怒鳴るように言うと、
ドアが静かになる。
「図星ね」
アユメがそう言うと、
「でも、変ね。
鍵が開かないということは鍵を持ってないのかしら。
最後に鍵を持っていたのは？」
「くそたくんよ。
たしか、
もとめ先生の部屋に行ったときに先頭だったじゃない」
アスカの疑問にアユメが答える。
「じゃあ、
くそたは生きていて、
どこかに逃げたか、隠れているかもしれないぞ」
ホウセイが少し明るい顔になって言うと、
「武器も鍵もくそたくんの部屋にあったはずよ。
でも、
どうして強いくそたくんが逃げるのかしら」
アスカが首を傾げた。
「そうだ！

くそたが誰かを助けて逃げたのかもしれない。
それか、
くそたも気づいたのかもしれない。
でも、
俺たちでさえ犯人がわからないから、
様子をうかがうために隠れているのかもしれない、
ここには少なくとも、
俺たち3人がいることはわかっているからなあ。
それに、
そうならおちたが心配でも、
騙されたことに俺かホウセイが気づくはずだ
と思って来ないだけかもしれない」
と、
木太郎も急に考えを変え、
少し明るくなってそう言った。
「くそたくんも、
あたしたちと同じことを考えたけど、
この部屋にはあえて来なかったということ?」
と、
アスカが訊くと、
「ちょっと考えが違うな。
アスカちゃんたちは、
おちたが、
もとこを殺したかどうか自体を疑っただろう。
でも、
くそたの方は、
もとこ自体が殺されたことを前提に、
おちたが騙されて殺してしまったんじゃないか、
と疑って、
多分、

永久とでも相談しに部屋の外へ出てから、
そういう結論に達して、
隠れているんじゃないかな。
アスカちゃんやアユメちゃんのことだって、
疑っているかもしれないぞ、
くそたから見たら消えたんだから」
と、
ホウセイは言う。
「そうねえ。
くそたくんにしてみれば、
あたしたちの行動も変よねえ。
でも、今のドアの音は？」
アスカがそう言うと、
「それは、やっぱり、犯人じゃないかな。
俺たちが、
まだこの部屋にいるか確かめただけじゃないのかな」
と
ホウセイが言った。

「犯人の誤算？」

アスカがホウセイの言葉に首を捻る。
「もしもだよ、
私たちがまだこの部屋にいるか確かめるのよ」
アスカちゃんたちでなく、
くそたたちも、
どこかに行ってしまっていた
と仮定しての話だけど、
犯人の計画が狂ってきたんじゃないのかなあ？」
ホウセイは、
また、
別の推理を始める。
「いいかな。
　アスカちゃんたちの行動と、
くそたたちの行動がなければ、
犯人は、俺たち、３人。
そう、
俺、木太郎、オチタだけ始末すればいい。
例えば、
俺と木太郎を先に殺して、
オチタを自殺に見せかけて殺せば、
全部、
　オチタの単独犯行で終わることになり、
レイカもチウメも
まったく疑われないですむはずだ。

共犯がもとめ先生でもそうだ。
でも、
アスカちゃんとアユメちゃんが
ここにいて、
くそたたちもどこかに行ってしまったら、
そう簡単にはいかなくなる」
「でも、
　犯人がドアを開けようとしたでしょう。
多分、
あの時点では、
あたしたちが、
ここにいるの犯人は気づいていたんじゃないの」
ホウセイの推理にアスカが異論を挟む。
しかし、
ホウセイがすぐ反論する。
「だから、そこが誤算なんだよ。
おそらく、
アスカちゃんたちの後に、
くそたたちもいなくなって、
犯人は気づいたと思うんだ。
いいかな、
くそたたちが何か理由をつけてか、
そっと部屋を抜け出したら、
くそたの部屋は、
もとめ先生、
ヒトメちゃん、
レイカ、チウメの４人になる。
そこで、
　犯人は考えたんだよ。
抜けた４人がこの部屋に来たかもしれないと、

そこで、
この部屋に来て、
誰がいるかを確かめにきたんだろう」
すると、
アユメが、
「じゃあ、犯人が何度も来たのは、
ここに7人いるかどうか確かめたかった
ということになるんじゃない？」
と意見を言う。
「そういうことか。
くそたと永久がここにいないと、
犯人は、
俺たちを
ここに閉じこめても餓死させるなどして殺しても、
あまり意味がなくなるんだよ。
だって、
くそたたちが外へ出て警察に通報したら、
仮に、
俺たちがどういう風に殺されていても、
疑われるのは、
残ったレイカ、チウメ、ヒトメちゃん
そして、もとめ先生になるからな。
あー、それと、オオシマか」
と
木太郎が言った。

「くそたは生きている？」

「なるほど、そういうことか！
じゃあ、
今頃、犯人は動揺している訳だ。
多分、
くそたたちもヒトメちゃんも無事だよ。
そうすると、犯人は最大で４人か。
レイカ、チウメ、
もとめ先生、オオシマの。
でも、オオシマは多分地下だな。
無線機持ってくればよかったな」
と
ホウセイが言うと、
「あー、
あたしの護身用の偽モノのナイフも
くそたくんの部屋だ」
と
アスカがつぶやく。
「犯人間違えて、
それ持っているといいなあ」
と、
木太郎が余裕が出来てきたのか、
冗談ぽく鼻をほじりながら言う。
「話しを戻すぞ。
そうすると、
俺たちの運命は、
くそたと永久の頭脳にかかわってくるな」

と
ホウセイが言う。
「頭脳ねえ。
アイツらに、
あまり期待はできないが、
ここに来なかったのは、
正解だ。
でも、
どうして、
そこまで頭が回ったのかなあ？」
と、
木太郎が言うと、
「くそたはゲームの鬼だからなあ。
ゲーム感覚で考えたんじゃないか？」
と
ホウセイが言う。
「ゲームのやり過ぎも役に立つのね」
アユメが感心したように言うと、
「ははは、
ゲームのやり過ぎか？
で、
犯人の話に戻るけど、
今は、
犯人は、
くそたたちを探し回ってるのかな？」と、
ホウセイはそう言って苦笑いした。

「犯人とくそたの居場所」

「あれから、来ないわねえ」
アユメが少し落ち着いた声でそう言うと、
「だから、
今、
犯人はくそたを探すのに夢中なんだよ。
俺たちは、ここにいるんだから。
犯人が、
最初俺たちが考えたとおり複数なら、
一人一人、
ドアに耳をあてて盗み聞きしてるかもしれないぞ」
と
ホウセイはアユメをからかう。
「いや、本当だったら今こっちから、
やっちゃうのになあ」
と、
木太郎は鼻をほじりながら言う。
「本当ね。やる？」
アスカが少し本気になったが、
「一人でも扉を出たら、
スコップで一撃なんてあるかもしれないから、
もう少し、
様子を見よう」
と
ホウセイは言う。
「そうね。その手はあるわね」
と

アユメも言う。
「まあ、
3人共犯人の場合だけだろうがな」
と、
木太郎が言うと、
「犯人にしても、
永久くんだけなら、
一人でもどうにかなるかもしれないけど、
くそたくんも一緒だと、
一人で行ってもねえ、
二人でもきついかもね」
と、
アスカがみんなの方を見る。
「俺がくそただったら、
こんなとき、どうするかなあ」
と、
木太郎はアスカの話しをよく聞かないで、
少し考え込んでいた。

「動く？そして、真犯人は？」

木太郎は、しばらく、考えた後、
「犯人の人数によっては、動けるなあ」
と
ぼっそと言った。
「犯人が二人以下ならでしょう？
でも、
　木太郎くんかホウセイくんかおちたくんは死ぬ覚悟をしてね」
と
アスカが冗談ぽく言う。
「スコップで一撃の場合か」
と、
ホウセイが言うと、
「僕やろうか？
僕がナイフを確認しなかったのが悪かったんだから」
ずっと黙っていたおちたが、
いかにもすまなさそうな顔をして言う。
「気にしないのよ」
「そうよ、おちたくんは悪くない」
アスカとアユメはそう言って、
おちたを慰める。
「そうだ、おちたは被害者なんだぞ」と
ホウセイも言う。
「でも、俺は一番に部屋は出ないぞ」と
木太郎だけは、保身に走る。
「木太郎の性格はわかってるよ。
行くなら俺だろう？」

と、
ホウセイが少し格好をつけた感じで言うと、
「言うのは簡単だけど怖いぞ」
と、　木太郎が脅かす。
「まだよ。
くそたくんたちを待つのよ」
と、
アユメはそう言う。
「あたしは、前にもちょっとだけ、話したけど、
チウメとレイカが組んでいる可能性はないと思う。
あの二人、
この合宿まで接点がないから、
殺人みたいなことで共犯するとは思えないの。
あと、
指紋のことや演劇部じゃないことを考えると、
レイカは騙されたんじゃないかなあ」と、
アユメははっきり言う。
「指紋か。そうだよなあ。
あのとき、レイカは、手袋なんてしてないで、
素手で、すぐおちたに渡して、
おちたも、
もとめ先生たちがいつくるか、
わからないから、
すぐナイフ隠したもんなあ?」
と
木太郎もアユメの意見に同調するようなことを言う。
「そうよねえ。
チウメだったら自分で触らないで、
レイカにとらせることも可能だもんねえ。
木太郎くんたちの他に、

レイカも殺すつもりだったのかもねえ」

と、

アスカも同調しはじめた。

「動機は？」

ホウセイだけは首を傾げている。
「どうしたの、ホウセイくん」
アユメが訊くと、
「チウメには、動機が思いあたらないんだよ。
もとこに意地悪された訳じゃないし、
俺たちも意地悪したことはない。
アスカちゃんや、
　永久なら、
もとこについてはわかるけど、
それでも他のみんなまでやるかなあ？
でも、もとめ先生は別だよ。
もとこを憎むのは当然だし、
俺たちにだって、陰で、整形美人だとか、
元デブとかバカとか笑われていたんだから
俺たちのことも憎かったかもしれないからな」
と、
ホウセイは答える。
「そうねえ？
動機だともとめ先生ね。
あのとき、
おちたくんとのやりとりのときも
何かわざとらしかったしねえ」
と、
アスカもホウセイに言われると迷いだす。
そのとき、
木太郎が、

「レイカとチウメ二人とも騙す方法ってないのかなあ」
と、
つぶやくと、
「一つ思いついたことがある。
それなら、
レイカがナイフを持っていたのもわかる気がする」
アユメがぶつぶつ言いだした。

「二転三転する推理」

「あーでも、ダメかあ」
また、アユメは何か考えながら、
ぶつぶつ言っている。
「オタクが動機なんて、変なことを言うから、
推理が二転三転してるだぞ」
と、
木太郎も木太郎なりに考えてのことなのか、
ホウセイに八つ当たりするように言う。
「でも、動機がないと計画的な殺人なんて、
普通できるもんじゃないぞ」
と、
ホウセイが言い返すが、
他の４人はそれぞれ何か考えていて、
言い返してこない。
そのとき、
ホウセイが、
木太郎から、
もとこが隠し持っていたナイフを取り上げて、
「ちょっと、これ見比べてくれ！」
と言って、
もとこの旨に刺さっていたナイフと
もとこが隠していたナイフを床に並べた。
「演劇用のナイフに似てるから、すり替えられたんでしょう」
と、
アスカがそう言うと、
「もとこの胸に刺さっていたナイフの方はわかるよ。

犯人のトリックだから。
でも、
もとこの持っていたのまで、
何故、
そっくり何だ?」
と、
ホウセイは言った。

「ナイフ？」

「ちょっと待って」
アスカは、
木太郎が持っていた方のナイフ、
つまり、
もとこが隠していたナイフを見て、
「アレ？」
と言って、
床に刺す。
そして、
　その場にいる人間みんな唖然とする。
そのナイフこそが偽物だったからだ。
「どういうこと？」
アユメが首を傾げると、
「こういうことよ」
と、
アスカも首を捻りながら答える。
「うえー、危なかった！
俺、危うく」
木太郎はツバを飲み込む。
「これも犯人の罠か？」
ホウセイも首を傾げる。
「あのもとこが偽物隠すかよ。
偽物だったら、
もっと
　わかりやすいところに置いてあったんじゃないの？」
と

木太郎は言う。
「犯人は、
あたしが考えていたように、
本当は、
正当防衛で殺す気だったのかしら？
だから、
偽物に予めすりかえたのかしら？」
アスカがそう言うと、
「じゃあ、
犯人は、
途中で、
俺たちの偽装殺人計画を知って、
もとこの殺し方を変えたということか」
と
ホウセイが言って考え込んだ。
「だとすると、犯人は」
アスカはそこまで言いかけた。

「もうひとつの可能性」

アスカが犯人の名を言いかけると、
先に、
アユメが、
「もとめ先生でしょう」
と言った。
しかし、
ホウセイが一言、
「違うよ」
と言って、何か考え込む。
「どうしてよ?」
アユメが言い返すが、
ホウセイは答えない。
「アユメちゃん、
偽装殺人計画はみんなの意見が二つに別れていたから、
もとめ先生の意見を訊くことになり、　そうなったら、
本当にもとめ先生がもとこを殺すだろうと予測して、
それを防止するために俺とホウセイが計画したんだ。
もとめ先生にもとこを殺させないためにね」
木太郎の説明に、
「そんなのわかってるわよ」
と
アユメが言うと、
「ちょっと、
最後まで聞いてくれる?
で、
この計画を知ってるのは、

俺とホウセイとおちたとレイカ、
そして、
チウメだけなんだ。
いい。ここからが、ポイント。
もし、
レイカとチウメが犯人じゃないとすると、
その二人がもとめ先生のところに行くはずはないんだ。
いつ、
くそたたちがもとめ先生のところに行くかもしれない状態で
焦っていたんだからな。
それに、
レイカとチウメが犯人じゃないなら、
もとめ先生のところへ行ったって無駄な訳だから。
もとめ先生はもとこを殺したいに決まってるワケだから」
「そこまでは理解できたわ。
もとめ先生の単独犯は無理ということね」
と、
アユメが言う。
「そう、そういうこと。
で、
くどいけど、
俺とホウセイの計画を知っていて、
もとこを殺したように見せかけるためのナイフ
をすり替えられる可能性があった人間は、
そう、
チウメ、レイカ、
そして、おちた、オタクだけなんだ」
と、
木太郎は、おちたの方を見て言った。

「疑われた人物」

木太郎はおちたの方を見て、
そう言った後、
自信ありげに、
おろおろするおちたの身体を触りまくる。
「あれ？あれれ？」
木太郎が何か慌てている。
「ないの？」
アスカの視線が冷たい。
「ないんでしょう？」
アユメの視線も冷たくなる。
「おちた、脱げるだけ、脱げ」
木太郎がやけっぱちになり、
そう言うと、
おちたは素直に下着姿になるが、
何もない。
「何よ！
偉そうに言ったのに何もないの？
おちたくん、
本当今日はかわいそうに、
早く、服を着て」
と
アスカはそう言いながら、
木太郎を睨む。
「うーん。悪かった。
どこが間違っていたのかな」
と、

木太郎は
気まずそうに鼻をひくひくさせる。
ホウセイだけは、
このとき二つのナイフを見比べて何か考えていた。

「考えるホウセイ」

「わりい。
おちたが、
もとめ先生のためにナイフをすり替えて殺したと思ったんだ」
木太郎は正直に話して、おちたに謝る。
「鬼！」
「だから、木太郎なのよ」
アスカとアユメに木太郎が睨まれると、
「いいんだよ。
俺が木太郎でもそう思ったから」
おちたは、疑われてかえって、
すっきりしたようだった。
「偽物の方が少し重いんだな」
ホウセイは、
４人とはまったく別のことを考えていたのか、
そうつぶやく。
「そうよ。
仕掛けのある分、
でも、
ホウセイくんは、
最初からおちたくんだ」
とは思ってなかったのね」
と、
アスカが訊くと、
「木太郎みたいに、
ずる賢くないからなあ」
と、

何故か苦笑いしながら、そう言う。
「ずる賢いってぴったりね」
と
アユメも笑う。
「ちょっと、
笑ってられる場合じゃないでしょう」
アスカが注意すると、
「わざとよ。
こうしてないと頭が狂いそうだもん」
と
アユメが本音を言う。
「ああ、ごめんね、
そうだ、
ホウセイくんの意見を聞かせてよ」
と
アスカはそう言った。
（続く）

「ナイフのすり替え？」（前書き）

すいません。まだまだ先は長いです。

「ナイフのすり替え？」

「木太郎の考えを聞いて、
俺が今考え直しているのは、
誰かが、
　もとこのナイフと、
チウメのナイフを先にすり替えていた可能性がないか
ということなんだ」
と、
　ホウセイは言う。
「いいかな。
チウメの演劇用のナイフを使うようになったのは、
俺のもとこをどうせなら殺したことにしよう
という提案が発端だ。
しかしだな、
もう一度考え直すと、
今回の出来事は、
犯人にとっては、
　突発的な出来事ではないか、
ということを考えたんだ。
犯人は、
もとこのナイフを演劇用のナイフとすり替えて、
もとこにそれを使わせて正当防衛で殺そう
と考えていた。
しかし、
俺の考えで、
おちたが演劇用のナイフでもとこを刺したことで、

結果的には、
もとこを殺せたワケだ。
そこまでは、
いいような気がするんだが、
その後、
何で、こういう風になったのかが、
わからないわけなんだ」
ホウセイは、
正直に自分の推理が未完成なことを認める。
「そうよねえ。
もし、
ホウセイくんのいうようなすり替えを犯人が行っていても、
目的は達したんだから、
あのまま、
何もしないでおけば良かったのよね」
アユメも首を傾げる。
「あのままにできなかったからじゃないの。
そうよ。
ナイフのすり替えが、
誰かにバレたからこうなったんじゃないの」
と
アスカはそう言った。

「フリダシに戻る？」

「ちょっと、いい。
ホウセイくんの推理と、
アスカの考えだと、
犯人は、
チウメでもレイカでもない
ということになるの？」
アユメが首を傾げながら訊く。
「まず、
チウメは違うんじゃないの？」
と
アスカが言うと、
ホウセイも頷く。
「だって、
自分のナイフを自分ですり替えるのって、
おかしくないか」
と
ホウセイが理由を言う。
「じゃあ、
やっぱり犯人はレイカしかいないんじゃないの？」
と
アユメは言う。
「だって、
それしかないじゃない。
おちたくんが違うんなら、
今、ここにいなくて、
その条件に当てはまるのは、

レイカしかいないんじゃない？
違うかなあ」
アユメのそういう意見に、
他の４人はみんな考え込んだ。

「フリダシに戻る？2」

「やっぱり、フリダシだ。
レイカには動機がない！
動機があるから、
俺は、
　おちたを疑ったんだ」
と、
木太郎がそう言うと、
アユメが、
「レイカに動機が思い当たらないというのは、
認めるわよ。
でも、他にいないのよ。
犯人の条件に合うのは？
やはりレイカじゃないの？」
そう、言い返す。
「それに、
動機なんてそう簡単にわかるもんじゃないわよ」
アユメがそう付け加えると、
「結論はそれしかないのかなあ」
と、
おちたが、残念でもあるように、
　また、
自分の疑いが晴れて、少しほっとしたような感じでつぶやく。
「すっきりしないけど、
やっぱりそうかなあ」
と、
アスカもアユメの見解で仕方がないような言い方をする。

しかし、
木太郎は、
「俺は違うと思うなあ」
と、
理由を説明できずに、そう言って、首を捻る。
「よし、
それなら、アユメちゃんに賭けてみるか？」
と、
ホウセイは思いきってそう言った。

「レイカと対決？と納得しない木太郎」

「ええ、じゃあ、部屋を出て、
レイカと対決？
でも、武器は結局ひとつだけよ！」
アユメは
ホウセイにそう言われて少し尻込みをする。
「アユメちゃんとアスカちゃんは、
最後尾にいて、
隙があったら武器になるようなものを探してくれ」
と
ホウセイが言うと、
「じゃあ、
僕が偽物のナイフを持って先頭で部屋を出るよ」
と
おちたも積極的になる。
しかし、
「なんかすっきりないなあ。
推理小説の王道は意外な犯人に決まってるんだが、
レイカじゃ、
まったく存在感も意外性もないからなあ。
やっぱり、
おちただったというのが、
一番しっくりくるな」
と
木太郎は
レイカが犯人だと他のみんながそう思いこんでいるためか余裕が出て、
鼻をほじりながら、

ふざけたことを言う。
「さっきまでびびっていた奴が、
よく言うな！
いいか？
もう人が殺されてるだぞ！
それにヒトメちゃんだって、
拘束されてるかもしれないし、
あのくそたも逃げてるんだぞ。
少しは真面目にしろ！」
と、
ホウセイが怒るが、
木太郎は平然としている。
「でも、なんでレイカが相手で、
あのくそたくんが逃げたのかしら？」
アスカが首を捻りながら、
そう言ったとき、
「そうか！犯人はくそただ！」
と
木太郎は冗談なのか、
またとんでもないことを言いだした。

「木太郎の真犯人説」

「木太郎、こんなときにふざけるのもいい加減にしろ！
何で、くそたが」
ホウセイが少し怒ったように言うと、
「アスカちゃんの話しを訊いて閃いただけだよ」
と
木太郎は鼻をひくひくさせて弁解する。
「でも、
レイカの単独犯だ
とアスカの言う疑問は解消されないわよね」
アユメが木太郎の推理というか、
閃きもまんざら不自然ではないという言い方をすると、
「くそたの奴がレイカに誘惑されたとか」
と
木太郎がふざけたように言う。
「もう、こいつは」
と
ホウセイは言ったものの、
アスカのくそたに関する疑問を解消する意見は
思いつかない。
すると、
おちたが、
「くそたが隠れている。
そこは正しいと思うんだ。
そして、
くそたが隠れているには、
きっと理由があるはずだよ。
それから、

犯人がこの部屋にはたいした武器がないのに、
攻めても来られない。
そこにも何かある。
多分、
僕たちにも、
犯人にも、
くそたにも、
全員不安があるんだ。
そこさえ、わかれば・・・」
と
途中まで言って考え込む。
「それぞれの陣営に不安があるか？」
ホウセイもそう言って考えこむ。
すると、
また、
木太郎が、
「そうだ！
くそたは、
俺たちと同様、
犯人を掴みきっていないんじゃないか？
それなら、
隠れていることと辻褄が合う」
とまた違うことを言った。
（続く）

「くそたも怖れている?」

「ねえ、木太郎くん、
じゃあ、
くそたくんもあたしたちと同じ立場ということ?」
と、
アスカがそう言うと、
「えっ、そうかあ。そうなのか?
くそたと永久も同じように、
俺たちを疑って、
犯人を知る前にあの部屋を出たのか。
でも・・・」
と言って、
木太郎は考え込む。
「でも、
何故、
ここに来ないんだと言いたいんでしょう?」
と、
今度はアユメが言う。
「そう、そこがわからないなあ」
木太郎が首を傾げると、
「いや、
くそたたちは
アスカちゃんたちとは発想が違ったんじゃないのか?」
と、
ホウセイが閃いたように言う。
「どういうこと?」
「アスカちゃんとアユメちゃんたちは、

俺たちの芝居だと疑ったけど、
それは、俺たちの意思だと思ったんだろう？」
「そうよ」
「でも、くそたたちは、
もとこの意思だと思ったんじゃないか？
だから、ここに来ないで隠れているんじゃないか？」
と、
ホウセイが意外なことを言った。
「どういうことよ？」
「気づいてなかった？
俺とホウセイはもとこのファンだったんだ」
と、
木太郎がそう言うと、
「そんなのわかっていたわよ。
でも、状況が変わったんでしょう」
と、
アユメがよく理解できない
という顔をする。
「うーん、何て説明したら」
と、
ホウセイが少し首を捻ると、
おちたが、
「要するに、
くそたと永久は、
ホウセイと木太郎が
妖しいもとこ先生にたぶらかされたと思いこんでいるから、
ここに来るのを怖れているわけだろう」
と、
自分の考えを言った。

「今度はホウセイが犯人だって？」

「うーん、そういうことか、
謎は解けたよ、おちたくん」
木太郎はそう言って、股間を掻くと、
ホウセイを指さし、
「オタクとレイカが犯人だ。
これなら、意外性も充分」
と言うと、
偉そうに胸をはった。
「もーう、冗談やめてよ！」
アスカがあきれたように言うと、
「俺の推理は完璧だ！
聴いて驚くなよ。
いいか。
今回の芝居を提案したのは誰かな？
チウメのナイフともとこのナイフを交換して、
それを実際おちたに渡したのは誰かな？
まず、
前者はホウセイ、
後者はレイカだ。
そして、
ホウセイとレイカが共犯ならどうなる？」
木太郎はそう言ってホウセイを見る。
「でも、
それは単なる可能性じゃない？」
と
今度はアユメが首を捻りながら言う。

「でも、
俺はさっきのおちたの話しで、
くそたたちがこの部屋に犯人がいる
と考えているのではないかと聴いて、
一から考え直したんだ。
そうしたら、
もとこはもちろん、
俺とおちたは犯人じゃないから、
残るのはホウセイしかいないことに気づいたんだ。
そこから、
逆に考えて行ったら、
すべて辻褄があうワケさ。
ホウセイとレイカが共犯ならね。
多分、
ホウセイとレイカの動機は、
もとこを誰かが殺すことは避けられない
と考えて、
事故死で
今回のことを終わらせようと仕組んだ訳だよ。
おちたにはかわいそうだけどね。
どうだ！」
木太郎は鼻をほじったあと、
その指でホウセイを指す。
「木太郎くん、
ホウセイくんが
犯人の可能性があることはわかったわよ。
でも、その共犯はレイカじゃなくて、
チウメでもいいんじゃない？」
「そんなあ、
アスカちゃんまでひどいよ。

俺が共犯だと言うのかよ」
アスカの言葉にホウセイが悲しそうに、
アスカの方を見た。

「ホウセイは騙された？」

「ごめんね。ホウセイくん。
でも、木太郎くんの今回の推理の方向は悪くないと思う。
それだけよ。
あくまでも可能性だけよ」
と
アスカが弁解すると、
「ホウセイも騙されたんじゃないかな」
と
今度はおちたがそう言う。
「どういうこと？おちたくん」
と
アユメが興味ありげにそう訊く。
「うん。
僕も、
木太郎の今回の推理はいい線言ってると思う。
今回の僕がやったことは、
僕が、
もとこをナイフで刺して初めて成立するからね。
最初に、
木太郎が僕を疑ったのは残念だったけど、
今、
冷静になるとそれもいい線だと思う。
僕がナイフをすり替えればいいワケだからね。
でも、この場合、

僕が演劇用のナイフで、
もとこを殺したフリをする
ということが前提となって初めて殺人は成立するんだ。
いくら、
ナイフをすり替えても、
ホウセイが言いだした芝居が成立しないと、
殺人は成立しなかった
と思う。
正直、
あんな芝居なんて、
僕には思いつかなかったからね。
だから、
犯人は芝居をすることを言いだしたホウセイと、
実際にナイフをすり替えられた、
チウメかレイカの可能性が高い
と思う。
もちろん、
ホウセイがあの芝居を言いだしてから思いついた
とも考えられなくはない。
でも、
その場合は、
チウメとレイカが共犯になるけど、
時間的にそこまで相談する余裕はなかった
と思う。
だから、
やはり、
ホウセイと、
チウメまたはレイカが共犯じゃないのかな。

でも、
ホウセイが悪意を持ってそんなひどいことをやる
とは思えないから、
僕は、
ホウセイがチウメかレイカに騙されて、
ああいう芝居を提案したんじゃないかと思うんだ。
違うかな、ホウセイ？」
と、
おちたはホウセイの顔を見た。

「木太郎しかいない？」

「うーん、残念だな！
　おちた。
あの芝居は、
俺のアイデアで、
誰からもアドバイスは貰っていない。
まあ、
信じて貰えないならしょうがないけどな。
たしかに、
おちたの推理のとおり、
俺の発案がないと、
ナイフのすり替えだけでは、
もとこを殺せなかったよなあ。
でも、
俺はずっと木太郎といたし、
誰とも相談はしていない。
本当だ」
と、
ホウセイは平然と答える。
「じゃあ、
ここに犯人がいるとしたら、
木太郎くんしか残らないんじゃなーい？」
と、
アユメが半分ふざけた言い方をする。
「それなら意外性充分だな。
探偵イコール犯人みたいで」
ホウセイがそう言って苦笑いすると、

「バレたか、俺だよ！　黒幕は」

と

木太郎は、まったく、うろたえず、
冗談を言う余裕がある。
「何だ？
また、フリダシ？
あー、そうだ！
犯人は、
あんた、
アユメじゃないの？」
今度は、
アスカがアユメの方を見ながら、
突然変なことを言いだした。

「そして誰もいなくなった？」

「何でそうなるのよ！
もう、
　あんたまでふざけてどうするのよ！」
　アユメがあきれた顔になる。
「やっぱり、違ったようね」
アスカがにやつく。
「そうか。
ということは、
アスカちゃんとヒトメちゃんともとめ先生が犯人だな！
これなら意外性はばっちりだな」
木太郎も笑いながら鼻をほじる。
「おい・・・やめておくか。
ふざけてる場合じゃないな。
でも、
　こうなるとこの中に犯人はいなくなったぞ」
ホウセイは少しほっとしたようだが、
何故か首を傾げている。
「そして誰もいなくなった？
なーんてね」
木太郎がまたふざけて言う。
　「うーん？
でも、
実際に、
ナイフは本物だったんだ！
でも、

俺の提案がなければ、
チウメのナイフを取りに行くことも、
おちたがそのナイフでもとこを刺すことも予想できないからな。
うーん、どういうことなんだ・・・」
「あと、
もとめ先生がもとこを殺す
といいだすこともね」
ホウセイの発言をアユメがさらに補足すると、
「そこは違うよ。
もとめ先生は本人だろう。
それに、
俺が芝居を考えたのは、
多数決になったら、
もとめ先生がもとこを自分で殺す
と言いだすだろうと予測したからだ。
おちたが殺すフリを引き受けたのも、
もとめ先生のためだからな」
ホウセイがそう言うと、
おちたは頷いたが、
何かひっかかるところがあるようだった。

「思いこみ？」

「あのさあ、
今回の事件は、
ホウセイの提案、
ナイフのすり替え、
もとめ先生の発言と行動予想。
そして、俺の芝居。
この４つがあって成立したんだろう。
でも、
何も知らない人間が、
これだけの条件が揃うと思うかな？
だから、
くそたたちは何も心配しないで、
　犯人と部屋にいるんじゃないかな？」
おちたがやや意味不明なことを言うと、
「あのさあ、
前にも言ったけど、
くそただったら、
アレが芝居じゃなくて、
本当だと思えば、
オタクのこと心配してこの部屋に来るだろうが」
と
木太郎が言うと、
「そう、そこだよ。
犯人が二回この部屋に来て、ドアをいじったのは。
まず、
そうすることで、

俺たちを脅かしここに閉じこめることが目的。
他方、
くそたたちには、
俺の様子を見てくると言って、
部屋を抜ける。
そして、
今は、
俺が人を殺したショックで
　ホウセイと木太郎たちがみているから、
殺人賛成派のくそたたちは顔を見せず、
そっとしておいた方がいいとか、
ごまかして、
時間稼ぎしているんじゃないかな？
つまりさ、
抜け出した人間が真犯人
というワケさ」
おちたは他の４人が首を傾げているのに、
犯人を特定しないまま、自分の考えを言う。
「でも、
あたしたちは殺人賛成派よ。
矛盾するんじゃない？」
アスカの疑問に、
「だから、
二人が来て余計おかしくなったから
と言い訳してるんじゃないかなあ」
おちたはそう答える。
「自信あるのか？」
「まあまあだけど」
木太郎の問いに、
おちたが少し自信ありげに答えると、

「だったら、
これからみんなでこの部屋出て、
くそたたちのいるはずの部屋に行ってみるか！
おちたの推理が正しければ、
くそたたちは、元気だし、
抜け出した人間はくそたたちに訊けば、
わかるから、一気に事件解決だろう！
それなら、面倒な推理をしないでも、
いいじゃないか。
その代わり、オタクが先頭だぞ」
木太郎はにやりと笑った。

「動くしかない？」

「今回の件は僕にも責任があるから、先頭で部屋を出てもいいけど・・・」

「何だ！

やっぱり、怖いんじゃないか？

これお守り」

不安そうなおちたに木太郎は鼻をほじくった後、鼻クソをおちたのほっぺたにつける。

「うわー」

「汚いから犯人も逃げるかもよ」

ホウセイがおちたをからかう。

「なんだかんだ言って男子は余裕ね。

じゃあ、それで決まりでいいの？」

アスカが男三人に訊くと、

「もう動くしかないだろう。

こんなに待っていても犯人が動かないんだから、こっちから動くしかないだろう？」

木太郎は、

自分が先頭で出ていかないですんだので、強気になる。

「そうねえ。

なんか、

死体も腐ってきそうだしね」

アユメが不気味なことを言う。

「やめてよ！

あたしは考えないようにしたんだから」

「まあまあ、その辺で。

とにかく、この部屋を出よう。
決定だ！
いいな！
じゃあ、ベッドを戻そうぜ」
木太郎は勝手に決めて、
ベッドに手をかける。
「よし、行くか！
いいな！おちた」
ホウセイも、
ついに決心したようだった。

「いざ、外へ？」

「わかったよ。行こう！」
「じゃあ、
先頭はおちた、
悪いが、
やられた場合を考えて、
偽物のナイフで、
次は、
ホウセイ、
その次が俺だ。
剣は俺が持つ。
最後に、
アスカちゃんとアユメちゃん」
木太郎はベッドを元の場所に戻し終えると、
自分に都合のいいことを言ったが、
意外にも誰も反対はしなかった。
「一応、俺、灰皿」
「あたしは、
この大きめのシャンプー」
「あたしはリンス」
「まあ、俺に任せておけ」
木太郎は鼻をほじりながら
偉そうにそう言った。
「おちた。
部屋のドアを開けて、すぐ閉めろ！」
「フェイントか？」

「そういうことだ。
おちた。よく気づいたな」
木太郎が自慢げに言う。
「まあ、
木太郎らしいやり方だけど、
まあ、試してみるよ」
おちたはそう言うと、
内側から鍵を開けて、
ドアノブに手をかけた。

「いざ、外へ？2」

「いいか！素早く開けて素早く閉める！
その際に人の気配を確認する。いいな！」
木太郎が、くどく、
そして、偉そうにおちたの耳元で囁く。
「ああ」
おちたはそっとドアを開けて、
気配を確認してすぐドアを閉めた。
「誰もいないみたいだけど？」
「よし、行け！」
おちたがドアをそっーと、
また開け、
周りを確認しながら外へ出る。
「いないぞ。ＯＫ」
おちたの言葉に、
４人が一斉に部屋を出た。
「ふー、いない？」
「本当だ！」
「何やってたんだ」
「あまり大声ださないでよ」
「そうよ、まだ心臓バクバクよ」
５人はあっけなく部屋を出られたので、
それぞれ何かつぶやいたあと、ため息をつく。
「でも、静かね？」
「しー」
「これからよね」
「そう」

5人はきょろきょろ辺りを見回した。

「さあ、あの部屋に」

「はー」
「行くか」
「行くって？」
「決まってるでしょう」
「く・そ・た・く・んの部屋」
5人はひそひそと言い合って、
くそたの部屋を見る。
「フェイントがないかなあ」
「木太郎だけだろう？」
「でも、万一ということもねえ」
「じゃあ、
アスカちゃんとアユメちゃんが
真ん中で後方を俺とホウセイで守る」
「えー」
「しょうがないわよ」
「おちた！　ぬかるなよ」
「はあ？」
「ちょっと待って！　しー」
アスカが口に人差し指を当てると、
5人は沈黙して物音がしないか確認する。
「うー」
何故か、
番犬のように声をあげようとした木太郎の口
をホウセイが押さえる。
再び、5人は沈黙する。
「大丈夫みたいね」

アスカの言葉に、
5人はゆっくりと足を忍ばせて、
くそたの部屋の前まで来た。
「ホウセイは前を、
俺は後を見る」
「じゃあ、
アユメは前を、
あたしが後を」
「わかったわよ」
「おちた！　ぬかるなよ」
「はあ？」
おちたは
くそたの部屋のドアノブに手をかけた。

「さあ、あの部屋に2」

「僕は強いぞ！」
おちたは、
自分に気合いを入れただけなのか、
それとも本気で脅すつもりだったのか、
そう大声をあげてから、
ドアを開けようとした。
しかし、
ドアには鍵がかかっていた。
「ふー、鍵がかかっている」
おちたは気が抜けたようにため息をつく。
「おーい、木太郎様が助けに来たぞ」
木太郎が声をかけるが返事はない。
木太郎はドアに耳をあてる。
「静かだな」
「よし、
相手はこの中で隠れているか、
それとも誰かが拘束されているかのどっちかだが、
恐れる必要はない。
まずは、
2階の他の部屋を全部調べよう。
いいか？」
ホウセイがそう言うと、
他の4人は頷く。
「じゃあ、
階段に近い方から調べましょうよ。
その方が安全よ」

アスカがそう言うと、
「奥からでもいいけど、
万一のときは、もとこの部屋に逃げればいいからな」
ホウセイも頷く。
「僕がまた先頭？」
「決まってるだろう。おちた」
木太郎は鼻をほじると、
おちたの肩を叩いた。

「各部屋の中を探せ」

5人は2階に戻ると、
おちたが、
まず、
アユメの部屋のドアノブに手をかける。
「鍵がかかってるはずだから開いていたら注意して」
アユメの言葉におちたは黙って頷く。
「鍵がかかっています」
おちたの言葉にアユメが自分の部屋の鍵を渡す。
「開きました。行きますよ」
おちたが中に入るが誰もいない。
全員、
中に入って、
トイレや浴室も探すが誰もいない。
「次ヒトメの部屋行くわよ」
「ヒトメちゃんの部屋は要注意だぞ」
木太郎がそう言うと、
「何故よ？」
と
アスカが訊く。
「俺たちが鍵を持ってないからさ」
「なるほど、
私たちが
鍵を持っている部屋に隠れても意味ないわけね。
ということは、
男子の残りは、
永久くんの部屋だけだから、

ここにはいない女子がいる2階の方が危ないわけね。
でも、
木太郎くんって、意外に頭いいじゃない」
「意外にが余計だぞ」
木太郎は笑ってみせたが、
表情は少し硬かった。

「各部屋の中を探せ2」

おちたが、ヒトメの部屋のドアノブに手をかける。
「だめだ。鍵がかかっている」
アスカの話しを思い出し、
アスカの耳元でそっと囁く。
他の3人も様子から鍵がかかっていることを悟った。
木太郎が人差し指を口にあて、
静かにするようにと合図を残りの4人に送った後、
ドアに耳をそっとあてる。
木太郎は首を横にふると、全員黙って頷く。
「次は、アスカちゃんの部屋」
おちたがそっと囁く。
予想どおり、
アスカの部屋には誰もいない。
アスカの部屋を出る前に、
「これからが一番怪しいところね」
「今度は先に音を聴こう」
「そうだな」
「ふー、緊張するなあ」
「チウメの部屋はもとこの隣だから、
違うような気もするけど、
でも、
隣の音はよく聞こえない作りだからねえ」
5人はそう言い合うと、
チウメの部屋である204号室に向かった。

「各部屋の中を探せ3」

アユメの予想したとおり、
チウメの部屋には鍵もかかっており、
木太郎がドアノブをいじる前に先にしばらく耳をあてていても、
人のいる気配はなかった。
「さあ、問題のレイカの部屋よ！
もとこの部屋の正面かあ、ここじゃないかなあ」
アユメがそう言うと、
他の４人は顔を見合わせた。
そうして、
まず、
木太郎がレイカの部屋のドアに耳をあてる。
ドアから耳を離した木太郎の表情が変わったので、
おちたはツバを飲み込んだ。
「中に誰かいるぞ」
木太郎がアスカの耳元で囁くと、
アスカの顔色も変わった。
残りの二人も、
アスカと木太郎の様子から事態が
飲み込めたようだった。
木太郎はもう一度ドアに耳をあてた。
そして、
ドアから耳を離すと、
アスカの耳元でそっと誰かの名前を囁いた。

「次は各部屋の中を探せ４」

「他は？」
アスカに囁かれて、
木太郎はまたドアに耳をあてた。
「・・・」
木太郎は人差し指を口にあてる。
「じゃあ、正面の部屋に隠れていたのか？」
おちたが木太郎の様子を見て、
ホウセイの耳元で囁くと、
「先に２０７号室、確認行った方がいいんじゃないか？」
と
おちた、アスカ、アユメの順に
その耳元で同じように囁く。
「どうしてよ？」
アスカが首を傾げながら、
ホウセイの耳元で囁き返すと、
「そうすれば、安心して、
ゆっくり、この部屋の様子を窺えるだろう」
「ああそうね」
アスカがホウセイの耳元に囁き返すと、
ホウセイは木太郎の耳元で同じことを囁き返した。

「信じる？」

５人はそっと２０７号室へ移動した。
しかし、誰もいなかった。

５人は２０７号室を出て、
先ほど人の声がした２０５号室の前に行く前に、
「よし、あそこであいつらを信じて交渉だ」
いきなり、おちたが小声で言う。
「ああ」
「そうねえ」
「こっちが信じないとね」
「ちょい、待ち」
木太郎が異議を唱える。
「水さすなあ」

「いいから、一旦もとこの部屋に戻るぞ」
木太郎は、
小声でそういうと、
いやがるみんなを無視するように、
さっさともとこの部屋に入る。
４人も渋々もとこの部屋に戻る。
木太郎は素早く鍵を閉めるとため息をついた。

「一つだけわからないことがあるから、

ここで相談したいんだ。
あの部屋はレイカの部屋だ！
何故、あいつらはレイカの部屋に隠れたんだ？
レイカがあの部屋の鍵を持ってるんだぞ。
しかも、
もとこの部屋に近いんだぞ。
もとこを怖れるなら、
1階の他の部屋に隠れた方が安全じゃないか」
「そう言われれば、そうねえ？」
「レイカが犯人じゃないと思ってるんじゃないか？」
「他の部屋だと隠れる意味ないからじゃないか？」
「レイカを犯人だと思って、逆をついたんじゃないか」
「でも、もとこを怖れているって話しじゃなかったか？
レイカの部屋はもとこの部屋の前だぞ、
もとこが怖いならやっぱり怖いぞ！」
「うーん、わけわからないよ。
実際、
さんざん考えてわからなかったから、
行動に出たんだろう。
木太郎話しをややこしくするなよ」
「そうよ」
「行くしかないわよねえ」
「そうだよ。
あいつらを信じるしかない。
違ったら、
俺がやられてやるよ。
行こう！」
おちたの力強い言葉に木太郎以外は頷いた。

「ぬかった？木太郎」

「木太郎、いやなら、
ここに残っててもいいぞ」
ホウセイがわざと突き放したように言う。
「わかったよ。行くよ。
でも、おちた、ぬかるなよ！」
木太郎はしつこくそう言って、
おちたの肩をたたく。

５人はおちたを先頭に２０５号室の前に立つ。
おちたがノックする。
しかし、返事はない。
もう一度、おちたはノックする。
やはり、返事はない。
後にいた木太郎がドアに耳をつけたとたん、
扉が開いたので、木太郎がタイミング悪く転び、
２０５号室に入ってしまったのだった。
「やっぱり、
木太郎が犯人だったのか？」
「いや、他にもいるぞ」

中にいたのはくそたと永久だった。
そして、
なだれ込むように入ってきた５人に驚いた。
そして、

くそたは、
　木太郎の脇腹に思いっきり蹴りを入れた。
「やめろよ。くそた、違うんだ！」
「てめえら、もとこの手下だろう。
それも、５人もかあ」
「いてー」
木太郎がくそたに蹴られて、
泣きそうな顔をして倒れている。
「待て！落ち着け！くそた！」
永久が慌ててとめに入る。
「ふー、永久ありがとう」
ホウセイが思わず頭を下げる。
「永久くん」
「永久」
「くそたくん、
殺されたかと思ったわよ」
「いてー、俺が一番マヌケだった」
「わかってくれるか、くそた」
５人の言葉と、永久の顔を見て、
くそたはやっと落ち着きを取り戻したようだ。
「どっちから、話そうか？」
「まず、その前に部屋の鍵を閉めよう」
「鍵か？」
「そうしてくれ」
永久は部屋の鍵を閉めた。
「で、永久、
何で、オタクらこの部屋に隠れていたんだ」
　ホウセイは早速永久に質問した。

「もとこ」

「というより、
オタクらなんで5人でいるんだ？
もとこはどうした？」
くそたが横から口をだす。
やはり、
　くそたはもとこが生きている
と思ったようだ。
「だから、もとこは死んだって」
今度は横から木太郎が口をだす。
「木太郎、
あれがおちたの芝居だってことは
とうに俺たち気づいているんだぜ。
オタクら、
あの女にたぶらかされてるんだよ。
いいか、いずれ殺されるぞ。
今はオオシマが出てくるまでの時間稼ぎをしてるだけだ」
「何言ってんだよ？
もとこは本当におちたが殺したんだよ」
「お、俺は・・・」
「木太郎くん、
その言い方、
おちたくんにかわいそうよ。
いーい、くそたくん。
あたしたちもあれが芝居だと思って、
もとこの部屋に確認行ったのよ。
でも、本当なの」

アスカがそう言って、
初めてくそたと永久は首を傾げながら、
互いに顔を見合わせる。
「アスカちゃん、
こいつら三人に騙されちゃだめだよ。
もとこをこいつらが本当に殺すわけないだろう
もとこのエロさに騙されてるだけだから」
永久もくそたと同じことを言い張る。
「だから、本当だって」
まったく信じない永久とくそたに、
木太郎はあきれた顔をしてそう言った。

「死体」

「くそた、
俺たちのことが信じられないのなら、
もとこの死体を見せてやるよ」
木太郎が偉そうに言う。
「と言って騙して、
俺たちを殺すんじゃないだろうな？」
「オタクねえ」
「じゃあ、二人で、
もとこの部屋に行って確認して来いよ」
木太郎はそう言って、剣を貸そうとすると、
二人は、
既にトンカチを隠し持っていた。
「こわー」
おちたが何故かびびる。
「鍵は開いてるからなあ」
木太郎がそう言うと、
「俺たちはマスターキーを持ってるから」
くそたと永久は5人を警戒しながら、
レイカの部屋を出ていった。

「本当、疑り深いやつらだよなあ」
「それより、
あの二人がもとこの死体を確認したら、
何故二人がこのレイカの部屋に隠れていたのか訊かないとな」
木太郎の言葉に、
アスカが不安げな顔をする。

「まさか、
ナイフを取り替えた犯人が何かやったのかしら？
それとも、
もとこがもうひとりいたとか？」
木太郎が怖ろしいことを言う。
「どっかのインチキブログじゃないんだから」
ホウセイはありえないという顔をする。
「ああ、俺が出てくる。アレね」
木太郎は笑う。

そして、
すぐ、
くそたと永久が戻ってきた。

「永久の長話」

「本当だったんだ」
永久はびっくりしたような顔で部屋に戻るなり、
首を傾げる。
そして、
永久は早口で話しを続ける。
「俺たちが、
おちたがもとこを刺してから、
あの後、
くそたの部屋に行っただろう。
でも、
俺はおちたがやったときから、
何か臭いというかおかしいと思ったんだよ。
そして、
不審に思って考えていたんだけど、
ふと気づくと、
アスカちゃんとアユメちゃんがいなくなっていたんだ。
そして、
しばらくして、
もとめ先生が、
パニックのようになって暴れ出して、
どこから見つけたのか、
ナイフで自分の首を切って自殺しようとしたんだよ。
でも、血はでなかったんだ。
そうなんだ。
もとめ先生からナイフを奪って、確認したら、
そのナイフはおもちゃというか、

演劇用のナイフだったんだよ。
そのとき、
他の女子3人は大騒ぎで、
もとめ先生を押さえていたんだけど、
俺は、
そのとき、
もとこのときも同じ、
同じような
おちたの芝居だったと確信したんだ。
それで、
すぐ、
こっそりくそたを呼んであの部屋を出ると、
芝居だということを確認するために、
もとこの部屋を開けようとしたんだが鍵はかかっているし、
何か中の声の様子が変だったんで、
慌てて、
二人でもとこの部屋の前のこの部屋に隠れたんだよ。
多分、

今思えば、
アスカちゃんか
アユメちゃんのどっちかの声がだったんだろうけど、
そのときはてっきり、
もとこかと思ったんだよ」
木太郎たちは永久の話しを聞く
と頷いた。
「もしかして、
もとめ先生の自殺騒動
も芝居じゃなかったのかしら?
そうすると、

もとめ先生が自殺しよう
としたナイフともとこに刺さったナイフが
すり替えられたんじゃないかしら？
だとしたら、
ナイフすり替えの犯人は？
うーん？」
アスカが思いついたことを言ってから考え込むと、
「自殺が芝居かどうかは、
もとめ先生に確認すればいいことだろう？
さっきは入れなかったけど、
あの部屋の鍵もマスターキー
もくそたが持ってるんだから」
ホウセイの言葉にみな頷いた。

「くそたの部屋に」

7人は周りを一応警戒しながら、
くそたを先頭に、
おちたを最後方にして、
くそたの部屋に向かった。
「開けるぞ！」
「うん」
木太郎がゴクリとツバを飲む。
「いや、待て、いや、いい」
「どっちなんだよ？」
「さっきみたいになると怖いんだろう」
木太郎がレイカの部屋のドアに耳を当てたところでドアが開き、
転んだところをくそたに顔面を蹴られたところを皆思いだす。
「今度は大丈夫だから」
「くそた、やってくれよ」
「わかった」
くそたはドアに耳をあてる。
「静かだ。開けるぞ」
くそたは素早く鍵を開けると、中に入る。
「あー」
「大声だすなよ。木太郎」
「ごめん」
ベッドの上には、
女が横たわっていた。
ベッドの緑色のカーペットには
もう乾ききったややドスグロイ血が広がっていた。
女の顔にはハンカチがかかっていて、

両手がおなかのところで組まれていた。
首から胸にかけては血まみれだった。
「おかしいな？」
くそたは女を見てそう呟いた。

「遺体」

「何が？」

「だから、この服はどう見ても、
もとめ先生のだろ。
でも、自殺未遂は失敗だったんだから、
死ぬはずないんだよ。
それに他の3人はどこに行ったんだ？」

「そうだけど、
その前に、
誰か、
早く、あのハンカチとってみてよ。
まだ、信じられないのよ」

「おちた、行け！」

木太郎がおちたに偉そうに命令すると、
おちたは悲しそうな顔でベッドに近づいた。

「ああ」

おちたはため息をつくと、
そっとハンカチをはずした。

「せんせい・・・」

「まさか・・・」

「部屋の鍵を閉めるぞ！」

ホウセイは覚悟していたのか、
何か考えがあるのか、
意外に冷静だった。

「密室殺人？」

ホウセイは部屋の鍵を閉める。
「ハンカチを戻すぞ」
「うん」
しばらく、沈黙が続く。

「ねえ、
この部屋、鍵が閉まってたわよね」
「そうだけど？」
アスカの言葉に、
アユメが何の疑問も持たずそう答えると、
「そうか！
アスカちゃん、鋭い。
これって密室殺人なワケだな」
木太郎がアスカの方を見ると、
「木太郎くんも鋭いわね。
そうよ。
だって、
この部屋の鍵も、
マスターキーも
くそたくんが持っていたんでしょう。
で、
もとめ先生の傷を見ると、
ほぼ即死でしょう。
それなのに、
両手がおなかのところで組まれて死んでいて、

内側から部屋の鍵はかけられていた。
ということは、
ここは密室だったワケよ」
と
アスカが説明する。
「でもさあ。
他の3人はどうしたの？
それから・・・」
アユメが、
そこで口籠もると、
「鍵を持っていたくそたと一緒にいた永久なら
犯行が可能だと言いたいんだろうが、
でも、
それじゃあ、
密室にする意味ないよ」
と
おちたが言う。
「あー、そうねえ。
くそたくんと永久くん以外じゃない
とたしかにここを密室にする意味ないわね」
アユメもおちたの指摘に頷いた。

「アユメの推理する真犯人」

「密室殺人か？
そうだ。
その前に、
おまえら、
さっきレイカの部屋に入る前に
俺たちの部屋を開けようとしたか？」
くそたが訊くと、
「初めてよ。
さっきが。
アレ？
ちょっと待ってよ！
何で、
犯人はくそたくんたちが
レイカの部屋にいることがわかったの」
アスカがまた新たな疑問を口にする。
「あー、
そうかあ！
わかったわよ！
それは、
レイカが犯人だからじゃないの？」
それまで考え込んでいたアユメが、
何か思いついたのかそう言った。
「どうしてレイカなのよ？」
「アスカ。
もとめ先生が自殺未遂をした後の状況考えてみてよ。
この部屋に残ったのは3人だけのはずよ。

ヒトメとレイカとチウメ。
ここまではわかるわよね。
で、
真犯人は、
私やアスカ、
くそたくんと永久くんが消えるなんてことは
多分も予想していなかったはずでしょ。
いくらずる賢い犯人でも絶対無理よ。
多分、
もとめ先生の自殺未遂も想定外だったはず。
で、
最初にもとこの部屋を開けようとしたのは
永久くんたちだけど、
次に来たのが多分犯人なのよ。
そう。
私たちがどこに行ったのか、
探りにきたわけ。
そして、
最初に思いつくのが、
もとこの部屋。
で、
ドアを開けようとして誰がいるか探ったわけよ。
それで、
多分、
私とアスカが、
もとこの部屋にいるのを確認したのよ。
でも、
くそたくんたちの声がしなかったでしょう。
多分、
じっと盗み聞きでもしてたんじゃない？

それで、他の部屋を探したわけ」
「そこまではよくわかるけど、
何で真犯人がレイカがなの？」
アスカがアユメに訊く。
「それはねえ。
レイカは自分の部屋に鍵をかけてなかったからよ」
「えー、どういうこと？
よくわからないけど」
アスカが首を傾げると、
「俺はわかったぞ」
と
木太郎が横から口を出した。

「真犯人？」

「あのねえ、アスカちゃん、
犯人は自分の部屋だけじゃなく、
2階の他の部屋も探したんだよ。
で、
ドアが開くか確認したんだ。
で、
返事はなかったけど、
鍵が開いてる部屋のはずなのに
鍵がかかっていた部屋があったんだよ。
そう俺たちが隠れて
鍵を閉めたレイカちゃんの部屋のことだよ」
「あー、そういうことなの」
アスカがやっと理解すると、
今度はホウセイが、
「結論は俺も同じ。
でも、
俺は、
ちょっとアユメちゃんや木太郎とは、
レイカの行動は違うと思うなあ。
レイカは最初に自分の部屋に行ったんだ
と思うよ。
何故、
最初に自分の部屋に行ったのかはわからないけど。
でも、
鍵が開かなかったんで、
そのとき、

誰かいると確信したわけだよ。
でも、
誰かはわからなかったので、
外から耳をあてて盗み聞きしたんだと思うな。
その後で、
アユメちゃんが言うように行動して、
もとこの部屋に誰かいるのか確かめたんだ
と思うけどなあ」
細かい違いを指摘した。
「そうねえ。
ホウセイくんの言うとおりかもね。
でも、
これで一人、
犯人がわかったからいいじゃない」
アユメがあっさりホウセイの意見に従うと、
永久以外の生徒は頷いた。

「永久の疑問と武器」

しかし、
永久だけは首を傾げている。
「どうしたんだよ？
まだ、理解できないのかよ？
頭悪いなあ」
木太郎が鼻をほじりながら言う。
「うーん。
俺たちがいた部屋を開けようとしたのが、
レイカちゃんの可能性があるかもしれない
って言うのはわかったんだけど、
わからないのは、
何で、
芝居したはずのもとこの部屋の外で、
一緒に組んでいたはずのおちたたちに
声をかけなかったのがまったくわからないんだよ。
自分の正体を知られたくないので、
声をかけないで中の様子を窺いたいだけなら、
ドアを開けないで、
外からドアに耳をあてて盗み聞きすればいいことだろ。
ドアを実際に開けようとして、
本当に、
もとこの部屋のドアが開いたら、困るだろう。
おちたたちをやる気だったと仮定するのも無理があるしな。
だって、
いくらおちた、木太郎、ホウセイの３人だけが相手でも、
女一人で勝てる訳ないからさ。

それに、
もとこの部屋には、
その前に俺もくそたもいなくなっていたんだから、
強いくそたがいたかもしれない
と思っても不思議じゃないだろ？」
「だから、
レイカとチウメの二人で来たのかもしれないじゃない。
それに、私たちもそうだけど、おちたくん以外は、
武器らしいものはもとこの部屋にはないんだから、
男3人でも二人が素手じゃ勝てないでしょう。
違うかな？」
永久の疑問にアユメが反論すると、
「ああ、そうだ！
武器だ。
えーと、
スコップが一つあるだろう。
えーと、ハンマー1本に、包丁が2本か。
あれっ？
そう言えば、もとめ先生は何で自殺したんだろう？」
木太郎が周りを確認する。
「俺、
たしか、
スコップ4つくらい倉庫からとってきたぞ。
俺と永久のトンカチは、
もとめ先生が自殺して、
もとこの部屋に向かう途中で、
管理人室から持ってきたんだよなあ」
くそたがトンカチを見せる。
「じゃあ、
スコップが3つなくなっているということねえ？」

「ここにいない3人が持って行ったのかなあ？」
ホウセイがつぶやいた。

「永久の疑問とやってきたのは？」

「武器のことも重要だけど、
その話しは後にして、
さっきの問題に戻すぞ。
えーと、
さっきのアユメちゃんの意見だけど、
レイカちゃんとチウメちゃんの二人だけで
もとこの部屋に来たということはないよ！
何故なら、
ヒトメちゃんひとりだけで、
もとめ先生が自殺したこの部屋に
一人じゃいられるはずないだろ。
違う？」
永久が自分の疑問をぶつけると、
「まあ、そうねえ。
じゃあ、３人？
ああ、そうすると、
ヒトメも犯人ということになるけど、
それはおかしいわね。
じゃあ、
一人だけでこの部屋を出てきたのかしら？」
アユメもそれを聞いて首を傾げる。
「でも、
一人でもとこの部屋に行って、
ドアが開いて誰か出てきたら、
どうする気だったんだ？」
永久がアユメの話しを聞いてまた意見を言うと、

「永久話しをややこしくするなよ。
せっかく、いいところまできたのに」
木太郎が鼻をほじりながらぼやく。
「でも、わからないんだから、しょうがないじゃん」
永久がすねたようにそう吐き捨てる。
「まあ、そこまで！
もう考えるの後にしようぜ、
スコップは俺が持つから、
後は適当に残りの武器持って、
俺について来いよ。
下手な推理をするより、
隠れている犯人見つけた方が早いよ。
これだけいて、
これだけの武器あれば、
絶対勝てるからな」
くそたがそう言うと、
永久以外の他の５人は頷いた。

「どの部屋から探す？」

「よし、じゃあ、
チウメの部屋に行きましょうよ？」
「ヒトメの部屋かもよ」
「でも、どっちも静かだったけどな」
7人はいざ部屋をでることを決めたが、
どこへ行くかでまた意見が食い違う。
「鍵がないと入れないでしょう？
だから、
チウメかヒトメの部屋よ」
アスカが言い張る。
「でも、気配はしなかったけどなあ」
木太郎が今度は首を傾げる。
「じゃあ、多数決で決めよう」
ホウセイがそう言うと、
アスカも木太郎も渋々頷く。
「アスカちゃんの意見がいいと思う人？」
アユメ、永久が手を挙げる。
「木太郎の意見がいいと思う人」
おちたとくそたが手を挙げる。
「今のところ、
3対3だから、
ホウセイくんの意見で決まりね」
アユメが言うと、
ホウセイが考え込む。
そして、
ホウセイはぼつりと言う。

「もとめ先生の部屋は？」
「ああ、そうねえ」
「たしかにありえる・・・」
「おちた、
鍵を持ってるか調べろよ」
「お、俺イヤだよ、
木太郎そんなことというなら、
自分で調べろよ」
「何で俺が？
そうだ！
言い出しっぺのホウセイ調べろよ」
木太郎がそう言うと、
他の５人はホウセイの方を見た。

「どの部屋から探す？2」

「ポーチとか持ってないわよね？」
「ないみたいだけど？」
アユメの質問に、
ホウセイがもとめの遺体の周りや
部屋を見まわして答える。
「じゃあ、
鍵は２０７号室にあるんじゃないかしら？
男子と違って、
ポケットがない服多いし、
あっても入れないわよねえ」
「そう言えばそうね。
それに、
この服ポケットないわよ」
「ああ、よかった」
ホウセイがため息をつく。
「じゃあ、２０７号室行くか？」
おちたが言うと、
「もとめ先生の部屋は１階だから、
俺がマスターキー持ってるんだから、
直接行った方が早いだろう。
もとめ先生の部屋に誰か隠れているなら、
ここから、
部屋の鍵を持ち出したか、
２０７号室からとってきたワケにしろ、
鍵は犯人が持ってるはずだからな！」
くそたが他の生徒が考えてなかったことを言うと、

「くそたくんって、頭いいのね」
と
アユメがおだてて、皆も頷く。
くそたたちは、
くそたを先頭にもとめの部屋である１０６号室に向かった。

木太郎は１０６号室の前に行くと、
懲りずに、
その部屋のドアの耳をあてた。
「静かだな？
いないんじゃないか？」
「よし、代われ、開けるぞ！」
くそたが１０６号室の鍵がかかっていることを確認すると、
マスターキーを使って、鍵を開けたのだった。

「もとめの部屋」

「しー」
「いないみたいだなあ？」
「トイレと浴室を見ろ」
「後は頼んだぞ」
「あー」
「あっ！」
「どうしたの？」
「アスカちゃん、
ちょっと声が大きい」
「ごめんなさい」
「ほら、
スコップがひとつだけある！」
おちたがトイレのドアの前を指さす。
「ちょっと、怖いじゃないのよ」
「後、警戒しろ！」
「前もだよ」
「それはわかってる」
「じゃあ、
ホウセイと永久は部屋の前で待ってろ！」
木太郎が偉そうに小声で言う。
「わかった」
「ああ」

ホウセイと永久以外はもとめの部屋の中に入ると、
トイレと浴室以外に人がいないことを確認する。

「浴室にカーテンかかってるぞ」
「わかってるって」
「くそたくん、何びびってんのよ」
「意外に不気味だなあ。
木太郎、試しにあのカーテンを
さーっと動かしてくれよ」
くそたが木太郎に小声で囁く。
「誰かいるなら、
カーテンの方だろう。
トイレは罠だよ、
くそたなら勝てるよ。
がんばれ」
「そういう問題じゃないんだよ」
「どういう問題だよ」
「何二人してびびってんのよ」
「あたし、開けようか？」
アユメが前に進もうとすると、
くそたと木太郎が止める。
「わかったよ。
僕が行けばいいんだろう」
おちたが前に進んだ。

「もとめの部屋2」

全員わかっていたことだが、
浴室といっても、
簡単な脱衣場所と、
浴槽、その上にかかっているカーテンだけのスペースだった。
とても、
3人が隠れられそうな場所ではなかったが、
トイレの前にスコップがおかれていたので、
7人共犯人が隠れているのではないかと、
びびっていた。
おちたは閉じているカーテンに手をかかれると、
一気に開いた。
おちたは上下左右を見わたし、
ため息をついた。
「ふー」
「やっぱりいなかったか」
びびっていたクセに木太郎がそういうこと
を小声でおちたの耳元で囁く。
「次はオタクの番だからな」
「ああ」
木太郎は自信ありげにトイレの方へ向き、
少し進みトイレのドアの前のスコップ
を手に取ると、
トイレのドアノブに手をかけた。

「もとめの部屋3」

「あれ？」
木太郎が一生懸命ドアノブを引くが、
トイレのドアは開かなかった。
「鍵が中からかかっているんじゃないの？」
「えー、ということは・・・」
7人は顔を見合わせる。

7人はトイレから一旦離れてひそひそ話しを始めた。
「間違いないわ。
誰か最低一人は隠れているわ」
「ドアぶちこわそうか？」
「でも、
ヒトメだったからかわいそうよ」
「とは限らないだろう？」
「だから、ヒトメだったらよ」
「じゃあ、
先に、
ヒトメでしょうって声かけて返事がないなら
壊しましょうよ。
ヒトメなら、
あたしたちの声で出てくるわよ」
「そうよ」
「そうしてね。
くそたくん」
「よーし」

今度はくそたが先頭になって、
アユメとアスカがトイレの中に向かって声をかけた。
「ヒトメいるの？」
「もう大丈夫。私アスカ」
「私はアユメ！」
「大丈夫だから、出てきなさい」
「ヒトメ！
出てこないと殺されるわよ！」
「ヒトメ、私たちを信じて」
しかし、返事がなかったので、
「ドア、ぶちこわすからどいてろ！」
くそたがスコップを振り上げて、
ドアのノブのそばを思いっきり、ぶったたいた。

「やっぱりおまえか」

くそたの一撃で、
トイレの鍵はすぐ壊れ、
誰もドアノブを引いていないのに、
ドアの扉が開いた。
トイレの中では、
レイカがどこに隠し持っていたのか
ナイフを持って構えていた。
くそたは、
「やっぱりおまえか！」
と言うと、
その頭部をスコップで殴ろうとしたので、
「くそた、やめろ！」
と
おちたがくそたを止めようとしたが遅く、
くそたは
レイカの右肩の辺りをスコップで叩いていた。
そして、
レイカは前のめりに倒れたのだった。
「こ、こいつがナイフを．．．」
くそたは震えていた。
「あー」
「やっちゃた」
アスカとアユメがレイカを抱き起こしたが、
レイカはまだ死んではいないようだったが、
その意識はないようだった。
「本当にレイカが犯人だったのかなあ？」

木太郎が今になって首を捻る。
「えー、俺やっちゃたよ。
だって、あいつナイフを構えていたんだから」
くそたはそう言うと、
血のついたスコップを放りなげる。
「でも、犯人じゃないなら出てくるか返事をすれば
よかったのになあ。
なんでナイフを構えていたんだろう?」
ホウセイがぼそっと言う。

しばらく沈黙が続いたが、
それを破ったのはアスカだった。
「あー、あれえ?
このナイフ!
あたしのよ。
そういえば、
もとめ先生の部屋になかったわよねえ」
アスカが、
レイカが倒れた際落としたのか、
そばに落ちているナイフを見てそう言った。
「見せてくれる」
ホウセイが、
アスカからナイフを受け取って見ると、
それはまぎれもなく演劇用の偽物だったが、
何故か少し血がついていた。
「まさか?レイカもはめられた?」
アユメがレイカを抱きながら、
そう呟いた。

「おちた、くそた、そして、木太郎？」

「はめられた？」
くそたはアユメの言葉を聞くと、
その場で座り込んでしまった。
「おちたに続いてというわけか」
ホウセイは何かを考えた。
そして、
「犯人の狙いは、
こういうことだったの？」
アスカもそう呟いた。
「じゃあ、次は俺？」
木太郎は芝居を考えた人間が
はめられていくものと考えて、
自分で自分のことを指さす。
「考えすぎだよ。それは？
いいか？
真犯人がレイカちゃんじゃないとすると、
ここにいない二人の両方か
どちらかが犯人のはずだから？」
おちたが木太郎の考えたことを
念頭に置いてその考えを否定するように言う。
「だけど、
それはこの中に真犯人がいない場合だろう？」
木太郎はそう言うと、
その場の全員の顔色をうかがった。

「犯人は手を汚さない」

「木太郎、変なことを言いだすなよ。
ただでさえ、みんな怖いんだから」
「でも、冷静に考えろよ！
何で、レイカが演劇用のナイフ
を持って構えていたんだよ」
「それは、
レイカちゃんは犯人じゃなかったということだろう。
だから、
犯人はチウメちゃんじゃないかな？」
「本当にそうなのか？」
木太郎とおちたは
互いに自分の意見を言い合う。
「今回、実際に今あるナイフは３本、
うち２本が偽物で、
１本が演劇用の偽物さ。
それで、
一つはおちたが、
一つはもとこのベッドの下が、
もう一つはもとめ先生が自殺したナイフか、
ここにあるレイカが持っていたナイフだ。
もし、
この他にもうひとつ本物のナイフがあり、
その４つのナイフが
それぞれすり替えられていたら、
どういうことになる」
「それは・・・えー？

じゃあ、
もとめ先生も
演技で本当は自殺する気じゃなかったけど、
間違って本物のナイフを使って死んじゃったということか？」
「そういう可能性もなくはないが、
実際、
最初は失敗したみたいだからな。
でも、
一度失敗したのに、
同じナイフを使うか？」
おちたの言葉に、
木太郎がそう答えると、
アスカたちはホウセイの方を見た。

「犯人は手を汚さない2」

「また、俺が疑われるの？」
ホウセイは悲しそうな顔をするが、
「しょうがないだろう。
ホウセイのあの計画がなければ
成功しない殺人計画なんだから」
木太郎は冷たく言い放つ。
「ちょっと、木太郎くん。
そう決めつけない方がいいわよ。
今回の件はとにかく変よ」
「そうよ。変！」
アスカとアユメが口を揃えて言う。
「いーい。
とにかく、
今はみんなで団結して残りの二人を探しだすの。
それから、
もし、
今みたいに相手が武器を持っていても、
ああいうのはだめよ！」
「そーう。
木太郎くんの推理に近いのなら、
犯人は手を汚さないから」
「そうしよう。
とにかく、僕が先頭で行く。
レイカちゃんはまだ息があるみたいだから、
ベッドに寝かしておいてあげよう。
あと、

アスカちゃんとアユメちゃんは、
くそたをよろしく。
こいつ、
意外に気が小さいみたいだから」
おちたがそう言うと、
「言ってくれるねえ。
でも、そうかもしれないなあ」
くそたは落ち込んでそう呟くように言う。
「多分、
残りの二人は、
ヒトメとチウメの部屋に一人でいるわね」
「そうねえ！」
「いいから、早く行きましょう」
アスカとアユメの言葉に、
他の5人はそれぞれ疑問を感じながらも、
黙って頷いた。

「犯人は手を汚さない3」

「まず、ヒトメの部屋からね」
アスカの言葉に、
おちたを先頭に7人はヒトメの部屋にむかった。
「ちょっと待ってくれ」
ヒトメの部屋の前にくると、
木太郎がおちたを押しのけて小声で言うと、
毎度のことのようにドアに耳をあてる。
「うん、誰もいないみたいだぞ！」
「何言ってのよ。
ヒトメが中にいるはずよ」
「ああ、間違えた。静かだ」
木太郎はこういう事態なのに、
まだ、
ふざけている。
「木太郎、下がってろ。
くそた鍵貸してくれ」
「おちたくん、
ヒトメは恐がりだけど、
おっちょこちょいなところもあるから、
いきなり勘違いして襲ってくるかもしれないから
気をつけてね」
おちたの言葉に、
アユメがアドバイスすると、
おちたは黙って頷く。
おちたはくそたから鍵を受け取ると、
そっとヒトメの部屋の鍵を開ける。

そして、
おちたはゆっくりドアノブを捻ると、
ドアを開きかけた。
「うわー」
その瞬間、
ドアの隙間に
むかってスコップが振り落とされた。
「危なかったあ！」
おちたが、
すぐには部屋に入らず、
すぐドアノブから手を放したので、
スコップは、
そのままドアノブを一撃しただけですんだ。
その衝撃のためか、
ドアの向こうの相手は痛みを感じて、
悲鳴をあげた。
「ヒトメの声！
あたしよ。もう大丈夫だから、
怖がらないでおとなしくして！」
アユメがそう大声を上げると、
おちたを押しのけて、
ドアを開けると、
一人でヒトメの部屋に入っていってしまった。

「犯人は手を汚さない４」

アユメは先に一人で部屋に入ると、
部屋の入り口でスコップを持ったまま立ち尽くして、
涙を浮かべているヒトメを抱く。
「もう大丈夫だから」
「何があったのよ」
アユメとアスカの顔を見たヒトメは、
大声で泣き出した。
それを見ていた他の５人は
素早くヒトメの部屋に入ると、
ヒトメの部屋の鍵を閉めた。

「どうしたの？」
「何があったのよ？」
アユメとアスカは泣いているヒトメに
立て続けに質問するが、
ヒトメは泣いていて、
何も答えなかった。
ヒトメの部屋に入ると、
早速、アスカとアユメが
ヒトメに何故一人で隠れていたかを尋ねるが、
泣いていて一切ヒトメは答えない。

他方、
木太郎だけが外に向かって、

ドアに耳をあて、
他のみんなは黙ってヒトメを見つめている。
「しー！
誰かが来た！
この部屋の前でとまったぞ」
木太郎の声を聞いて、
おちたはツバを飲み込んだ。
すると、ノックする音がした。
しかし、皆沈黙を守る。
もう一度、ノックの音がする。
アユメがヒトメの口を押さえながら、
少しづつ後ずさりする。
また、ノックの音がする。
くそたが何か言おうとしたので、
おちたがくそたの口を押さえた。

「ふー、いったぞ。
えー、ちょっと待て。
多分、下にいったみたいだぞ」
木太郎がそう言うと、
皆ため息をついた。

「犯人は手を汚さない5」

ヒトメも少し落ち着いたようなので、
アユメが何か訊こうとすると、
ホウセイが、
横から
「ヒトメちゃん、
みんなはどうしたの？」
と
わざとレイカともとめのことを伏せてきいた。
ホウセイの機転に、
アユメたちも気づき、
そっと顔を見合わせた。
ヒトメがまた泣きそうになったので、
「もっと落ちついたら話してね」
と
アユメがヒトメの頭を撫でる。
そして、
皆また黙り込む。
そして、
しばらくして、
今度は、
木太郎がわざと、
「今のはもとこかな？」
と言った。
「そんなはずはない」
ホウセイが、
木太郎の意図を勘違いして大声で

そう言って木太郎のスネを軽く蹴る。
ホウセイの意図を勘違いした、
ヒトメは、
「やっぱり、
もとこは生きているんでしょ？」
と
言うと、
アユメとアスカは、
顔を見合わせてから木太郎の方を見ると、
木太郎は無視するかのように、
まだドアに耳をつけている。
ヒトメは、
「やっぱり、
もとこは生きているんでしょう」
とまた同じことを言って、
みんなの顔を見る。
木太郎の意図がわかった他の生徒たちは
どう答えていいか、
考え込む。
そして、
アユメがヒトメの頭を撫でながら、
「何故、
木太郎くんと同じに、
今のがもとこだと思ったの？」
と、
ヒトメに優しく、
そして、
小さな声で訊いた。

「部屋の外の誰か」

「アレは、
演技だったんでしょう！
　あたしは知ってるからね。
　まさか、
もとこと
みんながグルだったの？」
ヒトメがまた興奮して、
アユメから離れたので、
アユメがヒトメの頬を軽くたたいた。
「ちょっと、
あんた落ち着きなさいよ。
あたしたちが、
もとことグルなら、
あんたをもう殺してるでしょう！」
「そうよ。
あんたなんて簡単に殺せるからね」
「ごめんなさい・・・」
ヒトメは涙を浮かべながら、
蚊の泣くような声で一言だけ謝る。
「本当に大丈夫だから、
あたしたちを信用しなさい」
アスカがヒトメを抱きながら、
また、
その頭を撫でる。
「でも・・・　あたしは知ってるの。
おちたくんがもとこを刺したのが、

お芝居だっていうことを」
ヒトメは小さな声でそう言うと、
また、泣き出した。
「そーう。
お芝居だったって知ってるんだ」
アユメはやさしくヒトメの目を見ながらいう。
ホウセイたちは黙って視線を送り合って、
ここはアユメとアスカに任せることにした。
木太郎だけがそのままドアに耳をつけている。
「ヒトメ、落ち着いて聞きなさいよ。
いーい。
おちたくんは騙されたの」
「騙された？」
「そーう」
「あんたはどういうお芝居かは聞いてるわよね」
アユメの問いにヒトメは黙って頷く。
「だったら、話しは早いけど、
落ち着いて聞くのよ！
おちたくんが使うはずの剣は、
偽物だったんだけど、
本物とすり替えられていたの」
「えー？」
「そうなの？
誰かがすり替えちゃったの？
本物と。
わかるわよねえ。
この意味！」
アユメがやさしく言うと、
ヒトメは驚いたように黙って頷いた。

「部屋の外の誰か2」

「でも・・・誰がそんなことしたの」
ヒトメが小声で訊くと、
みんな下手なことを言うと、
また、
ヒトメが興奮するのではないかと心配して、
しばし黙り込んでいたが、
アユメが、
「この部屋の外にいる誰かなの？
それもわかるわよねえ」
と、
やさしく答えた。
「うーん？
もとこは、
本当に殺されたの？
あたしが怖がっているから、
嘘をついてるんじゃないの？」
「本当に本当よ。　ヒトメ！
あたしもアユメを自分の目で確認したから」
アスカが、
ヒトメの頭を撫でながらいう。
「でも、
それじゃー？
さっきのはオオシマ？
それとも、
レイカなの？
それなら、

声をかけてもいいはずだけど」
ヒトメのその言葉から、
ヒトメは、
もとめが死んでいることはわかっていて、
それで怖がっているようにその場の生徒は感じた。
また、
チウメの名前が出ないことも、
皆疑問に感じたのだった。

「ヒトメの話し」

アユメは、
あえてオオシマのことは口にせず、
「ねえ、ヒトメ、
何故、
もとめ先生の名前を言わなかったの」
とヒトメに訊いた。
しかし、
ヒトメが何か考えて、
即答しなかったので、
「じゃあ、
ヒトメはどうしてこの部屋にたった一人で隠れていたの？」
と、
アユメはやさしく訊いた。
すると、
ヒトメは黙り込んだまま、
また、
涙を浮かべだした。
「もとめ先生に何かあったのね？
でも、どうして黙り込むの？」
アユメは、
もとめが死んでいることを知っていることを伏せて、
ヒトメの頭を撫でながらまた訊いた。「レイカと．．．」
ヒトメは小さな声で言う。
アユメは少し考えながら
「レイカと喧嘩でもしたの？」

と訊くと、
ヒトメは首を横にふる。
「じゃあ、どうしたの？」
「レイカとあたしの二人で、
もとこの部屋に確かめに行ったの」
「もとめ先生とチウメは？」
「うーん、それがいけなかったの。
もとめ先生が自殺未遂騒動を起こして、
治まったと思ったら、
あの部屋には、
あたしともとめ先生とレイカとチウメしかいなかったの。
そうしたら、
レイカとチウメが何か話しをした後、
レイカがあたしだけ、
部屋の隅に呼んで、
アレはお芝居だったんだけど、
バレたかもしれないって、
話してくれたの」
「それで？」
「そうしたら、
チウメが、
もとめ先生は私が見ているから、
もとこの部屋の様子を見てきて
と言ったの。
それがいけなかったの」
「何で？」
「もとめ先生とチウメだけにしてしまったから」
「うーん？
よくわからないなあ？
チウメの話しの後からもう一度してくれる」

「ごめんなさい。
それで、
あたしとレイカは、
二人だけで、
もとこの部屋の様子を探りに行ったの」
ヒトメがそこまで話したとき、
木太郎が何か言おうとしたが、
ホウセイがそっと木太郎の足を踏んづけて止めた。
「それで、どうしたの？」
「ノックをしたんだけど、
返事がないのでドアを開けようとしたら、
鍵がしまっていたの」
「それで、
あたしもレイカも少し怖くなって、
黙ったまま、
すぐ前のレイカの部屋に入ろうとしたの？
そうしたら、
鍵がかかっていたの。
レイカはあたしの耳元で、
おかしい、
鍵はかけてなかったのに
って言ったの」
「それで？」
「で、
あたしもレイカも、
もとこが何かやったんじゃないか
と怖くなって、
くそたくんの部屋に戻ろうとしたの」
ヒトメはそこで急に泣き出した。

「ヒトメの話し2」

「ヒトメ、泣いてちゃダメでしょ！
しっかりしてね」
アユメが、
やさしくヒトメの頭を撫でる。
「ごめんなさい」
「ほら、これで涙を拭いて」
アスカが横から自分のハンカチーフをヒトメに渡す。
「それで、
レイカとくそたくんの部屋に戻ろうとしたら、
部屋からちょうど泣きながら走ってきたチウメ」
とばったり会ったの。
で、
チウメは
「あたしじゃないの。
でも、信じてはもらえないわよね」
とか言って、
どこかに走っていったの。
それで、
レイカと二人で部屋に入ったら、
もとめ先生がベッドの横で血まみれで倒れてたの。
そして、
レイカと二人で確認したらもう亡くなってたの。
それで、
レイカと二人でもとめ先生をベッドに運んで、
手を組ませてあげて、
顔にハンカチをかけたの。

そうして、
二人でどうしようか考えていたら、
1階のどこかで足音が消えたの。
そうしたら、

レイカが、

「もとこかもしれない」
と言ったので、
二人で、
くそたくんの部屋にあった武器を持って、
構えながら、
そっと部屋の外を見たんだけど、
誰もいなかったの。
そしたら、
また、
レイカが、

「ここは危険よ。
とにかく、逃げましょ。
怖いけど二人別れた方が安全よ」
とか言って、
先に逃げちゃったの。

それで、
私はどこに行こうか迷ったんだけど、
1階で音がしたので、
2階のこの私の部屋に来て鍵を閉めたの。
それだけ」
ヒトメがそこまで話すと、

「その話、おかしいなあ？」

と

木太郎が思わず呟いた。

「不自然なヒトメの話し」

「木太郎くん、
ヒトメの話しのどこがおかしいのよ」
アユメがヒトメの頭を撫でながら訊くと、
「先に、ちょっと、ヒトメちゃんに確認のための質問していいかな?」
ヒトメは涙を拭きながら黙って頷く。
「チウメちゃんと出会ったのはくそたの部屋のそばかな?」
「うん」
「それで、チウメちゃんはさっきの言葉だけ残して逃げたんだ」
「うん」
「で、そのとき、ナイフとか、武器持っていた?」
「覚えてないの」
「まあ、そこはいいや」
「もとめ先生はベッドの上じゃなく、
ベッドの脇の床に倒れていたの?」
「うん」
「血だらけだった?」
「うん」
「もとめ先生は本当に死んでいたの?」

「見るからにそうだったけど」
「確認は?」
「チウメも言っていたし・・・」
「じゃあ、確認はしていないんだね」
「それで、
二人でベッドに寝かせてあげたの」

「うん。
かわいそうだって、
レイカが言うから」
「で、手を組ませたのは？」
「レイカ」
「ハンカチは誰の」
「レイカ」
「その後で、足音がしたんだ」
「うん」
「で、
二人で逃げることにしたわけ？」
「うん」
「武器は？」
「あたしはスコップ」
「レイカちゃんは？」
「よく覚えていないの」
「それで、
レイカちゃんが先に逃げたの」
「そう」
「どこへ逃げたかわかる？」
「多分、２階だと思うけど」
「見たわけじゃないんだね」
「うん」
「で、ヒトメちゃんは１階で足音がしたから
自分の部屋に逃げたわけ」
「そう。
あと、自分の部屋なら鍵もあるし」
「なるほど、
で、その後、部屋を出た？」
「ううん」

「ヒトメちゃんがくそたの部屋を出るとき、扉を閉めた」
「はっきりとは覚えてないけど、多分、閉めてないと思うけど」
「ふーん。今ので間違いはない」
「うん」
「な、ヒトメちゃんの話しだけだと、おかしいだろう」
木太郎がもう一度ヒトメに話しを確認すると、半数くらいのその場の生徒が頷いた。

「チウメのはなし」

おちたが話しを始めようとすると、
ホウセイが、
「俺の提案が今回の事件のもとになっているから、
俺から質問してもいいか？」
と
おちたの方を見て言うと、
おちたは黙って頷く。
「じゃあ、俺から。
その前にアスカちゃんかアユメちゃん、
ヒトメちゃんの口をふさいでおいてくれないか？
チウメちゃんの話しと食い違った場合に面倒なことになるからさ」
ホウセイがそう言うと、
「わかったわ。
この子、おしゃべりだからね」
と
アスカが言うと、
「ちょっと我慢してね」
と言いながら
納得したのか抵抗せずおとなしくしているヒトメの口
をハンカチで猿ぐつわのように結んだ。
「ありがとう。
ヒトメちゃん、
悪いね」
ホウセイは、
ヒトメに軽く頭を下げると、
「チウメちゃん、
これから話しを聞くけど、正直に答えてね」

と
チウメの方を見ると、
「はい。
信じてもらえないかもしれませんが、
本当のことを話します」
と言って、
チウメは周りの生徒の顔を見回しながら、
「レイカが・・・」
と
つぶやくように言ってから、
もう一度、辺りを見回した。

「チウメのはなし2」

チウメの言葉を聞いたアユメは、
とっさに、
「レイカはまだ見つかってないの。
多分、
ヒトメとチウメと同じようにどこかに隠れているのよ。
だから、レイカのことは
気にしないで話してくれる」
と嘘をついたのだった。
「そうなの？
ヒトメとレイカはバラバラに隠れたんだ。
てっきり、一緒かと」
チウメはアユメの言葉に疑問を抱くことなく、
そう言うと、
「どこから話せばいいですか？」
と
その場にいる全員の顔を見回しながら、
訊いた。
すると、
ホウセイが、
「もとめ先生がくそたに部屋に連れていかれて、
自殺未遂騒動を起こしたところから、
お願いできるかな」
と
訊くと、
「わかりました。
もとめ先生があのとき自殺未遂騒動を起こしたんですけど、

幸い怪我はしてなかったんです。
それで、しばらく、
私とレイカとヒトメでもとめ先生のそばで
もとめ先生の介護というか、手を握っていたら、
もとめ先生も落ちついてくれたんです。
で、
ふと気づいたら、
あの部屋には、
あたしともとめ先生とヒトメとチウメ
しかいなくなっていたんです。
で、
あることを思いついたので、
私が
そっとレイカを部屋の隅に寄せて、
あることを話し、
それをレイカからヒトメに話して貰ったんです」
「あることは後でいいから、
それで？」
「そこで、
さっき、
レイカと二人で話した際に決めたんですけど、
もとめ先生はもう大丈夫だ
と私もレイカも思っていたので、
私が、

もとめ先生は私が見ているから、
もとこの部屋の様子を見てきて

と言ったんです」
「それで？」

「そうしたら、
レイカはもちろんですが、
ヒトメもＯＫしてくれて、
二人だけで部屋を出て、
もとこの部屋に向かったんです。
でも、それがいけなかったんです」
「えっ？」
「すいません。
順番に話します」
「二人が出ていくと、
もとめ先生がちょっとお手洗いに行きたい
と言いだしたんです。
実は私もいろいろあって、
お手洗いに行きたいと思っていたので、
お先にどうぞ。
と言ってしまったんです」
「言ってしまった？」
「お先にという言葉が余計だったんです」
「なるほど、
チウメちゃんもトイレに行きたいと
もとめ先生に気づかれたってことだね」
「はい。
それで、
先にもとめ先生が部屋のトイレに入ったんです。
それで、
しばらくすると、
もとめ先生が出てきて、

お待たせ。
今度はチウメさんどうぞ。

って、
言ってくれたので・・・」
そこまで話すと、
チウメは泣きだした。

「チウメのはなし3」

「チウメちゃん、ゆっくりでいいよ」
「そうよ。チウメ」
ホウセイとアユメがやさしく言うと、
「ごめんなさい。
大丈夫です」
チウメは血のついたハンカチを取りだしたが、
すぐしまい、
テイッシュペーパー
をショルダーポーチのようなものから取り出し、
それで涙を拭った。
「それで、
私が用を済ませて、
トイレから出ると、
もとめ先生がベッドの横で
首の辺りから血を流して倒れていたんです。
そばにかけよると、
ナイフがもとめ先生の横に落ちていて、
思わずつかんでしまったんです。
そのとき、
このままだと自分が疑われる
と思って、
逃げてしまったんですけど、
部屋を出てすぐのところで、
レイカとヒトメとばったり会ってしまったんです。
でも、

こんな話し、
とても信じてもらえそうもないので、
何か言い訳だけして、
左の廊下の方に、
逃げてしまったんです。
レイカとヒトメはその後部屋に入ったので、
気になって、
ちょうど、
くそたくんの部屋の隣の部屋で、
鍵も開いていた木太郎くんの部屋に隠れたんです」
チウメがそこまで話すと、
「何故、
今の話しを、
レイカちゃんとヒトメちゃんに話しても信じて貰えないと思ったの？」
と
ホウセイが訊いたのだった。

「チウメのはなし4」

「それは、私が逃げ出してしまったからです」
チウメの答えに、
「何故、逃げたのかな？」
と
ホウセイが訊く。
「それは・・・」
チウメが口籠もると、
「例の芝居のことかな？
もう、みんな知っているから話してご覧」
ホウセイがやさしく言うと、
「そうなんですか。
あのとき、
私がもとめ先生に本当のことを話していれば、
もとめ先生は自殺しなかったんだと思うんです。
もとめ先生はおちたくんにもとこ
を殺させてしまったことを凄く後悔していたんです。
だから、あのとき、
私が油断せず、レイカとチウメが戻ってくるまで、
お手洗いを我慢していれば、
ああはならなかったと思うんです。
私のせいなんです」
チウメはまた泣きだした。
「でも、
さあ、
先にトイレに入ったのは、
もとめ先生なんだろ。

もとめ先生は
どうしてトイレで自殺しなかったんだろう?」
木太郎が首を傾げながら、ぶつぶつ言う。
「多分、
それはこのナイフのせいだ
と思うんです」
チウメは血のついたナイフ
をみんなに見せたのだった。

「チウメのはなし5」

「うーん？
どういうこと？」
「このナイフは本物なんです」
ホウセイがチウメに訊くと、
チウメはそれだけ答える。
「本物だから、
もとめ先生は死んだんだろう？」
「ですが、
最初に
もとめ先生が自殺を謀ったときのは偽物だったんです」
「だから？」
「ですから、
あの部屋には
本物のナイフと偽物のナイフがあったんです。
私はそんなこと知らないので、
どうやって、
もとめ先生が偽物のナイフでは自分を刺したのか気になって、
このナイフを掴んでしまったんです。
そしたら、
本物で・・・」
チウメはそこで黙り込む。
「要するに、
チウメちゃんの指紋がついてしまったということ？
だから、
ナイフごと持ち去って、逃げようとしたの？」
チウメは黙って頷く。

すると、
木太郎が、
「二本の偽物のナイフに二本の本物のナイフか？
偽物はチウメちゃんとアスカちゃんので、
本物はもとこと？
そうか？
もとめ先生のだったのか」
と
独り言のように呟いた。

「4本のナイフとチウメは無実？」

「木太郎、どうしたんだよ？」
「うーん？
チウメちゃんは無実かもな」
「やっぱり、
私が疑われているんですか？」
「まあ、そうだけど」
ホウセイ、木太郎、チウメが話していると、
「じゃあ、
まだ、
見つからないレイカが犯人なの？」
と、
ヒトメが横から口を出したので、
「あんた、
おバカね！
あんたの話しどおりなら、
レイカには
もとめ先生を殺せないでしょう」
アユメがレイカのことはごまかして、
そう言うと、
「違うわよ。
もとこの方よ。
もとめ先生は自殺なんでしょう」
ヒトメが言い返す。
「あー、ナイフのすり替え犯ね？」
「あのー、ナイフのすり替えって？」
アユメの言葉に

チウメが首を傾げながら訊いたので、
ホウセイは、
レイカのこと以外を
みんなのいる前で要点だけまとめて話しをした。
「私は
実は最初にみなさんがくそたくんの部屋にいるとき、
トイレに隠れていたんです。
何の話しかよくわからなかったんですが、
これでよくわかりました。
でも、
私は
自分の演劇用のナイフを本物のナイフとは交換してません。
本当です。
信じてください」
チウメがそう言うと、
「４本のナイフか？
単純にもとことチウメちゃんのナイフが
交換されただけじゃないかもしれないな」
木太郎が何か思いついたのか、
鼻をほじりながら、
そう言った。

「4本のナイフの移動と木太郎」

「おい、木太郎」
「その呼び方やめろって」
ホウセイが木太郎に声をかけると、
木太郎がムキになって怒った。
「悪い。
あのさあ、
せっかく、
ここまでみんな揃ったんだから、
その話しは今やめないか？」
ホウセイが木太郎に頭を下げると、
木太郎は、
ホウセイには何か考えがあるのではないかと思い、
「そうだな」
とそれだけ言った。
そのとき、
「あと、
レイカを探してあげればもう安心よね」
と、
何も知らないヒトメが二人の話の途中で口を出したので、
アユメが機転をきかせて、
ヒトメとチウメ以外は
レイカのことを知っているので、
「だったら、

木太郎くん、ホウセイくん、おちたくんの3人で
探しに入って。
女子とくそたくんと永久で
ここで待っているのはどうかしら？」
と言い出した。
すると、
永久が、
くそたがレイカを探すフリを引き受けるはずがないので、
「そうだな。
俺とくそたがいれば、
ここは大丈夫だ。
それに、
レイカちゃんを探すのなら、
その3人でも大丈夫だろう」
と
わざと言うと、
「そうしましょう」
のアスカの一言で全員意見が一致した。

こううして、
ホウセイ、木太郎、おちたの3人が
レイカを探すフリをして、
おちたの部屋を出ると、
2階のヒトメの部屋に行った。
ホウセイは部屋に入るなり、
「木太郎、
あそこにいた女子の中に
ナイフすり替えの犯人がいるかもしれないから、
4本のナイフの移動の話しは
あそこでしちゃいけなかったんだよ」

と言うと、

「果たして、そうかな？」

と

木太郎が偉そうな言い方をして、

鼻をほじったのだった。

「4本のナイフの移動と木太郎の考え」

「いいか？
普通なら、
今回の事件は、
誰かが
もとこのナイフとチウメちゃんの偽のナイフ
とを交換した
と考えるのが普通だろう。
でもな。
今回、
似たようなナイフが2本づつ、
計4本あったんだよ。
それから、
もとめ先生が
一度目の自殺に失敗しているんだ。
実際、
4本のナイフはよく似てるからな」
「そんなことはわかってるよ。
でも、
実際、
くそたの部屋には本物と偽物、
1本づつあった。
それは、
レイカちゃんの持っていたナイフと
チウメちゃんが持っていたナイフから明かだろう。
しかも、
ひとつはアスカちゃんので、

もうひとつは、
多分、もとめ先生のなんだから、
木太郎、
考えすぎだって」
ホウセイが
木太郎の意見にすぐ反論する。
「俺はな。
レイカちゃんを疑った上、
ケンタの野郎があんなことしてしまって、
彼女に悪いことした
と心から思っているんだ。
もっと早く気づけば、
レイカちゃんは助かった
と後悔してるんだ。
本当だよ。
で、
結論から先に言うが、
俺の推理だと、
生徒の中には、
今回のナイフのすり替え犯人はいなかったんだ！」
木太郎は珍しく真面目な顔で言った。

「4本のナイフの移動と木太郎の考えとホウセイの反論」

「うーん？」
おちたは木太郎の言葉に
それだけ言って首を捻るだけだった。
「木太郎、
そうすると、
ナイフをすり替えたのは、
もとめ先生だった
と言いたいわけか？」
ホウセイはそれしかない
という感じで木太郎の方を見ると、
「いや、違う。
ナイフのすり替えは単純じゃないんだよ。
すり替えをやったのは、
もとともとめ先生の両方なんだよ」
と、
木太郎は、
今度は鼻をほじりながら言う。
「うーん？」
おちたはそれしか言わない。
「木太郎、
はっきり言って、
よくわからないぞ。
くどいが、
くそたの部屋には、
本物と偽物のナイフが
それぞれ1本づつあったんだ。

で、
そのうち、
偽物はアスカちゃんので、
もうひとつはもとめ先生のだろう。
だから、
すり替えられたナイフは、
チウメちゃんのともとこのとしか
考えられないじゃないか？
もし、
もとめ先生ともとこが
それぞれ、
すり替えたのなら、
ナイフは元に戻るだけで、
おちたが使ったナイフは偽物に戻っているはずだからな
だから、その可能性はない。
むしろ、
もとめ先生が、
もとこのナイフとチウメちゃんのナイフ
をすり替えた
と、
考える方が自然じゃないか。
もとめ先生が自殺をしたのも、
おちたが使ったナイフが自分がすり替えたナイフだ
ということに気づいたかもしれないじゃないか」
ホウセイが反論すると、
「それなら俺にもよくわかる」
と
おちたは頷きながら、そう言ったのだった。

「4本のナイフの移動と木太郎とホウセイの論争」

しかし、
木太郎は、
すぐ、
鼻をひくひくさせながら、
「いいか！
それだと、
もとめ先生が、
もとこのナイフとチウメちゃんのナイフを
すり替える必要性がない
といけない。
だけど、
ホウセイの例の計画を、
もとめ先生は知らなかったんだから、
単純に、
もとこのナイフとチウメちゃんのナイフを
すり替えてもまったく意味はない。
だから、
もとめ先生が
もとこのナイフとチウメちゃんのナイフを
すり替える必要はない！」
と反論した。
ホウセイはさらに反論した。
「だから、
もとめ先生も気づいていたんだよ！
もとこの計画に」
「あのな？

まず、どうやって、
もとこの計画に気づいたんだよ。
それに、
もとこの計画の主犯は、
オオシマで、
もとこのナイフとチウメちゃんのナイフを
すり替えただけでは、
もとこの計画は阻止できないんだぞ！
わかっているのか！」
木太郎がムキになって反論すると、
「うーん？そうか・・・
もとこのナイフを偽物にすり替えるだけじゃ、
もとこの計画は阻止できないから、
すり替える必要はないよな」
横で聞いていたおちたは、
今度は木太郎の意見に頷く。
すると、
ホウセイは、
「その点は、
俺もすぐに反論はできないが、
木太郎は、
さっき、
自分で、
生徒の中には、
今回のナイフのすり替え犯人は
いなかった
って言ったじゃないか！
えっ！」
と木太郎に迫るように少し大声を出して言うと、
「だから、さっきも話したけど、

ナイフのすり替えは単純じゃないんだよ。
まあ、俺の話を最後まで訊け」
と
おちたが自分の意見をわかったせいで
余裕ができたのか、
木太郎は、
今度は鼻をほじりながら、
少し偉そうにそう言った。

「レイカのこと」

「遅いなあ！
もう後は警察と救急隊に任せればいいのに」
ケンタはそこまで言って黙り込む。
「ケンタくん、
レイカは？
探さないでいいの？
それに何故、救急隊が出てくるの？
もとこは生きてるの？
それって何かおかしくない」
ヒトメがケンタのの言葉
と急に黙り込んだ様子からそう言った。
チウメを除く、
他の３人はそっと顔を見合わせる。
そして、
覚悟を決めたように、
「ヒトメもチウメも落ちついて聞いてくれる。
実は、
レイカは、
今もとめ先生の部屋で怪我して横になっているの。
ちょっと、トラブルがあってね。
でも、大丈夫だから」
アスカは、
もうレイカのことは隠していられない
と思ったのか、
そう曖昧に話した。
「怪我って？

どうして？」
ヒトメがしつこく訊くと、
「だから、ちょっとしたトラブル。
あんたは黙ってなさい」
アユメがヒトメのおでこを軽くはたく。
「でも、
それなら、何で話してくれなかったの」
ヒトメは懲りずに訊く。
「うーん。
それはさ。
レイカちゃんがナイフを持って構えたんで、
ケンタの奴が勘違いして、殴ったんだよ」
と
永久がヒトメがしつこそうなので、
スコップで殴ったことは伏せて、そう答えた。
「それって、
あたしたちが疑われていたってこと？」
ヒトメがさらに訊く。
「いや、
レイカちゃんがナイフを構えていたから
お互い様でもあるんだよ。
ヒトメちゃんだって、
チウメちゃんだって隠れてただろう」
と
永久が言うと、
「ああ・・・」
ヒトメは納得したのかそれだけ言って、
黙り込んだ。
「それにしてもあの3人遅いわね」
と

アユメがレイカの話しを終わらせるように言うと、
「例のナイフのすり替え犯人の話しでもしてるんだろう」
と
永久が言うと、
「あたしも疑われているの」
と
また、ヒトメが言った。
（続く）

「木太郎の推理とホウセイの反論」

木太郎は笑いながら、
「こういうことなんだよ。
もとこが
最初にもとめ先生の本物のナイフと、
チウメちゃんの偽物のナイフを交換したんだ。
おそらく、
計画を実行しやすくするためにな。
他方、
もとめ先生は、
いつかはわからないが、
自分のナイフがすり替えられたのに気づいて、
自分の偽物のナイフともとこの本物のナイフをすり替えたのさ。
そうなると、
結局、
チウメちゃんのところにはもとめ先生の本物のナイフが、
もとめ先生のところには、
もとこの本物のナイフが、
そして、
もとこのところには、
チウメちゃんの偽物のナイフが。
まあ、簡単なことさ」
と
自分の意見を話した。
「でも、
それでもとめ先生が自殺するかな。
自分がもとこにすり替えられたナイフが

誰のものかはわからないんだからな。
それよりも、
俺は、
あの3人、
ヒトメちゃん、レイカちゃん、チウメちゃんの行動
を不審に思うな。
もとめ先生が結局自殺するような精神状態なのに、
チウメちゃんと二人だけにしたり、
チウメちゃんはもとめ先生を一人だけにしたり、
また、
3人バラバラに隠れていたり、
何かおかしいんだよな」
ホウセイがそう反論すると、
おちたが、
「うーん?
どっちの話しもよくわかるんだけど、
どっちも決めてには欠くよなあ」
と
呟くように言った。

「木太郎とホウセイの考えの弱点」

「どうしてだよ」
「そうだ。理由を言ってみろ！」
木太郎とホウセイがほぼ同時におちたに言う。
「うん。
まず、
木太郎の推理は、
非常に単純でわかりやすく、
かつ、
俺たちの仲間の中に犯人はいなかった
ということで、
それが真実なら丸く治まる。
だけど、
木太郎の推理は、
結局、
ナイフの移動を結果に合うように
辻褄だけ合わせたように思えるし、
ナイフ交換の必要性が今一よくわからない。
それだけじゃなく、
ホウセイも軽く指摘したことをもっと詳しく言うと、
もとめ先生は、
もとこのナイフと、
木太郎の推理ではすり替えられてしまった
自分のナイフをすり替え返しただけだから、
自分のナイフはたしかにもとこ殺人に使われたが、
自分がすり替えたナイフは
もとこの殺人には使われていないのだから、

自殺する程の罪悪感を感じるかに大きな疑問がある。
他方、
ホウセイの話しは、
あくまでも、
ヒトメちゃん、レイカちゃん、チウメちゃんの行動が不審だということを指摘しているだけで、
3人が俺が使ったナイフのすり替えに関与していたことやもとめ先生の死に関与していたことの根拠にはなっていない。
それに、
あの3人には、
もとこともとめ先生を殺す動機が思いつかない」
と
おちたが自分の意見をはっきり言うと、
木太郎は、すぐ、
「俺の場合は死人に口なしだから、これ以上、言いようがないよ」
と言い、
ホウセイは、
「実は俺の話はまだ途中なんだ」
と言った。

「ホウセイの考え」

「なんだよ、それなら早く言えよ」
木太郎が、
おちたとホウセイに
自分がせっかく考えた推理を否定されたので、
少しふてくされたように鼻をほじりながら言うと、
「いや、
途中でおちたが口を挟んだからさあ」
「別に俺はつぶやいただけなのに、
二人で理由を言えなんて言うから
思ったことを言っただけさ」
ホウセイが言い訳気味に言うと、
おちたもそんなことを言ったので、
「もういいから、
ホウセイ、話しを続けろよ」
木太郎がじれったそうに言う。
「うん。
あのさ？
くそた、永久、
アユメちゃん、アスカちゃんが、
くそたの部屋から
出ていってしまったから、
たまたま、
もとめ先生とあの３人だけ
くそたの部屋に残されたわけなんだろう。
で、
もとめ先生は

あのとき自分のせいだと思って、
興奮して自殺未遂したわけだから、
まずは、
その興奮を静めるのが先だと
普通は3人は思うんじゃないか。
　特に、
　チウメちゃんとレイカちゃんは
おちたの行為がお芝居だ
と思っていたわけだからさ。
　だったら、
　ヒトメちゃんはおしゃべりだから、
ヒトメちゃんだけうまく連れだすとかして、
　レイカちゃんとチウメちゃんのどちらかが、
　もとめ先生に
本当のことを話せば済む話しだ
と思うんだよ。
　で、
　チウメちゃんは違うことを話したけど、
自殺未遂までしたもとめ先生を
一人だけにしたというのが事実なら、
　本当は、
　チウメちゃんかレイカちゃんのどちらかが
もとめ先生に本当の話をしたんじゃないか
と思うんだよ。
　違うかな」
　ホウセイはそこまで話すと、
木太郎とおちたの顔色をうかがった。

「ホウセイの考えとおちた」

「よくわかんないな！」
木太郎がホウセイの話しを聞いて、
鼻をほじりながら、
ぶつぶつ言う。
「ホウセイ、
ヒトメちゃんはおしゃべりだけど、
もとこを積極的に殺したい
という程の感じでもなかったんだから、
　レイカちゃんもチウメちゃんも、
くそたやアスカちゃんたちが
いなかったんだから、
別にヒトメちゃんのいる前で
　アレはお芝居だった
って話せばいいだけどの話しなのに、
それをしなかったから．．．」
おちたはそこまで話して、
「いや、おかしいよ。
やっぱり」
と言って、
　何か思いついたように、そこで口籠もると、
「何がおかしいんだよ？
だから、
　俺が考えたとおりに
シャープに考えれば
丸く治まるだろう！」

木太郎がおちたの肩叩いて言う。
「自分で、
自分の考えをシャープって？
よく言うな。
チープの間違いだろ。
おちたも
あの3人の言動には疑問を持ってるんだよ。
自殺未遂を企てた人間を一人にして、
結局、
自殺させたら意味ないだろ」
横からホウセイが口を出す。
すると、
おちたが、
「もとめ先生、本当に自殺だったのかなあ？」
と言い出したのだった。

「おちたの疑問ともとめの死因」

「おちたなあ。
もとめ先生が自殺じゃないってことは、
あの3人が殺したってことか？
はっきり言って動機がないだろう。
それに、
3人とも怯えていたぞ。
それはない！」
木太郎はそう断言してから、
鼻をはほじって、
おちたの顔につける。
「汚いな！
俺もあの3人が殺したとは思ってないぞ。
でも、
もとめ先生が、
いくら俺が間違ってもとこを殺したとしても
自殺する理由がわからないんだ」
おちたが反論すると、
「バカか？
俺たちの目の前で
現に自殺をしようとしただろ！
もとめ先生は
とにかくパニックっていたんだよ！」
木太郎がそう言って、
今度はおちたの頭を叩く。
「痛いなあ！

あのねえ。
最初はわかるんだけど、
あの3人の話しだと、
もとめ先生はその後落ちついて、
冷静になったんだろ。
もとめ先生が冷静になったのに、
自殺する理由はないと
俺は言いたいだけなんだよ」
おちたがすぐ反論すると、
「俺も、
おちたの言うとおり、
3人の話しどおりなら、
もとめ先生が自殺した理由がわからない。
もとめ先生が冷静になって考えれば、
自殺しても意味がないことくらい
わかるんじゃないか？」
ホウセイもおちたの見方をすると、
木太郎が、
「だから、
俺の推理でいいんだよ」
と二人に言い返した。

「ずるいがマヌケな木太郎」

「木太郎！　自分の推理でいいなんて、
疑問があるんだから、
それでは済まないだろうが！」
ホウセイが声を荒げて、
すぐ木太郎に言い返す。
「あのなあ。
もう事件は終わったんだよ。
あの3人の行動に不審なところがあるのは、
俺もわかっているさ。
でも、
俺の考えなら、
単なる事故で、
俺たちには責任がなく、丸く治まるから
これでいいじゃないか。
みんなも俺たち3人が話せば、納得するさ。
俺たちは警察じゃないんだからな」
木太郎は偉そうに鼻をほじりながら言う。
「木太郎はずるいクセにマヌケだな！
警察がこれから調べるんだぞ。
そうしたら、
木太郎の推理を話して、
はい。そうですか。
で、終わるか。
現に俺たちはもとこ
をベッドに縛りつけてたんだぞ。
しかも、

おちたのあれが、
芝居だって、
警察が信じてくれるかわからないだろ！
レイカちゃんだって、
くそたがぶったたいてしまったし。
だから、
警察を呼ぶ前にきちんと真相を解明しないと、
俺たち、
特に、
おちたとくそたがやばいんだよ」
ホウセイがさらに声を荒げて言うと、
「やっぱり、
ホウセイもそう思ってた？
俺もそれが一番心配だったんだ」
おちたもホウセイの話しを聞いて、
少し暗い表情をして言う。
「ああ・・・
その問題があったのか・・・」
木太郎は二人の話を聞くと、
鼻をひくひくさせながら、
急にしおらしくなった。

「ホウセイの余計な話し」

「あー・・・
これは本当にやばいぞ・・・
あの芝居を思いついたのは、
くそたたちが、
もとこを殺そうとしていたの
を防ぐのが目的だったよなあ。
それを話したら・・・」
木太郎は、
マヌケにも今頃気づいたのか、
鼻をひくひくさせながら、
ぶつぶつ言い出した。
「木太郎は当分だめそうだな。
どうする？　ホウセイ。
あっちの部屋でも、もう気づいてるんだろうな。
やばい状況にあることを」
おちたがホウセイに話すと、
「半分くらいは気づいてるだろうな。
でも、
怪しいチウメとヒトメがいるから、
口にはしないだろうな。
うーん？
それとも、
アスカちゃんかアユメちゃんあたりが
もとめ先生がもとこを殺して自殺したことにしよう
と話しているかもしれないなあ」
と、

ホウセイが、
思わず余計なことを言ってしまう。
すると、
それまで、
ぶつぶつ何か言っていた木太郎が、
「それいいぞ！
もう、それでみんなで口裏合わせて
警察に説明するしかないんじゃないか？」
と、
急に元気になって、
とんでもないことを言いだした。
「木太郎、
やっぱり、ずるい奴だな！
そんなことできるかよ。
もとめ先生は無実だし、
くどいけど、
自殺じゃないかもしれないんだぞ！
ナイフすり替え犯と
もとめ先生の死因を解明しない限りは、
俺は自分が悪いことにされても、
警察に本当のこと話すからな」
おちたは木太郎を睨みつけながら、
大声で脅すように話す。
「おちた！
冗談だよ。
今、
真面目に考えてるからさあ。
ひとりだけ、
いい子になるのはやめようぜ」
「木太郎、

その言い方はないだろう。
もとこを刺したのは、
おちたなんだから、
いい子どころじゃ済まないんだぞ」
ホウセイがすぐ木太郎に言い返すと、
「いや、そういう意味じゃないんだ。
言い方が悪かった。
でも、
俺たちの中にナイフをすり替えた犯人がいるのかな?
それに、
例の3人は、
3人ともあのもとこを殺すことにも
内心反対だったんだから、
もとめ先生を殺すはずがないじゃないか?
だから、
ヒトメとチウメの話しが嘘だ
としても殺しではないと思うけどな」
木太郎は、
鼻をひくひくしながら、
自分を睨みつける二人を前に
そう弁解するように話したのだった。

「アスカの考えと木太郎たちとの合流？」

「やっぱり・・・」
アスカが、
そっとアユメの耳元で囁き、
二人だけ部屋の隅に行って、
こそこそ話しを始めた。

「あたしもそう思ってたの。
ホウセイくんたちも
きっとこのことで意見が食い違っているのよ」
「どうする？」
アユメの言葉に、
アスカがそれだけ言うと、
「アスカには何か考えがあるんでしょう？」
と
アユメは、
他の生徒には聞こえないように、
小声でアスカに言う。
「だけどねえ・・・」
アスカが首を傾げたので、
「わかる！
でも、二人が怪しくてもさあ、
あたしたちまで巻き添えはねえ」
と
アユメが言うと、
「じゃあ、

あたしの考え聞いてくれる」
アスカはそう言って、
アユメの耳元で自分の考えをアユメに話したのだった。
「ねえ、くそたくん？
ちょっと、
アユメと二人で木太郎くんたちを探しに行っていいかな？」
「女子二人でか？
まだ完全に安心できないし、
待てば戻ってくるよ」
アスカの突然の発言に、
くそたが心配そうに言う。
「だったら、
みんなで探しに行かない？」
アユメがアスカと話し合ったとおりのことを言うと、
「それなら、いいかもな」
くそたが頷くと、
永久も、
「待っているのもなんだしな」
と言ったので、
「じゃあ、行きましょう」
と
アスカは、
ヒトメとチウメの意見も聴かず、
そう言って、
まっ先に扉に向かおうとしたので、
「永久、一応、男だから先頭で行け。
俺は最後に行く」
「一応？
まあ、いいけど、
何で、くそたが先にいかないの？」

「いいから行けって」
「わかったよ」
くそたには何か考えがある
と感じた永久はそう返事をすると、
自らが先頭になって扉を開けた。
そして、
永久、
アスカ、
ヒトメ、
アユメ、
チウメ、
くそたの順で、
6人はおちたの部屋を出ていった。

「アスカの提案」

「多分、
2階のアユメかヒトメの部屋よ」
永久たちが木太郎たちを探しに外へ出ると、
アスカが小声で何故かそう言った。
「どうして？」
アユメがそっと訊くと、
「何か話すなら、
同じ1階より
2階の方がいいでしょう。
でも、
もとこの部屋には近づきたくないし、
階段のそばの方が誰か来ても気付きやすいでしょう」
と
アスカが小声で答えると、
「なるほどね」
と
アユメが呟いたので、
永久たちは、
2階のアユメの部屋をノックした。
しかし、
返答がないので、
小声で、
永久が、
「俺だよ」
と言ったが、
同じく返事がないので、

今度は、
ヒトメの部屋の前で同じことをすると、
扉が開き、
おちたが顔を覗かせた。
「みんなで来たのか？」
「まあ、ちょっとね」
永久が小声で答えると、
アスカに押されるように、
永久がヒトメの部屋に入り、
その後にアスカたちが続いた。
最後に入ったくそたが
ヒトメの部屋の鍵を閉めたのを確認すると、
アスカは、
みんなに向かって、
「あたしから提案があるんだけど、
聞いてくれない？」
と
話し始めたのだった。

「アスカの提案とホウセイの意見」

「あのねえ。
レイカは可愛そうだったけど、
わたしたちはこうして無事なんだから、
もう例のナイフのすり替え犯を探すのはやめて、
もとめ先生がもとこを殺して自殺したことにしない？」
と
アスカはホウセイが予想していたとおりのことを言った。
「そうよ。
もう、それしかないじゃない。
これから細かいことを話し合って、
みんなで同じことを言えば、
警察も信用してくれるわよ」
アユメもアスカと事前にそっと話し合っていたとおりのことを言う。
すると、
「俺は反対だ。
そんなことできるか！
もとこを刺したのは俺なんだからな。
もとめ先生は無実だし、
それに」
おちたがそこまで少し興奮気味に話すと、
ホウセイがおちたの肩を叩いた後、
「それは俺たちも考えたが、
ナイフの指紋やナイフの血などから、
多分、警察は信用してくれないよ。
それにおちたが協力しない。

それよりもだな」
と言いかけると、
「そんなことないわよ。
おちたくんも冷静に考えてよ。
アスカの考え以外に、
おちたくんを助ける方法はないのよ。
アスカは、
別にもとめ先生に責任を押しつけるために
さっきのような提案をしたんじゃないと思うから。
みんなも冷静に考えて」
アユメがホウセイの意見を遮って、
自分の意見を言った。

「おちたの決意」

すると、
「いや、俺が自首する。
なら、
みんなも助かるからいいだろう。
ホウセイも言ったけど、
もとこを刺したナイフに
もとめ先生の指紋をつけるのは不可能だ。
それがわからないかな。
アスカちゃん、アユメちゃん」
おちたがアユメの話しを聞いて、
決意したのか、
先ほどとは違って落ちついて言う。
「おちたくん・・・」
アユメは黙り込む。
「指紋の方は、
おちたの言うとおりだな。
もうもとめ先生の死後硬直が始まっているからたしかに無理だ。
まあ、
警察に、
一応正直に話してダメだったら、
おちたに自白してもらう
ということでしょうがないか」
木太郎が鼻をひくひくさせながら、
冷たいことを言う。
「木太郎！

おまえなあ！
ずる賢いとは思っていたが、
そこまでとはなあ。
警察に信用してもらうよう、
何かもっと考えるの先だろ！」
と、
ケンタが言って、
木太郎の尻に蹴りを入れる。
「いてー」
「ケンタ、やめろって。
木太郎の話を本気にするなって。
とにかく、冷静になって考えるんだ。
下手に嘘をつくと、
全員共犯にされるぞ。
おちた、
自分だけ犠牲になろうと思ったって、
レイカちゃんのことも、
もとめ先生のこともあるから、
そう簡単には行かないんだ。
やはり、
ナイフのすり替え犯を特定しない限りは、
今回の事件を警察にはわかってもらえないぞ。
みんなもここは冷静に考えるんだ」
ホウセイがそう言うと、
「そうかもしれないわね」
と、
アスカがぽつりと言うと、
おちたも、
他の生徒たちも黙って頷いたのだった。

「検討会」

「いろいろ考えたんだけど、
おちた、
ヒトメちゃん、
チウメちゃん、
ケンタのように、
もとこ、もとめ先生そしてレイカちゃんの件で
警察に疑われる危険性のある仲間がいるのは事実で、
今のおちたの発言のようになると、
冷静な話し合いができなくなる可能性もある。
そこでだな。
俺と木太郎とアスカちゃんの３人で、
例のナイフのすり替えの件の検討会を
まず、先にやらせてくれないか。
そこで、
ある程度の考えをまとめて、
ここへ戻ってくるから」
ホウセイが突然検討会の話しを持ち出した。
「何で、
警察に疑われる危険性のない、
あたしと永久くんがはずされるの？」
と
アユメが言うと、
「アユメちゃんと永久は冷静だから、
ここで他の４人と一緒にいて欲しいからなんだ」
「ああ、そういうことね。
じゃあ、もし、３人で考えに詰まったら、交代ということにして

くれる？」
ホウセイの言葉にアユメがそう言うと、
「もちろん、それはＯＫだよ」
と
ホウセイが答えたので、
「俺もそれでいいよ」
と
永久も答えたので、他の生徒も頷いた。
「じゃあ、ここからすぐ近いアスカちゃんの部屋で、早速、検討会ということでいいかな？」
と
ホウセイが言うと、
皆頷いた。
「一応、オオシマが残っているから、注意して行けよ」
と
ケンタが言うと、
「ああ、
俺が先頭、アスカちゃん、木太郎の順で行くから」
ホウセイはそう言うと、
アスカと木太郎の返事も聞かず、
出口となる扉にさっさと向かっていった。

ホウセイ、アスカ、木太郎は
無事にアスカの部屋に着くと、
部屋の鍵を閉めた。
「ふー、うまく行った」
「うまく？」
木太郎が鼻を左手の小指でほじりながら

ホウセイの方を見て、訊くと、
「やっぱり、
チウメを疑っているの？」
と言って、
アスカがホウセイの方を向くと、
その目をじっと見た。

「アスカの推理」

「チウメちゃんか？
何故、アスカちゃんはそう思うの？」
ホウセイはアスカの質問には答えず、
逆に聞き返した。
「あたしから話すってことね。
わかったわ。
それは
もとめ先生と一緒に残った3人の中で、
彼女が一番落ちついているというか、
冷静なのよ。
逆に、
レイカもそうだったけど、
ヒトメも
何かに怯えているそんな感じがするの。
ということはね。
チウメだけが
もとこが死んだことを確信しているからじゃないか
と思うわけ」
「それって？」
今度は木太郎が訊くと、
「そう。
今回のナイフのすり替え犯は
チウメだったと思うのよ」
アスカは
木太郎の質問にそれだけ答えた。
「すり替え犯なら、
おちたがもとこを刺したナイフが本物だ

ということがわかっているから、
もとこが
あのとき死んだこともわかるってことか。
でも、
それなら、
ヒトメちゃんの話しは
おかしくないかな？」
アスカの推理を聞いて、
ホウセイはアスカの顔を見た。

「ホウセイと木太郎の疑問」

「ヒトメの話しのどこがおかしいの？」
ホウセイの話しを聞いて、
アスカがホウセイの方を見る。
「あのさあ、
俺の記憶だけど、
たしか、
ヒトメちゃんの話しでは、
チウメちゃんがもとめ先生は私が見ているから、
もとこの部屋の様子を見てきて、
と言ってたよな。
でも、
チウメちゃんがすり替え犯だったら、
今話したとおり、
もとこが死んだのはわかっているはずだから
自らそんなこと言うはずないんじゃないか？」
ホウセイがアスカの方を見て言うと、
「でも、
チウメちゃん自身も、
自分がもとこの部屋の様子を見てきてって言った
と話していたと思うから、
すり替え犯がチウメちゃんだったら、
ヒトメちゃんだけじゃなく、
チウメちゃんの話しもおかしくなるだろう。
俺はすり替え犯はチウメちゃんじゃない
と思うんだけど、

それは別にして、
俺が、
今思い出して疑問に思い出したのは、
ヒトメちゃんが前に話したとき、
もとめ先生を誰かが殺したかもしれない
と話しをしていたときに、
ヒトメちゃんがレイカかもしれない
と言いだしたんで、
ヒトメちゃんの話しどおりなら、
レイカちゃんが犯人のはずはないと、
アスカちゃんかアユメちゃんが突っ込んだら、
ヒトメちゃんが慌てて
違うとか言って、
もとこの方の話しで、
もとめ先生は自殺なんでしょうとか、
言い返したことなんだよな」
と
木太郎が横から口を出すと、
「その突っ込みはあたし。
たしかに、
あんたおバカねとか言って突っ込んだら、
ヒトメはムキになって反論してたわね。
でも、
それは深い意味はなく、
単にヒトミがバカなだけじゃないの？」
と言って、
アスカが木太郎の方を見ると、
「そうかなあ？
レイカちゃんから話しが聞けないのは残念だけど、
俺は、

どうもあの3人、
レイカちゃんとヒトメちゃんとチウメちゃんのことだけど、
もとめ先生の死因については、
口裏を合わせて、
嘘をついているようにしか思えないんだよな。
二人の話は不自然な内容が多すぎるんだよな」
木太郎はアスカの方を向いて、
そう言った。

「もとめの死因とホウセイの推理」

「俺も木太郎の意見に賛成だな。
どうも、あの二人はおかしい。
一番、
おかしいのは3人がバラバラに隠れていたことだな。
そして、
俺が受けた印象だと、
ヒトメちゃんとレイカちゃんは
もとこが生きていると思っていたから、
あんなに怯えていたんじゃないかな。
で、
チウメちゃんはあちこち移動しているし、
表情からももとこを怖れている様子がないんだよ。
多分、
もとこが死んだことに確信みたいなもの
を持っているんじゃないか」
すると、
アスカが、
「やっぱり、
チウメがナイフのすり替え犯だからじゃないの」
と
横から口を挟むと、
「いや、
それは違う気がするんだな。
これは仮説だけど、
もとこの部屋に来たのは、
3人の話しとは

逆でチウメちゃんだけなんじゃないかな？」

と

ホウセイがそんなことを言いだしたので、

「でも、

それならそう話せばいいだけで、

嘘をつく必要はないじゃないか？」

と

木太郎がすぐ言い返した。

「アスカの思いつき」

「木太郎くん、
ホウセイくんの言うとおりかもしれないわよ」
アスカは、
ホウセイの意見にすぐ反論した木太郎の方を見ると、
今度は自分の考えを話しだした。
「ヒトメとチウメの話しだと、
もとめ先生を一人にしたのは、
チウメ
ということになっているでしょ。
でも、
もしもよ。
これがヒトメだったら、
どうなると思う？」
「どうなるって？
相変わらずバカだなじゃないの？」
木太郎はアスカの言葉にすぐ答える。
「でも、
これがチウメかレイカだったらどうなる？」
「それは変だと思うだろ。
だから、こうして3人で話し合っているんじゃない？」
「そう。
特に、
あのチウメがもとめ先生を一人だけにして、
二人がまだ戻らないのに、
自分がトイレに入ることはおかしいからね。
でも、

それが、
あのヒトメなら、
やりかねないでしょう？」
「まあ、
ヒトメちゃんならあり得る話しだけどな」
「そうか！
さすが、アスカちゃん！
木太郎、
実際、
もとめ先生を一人だけにしてトイレに入ったのは、
ヒトメちゃんなんだよ。
でも、
何か、
俺たちには話せない事情があって、
3人は、
チウメちゃんのせいにすることにしたんだよ。
いや、
あのときのレイカちゃんの様子からすると、
もしかすると、
チウメちゃんとヒトメちゃんだけ
口裏を合わせることになったのかもしれないぞ」
木太郎とアスカの話しを聞いていたホウセイが何か思いついたのか、
そう言いだした。
（続く）

「ホウセイの考え」

「こうは考えられないか？
アスカちゃんやくそたがいなくなって、
見に行ったのは
ヒトメちゃんとレイカちゃんじゃなくて、
チウメちゃんだったんだ。
チウメちゃんは、
アレがお芝居だと知っていたから、
もとこは怖くはないはずだから、
一人で様子を伺いに行って、
多分、もとこの部屋を盗み聞きしていて、
ナイフのすり替えを知ったんだ
と思う。
一方、
もとめ先生を看ていた
レイカちゃんとヒトメちゃんのうち、
レイカちゃんも
アレがお芝居だとわかっていたから、
チウメちゃんの戻りが遅いので
気になったことと、
自分の部屋に何か用事があって、
ヒトメちゃんともとめ先生を二人だけにして、
やはり、
2階に行ってしまったんだよ。
で、
そこまでは良かったんだけど、
チウメちゃんは、

レイカちゃんが来たことにびっくりして、
「何でヒトメだけ残したのた」
とか言うことになって、
二人が慌てて戻ったら、
ヒトメちゃんが泣いていて、
もとめ先生が死んでいたんじゃないかな」
ホウセイがそこまで話すと、
木太郎が、
「よくわからない話しだな」
と言うと、
アスカが、
「多分、そうよ。
ううん。ほぼ間違いないわ」
と言ったのだった。

「木太郎の疑問」

「アスカちゃんもそう思うのか？
でも、
俺にはよくわからないな。
ひとつは、
どうして、
チウメちゃんがヒトメちゃんを庇うのかな。
もうひとつは、
仮にそうだとしても、
何で、
３人がバラバラに隠れていたのかな？」
木太郎はまた鼻をほじりながら言う。
「多分ね。
木太郎くんのあとの方の疑問から
あたしの考えを話すわね。
それは、
レイカとチウメが喧嘩したのよ」
「だったら、
チウメちゃんとヒトメちゃんは一緒にいれば、
いいんじゃない？」
「ううん。
最後まで話し聞いてくれる。
あたしの勘だと、
まず、
くそたくんの部屋に戻ったら、
もとめ先生が死んでいて、
ヒトメが泣いていたから、

チウメが、
先にもとめ先生とヒトメだけにして、
自分の部屋に来たレイカを責めたと思うのよ。
それに対し、
レイカが今度はチウメとヒトメが悪い
とか言い返したと思うの。
それで、
レイカ自身はアレがお芝居で、
もとこがまだ生きていると思っているから、
もとこが怖くなり、
先に一人で例のナイフとかスコップ
とか武器になるようなものを持って逃げちゃったと思うの。
それで、
チウメとヒトメだけくそたくんの部屋に残されたわけ。
そこからなんだけど、
多分、
チウメはもとこの部屋に来て、
あたしたちの話しを盗み聞きしていたから、
ナイフのすり替えに気づいていたと思うの。
でも、
それをヒトメには言わないで、
自分がうまくやっておくから、
とか言って、ヒトメに自分の部屋で
じっとしているように言ったんじゃないか
と思うのよ」
アスカがそこまで話すと、
「やっぱり、わからないな。
何で、
チウメちゃんがヒトメちゃんに部屋で
ひとりで隠れているように言ったのかな?

俺には理解できないよ」
木太郎はアスカの顔を見て、そう言った。

「アスカの推理と再事情聴取」

「それは犯人を捜すためよ。
それには、ヒトメが一緒にいると邪魔になるでしょう」
アスカが答えると、
「犯人はチウメちゃんではないといういいこと？
なら、
チウメちゃんはレイカちゃんが犯人だ
と思うんじゃない？
違うかな？」
ホウセイが自分の考えを言う。
「二人とも、
ナイフのすり替え犯じゃないと思う。
だから、
二人とも2階に上がってきて様子を伺いに来たんだ
と思う。
すり替え犯なら、
もとこが死んだことがわかっているから、
わざわざ確認する必要はないし、
見つかったら疑われるからね。
それに、
あのときのレイカの怯えようは
もとこが生きている
と思いこんでいるような感じがしたからね。
チウメも何か別のことでそう思ったんだと思う」
アスカの答えに、
ホウセイは納得したようだったが、
木太郎は鼻をほじりながら、

「俺にはよくわからないな」
とぶつぶつ呟いていた。
「よし！
アスカちゃんの推理のとおりなら、
ヒトメちゃんもチウメちゃんも
嘘をついていることになるから、
どちらかだけ、
この部屋に呼んでもう一度事情聴取しないか？」
と
ホウセイがそう言うと、
「そうね。
なら、
ヒトメからにしましょう。
あの子、おバカだから、
絶対に誘導尋問とかにひっかかるからね」
「わかった。
でも、俺はまだよくわからないので、黙っているようにするよ」
木太郎が鼻をひくひくさせながら言うと、
「ヒトメからもう一度話しを聞く前に
ちょっと打ち合わせしましょう」
アスカはそう言って、木太郎とホウセイの方を見た。

「ヒトメの再事情聴取」

ホウセイたちは、
くそたたちに別の理由を話して、
ヒトメだけ自分たちがいた部屋に連れだした。
「何、
あたしだけに話しがあるって？」
ヒトメはやはり嘘をついているのか、
ホウセイたち3人を警戒していた。
「確認するけど、
2階に様子を伺いに行ったのは、
ヒトメちゃんとレイカちゃんだけ？
本当は3人で行ったんじゃないの。
もとめ先生ひとりを残して」
アスカは打ち合わせどおりに訊く。
「違う。　話したとおりよ。
もとめ先生をひとりだけにできるはずないでしょう」
ヒトメは予想どおり否定した。
「でも、
自殺しちゃったんだから、
最終的にはひとりになったんでしょう」
「それは、チウメが我慢できなくなって、
トイレに行ったから。事故よ。
もとめ先生は落ちついていたんだから」
「落ちついていた？
いつ？」
「それは、

あたしとレイカが部屋を出るときにはもう」
「本当なの？」
「本当よ。それに・・・」
「それに何？」
アスカがさらに質問すると、
ヒトメは少し考え込んでしまったのだった。
「早く言いなさいよ」
アスカがさらにヒトメを問いつめると、
「それに、
あの部屋には偽物のナイフしかないと思ったから」
ヒトメがようやく答えると、
「そういうことか。
油断したのは」
ホウセイがつぶやくように言う。
すると、
「もとめ先生がどこかに本物のナイフを持っているなんて、
予想できないから、あれは本当に事故みたいなものなの」
ヒトメはあたかもチウメを庇うように言う。
「じゃあ、あんたはチウメがもとめ先生を残して、
トイレに入ったことは悪くないと思うの」
と
アスカが訊くと、
ヒトメは黙って頷いた。
すると、
黙っていると言っていた木太郎が、
「俺でも小でも大でも我慢できなかったら、
そうするな。
あれは事故だったんだな。
チウメちゃんもそうなら、
ヒトメちゃんとレイカちゃんに正直に言えば、

良かったのになあ。
もとめ先生を一人にして、
怒られるとでも思ったのかな？」
と言うと、
「多分ね」
と
ヒトメは小さな声で言う。
「でもねえ。
それなら、
ヒトメ、
あんたもレイカも、
チウメがあたしじゃないと言って逃げた後、
何で逃げたの？
普通は、
チウメがもとめ先生を一人にしてる間に
もとめ先生が自殺した可能性が高いと思うんじゃない。
それなのに、
何で、
あんなにびびっていたの？」
と
アスカが訊くと、
ヒトメはまた考え込んだ。

「ヒトメの再事情聴取2」

「ヒトメ！
何また考えてるのよ。
あのときの気持ちだから、
考える必要ないでしょう？
それとも、
あんた、何か、隠してるの」
アスカが問いつめると、
「別に、
混乱していたので、
よく思い出せないから思い出していただけ」
ヒトメは小さな声で答える。
「混乱しているのと、
びびっていたのとは別でしょう。
何で、びびっていたのよ」
「それは、もとこが生きていて、
仕返しされるかもと・・・」
アスカにさらに突っ込まれると、
ヒトメはまた小さな声で答える。
「でも、
あんたレイカと2階に行ってるんでしょう？
だったら、
ドアからあたしたちの話し
を盗み聞きしていなかったの？
盗み聞きしていれば、
ナイフがすり替えられて、

あたしたちが
おたおたしていたことがわかったはずでしょ」
アスカは、
さらにヒトメを問いつめると、
「あたしは盗み聞きしていないもん。
だから、
お芝居だと思っていたんだもん」
と、
ヒトメは今度は普通に答える。
「でも、
レイカは盗み聞きしていたんでしょう。
だったら、
レイカからあんた聞いたんじゃない。
それとも、
レイカが教えてくれなかったの？」
すると、
ヒトメはまた考え込んだ。
そこで、
ホウセイが、
「実はさ。
レイカちゃん、
ちょっとだけ意識はあるんだよ。
レイカちゃんは譫言で、
ヒトメが、
ヒトメが、
って言ってるんだよね。
それ、どういうこと？」
と
嘘をついた。
アスカも木太郎も、

ホウセイの話しが
ヒトメをひっかけるためのものだ
とわかったが、
揃ってわざと頷いてみせると、
ヒトメが、
明かに動揺しているのが、
その挙動から3人にはわかった。
そこで、
アスカが、
「あんた、落ちつきないけど、
まさか、あんたがもとめ先生を殺したの？
だから、
レイカがあんなことを」
と、
思ってもいないことをわざと言った。
すると、
「違うのよ！
殺してはいないのよ。
本当、信じて。
レイカだって、
あたしが殺した
とは思ってないんだから」
と、
ヒトメは
思わずそう言ってしまったのだった。
「殺したとは思ってない？
じゃあ、
もとめ先生が暴れたなんかして、
その際、
あんたと揉めて、

あんたがうっかり刺しちゃったのね」

と、

アスカはヒトメを追いつめるように、

わざとそう言った。

「ヒトメの再事情聴取3」

アスカがそう言ってヒトメを睨みつけると、
ホウセイも木太郎も
わざとヒトメを睨みつけた。
すると、
「あたし刺してもいないわよ。
そのことは、
レイカもチウメも信じてくれたから」
と
ヒトメが口を滑らせたので、
「レイカもチウメも信じてくれた？
どういうこと？
それじゃ、
3人がいるときに、
何かあって、
ヒトメちゃんともとめ先生がもみ合って、
ナイフがたまたま、
もとめ先生に刺さったってことなの？」
と、
ホウセイがわざと言うと、
「ホウセイくん、違うわよ。
さっき、
ヒトメは、
レイカもチウメも信じてくれた
って言ったでしょう。
ということは、

ヒトメがもとめ先生を刺したときは、
あの二人は現場にいなかったのよ。
チウメもレイカもヒトメの性格を知らないから、
ヒトメの嘘を簡単に信用したんでしょう。
本当は、
あんたがやらかしたんでしょう」
と、
アスカが、
またヒトメを追いつめると、
「ごめんなさい。
嘘はついたけど、
あたしは、
もとめ先生を刺してはいないのよ。
信じて！
本当は、
あたしが我慢できなくなって、
もとめ先生を一人だけにして、
トイレに入ってる間に、
もとめ先生が自殺しちゃったのよ。
これが本当なの。
あたしは刺してはいないのよ。
あたしは人殺しじゃないから」
と言って、
ヒトメが泣き出したが、
アスカはこのときはヒトメでも容赦はなかった。
「泣いてもダメ！
あんたが刺してないなら、
何で、
あんたもチウメも嘘を言うの？
その理由をきちんと話さない限り、

あたしは許さないから」
とさらにヒトメを追及した。
すると、
「ごめんなさい。
でも、
本当に、
私はもとめ先生を刺してないの。
最初は、
あたしとレイカで
もとめ先生のことを看ていたんだけど、
レイカが自分の部屋に用事があるって行って、
あたしともとめ先生だけになっちゃったのよ。
あたしはその前からトイレに行きたかったんだけど、
なかなか二人が戻って来ないので、
あたしが我慢できなくなって、
もとめ先生を一人だけにして、
トイレに入っちゃったのよ。
それで、
あたしがトイレに入っていたら、
チウメとレイカの叫ぶ声が聞こえて、
慌てて、
トイレを出たら、
もとめ先生が、
もう自殺した後だったの。
それで・・・」
また、
ヒトメが泣き出したが、
「泣くのは後よ。
最後まで話しなさい」
アスカがまた追及すると、

「ごめんなさい。
それで、
あたしがトイレから出てくるなり、
レイカがあたしに向かって、
そこまでおバカだ
とは思わなかった
って結構大きな声で言ったのよ。
あたしはそのとおりだから、
黙って謝ったんだけど、
チウメが逆に怒って、
レイカにあんたの方が、
もっとオオバカよ
って言って二人が喧嘩になって、
レイカが床に落ちていたナイフとスコップ
を拾い上げたの。
そうしたら、

「やっぱり、
あんたが犯人だったのね」
って、

チウメが、
よくわからないことを言いだして、
チウメも部屋に入ったスコップを拾ったの。
そうしたら、
レイカが、

「私にそんなことできるわけがないでしょう。
そういう、あんたこそ犯人なんでしょう」

というようなことを言って、
一人でスコップと剣を持って、
逃げ出しちゃったのよ」
ヒトメはそこまで話すと、
また、
泣き出した。

「チウメとアスカ」

ヒトメがまた泣き出すと、
アスカは、
今度は、
ヒトメの頭を撫でて、
「今だけは信じてあげる。
さあ、
涙を拭いたら
　木太郎くんとホウセイくんと一緒に
みんなのところに戻るのよ。
お願い。
木太郎くん、ホウセイくん、
一緒にヒトメを連れて行くの手伝って」
と、
やさしく言った。
アスカの意図を理解した木太郎とホウセイは、
黙って頷くと、
すぐヒトメを、
くそたたちのいる部屋まで連れていった。

アスカたちは
ヒトメをくそたたちのいる部屋に連れて行くと、
チウメに声をかけて、
「悪いけど、
今度は

チウメ、
もう少し詳しく話しを訊かせてくれる」
と言い、
チウメが黙って頷いたのを確認すると、
「ごめんなさい。
みんなはもう少し待っていてくれる」
と言って、
木太郎たちと3人で
チウメを前にいた部屋に連れていったのだった。

アスカは、
木太郎たちとチウメを連れて部屋に入ると早速部屋の鍵を閉めた。
そして、
いきなり、
チウメに向かって、
「あんたがやっぱりナイフすり替えの犯人だったのね」
と
ホウセイや木太郎が予想もしていないこと
をいきなり言ったのだった。

「チウメとアスカ2」

「ヒトメがそんな嘘を言ったの？」
部屋に入ったとたん、
アスカに、
犯人だと言われたチウメは、
不快そうな顔で、
アスカの方を見た。
木太郎とホウセイは、
これもアスカの作戦だと思い、
わざと黙ってチウメを睨みつけた。
「チウメしか、
ナイフをすり替えられる人間はいないでしょ！
レイカは、
本物と偽物の区別もできなかったのよ」
アスカはヒトメのことに触れず、
さらに、
チウメを追及した。
「私は、
たしかに、
ナイフをレイカと一緒に取りに自分の部屋に行ったけど、
私はあのとき部屋に入って、
すぐ、お手洗いに入ったの。
それで、
その間にスーツケースの中のナイフを探してもらうよう、
レイカに頼んだのよ。
だから、
ナイフを見つけてオチタくんに渡したのはレイカなの。

それに、
ヒトメはあの場にいないんだから、
私がナイフをすり替えたなんて言えないはずよ。
なのに、何で、そんな嘘を」
チウメは、
ヒトメが、
アスカたちにそういう話しをしたのだと思いこんでいたのか、
少し悲しそうな表情で言った。
「じゃあ、
何故、
あんたは嘘をついたの？
もとめ先生を一人にして、
トイレに入ったのは、
あんたじゃなくて、
ヒトメでしょ！
ナイフのすり替えをごまかすために、
ヒトメを庇うフリして、
嘘をついたんでしょう」
アスカはさらにチウメを追及した。
「そ、それは・・・」
チウメは少し考えてから、
「その話しはたしかに嘘だったけど、
さっきの話しは本当なの。
私は、
あのときナイフの確認さえもしていないの。
お手洗いを出てすぐ、
あの部屋にレイカと戻ったから」
と、
チウメが答えると、
「じゃあ、

何故、
あんたは、
自分がもとめ先生を一人にしたなんて、
嘘をついたの？
やましいところがないなら、
嘘をつく必要はないじゃない。
ヒトメは、
もとめ先生を一人にしてしまった
というやましいところがあったから嘘をついた。
でも、
あんたにはそれがないんでしょう。
それにヒトメとレイカは、
もとこがまだ生きているじゃないか、
とかなり怯えていたけど、
あんただけ、
平気で動き回っていたんでしょ。
おかしいじゃない」
アスカが、
チウメを凄い目つきで睨んで、
そう言うと、
チウメは反論もせず、
何故か、
アスカから視線をそらすと、
黙り込んでしまったのだった。
チウメはしばらく下を向いたまま考えていたが、
「じゃあ、正直に言いますが、
その前にひとつだけ確認させてください」
と言った。
「どうぞ」
アスカはそれだけ言う。

すると、
チウメは、
ホウセイの方を見て、
「では、
質問しますが、
もとこを殺したフリに見せかければいい
というホウセイくんの提案だけど、
あれは、
本当にホウセイくんが考えついたことなの？」
と訊いた。
「えっ？」
ホウセイは、
意外なチウメの質問にとまどいを見せた後、
「そうだけど」
とそれだけ言った。
「あのときは不自然さに気づかなかったんですけど、
もし、
私が演劇用のニセモノのナイフを持っていなかったら、
どうする気だったんですか？」
チウメが、
さらに質問すると、
「そんなこと、今関係ないじゃない！
話しをそらして、
あんた、言い訳考えてるでしょう」
と、
アスカが凄い形相で横から口を出すと、
「私が、
演劇用のナイフをこの合宿に持ってきたこと
を知っているのは、
私以外にはアスカだけのはずだから、

私は質問しているんです。
ホウセイくん、
答えてください」
チウメはアスカの方は見ず、
ホウセイの顔をじっと見て、
冷静にそう言ったのだった。

「チウメの反論」

「えーと、
たしか、俺は演劇用のナイフ
を使って殺したフリをするとまで言ったかなあ？」
ホウセイはチウメに訊かれて、
首を捻った。
「でも、
もとこを殺したように見せかけるには
それしかないですよね」
「うーん、それもそうだな」
木太郎は頷く。
「そんなの問題じゃないでしょう！」
アスカがチウメの方を睨むと、
「例の芝居をホウセイくんが考えたんじゃなくて、
アスカがその前に教えていたなら、
アスカでもナイフのすり替えは可能だから、
話しているの。
それに、
二グループに別れて話し合いしましょうって、
提案したのはアスカでしょう」
チウメは
まるでアスカがナイフのすり替え犯であるかのように、
アスカを睨む。
すると、
「チウメちゃん、
問題はホウセイが例の芝居を自分で思いついたか、
アスカちゃんの入れ知恵でああ言ったかが

問題なんじゃないの？」
木太郎がチウメの方を見て言うと、
「入れ知恵！」
アスカが
むっとしたような顔で木太郎の方を見たので、
「ごめん。言い方がわるかった。
要するに、
あの芝居をホウセイが自分の力だけで考えたのか、
それとも、
その前に
アスカちゃんのヒントがあったのかが問題なんだ
と言いたいんだ。
チウメちゃんの言いたいこともそうだろう？」
「木太郎くんの言うとおりです。
ナイフのすり替えをするには、
私が演劇用のナイフを持ってきたことを知っていないと、
無理ですから」
「だから、
あんたが犯人なんでしょう！
話しをそらさないで、
ヒトメと口裏を合わせて嘘をついた理由
を先に話しなさいよ。
あたしを疑うのはその後にしてくれる？」
アスカがまたチウメを睨んだ。
（続く）

「チウメの反論2」

すると、
チウメは、
「嘘をついた理由は
ナイフをすり替えた犯人を探すためです。
私を信じなくてもかまわないけど、
私は
ナイフをあのとき触っていないの。
それに、
その前にもナイフのすり替えはしていないの。
だから、
他にナイフをすり替えた犯人がいるはずなんです。
だから、
ヒトメには悪いけど、
嘘をついておとなしくしてもらって、
私一人でナイフをすり替えた犯人
を探していたんです。
正直、
最初はレイカを疑っていたんだけど、
どうやら彼女は違うみたいですから、
今、
私が考えている犯人はアスカあなたよ。
私が演劇用のナイフを持ってきたことを知っていたのは、
あのときもとこを殺すフリをする芝居
をやることにした私以外の４人、
つまり、
レイカとホウセイくんと木太郎くんとおちたくん。

と。
それにアスカあなただけだから。
それによく考えたんだけど、
もとここに直接いじめみたいなことをやられたのは、
もとめ先生とアスカと永久くんだけでしょう。
そういうことを考えていったら、
私の頭の中には、
アスカあなたしかナイフすり替えの犯人像は
浮かばなかったわけ」
チウメは
今度はアスカの目をじっと見ながら、話した。
「要するに、
チウメはあたしがナイフすり替え犯だ
という証拠のようなものを掴むために
嘘をついていたってこと。
それで、
あたしが犯人だ
という証拠が見つかったの？
見つかってないでしょう。
それにそのために何であんな嘘をつくワケ？
おかしいわよ。
それに、
チウメ自身、
ホウセイくんに質問していたように、
例の芝居のことなんか、
あたしは知らなかったんだから。
だから、
あたしがナイフをすり替える必要はないの。
それから、
アユメに確認してごらんなさいよ。

あたしは二グループに別れてから、
ずっとアユメと一緒にいたんだから。
ホウセイくんたちが例の芝居を考えついてから、
ナイフをすり替えることは
不可能なのよ。
それでもあたしが犯人なの」
アスカは凄い目でチウメを睨みながらも、
冷静に言い返した。

「ホウセイの提案」

アスカとチウメが睨み合っていると、
「チウメちゃんが嘘をついていたことを認めたわけだけど、
アスカちゃんが話したように、
それだけで嘘をついたということは
少し理由としては弱い気がする。
だけど、
レイカちゃんが意識を戻せば、
チウメちゃんが例のナイフを触ってないか
どうかもわかるから、
アスカちゃんの言うとおりかどうかは、
レイカちゃんの意識が戻らないとはっきりはしない。
他方、
よく思い出したんだけど、
俺が、
もとこを殺すよう提案したのは事実だけど、
あのナイフを使うよう具体的な案を出したのは
チウメちゃんなんだ」
「やっぱり！」
「そんなあ！
私はホウセイくんが
ああいう話しをしたからナイフの話しをしただけで・・・」
アスカとチウメが
ホウセイが話しをしている途中でそれぞれ大きな声を出す。
「ちょっと、
最後まで話しを聞いてくれ。
俺は、

まだチウメちゃんをナイフのすり替え犯だとは確信していない。
理由はいくつかある。
そこで、
この点を、
木太郎と二人で協議したいと思うから、
二人は今の話しを他の仲間には話しをしないで、
あの部屋で待っていてくれないかな」
ホウセイがそう言うと、
「確信していない？
レイカの意識が戻らないと、
チウメが犯人だと断定できないの！
うーん。
何か納得できないな。
それに、何協議するのよ」
と
アスカは、
もうチウメがナイフのすり替え犯だと確信したような感じで
ホウセイの方を見たので、
「それは今は言えない。
アスカちゃんも興奮しないで、
冷静になってくれよ。
チウメちゃんもだ。
とにかく二人とも、
俺を信用してくれ」
と
ホウセイはそれだけ言って頭を下げたので、
アスカもチウメも渋々頷いた。
すると、
木太郎が
「とりあえず、

４人であの部屋まで戻ろう。
詳しいことは言わず、
俺たちだけすぐここに戻るから、
みんなにも黙っていてくれよな」
と言うと、
ホウセイがすぐチウメとアスカを押すようにして、
部屋を出るように促したのだった。

「木太郎の推理」

ホウセイと木太郎が、
アスカとチウメを他の生徒が待つ部屋に連れて行き、
すぐ出てきたが、
他の生徒たちは、
アスカとチウメの異様な雰囲気を感じたせいか、
二人がまた部屋を出ると言っても、
何も理由を聞かなかったので、
ホウセイと木太郎は、
すんなり、
またさっきの部屋に戻ってきた。
「なんか、
みんな異様な雰囲気だったな」
「あの二人の態度もそうだけど、
落ちつかないヒトメちゃんの様子から、
俺たちが、
真相に近づいたことに勘づいたんじゃないかな」
「まあ、
それはそれでしょうがないな。
で、
ズバリ言うが、
ナイフすり替えの犯人は、
アスカちゃんだろう」
木太郎が鼻をひくひくさせながら、
少し自信がなさそうに、
ホウセイの表情をうかがうように言う。
ホウセイは表情を変えず、

「どうして、そう考えた？」
と
それだけ言った。
木太郎は、
ホウセイが驚かず無表情だったので、
自分の推理が正解だ
と思いこんだのか、
今度はいつものように鼻をほじると、
自分の推理を話しだしたのだった。
「まだ、
もとこの部屋にいるときの話しだから、
ホウセイが覚えているかどうかわからないから、
そこから話すが、
たしか、
ホウセイが、
ナイフのすり替えが、
本当はおちたの芝居のために行われたものじゃなく、
もとこを正当防衛で殺すために行われたものじゃないか
って意見言って、
結局、
その推理は不充分じゃないか
って話しになったとき、
アスカちゃんが、
俺たちがもとこの部屋に閉じこめられた形になったのは、

ナイフのすり替えが、
誰かにバレたからこうなったんじゃないの

と発言したのを覚えているか？」
「ああ、それは覚えているから続けてくれよ」
「うん。
それで、
あのときは、
俺たちはナイフのすり替え犯人に、
もとこの部屋に閉じこめられた
と思いこんでいたせいか、
そのすり替えができたのは、
チウメちゃんとレイカちゃんしかいない
という話しになったよな」
「ああ、それで」
「で、
チウメちゃんが、
まさか自分のナイフともとこのナイフ
をすり替えるはずがないから、
消去法で、
ナイフのすり替え犯はレイカちゃん
ということになるけど、
レイカちゃんには動機がまったくないから、
その考えは違う
ってことで、
考えが行き詰まり、
そのままあの話しは終わったよな」
「ああ。
でも、
結局、
あのとき、
俺たちは
もとこの部屋に勝手に閉じこもっていただけで、

さっき話したアスカちゃんの言葉、
つまり、

ナイフのすり替えが、
誰かにバレたからこうなったんじゃないの

っていうワケじゃなかったんだ」
「ああ、それで」
「で、
ついさっきチウメちゃんの話しを聞いていたら、
俺はあのときのアスカちゃんの言葉が凄く
不自然に思えてきたんだよ」
「どうして？」
「それはな」
木太郎はそこまで話すと、
また、
鼻をほじってからにやりと笑った。

「木太郎の推理2」

「あのときは、
俺は、
アスカちゃんの言葉を聞いて、
ナイフのすり替え犯が、
それを誰かに気づかれたから、
俺たちを閉じこめらるようにしたんだ
と思いこんでいたんだけど、
チウメちゃんの話しを聞いた今、
よく考えると、
アスカちゃんはそう意味で言ったんじゃなくて、
ただ、
ナイフのすり替えが誰かにバレたから
こうなったんじゃないの、
という漠然とした意味でしか。
アスカちゃんは言っていなかったんだ
と思うんだよ？
だけど、
アスカちゃんが、
今回のナイフのすり替えに無関係なら、

バレた

という言葉を使うのは凄く不自然なんだよ。
バレた
という言葉は、
バレるようなこと

をした張本人を主語にして使う言葉だからな」
木太郎が自信ありげに、
そこまで話すと、
「うーん。
たしかに、
木太郎のように、
アスカちゃんをナイフのすり替え犯だ
と思って、
あの言葉を考えると、
そうも言えるけど、
決め手には欠けるよな。
むしろ、
チウメちゃんの意見と同じように、
彼女が演劇用のナイフを持ってきたことを知っていたのは、
俺とホウセイとおちたとレイカちゃんとチウメちゃん、
そして、
アスカちゃんだけだけど、
その中で、
もとこを殺す動機を持っていると思われるのは
あの２０７号室に宿泊させられて恐い思いをしたアスカちゃんだけだから、
俺の考えた芝居のことを抜きにして考えれば、
ナイフをすり替えた犯人として、
アスカちゃんが一番怪しい
とストレートに考えた方がいいんじゃないかな」
と
ホウセイは言ったのだった。

「木太郎の提案」

「じゃあ、
ホウセイも俺と同じでアスカちゃんが
ナイフをすり替えたと思っているんだな」
木太郎が少し嬉しそうな顔をして言う。
「動機から考えるとそう思えてきたんだけど、
決め手には欠くからな。
だから、そんな嬉しそうな顔するなよ」
ホウセイがはっきりと言うと、
「いや、
そういう意味で嬉しいわけじゃないんだよ。
アスカちゃんがナイフのすり替え犯なら、
多分、
正当防衛を狙って、
アスカちゃん自身が、
自分でもとこだけを殺そう
と思っていたわけだから、
おちたを陥れようとしたわけではないから、
俺からすると、
全然恐さが違うんだよな」
「そうかよ?
俺は、
やっぱりアスカちゃんは恐いと思うけどな。
ずっと、
俺たちに嘘をついていたんだし、
それに、
さっきの調子だと、

チウメちゃんに罪を被せようとも
考えていたかもしれないしな」
と、
ホウセイが言うと、
「それはチウメちゃんの行動が
怪しかったことからの成り行きだろ。
最初からそう計画していたわけじゃないんだから、
しょうがないんじゃないか？
それに、
あの芝居が、
仮にそのときはうまく行ったとしても、
多分、
すぐ、
芝居だ
ということが誰かにバレて、
結局、
俺たちか、
もとめ先生がもとこを殺すはめになっていた
と思うんだよ。
だから、
あの結果は、
俺たちまで殺そうとしていたもとこの自業自得
ということでいいんじゃないのか。
まあ、
噂どおりに、
この屋敷が呪われているせいかもしれないけどな。
で、
これは俺の提案なんだけど、
自殺したもとめ先生には気の毒だけど、
もとめ先生が、

もとこを殺して自殺したことにして、
もうこの件、終わらせないか？」
と
木太郎がそんなことを突然言いだした。
「おい、本気かよ。
みんなにはどう説明するんだよ」
ホウセイが呆れたように木太郎の顔を見た。
そこで、
木太郎が、
真顔で、
「それはだな。
ナイフをすり替えたのは、
アスカちゃんじゃなく、
もとめ先生だった
って結論にすればいいんだよ。
だから、
もとめ先生は、
結果的におちたに殺人をやらせてしまったこと
を悔いて自殺したんだ
って、
みんなに説明すればいいんだよ」
と言った。
すると、
「木太郎！
それだ！
ひとつだけ足りないところがあるが、
今の木太郎の考え、
それだ！
もしかしたら、
それこそ真実かもしれないぞ」

と

ホウセイは、

木太郎のことを指差しながら、

大声を出したのだった。

「ホウセイの閃きと足りないもの」

「えっ？
今のが真実かもって、
それで足りないところがひとつだけあるって？
それってどういうことだよ」
木太郎が自分で言いだした結論のクセに
びっくりしたような顔で、
ホウセイの顔を見る。
「ああ。
こういうことだ。
もとめ先生が俺たちより先にもとこの計画に気づいたか、
あるいは、
もとこがもとめ先生を２０７号室に宿泊させられた際に
殺されるのを怖れて、
もとこが持っていた本物のナイフとチウメちゃんの演劇用のナイフ
をすり替えた。
しかし、
俺の発案で、
偶然ああいう芝居をしてしまったから、
結果的には
おちたがもとめ先生がすり替えた本物のナイフでもとこ
を殺すハメになってしまった。
もとめ先生は最初はおちたの予想外の行動に凄く動揺していたが、
後で、
チウメちゃんたちと４人だけになったとき、
その真相に気づいた。
だから、

おちたにもとこを殺させてしまった
という自責の念にかられて自殺した」
「おい！
瓢箪からなんとかじゃないか！
それなら誰も悪くない。
ただの事故だ。
いいじゃないか？
どこに足りないものがあるんだよ！」
木太郎は嬉しそうに両手でホウセイの肩をつかんだ。
「木太郎、今の話しを聞いて何か気づかなかったか？」
「別に。
辻褄は合うじゃないか？
ナイフすり替えの動機も、
もとめ先生が自分の身を守るためならよくわかる。
それに、
もとめ先生が自殺した理由もよくわかる。
実は、
アスカちゃんのすり替え犯説はそこが弱かったんだよな。
で、
どこに足りないものがあるんだよ？」
「うん。
それはな」
ホウセイは木太郎がまったく気づいていなかったので、
他の生徒ももしかしたら、
自分があることを付け足して話したら、
その足りないところを補えて、
木太郎の考えどおりに丸く治まるかもしれない
と思い、
木太郎にだけは、
本当のことを話そうか、

それとも、
敢えすぐ思ったことが顔に出る木太郎にも嘘をついておこうか、
しばらく考えていたのだった。

「ホウセイの決断」

そして、
ホウセイは
一度足りないものがあると話してしまった以上、
木太郎のことだからしつこく訊いてくる
と思って、
正直に話すことを決断した。
「木太郎、
今の推理に足りないものはな。
もとめ先生がどうやって、
チウメちゃんが
演劇用のナイフを持ってることを知ったかだ。
チウメちゃんがアスカちゃんを疑ったのも、
アスカちゃんならそれを知っていたからだ」
「あっ！　それがあったな。
たしかに、
チウメちゃんはそのことを気にしてたから、
そこの説明をしないと納得しないな。
そうかあ・・・
ここにアスカちゃんがいれば、
アスカちゃんが
もとめ先生に教えたことにできるんだけどな。
これから
またアスカちゃんだけ呼び出すのは怪しまれるしな。
やっぱり、
この推理には無理があるな。
でも、

丸く治めるにはそれしかないと思うんだけどな」
ホウセイは木太郎の話を聞いて、
やはり木太郎に話して良かったと思った。
仮にホウセイが嘘をついても、
チウメが今の推理の弱点に気づくに違いない
と思ったからだった。
ホウセイがそんなことを考えてると、
木太郎が、
「でも、
何で、
もとめ先生は自殺したんだろうな?
オチタが、
自分のために
もとこを殺したと思いこんでいたとしても、
自殺までするかな。
俺ならそこまでしないけど」
と
呟くように言ったのだった。

「足りない何か」

「うーん・・・
たしかに、
もとめ先生の自殺も不自然と言えば不自然だ。
オチタが刺した後のすぐの衝動的な行動なら、
まだ、
わからなくはないが、
アスカちゃんたちがいなくなって、
ヒトメちゃんがトイレに入ってる間に自殺する
ってことは衝動的というより、
計画的だしな。
でも、
さっきの俺の推理が成り立つには、
もとめ先生がもとこが本物のナイフを持っていて、
かつ、
チウメちゃんが似たような偽物のナイフ
を持っていることを知っていて成り立つ推理なんだ。
だけど、前者はともかく、後者はな。
俺たちだって、
チウメちゃんから聞いて初めて知ったんだし、
チウメちゃんの場合は部屋に置いてきていたんだから、
それを見る機会はないよな」
ホウセイが自分の意見を言うと、
「じゃあ、
やっぱり、
ナイフをすり替えたのはアスカちゃんか？」

木太郎が鼻をほじりながら言うと、
「それも俺は疑問だ。
チウメちゃんは、
アスカちゃんがチウメちゃんが偽物のナイフを持っていることを知っていると言っていたけど、
アスカちゃんは携帯していた。
だから、
アスカちゃんが、
チウメちゃんが偽物のナイフを持っていることを知っていたとしても、
部屋に置いていたことまでわかっていたのかな？
アスカちゃんはチウメちゃんに反論していたとき、
そのことには触れていなかったから、
アスカちゃん自身そこを意識していたか否かわからないし、
アスカちゃんをナイフのすり替え犯だと断定するにはやはり無理がある。
それに、
ナイフのすり替え犯がアスカちゃんだとすると、
さっき木太郎が言ったように、
もとめ先生の自殺の理由はさらに弱くなるしな」
「また、
振り出しに戻るわけか？
うん？
待てよ。
今、
チウメちゃんのナイフにばかり気がいっていたが、
もとこが、
ナイフを
あんな場所に隠していたことを知り得た人物は誰なんだ？
俺たちがあれだけ探して、

ベッドを移動して初めて見つけたんだぞ」
木太郎が何か閃いたのか、
そう言った後、
鼻をひくひくさせた。

「もとこのナイフと？」

「そうか！
もとこがあのナイフを持っていることを知り、
かつ、
あそこにナイフを隠していたこと
を知っていないと、
チウメちゃんのナイフとすり替えることは
不可能なわけか」
ホウセイがそう言うと、
「それだけじゃないぞ。
もとこがベッドの下に隠していたナイフとチウメちゃんのナイフ
をすり替えた犯人は、
もとこの部屋に入ったわけだから、
例の無線機にも当然気づいていない
とおかしいんだよ」
木太郎がさらに言うと、
ホウセイが頷きながら、
「そういうことになるな。
だとすると、
ナイフをすり替えた犯人は、
最初に、
無線機に気づき、
そこから、
もとこの計画を知って、
その後で、
ナイフをすり替えた可能性が高い、
と言った。

「そうすると、
ナイフは、
俺たちが
もとこともとめ先生が最後のゲームをしている間に無線機を見つける前に、
すり替えられていた
ということになるな」
「今までの推理が根底から崩れたな。
でも、
なんで、
俺たち、
そんな簡単なことに気づかなかったんだろう」
「それは、
もとこを殺したフリをする
というホウセイの思いつきの後に、
ナイフがすり替えられた
と思いこんでいたからだよ。
だから、
最初に、
チウメちゃんとレイカちゃんが疑われたんだけど、
よく考えたら、
ホウセイの思いつきの後では、
チウメちゃんのナイフをすり替えられても、
もとこのナイフはすり替えられないよな。
俺たちがあの部屋にいたんだから」
と言いながら、
木太郎は鼻をひくひくさせる。
「そうすると、
ナイフがすり替えられた時期は、
俺と木太郎が、

もとこともとめ先生の最後のゲーム中に抜け出して、
例の無線機を見つける前に行われていたことになるな。
ということは、
ナイフをすり替えた犯人の目的は、
もとこに本物のナイフを利用させないためだったのか？」
ホウセイがそう言うと、
「犯人は、
無線機に気づいていたんだから、
まあ、
そういうことになるのかな。
となると、
自殺したもとめ先生が一番怪しいんだけど、
もとめ先生は、
チウメちゃんが偽物のナイフを部屋に置いていたこと
をどうして知ったんだろうか？
そこが最大のネックだよな。
うーん？」
木太郎が鼻をひくひくさせながら、
考え込んでいると、
「あのさ、
逆に考えてみないか。
チウメちゃんのナイフが、
チウメちゃんの部屋にあることさえ知っていれば、
もとこのナイフの存在を知ることは可能なんじゃないか。
今の俺たちの新しい推理だと、
ナイフのすり替え犯は無線機に気づいているはずなんだから、
無線機を見つけた時点で、
もとこが凶器を持っているはずだと思って探すだろう。
あのときの俺たちのように」
と、

ホウセイは言ったのだった。

「犯人候補？」

木太郎はホウセイの話しを聞いて、
「とすると、
こういうことか？
犯人は、
まだ、
俺たちがもとこの計画を知る以前に、
何らかの理由で、
もとこの部屋に入った。
そこで、
たまたま、
例の無線機を見つけ、
そこから、
もとことオオシマがとんでもないこと
を企んでいることを知った。
犯人は、
その企みから、
当然、
もとこが、
凶器を所持しているだろうと考えて、
もとこの部屋を探し、
その結果、
本物のナイフを見つけた。
そして、
それを見つけた犯人は、
もとこにその本物のナイフを利用させないようにと、
そのナイフと、

チウメちゃんの演劇用の偽物のナイフとを交換した。
ここまではいいか？」
「まあ、そういうことになるんだろうな。
で？」
「問題はこの後だ。
まず、
何故、
もとこのナイフをどこかに持ち去るなどしないで、
チウメちゃんの偽物のナイフと交換したのか
ということだ」
木太郎はこの先がわからないのか、
鼻をひくひくさせながら言う。
「それは、
多分、もとこが所持していたナイフを持ち去ると、
もとこに、
誰かがその計画を悟ったことを知られること
を怖れたからだろう。
実際、
偽物のナイフも本物のナイフも結構似ているからな」
「やっぱり、そうか。
となると、
犯人は、
もとこのナイフを見つけたとき、
それがチウメちゃんが持っていたナイフと似ていることに
すぐ気づいたことになるよな」
「ああ、そうなるな」
「となると、
犯人は、
やはりチウメちゃんのナイフと
そのナイフのありかを知っていた人物になるよな」

「うん」
「だとすると、
犯人の可能性があるのは、
チウメちゃんかアスカちゃんの二人だけだろう？」
「そこが問題なんだよな。
普通はそう考えるべきなんだろうけども、
うーん・・・」
ホウセイも木太郎も、
はっきりした理由はなかったが、
その二人とも
ナイフをすり替えた張本人ではないような気がしたので、
お互い顔を見合わせたのだった。
「ホウセイもそう思ったか？」
木太郎が鼻をひくひくさせながら言うと、
「木太郎もか？」
「ああ、俺も。
まずさ。
アスカちゃんの方だけど、
もとこのことをかなり怖がっていたから、
無断でもとこの部屋に入ったりなんかするかな？
見つかったら大変だし、
もとこが怖いんだから部屋に近寄りたいとも思わないんじゃないか？
アスカちゃんが犯人だと考えると、
そこに大きな疑問がある。
次はチウメちゃんだけど、
もとこのことを怖がってはいなかったにしても、
何故、
もとこの部屋に黙って入ったのか疑問だし、
最大の疑問は、

わざわざ自分のナイフともとこのナイフを交換したことだ。
これまでチウメちゃんが疑われたのも、
そのせいだから、普通はそんなことしないんじゃないかな」
木太郎は自分の疑問をぶつける。
「うん。
アスカちゃんの場合は同意見だ。
ただ、
チウメちゃんの場合は、
ナイフを交換するという発想になったのなら、
ナイフの方は、
他に交換する対象がないからやむをえずやったとも考えられるよ。
それより、
俺はチウメちゃんが犯人だとすると、
もとこの部屋にわざわざ入った理由とその後の行動がわからない。

アスカちゃんの場合は、
もとこを怖れていただけでなく恨んでもいたから、
ナイフをすり替えて、
あわよくば、
正当防衛で殺してやろうという発想になるかもしれない
ということはわからなくはないんだけど、
チウメちゃんには、
もとこへの恨みはないから、
無線機を発見した時点で、
もっと別の行動を考えるんじゃないかな。
そこが理解できないんだな」
ホウセイが自分の意見を言うと、
「たしかにな。
俺たちが無線機を見つけたときに、
ナイフをすり替えるという発想はなかったよな。

うーん？
ますますわからなくなったな」
木太郎が鼻をひくひくしながら考え込むと、
「俺たちだけじゃ無理だな。
誰かもうひとり呼んで考えるか？」
ホウセイは木太郎の顔を見ながら、
そう言ったのだった。

「意外な容疑者？」

「もうひとりの知恵か？
あのときは、
結局二人で考えることにして、
その後、
おちたがやってきても、
結局、
ダメだったんだよな」
木太郎は、
以前、
もとこの計画を知ったときのことを思い出すように言う。
「そうだったな。
おちたがやってくる前の、
あのときの候補は、
アスカちゃん、
レイカちゃん、
永久だったけど、
アスカちゃんは容疑者の一人だし、
レイカちゃんはああいう状態だし、
残るは永久か？」
「でも、
永久がもとこの部屋で声を聞いたなんて言うから、
こういうことになったんだよな？
あいつが、
もう少し、
頭を使っていたらこうはならなかったんだから、

永久もあてにはならないぞ」
「たしかに、そうだな。
それに、あいつももとこには恨みがあったんだよな」
「うーん？」
このとき、
木太郎は何か閃いたようだった。
「どうした？
木太郎？」
ホウセイが木太郎の表情に気づいて訊く。
「もしかして、
永久がもとこの部屋に入ったんじゃないのか？
あいつ、
もとこの部屋の前で声を聞いたって言ってたけど、
本当は部屋に入って、
無線機を見つけたんじゃないのか？」
木太郎が鼻をひくひくさせながら言うと、
「うーん？
たしかに、
永久が、
もとこの部屋に入った可能性は否定できないけど、
永久はチウメちゃんのナイフの存在
もその場所を知らないはずだぞ。
それに、
あいつももとこを怖がっていたから、
部屋の前を通っても部屋の中にまではさすがに入らないだろう」
「そうか・・・」
ホウセイの言葉に、
木太郎もそれだけ言うしかなかった。
「要するに、
もとこの部屋に入って、

無線機ともとこのナイフを見つけ、
かつ、
チウメちゃんのナイフの存在と場所
を知っていた人物じゃないと、
ナイフのすり替えはできないんだからな。
その条件に該当する人物じゃない
とすり替え犯人にはなりえないんだろ」
ホウセイはそう言いながらも、
具体的な犯人像を描くことはできなかった。
「ホウセイ、この前提でいいのかな？
俺が考える限り、この前提を充たしそうな人物はいないぞ」
「俺も実はそうだ。
こうなったら、
偽物のナイフの持ち主だったチウメちゃんに
もう一度話しをして、
誰がナイフの存在と置き場所
を知っていたか訊いてみないか？
もし、
そのとき、
チウメちゃんの様子がおかしかったら、
彼女が犯人だということだから。
そうしよう」
ホウセイがそう提案すると、
木太郎も黙って頷いた。

「不気味な沈黙」

ホウセイと木太郎が、
チウメたちの待つ部屋に行くと、
チウメやアスカ以外の生徒
も疲れたような表情をしながらも、
何故か黙ったままだった。
ホウセイがチウメからもう一度話しを訊きたい
と言っても、
ホウセイと木太郎が不気味に思うくらい、
誰もその理由を訊くものはいなかった。
チウメでさえ、
早くその部屋を出たかったのか、
理由も訊かずに、
ホウセイと木太郎について、
その部屋を出た。

ホウセイたちが前にいた部屋に戻って、
その部屋の鍵を木太郎がしめた後、
「みんな、ずっとあの調子なの？」
と
ホウセイがわざと笑顔で訊くと、
「私かアスカのどちらかが犯人だ
とみんな思いこんでいるみたいだから、
ああなんです」
と
チウメは無表情で答えた。

「みんなもバカじゃないからな。
でも、
チウメちゃんの回答次第では、
状況が変わるから正直に答えてくれないかな。
質問の理由は後で話すから」
ホウセイがチウメの目を見ながら、
笑顔で話すと、
「私は嘘は一切ついてません。
でも、
状況的には私が一番不利ですよね。
私の疑いが晴れるのなら、何でも答えますから、
好きなように訊いてください」
チウメは半分開き直った感じでホウセイの方を見ながら言った。
「別に、
俺と木太郎はチウメちゃんを疑っているわけじゃないんだ。
でも、
また、
ここに呼びだしたんだから、
そう思われてもしょうがないよね」
ホウセイが前置きをすると、
「いいから、ストレートに訊けよ」
と
木太郎が横から口を出したのだった。

「チウメがナイフを部屋に放置していた理由」

「そうだな。
では、チウメちゃん、
例の演劇用のナイフだけどさ。
何で、
わざわざ今回の合宿に持ってきたの？
アスカちゃんみたいに護身用ならわかるんだけど、
部屋においたままだったから、
　俺たちには何でチウメちゃんが
あんなナイフ持ってきたのか、
その理由がわからないんだな」
ホウセイがそこまで話すと、
「それがですね。
持ってきたというより、
前に演劇部で合宿があったときに
入れっぱなしにしたままの状態の旅行用のスーツケースに、
今回の荷物を詰め込んでしまっただけなんです。
それで、
たまたま入っていただけなんです。
でも・・・
それが、
今回の不幸の原因なんですけど・・・」
チウメは少し悔しそうな表情で話しをした。
「ああ、そうか！
それなら納得だな」

木太郎は笑顔で言う。
「信じてくれるんですか？」
チウメが、
木太郎の顔を見て少し表情を和らげた。
「まあね。
俺も旅行用の鞄とかじゃないけど、
そういうことよくするからね」
と言って、
木太郎がチウメの方を見て笑うと、
ホウセイは、
逆に険しい表情になって、
「じゃあ、
チウメちゃんが例のナイフを持ってきたのを、
何で、
アスカちゃんが知ってたのかなあ？
それじゃあ、
普通、わかりようがないよねえ？」
と言うと、
「えっ？
アスカが何故知ってたかですか。
それは当たり前ですよ」
と
チウメは平然と言ったのだった。

「アスカがチウメのナイフの存在を知っていた理由」

チウメの不思議そうな表情をみたホウセイが、
「えっ？
どういうこと？」
と、
チウメの方を見ると、
チウメは、
「実は、
アスカがですね。
誰がその場にいたかのかはよく覚えていないんですが、
例の２０７号室に泊められた後だったと思うんですが、
演劇用のナイフを使って、
その場にいた私たちを脅かそうとして、
わざと自殺するフリをしたんですよ。
私はすぐアスカの表情を見た時点で、
いたずら好きのアスカの演技だ
とわかっていて黙って見ていたんですが、
誰だったか忘れてしまったんですが、
アスカの演技を真に受けて慌てて止めようとして、
結構、
二人が危ない体勢になったもんですから、
私が、
大声で、
そのナイフはきっと演劇用の偽物だから騙されないで、
とか、
そんな感じで言って、

アスカの演技のことをバラしたんですよ。
で、
その後で、
アスカと二人きりになったときに、
私は、
てっきり、
アスカも私と同じ理由で鞄に放置したまま
この合宿に持ち込んだのか
と思って、
アスカに訊いたら、
アスカは、
護身用にいつも持ち歩いてるって、
私に話したんです。
ですから、
アスカが、
私が演劇用のナイフを持ってきたの
を知っていて当然なんですよ」
と、
チウメは、
その発言が重要な意味を持つこと
を知らずに淡々と話したのだった。

「チウメの記憶」

ホウセイは、
木太郎の方をちらっと見ると、
「今のチウメちゃんの話しなんだけど、
アスカちゃんが自殺する演技をしたときさ、
俺とか木太郎が、
その場にいなかったのは間違いないんだけど、
他にさ、
だいたい誰がいて、
誰がいないかわからないかな？」
と訊いた。
「うーん、そうですね。
結構、
前のことだったんで正直よく覚えてないんですが、
男子は、
多分、
いなかったと思うんですけど、
女子は誰だったかなあ？」
チウメが小声で呟くように下を向いて考えていた。
「じゃあ、こう訊こうか？
まず、もとこはいた？」
「もとこは絶対にいませんよ。
アスカはもとこのことを怖がっていましたから」
「じゃあ、もとめ先生は？」
「うーん？」
チウメは首を傾げる。
「いたか、

いないかわからないってこと？」
「そうですね・・・
うーん？」
「じゃあ、
ヒトメちゃんは？」
「多分、
ヒトメとアユメはいたと思います。
慌てて止めようとしたのが、
その二人のどっちかだったような記憶ですから。
後、
レイカか、
もとめ先生のどちらか、
それとも二人ともいたと思います」
「場所はどこ？」
「場所は食堂で間違いないです」
「男子は本当にいなかった？」
「あの騒動を少し遠くで見ていたかどうかは
断言できませんが、
多分、食堂にはいなかったと思います」
チウメが、
そこまで話してまた考え込んだところで、
木太郎が、
「ありがとう。
今、
訊かれたことは誰にも話さないでね」
と、
チウメの方を笑顔で見ながらやさしく言った。

「そして、アスカに？」

ホウセイは、
木太郎と一緒に、
いったんチウメだけをみんなが待つ部家に連れて行くと、
「もう少し時間をくれ」
と言うと、
不気味な沈黙が続くその部屋を後にして、
また、
前にいた部屋に戻ったのだった。

「アスカちゃんに念のためチウメちゃんの話しが
本当か確認する必要があるな」
「ああ、
多分、
あの話しは本当だろうが、
念のためにな。
それにその後が重要だからなだ、
アスカちゃんが、
チウメちゃんが演劇用のナイフを持ってきて、
部屋に置いてあることを誰かに話したかどうか？
あるいはその話しを誰かか聞いていたか？
あのとき、誰がいたとかな」
「まあ、
もとめ先生が、
チウメちゃんが演劇用のナイフを持ってきて

部屋に置いていたこと
を知っていたらならすべて辻褄が合うけどなな」
「まあ、
そううまく行けばいいけどな。
よし、アスカちゃんに訊くか？」
「そうだな」
ホウセイと木太郎の二人は、
みんなの待つ部屋に行くと、
今度はアスカだけを連れだした。
このときも誰も何もいわなかった。

二人はアスカを前にいた部屋に連れていくと、
アスカの方から、
「結局、
あたしかチウメのどちらかが疑われているのね。
みんな、そんな感じの雰囲気だから、
あのヒトメでさえ話しをしないの。
でも、
あたしじゃないわ」
と少し興奮気味に話しだしたので、
「落ちついて、
俺も木太郎も、
二人が犯人だとは思っていないよ。
でも、
二人が重要なことを知っていて、
でも、
気づいてはいないみたいだから、
慎重に話しを聞いているだけなんだ」と、
ホウセイがにこやかに話すと、

「それ本当なの？」
「本当さ」
アスカの言葉に、
横から木太郎が口を出して笑った。
「なら、
少し安心したけど、
重要なことって？」
アスカの方からまた話してきたので、
「ああ、
それはこれから話すけど、
まずは質問に答えてくれるかな。
アスカちゃんは、
何故、
チウメちゃんの部屋に演劇用の偽物のナイフが置いてあったこと
を知ったの？」
と
ホウセイはアスカの顔をにこやかに見てから、
そう訊いたのだった。

「アスカの回答」

ホウセイの質問に、
「チウメが、
何て言っているかしらないけど、
チウメが言っていたことね。
実は、
２０７号室に泊められた後、
ヒトメとアユメの二人
を驚かしてやろうと思って、
あたしが演劇用のナイフを使って、
自殺のフリをしたの。
そうしたら、
ヒトメもアユメも本気になって、
あたしに飛びかかってきたから、
チウメが、
アスカに騙されちゃダメよ
とか、
それは演技よ、
とか、
その辺ははっきり覚えていないんだけど
そんなことを言って、
二人を止めてくれたのよ。
それで、
その後、
チウメがあたしのナイフを見て、
あんたも前回の演劇部の合宿の際、
使ったナイフをスーツケースに

入れっぱなしにしたの、
とかそんなことを話してきたので、
そうじゃなくて、
あたしは護身用に
いつも持ち歩いているって話しただけ。
それだけよ。
くどいけど、
チウメがなんと言おうと、
それが真実」
アスカがそこまで話すと、
「やっぱり！」
と
木太郎が、
鼻をほじりながら笑ったので、
「えっ？
チウメも正直に話してくれたの？
でも何であたしを疑ったのかしら？」と
アスカは少し驚いたように言った。
「そうか。
二人とも今の話しの重要性には
気づいてないんだね。
もう少し、
質問を続けさせてくれるかな」
ホウセイは笑顔でそう言った。

「アスカの回答2」

「あのさあ、
自殺の演技をした場所はどこか、
覚えてる？」
ホウセイが訊くと、
「食堂よ」
と
アスカは即答する。
「じゃあ、
そこに誰がいたか覚えてる？」
「そうねえ？
アユメとヒトメとチウメ。
それだけはたしか。
さっきも話したけど、
あたしが脅かそうとしたのは、
アユメとチウメで、
真に受けた二人を止めてくれたのが、
チウメだから」
「ふーん、他には？」
「えー・・・」
「まず、レイカちゃんは？」
「覚えていない」
「もとこは」
「いないに決まってるでしょう」
「そうだね。
もとめ先生は？」
「うーん、覚えていない」

「じゃあ、男子は？」
「いなかったんじゃないかな？」
「うーん、そうか？」
「じゃあ、チウメちゃんから、
チウメちゃんもナイフを持っていると聞いたときは？」
「それも覚えていないの。
二人だけだったような気もするし」
「場所は？」
「キッチンだったと思うけど、
後かたづけしていたときにチウメから話しをされたから」
「うーん？　そうか・・・」
ホウセイとアスカが話しをしていると、
「あのさ、チウメちゃんと話しをしたのはいつ？」
と
横から口を出す。
「それは、
あたしが自殺の演技をした後、しばらくだと思うけど」
「それから、
その前後で、
チウメちゃん以外と、
例の演劇用のナイフ
をアスカちゃんが持っていることを話したことがある？」
「うーん？
誰だったかなあ。
あの後、何で、そんなナイフ持ってたの
ってたしか訊かれたのよね。
それもそうよね。
普通は持ち歩かないから。
それで護身用って答えた気がするけど」
アスカがその人物を思い出すようにしていると、

「ゆっくり思い出してくれる？」

と

木太郎は言ったのだった。

「アスカの記憶」

「どうして、
そんなつまらないこと
を思いださないといけないの」
アスカには、
木太郎の質問の意味がわからなかったのか、
はっきりと訊いた。
「それはね。
今は秘密。
とにかく、
そのとき誰かいたか思いだしてよ。
アスカちゃんは凄く頭がいいだろ」
木太郎が、
アスカをおだてるように言うと、
「アユメ、ヒトメ、チウメ、
あと二人いたんだけど・・・
うーん?」
「二人?
なら、女子なの?」
「ううん?
男子が一人。
えーと・・・」
「俺とホウセイじゃないよな」
「違う。
えーと・・・」
アスカは、
木太郎とホウセイが答えを待つかのように、

じっと見つめて自分の答えを見つめていたので、
必死で思い出そうとしていたのだった。

「アスカの記憶2」

アスカは、
しばらく考え込んでいたが、
思い出せないようだったので、
ホウセイが、
「じゃあ、こう質問しよう。
アスカちゃんは、
例の自殺の演技の後、
何で、そんなナイフ持ってたのって、
訊かれたんだよね」
「それは間違いないと思うけど」
「ということは、
それを訊いた人物は、
アスカちゃんが
自殺のフリをしたときの現場にいたことになるよね。
違うかな?」
「まあ、そうなるわね」
「でも、
そのときにいた人物と
自殺のフリをしたときにいた人物は違うんだよね。
たしか、
自殺のフリをしたときは男子はいなかった
とアスカちゃん答えたから。
どうかな?」
「うーん・・・
たしか、
別の機会に、

あたしの自殺の演技の話しが出て、
そのときに、
どうしてそんなナイフ持っているのって訊かれて、
その場にいた人たちに見せた
と思うんだけど・・・
あまりたいしたことだと思ってないから、
そこはよく覚えていないのよ」
アスカは本当に覚えていないようだった。
すると、
「ねえ、そのときさ。
チウメちゃんも同じナイフ持っている
って話し出なかった?」
と、
木太郎が横から口を出すと、
「あー、そう言えば、その話しはしたような気もするけど・・・」
アスカがまた何か思い出そうとすると、
「ねえ、
そのとき、
チウメちゃんが似たようなナイフ
をどこに持っているか話しでなかった?」
と
今度はホウセイが訊くと、
「うーん?
たしか、
あたしとチウメは同じ演劇部だから、
チウメも持っていると話した気はするけど、
場所はどうだったかな?
あっ!　そうか。
もし、
あたしがそのことを誰かに話していたら、

聞いた人物もあたしと同じで、
チウメのナイフの存在と場所を知っていたことになるのね」
アスカはようやくホウセイたちの質問の重要性に気づくと、
「ホウセイくん、木太郎くん、
あたしの記憶は今話した程度だから、
アユメとヒトメに訊いた方が早いんじゃない？
あの二人が、
あたしが自殺するフリをしたとき、
いたのは間違いないから」
と、
アスカは話したのだった。

「絞られる犯人」

ホウセイが、
「たしかに、そうだね。
問題はどちらから話しを訊くかと、
できれば、
俺としては、
さりげなく訊きたいんだな。
犯人だけはこの話しをすると、
すぐ何が問題だったのか、
すぐわかるハズだからね。
だから、
アスカちゃん、
俺たちがこれからすぐ送って行くから、
あの部屋に戻っていてくれる。
多分、
何も訊かれはしないと思うけど、
何を訊かれたかは答えないようにね。
それで、
俺と木太郎は、
いったんここに戻って、
誰から話しを訊くか相談するから。
ヒトメちゃんか、
アユメちゃんから訊くのが本当かもしれないけど、
場合によっては、
チウメちゃんのナイフの話しが出たときには、
男子も一人いたってことだから、
男子から訊いてもいいし。

全員、
順番に話しを聞いてもいいからね。
この辺は木太郎と相談して決めるよ」と
長々話しをすると、
「あたしも今の話しを聞いて、
何が重要なポイントか理解できたから、
よく思いだしてみる」
アスカは自分の容疑が晴れたと安心したのか、
笑顔でそう話した。

そうして、
ホウセイと木太郎はアスカを他の生徒の部屋に送っていくと、
また、
二人だけで、
その部屋をすぐ出ていった。
そして、やはり、
このときも誰も何も言わなかったのだった。

木太郎は、
前にいた部屋にホウセイと一緒に戻ると、
部屋の鍵を閉めてから、
「アスカちゃんのさっきの話しで出た男子って、
まさか、おちたじゃないよな」
と
鼻をひくひくさせながら真顔で言ったのだった。

「絞られる犯人2」

「オチタか・・・
うーん・・・
あいつだとしたら、
俺の提案を利用してもとこを殺したことになるが・・・
あいつの性格を考えるとな。
それに、
あのあとのこととかも含めると、
全部芝居だったとは、
俺には信じられない。
それに動機が・・・」
「動機はもとめ先生を助けることと、
皆殺しを防ぐためさ」
「でも、
もとめ先生は自殺してしまったし、
俺たちがもとこを縛り上げた後に、
あいつは俺たちと一緒にいたんだから、
ナイフをすり替えたことや、
オオシマともとこのやりとりを
正直に俺たちに話してくれてもいい
と思うんだよな。
それに、
ナイフをすり替えておいて、
自ら手を下すとはな。
少しマヌケだろ」
「うーん。
たしかに、

自分の手でもとこを殺したのは気になるが、
あいつなりに何か考えがあったのかもしれないしな」
「そうかな？
俺はヒトメちゃんの方が怪しいと思う」
ホウセイが木太郎の推理と違うこと
を言うと、
「あのヒトメちゃんこそ、
性格的にも頭的にも無理だろ。
それに、
ホウセイの提案までは想定できないはずだぞ」
「いや、
ヒトメちゃんの性格と頭から考えて、
そう思ったんだ。
何かの理由で、
もとこの部屋に入って、
もとことオオシマの計画を知ったヒトメちゃんはまず凶器を探し、
例のアスカちゃんの芝居のことを思い出し、
深く考えず、
一時しのぎのため、
ナイフをすり替えたってこと」
「うーん？
説得力がないな」
「いや、
俺がヒトメちゃんを疑った理由は、
もとめ先生が、
ヒトメちゃんと二人きりになったときに死んだことなんだ。
もしかして、
ヒトメちゃんは、
もしかしたら、
もとめ先生だけにその事実を話したんじゃないのかな。

それで、
もとめ先生が罪を被ろうとして、
自殺したんじゃないのかな？」
「うーん？
それも、
何かしっくりこない推理だよな」
「でもな。
犯人は絞られてきているんだ。
アスカちゃん、
チウメちゃん、
そして、
アユメちゃん、
ヒトメちゃん、
俺たち以外の男子に、
もうひとりの女子。
でも、
話しを聞いた限り、
アスカちゃんとチウメちゃんは犯人ではない。
そうするとな」
ホウセイは木太郎が首を傾げているにもかかわらず、
ヒトメがナイフのすり替え犯だと考えているようだった。
「じゃあ、
とりあえず、二人が犯人だとは考えていないアユメちゃんから、
話しを聞くか？」
木太郎が鼻をほじりながら言うと、
ホウセイは黙って頷いた。

「アユメの話し」

ホウセイと木太郎が、
アユメたちが待つ部屋に行き、
今度はアユメだけを連れだした。
やはり、
このときもみな黙り込んだままで、
何故、アユメだけを連れ出すのかさえ、聞く生徒はいなかった。

ホウセイが元いた部屋に戻り、すぐ扉を閉めて鍵を閉じると、
アユメが、

「アスカかチウメのどちらかが犯人なの？
それとも、
二人があたしが犯人だと言ったの？」
といきなり訊いたのだった。
「ごめん。
変な心配させて。
別にアユメちゃんが
どうのこうのって話しじゃないんだな。
ただ、
事実関係を確認するだけなんだ」
「そうなんだよ。
アスカちゃんもチウメちゃんも
記憶のはっきりしていないところがあって、
そのすりあわせをしているだけなんだ」
ホウセイに続き、

木太郎もそんな話しをすると、
アユメはほっとした表情をして、
「それなら良かったけど、
やっぱり、
二人のどちらかが犯人なの？」
と訊いたので、
「うーん？」
ホウセイが木太郎の方を見ると、
「実は違うみたいなんだな。
まあ、そのことは後で話すから、
先にホウセイの質問に答えてくれるかな」
と
木太郎は笑いながら言ったので、
「そうだったんだ。
なら、どうぞ」
アユメは少しだけ不思議そうな表情をして、
そう言った。
「ねえ、アユメちゃんは
アスカちゃんが自殺未遂の演技をしたの覚えてる？」
「あー、アレね。
覚えてるけど、それが事件に関係あるの？」
「うーん、
関係ないとは言えないんだ。
それでさ、
そのとき、
その場に誰がいたか、
覚えている？」
「あたしとヒトメがびっくりして、
飛びかかっていったところを、
チウメが、

アレはアスカ特有のお芝居よとか言って止めてくれたから、
その3人だけじゃないかな？」
「じゃあ、4人だけだったの？」
「うーん？
そう言われると、
断言はできないけど」
と
アユメはやはり記憶がないらしく、
ただ首を傾げるだけだった。

「アユメの話し2」

「じゃあ、
他に誰かいたのかは記憶ないんだ。
それはそれでいいけどさ、
次に、
チウメちゃんが、
そのとき、
何故、
アスカちゃんの自殺が演技だ
と見破ったのかわかる？」
と
ホウセイが訊くと、
「あー、
それはチウメが演劇部だからでしょ。
たしか、
アスカと同じナイフを持っているとか、
アスカが話していたわ」
アユメは、
何故そんなことを訊かれるのかわからない
という表情でそう答えた。
「アスカちゃんからその話し訊いたの？」
と
ホウセイがわざとそういう言い方をすると、
「うーん？
誰かが、
アスカに何であんな偽物のナイフを持っていたの？
とか、

そんな風にアスカに訊いたのよ。
それで、
アスカがチウメもこの合宿に同じ型のナイフを持ってきているとか、
そういう話しが出ただけなんだけど」
「誰かが？
アスカちゃんに訊いたんだ。
ということは、
じゃあ、アスカちゃんとアユメちゃんの二人だけで話したわけじゃなかったんだね」
「そうね。
食堂で、
アスカの自殺の演技でびっくりしたって、
ヒトメと話していたときに出た話しだから、
他にも誰かいたわよ」
「じゃあ、
ヒトメちゃんがアスカちゃんに偽物のナイフを持っているか訊いたワケ？」
「ううん？
ヒトメじゃないわね。
うーん？　誰だったかなあ・・・」
アユメは首を傾げている。
「あのさ、
さっきアユメちゃんは、
アスカちゃんが自殺をするフリをしたとき、
その場にいたのは、
アユメちゃん、
ヒトメちゃん、
チウメちゃん、
それに張本人のアスカちゃんだけだって話してたよね。

だとすると、
さっき、アスカちゃんが何故演劇用のナイフを合宿に持ってきたのかを訊いた人物は、
消去法から、
ヒトメちゃんになるんじゃないの？」
と
木太郎が横から口を出したのだった。
これに対し、
ホウセイが、
「いや、アユメちゃんは
例のアスカちゃんが自殺する演技をした際、
他にも誰かいたかもしれないと話していたから、
その誰かがさっきの話しを切りだしたかもしれないぞ」
と言ったのだった。

「その場にいた男子生徒」

「なるほどね。
じゃあ、話しを戻すけど、
何故、
アスカちゃんが偽物のナイフ
を持っていたのか訊いたのって、
男だったか、
女だったか覚えてる？」
と、
木太郎もホウセイの話しを聞いて納得し、
そう訊くと、
「女子だったと思うけど、
じゃあ、レイカだったのかなあ？
でも、この話しが何で重要なの？」
アユメは、
まだこの話しの重要性に気づいていないので、
何故、
こんなつまらないことを訊かれるのか
といった表情をして答えた。
「レイカちゃんか？
生徒なら、もういないからねえ。
例えば、
もとことか、
もとめ先生だったってことはない？」
今度はホウセイが訊くと、
「もとこはありえないし、

普通に話しをしていたと思うから、
もとめ先生じゃなかったような気もする。
やっぱり、
レイカだったかな？」
アユメの答えはやはり曖昧だった。
「で、
その場に他に誰かいなかった？」
と
ホウセイが訊くと、
「話しをしていたわけじゃないけど、
食堂に先に来ていた永久くんが
サイダーかなんか飲んでいたから、
話しを聞いていたかもしれないわね」
と
アユメが新たな証言をしたのだった。
「そう。
永久か？
で、他に男子は？」
「永久くんだけだったんじゃないかな？」
アユメはそう答えたのだった。
そして、
ホウセイと木太郎は顔を見合わせて、
アユメに
「ありがとう」
と言うと、
アユメをみんなの部屋に戻すと、
入れ替わりに、
ヒトメを元いた部屋に連れてきたのだった。

「ヒトメの話し」

ホウセイが部屋の鍵を閉めると、
チウメ、アスカ、アユメと違って、
ヒトメは少し警戒しているようで、
ただ、
黙ったまま立っているだけだった。
「別に、
ヒトメちゃんを疑って、
ここに呼びだしたわけじゃないから、
そんなに緊張しないでいいから、
そこのベッドの上でも腰かけなよ」
ホウセイが笑顔で言うと、
「本当なの？」
とだけ言って、
ヒトメは、
ベッドの上にゆっくり腰掛けた。
「あのさあ、
アスカちゃんが自殺未遂の演技
をしたこと覚えている？」
ホウセイは早速質問した。
「えっ？
もちろん、覚えているけど、
それが今回のことと関係あるの？」
ヒトメもいきなりそんなことを訊かれて、
きょとんとした顔でホウセイを見た。
「質問の理由は後でみんなのいるところで、
説明するから、

とりあえず、
これからする僕の質問だけに答えてくれないかな」
と、
ホウセイがまた笑顔で言うと、
ヒトメは黙って頷いた。
「えーと。
そのときさ、
一緒にいたのが誰か覚えている？」
ホウセイが簡単訊くと、
「女子全員だと思うけど」
と、
ヒトメは他の3人と違って、
すぐ即答した。
ホウセイが、
わざと、
「じゃあ、
もとこともとめ先生もいたんだ」
と訊くと、
「あー、ごめんなさい。
女子って、女子生徒だけ」
と、
ヒトメは、
別に答えは間違っていないのだが、
そう言って軽く頭を下げた。
「じゃあ、
ヒトメちゃん、アユメちゃん、アスカちゃん、
チウメちゃん、レイカちゃんの5人がその場にいたんだ」
と
今度は木太郎が横から口出すと、
「そう」

ヒトメはそれだけしか言わなかったが、
自信のありそうな口ぶりだったので、
ホウセイは理由を訊かず、
「そのときさ、
誰が最初にアスカちゃんの演技だ
と見破ったの？」
と次の質問をした。
「チウメよ。
彼女もアスカと同じ演劇部だから、
すぐわかったらしいの。
あたしとアユメは、
もうびっくりして止めよう
と思ったんだけどね」
ヒトメはそうはっきり答えたところ、
ホウセイは少し考えて、
「でもさあ、
チウメちゃんも、
演劇部だからといって、
そんなに簡単に、
アスカちゃんの自殺未遂の演技に気づいたのかな？」
と訊くと、
「それは、
あたしとアユメはすっかり騙されたから、
最初はチウメは凄いなあ
と、
あたしも思ったんだけど、
たしか、
そのときか、
その後で、
チウメも同じナイフを持ってきてる

って、
アスカが話していたから、
ナイフを見て気づいたんじゃないかな？」
と、
ヒトメはあっさりと答えたのだった。
「ナイフで見破ったのか？」
木太郎が呟くように言うと、
「チウメは何て言ってるの？」
と、
逆に、
ヒトメが木太郎の方を見て、
聞き返したので、
木太郎は少し考えて、
「それはね。
アスカちゃんの表情でわかったんだってさ」
と、
曖昧に答えたのだった。
「ふーん」
ヒトメは、
ただきょとんとした顔でそれだけしか答えなかった。
そこで、
ホウセイが、
「あのさ、
アスカちゃんが、
チウメちゃんも演劇用のナイフを持ってきてるからって、
話したって言ったよね？
それって、
自殺未遂の演技をアスカちゃんがしたとき、
それとも、
もっと後？」

と訊くと、
ヒトメはこのときは少し考えて、
「うーん？
そこはあたしよく覚えてないの」
としか答えなかったので、
「じゃあ、時期はいいけど、
その話しをしたのはさっきの５人だけのときなの」
と
ホウセイは訊いたのだった。

「次の話し」

ヒトメは
少し考えた後、
「ごめんなさい。
はっきりとした記憶はないの。
5人だけだったもするし、
違ったような気もするし・・・」
と言って、
また、考え込んでしまったのだった。
ホウセイは、
ヒトメにまだ質問したいこともあったが、
まずは、
アスカがチウメも演劇用のナイフを持っきてる
という話しをした現場に誰がいたのかを確認するのが重要だ
と考え、
木太郎の方を見た。
すると、
木太郎も、
これ以上この点について、
ヒトメに聞いても時間の無駄だと考えていたのか、
「ヒトメちゃん、
無理しないでいいよ。
結構、参考になったから」
と笑って言った。
こうして、
ホウセイと木太郎はまた顔を見合わせると、
ホウセイがヒトメに、

「ありがとう、参考になったよ」
と笑顔で言って、
ヒトメを、
みんなの部屋に連れて行ったのだった。
そして、
今度は、
永久をさっきまでいた部屋に連れだしたのだった。

ホウセイが、
その部屋に戻り、
また、
鍵を閉めると、
「何で？
俺が？」
と言って、
永久が、
自分の右手の人差し指で自分の顔
を指差したのだった。
「順番に話しを聞いてるだけだからさ」
ホウセイが笑って言うと、
「ああ、
女子の話はもう終わったからなあ」
と
永久は、
少し安心したようにそう言った。
そして、
早速、
ホウセイは、
永久に、

「アスカちゃんが自殺未遂の演技をしたことを知っているか？」
と質問したのだった。

「永久の話し」

「アスカちゃんの自殺未遂騒動か？」
永久が、
すぐそんな答え方をしたので、
「自殺未遂騒動？」
ホウセイが首を傾げて言うと、
「俺が、
食堂で
サイダーをたまたま飲んでいたとき、
アユメちゃんたちが
そんな話しをしてたんだよ。
横の方で話しをしていたので、
詳しくは覚えてないんだけど、
以前、
アスカちゃんの自殺をしよう
としてびっくりしたら、
それが演技だったんだけど本気だ
と思って、
凄くびっくりしたとか、
そんな話しだったな。
でも、
そんなくだらないことが
今回のことに関係あるのか？」
永久がすぐ答えると共に、
ホウセイの方を見て聞き返す。
「今回のことにどう関係するかは
後でみんなの前で話すから、

質問を続けさせてくれ。
それでさ、
その話しを永久が聞いたとき、
その場に誰がいたか覚えている？」
「うーん？
そう言われてもなあ？
女子全員いたような気もするし・・・」
永久が思い出そうとして、
そこで口籠もったので、
「じゃあ、こう訊こうかな。
まず、もとこはいたか？」
ホウセイが名前をひとりづつあげて
聞き始めた。
「いないって。
女子って、俺言っただろ。
もとこともとめ先生がいなかったのは
間違いないよ。
５人全員いたか、
もっと、
少なかったかのどちらかだ
と思うんだけど・・・」
永久はそこまで答えて、
また、
黙り込む。
「そうか。
じゃあ、アユメちゃんは？」
「いたのは間違いないな。うん」
永久はアユメがいたことは覚えていた。
しかし、
「じゃあ、チウメちゃんは？」

「うーん？」
「じゃあ、レイカちゃんは？」
「うーん？」
「頼りないなあ。
じゃあ、アスカちゃんは？」
「うーん？」
「最後にヒトメちゃんは？」
「うーん？」
結局、
永久は名前をひとりづつ訊かれても、
アユメ意外は首を傾げて、
同じ言葉を繰り返すだけで、
実際、
アユメ以外に、
誰がその場にいたのか覚えていないようだった。
そこで、
「じゃあ、そのとき、
他に何の話しが出たか、覚えているか？」
と
焦れったそうに木太郎が横から訊くと、
「うーん？
正直、さっき答えた程度しか覚えてないんだよ」
と
永久が答えたので、
「本当、使えないな」
と言って、
木太郎が鼻をほじったので、
ホウセイが、
「そのときなんでもいいから、
ナイフの話しは出なかったか」

と訊くと、
「ああ、
それは、
アスカちゃんが使ったナイフは
ナイフが演劇用の偽物だったんだろう？
でも、
そのナイフは今回の件には関係ないんじゃないのか？」
と
永久がまたホウセイに聞き返したので、
ホウセイは少し考えてから、
木太郎の方を見たのだった。

「永久と残った男子の話し」

「関係ないと言えば、ないけど、
いいから、俺たちの質問に答えろよ。
永久、アスカちゃんが自殺する演技に使ったナイフが
演劇用の偽物だと知ったのはどうしてだ？」
横から木太郎が聞くと、
「たしか、
そんなナイフを合宿に持ってくるなんて、
趣味悪いわねとか女子の誰かが話していたんだよ。
それに対して、
アスカちゃんが護身用とか言っててさ、
くだらないから、
余りよく話しは聞いてなかったんだよ」
永久が即答すると、
「他には何か話し出なかったか？
例えば、
チウメちゃんのナイフのこととか」
今度はホウセイが聞くと、
「うーん？
覚えてないなあ。
女子たちふざけて話していた感じだったからな。
でも、
何で、
アスカちゃんのナイフが今回の件と関係するんだ？」
永久は首を傾げたまま、
そんなことを言ったので、
ホウセイは木太郎の方を見ると、

「ありがとう。
もう、いいや」
と
永久に言った後、
また、
他の生徒が待機する部屋に永久を連れて行くと、
全員から事情を聴いているところだと言って、
おちたを元いた部屋に呼びだしたが、　おちたは、
やはり、
アスカが自殺のフリをしたことさえ、
知らないと答えたので、
木太郎が適当な質問をして、
くそたと交代させて、
最後に、
くそたに、
アスカの自殺の演技のことを訊いたが、
やはり、
おちたと同じで、
そんなことは知らない
と
くそたは答えた。
そこで、
ホウセイは木太郎の顔を見て、
この後、
どうしようかという表情をすると、
「二人よりは、
くそたでも、
いた方がマシだ」
と
木太郎がいきなり言いだしたので、

「オレでもいた方がマシ？
なんだ、それ？」
「いや、
1本の矢より3本の矢とか言うじゃない」
木太郎は、
くそたの顔つきが恐くなっていたので、
鼻をひくひくさせながら、
笑いながら言うと、
「実は、
今、俺たち、完全にどつぼにはまっているんだ。
結構、
いい線までいったとは思ったんだけど、
みんなの記憶が曖昧で、
そこからまったく進展していなんだよ。
これまで、
俺たちが推理した内容を、
これからホウセイに簡潔に話してもらうから、
くそたの斬新な意見が訊きたいんで、
よろしく頼むよ」
木太郎は、
さっきはマシだと言ったくせに、
今度は調子よく斬新な意見をと言って、
くそたをその気にさせた。
ホウセイは、
肝心なことは他人任せにするのが
木太郎の元来の性格だとわかっていたので、
少しも不愉快に思わず、
「じゃあ、
俺からこれまでのことをまとめる」
と言って、

くそたに、
簡潔に、
事情聴取の結果と二人の推理を話したのだった。

「くそたの推理」

くそたは、
ホウセイから話しを聞くと、
「要するに、
まず、
ナイフがすり替えられた時期は、
木太郎たちがもとこを縛り上げる前だった
ということだな。
次に、
ナイフをすり替えた犯人は、
もとこがベッドの下にナイフ
を隠し持っていたことを知っていて、
かつ、
チウメちゃんが演劇用のナイフをこの合宿に持ってきて、
自分の部屋に置いてあるスーツケースの中に入れてあったこと
を知っていた人物である。
ということだな。
ここまではいいな」
とホウセイがまとめた話し
をさらに要約して話した。
「くそた、ホウセイのさっきの説明から
よくそこまでまとめたな」
木太郎が少し感心したように言うと、
「実は、
今の話しは、
あの不気味な沈黙が続く部屋で、
俺がそうではないか

と考えていたとおりの推理内容だからだよ。
少し前に、
気づいたんだが、
木太郎たちの最初の話しだと、
もとこのナイフをすり替えるチャンスが
まったくないからさ」
くそたが少し自慢げに話すと、
「うーん・・・
俺たちも、
もっと早く気づくべきだった。
そうしたら・・・」
ホウセイは、
レイカがくそたに殴られないで済んだと言おう
として口籠もった。
「わかってるよ。
俺ももっと早く気づいていたら、
レイカちゃんを殴らないで済んだかも
しれないからな。
済んだことはしょうがないから、
次、行くぞ。
で、
まず、
もとこのナイフの存在については、
犯人が何らかの理由で部屋に入って、
例の無線機を発見したときに見つけたというのが
二人の推理だな。
それから、
チウメちゃんのナイフの存在については、
チウメちゃん本人、
アスカちゃん、

の二人は確実に、
ヒトメちゃん、
アユメちゃんの2人は
かなりの高確率で知っていた。
知っていた可能性が高いのが、
レイカちゃんで、
知っていたかもしれないのが、
永久ということでいいな」
くそたはそこまで淡々と話すと、
「しかし、
俺には二人の推理には疑問なところがある」
と言って、
木太郎とホウセイの顔を順に見たのだった。

「くそたの推理と真実を解明した？木太郎」

「何だ？
俺たちの推理の問題点って？」
と言って、
木太郎が鼻をほじりながら、
くそたの方を見る。
「ああ、
二人の推理では、
もとこのナイフの存在を犯人が知ったのは、
犯人が何らかの理由で部屋に入って、
例の無線機を発見したすぐあとだ、
ということだろう。
つまり、
無線機の内容を盗み聞きとかして、
凶器がもとこの部屋のどこかにあるはず
と思って、
そのとき探し出したということだよな」
くそたがそこまで話すと、
二人とも黙って頷く。
「でも、よく考えてみろ。
無線機を見つけて、
その内容を盗み聞きした時点で、
普通なら動揺して、
誰かに相談しようと思うんじゃないか？
永久だって俺に話しをしたし、
ホウセイたちだって、
二人で相談したんだろ。

だったら、
もとこの部屋に入って、
無線機を見つけた犯人も同じこと
をしたんじゃないか？
もとこのナイフを見つけたり、
すり替えたりしたのは、
もっと後じゃないのか？
違うか？」
くそたがそこまで話すと、
「そうとも考えられるし、
その方が自然だな。
ということは、
今回のナイフすり替え犯には共犯がいる、
ということか？」
ホウセイがくそたの推理に
同調したような言い方をしたかと思うと、
木太郎が、
「なら、話しは簡単じゃないか！
俺にはすべての真相がわかったぞ！」
と
鼻をほじりながら偉そうに言ったのだった。

「木太郎の推理」

「木太郎、
今までこんなに苦労していろんな話し
を聴いてきたのに、
そんなに簡単に犯人がわかったのかよ」
と言って、
ホウセイが疑わしそう目で木太郎を見ると、
「ホウセイ、
そう言わずに木太郎の推理を聞いてから判断しようぜ」
くそたが笑いながら言うと、
木太郎はまた鼻をほじった後、
自分の推理を話しだした。
「俺もホウセイも、
今回の件は単独犯という思い込みがあったから、
苦労していたんだけど、
くそたが考えたように、
もう一人共犯というか、
協力者がいるなら話しは簡単なんだよ。
で、
早速、その二人のことを話すぞ。
まず、
ある人物は、
俺たちや永久のように、
もとこの部屋の前を通ったときに、
もとこの話し声を盗み聞きして、
その恐ろしい計画に気づいてしまった。
そこで、

くそたが考えたように、
その話しをもうひとりのある人物に話しをした。
そこで、
話し合った結果、
二人は、
まず、
凶器を探し出し、
それを取り除こうとし、
もとこの部屋に行き、
凶器となりそうなものを探し出した。　多分、
実際にもとこの部屋に入ったのは一人で、
もう一人が見張り役だったと思うけどな。
で、探し出し、持ち出した凶器は、
例の本物のナイフだったが、
そのうちの一人は、
既にそのナイフに
そっくりなアスカちゃんの演劇用のナイフを目撃していたので、
そのことと、
チウメちゃんが、
アスカちゃんのナイフにそっくりなナイフを部屋に置いてあること
を知っていたので、
そのことをもう一人の人物に話した。
そこで、
二人は、
いろいろ話し合った結果、
そっくりな二つのナイフをすり替え、
合宿最後の日に、
もとこが
実際にそのナイフを使って犯行に及んだ時点で、
正当防衛で、

もとこを殺す計画を立てた。
しかし、
俺たちが先にもとこの計画を知り、
もとこを縛り上げたので、
二人はそれ以上何もできなくなった。
これがナイフすり替えの真相さ。
さて、
問題の二人の人物だけど、
俺が考えたのは、
一人は、
もとこの部屋に入っても不自然ではなく、
また、
俺たちが見つけられなかったナイフ
を簡単に見つけられた人物で、
かつ、
最悪、
もとこを殺すことに躊躇を覚えなかった人物だ。
そして、
もう一人は、
もとこの計画を盗み聞きした人物で、
チウメちゃんが偽物のナイフを部屋に置いていること
を知っていた人物なんだ。
で、
その二人の人物なんだが」
と
木太郎がそこまで話すと、
「そうか！
あの二人だったのか」
と
ホウセイは木太郎の話をそこまで聞いた時点で

そうつぶやいた後、
「そうなら、
うーん？
木太郎、
くそたは
まだその二人の人物が誰かわかってないかもしれないが、
この段階で、
俺から提案したいことがある」
と言って、
木太郎とくそたの目を交互に見たのだった。

「ホウセイの提案」

ホウセイの話したことに対し、
くそたが、
「俺にも二人の見当はついたよ。
それから、
ホウセイが提案したいこともな。
ただ、
その提案を実現するには、
いくつか問題があると思うな」
と言うと、
木太郎が、
「本当にわかっているのかよ？」
と
くそたのことを疑るような目で見たので、
くそたは木太郎の耳元で何か囁いた。
「あー、くそたもそう思ったか」
木太郎は鼻をひくひくさせながら、
意外そうな顔をした。
「どうやら、
ここにいる3人は真相に気づいたようだな。
で、
くそた。
俺が提案しようと思っていることの問題点って、
なんだよ」
と
ホウセイが訊くと、

くそたは少し考えて、
「木太郎は顔に出るからな」
と言ってから、
「まず、ホウセイにだけ話したい」
と言いだしたのだった。
すると、
木太郎は、
「わかった。
俺は部屋の隅にいってるから、
二人でこっそり話してくれ」
と言って、
意外にも素直にくそたの意見に従い、
ゆっくりと部屋の隅に歩いて行ったのだった。

「ホウセイの提案に対するくそたの疑問」

木太郎が部屋の隅に行くと、
くそたが、
「共犯の一人はもとめ先生なんだろう！
だから、
前にアスカちゃんが提案したように、
もとめ先生がもとこを殺して自殺したことにしよう
と提案するつもりだったんだろう。
もう一人のすり替え犯は一切追及しないで。
でも、
それには、
前みたいにオチタが絶対反対するし、
オチタがそのとき指摘したように、
もとこを殺害したナイフに
もとめ先生の指紋をつけることが不可能な以上、
無理だって」
ホウセイの提案を察して、
自分の考えを言う。
「くそたも気づいていたか。
でも、
オチタには俺たちから真実を話す。
多分、
真実を聞けば、
オチタも納得するだろう。
それから、
ナイフの方は、

もとめ先生が自殺に使ったナイフをもとこを殺した凶器にする。
それなら、
もとめ先生の指紋がついてるから」
「指紋の方はいいけど、
もとこの血の方はどうするんだよ」
「みんなの意見がまとまれば、後からつける」
「つけるっていっても、
もう、血が固まっているぞ」
「もとめ先生が、
いったん、
もとこの血を拭いたことにすればいいから、
どうにかなると思うけどな」
「うーん？
それから、真相を公表しないで、
もう一人は何故庇う」
「木太郎は、
すり替え犯人二人は、
正当防衛でもとこを殺すことまで考えていたと推理したが、
俺はそこまで考えていなかったと思うし、
もし、
木太郎の言うとおりだとしても、
俺たちを守るために考えたことだからな。
それに、
これは俺の保身だが、
姉妹喧嘩の上の殺人ということにするのが
一番俺たちにはいいと思う」
ホウセイがそこまで話すと、
くそたは腕を組んで考え込んだのだった。

「くそたの考えるすり替え犯二人」

「俺の提案には納得できないのか？
くそた」
ホウセイが考え込んでいるくそたに訊く。
部屋の隅から、
木太郎も鼻をほじりながら、
二人の方をちらちら見ていた。
「うーん・・・
その前に、
すり替え犯二人の話しなんだが、
木太郎の話しから考えても、
実際、自殺したことから考えても、
俺も、
一人はもとめ先生でほぼ間違いない
と思うけど、
もう一人は、
俺とホウセイたちが考えている人物
とは違うんじゃないかな。
二人が考えているもう一人の人物は、
ヒトメちゃんだろ。
違うか？」
くそたの質問に、
ホウセイは、
「たしかに、そうだが、
くそたはヒトメちゃんじゃない
と思っているのか？」
と

逆にくそたに聞き返す。
すると、
「たしかに、
怪しいといえば怪しいが俺は違うと思う。
いいか。
ある意味、
もう一人の人物は、
チウメちゃんの部屋に偽物のナイフがあること
を知っていれば、いいワケだろう。
だから、
候補は他にもいるはずだ。
それなのに、
ホウセイも木太郎も、
ヒトメちゃんだと考えたのは、
もとめ先生がヒトメちゃんと二人だけのときに
自殺したからだろう。
違うか？」
くそたの問いに、
「ああ。
だけど、
もとこの計画を知った時点で、
よりにもよって、
すぐもとめ先生に相談してしまう
という少し考えの足りないところも、
犯人像に該当するから、
俺はそう考えた。
それに、
同じ共犯だから、
ヒトメちゃんも安心して、
もとめ先生をひとりだけにして、

トイレに入れたんだと思うからな」
ホウセイは自信満々に答えたのだった。

「議論」

ホウセイが自信満々に答えると、
「今さ、
もとこの計画を知った時点で、
すぐ
もとめ先生に相談してしまうような考えの足りないところも
ヒトメちゃんが共犯だ
と考えた理由だと話したけど、
彼女がまず相談するなら、
アユメちゃん辺りなんじゃないの？
それに、
俺たちがヒトメちゃんの部屋に行ったときの怯え方
と言い、
木太郎が、
もとこが生きているかもしれないような嘘を言ったときに、
びびっていたのはとても演技には思えないからな。
第一、動機もない」
と、
くそたが反論すると、
「怯えていたのなら、
レイカちゃんもだろう。
それにもとこを実際殺したのは、
おちただし、
使われたナイフが誰のものかはわからないから、
もし、
レイカちゃんかチウメちゃんのどちらかから、
アレが芝居だと言うことを聞かされていたら、

ヒトメちゃんは、
もとこがまだ生きていると思って、
自分がナイフのすり替えをしたことの仕返しをされる
と考えて怯えていても当然じゃないかな。
ヒトメちゃんとチウメちゃんが最初に嘘の話しをしたのも、
何か別のワケがあるような気もするしな」
ホウセイがまた反論すると、
「あのさ、
おちたがもとこを殺したとき、
今、
問題になっているナイフのすり替え犯は、
アレを芝居だと思いこめたのか？
あのとき、
俺たちは二つのグループに別れていたから、
ホウセイたちもとこを殺害することに反対のグループ以外の俺たちは、
アレが実は芝居どころか、
おちたが使ったナイフが誰のものか、
今わかっている4本のナイフの中のひとつなのか、
それとも違うのかさえわかっていなかったんだぞ。
だから、
さっきもホウセイが話したように、
ヒトメちゃんはチウメちゃんかレイカちゃんから
アレが芝居だと聞かない限りは、
もとこは本当に殺された
と思って安心していたんじゃないのか？
だから、
一人でトイレにも行ったんじゃないのか？」
くそたがそこまで話すと、
いつのまにか、

木太郎が二人のそばまでやってきていたのだった。

「反論」

木太郎は二人の話を盗み聞きしていたのか、
焦れったそうに、
「だから、
チウメちゃんかレイカちゃんのどちらかが、
ヒトメちゃんに、
アレは芝居だから、
もとこはまだ生きている
って話したんだよ」
と
横から口を出した。
すると、
すかさず、
くそたが、
「じゃあ、
何故、もとめ先生は自殺したんだ?
もとめ先生が自殺するまで、
ヒトメちゃんと一緒にいたのなら、
ヒトメちゃんと同じで、
もとめ先生も、
チウメちゃんか、
レイカちゃんのどちらかひとりから、
アレが芝居だ
と聞いていたことになるんじゃないか!
でも、
もとめ先生は自殺した。

それは、
もとめ先生が自殺したときには、
アレがお芝居ではなく、
本当で、
もとこが既に死んだ
と確信していたから自殺したんだろう。
だとすれば、
ヒトメちゃんが、
アレが芝居だったと聞いたのは、
もとめ先生が自殺した後のことじゃないのか？」
くそたがそこまで話すと、
「あー、
俺の言い方が悪かった。
それはくそたの言うとおりで、
もとめ先生が自殺してしまった後になって、
初めて、
チウメちゃんが、
ヒトメちゃんにおちたのやったことは芝居だ
と話したんだ。
そのことも、
俺たちくそたに話してなかったけ？
だから、
芝居のことは、
もとめ先生が自殺するまで、
ヒトメちゃんさえ、
知らなかったんだよ」
と、
木太郎が弁解すると、
くそたが少し考え込んで、
「でも、それもおかしくないか？

いいか！
もとめ先生が自殺しようとしていたんだから、
それを制止するのに一番有効なのは、
アレがお芝居だった
と正直に話すことじゃないのか？
それなのに、
何故、
チウメちゃんもレイカちゃんもそのこと
をもとめ先生に話さなかったのさ。
殺人肯定派の俺やアスカちゃんたちがいないなら、
かまわないじゃないか？
ヒトメちゃんは別に殺人肯定派ではなく、
アユメちゃんとアスカちゃんに
無理矢理仲間に入れられただけなんだから。
その辺をどう考えるんだよ！」
といつものように大声を出して、
ホウセイと木太郎の二人に詰め寄ったのだった。

「探偵役失格？」

木太郎は鼻をひくひくさせながら、
「えーと、それは・・・」
と言ったきり、口籠もる。
「あの二人がナイフのすり替え犯じゃないなら・・・
芝居ならもとこは生きているわけだし、
おちたも・・・」
ホウセイも、
それだけ話して考え込むと、
「もとこは、
おたくらが縛り上げていたんだから、
もとこの仕返しを心配する必要はないんだし、
あの時点では、
もとこの計画ももうわかっていたんだから、
もとこの殺人さえ嫌がっていたあの二人にすれば、
もとめ先生の自殺を防ぐことだけを最優先に考えれば、
いいはずだろ！
だとしたら、
自殺を防ぐために、
アレが芝居でおちたがもとこを殺したわけじゃない、
と、
二人のどちらかが正直に話せば済むことじゃないか！
探偵役がそんなこと考えないでどうするんだよ！
失格！」
「えー？　失格？」
「失格？」
「だから、

二人とも探偵役失格だ！」
失格と言われて動揺している木太郎とホウセイを呆れたようにくそたが見る。
そして、
「これからは俺が探偵役で、オタクらは助手だからな！わかったな！」
木太郎とホウセイが何の反論も出来ず固まったのを見て、
ますます調子に乗ったくそたが、
そんなことを言いだしたのだった。

「新探偵役？」

「要するに、
二人とも詰めが甘いんだ！」
ケンタが偉そうに言う。
「まあ・・・」
「うーん・・・」
「もう一度、事実を整理するぞ！」
「えー・・・」
くそたの言葉に木太郎が声をあげると、
「犯人にたどりつかない以上、
見落としている点があるはずだ。
探偵はすべての事実から推理する」
くそたは完全に探偵気取りになっている。
「いいか。
まずは事実だけだ。
1，もとこを刺して殺したのはおちただ。
2，しかし、それはホウセイが言いだした芝居のつもりだった。
3，そして、その芝居に加担したのが、
木太郎、ホウセイ、おちた、レイカ、チウメだ。
ちゃんも探偵だからつけないからな。
4，そして、芝居に使う凶器はチウメの演劇用のナイフのはずだった。
5，しかし、実際に使われたナイフは本物だった。
6，本物のナイフを取りに行ったのは、レイカとチウメで、
そのナイフをおちたに手渡したのは、レイカだ。
7，本来ホウセイたちが芝居で使用するはずだったチウメのナイフの存在

を知っていた可能性のあるとはっきり言えるのは、
チウメ、アスカ、レイカ、ヒトメ、アユメ、そして、永久だけだ。
8、他方、
殺人に使われたナイフの存在を知っていた人間は・・・」
くそたはここで黙り込んだ。
「それは、
もとことナイフのすり替え犯だろ」
ホウセイが言うと、
「バカヤロー！
今、そのナイフのすり替え犯をしぼっているんだろ」
木太郎が偉そうに鼻をほじって言う。「待て！
続きは俺だ。
8、他方、殺人に使われたナイフの存在を知っていた人間の前に、
殺人に使われたナイフをもともと所持していたのは誰かは不明。
一見、
もとこのナイフが使われたように見えるがその事実は確認できていない。
9，ナイフは全部で4本。
本物は2本。偽物が2本。
そして、
偽物をこの合宿に持ってきたのはアスカとチウメ。
しかし、
本物を持ってきたのは、
多分、もとこともとめではないかということしかわかっていない。
10，もとめは死んだ。
それはおちたがもとこを刺したナイフ以外の本物のナイフによってだ。
11，アスカが所持していたナイフは、アスカが身に付けていたはずなのに、
もとこをおちたが刺した後、

俺の部屋に落ちていた。
12，ホウセイが芝居を思いついた後、ナイフがすり替えられた可能性がない
と考えた理由は、
それは、
チウメの部屋にあった偽物のナイフともとこの部屋にあった本物のナイフがすり替えられたと考えられたからだ。
ここまで、文句あるか！」
「ないけど・・・」
「うーん？」
木太郎もホウセイも黙り込む。
「いいか！
探偵は事実だけを信じる。
思い込みはダメだ！
ここで、
まだ、
調べていないことがわかっただろう！」
くそたは偉そうに言ったのだった。

「新探偵くそたとナイフについての仮説」

木太郎とホウセイが黙って頷くと、
「まずは、
もとこの方から考えるぞ。
そして、
凶器となったナイフと偽物のナイフについて、
整理する。
まず、
もとこを刺したのは今確認したようにおちただ。
で、おちたが使ったナイフを本物で、
それをおちたに手渡しのがレイカだ。
そして、
そのナイフを取りに行ったのは
チウメとレイカの二人で、
二人の話だと、
そのナイフがあったのはチウメの部屋だ。
しかし、
チウメの話しでは、
チウメの部屋にあったのは、
偽物のナイフだったということだ。
チウメとレイカの話しを信用すれば、
その二人がナイフを取りに行く前に、
既に偽物のナイフが本物のナイフに
すり替えられていたことになる」
くそたが当たり前のこと
をくどくどと偉そうに話し続けたので、

木太郎が思わずアクビをした。
「木太郎！　そういうたるんだ態度だから、いまだに犯人がわからないんだよ！　気合いを入れろ！」
「はーい」
「しょうがない奴だな。
問題はこの後だ。
まず、
今話した偽物のナイフはチウメのもので間違いないということでいいだろうが、
問題は本物のナイフの方だ。
本当に、
もとこが持ってきたナイフなのか？
この点、
誰も今まで疑った奴はいないが、その理由は？」
「それは、もとこの部屋で偽物のナイフが見つかったからじゃないのか？
なあ、木太郎」
「そうだよ」
「でも、
すぐ見つからなかったんだろう？」
「それはもとこの隠し方がうまかったわけで」
「無線機の方はすぐ見つかったのに、
ナイフの方はすぐには見つからない場所に隠していたということか？
普通は逆じゃないのか？
その辺はどうだ？」
くそたは偉そうにホウセイと木太郎の方を見たのだった。

「新探偵くそたの名？推理」

木太郎もホウセイもくそたの質問に
黙り込んだままだったので、
「いいか。
木太郎がもとこの部屋で見つけた演劇用のナイフだが、
アレは本当にもとこの部屋に最初から置いてあったのかな？
あれは、
実は、
アスカちゃんが落とした、
アスカちゃんのナイフじゃないのか？」
と
くそたは突然自分の推理を話し出す。
「えっ？
うーん？」
木太郎は考え込む。
「くそた、それはどういうことだ？」
ホウセイは首を傾げた後、
くそたに聞き返す。
「簡単なことだよ。
もとこの部屋には最初から本物どころか
偽物のナイフもなかったんだよ」
くそたは自信ありげに答える。
しかし、
木太郎もホウセイも、
二人ともくそたがいいたいこと
をまったく理解できないという表情で、
黙って考え込んでしまった。
「だから、

二人とも探偵失格なんだよ。
チウメちゃんのナイフとすり替えられたのは、
もとこのナイフじゃないんだよ」
くそたがまた話し出すと、
「えー？
なんだよ。
意味不明だな。
せっかく、
これまで推理してきたことが無駄になったじゃないか」
木太郎は何か自分なりに考えたのか、
鼻をひくひくさせながら、言い返した。
「だから、
二人とも探偵失格だ、
と俺はいったんだ。
いいか！
もとめ先生が最初に自殺に失敗したのは、
そのナイフが偽物だったからだろう。
でも、
おちたがもとめ先生を制止して、
殺す芝居をする前、
もとめ先生は
もとこをナイフで殺そうとしていた。
だから、
そのとき、
もとめ先生は当然ナイフを所持していたはずだが、
そのナイフは偽物だったということになるんだよ」
「ちょっと、
いきなり変なことをいいだすなよ。
わけわからくなってきたぞ」
木太郎がくそたの話しを聞いて、

鼻をひくひくさせながらそう言うと、
「こういうことだ。
おちたがもとこを刺したときのナイフが
それぞれどこにあったのかを考えればいいんだ。
まず、
おちたが本物のナイフを持っていた。
アスカちゃんが演劇用の偽物のナイフを持っていた。
もとめ先生が同じく演劇用の偽物のナイフを持っていた。
そこまではまず間違いないからな」
くそたは自信ありげに話すと、
木太郎とホウセイの顔を順に見た。
（続く）

「新探偵くそたの名？推理とナイフの所在」

「ちょっと、待てよ。
おちたが本物のナイフを持っていた。
それでもとこの胸に刺した。
これはまあいいな。
アスカちゃんが演劇用のナイフを持っていた。
これも、
もとこをおちたが刺したときまでは、いいだろうな。
で、
もとめ先生は・・・」
ホウセイがぶつぶつ自分で確認するように話しながら、
そこで口籠もった。
「うーん・・・
もとめ先生はもとこを刺すようなことを言って、
もとこの部屋に来たんだったよな。
あのときは・・・」
木太郎もそこまで話して、
あのときのことを思い出そうとする。
「あのとき、
俺たち殺人賛成派がもとめ先生にもとこの計画を全部話したら、
もとめ先生が俺たちと一緒にもとこの部屋まで来て、
もとこを殺してから自分も死ぬ気で、
二人だけにしてくれと言ったんだよ。
そこを
おちたの臭い芝居が始まったんだけど、
結局、

もとめ先生が自分先に死ぬから、
おちたに、
後で、
もとこ殺してとか、
何か理由をつけてそんなことを
もとめ先生が言いだしたんだよ。
そこで、
おちたが芝居のつもりでもとこを刺したんだ。
だから、
あの状況を考えると、
普通は、
もとめ先生自身は本物のナイフを持っていない
とおかしいんだよ。
だけど、
その後、
俺の部屋に連れていかれたときに自殺に失敗したわけだから、
実は、
あのとき、
もとめ先生が持っていたナイフも偽物だった
ということになるわけだ。
違うか？」
くそたはまた自信ありげに話したのだった。

「ちょっと、待てよ。
最後のところは違うんじゃないか？
興奮したもとめ先生
をくそたの部屋に連れていったときの混乱の中で、
もとめ先生の持っていたナイフと、
アスカちゃんのナイフが
くそたの部屋に落ちただけじゃないのか」
と、
ホウセイがくそたの推理に対し、
すぐ反論した。
すると、
「よりにもよって、
二人ともナイフを俺の部屋に落とした
というのか？
俺も、
最初は、
もとめ先生が、
俺の部屋に落としたナイフで自殺しようとしたが、
そのナイフはもとめ先生が落としたものではない、
偽物のナイフだったのかとも思ったんだが、
よく考えてみたら、
いくらあのときみんな混乱していたにしても、
場所を移動したにもかかわらず、
二人とも俺の部屋にナイフを落とすか？
どう考えても不自然だ。
むしろ、

実際は、
もとめ先生が
自殺に失敗したナイフは拾ったナイフじゃなく、
もともともとめ先生が持っていて、
あのとき、
つまりだな、
もとこを殺そうとしていたときに持っていたナイフだ
と考え直したんだよ。
違うか？
もとめ先生は
もとこを自らの手で殺そうとしたときには、
絶対にナイフを持っていたんだから、
自分が持っているナイフを使用した
と考えるのが自然じゃないのか？」
と、
くそたはホウセイの意見にすぐ反論した。
しかし、
「論理に飛躍があるぞ！
もとめ先生が
もとこを自らの手で殺そうとしたときにナイフ
を持っていた点まではいい。
でもな。
そこから、
そのナイフをくそたの部屋で落としていない
と言えるのか！」
「だから、さっき話しただろ！
あのとき、もとこの部屋のところから、
俺の部屋まで移動したのに、
もとめ先生だけじゃなく、
アスカちゃんまでナイフを俺の部屋に落とした

というのが不自然だ
と言っているんだよ」
「じゃあ、
訊くが、
実際に、
もとめ先生が自殺したときのナイフは誰のものだ
と言うんだ！
ナイフは４本あったんだぞ！」
くそたとホウセイが
言い争いに近くなったところで、
木太郎が、
「二人とも落ちつけ！」
と大声を出したのだった。

「新探偵くそたの名？推理と木太郎の推理」

「俺はくそたの推理はかなりいい線行っていると思うな」
と、
木太郎は鼻をほじりながら、偉そうに言った。
しかし、
ホウセイはナイフの数にこだわっているので、
「でも、
４本目のナイフはどう説明するんだ」
と先程よりは少し落ちついた感じで、
木太郎の方を見て、
くそたに言ったと同じようなことを言う。
「だから、待てと言ったんだ。
俺たちの思い込みは、
本物のナイフのもともとの所持者というか、
所在にあるんじゃないのか？
もとめ先生が、
本物か偽物かは別にして、
あのときナイフを持っていたことはほぼ間違いない。
そこまではホウセイもいいな」
「ああ」
ホウセイはそれだけ言って頷く。
「で、
問題はそれからだ。
俺たちは、
その前提として、
もとめ先生がそのナイフをこの合宿に持ち込んだもの
と考えていた。

しかし、
そもそも、
それが間違いのもとじゃなかったのか？
本物のナイフは、
もともとこの屋敷にあったものじゃなかったのか？」
木太郎がそこまで話すと、
くそたが急に何か思い出したようだった。

「4本目のナイフ」

くそたは、
「あっ！　そうだ！
俺が渡したナイフ！
ホウセイ、あれどうした？」
と言って、
ホウセイの方を見ると、
「あー。たしかに、俺、くそたからナイフを預かって・・・」
ホウセイはそこまで言うと、
黙り込んだまま、
何か思い出そうとしていた。
「何！
くそたもホウセイも、
何で、
そんな大事なこと忘れていたんだ！
4本目のナイフはそれかもしれないじゃないか。
それに、
そのナイフはどこにあったんだよ」
木太郎が大声を出して、
くそたとホウセイの方を見ると、
「俺は食堂で武器を探していて、
そこでナイフを1本見つけたんだけど、
それだけじゃ、
みんなの武器が足りないから、
外に武器を探しに行ったんだよ。
で、
そのとき、

そのナイフをホウセイに渡したんだ。
あのときは1本見つけただけだけど、
もしかすると、
屋敷の食堂には
本物のナイフが2本あったのかもしれないな。
となると・・・」
「食堂に、
もともと本物のナイフがあったんだな。
ということは」
くそたに続き、
木太郎が話しかけたとき、
「そうだ。
俺がもとこを縛り上げたこと
をみんなに白状したとき、
土下座して謝ったんだ。
そのとき、
あのナイフを
落としたか、
置いたんだ。
だとしたら、
あのナイフは食堂の床にあったはずだ。
そうか。
俺がおちたがもとこを刺したナイフを見て、
何かひっかかるものを感じたのはそのことだったんだ。
くそたから預かったときは、
どうやって俺たちがもとこを縛り上げていたこと
を隠そうか必死だったので、そっちは気にしてなくて・・・」
と、
ホウセイは、
思い出すのが遅くなったことを、

そう言い訳したのだった。

「ナイフの移動」

「なんだよ！
二人とも！
大事なことを！」
ホウセイとくそたの話しを聞いて、
木太郎が思わず、愚痴るように言う。
「ごめん」
ホウセイは素直に謝ったが、
「ホウセイが悪いだぞ」
と、
くそたはホウセイのせいにする。
「俺が一番、悪い」
ホウセイは、
くそたの性格から、
そう言わないとこの場が治まらないと考えて、
素直に、
また、
頭を下げた。
「それでいいんだよ。
まあ、俺も忘れてしな。
男なんだから、水に流そう」
くそたは機嫌がよくなり、
調子のいいことを言ってから、
ホウセイの肩を叩いた。
木太郎もくそたの性格がわかっていたので、
何も言わず黙っていた。
そして、

くそたが、
「じゃあ、推理に戻るぞ。
今の話しで、
本物のナイフと偽物のナイフ出所のは、
はっきりした。
まず、偽物のナイフは
チウメちゃんとアスカちゃんのもの。
そして、
本物はもともとはキッチンにあった。
で、
最後にあったのが、
まず、偽物のひとつはもとこの部屋。
もうひとつは・・・」
と話し出したところで、
急に口籠もったので、
「レイカちゃんが持っていただろ」
と、
木太郎がくそたが殴ったレイカのこと
を言いたくないのだろう
と思って、すぐ口を出した。
「そう。
で、
本物はひとつはもとこの胸、
もうひとつが俺の部屋で死んでいた、
もとめ先生のそばに。
まあ、こうなるな。
後は、
その移動の順序を考えれば、
犯人はわかるわけだ」
くそたは、

まるで、
もう、
ナイフの移動の順序がわかったような言い方をしたのだった。

「ナイフの移動2」

「くそたはわかったのかよ」
木太郎は鼻をほじりながら言う。
「だいたいのところまではな」
「じゃあ、話せよ」
「そうだよ」
「木太郎もホウセイもまったくわからないのかよ」
くそたがわざと木太郎とホウセイ
を挑発するように言うと、
ホウセイが、
「俺がわかったのは半分くらいかな」
と言う。
「それでもいいから話せよ」
くそたではなく、
木太郎がそう言う。
「わかった。
話そう。
違っていたら、途中でもいいから言ってくれ。
じゃあ、俺の考えを話すぞ。
まず、簡単なところから。
アスカちゃんの偽物のナイフだけど、
あれはずっとアスカちゃんが身に付けていて、
例の事件があって、
もとこの部屋にアユメちゃんと来てから、
もとこのベッドを入り口の方に移動させたときに
落としたんだ」
ホウセイはそこでくそたと木太郎の顔を見ると、

くそたは腕を組んだまま、
木太郎は鼻をほじったまま、
何も言わなかった。
「ここはいいってことかな。
じゃあ、次だ。
もとめ先生は２０７号室に泊まる前に
キッチンから本物のナイフを持っきて、
身に付けた。
また、
くそたがその後、本物のナイフをキッチンから持ってきて、
俺に渡した。
ここまでもいいかな」
ホウセイはまたくそたと木太郎の顔を見た。

「ナイフの移動3」

「そこまでは今となっては簡単だろ」
木太郎が偉そうに鼻をほじりながら言うと、
くそたも黙って頷く。
「まあ、ここまではな。
で、次。
俺がさっき話したが、
俺がくそたから預かった本物のナイフは、
俺が土下座したときに、
食堂の床に置いたままになっていた。
問題はここからだ。
で、
その前だと思うが、
もとめ先生が持って行った本物のナイフと
チウメちゃんの偽物のナイフとを誰かがすり替えていた。
そして、
食堂の床にあったナイフを、
誰かが見つけ、
それをくそたの部屋に持っていった。
そして、
例の芝居を俺が思いついた後、
誰かがすり替えたチウメちゃんの部屋の本物のナイフ
をレイカちゃんが取りに行き、
それをおちたに渡して、
おちたがそのナイフでもとこの胸を刺した。
他方、
もとめ先生はすり替えられた偽物のナイフで自殺しよう

としたけど、偽物だったので、失敗した。
そして、
その後、
もとめ先生は、
くそたの部屋のどこかにあった
もうひとつの本物のナイフを見つけ、
それで自殺した。
すり替え犯とかはまだ断定できていないところがあるが、
ナイフの移動については、
だいたいこんなところで合っている、
と、
俺は思うが、どうかな？」
ホウセイは、
ナイフの移動について話し終えると、
木太郎とくそたの顔を順に見たのだった。

「ナイフの移動についての異論」

ホウセイがくそたの顔を見たとき、
くそたが首を傾げていたので、
「どこか今の俺の考えで違うところがあるのか？」
と、
ホウセイがストレートに訊くと、
「俺の考えではひとつな。
それは、
俺がホウセイに渡して、
ホウセイが食堂に落とした
とか言っていたナイフについてだ。
いいか。
もし、
ホウセイの話したとおりなら、
ナイフは食堂の床に落ちたままになる。
しかし、
食堂の床にあったナイフを拾えた人間が
果たしていたか？
よく思い出せよ。
ホウセイが土下座して、
しばらくしてから、
木太郎とおちたを除く８人の生徒は、
もとこの部屋に行った。
もとこは、
もとこの部屋で縛られていて、
もとめ先生は２０７号室だった。

まず、
この時点で、
ホウセイが落としたナイフ
を拾えた人間はいない。
次に、
アスカちゃんの提案で、
俺と永久とアスカちゃんと
アユメちゃんとヒトメちゃんは
アユメちゃんの部屋に行き、
ホウセイ、木太郎、おちた、
チウメちゃん、レイカちゃんは
もとこの部屋に残った。
そして、
アユメちゃんたちの部屋に行った俺たち5人は、
しばらくしてもとめ先生がいる207号室に行って、
すべてをもとめ先生に話し、
その結果、
おちたがもとこを刺すことになった。
その後だよ。
ホウセイ、木太郎、おちた
を除く7人ともとめ先生が俺の部屋に来たのは。
だから、
ホウセイが食堂に落としたか置き忘れたナイフは
俺の部屋に移動するわけはない。
違うか？」
くそたの言葉に、
ホウセイも木太郎も考え込むと、
まず、
木太郎が鼻をひくひくさせながら、
「ホウセイが土下座のとき、

落としていなかったとしても・・・。
　ホウセイはくそたの部屋には行ってないから、
ホウセイがくそたの部屋にナイフ
を落とすことはありえない。
　うーん？
　たしかに変な話しだな」
と言うと、
「うーん？
そういえば、そうだな。
だとすると、
俺が土下座して、
８人でもとこの部屋に行くときに
誰かが俺がくそたから預かったナイフ
をそっと拾って黙っていたのかな？」
と、
　ホウセイはそうは言ったものの、
自信はなさそうだった。

「ナイフの移動の謎」

「俺はその場にいなかったからな。
でも、
ホウセイの言うとおり、
俺とおちた以外の８人が、
もとこの部屋に来たときに
誰かが俺がくそたから預かったナイフ
をそっと拾って黙って持ち込んできて、
結局、
くそたの部屋に落としたか、
置いた以外には、
もとめ先生が自殺できる可能性はないぞ」
と、
木太郎が言ったが、
いつもと違い、
偉そうな感じではなかった。
「理屈上はそうなるけど、
ホウセイの見解どおりだとして、
ナイフを拾った人物が、
何故、
黙って拾ったのか、
その理由がわからない
また、
拾ったナイフを、
くそたの部屋に、
何故、落としたのか、置いたのか、
もわからないが、

それを今まで黙っている理由も、
俺にはよくわからない」
くそたが首を傾げながら言うと、
「後の方はさ、
自分がくそたの部屋に本物のナイフを落としたか、
置いたせいで、
もとめ先生が自殺するハメになったから、
言い出せないだけじゃないのか。
むしろ、
謎なのは、
何で、
ホウセイが落としたか、
置いたナイフを拾ったときに、
黙っていたのかということだよ。
武器代わりにする気だったのかな？」
木太郎が言うと、
「くそたの部屋に、
ナイフを落としたか、
置いたことを話せない理由はそうかもしれないな。
でも、
ホウセイが落としたか、置いたナイフについて、
黙って拾ったことはやっぱりよくわからないぞ。
木太郎の言うように、
もとこの部屋に行くので、
それを武器にするつもりなら、
黙ってないで、
自分は、
ナイフを武器にするって言えばいいんだけだろ。
ナイフは、
もとこに対抗するものだから、

それを秘密にする必要もないし、
また、
接近戦になるナイフを、
敢えて、
武器としてこだわる必要ないと思うんだけどな。
武器になるものなら、
スコップとか他にあったんだからさ」
くそたが、
木太郎の意見に続き、
自分の意見を話した後、
その話しを聞いて、
首を傾げている木太郎とホウセイに向かって、
さらに、
「俺はあることを思いついただけど、
それが可能か、
そして、
それが事実か、
ちょっと付き合ってくれないか」
と言って、
くそたは、
木太郎とホウセイの方を見た。

「新探偵？くそたの実験」

「いいけど、
どこに行くんだ？」
ホウセイがくそたに訊くと、
「それはついて来ればわかるさ」
「わかったけど、
みんなにはどうする？」
今度は木太郎が訊く。
「だいぶ、待たせているから、
一応、最後の詰めで、
ちょっと他の部屋に行く、
とだけ言って、
すぐ、
みんなのいる部屋を出よう」
と、
くそたは答える。

くそたたちはすぐ部屋を出ると、
みんながいる部屋に行き、
ホウセイだけが部屋に入り、
先程話したとおりのことをホウセイが言うと、
素早く、その部屋を出た。
相変わらず、
他の7人は黙り込んだままで、
ホウセイが話したことにも誰も質問はしなかった。

そして、
くそたは意外にも自分が倒してしまったレイカがいる
もとめの部屋に行ったのだった。

部屋に入ると、
ホウセイがベッドの上のレイカに駆け寄り、
まだ息があることを確認した。
「下手な推理するより、
ここを出て、救急車呼んであげれば、
助かるんじゃないかな」
ホウセイがレイカの顔を見て、
すまなそうに言うと、
「このまま救急車を呼べば、
俺たち全員人殺しの共犯だぞ。
幸い、
くそたが殴ったのはレイカちゃんの右肩の辺りで、
頭の方じゃないから、
まだ、
大丈夫さ」
保身に走っているのか、
木太郎がそんないい加減なことを言ったが、
今、
警察を呼べる状況ではなかったので、
ホウセイも渋々頷いた。
くそたの方は、
「レイカちゃん、ごめん」
と言った後、、

部屋の中に置いたままにしてあった、
レイカが持っていた偽物のナイフを手にとって、
じっと眺めていたのだった。

くそたはそのナイフをじっと見た後、
ゆっくりと自分の腹に刺した。
「何やってんだよ」
木太郎が鼻をほじりながら、バカにしたように言う。
「念のため、確かめただけだ。
問題は次だ。
木太郎、左手の甲を俺の前に付きだしてみろ」
「手でも腹でも同じだろ」
木太郎はまたバカにしたように言う。
ホウセイはそれを見て何か考えている。
「ホウセイ、
木太郎の手が動かないように押さえていてくれ」
くそたがホウセイに言うと、
「もしかして？」
と、
ホウセイはつぶやくと、
「押さえても同じだよ？」
と、
木太郎はまたバカにしたように言うと、
「頼んだぞ、ホウセイ。
木太郎、あまり人のことをバカにしていると、
バチが当たるからな」
と、
くそたは言うと、
偽物のナイフを木太郎の左手の甲に向けて刺した。
「ちょっとは痛かったけど、

ほら、同じだろ」

と、

ナイフの先が鞘に入ったのを確認した木太郎がバカにしたように笑う。

「さあ、これからが本番だ」

くそたは木太郎の言葉を無視して、ナイフを構えたのだった。

「新探偵？くそたの実験材料木太郎２」

「ホウセイ、ちゃんと押さえてろよ。
木太郎も動くなよ」
「わかってるよ」
「ああ」
「じゃあ、行くぞ！」
「いってえーーーーー！
血が・・・」
「あれっ？　何故だ」
「やっぱり、そうだったのか」
木太郎の左手の甲から出ている血を見て、
くそたは満足げに頷いた。
「木太郎、大丈夫か？」
「なんで、切れたんだよ。
そのナイフ偽物だよな
でも、いてえぞ」
木太郎はポケットからだした汚いハンカチで
傷口を押さえながら、言う。
「この偽物のナイフが盲点だったんだよ。
俺たちはもとめ先生の遺体のそばに、
本物のナイフが落ちていたので、
もとめ先生はそれを使って自殺したんだ
と思いこんでいたんだ。
でも、
偽物でも金属製には変わりがないし、
加工してあるのは剣の先のところだけだから、
今実験したように、

ナイフの横の刃の部分を使って、
首の柔らかい部分にあてて、
思いっきり引けば、首の頸動脈くらいは
切ることができるのさ。
だから、
偽物のナイフにも血が付いていたし、
レイカちゃんがこのナイフを持って、
この部屋に隠れていたのさ。
つまりな。
もとめ先生が自殺したとき、
俺の部屋には
この偽物のナイフしかなかったんだよ。
新しいナイフは、
後から誰かが俺の部屋にもとめ先生の血をつけてから、
床に置いたんだ」
くそたが自分の推理を少し得意げに話すと、
「それには気づかなかったな」
木太郎が左手を押さえながら言い、
「くそた、
なんかのゲームか何かで
こういうトリックを知っていたのか？」
と、
ホウセイは驚きつつも、
くそたをストレートに褒めるのが
少し、しゃくに思えたのか、
からかうような言い方をしたのだった。

「新探偵？くそた４本のナイフとすり替え犯」

「まあ、そんなことはどうでもいい。
肝心なことがこれでわかった。
結局、
ナイフは本物が２本、
偽物が２本あったってことで、
もとめ先生は自殺に使ったのは、
偽物のナイフの方だったということだ。
では、
まず、先に簡単にナイフの移動を簡単に話すぞ。
本物の２本はキッチンに、
偽物は１本がアスカちゃんが身に付けていて、
もう１本はチウメちゃんのスーツケースにあった。
そして、
まず、
本物のうち１本が、
キッチンから最後はもとこの胸に。
もう一本はキッチンから俺の部屋に。
偽物の１本はアスカちゃんの身体から
もとこの部屋に、
最後の１本はチウメちゃんのスーツケースから、
俺の部屋からここに。
つまり、
もとめ先生が自殺に使ったナイフ
をレイカちゃんがここもとめ先生の部屋に持ち込んだ。
そういうことだ。
ここまではいいな」

くそたが、
ナイフの大雑把な移動を説明すると、
ホウセイも木太郎も頷いた。
「さて、
次に、
ナイフの移動をもう少し細かく話すからな。
簡単な方から行くと、
偽物のナイフ1本は、
アスカがずっと携帯していて、
もとこの部屋で落とした。
ただ、それだけだ。
ここもいいな」
くそたがホウセイたちの顔を見ると、
二人とも頷く。
「次、
本物のナイフのうち、
1本は俺がキッチンから持ち出し、
それをホウセイに渡した。
そして、
ホウセイがどこかでそれを落とし、
誰かがもとめ先生が自殺した後に、
俺の部屋でもとめ先生の血をつけて、
俺の部屋の床に置いた。
他方、
もう1本の本物のナイフは、
キッチンにあったが、
俺がもう1本を見つける前に、
もとめ先生が持ち出した。
ところが、
それを知った誰かがが、

チウメちゃんの偽物のナイフとすり替えた。
そして、
すり替えられた本物のナイフを、
ホウセイの考えた芝居に利用するために、
レイカちゃんがチウメちゃんの部屋から持ち出し、
それをおちたに渡して、
おちたがそれでもとこを刺した。
他方、
もとめ先生はすり替えられた偽物のナイフ
で自殺しようとしたが、
1度目は失敗し、
2度目はさっき俺が実験した方法で、
首の付け根を切り、自殺した。
そして、
床に落ちたナイフをレイカちゃんが本物のナイフだ
と思いこんで、
ここに持ち込んだ。
以上が、ナイフの移動の流れだ。
後は、
ナイフをすり替えた犯人と、
ホウセイが落としたナイフを俺の部屋に置いた人間
を探せば、
この事件は解決する。
どうだ！」
くそたが自信満々に話すと、
ホウセイたちはいったん頷いた後、
「でも、
難問はその二人が誰かを明かにさせることだよな」
と、
木太郎がつぶやくように言ったのだった。

「ヘボ探偵木太郎の推理する犯人？」

「木太郎、
もう、俺にはそれもわかっているよ」
木太郎の独り言のような言葉を聞いて、
くそたは自信ありげに言った。
「くそたはわかっている？」
「木太郎、俺もだ」
木太郎の言葉に、
ホウセイもくそたと同じように言う。
「じゃあ、
俺の推理から話そう。
もとめ先生とチウメちゃんのナイフ
をすり替えたのは、
もとこで、
くそたの部屋に本物のナイフを置いたのは、
チウメちゃんだな」
木太郎が自分で思いついたことを話すと、
くそたは不敵な笑いを浮かべながら、
「ひとりは正解。
だが、もうひとりは不正解だ。
ホウセイはどう思う？」
と言って、
ホウセイの顔を見た。
「くそたと同じだ」
と、
ホウセイが言うと、
「あー、俺の今の推理が正しければ、

丸く治まったのになあ。
正解はチウメちゃんの方だけか」
木太郎は実は自分でもわかっていたのか、
あっさりと、
自分の推理が間違っていたことを認める。
そして、
木太郎は、
二人の意見が同じだと思ったのか、
「じゃあ、肝心の、
もとめ先生の本物のナイフとチウメちゃんの偽物のナイフ
をすり替えたのは、
二人とも、
誰だと思うんだ?」
と訊いたのだった。

「旧探偵ホウセイの推理する犯人？」

「ホウセイから言えよ。
最初の探偵役だろ」
「探偵役？　まあ、いいか。
それはだな。
チウメちゃんだよ」
くそたの質問に、
ホウセイが少し自信ありげに答える。
「そうか！
だから、もうひとつのナイフも小細工して、
くそたの部屋に置いたのか。
それに、
最初に嘘をついたのもそのせいだな。
まだ、嘘をついてる可能性があるな」
木太郎はホウセイの意見を聞いて、
すっかり、その気になっていた。
すると、
くそたが、
「やっぱり、探偵失格だ。
何で、
自分のナイフとすり替えるんだ。
それから、
動機は？
さらに、
何故、
もとめ先生が本物のナイフを持っていたこと

を知っていたんだ」
早口でいくつもの疑問を口にすると、
「それはだな。
まず、
すり替えられる偽物のナイフは
自分のナイフしかなかったからだ。
それに、
ナイフをすり替えた時点で、
俺が思いついた芝居が行われるなんて、
想定はしていなかった。
動機は、
もとめ先生に人殺しをさせないためだ。
もとめ先生が本物のナイフを持っていたことについては、
キッチンでもとめ先生がナイフを持ち出すこと
を目撃していたからだろう」
ホウセイはすぐさまくそたの疑問に答えた。
「なるほど、さすがホウセイ」
木太郎は鼻をほじりながら言う。
「バカか？　木太郎。
いいか。
オタクらがもとこを殺す芝居をやろうとしたとき、
偽物のナイフが、
自分の部屋にあると言い出したのはチウメちゃんなんだろう？
人殺しをさせたくないなら、
そんなこと言わなければいいじゃないか。
少なくとも、
ホウセイ、木太郎、おちたの3人は、
チウメちゃんが偽物のナイフを持っていることは
知らなかったんだぞ。
この点をどう説明するんだ！」

くそたがまたすぐ言い返すと、
ホウセイはそこまで考えていなかったのか、
黙り込んだのだった。

「黙り込む二人と新探偵くそた」

ホウセイが黙り込んでので、
「おい、どうしたんだよ。
木太郎はどうだ」
くそたがそんなことを言って、
二人の顔を交互に見るが、
どちらも、
俯いたまま黙り込んだままだった。
「チウメちゃんが、
ナイフのすり替え犯でいいのか？」
くそたが、
しつこく二人に向かって大声で言うと、
まず、
木太郎が、
「悪い。
ホウセイの口に騙された」
と言って頭を下げる。
「木太郎！
それはないだろ」
「じゃあ、
ホウセイはまだチウメちゃんがナイフのすり替え犯だと思ってるのか？」
ホウセイが木太郎を怒鳴ったところで、
すぐ、
くそたが言う。
「それは・・・
うーん？

違ったかも」
ホウセイが小声で言うと、
「かも！だと。
はっきりしろよ！」
と、
くそたが大声をあげて、
ホウセイを睨んだので、
「ごめん。
違った・・・」
ホウセイは俯いたまま小声で言った。
「二人で、
何を事情聴取していたんだよ！
いいか！
ナイフのすりかえ犯になりうるには、
ひとつは、
チウメちゃんの部屋に演劇用の偽物のナイフが置いてあったこと
を知っていたこと、
もうひとつは、
もとめ先生がキッチンから本物のナイフを持ち出したこと
を知っていたことだろう。
さらに言えば、
ホウセイたちの殺人否定派のグループではないことだ。
わかるな。
すり替えられた後のチウメちゃんの部屋のナイフは本物だから、
それを使ったら、
芝居どころか、
大変なことになることは、
すりかえ犯ならすぐわかるからな。
だとすると、
ナイフのすりかえ犯人は絞られてくるだろう」

くそたは二人を叱りつけるように、
偉そうに大声で話したのだった。

「偉そうな新探偵くそた」

「そういうことか・・・」
木太郎はそれだけいい、
「わかったよ。
でも、
まだ、
アスカちゃん、アユメちゃん、
ヒトメちゃん、永久の４人も残るぞ」
と、
ホウセイは言った。
「ああ、それでいいんだよ。
そこからさらに絞れば、
ナイフのすり替え犯人は自ずとわかる」
くそたはもうわかっているように、
偉そうに言うと、わざとらしい咳をする。
「でもさあ、
よく考えたら、
ナイフのすりかえ犯には何の責任もないじゃないか。
ホウセイが変な芝居を思いついたから
たまたまもとこが死んだだけでさ」
突然、
木太郎があたかもホウセイが悪いようなことを言い出す。
「木太郎、それはないだろう。
みんなあのとき、俺の意見に賛成したんだから、
全員同罪だ」
ホウセイが木太郎に言い返す。
くそたは二人のやりとりに口を挟まず、

腕を組んでにやにや笑って見ていた。
そして、
「あのさ。
あのとき、
殺人否定派のグループが
もとこの殺害を防ぐとしたら、
他にどんな方法があったんだ。
木太郎、
ホウセイを責めるのはいいが、
自分ならどうしたのさ？」
くそたはにやにやしながら、
木太郎の顔を見た。

「偉そうな新探偵くそたの名？推理」

「俺だったら、うーん？」
木太郎は考え込む。
「ホウセイは芝居なんだろう」
「まあ、そうだけど」
「そうだな。
俺なら、もとこを先に殺したフリをするかな」
木太郎は自信ないのか、
鼻をひくひくさせながら、言う。
「なるほど、
殺される前に、殺したフリ
というワケだな。
基本はホウセイと同じだ。
まあ、殺人の意思が変わらない人間たちを相手にするには、
それしかないな」
くそたは偉そうに言って、笑う。
「まさか、
くそたは、
俺たちの誰かがもとこを殺した芝居
を思いつくことをナイフのすり替え犯が予想していた
とでも言うのか？」
ホウセイがすぐ思いついたことを言うと、
「そういうこと。
ナイフのすり替え犯は、
永久とか、オタクらと同じように、
もとこの部屋の前を通って、
変な声を聞いて、その計画を知った。

そこで、
自らは手を汚さないでもとこを殺す方法を考えたのさ」
くそたが自信満々に答えると、
「でも、何で、凶器として、
ひさめちゃんのナイフを使うことまで予想できたのさ」
と、
ホウセイがくそたの推理の問題点をすぐ指摘した。

「新探偵くそたの名？推理の問題点？」

くそたはホウセイの問いに、
何故かほくそ笑むと、
「まず、
ナイフはいつすり替えられたと思う？」
と、
逆にホウセイに聞き返した。
「それは、
もとめ先生がゲームの決着がついて、
２０７号室に行く前なのはたしかだな。

いや、
たしか、
ゲームが始まってからは、
ホウセイと木太郎とおちた以外は
食堂から離れていないはずだ。
ということは、
もっと前に
ナイフはすり替えられていたということか。
だけど、
くそたの推理どおりなら、
ナイフをすり替える前には
もとこの計画を知らないことにはな。
そうすると、
そのとき、
もう、
もとこの説人計画に勘づいていたのは、

俺と木太郎、
そして、
永久だけか？」
と、
ホウセイがそこまで言うと、
後は、
「永久が違えば、
後は、すり替え犯だけだよな」
と、
くそたが言うと、
「まさか？
永久？
あいつは、
例の風呂場の件で、
もとこに恨みもあったし、
もとこの部屋の様子が変だとか言いだして、
俺たちの計画を狂わせたのもあいつだし・・・」
木太郎が鼻をほじりながらぶつぶつ言い出す。
「でも、
あいつにそんな頭があるのかな。
風呂場から裸で飛び出してきたり、
結構マヌケなところもあるしな。
うーん・・・」
ホウセイも同じように首を傾げる。
「たしかに、
永久だけだと無理だろうな。
ナイフのすり替えには、
女子の部屋にも入らないといけないしな」
くそたはそこまで話すと、
にやりと笑って、

ホウセイと木太郎の顔を見たのだった。

「新探偵くそたの名？推理とすり替え犯」

「女子の誰かと永久の仕業だったのか？
だから、
この期に及んでも正直に話さないわけだな。
で、共犯は？
うーん？
動機から考えると、
アスカちゃんかな。
うん。
そうだ！
彼女はそれなりに頭もいいし、
４美将の中でもトップクラスだし、
永久も誘惑されてもおかしくないからな」
木太郎が、
くそたの話しを聞いたとたん、
鼻をほじりながら、
勝手に犯人を決めつけて、そんな話しをする。
すると、
「木太郎、勘だけで決めつけるなよ。
でも、
アスカちゃんなら、
ひさめちゃんのナイフのことも知っているし、
自ら自殺の芝居をしたくらいだから、
そういう発想をしてもおかしくないな。
それに、
アスカちゃんは、
もとこには目をつけられて、

いきなり２０７号室に泊められて、
相当怖い思いさせられたみたいだからな。
動機も充分ある。
チウメちゃんがアスカちゃんを疑ったのも、
女の勘かもしれないな」
ホウセイまで、
そんなことを言いだした。
「ホウセイまで、
勘だとか言いだしてどうするんだよ。
ここまで辿り着いたんだから、
最後の詰めはちゃんとしないとな。
いいか。
まず、
チウメちゃんのナイフの所在を知っていた、
あるいはその可能性のある人間から
すり替え犯を絞っていき、
それから、
永久に限らず、
もとこの計画を知り得た人間
と結びつけていけばいいんだよ。
まず、
アスカちゃん、
チウメちゃんの二人は間違いなく、
チウメちゃんのナイフの所在を知っていた。
次に、
チウメちゃんのナイフの所在を知っていた可能性のあるのは、
アユメちゃん、
ヒトメちゃん、
レイカちゃん、
そして、永久だ。

ここから、
まず、
チウメちゃんは自分のナイフをすり替えに使ったとは考えにくいから、
除外していいだろう。
もうひとつのナイフのことは別だけどな。
それから、
ヒトメちゃんは、
もとこが生きていたと思って、
怯えていたようだから、
除外していいだろう。
レイカちゃんも偽物のナイフを本物だと思いこんで、
握りしめていたから、やはり除外していいだろう。
そうすると、
残るのは、
アユメちゃん、
アスカちゃんだな。
この二人は、
おちたがもとこを刺した後、
もとこの部屋にすぐ来ているから、
かなり怪しいとみていいな。
もとめ先生を置いてこれたのも、
もとめ先生が持っているナイフが偽物だと思っていたからだ、
と考えることもできるし、
実際、
うまく行ったか確かめたい
といった気持ちもあるかもしれないしな。
それだけじゃなく、
ああして、

二人で、
すぐもとこの部屋にいくことで、
自分が犯人でないことをカモフラージュしよう
としたのかもしれないしな」
くそたがそこまで話すと、
「やっぱり、
アスカちゃんじゃないか！
アスカちゃんは、
自分が持っていたナイフをわざと落として、
もとこが持っていたナイフがすり替えられた、
と俺たちに思わせたんだよ。
あれで、
俺たちの推理は最初の出発点から狂ったからな」
と、
木太郎が少し興奮気味に鼻をひくひくさせながら、
言ったのだった。

「新探偵くそたの名？推理と木太郎の予断？」

「木太郎、
また、
勘だけで判断するなよ。
もう、
永久とアスカちゃん二人の犯行だ
と決めつけてるだろう」
と、
今度は、
ホウセイが興奮気味の木太郎の方を見て言う。
「今度は勘だけじゃないって。
今話したように、
もとこの部屋に偽物のナイフがあったことから、
もとこの部屋のナイフとチウメちゃんのナイフが
すり替えられたと思い込んで、
誤った前提で推理をしたワケだ。
で、
そういう誤った前提に俺たちを誤導したのが、
アスカちゃんだ
と俺は考えたわけだよ。
多分、アスカちゃんの計画には
そこまで含まれていたわけだ」
木太郎はまだ興奮気味に鼻をひくひくさせながら、
早口で話した。
「だから、
それが予断だって」
と、

ホウセイが言いかけると、
「待て、ホウセイ。
たしかに、
木太郎はもう永久の共犯がアスカちゃんだ
と決めつけているみたいだけど、
今話したことはあながちおかしな推理ではない
と思うぞ」
と、
くそたが木太郎の意見に賛成するようなこと
を言うと、
「いや、
俺はまったく正反対の考えなんだ。
もとこの部屋に偽物のナイフが落ちていたことで、
俺は、
チウメちゃんと同様に、
アスカちゃんもナイフのすり替え犯じゃない
ということまでは、
ほぼ確信できたんだけど、
俺はくそたと違って、
ヒトメちゃんとレイカちゃんがすり替え犯じゃない
とは断定していないんだ」と、
ホウセイが真顔で言ったのだった。

「新名？探偵ホウセイと新ヘボ探偵くそたと木太郎」

「ホウセイ、何、バカなこと言ってるんだよ。
なっ、くそた」
木太郎がバカにしたようにホウセイの方を見てから、
くそたの方を見ると、
くそたも、
木太郎と同じように、
「そうだぞ！
ヒトメちゃんとレイカちゃんのことはまだいいとして、
何で、
今の段階で、
アスカちゃんがシロだ
と断定できるんだよ。
このヘボ探偵！」
と言って、
ホウセイのおでこを人差し指ではじいた。
「いたた・・・。
くそたはすぐそうやって手をだすからな。
落ちついて考えてみろよ。
もとこの部屋に落ちていたナイフは、
アスカちゃんのものでいいんだろ」
「それしかないだろ！」
「そうだよ。ホウセイ」
木太郎とくそたが揃って、
ホウセイをバカにしたように見る。
「なら、アスカちゃんはシロだろ」

ホウセイが理由もつけず偉そうに断言すると、
「何言ってんだよ！」
「ヘボというよりも大バカだな」
と、
今度は、
くそたも木太郎も半分呆れたような表情で、
ホウセイの方を見る。
「二人とも、
俺をバカにしているようだけど、
アスカちゃんが知能犯なら、
もとこの部屋にナイフをわざとは落とさないぞ。
いや、
落としちゃいけないんだよ。
それがわからないのか？」
「わかってないのは、
ホウセイだろ！」
「木太郎の言うとおり、
アスカちゃんがすり替え犯なら、
何故、
ナイフをもとこの部屋にわざと落としちゃいけないん・・・。
あれっ・・・。
待てよ・・・」
くそたが何かに気づいたのか、
急にその態度が変わったので、
「なんだよ。くそたまで。
ホウセイのバカな推理に騙されるなよ」
木太郎は、
今度はくそたのことまでバカにしたような表情で見ると、
「あれっ？
ちょっと頭がこんがらかってきたぞ」

と、

くそたはそう言って、

自分で自分のおでこを右手で叩き始めたのだった。

「何、ホウセイに騙されてるだよ」
木太郎は、
自分で自分のおでこを
右手で叩き始めたくそたに向かって言う。
「うるさい！
木太郎、ちょっと黙ってろ」
と、
くそたはいらついたように怒鳴る。
「ほら、
くそたは少しわかってきたんだよ。
こんな簡単なこともわからないなんて、
ヘボ探偵は木太郎だけだな。
アスカちゃんがすり替え犯なら、
絶対にわざとはもとこの部屋に
自分のナイフは落とさないからな」
ホウセイは自信満々に話す。
「何言ってんだか？」
木太郎はそう呟いたはいいものの、
くそたが相変わらず同じことをしているので
少し自信がなくなったのか、
鼻をひくひくさせながら、股間を掻き始めた。
「じゃあ、
もっとわかりやすく説明してやるよ。
くそたの推理どおりだとすると、

ナイフのすり替え犯は、
俺たちの誰かが、
もとこを殺した芝居を思いつくこと
を予想していたワケだ。
そして、
それを見越して、
もとめ先生が持っていた本物のナイフと、
芝居用に使う偽物のナイフと
を交換しなければいけないワケだ。
ここまではわかるな」
ホウセイが偉そうに言うと、
木太郎だけ、
「ああ」
と頷いた。
「で、
偽物のナイフは実際にはチウメちゃんのとアスカちゃんの
と2本しかなかった。
アスカちゃんが犯人なら、
自分のナイフをわざわざ本物のナイフとの交換に使いたい、
とは思わないはずだ。
しかも、
チウメちゃんは自分のナイフを部屋に放置していたワケだからな。
となると、
アスカちゃんがすり替え犯なら、
もとめ先生のナイフと、
チウメちゃんのナイフを交換するだけで足りるし、
少なくともチウメちゃんは
アスカちゃんが芝居用のナイフを身に付けていることを知っている
から、
誰かが芝居を思いつけば、

当然、交換される偽物のナイフはチウメちゃんのナイフということになるわけだ。
だから、
わざわざ、
自分のナイフをもとこの部屋に落として、
もとこのナイフとチウメちゃんのナイフとが交換されたと思わせる必要はないし、
そんなことはしてはいけないんだよ。
何故なら、
偽物のナイフはもとめ先生が持っているんだから、
もとめ先生の自殺までは予想できない以上、
もとめ先生が後で、
自分のナイフがすり替えられたことに気づくのは明かだからさ。
今回みたいに、
アスカちゃんがもとこの部屋に偽物のナイフを落としてしまったということと、
もとめ先生が自殺したという偶然が重なったから、
俺たちは、
もとこのナイフとチウメちゃんのナイフとが交換されたものと思いこんだだけで、
犯人の作為はそこにはないんだよ。
わかるよな」
ホウセイがそこまで話すと、
それまで頭を叩いていたくそたは理解できたのか、
頭を叩くのをやめて、黙って頷いたが、
木太郎はまだ理解できないらしく、
首を傾げたままだった。

「ホウセイのヘボ説明と偉そうなくそた」

「くどくて、
ヘボい説明だな。
俺だから、
理解できたけど、
木太郎はバカだから、
まだ、わかってないぞ」
「バカはないだろ！」
「ヘボ説明だと？」
「いいから、黙れ！
要するに、
もとめ先生が自殺しなかったら、
もとめ先生自身が自分が持っていた本物のナイフが、
ニセモノのナイフにすり替えられたことに
すぐ気づくから、
もとこのナイフが、
ニセモノにすり替えられたなんてこと
を誰かが言い出すなんてこと、
すり替え犯は、
予想できなかったんだよ。
だから、
アスカちゃんが、
もとこの部屋にわざとニセモノのナイフ
を落とすこともありえない、
ってことだろう。
もう一本のナイフは、
俺がホウセイに預けたんだから、

すり替えはたった一度だけだったんだからな」
と、
くそたが、
ホウセイが気づいたことなのに、
あたかも自分で考えたように、
偉そうに話す。
「そうか。
すり替え犯は、
自ら、
もとめ先生のナイフとチウメちゃんのニセモノのナイフ
をすり替えたんだから、
ナイフを落とす前に、
もとこのナイフがすり替えられたなんて発想を思いうかべるはず
はない、
ということだな。
ということは、
アスカちゃんが、
わざと
自分のナイフをもとこの部屋に落としたワケではないんだな。
でも、
それでアスカちゃんがシロということまでは断定できないぞ」
と、
ようやくホウセイの言いたいことがわかった木太郎は、
鼻をひくひくさせながら話す。
「いや、そうじゃない。
アスカちゃんがすり替え犯なら、
もとこの部屋で見つけたナイフが、
いくらチウメちゃんのナイフとそっくりだとしても、
それが自分が落としたものだとすぐわかるはずだからな。
だって、

自分が二つしかないニセモノのナイフのひとつ、
つまり、
チウメちゃんのナイフをすり替えたんだから、
残るナイフは自分のものしかないからな」
ホウセイはすぐ木太郎に言い返す。
「たしかにな」
くそたはそれだけ言い、
木太郎は悔しいのか、
「いくらそっくりとはいえ、
自分のナイフと他人のナイフを間違えるか？」
と、
また、それだけ言い返した。

「護身用だし、
もともと同じものなんだから、
間違えてもおかしくないだろう。
それにナイフのすり替え犯なら
いずれバレる嘘をつく必要もないしな」
くそたがあっさり木太郎の意見を否定した。
木太郎は一応首を傾げて見せたが、
反論を思いつかなかったので、
ただ黙っているしかなかった。
「よし！
さあ、最後の詰めだ！
俺の推理では、
アユメちゃんと永久の共犯。
で、ホウセイの推理だと、
永久の共犯は、
アユメちゃん、レイカちゃん、ヒトメちゃん、
ということでいいな」
と、
くそたが木太郎のことは無視して、
自分の意見を言うと、
「まあ、そうなるな。
ただ、
永久が共犯と言っても、
どの程度までかはよくわかないがな」
「多分、永久のことだから、
共犯者が考えたことに従っただけだろうな」

くそたとホウセイの二人がそんなことを話し、
木太郎は蚊帳の外だったので、
ふてくされた表情をして、
鼻をほじったり、
股間を掻いたりしていた。
「よし、
じゃあ、容疑者は絞れたから、
これから特定するぞ。
その前に、
これまで判明したことから今回の事件を整理するからな。
いいな」
くそたはそう言うと、
二人の返事も聞かずに話し始めた。
「まず、
永久が、
もとこの部屋から変な声を聞いて、
俺たちより前に、
共犯、とりあえず、Aとしよう。
えー、そのAに話した。
Aは、
おそらくもとこの部屋に入り、
オオシマと話すとかして、
もとこの皆殺し計画を知って、
それを永久に話し、
このままでは自分たちが危ないので、
どうにかしなければいけないとか言って、
永久と相談した。
そして、
Aと永久が出した結論は
もとこを殺す意外に助かる方法はない

ということだった。
しかし、
人殺しは人殺しなので、
そういう提案をしても、
全員がすんなり賛成するとは二人とも思ってはいなかった
多分、
これまで一緒にいてだいたいの性格はわかっていたので、
殺人に反対するのは、
オタクら二人とおちたとチウメちゃんの４人程度だ
と思ったんだろう。
そのとき、
殺人反対派が、
殺人賛成派を納得させるには、
もとこを殺したことにするしかないだろう
とも考えた。
そして、
このとき、
Ａはアスカちゃんが自殺したことを思い出し、
さっきの４人ならもとこを殺した芝居をするのではないか
と予想した。
そして、
芝居をするなら、
チウメちゃんのナイフを利用するしかないだろうとも予測した。
そこで、
Ａと永久は、
本物のナイフとチウメちゃんのナイフをすり替えることを考えた」
くそたがそこまで話すと、
それまで無視されていた木太郎が、
「Ａでも永久でもどっちでもいいけどさ。
もとめ先生が本物のナイフを持っていることを

いつどうやって知ったのさ。
たまたま知ったというのじゃ、
犯人を自白には追いつめられないぞ」と、
木太郎は、
ここぞとばかりに、
くそたとホウセイの推理の弱点を偉そうな顔をして、
指摘したのだった。

「木太郎汚名返上？」

「木太郎、
たまにはいいこと言うな。
ナイフをすり替えるにしても、
すり替えられるナイフが
そっくりじゃないと意味がない。
とすると、
犯人Ａか永久は、
ひとつは、
キッチンにあったナイフとチウメちゃんのナイフが
そっくりなこと、
もうひとつは、
チウメちゃんのナイフにそっくりで、
キッチンにあったナイフを、
もとめ先生が持ち出したこと
を知らないといけないわけだ」
くそたがそこまで話すと、
「あのさ、
何で、
Ａか永久は、
キッチンに残っていたもうひとつのナイフと、
チウメちゃんのナイフを交換しなかったのかな？
事前に気づかれる可能性なら、
キッチンに置いてあったナイフより、
もとめ先生が持ち出したナイフの方が高い
と思うけどな」
と、

今度はホウセイがもうひとつの疑問を指摘する。
「あー・・・。
今の問題点も、俺は次に指摘しよう
としていたところなんだ」
と、
木太郎が調子のいいことをすぐ言うと、
「まさか？」
と、
くそたは呟くと、
何か閃いたのか、
急に怖い表情になり、
腕を組んでまま天井の方を見つめたのだった。
（続く）

「新名？探偵くそたの閃きとヘボ？探偵木太郎の推理」

ホウセイがくそたの表情に気づき、
「どうした？
何、怖い顔をしてるんだよ」
と訊いたが、
「逆かもしれない」
くそたはそれだけしか答えず、
まだ、
考えが詰め切れていないのか、
腕を組んだまま上の方を向いたままだった。
「逆？」
木太郎がそう言うと、
ホウセイはくそたの様子を見て、
「木太郎、静かにしてろ。
くそたが何かに気づいたようだ」
と、
木太郎の肩をポンと叩いた。
すると、
木太郎は、
「ちょっと、こっちへ」
と言って、
ホウセイの腕を引っ張って、
くそたから離れると、
ホウセイを部屋の隅へ連れて行った。
「どうした？　木太郎」
「いや、逆で思いついたんだけど、
最初にもとこの計画に気づいたのは、

もとめ先生だったんじゃないのか？
で、
おそらく、
最後の日の夜に、
もとめ先生は、
やられり前に、
もとこを殺そうと思って、
例の日の前日に、
キッチンからナイフを持ち出したんじゃないかな。
そこを目撃した誰かが、
永久に相談して、
こういうことになったんじゃないのか？」
と、
木太郎は思いついたことを、
くそたには聞こえないように、
ホウセイに話したのだった。
すると、
ホウセイは、
木太郎の話を聞いて、
何か別の考えを思いついたのか、
「木太郎！
いい線だと思うけど、
だったら、
永久は無関係かもしれないぞ。
もしかして・・・」
と言いかけて、
そこで口籠もったのだった。

「ヘボ？探偵二人の推理」

「どうした？」
木太郎が急に口籠もったホウセイの顔を覗くように訊く。
「いや、
いいことを思いついたんだけど、
チウメちゃんのナイフのこと
をあいつは知らなかったし。
それによく考えたら無意味だしな」
ホウセイはぶつぶつそれだけ言う。
「あいつ？」
木太郎の言葉に、
「今のは忘れてくれ。
俺の思い違い。
彼女は・・・
ダメだ。
あー、
余計ワケがわからなくなってきた」
ホウセイは、
ぶつぶつそんなことを言って、
頭を抱えた。
そこへ、
くそたが寄って来て、
「おまえらじゃ無理だって。
俺もいい線までいっているんだが、
まだ、何かが足りないんだ。
で、

これ以上、
この3人で考えていても無理だから、
こうなったら、
みんなの所に言って、
一気にかたをつけないか？」
と、
くそたは言いだした。
「かたをつける？
って言っても、
みんなは、
アスカちゃんか、
チウメちゃんのどちらかが犯人だ、
と思っているんだろ。
そんなことをしたら、
かえって、ややこしくなる。
それより、
永久を呼び出さないか？
あいつがやっぱり共犯なら、
脅せば自白するだろう」
と、
ホウセイはくそたの意見に反対して、
永久を呼び出すことを提案したのだった。

「ヘボ？探偵3人と永久」

結局、
くそたが折れて、
3人は、
永久たち6人がいるのに、
不気味なほど静かな部屋に行って、
理由も説明せず、
永久だけを連れだしたのだった。

「まだ、犯人がどっちか、わからないのかよ。
本当にヘボ探偵たちだな」
永久は部屋に入るなり、
自分が疑われているのも知らずに、
くそたたちに、
いきなりそんなことを言ったのだった。
すると、
「永久がこんなにいい役者だったとはな」
といきなり言って、
くそたが永久のおでこを叩いたのだった。
「いてっ！
俺が役者？
って、
まさか、
俺が疑われてるわけ？
何で？」

「それが芝居なら、
おちたとは大違いだな。
あいつは大根だったからな」
木太郎が鼻をほじりながら言う。
「ということは、
やっぱり俺が疑われているのか？
永久は
木太郎の言葉とホウセイとくそたの視線から、
やっと自分が疑われていることに気づいた。
「で、
何でもとめ先生に、
もとこの計画を話したんだ」
ホウセイが誘導するように訊くと、
「えっ？
なんのこと？」
永久は否定する。
「とぼけるなよ！
じゃあ、
もとめ先生じゃなく、
他の女子に話したのか？
もとこの計画を」
「えっ？
俺がもとこの部屋で変な声が聞こえたこと
を最初に話したのはくそただよ！
本当だって。
それに、
何で、
俺がもとめ先生や女子に先に話さない
といけないんだよ」
「その理由を訊きたいのはこっちの方だよ。

永久が黙っていたら、
こういうことにはならなかったんだよ。
話したのが、
くそたでも、
もとめ先生でも、
女子でも、
結果は同じなんだから、
正直に話せ。
今は話せば、
いろいろと考えてやるからさ」
木太郎が、
永久をどうにかして自白させようとしたが、
「俺が、
もとこの部屋のことを話したのはくそただけだって。
それに、
今回のことを全部俺のせいにするのはひどすぎるぞ！
信用してくれないなら俺は戻る」
「おい、話しは途中だぞ」
「待て！」
結局、
永久は怒って、
一人で部屋を出て行こうとしたのだったが、
「いい、もう」
というくそたの一言で、
ホウセイと木太郎も永久を追うのをやめたのだった。

「永久はシロだな」
永久が一人部屋を出ていったのを確認すると、
くそたが両手を挙げてそう言った。

「ああ、結局、振り出しかよ」
「ヘボ探偵が3人揃っても、
意味ないな」
「ホウセイ、これでわかっただろ。
こうなったら、
俺がさっき話したとおり、
みんなのところに行って、
俺たちが考えたところまでを正直に話して、
一気にかたをつけるしかないぞ」
「かたをつけられればいいけど、
永久みたいに他の女子が怒ったら」
「ホウセイ、
もうそのときはそのときだ。
くそたが話したように、
最初から、
俺たちの考えたことを正直に話せば、
女子もわかってくれるさ」
結局、
木太郎のその言葉で、
ホウセイも納得し、
3人はみんなの待つ部屋に戻ることにしたのだった。

「どんでん返し？」

永久を連れて、
部屋に入ったホウセイたち3人を、
それまで待たされていたせいか、
他の生徒たちは、
異様な程の視線で3人を見た。
そこで、
木太郎が
ホウセイの耳元で何か囁くと、
「えー、
確定した結論から申し上げます。
まず、
アスカちゃんとチウメちゃんは
ナイフのすり替え犯ではありません」
そこで、
ホウセイが一呼吸置くと、
アスカとチウメだけは
ほっとした表情をしたが、
他の生徒の顔は逆にもっと険しくなった。
「次に、
これが大事なことなのですが、
もとこの部屋にあった本物のナイフとチウメちゃんの部屋にあったナイフがすり替えられた
というのが、
これまでの共通の理解だったと思うのですが、
それは間違いで、
すり替えられのは、

もとめ先生が持っていたナイフとチウメちゃんのナイフなのです。
もとこの部屋にあったナイフは、
アスカちゃんが落としたものだったんです」
と、
ホウセイがそこまで言うと、
「それは違いますよ！」
「チウメの言うとおりよ。
もとこの部屋にあったのは、
あたしのナイフじゃないから」
と、
チウメとアスカがほぼ同時に大きな声でホウセイの言ったことを否定したのだった。

「ヘボ探偵確定と推理の成果」

「だから、
俺がいくらそっくりでも、
自分のナイフと他人のを間違えるのはおかしいって言ったのに、
くそたもホウセイも聞き入れなかったんじゃないか」
と、
木太郎が、
くそたとホウセイの方を睨むと、
「わりい、俺もヘボ探偵だ」
くそたが素直に頭を下げ、
「俺もだ」
ホウセイも頭を下げる。
「3人も揃って、
今まで何やってたのよ！
あたしは疑われていて、
ここにいるのが息苦しかったのよ」
と、
アスカがうっぷんを晴らすように、
思わず大声を出す。
「面目ない」
木太郎が3人もと言われたので、
すぐ頭を下げる。
「くそたが来て、
ややこしくなったんだよ」
ホウセイがそんな言い訳をしたので、
くそたが、

その言葉を聞いて、
「てめえ！
もとはと言えば、
二人がヘボ探偵だからこうなったんだろう」
と、
怒鳴ると、
「おい、揉めてどうするんだよ！
で、何かひとつくらい成果はなかったのかよ」
疑われていた永久が苦笑いしながら言うと、
「ホウセイが言い訳して一番反省していないから、
簡潔に話せよな」
「そうだ。
くそたの言うとおりだ」
くそたと木太郎が揃って言ったので、
「わかったよ。
なるべく、
自分なりに自信のあることだけ、
今からみんなに話すよ。
木太郎、
くそた、
間違っていたら言ってくれ」
ホウセイはみなの視線を浴びながら、
そう切りだしてから、
話し始めた。
「えー、
では、なるべく簡潔に。
まず、
2本の本物のナイフは、
もともと、
この屋敷のキッチンにあったもので、

もとこのものでも、
もとめ先生のものではなかったのは、
間違いありません」
「何故わかったんだ？」
永久が訊くと、
「理由は後にしよう。
ややこしくなるから」
木太郎が言うと、
他の生徒が頷いたので、
永久も、
「わかった」
とそれだけ言った。
「次に、
一番の成果だと思うのですが、
すり替えられたのは、
もとめ先生が所持していた本物のナイフと、
さっきの話しから、
あー、
ここはややこしいのですが、
チウメちゃんの部屋にあったアスカちゃんのナイフだった、
ということです」
「どうして、
あたしのナイフがチウメの部屋にあったのよ」
アスカが思わず声を出すと、
「結論的にそうなるので、
質問は最後にお願いします」
ホウセイが下手に出ると、
「そうね。
あくまでも3人の考えた推理だからね」
と、

アスカは少しイヤミったらしく言って、
引き下がった。
「それから、
これもひとつの成果なのですが、
もとめ先生が自殺に使用したのは、
ニセモノのナイフで、
これもアスカちゃんのナイフだと思われます」
「何で、
ニセモノで自殺できるんだよ」
「永久、質問は後にしろ。
これは絶対間違いないから」
と、
永久がバカにしたように言ったところを、
くそたが断言したので、
永久は黙って頷いた。
「それから、
ナイフのすり替え犯は、
もとめ先生がキッチンにあった本物のナイフを持ち出して
所持していたことを知っていて、
かつ、
チウメちゃんの部屋にニセモノのナイフが置いてあったこと
を知っていて、
かつ、
もとめ先生がキッチンから持ち出したナイフと、
アスカちゃんとチウメちゃんのナイフがそっくりなことを知って
いて、
かつ、
もとこの計画を知っていて、
かつ、
俺たちもとこ殺人否定派が、

もとこを殺した芝居を考える、
と予想しいていた人物です。
これもほぼ間違いありません」
この話しをしたとき、
木太郎とくそたを除く、
それまでホウセイのことを半分バカにしていた感じで聞いていた
他の生徒の表情が変わり、
急に、
それぞれ何か考えるようなしぐさを始めたのだった。
「えー、
それから、
くそたの部屋にあった本物のナイフは、
もとめ先生が自殺した後に、
くそたの部屋に置かれたと考えられます。
そして、
ここへ戻ってわかったことですが、
何故か、
アスカちゃんのナイフと、
チウメちゃんのナイフもすり替えられていたのです。
で、
ナイフのすり替えの順序は、
まず、
アスカちゃんのナイフと、
チウメちゃんのナイフを交換し、
その後、
もとめ先生のナイフとチウメちゃんの部屋にあったアスカちゃん
のナイフが
すり替えられたのです。
で、
最後になりますが、

もとこの部屋にあったニセモノのチウメちゃんのナイフは、
アスカちゃんがもとこの部屋でベッドを移動させたときに、
落としたものだと思います。
以上のことはほぼ間違いない、
と思います」
このように、
ホウセイが木太郎やくそたとこれまで検討してきた結果を、
やけに丁寧な言葉を使って話し終えると、
誰も質問しようとはせず、
不気味な沈黙が流れたのだった。

「推理の成果と疑問と聡明な犯人像」

最初に沈黙を破ったのはオチタだった。
「3人にしては時間はかかったが、
よくそこまで辿り着いたな」
オチタが偉そうに言ったので、
「オチタには言われたくないな」
と、
木太郎がオチタのおでこを叩く。
しかし、
誰もが緊張しているのか、
疑心暗鬼になっているのか、
笑い声は出ない。
「冗談。
で、今の話しで一番疑問なのは、
何故、
犯人がアスカちゃんのナイフとチウメちゃんのナイフまで
交換したのか？
それが一番の疑問だな。
普通なら、
単純に、
もとめ先生の持っていた本物のナイフとチウメちゃんのナイフ
を交換すればいいだけだろう。
特に、
アスカちゃんはナイフを護身用に携帯していたんだから、
それを交換するチャンスは
お風呂に入っているときくらいしかないからな。
なのに、

何故、
わざわざそんなことをしたんだろう？」
「オチタの割には、
まともなことを言うな。
俺もここに戻って来るまで、
そんなことは考えていなかったけど、
アスカちゃんとチウメちゃんの二人が
もとこの部屋に落ちていたのは、
チウメちゃんのナイフだと言うんだから、
それは事実だからな」
オチタの疑問にホウセイが
先にさっきの仕返しにイヤミを言ってから、
そう話すと、
すると、
木太郎が、
「そうか！
犯人は、
もとこの部屋で、
アスカちゃんが落とした偽物のナイフと本物のナイフがすり替えられた
と俺たちに思わせようとしたんじゃないか？
だから、
アスカちゃんにバレないように先にアスカちゃんのナイフとチウメちゃんのナイフ
をすり替えたんだよ」
と言うと、
「だから、
木太郎はヘボなんだよ！
アスカちゃんが、
あのとき、

もとこの部屋でナイフを落とすなんてことは、
いくら聡明な犯人だって予想はできないことだろう。
そのために、アスカちゃんとチウメちゃんのナイフをわざわざ交換するワケないじゃないか」
オチタがすぐ反論すると、
「ごめん。それもそうだ」
と、
木太郎は鼻をひくひくさせて、
軽く頭を下げた。
そのとき、
「聡明な犯人か。
もしかしたら・・・
だとすると・・・」
ホウセイは、
オチタと木太郎のやりとりで何か閃いたのか、
腕を組みながら、
ぶつぶつ言いだした。
（続く）

「ホウセイの閃きと聡明な犯人？」

ホウセイは何かぶつぶつ言った後、
「悪いが、
俺と今度は
オチタの二人だけで話したいことがあるんだ。
１５分くらいでいいから、
ここでみんなで待っていてくれないか」
と言うと、
「ヘボ探偵の相棒は、
今度はオチタかよ」
と、
永久がからかうように言ったが、
やはり、誰も笑わなかった。
そして、
ホウセイは、
「今度こそ、
オチタがいう聡明な犯人を特定して見せるから」
と言って、
オチタの手を引っ張るようにして、
ホウセイが
前に木太郎とくそたと話し合っていた部屋まで行ったのだった。

「オチタ、さっきの話しだけど、
アスカちゃんがナイフ
を護身用に携帯していた以上、
それを交換するチャンスは

お風呂に入っているときくらいしかない
って話したよな」
「ああ」
「でも、交換した後で
自分のナイフを見ることだ
って、ありうるよな」
「ああ」
「だったら、
アスカちゃんのナイフを交換することは危険だよな。
犯人がバカではなく、
オチタの言うように聡明であれば、
そんなことはしないよな」
「ああ、だから、そこが謎なんじゃないか」
「それから、
もとこの部屋で、
アスカちゃんが
ナイフを落とすことは普通誰も予想できないよな。
でも、
一人だけそれを予想できる人物がいるんだ。
今まで俺が話したことでそれが誰だか、
オチタ、わかるか？」
「あっ！
まさか？」
「オチタも気づいたか」
「ああ、でも、それだけじゃ」
「ああ、それだけじゃなく、
俺たち殺人否定派のグループに共犯がいたなら、
どうなる？」
「うん？
ちょっと待てよ。

仮にいれば、
もとめ先生が本物のナイフ
を所持していたことさえわかれば・・・
そうか！」
ホウセイもオチタも、
このとき同じことを考えていたのだった。

「まさかなあ。
でも、そうすると聡明どころか、
計画的過ぎるぞ」
オチタがとぼけたことを言うと、
「聡明だから計画的なんだろ」
「ああ、そういう意味なのか？」
オチタは聡明の意味
を何か勘違いしていたようだった。
「で、どっちから自分の意見を言おうか？」
ホウセイはさっきの言葉を聴いて、
オチタも頼りにはならないと思って言うと、
「実は、俺一人はわかったんだけど、
もう一人は自信ないんだ」
と、
ホウセイが考えているように、
今回のナイフすり替えには二人の犯人がいることまでは
考えついていたようだったので、
「先に自信がある方から話せよ」
とホウセイは言った。
「じゃあ、遠慮なく。
確実なのは、
アスカちゃん、
どう？
違うかな」
「オチタもそう思ったか。
まったく同じ」

「そうか！
でも、役者だよなあ」
「まあな。
でも、動機もあるし、
この点は多分間違いないだろう。
もう一人はだな。
俺は」
と、
ホウセイが話しかけたところで、
「おい、大変だ！」
と、
木太郎がまっ青な顔でノックもしないでいきなり部屋に入ってきたのだった。

「くそた刺される？」

「どうした？
木太郎」
木太郎は
いつもおおげさなところがあるので、
オチタが冷静に訊くと、
「くそたが刺された」
とだけ、
木太郎は答えた。
「えー」
ホウセイはかなり動揺していたようだったが、
「本当かよ？」
と、
オチタは木太郎の言葉を聞いても冷静だった。
「本当だって、
死んではいないが、
刺されたことに間違いない。
とにかく、
永久とアユメちゃんじゃ、
時間が持たない。
早く、助けに来てくれ」
「だってさ」
オチタは木太郎の言葉を聞いても、
また冷静に言う。
しかし、
ホウセイの方は
「何のんびりしてんだよ。

行くぞ」
と言って、
木太郎を押しのけるようにして、
部屋を出て行き、
その後に、木太郎、オチタが続いた。

「あー」
ホウセイが部屋に入ると、
それぞれナイフを持ったチウメとアスカを、
アユメと永久が
後ろから羽交い締めにするように抑えて、
何かわめき合っている二人を必死で止めていた。
「あたし、もうダメ！
早く、チウメを抑えてよ」
「俺もだ」
泣きそうな声を出している、
アユメと永久に対し、
「ホウセイはチウメちゃんね。
俺はアスカちゃん。
木太郎はケンタを」
オチタは驚いている様子もなく、
意外に冷静にそう言ったのだった。

「新？名探偵？永久の意外な推理とくそたの部屋」

くそたの部屋に、
永久とくそたが入って、
もとめの寝ているベッドに行き、
永久がその右腕を触った。
「あー・・・」
「やっぱり、ダメか」
「俺の推理ははずれたか・・・」
「どいつも、こいつもヘボ探偵だな。
どれ、俺も確認する」
くそたは
永久の推理に期待はしていなかったのか、
あまりがっかりすることはなく、
もとめの右手を触ったのだった。
くそたはもとめの右手を触って、
その死を確認すると、
何か閃いたのか、
「もしかして・・・」
と呟くと、
天井の方を見ながら、
何か考え始めた。
永久はそんなくそたの様子を黙って見ていると、
しばらくして、
くそたが、
「レイカちゃんの意識戻ってないか、
確認に行かないか。
もしかしたら・・・」

と、

くそたはそこまで言うと、

永久の返事を待つまでもなく、

レイカのいる、

もとめの部屋に向かうべく、

もとめの部屋を出ようとしたのだった。

「もとめの部屋のレイカ」

もとめの部屋に向かうくそたを、
永久は追いかけた。

そして、
くそたと永久はもとめの部屋に入り、
レイカの息があることを二人で確認すると、
「まだか・・・
レイカちゃん、ごめん。
本当なら、
早く、
病院に運んであげればいいんだけど」
くそたはまだ意識が戻っていないレイカに向かって
言った。
「くそた、
謝るために来たんじゃないんだろう。
レイカちゃんに何か訊きたかったんだろう。
話してみろよ」
と、
永久は、
くそたの様子から見て、
思っていることを話した。
「ああ、そうなんだ。
レイカちゃんはあのとき異様に怯えていて、
ナイフを俺に向けたんだ。
あのときは、

俺はレイカちゃんは、
もとこに怯えていた、
と思ったんだけど、
違うじゃないかな」
「どういうことだ？」
「永久の推理は、
もとめ先生は死んだフリをしているだけだ
ということだったんだろ。
それは、
おそらく、
もとめ先生に自殺するほどの動機があるのか
という点と、
もとめ先生が自殺していたと言ったのは、
ヒトメちゃんとチウメちゃんの証言だけだけど、
二人とも様子が変だし、
最初は嘘を言っていたからな。
それから、
オチタが意外に元気なことだ。
俺は、
もとめ先生は、
本当は、
自殺ではないんじゃないか、
と思い始めて、
レイカちゃんに訊きたかったんだ」
くそたがそこまで話すと、
「発想は俺もくそたも似てるな。
もしかして、
オチタもレイカちゃんも、
もとめ先生は自殺したフリをするだけだ
と思っていたということだろう。

もしかしたら、
というか、
オチタはまだそう思っている可能性がかなり高い
と思う」
永久がそこまで話すと、
「でも、もとめ先生は死んだ。
だから、
それを確認したレイカちゃんは怯えた」
くそたが永久が考えていること
を先取りするように途中で口を挟んだ。
くそたの話しを聞いた永久は、
「たしかに、その可能性は高いな。
とすると、
俺とくそたと木太郎とホウセイ以外はみな共犯だった。
でも、
実は、
その共犯でさえ、
誰かに騙されていたということか？」
と、
自分の推理を話した。
「ああ、そうなるな。
なら、オチタを攻めれば、すべて全容がわかるかもしれないな」
くそたがオチタを呼び出すような話しをしだしたところで、
「うーん、だけど、そうなら、
木太郎とホウセイだけをあの部屋に残すのは危険じゃないか？」
と、
永久は言ったのだった。

「木太郎とホウセイだけ」

「アスカちゃんとチウメちゃんは
縛ったからな」
くそたが言うと、
「でも、
もし、
アユメちゃんとヒトメちゃんも
共犯なら、
木太郎とホウセイじゃな。
といって、
今もあいつら二人だけ・・・」
と、
永久が言うと、
「やばいかな?」
と、
くそたが心配そうに言うと、
「でも、
俺とくそたは、
バカだと思われているし、
オチタも騙されてるだけだろうから、
今なら、
下手なことはしないだろう」
「じゃあ、こうしよう。
一度、
俺と木太郎が交代する。
で、
永久は木太郎に今の話しをして、

木太郎とホウセイを交代させる。
そして、
次に、
オチタを俺の部屋に連れて行き、
もとめ先生の死を確認させて、
一気に、
永久とホウセイで、
自白に追い込め。
その間、
俺が、
アユメちゃんとヒトメちゃん
を見張るから」
くそたがそう言うと、
永久も頷き、
二人はホウセイたちのいる部屋に
向かったのだった。
（続く）

「木太郎とホウセイの一言」

くそたと永久の計画どおり、
永久は、
木太郎、
そして、
ホウセイにその計画を話した。
すると、
ホウセイが、
「その推理が正しいなら、
オチタのことは俺に任せてくれ」
と言ったので、
永久は、
ホウセイと一緒に、
オチタだけ呼びだして、
くそたの部屋の前まで
呼びだしたのだった。
すると、
ホウセイが、
くそたの部屋の前で、
「オチタ、
もうバレバレだよ。
中で、
もとめ先生が、
オチタと一緒に、
今後のことを相談したい
と話しているから、

今、呼びだしたんだよ」

と、

嘘を言ったのだった。

「ホウセイの嘘とオチタ」

ホウセイのその言葉に、
「せっかく、
忘れようとしているのに、
悪い冗談言うなよ」
と、
ホウセイと永久の予想に反し、
オチタは悲しそうな表情で、
ホウセイの顔を見た。
ホウセイは思惑がはずれたので、
ちらっと永久の方を見てから、
「冗談！
元気そうに見えたから思わずな」
と、
ホウセイは苦笑いしながら言った。
「で、話しって何だよ」
オチタが
今度は不機嫌そうな感じで言ったので、
ホウセイがまた永久の方を見ると、
横から永久が、
「とにかく、
中に入ろう。
ここじゃなんだからな」
と言って、
とりあえず、
その場をしのいだのだった。

「悔やむオチタ」

永久の言葉に、
「あー・・・
また、思い出したよ。
頼むから、
話しなら、
ここじゃなく、
他の部屋にしてくれよ」
と、
オチタが悲しそうな表情で言ったので、
永久とホウセイは顔を見合わせると、
「じゃあ、
すぐだから、
俺の部屋にしよう」
と、
ホウセイが言ったので、
3人はホウセイの部屋に入った。

部屋に入るとすぐ、
オチタは、
「俺のことを疑っていたんだろう」
と言って、
ホウセイと永久の顔を見たのだった。
二人はまた顔を見合わせると、
ホウセイが、
「正直に言おう。

あんなことがあったのに、
オチタが意外に元気だったんで、
騙されていたんだと思ったんだよ。
そう、
オチタは、
まだ、
もとめ先生が生きていると、
と思いこんでいると思ってな」
とはっきり言うと、
オチタは悲しそうな表情をして、
「それならいいんだけどな・・・」
と言って、
黙り込んでしまった。
そこで、
今度は、
永久がオチタが騙されている
と思った理由を話したのだった。
「あー、それなら話しはよくわかる。
いっそのこと、そうしておけば、
こんなことにはならなかったのにな・・・」
と、
オチタが悔しそうに言うと、
すると、
ホウセイが、
「そうだよな。
オチタに頼めば、
もとめ先生やみんなのために、
きっと永久が考えたことくらいやってくれたよな。
でも、
そうはしなかった・・・」

と呟くと、

「同じことは、
もとめ先生にも言えるだろう。
こんな回りくどいことをするなら、
もとめ先生にもとこの計画を話せば、
きっと・・・。
そうか！」

永久は、
何かこのとき閃いたようだった。

「想定内？と想定外？の行動」

「永久、どうした？」
永久の言葉を聞いて、
ホウセイが訊く。
「犯人は、
最初、
もとめ先生にもとこの計画を話して、
もとめ先生にもとこをやらせること
を想定したんだ。
だけど、
あのとき、
もとめ先生にもとこの計画を話して、
もとめ先生がその気になっても、
オチタが止めるに決まっている
と犯人は考え直したわけだよ。
そこで、
今回の芝居を思いついたんだ」
永久がそこまで話すと、
ホウセイもオチタも首を傾げ、
ホウセイが、
「うーん？
よくわからないな。
特に、
何で、
チウメちゃんのナイフとアスカちゃんのナイフ、
もとめ先生の本物のナイフとチウメちゃんのナイフ
をすり替える必要があったんだよ」

と、
ホウセイが訊くと、
「だから、
それは、
ひとつはもとめ先生を騙すこと、
もうひとつは、
もとこのナイフとチウメちゃんのナイフがすり替えられた
と思わせるためだよ。
でも、
犯人にとっては、
想定内の行動と想定外の行動が起きて、
こういうことになったんだよ
わからないかな?」
と、
永久は話したが、
ホウセイもオチタも首を傾げたままだった。

「永久の推理と疑問？」

「だったら、
順に話すよ。
いいか。
もとこの部屋から変な声が聞こえていることに、
俺も、
木太郎たちも気づいたんだろう。
だったら、
もとこと同じ2階にいる、
女子の誰かが気づいてもおかしくはないだろう」
永久がそこまで話すと、
ホウセイもオチタも、
「ああ」
「まあ、そうなるだろうな」
とそれぞれ言って、頷いた。
「で、もし、気づいた女子がいたら、
一人ではどうしようもないから、
こっそりと誰かに相談するだろう」
この永久の話しにも二人は黙って頷いた。
「そうしたら、当然、やられる前に、
もとこをどうするかを考えるだろう」
永久がわかりきったことを丁寧に説明し始めたので、
「そこまではわかったよ。
要するに、
女子の誰かがもとこの計画を知り、
それを誰かに相談し、
今回のナイフすり替え劇を考えたワケだな。

で、
まず、
その女子たちは何を考えたというんだよ。
永久に言わせれば、
想定内のことがその計画なんだろう」
ホウセイが、焦れったくなったのか、
早く、永久の考えが訊きたくなって、
そう言った。
「それはだな」
と、
永久が話しかけたところで、
オチタが、
「ちょっと待てよ。
今、ホウセイはその女子たちと言ったけど、
もとこの計画を知って、
相談した相手が何故女子だと断言できるんだ」
と、
オチタが、
ホウセイと永久が当然だ
と思っていることに異を唱えたのだった。

「オチタの異論と見えてきた真相？」

「それは・・・」
永久は当然だと思っていて深く考えていないことを、
オチタに指摘されて口籠もってしまった。
すると、
ホウセイが、
「要するに、
オチタは、
もとこの計画を知った女子の誰かが相談した相手が、
永久が言うよう女子でもなく、
また、
男子でもなく、
もとめ先生だった、
と考えているんだな。
だから、
もとめ先生は自ら死を選んだ、
と考えているんだな。
違うか？」
と言うと、
オチタは、
「ああ、ホウセイの言うとおりだ。
もとめ先生が今回のことにからんでいたから、
自ら死を選んだんだ、
と思う。
そうでなければ、
姉がとんでもない計画を立てていたことくらいで責任
を感じて、

自ら死を選ぶ理由はないと思うからな」
と、
オチタは言う。
「これは今までにない発想だな。
そうすると、
永久が話した想定内というか、
もとめ先生と女子の誰かが立てた計画はどういうことになるんだろうな・・・」
ホウセイがそこで考え込むと、
「何を計画していたかはまだわかないんだが、
俺は、
少なくとも、
ホウセイたちが、
先にもとこをベッドに縛りつけたということが、
もし、
もとめ先生と女子の誰かが
今回のナイフのすり替えの共犯だったとしたら、
それこそ、
想定外の行動だったと思う」
と、
永久が自分の考えを言うと、
ホウセイが、
「たしかに、
俺たちがあんなことをすることまでは予想できないよな。
だとすると、
もとめ先生たちは、
何を計画していたんだろう?」
と呟くように言うと、
3人とも考え込んでしまったのだった。

「オチタの考え方」

オチタが、
「もとこの計画では、
深夜にオオシマを使って、
俺たちをやる気だったわけだよな」
と話すと、
永久もホウセイも頷く。
「だとしたら、
もとめ先生がもし女子の誰かから
その計画を聞いていたら、
その前に、
もとことオオシマ
を動けないする必要があったことになるよな。
そうすると、
俺と木太郎とホウセイが、
もとこをベッドに縛りつけたまま、
警察に通報するか、
それとも、もとこを殺したフリをするか、
あるいは、
実際に、
もとこを殺す以外に方法はなかったわけだよな。
でも、
永久の話しを発端に、
もとこの計画がみんなにわかったときに話しあったように、
もとこを殺して、
自殺やオオシマのせいに見せかけることは
そう簡単ではないことはわかったよな」

オチタがそこまで話すと、
ホウセイが、
「じゃあ、
もとめ先生と女子の誰かの最初の計画、
もとこを実際に殺す予定ではなく、
そのフリをするつもりだけだった、
と考えているのか？」
と言うと、
オチタは、
「ああ、
もとめ先生の性格からすると、
俺はそう思う。
だから、
その前提で推理を進めて、
そのために何故、
わざわざナイフをすり替える必要があったのか
を考えてみた方が俺はいい、
と思う」
と言ったのだった。

「仮説と見えてきた真相？」

すると、
ホウセイが、
「それが難問だな。
もし、
もとめ先生が
直接もとこを殺したフリにする計画だったら、
もとめ先生が偽物を持ち、
もとめ先生が最初に所持していた本物のナイフを、
チウメちゃんか、
アスカちゃんの、
偽物のナイフと交換するだけでいいんだよな。
だけど、
今回は、
チウメちゃんのナイフがアスカちゃんのもの
と交換されて、
交換されたアスカちゃんのナイフと、
もとめ先生が所持していたナイフと
交換されているわけだよな。
うーん？
俺にはわからない」
と、
首を傾げながら言うと、
永久が、
「こういう仮説はどうだ。
いかにも殺人肯定派に見えるアスカちゃんと
もとめ先生が考えたことだとしたら、

その点は説明できるぞ。
いいか。
最初に、
もとこを殺そうとするのはアスカちゃん、
で、
誰も止めに入らなかったら、
耳元でもとこに死んだフリをしてください、
と言っておしまいだ。
だけど、
実際は、
誰かが止める可能性の方が高いので、
アスカちゃんが止められることを想定して、
その隙に、
もとめ先生がもとこを刺したフリをして、
同じようにもとこの耳元で死んだフリ
をするように囁く。
それが二人の計画だったんだ。
それだと、
偽物のナイフが2本必要になるからな。
それに、
チウメちゃんがナイフがなくなったことに気づく
と困るので、
本物をチウメちゃんのスーツケースに入れて
おいたんだ。
それで、
アスカちゃんのナイフとチウメちゃんのナイフ
が入れ代わったのは、
最初の計画では、
アスカちゃんを誰かが止めることを想定していたので、
アスカちゃんが自分の偽物のナイフ

をもとめ先生に渡してしまったからだけなんだよ。
その後、
念のため、
誰かが止めなかった場合をも想定しない、
といけないないことにも気づいた二人が、
チウメちゃんのナイフと本物をすり替えたんだ。
どうだ！
この仮説は？」
と言うと、
ホウセイもオチタも、
まったく予想していなかった仮説だったので、
二人とも考え込んでしまったのだった。

「仮説とオチタの反論」

しばらく、
考え込んでいたホウセイが、
「うーん、
ということは、
永久の推理のとおり、
今回の一件は、
アスカちゃんともとめ先生が仕組んだ
ってことでいいのかな。
アスカちゃんは自分のナイフ
を身に付けていたんだから」
と言うと、
永久が、
「俺はそう思った」
とだけ言うと、
オチタが、
「でも、
お風呂に入ったときなら、
ナイフをすり替えることは可能じゃないか？
それに、
アスカちゃんがずっと演技していたというのもなあ。
アスカちゃんは殺人肯定派だから、
むしろ、
チウメちゃんの方が怪しいんじゃないか？」
と、
自分の意見を言う。
すると、

ホウセイが、
「いや、それはおかしいぞ。
俺が提案した芝居に、
自分の部屋に偽物のナイフがある、
と言いだしたのが、
チウメちゃんだから、
彼女はそう言った時点で、
もとこを殺す気だった、
ということになり、
永久の推理と矛盾するからな。
やはり、
アスカちゃんともとめ先生が共犯だった
と考えた方がいいだろう」
と、
ホウセイがオチタの意見に反論した。
しかし、
オチタは、
「でも、そうだったら、
何で、
アスカちゃんは、
あのとき、
俺のやったことに疑問をぶつけたり、
正直に話さなかったんだろう。
もとめ先生も同じだ。
あの時点では、
あの二人は、
俺が持っていたナイフがチウメちゃんの部屋にあったナイフ
かどうかわからなかったんだし、
ホウセイがあんな提案したことも知り得なかったんだから、
責任を感じることもなかったんだからな。

それに、
そもそも、
アスカちゃんももとめ先生も、
もとこを殺す気はなかったんだから、その後でも、
本当のことを話す機会はいくらでもあったからな。
だから、
俺は永久の推理は違うと思う」
と、
オチタが言うと、
永久もホウセイもすぐに反論できず、
黙り込んでしまったのだった。

「ホウセイの思いつきと新たな推理」

しばらくして、
ホウセイが、
「そもそも、
もとめ先生にも、
アスカちゃんにも、
もとこへの殺意がなかった
と考えたのが間違いじゃないのか」
と思いついたことを言うと、
「でも、あの二人は
どちらも偽物のナイフを所持していたんだから、
もとこを殺すことは無理さ」
と、
永久がすぐホウセイの意見を否定すると、
すると、
「待てよ。
もとめ先生とアスカちゃんが組んで、
チウメちゃんを騙せば、
犯行は可能だったんじゃないか？
でも、
実際は、
俺たちがもとこを縛りつけて、
あの芝居を思いついたから、
二人の計画はダメになった。
そうは考えられないかな。
だから、
チウメちゃんがアスカちゃん

を疑っているんじゃないかな」
と、
ホウセイが言うと、
「まったく、
意味がわからないけどな」
と、
オチタが言うと、
「だから、
最初にもとこの計画に気づいたのは、
チウメちゃんなんだよ。
で、
アスカちゃんの自殺の演技を思い出して、
もとこを殺したフリにして、
どうにか丸く治めようと思って、
同じ演劇部のアスカちゃんに相談した。
そして、
さらに、
二人はもとめ先生に相談して、
もとこを殺したフリをする芝居を考えたわけさ。
でも、
アスカちゃんも、
もとめ先生も、
もとこの恐い性格を知っていたから、
そんな芝居で、
もとこの計画を阻止することは無理だと考えて、
チウメちゃんには内緒のまま、
3人で立てた計画を変更したんだよ」
と、
ホウセイがそこまで話したところで、
「で、

結局、
アスカちゃんともとめ先生が立てた計画は、
どういう計画なんだよ」
と、
永久が訊いたのだった。

「実は名？探偵永久の推理」

「簡単なことさ、
チウメちゃんを入れた3人の計画では、
アスカちゃんも
もとめ先生も偽物のナイフ
を持つ計画だったんだけど、
二人が立てた最初の計画は、
まず、
もとめ先生が持つナイフ
を本物にまた入れ替えることだったんだよ。
ただ、
それだともとめ先生が、
ただの犯人になってしまうから、
アスカちゃんがもとこを殺すフリをする際、
誰かが止めに入ったところで、
ナイフをもとこの手の届くところに落とす、
という計画だったんだ。
当然、
もとこのことだから、
そのナイフを拾うか、
拾おうとするから、
そこで、
もとめ先生がもとこの凶行を防ぐために、
いわば正当防衛の形でもとこを刺す。
ただし、
殺すことまでは考えていなかったと思うけどな。
それがチウメちゃん

をはずして考えた二人の最初の計画だ」
と、
永久が自信満々に話すと、
ホウセイが、
「それだと、
アスカちゃんが持っていたナイフを自分のナイフに交換し、
チウメちゃんのところにあるナイフは　本来、
チウメちゃんが持っていたナイフ
ということになるんじゃないのか？
それにだな。
もとめ先生は実際に、
偽物のナイフを持っていたんだぞ。
そうだよな。
オチタ」
と言って、
オチタが頷いたのをの方をちらっと見てから、
永久を少しバカにしたようにちらっと見ると、
永久はにやりと笑いながら、
「いや、
俺の話をよく聞いてなかったか？
今の俺の推理には続きがあるんだよ」
と言ったのだった。
（続く）

「実は名？探偵永久の推理２」

「続き？」
ホウセイが首を傾げると、
「いいか。
今、俺が話した計画は
実際にうまく行くと思うか？」
と、
永久が笑いながら言ったので、
「うーん？」
と、
オチタは首を傾げ、
「人数が多いから、
もとめ先生か、
もとこを誰かが止めに入ったら、
失敗するな。
というより、
失敗する確率の方が高いだろう」
と、
ホウセイは言った。
「ということだな。
オチタには悪いけど、
もとこをやる役は、
オチタか、
くそたくらいしかいないんだよ」
と、
永久は今度は真顔で話す。

「俺かくそたを利用する。
あのもとめ先生までもか?」
と、
オチタが少し悲しそうな表情で言うと、
「いや、
もとめ先生は
さっき話した計画しか考えていなかったんだろうな」
と、
永久が自信ありげに話すと、
ホウセイは、
「それは、
アスカちゃんがもとめ先生まで騙したということか?」
と言ってから、
永久の顔を見た。

「実は名？探偵永久の推理３」

「俺の考えはな。
俺の記憶では、
ホウセイたちから聞いたと思うだけど、
アスカちゃんは、
実際、
自殺未遂の演技をして、
誰だか忘れたが、
女子の誰かに止められているだろう。
だから、
その場に男子がいなくても、
自分でやるのと、
他人をやるのとでは違いがあるかもしれないけれども、
一人で、
あんな偽物のナイフでもとこを殺そうとしても、
止められることがわかっていたんだと思うんだ。
それに、
もとこが、
アスカちゃんか、
もとめ先生が耳元で囁いたとおり、
死んだフリをするかもわからないしな。
だから、
アスカちゃんともとめ先生が立てた計画が、
そのとおりうまくいかない確率の高いことを、
アスカちゃんだけはわかっていたはずなんだよ」
と、
永久が自信ありげにそこまで話したところで、

ホウセイが、
「その理屈はわかった。
でも、
本物のナイフはチウメちゃんの部屋にあったんだぞ。
アスカちゃんは、
もとめ先生を騙した後、
どうやって、
もとこを殺す予定だったんだ」
と、
疑問をすぐ口にしたのだった。

「実は名？探偵永久の推理４」

＊前回最後の方は、
アスカちゃんは、
もとめ先生を騙した後、
どうやって、
もとこを殺す予定だったんだ」
と、
疑問をすぐ口にしたのだった。
の誤りでしたので訂正しました。
失礼しました。

「俺たちの考えの根本的な間違いは、
犯人が、
チウメちゃんのナイフと交換した本物のナイフを使わせて、
誰かにもとこを殺させる、
と考えていたことなんだよ。
でも、
よく考えたら、
武器はナイフだけじゃなかっただろ！」
永久がそこまで話したとき、
ホウセイは、
「そうか、

それでもとこに偽物のナイフを拾わせること
を考えたわけか」
その話しで永久の考えていることが
わかったようだったが、
オチタは理解できないのか、
腕を組んで何か考えていたのだった。

「実は名？探偵永久の推理の弱点」

しかし、
しばらくして、
オチタは、
「永久の推理で、
本来、使われる武器はナイフではなかった、
という発想自体は面白い。
だがな、
永久の推理では、
チウメちゃん、
アスカちゃん、
もとめ先生たち3人の計画では、
アスカちゃんも
もとめ先生も、
偽物のナイフを持つ計画だったんだろう。
だったら、
ホウセイがもとこを縛りつけて、
もとこを殺したフリをする芝居を思いつき、
チウメちゃんが、
自分の部屋に偽物のナイフがある、
と言ったことと矛盾する。
永久の推理どおりなら、
チウメちゃんは部屋にあるナイフが本物だ
とわかっていないとおかしいからな」
と、
永久の推理の弱点を指摘した。
「たしかにそうだな。

チウメちゃんが、
自分の部屋に演劇用の偽物のナイフがある
と言ったのを俺ははっきりと聞いているからな。
うーん。
また、
振り出しか」
と、
ホウセイががっかりしたように言うと、
すると、
「いや、
俺の推理にはまだ続きがある。
アスカちゃんは、
もとめ先生と二人で計画を立てた後に、
チウメちゃんをさらに騙したのさ。
アスカちゃんは、
自らした自殺の芝居のことをチウメちゃんに話して、
アユメちゃんやヒトメちゃんに、
ナイフが偽物だ、
とバレると困るから本物を使う、
と言って、
騙したのさ。
それで、
本物だと危険だから、
チウメちゃんに自分がもとこを殺すフリをしたとき、
できれば、
アユメちゃんもヒトメちゃんにも頼んで、
必ずアスカちゃん自身の行動を止めてくれるよう頼んだわけさ。
そうして、
アスカちゃんに気をとられている間に、
もとめ先生がもとこを刺した芝居をする方が、

計画がうまく行く、
と言って騙したのさ。
それなら、
チウメちゃんが、
自分の部屋にあるのは偽物だ、
と思い込んでも不思議はないからな。
これでナイフの移動の説明はつくだろ」
永久は自信ありげに話したのだった。

「実は名？探偵永久の推理のまとめとオチタの疑問」

ホウセイは、
「そうすると、
今回の事件は、
まず、
もとこの計画に気づいたチウメちゃんが、
アスカちゃん、
そして、
もとめ先生に相談して、
もとこを殺したフリにする計画
を3人で立てたということだな。
その際、
アスカちゃんのナイフがもとめ先生、
チウメちゃんのナイフが
アスカちゃんにそれぞれ渡されたわけだな。
そして、
その後、
アスカちゃんともとめ先生の間で、
もとこを殺したフリにするだけでは、
もとこの計画を阻止するのは無理だ、
という話し合いが行われ、
結局、
二人の間では、
チウメちゃんには内緒で、
もとめ先生がもとこを殺す
ということになったわけだな。
だけど、

アスカちゃんは、
その後考え直して、
男子がいた場合、
もとめ先生の行動が止められたり、
失敗する可能性に気づいて、
アスカちゃんが落とす予定だったナイフ
を拾ったもとこを、
くそたあるいはオチタに殺させるか、
重傷を負わせることを考えたわけだな。
この時点では、
アスカちゃんのナイフはもとめ先生、
チウメちゃんのナイフは
アスカちゃんが持っていたわけだ。
だけど、
アスカちゃんは自分が自殺未遂の芝居をして
失敗したことがあるので、
自分が偽物のナイフを持っていると、
アユメちゃんやヒトメちゃんにバレる可能性がある
とチウメちゃんに話して、
本物のナイフを自分が持ち、
チウメちゃんのナイフは元の場所に戻すこと
をチウメちゃんに話したということか。
で、
このことは敢えてもとめ先生には伏せていたわけか。
うーん。
なんとなく、しっくりこないが、一応辻褄は合うな」
と、
ホウセイが言うと、
オチタが首を傾げながら、
「うーん?

それなら、
アスカちゃんはともかく、
チウメちゃんは本当のことを話してくれてもいいんじゃないかな。
それに、
もとめ先生は本物のナイフを持っていないとおかしいんじゃないか？」
と、
永久の方を見て言ったのだった。
（続く）

「実は名？探偵永久の推理のまとめとオチタの疑問について」

すると、
ホウセイが、
「ナイフの方は永久の推理でも説明がつくぞ。
まず、
最初にもとめ先生に渡したナイフは
アスカちゃんのものではなく、
チウメちゃんのナイフで、
その後、
アスカちゃんが、
もとめ先生の持っているチウメちゃんのナイフと、
本物のナイフだともとめ先生に嘘
を言って自分の偽物のナイフと、
を交換したんだろう。
それで、
さらに、
アスカちゃんは、
本物のナイフをチウメちゃんの偽物のナイフ
と交換した、
ということになるんだろうな」
と自分の意見を話すと、
「ああ、そういうことになるかな」
と、
永久はそれだけ言って、
オチタは、
「まあ、そこはしょうがないか」
とだけ言った。

そして、
ホウセイが、
「永久の推理の問題点は、
何故、
チウメちゃんが本当のことを話してくれない
ということだな。
その推理どおりなら、
正直に話しても、
もとこのことも、
もとめ先生のことも、
チウメちゃんには
ほとんど責任はないからな」
とまた自分の意見を言うと、
「いや、
アスカちゃんがシラをきりとおしている以上、
アスカちゃんが
俺の考えたとおりのことをしたという証拠がない以上、
チウメちゃんがいくら正直に話しても、
俺たちには信用してもらえない、
と思ったんだろう。
特に、
例の芝居で自分のナイフを使おう、
と言いだしたのはチウメちゃん本人だからな」
と、
永久がまた自信ありげに話すと、
「うーん、そういう考えもあるけど、
どうもその推理はしっくり来ないんだよな。
その推理の場合、
もとめ先生にも多少は責任はあるかもしれないが、
自殺するほどのことではないと思うんだよな。

それに、
何故、
もとめ先生が自殺したと思われるくそたの部屋に、
ホウセイが
別の場所に忘れたはずの本物のナイフが置かれていたかだ。
可能性からは
そのナイフを置けた人間はチウメちゃんしかいないからな。
だけど、
永久の推理のとおりなら、
チウメちゃんにそんなことをする必要はないからな」
オチタがまだ納得できない、
という表情で言うと、
「じゃあ、
チウメちゃんだけ連れだして、
今の推理をぶつけてみるか」
と、
ホウセイは言ったのだった。

「オチタの疑問とチウメ」

しかし、
オチタは、
「もう少し、
話しを詰めてからチウメちゃん
と話しをした方がいいような気がするんだ。
今の永久の推理だけだと、
チウメちゃんもそうだけど、
アスカちゃんも、
もとめ先生とチウメちゃんを騙したのは事実でも、
二人とも犯罪にはならない。
なのに、
二人とも、
互いに疑りあっているし、
本当のことを話さない。
しかも、
もとめ先生は死んだ。
それから、
レイカちゃんを見つけたときのあの怯えた態度、
アユメちゃんとヒトメちゃんの沈黙、
俺にはまだ何か裏があるように思えるんだよ」
と、
腕を組みながら言うと、
「オチタは、
もとめ先生のファンだから、
もとめ先生がアスカちゃんと組んで、
俺たちには相談せず、

もとこを殺そうと計画したこと
を理解したくない気持ちはわかるんだけど、
多分、永久の話しが真実なんだろう。
それに、
二人とも本当のことを話せないのは、
アスカちゃんはもとめ先生とチウメちゃんを騙していて、
その結果、
もとこももとめ先生も死ぬきっかけを作っているし、
チウメちゃんの場合は、
もとこはともかく、
もとめ先生を自殺に追い込んでしまったことが
大きいんじゃないかな。
だから、
俺は、
まずチウメちゃんに話しを訊いた方がいい
と思う。
それに、
最初から永久の推理を話す必要はないからな。
質問の仕方を工夫すれば、
本当のことを話してくれると思うけどな。
俺は」
ホウセイは、
オチタの意見とは反対で、
すぐにでも、
チウメから話しを訊きたいようだった。
永久も同意見で、
ホウセイの言葉に黙って頷いた。
しかし、
オチタが、
「あと１０分だけ時間をくれ。

もう少しだけ考えてみたいんだ」
と言って、
頭を軽く下げると、
「わかったよ」
「気持ちの問題だからな」
と、
ホウセイと永久はそれぞれ言ってから、
頷いたのだった。

「オチタの疑問ともとめ」

オチタは１０分だけ待ってくれと言っていたが、
しばらくすると、
「俺には、
もとめ先生が自殺したと思われているくそたの部屋に、
偽物のナイフだけじゃなく、
血のついた本物のナイフが置かれたいた理由がどうしても理解できないんだよ。
やり方によっては、
偽物のナイフでも自分の手首を切ることは可能だけど、
でも、
どうも、
そこが一番ひっかかるんだよあ。
本当に偽物のナイフで手首を切ったのかなあ。
それに、
もとめ先生は、
本当に自殺なのかなあ」
と、
オチタが首を傾げながら言うと、
「ナイフのことは、
レイカちゃんが、
アスカちゃんの持ち物であった偽物のナイフを持って隠れていたことからも、
もとめ先生がそれを使った、
と思われる状況だから、
そのナイフを本物のナイフだ、
と思いこんだということで、

偽物のナイフが使われたと推測はつくだろう。
それに、
もとめ先生が自殺じゃなかったら、
殺人ということになるんじゃないか？
だとしたら、
一人でもとめ先生の左手首を切るのは
そう簡単じゃないぞ」
と、
ホウセイが言うと、
「いや、そこだよ。
もとめ先生は最初のときと同じで、
自殺のフリをするつもりだけじゃなかったのかな。
でも、
使ったナイフが本物にすり替わっていたから、
本当に手首が切れちゃったんじゃないかな」
と、
オチタが今まで誰も考えていないこと
を言いだしたのだった。

「オチタの思いつきのもう1本のナイフとパズル」

「オチタ、
それって、
くそたの部屋でもとめ先生が持っていたナイフを
誰かがわざとナイフ
を偽物から本物にすり替えたってことか？」
と、
ホウセイが言うと、
「その可能性があると思う」
オチタが答える。
「頭がこんがらがってきたぞ」
「でも、ホウセイがどこかに置いた本物のナイフが
くそたの部屋で見つかったことが
どうしてもおかしいように思えてきたんだよ。
それに、俺、今でも、
正直、もとめ先生が自殺したとか考えられないんだよ」
と、
永久の言葉に、オチタが答えると、
「まあ、
たしかに、くそたの部屋に
俺が本物のナイフを置き忘れたことはないから、
その疑問は永久の推理でも消えないからな。
なんか、
パズルみたいになってきたな」
と、
ホウセイが言うと、
「やはり、チウメちゃんが鍵かな？」

と、

オチタは言った。

「ナイフの移動とパズル」

「チウメちゃんもそうだが、
レイカちゃんとヒトメちゃんもそうだよ。
もとめ先生と４人だけになった後のチウメちゃん、
レイカちゃん、ヒトメちゃんの行動がどうも不自然だからな。
それに、
ホウセイが落とした本物のナイフをくそたの部屋に運べたのは、
もとめ先生を除くと、
あの３人以外にはいないからな。
チウメちゃんも、
ヒトメちゃんも、
現時点では、
ホウセイが落とした本物のナイフは、
最初からくそたの部屋にあったような話し
をしているからな。
でも、それはありえない。
仮にもう１本、
本物のナイフがあっても、
あの出来事の前に、
くそたの部屋に誰かが持ち込む可能性はほぼない。
だから、
今回の出来事を解く鍵は、
ナイフの移動、
特に、
ホウセイが落としたナイフを、
何故、
くそたの部屋に持ち込んだのかだ

そこを先に考えないと、
いくらチウメちゃんやヒトメちゃんに話しを聞いても、
二人またはどちらかが関与していたら、本当のことは自白させられないぞ」
と、
永久が自分の推理に弱点があることに気づいたのか、それを裏付ける証言か何かが欲しいのか、自分の意見を話すと、
「よし！
この難解なパズルを俺たち3人で解くか」
と、
ホウセイは言った。

「ナイフの移動パズルと逆順」

永久が、
「そうだな」
と言うと、
オチタが、
「ナイフの移動の問題だけど、
今までは最初から考えていたけど、
逆から考えていったらどうだろう？」
と、
パズルのようなナイフの移動の問題について提案した。
「逆からか？
それも面白いかもな。
よし！
俺が整理するから、
違っていたら言ってくれ」
と言って、
ホウセイは話し始めた。
「まず、
もとこの胸に本物のナイフが１本。
次に、
もとこの部屋でチウメちゃんの演劇用のナイフが１本。
これは問題ないよな。
次に、
レイカちゃんの手元にアスカちゃんの演劇用のナイフが１本。
最後は、
くそたの部屋に本物のナイフが１本。
これが最終結果でいいな。

その後、
これらを回収したことは無視していいな」
ホウセイがそこまで話すと、
永久もオチタも頷く。
「次に、
確実なのは、
もとこの胸に刺されたナイフは、
レイカちゃんからオチタ、
レイカちゃんはチウメちゃんの部屋から持ち出した。
くそたの部屋にあったナイフは、
俺がどこかに置き忘れたもので、
そのナイフを、
俺はくそたから預かった。
くそたは、
そのナイフをキッチンで見つけた。
ただし、
このナイフをくそたの部屋まで運んだ人物は謎のままだ。
で、
レイカちゃんが持っていたナイフは、
くそたの部屋にあったもので、
その前はもとめ先生が持っていた。
これもほぼ間違いないが、
その前がまだはっきりしていない」
「で、
問題はもとこの部屋にあったチウメちゃんのナイフを
アスカちゃんが持っていて、
それをもとこの部屋に落としたのかどうかだ。
ここが、
ナイフの移動で一番重要な鍵だ、
と俺は思う」

ホウセイがそこまで話すと、
永久もオチタも黙って頷いた。

「オチタの疑問とホウセイの閃き」

「永久の推理だと、
アスカちゃんが故意に落とした、
ということになるはずだが、
俺には、
永久の推理が正しかったとすると、
その理由がまったくよくわからない」と、
オチタは自分の思っていることを素直に話した。
すると、
ホウセイが、
「すると、
まさかとは思うが、
実は、
アスカちゃんとチウメちゃんが共犯なんじゃないのかな。
そうすると、
辻褄が合うことが多いんだよ」
と、
ホウセイはオチタの話しを聞いて、
何か閃いたようだった。
「あのさあ、
よく、
一見、
仲が悪そうに見える奴らや、
敵対しているような奴が、
実は共犯だった、
という2時間ドラマがあるだろう。
もしかしたら、

アスカちゃんとチウメちゃんが
お互いに疑り合っているような言動をしているのは、
お芝居じゃないのかな。
二人とも、
演劇部だし。
それに、
仮にだよ、
もとこの計画だけじゃなく、
もとこが撮影した例の裸の画像を二人が見たとしたら、
あのおとなしそうなチウメちゃんにも
もとこへの殺意が生まれてもおかしくないんじゃないかな。
少なくとも、
この事件が起きるまでは、
二人が凄く仲が悪いという感じではなかったからな」
と、
ホウセイはアスカ、チウメの共犯説を話し始めたのだった。

「ホウセイの閃きとオチタの疑問」

ホウセイの話しを聞いた、
オチタは、
「まあ、
そういうオチはよくあるし、
アスカちゃん、
チウメちゃんが共犯なら、
ホウセイが芝居を思いつかなくても、
チウメちゃんが芝居を提案すればいいわけだから、
その点は理解できるけど、
木太郎とホウセイが先にもとこの計画に気づいて、
もとこをベッドに縛りつけることまでは、
二人でも予想できなかったはずだぞ。
この点はどう説明するんだ」
と言うと、
すると、
ホウセイは、
予めその点を考えていたのか、
「二人の計画では、
もとこの計画を先にみんなに話し、
俺たちがしたように、
もとこを全員で縛り上げてから、
その後のことを殺人肯定派と否定派の二つのグループに分けて、
ああいうことになることを計画していたんじゃないのかな」
と、
言葉の割には自信満々の表情で話したのだった。
永久はホウセイの話しを訊くと、

「なるほど、
アスカちゃんとチウメちゃんは、
俺とかホウセイたちに関係なく、
もとこの計画を話す気だったわけか。
だけど、
その前に、
ホウセイたちがもとこの計画に気づき、
もとこをベッドに縛りつけた
というわけだな。
そこは想定外とも言えるけど、
結果は同じだったわけか」
と言って、
頷いたのだった。
しかし、
永久とは反対に、
オチタが首を傾げていたのだった。
「おい、どうした？
俺の推理におかしなところはあるか？」
と、
ホウセイが訊くと、
「アスカちゃんとチウメちゃんが共犯だとすると、
誰にもとこを殺す芝居をやらせるつもりだったのかな。
俺が殺人否定派に回ることを予想できたのかな？
まず、そこが疑問だな」
と、
オチタは自分の疑問点を話したのだった。
（続く）

「ホウセイの推理と残る謎」

「別にオチタがどちらに入ろうか、
関係ないじゃないか。
少なくとも、
ホウセイと木太郎はもとこのファンだったことは
みんなもわかっていたから、
殺人否定派になることは容易に想像がついてただろうからな」
と、
永久が言うと、
「でも、
それでも、
殺人否定派は、
チウメちゃん、
レイカちゃん、
ホウセイ、
木太郎の４人で少数だから、
多数決になれば、
殺人肯定派の言うとおりになって、
芝居どころの話しじゃなくなるだろう」
と、
オチタがすぐ言い返した。
「いや、そうとも限らない。
ヒトメちゃんははっきり言って、
本心は、
殺人否定派だ。
でも、
アユメちゃんとアスカちゃんに押し切られて、

殺人肯定派になっただけだから、
オチタが殺人肯定派に回ったら、
アスカちゃんがヒトメちゃんを殺人否定派に
持っていくつもりだったんだろう」
と、
今度はホウセイが言う。
「じゃあ、
レイカちゃんも殺人肯定派に回ったら？」
と、
さらにオチタが首を傾げながら言うと、
「そのときは、
アスカちゃん自身が
ヒトメちゃんと一緒に殺人否定派になればいいだけの話しだ。
木太郎、
ホウセイの意思が読めていたから、
両派同数にするのは簡単だから、
そこはあまり重要じゃないよ。
問題はその後だな」
と、
永久は言ったのだった。

「ホウセイの推理とオチタの次」

「問題は演劇用のナイフだと偽って、
誰にもとこを殺させるつもりだったと、
ホウセイは考えているのかだ。
まず、
もとめ先生は
偽物のナイフを持っていたから違うだろ。
チウメちゃんとアスカちゃんも
本物か偽物かは区別が違うから違うだろ。
それから、
ホウセイと木太郎はもとこのファンだったから、
それも違うだろう。
オチタはもとめ先生のことがあるから、
殺人否定派に回るとまでは読み切れないから、
多分、それも違うだろう。
それから、
レイカちゃんも
やはり殺人否定派に回るか読み切れなかったから違うはずだ。
とすると、
残るはヒトメちゃんだけだが、
彼女がそこまで引き受けるかな」
ホウセイの推理に永久が一番疑問を感じているのは、
アスカとチウメが共犯なら、
誰にもとこを殺したフリをさせるつもりだったか
ということだった。
「たしかに、
くそたとアユメちゃんはどう見ても、

殺人肯定派って感じだから、
オチタとレイカちゃんが殺人肯定派になったら、
ヒトメちゃんしか残らないが、
引き受けるかどうかも疑問だけど、
いかにも演技が下手そうだからなあ。
うーん？」
と、
ホウセイは永久に自分の推理の欠点を指摘されて考え込んだ。
「俺かレイカちゃんのどっちかは殺人否定派に回る
と考えていたのかもしれないけど、
それだと、
確実性はないよな」
オチタも独り言のように呟いた後。
「待てよ。
木太郎はすぐ顔に出るから別にして、
ホウセイはもとこのファンで、
もとこを殺す芝居を提案したくらいだから、
逆に、
もとこを殺す役を喜んで引き受けると
アスカちゃんとチウメちゃんは考えていたんじゃないのかな？」
と、
オチタが思いついたことを口に出すと、
「永久が言っているのは、
殺人肯定派には、
本当に殺したと信じさせることができる生徒じゃない
といけないから、
もとこのファンの木太郎と俺は
もとこを殺す役の候補にはならないってことなんだよ。
そうだよな、永久」
と、

ホウセイが言うと、
「うん、そのとおりだよ」
と、
永久は言ってから、
また、
何か考え始めたのか、
腕を組んでしまったのだった。

「限定される刺殺犯役と思い込み」

永久はしばらくすると、
「そうか。
もしかしたら、
俺たちには思い込みがあるのかもしれない。
まず、
もとこの刺殺役にはなりえない人物をもう一度、
整理しよう。
まず、
偽物のナイフの持ち主である、
アスカちゃんとチウメちゃんは除外できる。
それから、
もとこのファンだったホウセイと木太郎。
この４人はもとこの刺殺役にはなりえない。
ここまではいいかな？」
と、
ホウセイとオチタは黙って頷く。
「で、
問題はこの後だ、
俺たちは殺人否定派の中に、
もとこの刺殺役がいると思いこんでいたが、
殺人肯定派の中にもとこの刺殺役がいた
と考えることはできないかな？」
と、
永久は、
ホウセイもオチタもまったく考えていないことを言いだしたのだった。

すると、
「永久、
殺人肯定派がもとこを殺したフリをするかよ」
と、
ホウセイがすぐ言い返したところで、
「そうかな？」
と、
永久は何か考えがあるのか、
にやりと笑った。

「刺殺犯役と思い込みと永久の発想」

すると、
永久が、
「発想を変えたら、どうかな。
もとこを殺したいと思っていた生徒たちが
怖れていたのは、
その事実がバレることだ。
要するに、
もとこを殺しても
自分は殺人犯にはなりたくないというのが、
殺人肯定派の本音だろ」
と、
そこまで話すと、
「だから、ナイフをすり替えて、
誰かに演技だと思わせて、
もとこを殺すつもりだったんだろ」
と、
ホウセイが永久の話しを最後まで聞かずに言い返すと、
「いや、
そこがある種の思い込みなんだよ。
いいかな。
もし、
アスカちゃんでもチウメちゃんでも、
オチタでもその他の生徒でも誰でもいいけど、
本物のナイフを偽物だと騙してもとこを殺すフリをするようにして、
実際にもとこを殺させたとしたら、

これは立派な殺人になるだろ」
と、
永久がそこまで話すと、
また、
ホウセイが、
「だから、
俺たちはその犯人が誰かをずっと考えてきたんだろう」
と、
永久の話しを最後まで聞かず言い返すと、
「ちょっと、
最後まで話しを聞いてくれよ。
オチタがああいう形で
もとこを刺してしまったのは、
ナイフのすり替え犯には
まったくの想定外だったんだよ。
ホウセイたちが先にもとこの計画に気づいて、
もとこをベッドに縛りつけることなんか、
すり替え犯はまったく想定してなかったし、
そもそも、
想定できるはずがないじゃないか。
違うか？」
永久はそこまで話すと、
今度は自分の推理に同意を求めるように、
ホウセイとオチタの顔を順に見た。

「永久の意外な推理？」

ホウセイが、
「まあ、
俺たちの行動が犯人にとって、
想定外と言えば、
そうなるけど、
ナイフがすり替えられていたのは、
事実なんだぞ。
とにかく、
その先を話してみろよ」
と、
首を傾げながら言うと、
「俺が考えるに、
想定外なのは、
それだけじゃないんだ。
犯人より、
先に、
くそたが持ち出してきた、
キッチンにあった本物のナイフ
をホウセイに渡したことも想定外だったんだよ。
おそらく、
犯人がもとこを殺そうと考えていた犯行場所は
ゲームをやっていた食堂だ、
と俺は思っているんだ」
永久が、
ホウセイもオチタも考えていないこと
を言いだしたので、

二人とも、
驚きの表情をした後、
ホウセイが、
「おい、
今までの話しと全然違うじゃないか」
と、
平然とした表情の永久の顔を見たのだった。
（続く）

「永久の意外な推理？2」

「いろいろ考えているうちに、
考えが変わっただけさ。
いいかな。
もう一度確認を含めて話すけど、
ナイフをすり替えた犯人が想定できなかったことは、
ひとつは、
ホウセイたちも、
もとこの計画を知って、もとこの部屋で、
そこにあったベッドにもとこを縛り上げてしまったこと、
そして、
もうひとつは、
くそたが台所にあった本物のナイフを持ち出し、
ホウセイに渡してしまったことだ。
さらに、
俺がついさっき気づいたのは、
俺がもとこの部屋で何か変な声を聴いたとくそたに話して、
くそたがそれを女子たちに話してしまったことも
ナイフをすり替えた犯人には、想定外の出来事じゃなかったか、
ということなんだよ。
仮に、ナイフをすり替えた犯人が凄く頭が良くても、
この3つの事実までは想定不能なわけさ」
永久がそこまで話すと、
「俺には永久の言いたいことがちっともわからないぞ。
ホウセイは理解できたか？」
と言って、
オチタがホウセイの方を見たのだった。

「永久の推理？は理解不能」

「俺も途中から永久が何を言いたいのか、わからなくなったな」
と言って、
ホウセイもオチタの方を見てから、永久の方を見る。
すると、
「わからなくても、無理はないさ。俺だって、考えているうちに、正直、わからなくなったんだから」
永久が頭を掻きながら言う。
「おい、それはないだろ。また、白紙か。俺なんか、木太郎、くそたの変な推理に付き合って、頭がパニック状態なのに、いいかげんにしてくれよ」
と、
ホウセイが憮然とした表情で言うと、「ごめん。でも、事実の解明は少しづつ、いや、かなり進んでいると俺は思うんだ。今回の事件が、

さっき話した想定外の3つのことがあるので、
単純なナイフのすり替え事件ではないということは、
はっきりわかったんだからな。
それに、
想定外の出来事はひとつだけじゃなく、
しかも、
想定外の出来事を起こしたのは、
全部男子だ、
ということは、
俺は結構重要だと思うんだよ」
と、
永久は、
わからなくなったと言いつつも、
その頭の中には、
何かひとつの真実のようなものが
おぼろげに浮かんでいるかのような口ぶりだった。

「永久の推理？とホウセイの一言」

永久の話しに、
オチタは、
いまだ永久が何を考えているのか
まったくわかっていないようだったが、
ホウセイは、
永久のそこまでの話しを聞いて、
「まさか、
永久は今回のナイフのすり替えは
女子生徒全員が考えたことだと言いたいのか？」
と、
自分で思いついたことを言うと、
「惜しいな。
俺は、
もとめ先生と女子生徒全員が考えたことではないかと思っているんだ。
動機は、
もとこの計画だけでなく、
例のもとこがコンクールのために浴室で取った
裸の写真のこともあるんじゃないかと思うんだよ。
だから、
男子には一切相談しなかったんじゃないかとな」
永久がそこまで話すと、
「殺人とかまでは考えそうもない、
チウメちゃんやレイカちゃんやヒトメちゃんも、
その二つが重なると殺意を抱いても不思議はないな。

だけど、
問題は、
どうやってもとこを合法的に殺害しようとしていたかだが、
その点まで永久は考えているのか」
と、
ホウセイは永久の考えが正しいことだと前提するような感じで永久に訊いたのだった。

「永久の推理？と計画？」

「まず、
もとこの犯行予定は、
もとめ先生との対決が終わり、
もとめ先生を２０７号室に閉じこめ、
生徒全員が寝静まった後だ。
ま、これは間違いない。
とすると、
女子達ともとめ先生が、
もし、
もとこを殺すとしたら、
もとめ先生が２０７号室に入ってから、
生徒達が寝静まる前だった、
と俺は思うんだよ」
永久がそこまで話すと、
「何で、
ゲーム中じゃないんだ？」
と、
オチタが素朴に疑問に思ったことを言うと、
「それは、
単に実際ゲームは無事終わったし、
多分、
計画の時点では、
もとこともとめ先生のどちらが勝利するか
わかっていなかったからだと思うよ」
と、
永久が答えると、

「まあ、
永久の推理どおりなら、
それはそれでいいけど、
でも、
何で、
ナイフをわざわざすり替えたのさ？
永久の推理どおりなら、
偽物のナイフをもとめ先生とアスカちゃんが、
本物のナイフはチウメちゃんの部屋とキッチンに、
それぞれひとつある状態で犯行は行われる予定だったんだろ。
それなら、
わざわざチウメちゃんの部屋に本物を置く必要があるんだよ」
と、
今度はホウセイが疑問に思ったことを口にする。
すると、
永久が、
「キッチンには、
2本の本物のナイフがあった。
俺が考えるには、
女子達の計画では、
その2本のうち、
1本を偽物にすり替える必要があったから、
チウメちゃんのナイフとキッチンにあった本物のナイフ
をすり替えたんじゃないかな」
と、
永久がまた答えると、
ホウセイもオチタも永久が何を考えているのか
わからないので、
反論も質問せず、
二人とも腕を組んで考え込んだのだった。

（続く）

「オチタの疑問と推理」

永久は、
ホウセイとオチタが考え込んでいる間、
黙っていた。
そして、
しばらくすると、
ホウセイが、
「そうすると、
俺たちの想定外の行動が起きなければ、
女子たちは、
もとこともとめ先生を喧嘩させた後、
もとこにはキッチンですり替えた偽物のナイフを持たせるようにして、
他方、
もとめ先生には本物のナイフを持たせて、
正当防衛でもとめ先生にもとこを殺させる計画だったということか？」
と言うと、
永久は黙って頷いた。
すると、
すぐ、
オチタが、
「それなら、
女子たちは、
何で本当のことを俺たちに話さないのだろう。
それに、
レイカちゃんのあの凄い怯えようは

どうしてだったのだろう。
永久の推理どおりなら、
俺たち3人がもとこを縛りつけ、
ホウセイがもとこを殺したフリをする
という芝居を提案した時点で、
少なくとも、
レイカちゃんもチウメちゃんも、
チウメちゃんの部屋にあるナイフを使えば、
本当にもとこを殺すことになる
ってわかっていたはずだろう。
それなのに、
レイカちゃんもチウメちゃんも、
それを承知で俺に本物のナイフを渡して、
もとこを殺させたというのか？
それもおかしな話しだし、
そもそも、
それなら、
もとめ先生には責任はないから、
自殺する理由はまったくない。
やはり、
チウメちゃんとレイカちゃんはナイフのすり替えは知らなかった
と考えるべきだろう。
とすると、
ナイフのすり替えを考えたのは、
アスカちゃん、アユメちゃん、ヒトメちゃん、もとめ先生、
最大４人の中の数人だけじゃないのかな」
と言って、
オチタは永久の推理を否定して、
自分の考えを話したのだった。

「オチタの意見と永久の推理で大混乱？とホウセイの指摘」

すると、
ホウセイが、
「オチタ、
自分で話していて、
自分の意見の矛盾がわからないのか？
俺には、
永久の推理もだが、
オチタの意見もまったく理解できないぞ。
ナイフのすり替え犯が、
女子のうちのレイカちゃんとチウメちゃん以外だ、
というオチタの意見では、
レイカちゃんが異常に怯えていた理由の説明にも、
もとめ先生が自殺した理由の説明にもなってないじゃないか。
永久の推理を前提とすると、
今回のことは、
まさに事故だ。
特に、
俺たちが先にもとこの計画を知って、
もとこを縛りつけて殺す芝居
を考えたことによる事故だから、
女子の誰かかもとめ先生が
巧妙にもとこを殺人する計画を立てたとしても、
俺たちの行動がなければ、
ああなることはなかったんだから、
レイカちゃんが異常に怯えたり、
もとめ先生が自殺する理由はない。

また、
アスカちゃんとチウメちゃんが、
演技か本気かはわからないが、
双方で疑り合う理由はない。
俺はいろいろ考えてみたんだが、
本当に、
もとこは俺たちを皆殺しにする計画だったのかな。
それから、
もとめ先生は自殺だったのかな。
思い込みを全部捨てるなら、
そこまで考えないといけないんじゃないか？
この解けない謎は、
ある思い込みにあるんじゃないか？」
と、
ホウセイはそんなことを言いだしたのだった。

「ホウセイの閃きとムキになるオチタ」

「ある思い込み？」
永久はホウセイのその言葉を聞いて、
すぐ聞き返した。
「ああ、正確には騙されていた
ということかもしれないけどな」
ホウセイが曖昧なことを言ったので、
「騙されていたって、
何についてだ？」
「それはな。
二人とも落ちついて聞けよ。
もとこは、
もとめ先生は別にして、
俺たちまで皆殺しにするつもりだったのか、
って、
ことだよ」
オチタの問いに、
ホウセイがそれだけ答えると、
「もとこの計画は、
もう俺たちが確認していることじゃないか」
と、
もとこを結果的に刺したオチタがムキになって、
大声を出す。
「だから、
落ちつけって、
別に、
オチタを責めてるわけでもないし、

可能性を指摘しているだけなんだよ。
俺が永久の推理を聞いて、
閃いたというか、
一番、気になったのは、
レイカちゃんのあの怯えようと、
もとめ先生が本当に自殺したのか、
ということなんだ。
いいか。
くどいが、落ちついて聞けよ。
もとめ先生は自殺じゃなくて、
誰かに殺されたと考えると、
辻褄が合うことを俺は今気づいたんだよ」
と、
ホウセイが真顔で言うと、
「そんなワケあるか？
もとこ以外に、
あのもとめ先生に殺意
を抱く生徒がいるわけないだろ。
そういうことまで疑いだしたら、
今まで、
俺たちが苦労して考えたことは
全部無駄になるじゃないか！」
オチタは、
今度はもとめのことまで
ホウセイにそんなことを言われたので、
ムキになって大声を出したのだった。

「ホウセイの悩みと意外な発言とオチタはずし」

ホウセイは、
オチタがかなりムキになり始めていたので、
少し考えた後、
「オチタ、気分を害してごめん。
このまま、
俺が話すと、
ますますオチタは気分が悪くなると思うので、
悪いけど、
少しの間だけでもいいから、
永久と二人だけで話しをさせてくれないか？
話しが終わったら、
みんなのいる部屋に呼びに行くから、
戻っていてくれないか」
と、
ホウセイが
いかにもすまなそうな表情で話したので、
オチタは少し考えると、
「俺も冷静さを欠いていた。
ごめん。
俺も少し一人でもう一度考え直してみたいから、
そのとおりにするよ」
と、
ホウセイに逆に軽く頭を下げると、
「もちろん、今の話しはみんなには話さないで、
俺が戻ってきた理由は適当に話しておくから。
それに、

そんなに急いで話さなくてもいいからな」
と、
オチタは言うと、
そのまま部屋
を一人で出ていってしまったのだった。

ホウセイは、
オチタが部屋を出ていった後、
しばらくして、
オチタが部屋の外にいないのかを確認すると、
部屋の鍵を閉めた。
そして、
永久に、
「悪魔は二人いたのかもしれない」
と、
いきなり言いだしたのだった。
（続く）

「それって、
やっぱりナイフのすり替え犯は一人ってことか?」
と、
永久がホウセイの言葉を聞いて、
自分なりに解釈したことを確認するように言うと、
「まあ、一人は一人だけど、
その一人が誰かが問題なんだ」
と、
ホウセイは永久を試すかのように言うと、
「だとすると、
やっぱり、アスカちゃんかチウメちゃんのどちらか一人だけで、
ナイフのすり替えを行ったワケか?
だけど、
俺がさっき話したように、
ホウセイたちの行動まで想定できないんだから、
一人じゃ無理だろ」
永久はあくまでも女子の数人と
もとめがナイフのすり替え犯である
と考えているような発言をした。
すると、
ホウセイは、
「あのさあ、
もとこは、
何故、
あんなところにオオシマと連絡をとっていた無線機

を置いていたんだろう？
俺だったら、
あんなもんヤバいから、
連絡が終わったらすぐ隠すけどな」
と言って、
永久の顔を見た。
（続く）

「二人の悪魔？2」

永久は、
「それはさ。
誰も自分の部屋に無断で入る
とは思っていなかっただけだろ」
何故、
ホウセイが
そんなことを訊くのか不思議そうな表情をして、
即答した。
「まあ、そういう見方もできなくはないが、
俺と木太郎がもとこの部屋に入ったときは、
もとこの部屋の鍵は開いていたんだ」
すると、
永久が話しを遮るように、
「だから、
もとこは誰も自分の部屋に無断で入る
とは思っていなかったってことじゃないか？
誰かが部屋に勝手に入るのが困ると思うから、
部屋の鍵を閉めるワケだろ。
俺にはホウセイが何を言いたいのか、
わからないよ。
もとこは
俺たちがもとこのことを怖れているのはわかっているから、
油断してただけだって」
とすぐ言い返した。
「永久には理解してもらえそうにもないな。
そこは。

じゃあ、
俺の結論だけ言う。
あの無線機は、
もとこが置いたものじゃない。
別の誰かが、
俺たちがすぐ見つけられるように、
置いたのさ。
だとすると、
俺たちの行動は、
ナイフのすり替え犯からすれば、
想定できないことはないんだよ」
と、
ホウセイが言うと、
「じゃあ、
ホウセイは、
ホウセイたちがもとこを先にベッドに縛りつけること
を誰かが予想した上で、
ナイフをすり替えたというのか？」
と、
永久は、
ホウセイの考えがあまりに突飛すぎていたので、
少しバカにした感じで言ったのだった。

「二人の悪魔？3」

永久の言葉に、
ホウセイは、
すぐ、
「ああ、まさにそのとおり。
俺たちより先にもとこの計画を知った人間が、
わざと例の無線機をすぐ見つかる場所に置き、
俺たちがもとこの計画に気づいた上で、
もとこを縛りつけるように仕組んだわけさ。
あの無線機を俺たちが見つけていなければ、
俺とか木太郎が、
もとこをベッドに縛りつけるところまでは
いかなかったからな」
と話した。
「ふーん。
まあ、ありえない話しではないが、
それだけで、
ホウセイたちがもとこを縛りつけることが確実だ
とまでは、
想定できるのかな。
まあ、
そこは水掛け論になるから、後にしよう。
で、
ホウセイはその人物、
その大胆不敵な悪魔のような人物が誰だ
と思っているんだ？
そこまで言うからには、

その悪魔のような人物がわかっているんだろ」

と、

永久はホウセイの話しを真に受けてはいなかったが、

そう訊いたのだった。

「もう一人の悪魔？」

ホウセイが、
永久の問いに、
「一人の悪魔はもとこ。
で、
もう一人の悪魔だが、
実は、
二人まで絞ったんだが、
まだ、
絞りきれていないんだ。
そこで、
永久と冷静に話しをしたくて、
オチタをはずしたんだ」
と答えると、
「えっ？
まさか、
もう一人の悪魔の候補は、
もとめ先生なのか？
で、
もとめ先生のファンのオチタをはずしたのか？
でも、
もとめ先生が悪魔だったら、
自殺なんかするか？」
と、
永久が驚いたように言うと、
「そこなんだよ。

俺が、
もう一人の悪魔を絞りきれない理由は、
もとめ先生が本当に悪魔だったら、
自殺するワケはないからな。
だけど、
あの傷や出血の感じ、
一緒に残っていた、
レイカちゃんたちの服から見て、
自殺に見せかけるために、
別の悪魔が、
もとめ先生の左手首
を切って自殺に見せかけたとはとても思えないからな。
ただ、
自殺するフリをするだけだ、
と騙して、
本当に自殺させた可能性は否定できないんだ」
と、
ホウセイが少し早口で話すと、
永久が首を傾げながら、
「最後のところがよくわからないな。
もとめ先生を騙すと言った
って、
もとめ先生が持っていたナイフは偽物のハズだから、
本気で死ぬ気じゃないと、
相当痛いはずだから、
自殺は無理だぞ」
と、
永久はすぐ反論したのだった。

「もう一人の悪魔2？」

「そこなんだよ。
ナイフの移動については、
考えが、
二転三転したけど、
結局、
今までの考えでは、
まず、
偽物のナイフはアスカちゃんともとめ先生が持ち、
本物のひとつが、
チウメちゃんの部屋で、
もうひとつが、
俺がホウセイから預かったナイフ
ということだったよな。
でも、
そうじゃなくて、
もとめ先生が持っていたのは、
本物で、
俺がくそたから渡されたのが、
偽物だとしたらどういうことになる？」
ホウセイが永久の反応を確かめるように言うと、
「どうなるって、
それはもとめ先生も騙されて
自殺のフリをさせられたということか？」
と、
永久がまだ信じられない、
という顔で言うと、

「そういうこと。
もう一人の悪魔の計画は、
もとめ先生がもとこを殺して自殺したことにしよう
と考えていたんじゃないのか、
って俺は急に思い始めたんだよ。
ここにいる生徒が無傷で済むのはそれしかないからな」
「なるほど、
たしかに、
俺たち全員というか、
ここに生徒に責任が及ばないようにするには、
それしかないと、
誰だか忘れたかそんな話題がでたことあったな。
でも、
そうなるとだな、
もう一人の悪魔は・・・」
永久は、
二人の人物を思いうかべたものの、
もう一人の悪魔が仕組んだ計画が理解できず、
腕を組んで考え込み始めたのだった。

「もう一人の悪魔？3」

ホウセイは、
永久が考え込むのを見ると、
話しを続けた。
「もう一人の悪魔、
これからは悪魔でいいな。
その悪魔は何かのきっかけで、
もとこの計画を知った。
もとこは女なのに地声が大きいし、
木太郎や永久でさえ変だ、
ということに気づいたくらいだから、
二人以外にもとこの計画に気づいても
おかしくはないからな。
で、
問題はそれからだ。
その悪魔はその計画を知ったとたん、
計画を阻止するには、
もとこを殺すしかないと考えた。
しかし、
それには壁がある。
ひとつは、
人殺しには違いないから、
俺や木太郎や他の誰かが反対することだ。
もうひとつは、
それが発覚した場合に、
自分に責任が及ぶことだ。
で、

前者は後にして、
後者なんだけど、
自分に責任が及ばないようにするには、
もとめ先生がもとこを殺すしかない
と考えたわけだ。
しかし、
ここからが問題なんだけど、
俺たちはもとめ先生がもとこの計画を知れば、
率先してもとこを殺すものだと思いこんでいた。
しかし、
もとめ先生は違ったんじゃないのかな。
いや、
違ったんだ。
だから、
悪魔は別の計画を立てたのさ」
ホウセイの話しを黙って聞いていた、
永久には、
ホウセイがそうして話していくうちに、
自分の考えに自信を持ち始めているように思えてきたのだった。

「もう一人の悪魔と想定外」

「じゃあ、
その悪魔は
やはりもとめ先生にもとこの計画を話したわけか。
しかし、
想定外に、
もとめ先生はもとこを殺そうとまでは考えなかった。
ホウセイたちと同じで、
殺人否定派だったんだ。
そこで、
その悪魔は・・・」
永久がそこで口籠もると、
「そう。
もとめ先生にもとこの計画を話してしまい、
しかも、
もとこを殺すことを反対されたんで、
逆に、
もとめ先生を騙して、
もとめ先生に、
もとこを殺すことを考えたのさ」
ホウセイがそこまで話すと、
「じゃあ、犯人はあの二人のうちの」
と、
永久がホウセイの話しの途中で、
先走ったことを口に出したのだった。

「もう一人の悪魔と想定外2」

「永久、結論を急ぐな。
俺の考えもまだ仮説で、
証拠は一切ないんだ。
話しを先に進めるぞ。
俺は、
オチタがもとこを刺す前の、
もとめ先生の態度とその後の自殺をしよう
としたときの態度がいずれも芝居がかったように記憶してるんだ。
で、
そこだけ結論を話すと、
もとめ先生は、
その悪魔に、
オチタがもとこを殺すのは芝居だ
と事前に聞かされていて、
あんな芝居みたいなことをやってしまったんじゃないか
と思うんだよ。
俺たちもとこ殺人否定派からすると、
もとこ殺人肯定派を納得というか、
おとなしくさせるには、
演技でもいいから、
もとこに死んでもらわない
といけないわけだからな。
だから、
その悪魔は、
もとこの計画を話したときのもとめ先生の様子を見て
作戦を変更したんだ、

と思う。
多分、
その悪魔がもとこの計画を知ったのは、
木太郎や永久がもとこの計画を知る前だ
と思うんだ」
と、
ホウセイがそこまで話すと、
「ちょっと、いいか？」
と、
永久が言った。
「ああ、疑問があればどんどん訊いてくれ」
「その悪魔はどうやって、
俺と木太郎に、もとこの計画に気づかせたんだろう？」
ホウセイの言葉に、
永久が疑問を口にすると、
「そこが俺の推理のひとつのある意味弱点なんだが」
と、
ホウセイはそこまで話してから、
「永久はどうしてもとこの計画というか、
もとこが何か企んでいることに気づいたんだ？」
と、
逆に聞き返したのだった。

「もう一人の悪魔と永久」

永久が、
何故か、
即答しなかったので、
ホウセイが、
「それは、
偶然、もとこの部屋の前をとおりかかって、
もとこの声を聞き盗み聞きしたわけじゃなく、
何かの理由で、
もとこが留守だと思って、
もとこの部屋に入ろうとしたら、
もとこの声が聞こえて、
慌てて、
盗み聞きしたんじゃないのか？」
と、
笑いながら訊いたのだった。
黙り込む永久に、
「じゃあ、
その理由をずばり当ててやろうか？
もとこの部屋に入って、
何かを探そうとしたんだろう。
その前提として、
誰かにもとこは露店風呂に入っている
と嘘をつかれたんじゃないのか？
違うか？」
と、
ホウセイが俯く永久をじっと見ながら訊くと、

「バレたか？
嘘をつかれたかどうかわからないが、
実はそうなんだ」
永久はそれだけしか答えなかった。
「で、
誰にもとこが露店風呂に入っている
って嘘をつかれたんだ？」
と、
さらにホウセイが訊くと、
「それが・・・
よく思いだせないんだ。
嘘をつかれたというより、
もとこのことを訊いたら、
露店風呂じゃないかって、
言われた記憶しかないんだよ。
で、つい」
と、
永久は何を探しにもとこの部屋に入ろう
としたかについては答えず、
それだけ言った。
「思いだせよ。
永久に嘘をついたのが、
もう一人の悪魔なんだぞ」
と、
ホウセイが少し強めの口調で言うと、
「ちょっと待てよ。
そんな重要なことだと思ってなかったからな」
と言うと、
永久は天井の方を見上げながら、
必死に思い出そうとしていたのだった。

「もう一人の悪魔と永久の秘密」

「慌てなくていいからな」
ホウセイは永久に声をかけながら、
「で、もとこの部屋に行ったのは、
木太郎みたいに、
もとこが撮影した女子たちのヌード写真を見る気だったんだろう」
と、
永久をリラックスさせるために、
わざとからかうようなことを言うと、
永久は、
怒ることもなく、
急に真顔になって、
「実は、
俺、もとこに脅かされていたんだ」
と、
突然、
そんなことを言いだしたのだった。
「脅かされていた？
じゃあ、
まさか、
永久は、
オオシマと一緒に、
もとこの計画の片棒をかつぐように
脅迫されていたのか？」
ホウセイが、
自分が思ったことを口にすると、
「まさか。

もとこの計画なんかあのときまで知らなかったんだよ。
そうじゃないんだよ。
俺が露店風呂にひとりで入ったとき、
もとこがひとりで風呂に入っていて、
俺が慌てて飛び出してきたことを覚えているか？」
「ああ、あれはマヌケだったな。
で、そのことで脅かされていたのか？
でも、あのときは女子もいたし、
わざとじゃないことはみんなわかっていたんだから、
別に脅かされる理由はないと思うけどな」
ホウセイが永久の話しを途中まで聞いて、
自分の思ったことを話すと、
「もとこが風呂に入っているのに、
俺がそこへ入っていったことを脅かされたわけじゃないんだ。
実は、
俺はもとこに最初から狙われていたんだ。
誰にも話していないけど、
クラス編制が決まったときに、
実は、
変なメールも貰っているんだ」
永久はそこまで話すと、
電波は届かないが、持参していた携帯
をズボンのポケットから取り出すと、
電源を入れてから、
当該メールをホウセイに見せたのだった。

「脅迫していたもとこ？」

ホウセイは
永久から携帯電話を受け取ると、
ざっと軽く目を通してから、
何故か、
「他に誰もいないから、
読み上げていいな？」
と、
そんなことを言ってから、
永久の返事も待たずに、

「今度、
あなたのクラスを担任にすることになった花久素子よ。
よろしくね！
間違えてもあなただけはハナクソ先生なんて呼ばないでね。
もとこ先生でも、
もとこでもいいのよ。
私がこのまま三年生になっても担任を続けて
私立ならどこでも入れてあげるからね。
といっても、
永久くんなら自力で大丈夫よね。
あー、
それから、
あなたが女に生まれていたら・・・
どきどき・・・
なーんて冗談よ。

今後ともよろしくね！」
という不気味な内容のメールを読みあげた。
実は、
このメールは木太郎がもとこの名を使って偽造して書いたものだったのだが、
二人はそんなことを知らないので、
「不気味なメールだな。
もとこが美少女好きとの噂があったのに、
キモ男三人衆や俺みたいなどちらかと言うと、
イケメンとは言えない男ばかり選ばれたのに、
イケメンの永久だけ選ばれたのは、
そういうことだったのか？
でも、
美少女好きなのに、何故、永久が？」と、
ホウセイが首を傾げると、
「覚えてないと思うけど、
俺、昨年の学園祭で女装したんだよ。多分、
そのときにもとこに目をつけられたんだ。
俺が、
もとこだけが露店風呂で入浴しているところになんて、
たまたま入ってしまったというより、
あれは、
おそらく、
もとこの陰謀だと思うんだ。
しっかりと、
素っ裸なところを見られただけじゃなく、
写真まで撮られたみたいなんだ。
そうじゃなきゃ、
風呂場にデジカメなんか持ち込むか」と、
永久は、

それだけでホウセイが永久が脅迫されている内容がわかるような話しをしたのだった。

「もとこの脅迫？内容」

ホウセイは、
永久から見せてもらったメールとその話しから、
永久自信が脅迫されている内容を理解し、
永久がその内容まで言い出しにくいことをわかっていたので、
その内容には触れず、
まず、
気になったことを質問したのだった。
「だいたいわかった。
で、早速だが、
永久は、もとこから何を脅迫されていたんだ？
もしかしたら、
もう一人の悪魔も同じかもしれないからな」
と訊くと、
「俺の場合は、
もとめ先生が整形デブだ、
という噂を流すように脅迫されたんだ。
ただ、
実際は、
おちたがもとこの部屋に呼ばれて、
その整形前の画像を確認し、
ホウセイたちが俺とおちたの話しを聞いてしまったので、
俺が噂を流すまでには、いかなかったんだが、
もとこに後で、褒められたので、
もとこは、
おちたではなく、
俺が噂を広めたのだと思っているみたいなんだ」

と、

永久が話すと、

すると、

「そんなことが脅迫内容か・・・

それにおちたがもとこの部屋に呼ばれた・・・」

ホウセイは永久の話しを聞いて、

何か違和感を感じたのか、

腕を組んで考え始めたのだった。

「もう一人の悪魔の正体？」

ホウセイは、
しばらく考え込んだ後、
「俺たちは
とんでもない勘違いをしていたのかもしれない」
と話し出すと、
「俺の話しで、また、推理が変わるのか？
俺は、
俺がもとこの部屋に行った理由と、
俺以外にも、
もとこに脅迫されていた女子がいて、
その女子こそ、
もうひとりの悪魔に違いない、
と思って、
正直にさっきの話しをしたんだけどな」
と、
永久が言うと、
ホウセイは、
「永久は、
何故、もとこがもとめ先生が整形デブだ
という噂を流そうとしたんだと思う？」
と訊くと、
「それは嫌がらせだろ？」
と、
永久があっさり答えると、
「いや、違う」
と、

ホウセイは自信ありげにそれだけ言った。
「それは、
その噂をもとめ先生に耳に入れて、
もとこに仕返しさせようと考えたからさ。
ということはだな」
ホウセイがそこまで話すと、
「ちょっと、
待てよ。
それは、
もとこが、
もとめ先生に自分を殺させよう
と考えていたってことか？」
と、
永久が横から口を出すと、
「そのとおり！
だとすると、どうなる？」
ホウセイは永久も既に気づいていると思って、
そう言って笑った。

「もう一人の悪魔の正体？2」

永久は、
「そうなると、
もとこは、
もとめ先生に自分を殺させよう、
と企んでいたということか。
それで、
正当防衛でもとめ先生を殺す？
だけど、
そうなると、
オオシマは、
もちろん、
俺たちも関係なくなるんじゃないのかな？
余計、
ワケがわからなくなってきたな」
すると、
「もとこの計画で、
もとめ先生を殺すのはオオシマだったんだよ」
と、
ホウセイはまるですべての謎を解いたのか、
不敵な笑みを浮かべて、永久の顔を見た。
「えっ？
じゃあ、
もうひとりの悪魔はもとめ先生か、
オオシマ？
でも、
二人とも、

チウメちゃんのナイフのことは知らないはずだぞ」
永久が、
自分が考えた悪魔候補と、
ホウセイの意見に対する疑問を口にすると、
ホウセイは、
「ナイフのすり替え犯が悪魔なんだよ」
とそれだけ笑いながら言うと、
「何故、あのレイカちゃんがあんなに怯えていたのか、もう一度、考えてみろよ」
と言って、
永久の顔を見た。

「ホウセイの考える悪魔の正体と混乱する永久」

自分の言葉を聞いて、
再度、考え込む永久を、
ホウセイは話しかけることもせず、
黙って見ていた。
永久の方は、
完全に頭の中が混乱していた。
ホウセイが、
ほとんどの生徒から話しを聞いて、
ある結論に達したというより、
自分との会話の中で、
今回の事件の真相を掴んでに違いないとは思ったが、
自分にはホウセイの最後の言葉で、
推理していた内容全てがリセットされてしまった感じで、
どこから、
考え直せばいいかもわからなかったからだった。
さらに、
永久は、
ホウセイの表情を見る限り、
自分も同じ結論に達することを期待して、
黙って自分のことを見ているのではないか、
と思ったので、
永久の早く考えない、
といけないという焦りが混乱に拍車をかけていたのだった。

ちょうど、その頃、

別の部屋にいた木太郎が、
ホウセイと永久の部屋に向かっていた。

「悪魔はそこにいる?」

木太郎は、
ホウセイたちのいる部屋に
ノックもせず入ってきて、
鼻をひくひくさせながら、
「まだ、こんなとこにいたのか?
大変だぞ!
くそたの奴が・・・」
と言いかけると、
「そうか。悪魔が動き始めたんだな」
と、
木太郎がその先に言おうとした言葉
をわかっているかのように言った。
すると、
永久が驚いたように、
「えっ?
くそたが悪魔だったのか?」
と思わず呟くように言うと、
ホウセイはその言葉を無視して、
「さあ、すぐ戻るぞ」
と言って、
あっけにとられている木太郎と永久ををどけて、
くそたたちのいる部屋に向かって、
走り出したのだった。
くそたたちのいる部屋に入ると、
くそたとおちたが怖い顔をして立っていて、

部屋のカーペットの上には、
チウメとアスカだけでなく、
ヒトメとアユメまでが紐のようなもので手足を縛られて、
さらに猿ぐつわのようなもの
を口にはめられていたのだった。
「くそたとおちたが悪魔だったのか！」
と、
ホウセイの次に部屋に入った永久が大声を出してから、
くそたとおちたを睨みつけると、
「永久、落ちつけ！
木太郎もだ！
くそたもおちたも、
悪魔がヒトメちゃんかアユメちゃん、
それとも両方かもしれないということに気づいたから、
こうしただけだよ。
そうだよな」
と、
興奮気味の永久と木太郎の前に立ちふさがって言うと、
「悪魔？
ああ、今回の真犯人のことだな。
ホウセイもやっと気づいたのか？」
と、
くそたが真顔で言った後、
おちたが、
「問題は、
この４人の誰が真犯人なのかわからないんだよ。
だから、
とりあえず、
残りのふたりも縛り上げたんだ。
無実の女子には悪いんだけどな」

と、
おちたの方は言い訳がましくそう言った。
「本当か？　ホウセイ」
と、
永久がホウセイの方を見ると、
ホウセイは首を横に振った後、
「いや、４人というより、
３人のうちの誰かひとりかふたりだろう」
と、
答えたのだった。

「悪魔は誰か？」

すると、
くそたたち４人の話しを聞いていた木太郎が、
「何で、
俺には話してくれなかったんだよ」
と、
鼻をひくひくさせながら少しいじけた感じで言ったので、
おちたが、
笑いながら、
「何言ってんだよ。
くそたが最初にアユメちゃんに、
悪いけど、
動かないでくれる
と言って、
どこかに隠し持っていたか、
紐のようなもので、
アユメちゃんを縛り始めたとたん、
自分だけ逃げ出したんだろ」
と言ったので、
「木太郎らしいな」
と、
ホウセイが、
おちたと同じように笑いながら言うと、
他の３人の男子も笑った。
「なんで、
おちたはびっくりしなかったんだよ」と、
木太郎は一人だけバカにされているように感じたので、

今度は股間を掻きながら言うと、
「実は、
俺も同じようなことを考えていたからなんだ」
と、
おちたはにやりと笑った。
そして、
ホウセイが、
「じゃあ、
最初に、
くそたが、
誰を悪魔だ
と考えているのか、
その推理を話してもらおうか」
と、
真顔で言うと、
「悪魔か？
うーん、まあ、いいだろう。
じゃあ、俺の推理を聞けよ」
と、
くそたはそう言うと、
自分の推理した内容を話し始めた。

「くそたの推理？と意外な悪魔？」

くそたたちに縛られて
部屋のカーペットの上に横たわっていた、
４人の女子は何かそれぞれの思いがあるのか、
意外に大人しく、
身体を少し動かしたり、
首を向けたりして、
くそたの方を見ていた。
「まず、
俺はここでじっと黙ってもう一度考え直したんだが、
今回、
俺たちがいろいろ考えたことで間違いないのことは、
チウメちゃんの偽物のナイフが本物にすり替えられていた
ということしかないのさ。
ここまでは文句はないよな。
で、
俺は、
まず、
そのすり替え犯、
ホウセイに言わせれば悪魔だが、
俺は犯人というが、
どうも、
他のことでも、
その犯人に俺たちは騙されていたんじゃないか、
と思うんだ。
それは、
ここにいる

全員が思い込んで、
怒ってもとこを殺そうかと考えた原因である、
もとこが、
俺たちまで皆殺しにしようと考えていたということだ。
しかし、
それ自体は、
犯人のでっちあげというか、
犯人が俺たちにそう思い込ませただけじゃないか、
と、
俺は考え直したんだ」
と、
くそたがそこまで話すと、
木太郎が、
すぐ、
「そのことなら、無線機をうまく使って、
オオシマから確認とっただろ？
その考えはおかしいぞ」
と横から鼻をほじりながら、口を出したのだった。

「くそたの推理？と悪魔による洗脳？」

「いや、
そこが俺たちが犯人、
まあ、ホウセイの言うとおり
悪魔のような犯人に洗脳された原因さ。
いいか。
俺たちは、
もとこが、
俺たちを皆殺しにするという計画を立てていたことは、
もとこのフリをしたアユメちゃんとオオシマの会話から
そう思い込んだに過ぎないんだ。
もとこの口からはそこまで聞いてない。
だから、
俺たちは、
犯人に、そう洗脳されていただけなんだよ。
だから、
もとこに対する殺意が生まれたんだよ。
でも、
よく、
考えてみろよ。
何故、
もとこはもとめ先生の整形疑惑の噂を流したのかを。
俺たちを皆殺しにしたんでは、
そんな噂を流しても、
無意味だろ。
俺たちが皆殺しにされたら、
そんな噂があったことなんて、

生き残ったもとこの証言しかないんだから。
もとこがそんな噂を流したのは、
俺たちがその噂を信じて、
もとめ先生の自殺の動機について、
証言することを狙った、
と考えた方が自然だし、
今、
考えると、
もとこが悪魔のような女だとしても、
俺たちまで殺す程の動機を持っていた
とは考えられない。
だけど、
俺たちは、
オオシマの話しから、
もとこが俺たちを皆殺しにする、
と思いこんだというか、
犯人にそう洗脳されてしまったわけなんだよ」
くそたがそこまで話すと、
木太郎が、
「じゃあ、
アユメちゃんが悪魔だったのか?」
と、
鼻をひくひくしながら、
くそたの方を見た後、
アユメの方をちらっと見たのだった。

「くそたの推理？と悪魔による洗脳？」

「いや、
そこが俺たちが犯人、
まあ、ホウセイの言うとおり
悪魔のような犯人に洗脳された原因さ。
いいか。
俺たちは、
もとこが、
俺たちを皆殺しにするという計画を立てていたことは、
もとこのフリをしたアユメちゃんとオオシマの会話から
そう思い込んだに過ぎないんだ。
もとこの口からはそこまで聞いてない。
だから、
俺たちは、
犯人に、そう洗脳されていただけなんだよ。
だから、
もとこに対する殺意が生まれたんだよ。
でも、
よく、
考えてみろよ。
何故、
もとこはもとめ先生の整形疑惑の噂を流したのかを。
俺たちを皆殺しにしたんでは、
そんな噂を流しても、
無意味だろ。
俺たちが皆殺しにされたら、
そんな噂があったことなんて、

生き残ったもとこの証言しかないんだから。
もとこがそんな噂を流したのは、
俺たちがその噂を信じて、
もとめ先生の自殺の動機について、
証言することを狙った、
と考えた方が自然だし、
今、
考えると、
もとこが悪魔のような女だとしても、
俺たちまで殺す程の動機を持っていたとは考えられない。
だけど、
俺たちは、
オオシマの話しから、
もとこが俺たちを皆殺しにする、
と思いこんだというか、
犯人にそう洗脳されてしまったわけなんだよ」
くそたがそこまで話すと、
木太郎が、
「じゃあ、
アユメちゃんが悪魔だったのか？」
と、
鼻をひくひくしながら、
くそたの方を見た後、
アユメの方をちらっと見たのだった。

「消えた記録メディア」

ホウセイが考え込んでいると、
くそたが、
「ダメだ。
ない。
このパソコン自体に、
画像らしきものは一切ない。
拡張子から調べても、
同じだ。
画像の類がほとんどないのはおかしいから、
おそらく、
ほとんどの画像が、
いったん、
すべて消去されたんだ」
と言うと、
「もし、そうなら、チャンスはある。
復元ソフトを使えば、このままいじらなければ、
消された画像を復元できるからな。
だけど、
俺は、
もとこのことだから、
パソコンのハードディスク自体には、
大事な画像は入れてなかったと思う。
ある程度の知識があれば、
ノートパソコンごと盗めば、
画像の復元は可能だし、
処分も可能だからな。

もし、悪魔が画像を消去したなら、
それはある意味ひっかけだ。
見つからないのに、わざと消去したんだ」
と、
ホウセイが言うと、
「ひっかけか？
じゃあ、肝心のメディアはどこに消えたんだ？」
と、
永久が訊くと、
「思い当たることはあるんだが、
それにはリスクが伴う。
うーん・・・」
と、
ホウセイは、
永久にも、
くそたにもわからないことを、
呟くように言ってから、
また、腕を組んだのだった。

「リスクって、
そのSDカードを回収するリスクのことか？」
と、
くそたが訊くと、
「ああ、そのとおり。
もし、回収したのなら、あのときなんだが、
悪魔はSDカードの場所を知らなかったはずだから、
他の人間に先に見つけられるというリスクがあるから・・・」
と、
ホウセイはそこまで話して口籠もってしまった。
すると、
今度は永久が、
「あのときって、
オタクらがもとこが死んだ後、
もとこの部屋に隠れていたときか？」
と訊くと、
「ああ、
思いつくのはそれだけなんだが・・・」
ホウセイはまた口籠もってしまった。
永久はもとこの死体を見て、
「まさか、
もとこ自身が身につけてるとか」
と自分で気味悪そうに言うと、
「それはないだろう。
警察が来たら、まっさきに調べるからな」
と、

くそたがすぐ否定する。
「それもそうだな。
じゃあ、記録メディアは？」
永久も腕を組んで考え込むと、
くそたが、
「もとこなら、
どこにＳＤカードを隠すかな？
それに、
これまでの感じだと、
犯人はもう回収する気がない感じがするな」
と言ってから、
また、パソコンをいじり始めた。

「消えた記録メディア3」

「うーん？
マイドキュメント内のデータもほとんど消去されてるな。
もしかすると、
犯人を脅迫していたネタは、
画像関係じゃないのかもしれないな」
くそたはそんなことをぶつぶつ言いながら、
まだ、パソコンをいじっていた。
すると、
「もしかしたら、
ＳＤカードはオオシマが預かっているんじゃないか？
それで、
地下室の存在を警察がわからなければ、
ＳＤカードも見つかることもないから、
悪魔は安心しているのかもしれない。
場合によっては、
オオシマに、
渡したＳＤカードの処分をもとこの声を真似て、
もう処分させているかもしれない。
もとこが、
もとめ先生の整形前の写真だと言ったのが、
警察にバレる可能性があるとか言ってな」
ホウセイが永久とくそたに自分の意見を言うと、
今度は、
永久が、
何か話そうとしたが、

何故か、やめて、
「くそた、
俺にパソコン見せてくれないか」
と言ったのだった。

「消えた記録メディアとノートパソコン」

「ああ、何か気づいたのか？」
と言って、
くそたは座っていた椅子から立ち上がり、
永久と入れ代わった。
「ちょっとな」
永久はそれだけ言って、
いったんパソコンをシャットダウンすると、
パソコンの外観をチェックし始めた。
「メモリーカードスロットは空だって」
と、
くそたが横から言ったが、
「それはわかっている」
とだけ、
永久は答えて、
パソコンの裏を見ていた。
「うーん。
小さめのドライバーさえ、
あればハードディスクごと抜き取ることは簡単なタイプだな」
と言ってから、
また、
ノートパソコンを机の上に置いて、
起動させたのだった。
「なるほど、
消去してもデータの復旧が可能なことを知っていれば、
ハードディスクごとか、
ノートパソコンごと、

処分した方が確実だよな。
犯人はパソコンについて、
中途半端な知識しか持っていなかったのかな。
それとも、
ドライバーを見つけられないから、やむなくかな」
と、
くそたがつぶやくように言うと、
ホウセイが、
「脅迫されていたのなら、
その画像だけ消去した方がバレにくいのにな。
うーん？」
と首をひねりながら言うと、
永久の姿を見ていたのだった。

「消えた記録メディアの数」

そのとき、
くそたが、
永久に、
「そういえば、
永久は脅迫されていた
という画像をもとこに見せられたのか？」
と訊くと、
「いや、そこまでは」
と、
永久が答えると、
「じゃあ、何故？」
と、
くそたが訊くと、
「だから、
デジカメで写真を撮られたの
を俺自身が見てたからだよ」
と、
永久は
なんでそんなことをいまさら訊くのだ
という表情をして答えた。
「フラッシュは？」
くそたがまた訊くと、
「ああ、それは・・・
多分、それはなかったと思う。
結構、明るい風呂場だったからな」
と、

永久は今度は普通に答えた。
すると、
ホウセイが、
「そうか！
いずれ警察が調べれば、
永久の話しが出て、
このノートパソコンの中の消されたデータも復元される。
もし、
永久の場合も、
犯人の場合も、
もとこが脅迫しているネタの画像自体なかったら、
つまり、
実際は撮影していなかったら、
どうなる？」
と言いだしたのだった。

「消えた記録メディアの数と脅迫のネタ」

「それならＳＤカードを処分しても、
パソコンのデータを消しても無意味だよな」
と、
永久が言うと、
「そう、
実際、
脅迫のネタは、
画像じゃなかったと思う。
それから、
ＳＤカードは2枚は最低あったと俺は考えている。
実は、1枚、俺がもらう予定だったんだ。
バックアップ用のＳＤカードもあったんだろうな」
ホウセイがそこまで話すと、
「ということは、
画像が脅迫のネタでもないのに、
そう思わせるために、
犯人は
わざとパソコン内のデータの一部を消した
ということか？
でも、
もう1枚のＳＤカードはどうなったんだ？」
と、
永久が訊く。
「犯人がトイレかなんかに流して、
もう処分済みだろう」
「でも、

画像が脅迫のネタじゃないなら、
どうして？」
ホウセイの言葉に、
永久がまた訊くと、
「もとめ先生をもとこ殺しの犯人にするためさ」
と、
ホウセイは
あたかも今回の事件の概要がすべてわかったかのように、
そう断言した。
（続く）

「消えた記録メディアと脅迫のネタと矛盾」

すると、
「それはおかしいぞ。
もとめ先生をもとこ殺しの犯人にするためなら、
おちたが見たという整形デブの画像を残しておいた方が、
もとめ先生がもとこを殺す動機のひとつになるから、
ＳＤカードも画像も消す必要はないんじゃないか？
ホウセイの推理には矛盾があるよ」
と、
永久が言うと、
くそたも、
「そう言われてみれば、そうだな。
もとこが犯人を脅迫していたネタが画像とか、
ＳＤカードやパソコンに関係しないなら、
わざわざリスクをおかして、
もとこの部屋に入ってまで、
画像関係を消去する必要はないな」
と言って、
永久と同じような意見を言うと、
ホウセイは、
それまで自信を持っていた推理の矛盾点を指摘され、
「うーん・・・
そう言われてみれば、そうか」
と言って、
腕を組んで考え込んでしまったのだった。

「消えた記録メディアと脅迫のネタと犯人の目的」

ホウセイが考え込んでいると、
「くそたが前に話したように、
犯人が、
パソコン上、
データを消去しても
それの復旧が可能なことを知らなかったと考えれば、
画像等のデータを消去した目的は、
自分がもとこに脅迫されていたことを誰にも気づかせず、
かつ、
そのネタを抹殺するためだ
と考えれば辻褄が合うんじゃないか」
と、
永久が自分の意見を言った。
すると、
「もし、そうなら、
犯人を自白させることができるかもしれないぞ」
と、
今度はくそたが言ったのだった。
「どうやって？」
「だから、
俺が、
もとこのパソコンから消去されたデータを復旧させた
と嘘をつけばいいわけさ。
で、
永久とホウセイも口裏を合わせてくれれば、
大丈夫だろう」

永久の疑問にくそたが自信ありげに答えると、
「うーん？
それはどうかな？
かなりずる賢い悪魔だから、
その前に、
その悪魔が誰だか絞ってから、
カマをかけないと、
肝心の脅迫のネタがわかっていない以上、
シラをきられたら、
それでおしまいだぞ」
と言って、
ホウセイは二人の顔を順に見たのだった。

「くそたの思いつきと脅迫のネタと真犯人」

「たしかにな。
もとこがバックアップ用のメディア
を持っていたことを犯人が知っていれば、
もとこのパソコンにデータ復旧ソフトなんて入ってない
と気づくかもしれないし、
相当の知能犯だから、
開き直って、
証拠を見せろ
と言われたらおしまいだからな」
と、
永久も、
ホウセイと同じように、
くそたの意見に賛成はしなかった。
「じゃあ、
こういうのはどうかな。
俺のプレステポータブルにあるメモリースティックを、
もとこの身体から見つけたと嘘を言って、
全員の前で、
パソコンを起動して、
見せるというのはどうだ?
もし、
もとこが持っていたSDカードに真犯人が脅迫されるネタが入っ
ていたなら、
真犯人は慌てるんじゃないかな。
まさか、
もとこが2枚もバックアップ用のメディアを用意していた

とは思ってもいないからな」
と、
くそたがまた思いついたことを言う。
「でも、デジカメで撮影した写真も入っていると女子全員が思うから、
女子全員、動揺するじゃないかな」
と、
永久が言うと、
「女子はもとこが凄い写真を撮ったことまでは、知らないんじゃないか」
と、
くそたが言い返すと、
「それはそうかもしれないが、
メディアの種類も違うし、
脅迫のネタさえわかってないし、
そもそも、
悪魔のことだから、動揺するかな。
やはり、
犯人を絞った上、
証拠はノートパソコンにあるから、
正直に言わないと、
このまま警察を呼ぶと脅かした方が、
自白させやすいんじゃないかな」
と、
ホウセイはまた自分の意見を言った。

「絞られる犯人と不明な動機と脅迫のネタ」

「それはその方がいいかと思うけど、
ホウセイは犯人がわかってるのかよ」
永久がすぐ聞き返す。
「はっきり言って悪魔は、
二人まで絞った。
例のナイフの移動を考えると、
二人しか候補はいないんだが、
はっきり言って、
動機がまったくわからない。
もとここに何か脅迫されていたことだけは
たしかだろうが」
と、
ホウセイが言うと、
「やっぱり、
そうか。
俺がホウセイに渡したナイフ
を俺の部屋に持ち込めたのは、
レイカちゃん、
チウメちゃん、
ヒトメちゃん、
そして、
もとめ先生だけだからな。
で、
レイカちゃんはあのとおりだし、
もとめ先生は自殺した。
とすると、

犯人は、
チウメちゃんか、
ヒトメちゃん。
これまでの行動からは、
頭の良さならチウメちゃんだろうがな」
と、
くそたが言うと、
永久が、
「何故、他の二人を除くんだ」
とホウセイとくそたの方を見て、
訊いたので、
「そんなの当たり前だろ。
相手は悪魔なんだから」
と、
ホウセイは言った後、
「レイカちゃんの意識さえ戻ればなあ？
うん？」
と、
何か閃いたのか、つぶやくように言ったのだった。
「どうしたホウセイ？」
「レイカちゃんの意識が戻れば、
事実関係はもっと明かになると思うんだけど、
俺は、チウメちゃんもヒトメちゃん
もどっちもまだ嘘をついているんだ
と思うんだ。
俺たちは、
チウメちゃんとヒトメちゃんの話しから、
もとこの部屋の様子をうかがいにきたのは、
チウメちゃんとレイカちゃんだ
とずっと思っていたけど、

もし、
それが違ったらどういうことになるかな？」
と、
ホウセイが言うと、
「また、前提を崩すのかよ。
俺とくそたがレイカちゃんの部屋に隠れているときに、
ドアが開けられたことを忘れたのかよ。
だから、
レイカちゃんが
もとこの部屋の前に行ったのは間違いないって。
レイカちゃんは部屋の鍵を閉めてないのに鍵
がかかっているから怪しんだんだろう。
だから、
レイカちゃんはもとこの部屋の前に来たのは間違いないって」
と、
永久が嫌な顔をしながら断言すると、
「待てよ。
そこに俺たちの思い込みがあるかもしれない」
と、
くそたは言ったのだった。

「崩れる前提？ともとめと残った女子？」

「ヒトメちゃんとチウメちゃんの話しだと、
もとめ先生と俺の部屋に残ったのは、
レイカちゃん含めて４人で、
それ自体に嘘はない。
問題は、
俺たちやアスカちゃん、アユメちゃんがいなくなったので、
もとこの部屋の様子を見に行ったのが、
最初はチウメちゃんだけで、
その後、
レイカちゃんというのが、
これまでの前提だったんだが、
その二人がもし犯人じゃなければ、
あれがもとこを殺す芝居だとわかっていたはずだから、
何故、
もとこの部屋の中まで入ろうとしなかったんだろう？
チウメちゃんの話しでは、
もとこの部屋の話しを盗み聞きしていて、
ナイフがすり替えられて、
実際にもとこが殺されてしまったことに気づき、
犯人探しのため、
ああいう行動をとったということだけど、
それなら、
レイカちゃんと相談しても良かったんじゃないかな。
いや、
レイカちゃんが本当に後から
もとこの部屋の前の自分の部屋に来たのなら、

絶対、
そのことを相談して、何か二人で考えたはずなんだけど、
その点の話しが出ていないことが不自然なんだよな。
もしかしたら、
４人だけになった後に、
何かあったんじゃないのかな？
だから、
ヒトメちゃんとチウメちゃんが、
何故か、
嘘をついたんじゃないか？
だから、
その前提を捨てて、
もう一度、
考え直した方がいいかもしれない。
とにかく、
ホウセイが置き忘れた本物のナイフが俺の部屋にあったからには、
チウメちゃんか、
ヒトメちゃんが俺の部屋に持ち込んだとしか、
考えられないからな。
それと、
もとこの脅迫の事実、
さっきのナイフを含めた４本のナイフの移動関係
をもう一度整理すればいいんじゃないか？」
くそたが長々と話すと、
「なるほど、
それもそうだが、
一番、
わからないのは、
何故、
くそたがキッチンあったナイフを俺に渡し、

そのナイフを俺がどこかに置き忘れた
という事前に想定できなかったことが起きていたのに、
誰かが、
そのナイフをわざわざくそたの部屋に持ち込んだのかな？
うーん？」
一時自信があるように見えたホウセイは
再び考え込んでしまったのだった。

「くそたの推理と脅迫のネタ」

ホウセイも永久も、
考え込んでいると、
くそたが、
「俺なりに、
今回の事件の概要がわかったぞ」
と言うと、
「犯人は、何かをネタにもとこに脅かされていた。
そこで、
犯人はその脅迫されていたネタを処分しようとして、
もとこの部屋にこっそり入った。
ネタはやはり画像だったんだ。
で、そのとき、偶然、無線機を見つけて、
もとこが、
もとめ先生だけを殺す計画を知った。
そこで、
犯人は考えた。
もとめにその計画を話し、
もとめにもとこを殺させるよう誘導することを。
ただ、犯人はもとめには、
違う方法で殺すことを提案していた。
ここまでが、ひとつ。
ナイフの方だが、
アスカちゃんのナイフは、
たまたまアスカちゃんが
もとこの部屋に落としただけで、

すり替えはない。
すり替わったのは、
チウメちゃんのナイフと
キッチンにあった2本のナイフのひとつだけだ。
そして、
そのすり替わったナイフのうち、
チウメちゃんのナイフがもとめ先生の手に渡った。
そして、
もうひとつはチウメちゃんの部屋に。
で、最後のナイフはキッチンにあり、
それを俺からホウセイに渡し、
ホウセイがどこかにそれを置き忘れた。
そして、
そのナイフを犯人が俺の部屋、
もとめ先生たちが残っていた部屋に持ち込んだ。
ここまでは間違いない」
と、
くそたが自信ありげに話すと、
「流れ的には矛盾はないが・・・」
と、
ホウセイが首を傾げながら言うと、
「最後まで話しを聞けよ。
これからが肝心のところなんだからな」
と、
くそたはにやりと笑って、
そう言った。

「くそたの推理と脅迫のネタ2」

「で、
ここまでの話しで、
まずひとつのポイントは、
ホウセイが置き忘れた本物のナイフ
をもとめ先生たちが残っていた俺の部屋に持ち込めたのは誰か？
そして、
何故、
そのナイフを俺の部屋までわざわざ持ち込んだのか
ということだ。
で、
前者の点は後にするとして、
後者の点はもとめ先生に自殺するフリをさせて、
実際に殺すためさ。
それ以外に、
わざわざ本物のナイフを俺の部屋に持ち込む必要はない」
「なるほど、まあ、いいだろう。
で」
ホウセイが、
まだ首を傾げながら、
不審げにくそたの話しを訊くと、
「驚くなよ。もとめ先生は、
もとこを殺す芝居がされただけだ、
と思い込まされていたんだよ」
と、
そこまで、
くそたが話すと、

「なんか、おかしいぞ。
だったら、くそたの推理では、
何で、
もとめ先生が自殺したフリ
をしなければいけないんだよ」
ホウセイは、
少し呆れた表情でくそたの顔を見た。

「くそたの推理」

すると、
くそたは、
「それは、
犯人ともとめ先生との間では、
もとめ先生がナイフのすり替えに協力していないこと
を他の生徒に理解したため、
もとめ先生はショックで何度も自殺を謀ったとことに見せかける
という約束になっていたからだよ」
と、
くそたが自信をもって話すと、
「でも、もとめ先生は一人だけのときに自殺したんだろう」
と、
今度は永久が言うと、
「そこだよ。
今回の事件の鍵は」
と、
くそたはほぼ真相をつかみかけているような話し方をした。
「いいか。
ヒトメちゃんの話しでは、
最初にチウメちゃんが俺の部屋を抜け出し、
レイカちゃんと二人でもとめ先生のことを看ていたが、
レイカちゃんが自分の部屋に用事があるって言って、
ヒトメちゃんともとめ先生だけになったということだったよな。
それで、
なかなか二人が戻って来なくて、
トイレに行くのを我慢できなくなったヒトメちゃんが、

もとめ先生を一人だけにして、
トイレに入って、
そうしたら、
ひさめちゃんとレイカちゃんの叫ぶ声が聞こえて、
慌てて、
ヒトメちゃんがトイレを出たら、
もとめ先生がもう自殺していて、
その後、
レイカちゃんとチウメちゃんが喧嘩になって、
レイカちゃんが、
偽物のナイフとスコップを持って、
部屋を飛び出して行ったということだよな。
で、
チウメちゃんもほとんど同じ話しだったけど、
よく考えると、
凄く不自然じゃないか？」
と、
くそたが長々と話しをすると、
「どこが？」
と、
永久が訊く。
「それは、
まず、
ヒトメちゃんの話しのとおりだと、
もとめ先生が自殺するまでの間には、
ホウセイが置き忘れた本物のナイフが、
俺の部屋に戻される時間がまったくない
ということだ。
とすると、
ホウセイが置き忘れたナイフは、

もとめ先生が自殺した後に、
俺の部屋に置かれたとしか、考えられないけど、
何故、
もとめ先生の自殺後に、
本物のナイフを俺の部屋にわざわざ置くのさ。
そこが今回の鍵なんだよ」
と、
くそたは先程話したことを詳しく話したのだった。

「くそたの推理2」

「それは、ヒトメちゃんとチウメちゃんが嘘をついているということか？」

と、

永久が横から口を挟んだ。

「永久にしては勘がいいじゃないか。　そのとおりだよ。

ホウセイが置き忘れたナイフはもとめ先生が自殺する前に、

俺の部屋に置かれたのさ。

そして、

もとめ先生はそのナイフを偽物だと思い込んで、

自分の左手を切ったわけさ。

それしか、

ホウセイが置き忘れた本物のナイフがわざわざ俺の部屋に置かれた理由の説明ができないんだ」

くそたがそこまで話すと、

「そうすると、

俺が置き忘れたナイフをくそたの部屋に戻した奴が悪魔ということになるな。　うーん・・・

となると、

でも、

永久もくそたも俺も、

隠れていた部屋に誰かが来たことは確認しているよな。

それは何を意味するんだ？」

と、

ホウセイはまったく事件の真相がわからなくなったので、くそたに訊いたのだった。

くそたが、

「それは口実だよ。
恐らく、
犯人が俺の部屋を出た真の目的は、
もとこの部屋の様子をうかがうことではなく、
キッチンにあった本物のナイフと、
もとめ先生の持っていたナイフをすり替えるために、
キッチンに本物のナイフを取りに行くためだったんだよ。
そうしないと、
もとめ先生を騙して、
自殺させることはできないだろう。
この先はだいたいわかるよな」
と自信ありげに話すと、

永久は、
「そこはわかったが、
真犯人は誰なんだよ。
もうくそたは、
わかってるんだろ！
焦らさないで教えてくれ」
と言ったのだった。
すると、
横から、
「やっぱり、
くそたはチウメちゃんが悪魔だと思っているんだな。
たしかに、
状況的には一番怪しい。
でも、
何で、
ヒトメちゃんが嘘をつくんだろう。
それから、

何故、
レイカちゃんが偽物のナイフを持って逃げたんだろう」
と、
ホウセイが言うと、
「そこなんだ。
俺がまだわからないのは。
ただ、
チウメちゃんなら、
俺が例の芝居の話しを持ち出さなくても、
自分から芝居の話しは出来たはずだし、
彼女はアスカちゃんたちの性格を知っていたから、
もとめ先生にもとこを殺させるよう、
アスカちゃんたちに仕向けるよう予測することも出来たはずなんだ。
ただ、
ホウセイたちが
先にもとこをベッドに縛りつけることまでは
想定していなかったと思うけどな。
ただ、彼女は凄く頭がいいから、
そこを柔軟に対処しただけなんだと思う」
と、
くそたが言うと、
「そうか！
もとこの計画を誰かが知った時点で、
もとこをどこかに縛りつけることと、
もとこの処遇について、
殺人肯定派と否定派とに別れて話し合い、
その後、もとめ先生に殺人肯定派がそのことを告げに行き、
もとめ先生の殺人を阻止するために、
例のような芝居を仕組むことが、
最初彼女が描いたストーリーなんだ。

それを先に、
ホウセイたちがもとこをベッドに縛りつけて、
俺がもとこの部屋の様子がおかしいことに気づいたんで、
当初の計画が若干変更になっただけなんだな」
と、
永久が話すと、
「だけど、ちょっと待てよ」
と、
ホウセイは永久の話しを聞いて、
何か思いついたのか、自分の疑問点を話そうとしたのだった。

「くそたの推理とホウセイの疑問」

「だけど、
芝居をするには、
あのときのようにもとこ自身が芝居
を認識できる状況にない
とうまくいかないぞ。
そこまで想定できるかな」
と、
ホウセイが首を傾げながら言うと、
「その必要はないさ。
何故なら、
もとこは殺されるんだから、
芝居なんてする必要はないからな。
もとこを実際に刺す人間だけに芝居だ
と思わせればいいわけだ」
と、
くそたが言い返すと、
すぐに、
ホウセイが、
「でも、
もとめ先生が持っていたナイフは偽物だから、
もとめ先生が
もとこを刺す役ではなかったことは間違いない。
だけど、
芝居と思わせるんだったら、
もとめ先生を騙して、
偽物と偽って本物を持たせた方が確実なんじゃないかな?」

と、
今度は永久が自分の意見を言うと、
「いや、それだともとめ先生が自殺する必要あるかな」
と、
ホウセイがまた疑問を口にすると、
「もとめ先生からすると、
もとこ殺しも自殺も芝居なんだから、
やるんじゃないか」
と、
くそたは自信ありげに言った。

「悪魔？が描いたシナリオと致命的欠陥？」

「簡単に言うと、
くそたの推理だと、
悪魔は、
もとこをもとめ先生が殺して自殺して終了
というシナリオを描いていた、
ということだろう。
それなら、
生徒たちには、
まったく罪がないからな。
ただ、
そのシナリオには致命的欠陥がある。
もとめ先生に、
もとこが刺された死んだフリをする
ということを、
どう、
その悪魔は、
もとめ先生に説明したんだ。
いくら、
もとめ先生が人がいいからって、
生徒ごときに殺人計画を知られて、
それをネタに脅迫されて、
もとこがびびってそんな芝居をするとは、
もとめ先生なら、
もとこの性格をよく知っているから、
そんな説明じゃ納得しないんじゃないかな？
違うか？」

ホウセイが、
くそたの推理の要点をまとめた上で、
その欠点を指摘した。
「ホウセイ、
俺の考えは少し違うよ。
たしかに、
犯人は、
この事件を、
もとこをもとめ先生が殺して自殺して終了
ということにしよう、
と考えていたと思う。
しかし、
実際に、
もとこを殺すのは別人で、
もとめ先生にはその別人と自分とで、
もとめ先生がもとこを殺そうとしたところを、
その別人がそれを阻止するために、
もとこを殺したことにするという計画で、
もとこも二人の生徒から脅迫されたから、
渋々、その計画に従った、
ってもとめ先生には説明したんだよ」
と、
くそたが自信ありげに話すと、
二人の話を黙って聞いていた永久が、
「だったら、
犯人は、
実はもともと二人組なんじゃないか？」
と言ったのだった。

「固まりつつある推理？」

「そうか！
永久、
たしか、前に話したと思うけど、
例の無線機を犯人がわざと目につくとこに置いて、
俺と木太郎に見つけさせ、
もとこをベッドに縛りつけるという想定も可能だという話しをしたよな」
と、
ホウセイが言うと、
「そうだったかな。
で、それが」
「悪魔が二人いたら、その想定が出来ていたら、
今回の犯行は簡単だったかもしれないぞ。
一人が殺人否定派に回り、
もう一人は殺人肯定派に回る。
殺人否定派が、芝居を提案し、
肯定派がもとめ先生にもとこの計画を話しに行き、
予め、
もとめ先生と打ち合わせたように、
もとめ先生がもとこを殺そうとする芝居をさせ、
それを止め、
他の人間がもとこを殺したフリをさせるともとめ先生には予め話しておく。
そして、
二人の悪魔の計画どおり、
すり替えられた本物のナイフを偽物だと思った人間がもとこを殺

す。
　この時点で、
もとめ先生は芝居だと思っているから、
わざと自殺する芝居をみんなの見ている前でする。
それを2回する予定で、
2回目のときに、
本物のナイフにすり替えて、
もとめ先生を自殺させる。
話しは戻るが、
二人、悪魔がいれば、一人を見張りにすれば、
もとこの部屋に入るのもリスクは減る」
ホウセイが永久の言葉を聞いて、
そこまで自分の考えを話したのだった。
「前にも話しが出たけど、
それって、
もとめ先生と誰かということか？」
「いや、違う」
永久の質問に対し、
ホウセイがそう簡単に否定すると、
「なんか、
堂々めぐりの話しばかりじゃないか？
たしか、そんな話し前ししただろ」
永久がアクビをして言う。
「いや、
くそたの話しや、
ナイフの移動がほぼ判明したこと、
パソコンのデータが消されていて、
メディアも消えていたこと、
これらがわかっただけで、
似たような推理過程でも、

今度は違うんだ。
もう悪魔は3人に絞られた。
それは、
ヒトメちゃん、
レイカちゃん、
チウメちゃんのうちの二人だ」
ホウセイがはっきり言うと、
「だったら、
嘘をついていた可能性のある、
ヒトメちゃんとチウメちゃんじゃないのか？
それしか、
考えられないぞ」
と、
永久が言うと、
「多分、
犯人はレイカちゃんとヒトメちゃんだろう」
と、
ホウセイと永久の話しを聞いていた、
くそたは、そう言った。

「そうか？
犯人はチウメちゃんとヒトメちゃんの方だろう。
くそたは、
レイカちゃんをスコップで殴った罪悪感があるから
そう思うんだよ。
いや、ごめん」
「そう思われても仕方ないけどな。
でも、俺はそう思う。
レイカちゃんの怯えは演技だ！」
永久の意見にも怒らず、
くそたは冷静に自分の意見を言った。
「演技？
レイカちゃんは演劇部じゃないぞ。
あれが演技ならうますぎるぞ」
「もとめ先生とオチタが大根なだけだよ。
怯えることくらい簡単さ。
ほら」
永久の言葉を聞いて、
くそたの怯えている演技をする。
「大根！
目が違う」
「そうか？」
永久とくそたのそんな話しを聞きながら、
ホウセイだけは目を瞑ったまま、
腕を組んで何か考え込んでいた。
ホウセイは、

しばらく考え込んだ後、
「永久、
くそたの結論が正解だよ。
悪魔、
いや、
犯人は、
レイカちゃんとヒトメちゃんだよ」
と断言したので、
「急に悪魔から犯人に変えるのかよ。
で、理由は？」
永久はくそたよりホウセイの方を信用しているのか、
冷静に訊いた。
すると、
「決めてはナイフさ。
ただ、犯人はわかったが、まだ、謎がある」
と、
ホウセイはそう言うと、
くそたが、
「本当の悪魔は、
もとこじゃないってことか？」
と言って、
単なる思いつきなのか、
それとも、何かの確信があるのか、
ホウセイの方を見たのだった。

「くそた、
たしか、
前にその可能性があると俺とホウセイが話した記憶があるんだけど、
それなら、
自殺するはずはないとかで、
その可能性はないということになったと思ったんだけどな」
と、
永久が言うと、
「ああ、たしかにな。
ただ、
もとめ先生も悪魔だとしても、
どうやって、
犯人がもとめ先生を自殺させたかなんだ」
ホウセイがそう言うと、
「もとめ先生も悪魔？
それって、
もとこともとめ先生の両方が悪魔で、
他に、
その計画を知った犯人が二人いて、
悪魔を退治したという可能性があるということか？」
と、
永久が話したとき、
「悪魔退治か・・・」

と、
ホウセイはぼそっと言うと、
「そうかあ！」
と、
くそたが少し大きな声を上げたのだった。
「なんだよ！　くそた、大きな声をあげて」
と、
永久が言うと、
「思い出せよ。
もとめ先生の部屋に行ったときのことを。
部屋に鍵がかかっていたのに、中に入ったら、
トイレの前にスコップが置いてあったんだぞ。
よく考えたら、おかしいじゃないか？
普通なら、隠れるにしても、誰かを怖れて武器を持つなら、
ナイフもスコップもトイレの中に持ち運ぶはずだろ。
しかし、
レイカちゃんはそれをしていない」
「そう言えば、変だな。
あのときは気づかなかったが」
くそたの言葉にホウセイも同じ疑問を抱いたようだ。
すると、
「じゃあ、
あのスコップは
レイカちゃん以外の人間がわざとレイカちゃんが隠れている場所
をわかりやすくするために、
置いたのか？
それとも、
そのスコップで、
誰かが、
ナイフを構えているレイカちゃん

をぶん殴ることを想定して置いたということなのか？」

と、

永久は言ったのだった。

「似たような推理の末に3」

「両方かもな。
ただ、
俺があんなに強く殴ることまでは
予想していたかどうかはわからないけどな。
でも、
そうだとすると、
レイカちゃんは犯人じゃないかもな。
だけど、
あのとき、
レイカちゃんは、
誰に怯えていたんだろう？」
と、
ホウセイが言うと、
「もしかして、
今回の犯人は、
もとめ先生と
ヒトメちゃんかチウメちゃんのどちらかなんじゃないか？
真の悪魔は
ヒトメちゃんかチウメちゃんのどちらか。
あー。
でも、
レイカちゃんが持っていたナイフには
血がついていたから、
レイカちゃんが逃げたのは、
もとめ先生の自殺の後か？
うーん・・・」

と、
永久が考え込むと、
「あのさあ？
もとめ先生が最初に自殺をしようとしたとき、
普通なら、
ナイフを取り上げるんじゃないか？」
「それもそうだけど、
また、自殺しようとするなら、
ナイフを取り上げた人間から、
また、
ナイフを取り返そうとするんじゃないか？
そうか！」
と言って、
手をパチンとたたいたくそたに向かって、
「くそた、何かわかったのか？」
と、
永久が、訊いたのだった。
「もとめ先生が自殺を試みたとき、
ヒトメちゃん、チウメちゃん、レイカちゃんの誰かが、
偽物のナイフをもとめ先生から取り上げたんだよ。
で、
それを取り上げたのが真犯人なんだ。　で、
真犯人と、
もとめ先生とは、
もとめ先生が2度目の自殺未遂の演技をフリすること
を予め打ち合わせとか約束していたんだよ。
そこで、
真犯人は、もとめ先生が2度目の自殺騒動を起こす前に、
何らかの口実をつけて、
キッチンへ行って、

偽物のナイフと本物のナイフとをすり替えて、
もとめ先生を騙して、
本物のナイフを渡して、
本当に自殺させるつもりだったんだよ。
だけど、
キッチンにあるはずの本物のナイフがなく、
おそらく、
犯人の目に入る範囲に、
ホウセイが置き忘れたナイフを見つけ、
それと偽物のナイフをすり替え、
かつ、
すり替えた本物のナイフを目立つところに持ち、
もとめ先生に再度奪わせて、
自殺させたわけだ」
くそたが、
そこまで自分の考えを話すと、
ホウセイが首を傾げ、
「じゃあ、
何で、
レイカちゃんが持っていた偽物のナイフに血がついていたんだ？
今のくそたの推理どおりなら、
レイカちゃんの持っていたナイフに血が付く余地はないぞ」
と、
ホウセイが言ったのだった。

「そう、そこが今回のポイントの一つなんだ。
今、話した推理どおりなら、
レイカちゃんが持っていた偽物のナイフには
血がついていたということは、
もとめ先生が自殺後、
故意に血がつけられたことになる。
まるで、
もとめ先生が自殺した際に、
偽物のナイフが床に落ちていて、
それにもとめ先生の血がついたかのように」
くそたがそこまで話すと、
「なんで、そんな小細工を」
と、
ホウセイが横から口を出すと、
「もとめ先生が最初に持っていたのは、
偽物のナイフだからさ。
だから、
そのナイフが自殺現場になったくそたの部屋にない
と不自然だからさ」
と、
くそたがそこまで話すと、
今度は、
永久が、
「何故、犯人はもとめ先生に本物のナイフを・・・
あ、そうか。
もとめ先生には、

自殺をするフリだけだと約束していたから、
偽物のナイフじゃまずかったわけか？
でも、
アユメちゃんとアスカちゃん、
俺とくそたが部屋を出なかったなら、
どうやって、
もとめ先生を騙して、
本物のナイフを奪わせる気だったんだろう」
と、
永久が話したところで、
「あっ、そうか」
と、
ホウセイが声を上げたのだった。

「悪魔にとっては、
アユメちゃんとアスカちゃん、
俺とくそたが部屋を出ようが、
そのまま、
部屋にいなくても、
関係なかったんだ。
自分だけ、何か口実をつけたり、
そっと、くそたの部屋を出て、
本物のナイフをキッチンに取りに行き、
もとめ先生から奪ったナイフをもとめ先生が奪いやすい場所にすり替えればいいだけだからな。
で、
俺が置き忘れたナイフは運悪く、
目立つところにあって、
悪魔に取られてしまったわけだな。

後は、
もとめ先生との打ち合わせどおり、
もとめ先生が悪魔から再度ナイフを奪い取り、
自殺するフリをさせて、
実際は、
自殺させるつもりだったわけだな」
そこまで、
ホウセイが話すと、
「なら、
犯人は一人でもいいんじゃないか？」
と、
永久が言うと、
「たしかに、理屈の上ではな。
でも、明らかにヒトメちゃんとチウメちゃんは
嘘をついている。
もとめ先生が自殺するフリするなら、
誰かがいる前、
少なくとも二人いる前じゃないと意味ないからな。
ヒトメちゃんがトイレに入っている間に、
もとめ先生が自殺するというのはおかしんだ。
実際は、
もとめ先生は悪魔から本物のナイフを奪って、
それを偽物だと思い込んで奪ってから、
最低、
二人の人物のいる前で手首を切ったんだよ。
そうじゃないと、
自殺のフリの意味がないだろ。
で、
そのときいたのが、
一人が悪魔で、

最低ひとりは、
ただの証人のはずの予定だったんだろうが・・・
うーん・・・」
ホウセイはそこまで話して、また、考え込んだ。

「嘘」

「その推理だと、
ヒトメちゃんは明かに嘘をついてるな」
と、
永久が言うと、
「チウメちゃんもだろ。
レイカちゃんと二人で戻ってきたら、
もとめ先生は既に自殺していた
と話していたからな。
ということは、
二人とも犯人か、
どちらかが何らかの理由で、
嘘をいわされていることになるな」
くそたが自分の意見を言う。
すると、
「もとめ先生が自殺したとき、
くそたの部屋にいたのが、誰かがポイントだな。
少なくとも、
最低、
一人は本物のナイフを取るためと、
もとことレイカちゃんの部屋に来ているのは、
間違いないからな。
それと、
ヒトメちゃんとチウメちゃんが口裏を合わせているのも間違いないな。
でも、
もし、二人とも、あるいはその一人が犯人じゃないのなら、

何故、口裏を合わせたのだろう」
と、
ホウセイが口走ったとき、
「もとめ先生が本物のナイフを奪った相手が犯人だとか限らないんじゃないか？
犯人が、もとめ先生が本物のナイフを奪った相手に、そのナイフを預けて、それを奪われてもとめ先生が自殺したとすれば、
ナイフを奪われた人間は、
負い目を感じて、犯人の言われるとおり、嘘をつくんじゃないかな？」
と、
くそたは自分の考えを話したのだった。
「でも、そうなら、ヒトメちゃんが嘘を言っていても、チウメちゃんが嘘を言っているとは限らなくなるぞ。
二人の話では、
くそたの部屋を出たのは、
チウメちゃん、レイカちゃんの順だからな。
もし、
レイカちゃんが犯人なら、
次の可能性も考えられる。
レイカちゃんの想定外に、
俺、くそた、
アユメちゃん、アスカちゃんが先に出て行ってしまった。
それだけじゃなく、
チウメちゃんまで部屋を出て行ったしまった。
レイカちゃんともとめ先生は予め打ち合わせをしているから、もとめ先生に何か合図して、
キッチンから何か持ってくるとか行って、
ヒトメちゃんともとめ先生だけをくそたの部屋に残して、

キッチンへ本物のナイフを探しに行った。
しかし、
くそたがホウセイに本物のナイフを預けていたので、
探しに行ったナイフはなかった。
しかし、
探していたナイフは、
どこか目立つところに落ちていたので、それを拾って、
レイカちゃんはくそたの部屋に戻った。
そして、
レイカちゃんは探し出したナイフをヒトメちゃんに預け、
トイレに入った。
そのとき、
もとめ先生がヒトメちゃんから、
本物のナイフを奪い取り、自殺未遂のフリをするつもりが、
ナイフが本物だったので、実際に死んでしまった。
ヒトメちゃんの叫び声かなんかを聞いたレイカちゃんは
トイレから出てきて、びっくりしたフリをして、
二人で、口裏を合わして、ヒトメちゃんがトイレに入っている間に
もとめ先生が自殺したことにして、
レイカちゃんがもとこの部屋の前にある自分の部屋に行き、
そこでチウメちゃんと会った。
後は、
チウメちゃんが話したとおりだ」
と、
永久は
これまでの話しから自分の考えたことを話したのだった。

「辿りついた真相？」

「ということは、
悪魔はレイカちゃんで、
チウメちゃんは本当のことを言っているだけ、
ヒトメちゃんはレイカちゃんに脅されて、
嘘をついたということでいいのか？」
ホウセイはそうは話したもの、
なにか納得しがたいものがあるような表情でそう言った。
それに気づいたくそたも、
「レイカちゃんの意識が戻らず、
ヒトメちゃんが、
今の話しを正直にすれば、
この事件はそれでおしまい
ということになるワケか」
と、
なんとなく割り切れないといった表情でそう言うと、
「でも、
これだけ、
二転三転してここまで辿りついたんだから、
なんとなく、
割り切れないが、
これが真相なんだろう。
レイカちゃんがああなったのも、
天罰かもしれないな。
もう、
これで割り切ろう。
後は、

ヒトメちゃんだけ、
ここに連れてきて、
うまく白状させるしかないな。
それから、
その前に、
万一、
意識が戻った場合を想定して、
レイカちゃんを縛り上げておくか」
永久がそう言うと、
「念のため、そうするか？
それから、
今の推理について、
木太郎とオチタの意見も聴いておくか？
その後、
ヒトメちゃんにどうやって、
真実を語らせるか、
考えるか」
と、
ホウセイが言うと、
3人はキッチンで紐のようなものを持ち出してから、
レイカの寝ているもとめの部屋に向かった。

「辿りついた真相？2」

ホウセイ、
永久、
くそたは、
もとめの部屋に入ると、
まだ、意識の戻っていないレイカ
を素早く縛りつけると、
すぐ、
木太郎たちの待つ部屋に行くと、
ホウセイが、
木太郎、おちたに何か耳打ちした後、
くそたと永久とに入れ替わり、
ホウセイと3人で、
前にいた部屋に戻っていった。

部屋に入って、鍵を閉めるなり、
「この事件の真相が解けたって？」
木太郎が鼻をひくひくさせながら、
少し驚いたような表情で訊くと、
「聞いてみないことにはな」
オチタは半信半疑なのか、
余裕の表情でそう言った。
「9割方間違いはないと思うけどな。
俺は犯人のことを悪魔と呼んでいたが、
とりあえず、
もとこと誤解されるといけないので、

犯人ということにする。
じゃあ、早速、
まず、
動機から説明する。
犯人は、
何が理由なのかまではわからないのだが、
もとこに脅迫されていた。
それは、
永久の証言と、
例のＳＤカードと、
パソコン内の画像などのデータが消されていたから、
ほぼ間違い」
ホウセイがそこまで話すと、
「永久が脅迫されていた？
何を？
木太郎が鼻をほじりながら、訊いたので、
ホウセイは、
永久に届いたメールのことから、
もとこが露店風呂に入っているのを知らない永久が、
そこに入って、
真っ裸の写真を撮られたことを話すと、
木太郎が股間を掻きながら、大笑いし始めたのだった。
「何、こんな状況で笑ってるんだよ！
いくら、永久がマヌケだったから
って、そんなにバカ笑いすることないだろ」
と、
オチタが言うと、
「だって・・・」
木太郎はそう言いかけて、
また、大笑いした。

「ふざけた奴だな」
ホウセイが呆れたように、
木太郎を見ると、
「あのさあ、
永久にあのメールを送ったのは俺！
この俺なんだよ・・・」
と言って、
木太郎はまた大笑いした。
「木太郎が送ったのか？
何で、そんなことを？」
と、
オチタが訊くと、
「ライバルになりそうなのは、
永久だけなんで、俺が送ったんだ。
それだけじゃなくなあ・・・」
とそこまで言うと、
木太郎はまた笑いだしたのだった。

「辿りついた真相？と笑う木太郎と脅迫」

「何で、
こんなときに笑ってんだよ！」
オチタが木太郎のおでこを叩くと、
「ごめん。
もとこが女好きだとかの噂を流したのも全部、
俺。
でも、
もとこが、
永久のアレだけじゃなく、
他の女子をも脅迫していたとは驚きだな。
うーん？
永久の場合はからかっただけかもしれないけど、
皆殺しする予定なのに、
女子の誰かを脅迫しても意味なくないか？
それとも、
共犯にさせるつもりだったのかな？
でも、
共犯はオオシマだけで充分だし、
実際、もとこはああなってしまったしな」
木太郎は急に真顔になり、
鼻をひくひくさせながら、
せっかく、
辿り着きかけた真相から離れたこと
を言いだしたのだった。
すると、
ホウセイが、

「永久のことはわかったよ。
でも、
もとこから見れば、からかうような脅迫内容でも、
本人から見れば、その内容を脅威に感じていたのかもしれないからな。
とにかく、
永久にはその話しはするな。
せっかく、
ここまで辿り着いたんだから、
動機は脅迫で行く」
と、
あくまでもこれまでの見解を崩さないことを明言した。
「まあ、それでもいいよ。
永久もすっ裸の写真撮られたくらいで、
びびらなくてもいいのになあ」
木太郎は今度は鼻をほじりがら、
そんなことを言う。
木太郎がそんな調子なので、
ホウセイは、
ナイフの移動や、
ほぼ辿り着いたと思う真相のようなことを、
くそたと永久とで考えた犯人については話さず、
犯人候補を3人まで絞って、
二人に話しをした。
「もとめ先生は自らの意思で自殺したんじゃなかったのか？
クソー！
で、
3人の中で犯人は誰なんだよ。
もとめ先生を騙してまで自殺させたのは？
俺が利用されたことは仕方がないと思ってるけど、

もとめ先生のことだけは許せない」
ホウセイの話しを聞いたオチタはすこし興奮気味に言った。
「落ちつけよ。
だから、
悪魔、いや、犯人は、
今話した、
チウメちゃん、ヒトメちゃん、レイカちゃんの中のひとりかふたりかなんだけど、
それを二人の意見を聞きたくて呼び出したんだよ」
と、
ホウセイは答えたのだった。

「辿りついた真相？とはずされたオチタ」

「オチタはもとめ先生のことになると、
すぐムキになるから、いったん、部屋に戻れよ！
で、
代わりに永久を連れて来い」
木太郎が鼻をほじりながら、偉そうに言うと、
「その方が、話しが早いかもな。
まずは、木太郎の意見を聞いてから、
オチタには話すからそうしてくれ」
ホウセイも木太郎の意見に同調して、
そう言うと、
「ごめん、
つい興奮して。
わかった。永久と代わってくる」
オチタは自分でも悪いと思ったのか、
あまり聞きたくない話しだ
と思ったのか、
素直に言うと、
すぐ部屋を出ていった。

オチタが部屋を出ていくと、
「何で、永久を呼び戻したんだよ。
俺と木太郎だけで充分だろ」
ホウセイは木太郎の意見に同調したクセに
そんなことを言う。
「自分だって、それでいいと言っただろう」

「それは、
とりあえずオチタをはずすためで、
深い考えはなかったんだよ。
で、さっきの質問だけど、
何で、
永久を呼び戻すことにしたんだ？」
「ホウセイ、
メールのことは秘密だぞ。
わかったな。
とにかく、
俺は永久に直接確認したいことがあるんだ。
ホウセイたちがまだ気づいていないことが
俺にはあるような気がするんだな」
と、
木太郎が股間を掻きながら言ったとき、
永久がノックもせず、部屋に入ってきて、
自ら部屋の鍵を閉めたのだった。

木太郎は、
永久が部屋の鍵を閉め終わるなり、
いつものように鼻をほじりながら、
「永久、もとこに、もとめ先生が整形デブだ
という噂を流すように脅迫された
っていうのは間違いないな。
で、それは口でか？
それとも手紙か何かか？」
と、
永久に訊くと、
「口だよ。

メールはここでは届かないし、
手紙じゃ、証拠に残るからだろ」
と、
永久は即答した。
「で、実際にもとめ先生が整形デブだという噂を流したのか？」
ホウセイが木太郎に説明していなかったことを訊くと、
「いや、
実際は、
おちたがもとこの部屋に呼ばれて、
その整形前の画像を見せられて、
木太郎もいたかもしれないけど、
ホウセイと誰かが、
俺とおちたの話しを聞いてしまったので、
俺が噂を流すまでには、いかなかったんだが、
もとこは俺が噂を流したものと思い込んで、
褒めてくれたんだ」
と、
永久は以前にも話したことを
木太郎に再度、説明したのだった。
すると、
ホウセイは、
「永久が脅迫されていたことは
以前話したときには誰も知らなかったけど、
オチタがもとこにもとめ先生の整形前のようなもの
を見せられた話題は出ていただろう。
ここで、
重要なのは、
女子の中にももとこに脅迫されていて、
それがもとこ殺しの動機だということなんだよ。
下手に時間潰すなよ」

と、
ホウセイが木太郎に言うと、
木太郎が、
「俺が感心あるのは、
女子の中にも脅迫されていた人物がいることじゃなく、
もし、
女子の誰かが脅迫されていたなら脅迫されて何かをするように、
命じられていたはずだ
ということなんだよ。
永久は実際命じられていたんだから、
女子の方も同じはずじゃないか。
で、
永久みたいな内容なら、
敢えて、
もとこを殺す必要なんてないだろう。
実際、永久は褒められておしまいだっただろう。
俺にはそこがひっかかかる」
と、
木太郎は今度は股間を掻きながら、
そう話したのだった。
（続く）

「辿りついた真相？」と呆れるホウセイ」

「あのなあ。
俺がさっき説明したように、もとこのノートパソコンのデータがほとんど消されていたんだよ。
悪魔がもとこを殺したいと思った動機は、
脅迫されて何か命じられたからじゃなく、
脅迫の内容にあるんだよ。
本当、ピントはずれのことを言うよなあ」
と、
ホウセイが呆れたような表情で木太郎の顔を見ながら言うと、
木太郎は、今度は鼻をほじりながら、「どこがピントはずれなんだよ。
よく俺の話しを聞けよ。
俺が何で永久を呼び戻したかわからないのか？
まあ、その顔はわかってないよな。
いいか。
普通、
脅迫されて何かをするように命じられたら、
脅かされた方が、
命じられた行為をする代わりに、
その脅迫内容の証拠となるものを返してくれとか、
何か、
見返りの条件をつけるんじゃないか？　永久は少し抜けたところがあるし、
脅迫された内容もたいしたことじゃないから、そういう駆け引きをしなかっただけなんだろうけど、
今回の犯人は頭がいいんだから、

その辺の取引をもとことしたんじゃないか？
ホウセイの意見では、
永久の場合と違って、
犯人が脅迫されていた内容は、
もとこを殺したいほどの内容だ、
ということなんだろう。

だったら、
絶対、証拠となるものを返してもらうよう、
もとこと取引したはずだよ。
違うか？」
と言い返すと、
「あー！
そうか！
あのとき、
もとこに俺の画像を消してくれって、
頼めば良かったなあ」
と、
永久が、
たった今気づいたような感じで
そう言うと、
「ああ、そういうことか。
悪かった木太郎。
だったら、
もとこのノートパソコン内のデータは
犯人のいるところで、
もとこが消したのかなあ？
でも、
全部データを消す必要あるかな？」
と、

ホウセイがそこまで話して、
考え込むと、
木太郎は、
今度は股間を掻きながら、
「もとこはスペアのＳＤカード
を持っていたから多分消したんだよ。
実際、
ホウセイが貰うはずだった、
ＳＤカードも消えていたんだろう。
俺の考えだけど、
もとこは、
ＳＤカードを最低２枚持っていて、
脅迫されていた人間、
つまり犯人に１枚返して、
念のため、
犯人から言われて、
パソコン上のデータも全部消したんじゃないのか。
それでだな。
ずる賢かった、
もとこのことだから、
他にも最低１枚あったＳＤカードは
まだ処分なんかせず、
今も、
もとこの部屋にあるんじゃないか。
俺はオオシマには渡していないと思う」
と言ったのだった。

「辿りついた真相？と脅迫？の証拠」

木太郎の話を聞いた永久が、
「そうだとすると、
犯人は複数じゃなく、ひとりかもしれないな。
それに、
もし、証拠となるＳＤカードを見つければ、
絞られた犯人を自白させられるな。
でも、
そうなると、
また、
もとこの部屋に行って探すのか？」
と、
少し嫌そうな表情で言うと、
「その前に、
木太郎、何で、もう１枚のＳＤカード
をオオシマに渡してないと思うんだ？」
と、
ホウセイが聞くと、
木太郎がまた鼻をほじりながら、
「簡単な話だよ。
ホウセイが俺と一緒にもとこから、
画像を消したＳＤカードを貰う
と約束したときには、
もう、オオシマはいなくなっていたからだよ。
あのとき、
俺たちはＳＤカード自体を確認してるから、
ほぼ間違いない。

で、もとこがその後オオシマと例の無線機以外で接触するとは考えられないからな」
と言うと、
「木太郎！
今日は結構冴えてるじゃないか。
それにたしかコンテストが全部終わった頃には、
もうオオシマは消えていたよな」
「今日は余計だよ。
永久」
木太郎と永久がそういう話しをしていると、
「でも、そのＳＤカードの画像
は消されているんじゃないのか？」
と、
ホウセイが口を挟むと、
「いや、それはないな。
犯人に渡した方は消しているかもしれないけどな。
万一、データの復元に失敗したことや、
復元ソフトがもとこのパソコンにインストールされていないから、
画像を消してしまったら、
この合宿が終わるまで見ることはできないからな。
さあ、ダメもとで、もとこの部屋をもう一度探そう。
そして、
ＳＤカードを見つけて、
犯人を追いつめよう」
木太郎はそう言うと、
既に、もとこの部屋に行くために、
扉の方へ歩き初めていた。
木太郎を先頭に、
永久、
ホウセイがもとこの部屋に入ると、

木太郎が、
いきなり、
「じゃんけんで決めよう。
負けた奴がもとこの死体を調べて、
ＳＤカードを捜し出す」
と言いだした。
すると、
ホウセイが、
「木太郎はあのときいなかったから、
知らないと思うけど、
もとこはＳＤカードを身にについてないよ。
もし、
その可能性があるなら、
警察が来た後、死体を調べれば、
すぐ発見されるから、犯人が放置するわけないからな」
と、
ホウセイは前にくそたと永久と話した
と同じ内容のことを言った。
すると、
「永久、それで納得したのか？
いいか。
二つの問題がここではあるんだぞ。
もとこがコピー用のＳＤカードを身に付けていたか
という問題と、
犯人が警察に見つかる前にＳＤカードを回収できたか
という問題だ。
俺は後者の可能性は低いと考えている。
何故なら、
犯人候補の、
チウメちゃん、

ヒトメちゃん、
レイカちゃん以外は、
ひとつまたはふたつのグループのどちらかと行動を共にしていて、
単独行動することはできなかったからだよ。
それから、
チウメちゃん以外は、
おそらく、
下手にうろつくと、
俺たちと遭遇するから、
くそたの部屋から、
隠れていた場所以外には行っていないと思う。
チウメちゃんの場合は少しうろついていたみたいだから、可能性はない
とは言えないけどな」
と、
木太郎がそこまで話すと、
「じゃあ、
もとこの死体からSDカードを回収できた可能性があるのは、
チウメちゃんだけということになるはずだよな」
と、
今度はホウセイが言うと、
「まあ、可能性としてはな。
ただ、それはもとこの身体または部屋からSDカードが見つからなければの話しだけど、
俺は、もとこの性格を考えると、
脅迫のネタになるような重要なものは、
もとこが身に付けていたと思うけどな」
と言って、
ちらっともとこの死体を見た。

「辿りついた真相？と恐怖のＳＤカード探し」

木太郎の言葉に、
まず、
永久が、
「俺は勘弁。
なかったら、無駄なことやることになるし、
それより、
触るのも見るのも嫌だよ。
ノートパソコンのデータ
を後で復旧させればいいんだから、
もとこの身体を探すのをやめようぜ。
部屋の中なら、俺はいいけど」
と、
凄く嫌そうな表情で言う。
「俺もだな。
なんか、呪われそうだし、
やるなら言いだした木太郎がやれよ。
証拠なしでも、
ここまで来れば、
悪魔の正体は特定できると思うんだかどな」
と、
ホウセイももとこの死体から顔をそむけて、
そう言う。
「二人ともチキンだな。
じゃあ、俺がやるから、
ホウセイと永久は、
犯人の正体を二人で話して、

明かにしておけよ」
木太郎には珍しく強気なことを言って、
もとこの死体に近づいた。
そのとき・・・
もとこの部屋の扉が突然開いたので、
木太郎、
ホウセイ、
永久の3人は飛び上がるような感じで驚いた。
「なんで、こんなとこに。
で、どうしよう?」
オチタは、
それだけしか言わなかったので、
「びっくりさせるなよ!
何がどうしようなんだよ!
オオシマでも来たかと思ったぞ」
木太郎が鼻をひくひくさせながら、
大声でオチタに言うと、
「実はさ。
アスカちゃんの様子が変だから、
口から猿ぐつわのようにかましているハンカチ
をはずして話しを聞いたら、
お手洗いに行きたいって言いだしたんだよ。
で、
俺もくそたも脚だけロープをほどいて、
終わったら、今度は脚をロープでしばって、
手をほどけば、逃げられないからしょうがない
って、
言ったんだけど、
チウメちゃんが今度は身体を動かして
何か言いたそうだったんで、

同じようにして、話しを聞いたら、
あの子をお手洗いにいかしたら、やられる
って言いだしたんで、
また、
二人が喧嘩になったんで、
くそたが怒鳴って、口をハンカチで縛ったんだけど、
今度はあのアスカちゃんが泣き出したんで、
くそたが、
どうしたらいいかわからなくなって、
3人を呼んで来いって言ったから、探し回って、
やっと見つけたんだよ」
と、
オチタは長々と話したのだった。

「辿りついた真相？と恐怖のSDカード探しと突然のハプニング」

「せっかく、
いいところまで来たのに、
チウメちゃんが犯人か？」
木太郎が鼻をひくひくさせながら、言うと、
「それよりも、
あのアスカちゃんが泣くくらいだから、
もうションベンか、
うんこ、
我慢できないんじゃないか？」
「うんこじゃないだろうけど、
まいったなあ。
でも、
チウメちゃんの反対は、
演技なのか、
確信なのか？
男ならなあ。
ペットボトルでも探して、
しばったまま、
小便させられるけど、
女子だしなあ。
どうしよう？」
永久とホウセイが困った表情で言うと、
木太郎が、
股間を掻きながら、
「俺は子どもの頃、よく漏らしたから、
漏らさせればいいんじゃないか？

それより、
早く、
事件を解決させないと、
他の女子も言い出すぞ」
と言うと、
「キモ男の木太郎とは違うだぞ。
四美将のアスカちゃんだぞ。
それに、
アスカちゃんは、
悪魔じゃないからな。
もし、
チウメちゃんの演技なら、
彼女はとんでもない悪魔かもしれないぞ」
ホウセイは真顔で言う。
「で、どうしたらいいんだよ。
早くしないとアスカちゃん、
かわいそうだろ」
オチタは自分では決められないので、
3人をせかすように言う。
「よし、
オチタ、
ついて来い。
俺が言って、
どうにか話しをつけてくる。
で、
木太郎はSDカードをそれまでに見つけてろ」
と、
ホウセイは言うと、
先にもとこの部屋を飛び出していった。

「辿りついた真相？と罠？」

ホウセイとおちたが、
くそたたちのいる部屋に行くと、
泣いていると言われていたアスカとチウメが
大声で何かわめいていた。
「どうなってんだよ？」
「あー、ホウセイ。
アスカちゃんが、
トイレに行けないのはかわいそうだから、
俺がトイレまでアスカちゃん
をしばったまま連れて行き、
便器の上に座らせた後、
同じように、
チウメちゃんを
トレイまで連れて行く。
そして、
アスカちゃんは足だけロープをほどき、
チウメちゃんの方は手だけロープをほどき、
俺が後ろからアスカちゃんを羽交い締めしている間に、
チウメちゃんが、
アスカちゃんのジーンズやパンツを降ろして、
用が済んだら、
その事後処理をするということを提案したら、
今度は、
それまで泣いていたアスカちゃんが、
それがチウメちゃんの罠だから、
自分は我慢し続けると急に言いだしたら、

チウメちゃんも何か言い返して、
ああいうわめき合いになったんだよ」
ホウセイの質問に、
くそたが困った表情のまま答えた。
すると、
「アスカちゃんがもう少し我慢できるんなら、
そうしてもらって、
早く、
二人にさるぐつわをかませろよ。
もうすぐ、
犯人はわかるから、
それまでの辛抱だ。
アスカちゃん、
チウメちゃんも、
もう静かにして、我慢してくれ。
今、最後の詰めに入っているから」
ホウセイは、
まるで、
犯人を特定したかのような感じで、
落ちついて話して、
二人を順に見ると、
二人とも黙って頷いた。
そうして、
おちたが、
すばやく、ハンカチで、
二人に猿ぐつわをかました。
それを確認したホウセイは、
「くそた、オチタ、後は任せたぞ。
もう猿ぐつわをはずすなよ。
いいな」

とだけ言うと、
くそたとオチタの返事も聞かずに、
すぐ部屋を飛び出して、
もとこの部屋に向かった。

「辿りついた真相？とホウセイの疑問と恐怖のＳＤカード探し？」

ホウセイが急いでもとこの部屋に戻ると、
永久はもとこのベッドの方を見ないようにして、
床に座り込んでいて、
木太郎は、
もとこのベッドの前で、
立ち尽くしたままだった。
「やっぱり、
見つからなかったのか？」
ホウセイが木太郎に声をかけると、
「やっぱり、怖くてダメだ。
首にペンダントでもかけていないかとちょっと触ったら、
もとこの顔にかけていたハンカチが落ちて、
凄い形相だったので、
ハンカチを戻すのが精一杯で・・・」
木太郎は鼻をひくひくさせながら、言うと、
「だから、俺が言っただろ。
もう、
ＳＤカード探しは諦めろよ。
俺が探した限り、
もとこの荷物関係には、
そんなものは見つからなかったしな」と、
永久が言うと、
「そうだな。
それよりも、
今、くそたたちのいる部屋に行ってきたんだが、
犯人じゃないはずのアスカちゃんと、

犯人候補のチウメちゃんの様子がどうもおかしいんだ」
と言って、
そのときのやりとりをホウセイは、木太郎と永久に話したのだった。
　すると、
さっきまでもとこの死体を調べて、ＳＤカードを探すと言っていた木太郎が、
「ようやく、犯人がわかったぞ。
犯人は、
アスカちゃんと、
チウメちゃん。
この二人なんだ。
こう考えれば、
俺が疑問に思っていたこともすべて解消する」
今度は鼻をほじりながら、自信満々の表情で言った。
「また、振り出しに戻るのはごめんだぞ」
永久は木太郎にはあまり期待していないので、はっきり言った。
「共犯同志がわざと仲悪いフリをするというのは、よく2時間ドラマでもある話しだと前に誰かと話した気もするが、
今回はまさにそれだ。
やっと辿り着いたナイフの移動の順序も、
動機がもとこの脅迫であることも、
さらに、
俺が新たに気づいたのは、
もとめ先生まで自殺させたもう一つの動機だ。
それから、

例のＳＤカードのこともな。
これから、
この事件の真相を話すからな」
木太郎は永久のことを無視して、
自分の推理を話し始めようとした。

「今度こそ辿りついた真相？と二人の疑問」

「まず、
ナイフの移動は、
キッチンにあった本物のナイフとチウメちゃんの演劇用のナイフをすり替え、
それをもとめ先生に渡した。
アスカちゃんが身に付けていた演劇用のナイフは、
俺たちがもとこの部屋に閉じこもって、
アスカちゃんが武器を探しているときに、
アスカちゃんが後で見つかるのを承知でわざと演劇用のナイフをベッドの下に隠した。
もとめ先生は演劇用のナイフで自殺するフリをして、
その際、チウメちゃんにナイフを取り上げられた。
キッチンにあったもうひとつのナイフはくそたからホウセイに渡り、
ホウセイがリビングのどこかに置き忘れた。
その置き忘れたナイフをチウメちゃんが見つけ、
もとめ先生から取り上げた演劇用のナイフとすり替えて、
それをヒトメちゃんに預けた。
もとめ先生はそれを見ていて、
ヒトメちゃんが持っていたナイフを演劇用のナイフだと思い込んで、再度、自殺する演技をする予定だったが、
ナイフが本物だったので、実際に手首を切ってしまった。
そして、
そのどさくさに紛れて、
チウメちゃんが演劇用のナイフをもとめ先生が倒れて、
血が出ている辺りに置いた。

そして、
おそらく、
何かに気づいたレイカちゃんが演劇用のナイフを持って、
素早く逃げた。
ここまでが、
ナイフの移動の過程だ。
何か、疑問があるか」
と、
木太郎が偉そうに鼻をほじりながら、
ホウセイも永久もそれぞれ少し考え込んで、黙ったままだった。

「今度こそ辿りついた真相？と二人の疑問2」

「どうした？
二人とも、ナイフの移動については、
今の説明におかしな所あるか？」
木太郎は鼻をほじりながら、
不満そうに言う。
「いや、今の推理に矛盾はない。
ただ、なにかひっかかる」
と、
永久が言うと、
「俺もだ。
木太郎の推理はもっともな気もするんだが、
なんとなく違う気が」
と、
ホウセイも永久と同じく理由もなく、
そんなことを言うと、
木太郎が鼻をひくひくさせながら、
「そういうのが一番困るんだよな。
矛盾点とか、不自然なところを
はっきり言ってもらわないとな。
話しが先に進まないぞ。
あー、
オチタが騙されて、
」もとこを殺したナイフがキッチンに
もともとあったナイフだ
という当たり前のことを省略していたからかもな。
ごめん、ごめん」

木太郎は、今度は股間を勝手に解釈して、
口先だけで謝って見せた。
「いや、それは省略してもわかっていることだから。
俺がひっかかっているのは、
そうじゃなく、レイカちゃんが偽物のナイフを持って逃げた
というところなんだ。
おかしいとは言えないんだが、そこがなんとなくひっかかってな」
と、
ホウセイが言うと、
「そうだ。
俺もそこがなんとなくよくわからないんだ。
理屈の上では、
それしかないんだけどな」
と、
永久も首を傾げながら、
ホウセイと同じことに疑問を抱いているようだった。
「レイカちゃんは、
多分、何かの事情でチウメちゃんが犯人だ
ということに気づいたんだろ」
木太郎が二人の疑問点
をあまり問題にしていないような言い方をする。
「どうして気づいたんだよ。
それに、レイカちゃんが犯人じゃないなら、
オチタのやったことは芝居だと思っていたはずじゃないのか？」
と、
永久が訊くと、
「それを含めて、気づいたんだよ」
木太郎は今度は鼻をほじりながら、
やはりそこは疑問に思っていないようで、
あっさりと言う。

「平行線だな。
じゃあ、木太郎。
ヒトメちゃんが嘘をついたのは何故だ？」
と、
ホウセイは、
レイカの話しを木太郎にしても無駄だと思ったので、
もうひとつ疑問に思っていたことを口にすると、
「それは、前に話しただろ。
ヒトメちゃんが預かっていた本物のナイフ
をもとめ先生に取られて、
もとめ先生に自殺されてしまったから、
嘘を言うしかなかったんだよ」
木太郎は今度は股間を掻きながら、
ホウセイの顔を見て、呆れたように言う。
「ホウセイ、そこは木太郎の言うとおりだろ。多分」
永久はその点には木太郎と同意見のようだった。
「うーん・・・。
じゃあ、こうしないか？
ヒトメちゃんだけ、
ここじゃ、あれだから、
どこか別の部屋に呼び出して、
もう一度、話しをして、
本当のことを話させたら、どうだ。
そうだ！
レイカちゃんが寝ているもとめ先生の部屋でどうだ？」
と、
チウメ、アスカ共犯説に納得していないホウセイが
そう提案したのだった。

「今度こそ辿りついた真相？とヒトメの事情聴取の前に」

ホウセイの言葉に、
木太郎は自信があるせいか、
黙って頷いたが、
永久はまだ木太郎の推理に納得しきれていない部分があったので、
「その前に、
真相を整理して、
ヒトメちゃんにどうやったら本当のことを話して貰えるか、
打ち合わせをした方がいいと思うな」と提案した。
ホウセイも、
「その方が確実だな。
木太郎、
ナイフの移動はわかったから、
推理した今回の事件の内容を簡潔に話してみろ。
簡潔にだぞ」
ホウセイが念を押すように言うと、
木太郎は自信があるのか、
「わかったよ。
簡潔に話すから、質問は後にしてくれいいな。
まず、
今回の事件の発端は、
もとこにアスカちゃんが２０７号室に泊まらされたとき、
もとこが、
何か、アスカちゃんにとっては知られたくないような秘密を知って、
それをデジカメで撮影したことだと思う。

そして、
もとこはそれをネタに、永久に対すると同じように、
もとめ先生が元はデブでブスで、
今の姿は整形した後の姿である、
という噂を流すように命じたわけだ。
で、
それだけなら、よかったんだが、
アスカちゃんにしては、
どうしても、
もとこに握られた脅迫のネタを処分したかったので、
同じ演劇部で、
実は親友のチウメちゃんに頼んで、
もとこの部屋に行き、そのネタを処分に行ったわけさ。
そうして、
二人がパソコンの中身だけではなく、
ＳＤカードも探しているとき、
例の無線機を見つけて、
もとこが、
もとめ先生を元整形デブだったことがみなに知られたこと
を理由に自殺にみせかけて殺すことを知ってしまったわけだ。
そこで、
二人は初めてもとこに殺意をいだいたわけだ」
木太郎がそこまで話すと、
最後まで黙って話しを聞くと約束していたにもかかわらず、
ホウセイが、
首を傾げながら、
「やっぱり、その推理おかしいぞ」
と、
思わず呟いてしまったのだった。

「今度こそ辿りついた真相？木太郎の推理の致命的欠陥」

「話しを最後まで聞いてから、何か言えよ」
ホウセイに横から自分の推理がおかしいと言われて
少し興奮した木太郎が鼻をひくひくさせながら言うと、
「悪いと思うが、致命的だと思うからな。
今のところは。
つまりな、
アスカちゃんたち二人が、
例の無線機を見つけて、
もとこが、
もとめ先生を元整形デブだったことがみなに知られたこと
を理由に自殺にみせかけて殺すことを知ってしまい、
二人は初めてもとこに殺意をいだいた
というところだ。
もし、
それが動機のひとつなら、
二人がもとめ先生を自殺に見せかけて殺すことはしない。
それじゃあ、
もとこと同じことだからな」
ホウセイがもっともらしく話すと、
「それはだなあ。
二人がもとこを殺す計画を立てて、
それをもとめ先生に話したら、
もとこを殺すことを反対されたから、　もとこを殺す以上、
計画を知られたので、
もとめ先生の口を封じることにしたんだよ」
木太郎はかろうじて反論はしたものの、その鼻がひくひくしてい

て、
自分でも説得力がないと自覚しているようだった。
　すると、
　永久が、
「木太郎も自分でも今話したことがおかしいことに気づいてるんだろう。
　顔を見れば、わかるよ。
　今、俺は木太郎の推理を聞いていて、気づいたんだけど、
　アスカちゃんとチウメちゃんがあれほど、敵対しているのは、単なる芝居じゃなくて、
　もとめ先生が本当に自殺したことにあるんじゃないのか？
　これまで推理してきたことから、
木太郎のその先の推理は俺にも予想はついていて、
二人がもとこ殺しについては共犯だったとは思うけど、
　もとめ先生を自殺させたことについては、
二人のどちらかだけの意思なんじゃないかな」
と、
　永久が自分の考えを話してから、
　木太郎とホウセイの顔を順に見ると、
「もう答えは出たも同然じゃないか」
と、
　ホウセイがぽつりと言ったのだった。

「今度こそ辿りついた真相？真の悪魔？」

ホウセイの言葉を聞いて、
すぐ、
永久が、
「もとめ先生に例のトイレ内の絵のことで、
助けてもらったアスカちゃんじゃないって、ことだな」
と切りだして、
アスカがもとこに二日続けて、
２０７号室に泊めらさせようとされたところを、
もとめがトイレに飾ってあった花の絵をすり替えて、
もとこを出し抜いて、
アスカを救った出来事を話して、
アスカが恩のあるもとめを自殺に見せかけて殺すはずがない
と主張すると、
ホウセイは黙って頷き、
木太郎もそのときのことを思い出し、
「そう言えば、そんなこともあったな。
あの絵のすり替えからもとこの敵意は
もとめ先生ひとりに絞られたのかもしれないな。
すり替えに始まり、すり替えで終わったわけか。
でも、
何で、チウメちゃんが？
アスカちゃんが脅迫されていたのは、
きっと、最初に２０７号室に泊まったときの出来事の何かなんだろうけど、
チウメちゃんがもとこに脅迫されていた事実があるのか？」
木太郎は、

アスカのために親友のチウメが協力したと思い込んでいたので、
鼻をひくひくさせながら言った。
「多分、
アスカちゃんさえ知らない脅迫のネタで、
しかも、
もとめ先生もそれを知っていたんだろうな。
そして、
その脅迫のネタは、
チウメちゃんにとっては、
誰にも知られたくないことだったから、
共犯だったアスカちゃんも騙して、
もとめ先生を自殺させるように仕組んだのさ」
ホウセイがそう言うと、
「だとしたら、
俺はアスカちゃんがもとこに脅迫されていた内容は
だいたい予想がつくから、
ヒトメちゃんに話しを聞くんじゃなくて、
アスカちゃんから話しを聞いたら、どうかな。
ただ、
その際、
もとこのことについては、
二人が共犯だったということはわざと気づいてないフリして聞けば、
いいんじゃないかな」
と、
永久は自分の意見を言った。
すると、
「じゃあ、
チウメちゃんが脅迫されていたネタを適当にでっちあげて訊いてみようか？」

と、

ホウセイは言ったのだった。

「今度こそ辿りついた真相？真の悪魔？と木太郎と永久の疑問」

ホウセイの意見に対し、
「最初に俺が言いだした意見を変えるようでなんだけど、
もし、
チウメちゃんも、
もとこに脅迫されていたとするなら、
アスカちゃんも
そのことを知っている可能性があるんじゃないかな。
まあ、もとめ先生がその事実を知らない
とアスカちゃんは思っていたかもしれないけどな」
と自分の疑問点を話すと、
「いや、それはないと思う。
真の悪魔がチウメちゃんで、
脅迫されていたネタが誰にも知られたくないものなら、
アスカちゃんを生かしてはおかないさ。
彼女を犯人に仕立てても、
その口から、
チウメちゃんがもとこに脅迫されていたネタは
バレるに決まっているからな。
だから、
そこは心配しないでいいんじゃないか？」
と、
ホウセイが言うと、
「それもそうだな。
でも、
その前提だと、
アスカちゃんの立場からすると、

チウメちゃんが、
何故もとめ先生まで自殺させたと思い込めるのかな？
ホウセイが話したとおりなら、
チウメちゃんがもとめ先生まで自殺させる動機はない
と普通なら思うんじゃないか？」
と、
永久が首を傾げながら話すと、
「うーん？」
と、
今度は木太郎が永久の言いたいことがわからないと言った感じで、
首を傾げながら、鼻をひくひくさせた。
「言葉足らずだったか。
要するに、
今までの前提だと、
アスカちゃんから見れば、
チウメちゃんが共犯になったのは、
自分を脅迫していたもとこを殺すことに協力すること、
もうひとつはもとこがもとめ先生を殺そう
と考えていたことに憤りを感じたことなんだから、
チウメちゃんには何の悪意も感じてないハズなのに、
あんな態度をとって怒る程、
チウメちゃんが故意にもとめ先生を自殺させた
と思い込めるのかな？
そこが俺にはわからないんだ。
逆に、
アスカちゃんが、
チウメちゃんにもとめ先生を殺す動機に思い当たるのであれば、
ああいう態度もよくわかるんだけどな」
永久の疑問に対し、
「永久、今ので、今回の二人のああいう態度がわかったよ。

アスカちゃん自身は、
最初はさっき話した二つの理由だけで、
チウメちゃんがもとこ殺しに協力したと思い込んでいたんだろうが、
もとめ先生が自殺したことを知った時点で、
チウメちゃんがもとこを殺すのに、協力した真の理由は、
自分と同じように、もとこに何らかの理由で脅迫されていて、
しかも、そのネタをもとめ先生も知っていたに違いない
ということに気づいたからなんだよ。
だから、
アスカちゃんからすると、
騙されていたというか、
裏切られたという気持ちであんなに怒っているわけさ。
でも、
自分も共犯者だから口にできないだけでな」
と、
ホウセイが言ったのだった。

「辿りついた真相？と自白に追い込む方法」

「よし！
まず、アスカちゃんを自白させれば、
いいんだな」
木太郎がホウセイの言葉を聞いて、
鼻をほじりながら、
あたかも、もうゴールが見えたかのように言った。
しかし、
「アスカちゃんが、
そう簡単に証拠もなしに自白するかな。
もとめ先生のことには無関係でも、
もとこ殺しは主犯みたいなもんだからな。
いくら、
チウメちゃんの話しをして追い込んでも、
そう簡単に自白するとは思えないな。
木太郎、
思い出して見ろよ。
俺たちが
もとこの部屋に閉じこもっていたときのアスカちゃんの態度を。
チウメちゃん程ではないにしろ、
彼女も相当の強者だぞ」
と、
ホウセイが言うと、
「たしかにな。
ＳＤカードもなし、
ノートパソコンのデータも消されている。
証拠となるものは一切ないからな」

と、
永久がホウセイと同じ意見を言ったとき、
木太郎が、
「そうだ！
何故、
チウメちゃんはくそたの部屋でじっとしていないで、
他の部屋をもうろちょろしていたのかな。
もとめ先生の部屋のトイレの前に
スコップを置くためだけじゃなく、
他にも目的はあったんじゃないか。
だとすると、
目的はアレしかないぞ」
と言うと、
「そうか！
アレか」
と、
ホウセイも木太郎が言いたいことに気づいたのだった。

「辿りついた真相？と自白に追い込む方法2」

永久はホウセイと違い、
木太郎が言ったアレが何かピンとこなかったので、
「アレってなんだよ？」
と、
木太郎とホウセイの顔を見ると、
「だから、
ＳＤカードだよ。
おそらく、
チウメちゃんは、
もとこのフリをして、
オオシマと連絡をとり、
ＳＤカードが2枚あったことと、
それをオオシマが預かっていないことを確認したんだよ。
多分、1枚はチウメちゃんとアスカちゃんが
もとこの部屋で見つけて、処分したんだろうが、
もう1枚が、
どうしても、
もとこの部屋では見つからなかったし、
おそらく一緒に露店風呂に入ったときにも、
もとこが身に付けてはいないことを確認していたから、
他の場所にもとこがＳＤカードのコピーを隠していた
と思って探し回っていたんじゃないか」
と、
木太郎が股間を掻きながら、自信ありげに話すと、
永久が、
「じゃあ、

それを見つけるしかないのか。
彼女たちを自白させるには。
でも、
もとこはどこに隠したんだろうな」
と言って、首を傾げると、
「ずる賢いもとこのことだから、
脅迫していたアスカちゃんたちが、
自分が部屋にいない隙を狙って、
ＳＤカードを探しに来ることを想定していて、
１枚は部屋に置いたままにして、
もう１枚のコピーのＳＤカードは
どこか別の部屋かどこかに隠していたんだろうな。
うーん・・・」
と、
そこまで話してホウセイは考え込んでしまったのだった。
ホウセイが考え込むと、
「あんな小さいもの、何の手がかりもないんだから、これから見つけられるワケはない。
真相はほぼわかったんだ。
アスカちゃんとチウメちゃんが犯人に間違いはないんだ。
それと直接関係はしないかもしれないが、
ヒトメちゃんも嘘をついていることは間違いないから、
３人で一番自白させやすいヒトメちゃんをここに連れてきて、
何故、
嘘をついたのか、
問いつめて自白させた方が早いって。
ヒトメちゃんには、
本当のことを話せば、
多分、嘘をつく原因になったナイフ
をもとめ先生に奪われたことは秘密にするって話せば、

自白すると思うけどな。
トイレに言ってる間にもとめ先生が自殺してしまった場合と、大差はないって言ってさ。
そうすれば、
チウメちゃんの嘘も明らかになる。
そこで、
チウメちゃんを自白に追い込むんだ。
もう、それしかないだろう。
他に方法はないぞ」
木太郎が偉そうに鼻をほじりながら言うと、
「そうかもな」
と、
最初はもう1枚のSDカードを探す気だった永久も木太郎の意見に賛成するようなことを言った。
しかし、
ホウセイは、
「うーん・・・
ヒトメちゃんが嘘をついていたことを認めたとしても、そこから、
チウメちゃんを自白に追い込めるかなあ?
チウメちゃんに、
嘘をついたのは、
もとめ先生にナイフを奪われてしまったヒトメちゃんを庇うためだ、
と言い張られたら、どうする気だ?」
ホウセイがそう言い返すと、
「それはだな・・・」
「うーん・・・」
と、
木太郎も永久も黙り込んでしまった。

「辿りついた真相？と二つの選択」

「そうなるともう2択だな。
仮にヒトメちゃんを自白に追い込んでも、
チウメちゃんを追及して、
自白に追い込むのは駄目みたいだからな。
そうなると、
アスカちゃんを自白に追い込むか。
もう1枚のＳＤカードを見つけるかのどちらかしかないな」
と、
木太郎が鼻をひくひくさせながら言うと、
「アスカちゃんも手強いぞ。
脅迫のネタは予想がつくが、
あくまでも予想で証拠はないからな」と、
木太郎がこれからチウメを自白させるには
二つの選択肢しかないと主張したのに対し、
永久は、
ＳＤカードを見つけるしかないというような意見を言ったのだった。
二人の話を聞いていたホウセイは、
「二人の意見はわかったが、
こうしないか？
俺の考えでは、
おそらく、
ＳＤカードは２０７号室のどこかに隠されている。
あそこは、
泊まらせれた人間にしても、
そうでない人間にしても、

下手にうろつきたくない場所だからな。
だから、ＳＤカードを隠すには絶好の場所だと考えられる。
で、
そこを俺たちが探しまくってもＳＤカードが見つからないようならば、
アスカちゃんを自白に追い込む。
その手順しか、
もう方法はないんじゃないか？
俺はそう思う」
と言うと、
「なるほど、２０７号室か」
と、
永久がそれだけつぶやき、
「ホウセイの発想はあまりにも単純だが、
意外にもとこは単純かもしれないから、
２０７号室にあるかもな。
で、
それで駄目だったら、
どうアスカちゃんを自白に追い込むか、
考えよう。
これでどうだ」
と、
木太郎は鼻をほじりながら、
そう言うと、
他の二人も、
既に、
自分たちが辿り着いたのが、
あたかも真実であると確信したように頷いたのであった。

「辿りついた真相？と２０７号室」

木太郎、
ホウセイ、
永久の３人は、
早速、
２０７号室に向かった。
「さあ、
もとこなら、この部屋のどこに隠すかな？」
木太郎が２０７号室を見回しながら、
そう言うと、
「トイレじゃないか？」
と、
永久が言うと、
「探してはみるが、多分、違うな。
アスカちゃんがもとめ先生に助けられたときの絵のこと覚えているだろ。
あの絵を取り替えるために、
もとめ先生はトイレの中に入っているし、
トイレはここに泊まることにさせられた人間なら
誰でも入るから、
そういう出入りのあるところに隠さないと思うぞ」
と、
ホウセイは言いながらも、
自ら先頭になって、
トイレのタンクの中や、
便器の周りや、
飾ってある絵、

手洗い場の下などを自ら捜索して、
「やはり、ないぞ」
と言ったので、
木太郎、
永久が
「次、探そう」
「そうだな」
と続いて言ったので、
ホウセイはトイレから出てくると、
一応、風呂場も探してないことを確認すると、
「あの簡易ベッドにもなる、
ソファーが怪しくないか」
と言った。
しかし、
今度は永久が首を傾げた後、
「ベッドにしたり、ソファーに戻したり、動かすものだから、
違うと思うけど、探してみろよ」
と言うと、
木太郎も頷き、
ホウセイも、
「ああ、そうか」
とは言ったものの、一応、探してはみたが、
やはり、ＳＤカードは見つからなかった。
そして、
３人はその後も２０７号室にある、机や椅子などを探しまくったが、
ＳＤカードを見つけることはできなかった。
「駄目か？
どうにかして、アスカちゃんを自白させるしかないかな」
と、

永久が諦め気味に言ったとき、
木太郎がさっき探したはずの、
黒板を黙ったまま指さしたのだった。

「辿りついた真相？と２０７号室２」

「あー、
最初の試験のときのみんなの答案じゃないか？
その裏にでもＳＤカードを貼り付けて、
隠してあるというのか？」
と言って、
ホウセイは、
早速、
答案を
黒板に貼ってある答案を止めてある、
マグネット式のクリップからはずそうとして、
「あー、この裏なら．．．」
と、
大きな声を上げると、
２組の答案がそれぞれ挟まれて黒板に貼り付けられているクリップを計１０個をひとつづつ黒板から剥がして、
その内側を探し始めたので、
木太郎も永久も黒板に近づくと、
同じことをやりはじめた。
そして、
「ここに、あったぞー！」
と、
木太郎が、
クリップの裏にセロテープで貼ってあった、
プラスティック性の小さな容器に入っているＳＤカードをホウセイと永久に嬉しそうに見せたのだった。
「木太郎、

ちょっと見せてくれ！
・・・
よし！
これだ！
俺が見たのと同じメーカーだ！
絶対に間違いない。
まさか、
こんなとこに隠していたとはな。
もとこの奴。
さあ、
早速、
もとこの部屋に戻って、
中身を確認だ。
これで、
証拠もゲット！
真相も解明！
二人を自白に追い込めるぞ！」
と大声で言うと、
ホウセイは木太郎から奪うようにＳＤカードを取り上げると、
まっ先に走り出して、
木太郎と永久より先に２０７号室を出ていった。

「SDカードの謎？」

木太郎はもとこの部屋に入ると、
早速、ノートパソコンを起動させ、
２０７号室で見つけたＳＤカード
をカードリーダー挿入口に入れた。
「認識したぞ！
やったー」
と大声を出すと、
木太郎は思わず変なガッツポーズをした。
「変なポーズはいいから、早く、開けよ」
ホウセイが木太郎の後ろから覗き込むようにして言うと、
「ああ、焦るなって、
いざ、ここまで来ると、緊張するなあ」
と言って、
木太郎は鼻をほじってから、
その手で認識されたＳＤカード
をノートパソコンについていたマウスでダブルクリックした。
「あー・・・
ＺＩＰファイルが一つあるだけだ。
うん・・・
あー・・・
畜生！
パスワードがかかっている」
木太郎が鼻をひくひくさせながら、
残念そうに言うと、
「ここに証拠があるというのにな・・・」
永久もがっかりしたように言うと、

「俺のパソコンなら、パスワード解析ソフトが入っているのにな。
桁数が少なければすぐ解読できるのにな。
うーん、
こうなったら、
パスワードを予測してそのＺＩＰファイルを解凍するしかないな。
木太郎、
ちょっと、
俺にやらせてくれるか」
ホウセイがそう言って、
諦め気味の木太郎と場所を入れ代わったのだった。
「パスワードを予測するたってなあ」
永久は完全に諦めたのか、
木太郎の方を見ると、
「でも、ホウセイの奴、何か自信あるみたいだぞ」
と、
木太郎は言って股間を掻いた。
（続く）

「SDカードの謎？2」

ホウセイは、
「ファイル名は、
ｔｅｓｔ．ｚｉｐで、
拡張子の前は、
全部、
小文字のアルファベットで、
　しかも、４文字だけだな。
一見、これだけだと、
例の試験問題を入れたフォルダにも見えるかもしれないが、
ファイルのプロパティを見ると、
作成日時は、
ちょうど、
コンテストが終わった翌日の朝だ。
だから、
もとこはコンテストが終わった日の朝に、
脅迫のネタなどをすべてひとつのフォルダにまとめて、
それからパスワードをかけて圧縮して、
このＳＤカードに移して、
この部屋に隠したんだろう」
と、
感心してホウセイの話しを聞いている永久とは対照的に、
「そんな当たり前のこと長々と話すなよ」
と、
木太郎は鼻をほじりながら言うと、
「永久はこういうのに疎いから、説明しただけだ。
一応、

今、話したことも、
このファイルを解凍するためのパスワードを見つける手がかりになるか、
と思って話しただけだよ」
ホウセイが木太郎に言い返すと、
「今の話しのどこに、
どう手がかりがあるというんだよ」
と、
木太郎が鼻をひくひくさせながらさらに言い返す。
「俺が思うには、
もとこは脅迫していた相手が別のＳＤカードを盗みに来たり、
パソコン上のデータを消される場合を想定して、
このカードをここに隠していたことは間違いないと思うけど、
このカードは、
もともと、
このファイルを入れた状態で、
このまま俺にくれるつもりだったんじゃないかと思うんだ。
それで、
ファイル名がｔｅｓｔなんじゃないのか、
と、
俺は考えたんだ」
と、
ホウセイが、
永久にも木太郎にも理解できないことを話したので、
イライラしてきた木太郎が、
股間を掻きながら、
「もうワケわからないから、前置きはいいよ。
で、パスワードはわかったのか？」

と大声で訊くと、
ホウセイは、
「わかったわけじゃないけど、
今、話したことから、
俺が最初に思いついたのはこれだ」
と言って、
そのファイルの解凍画面で、
パスワードを入力するところに、
文字を打ち込んでいったのだった。

「パスワード」

ホウセイが最初に素早く打ち込んだパスワードは、
なんと、

「木太郎とホウセイ以外」

だった。
しかし、
不正解で、ファイルは解凍できなかった。
「あのなあ、いくら漢字とかのパスワードも可能だからって、
ありえないだろ・・・
それに、
自分で、
永久に、
パスワードは、
小文字のアルファベットだけのような説明してたじゃないか」
と、
木太郎が鼻をほじりながら、呆れたような感じで言うと、
ホウセイは、
「今のは試し。
覚えているか、
もとこの最初のテストの問題。

今回、
選抜された１０人の生徒の中で、

不合格となると思う生徒のフルネームを漢字で書いて、
その理由を簡潔に書きなさい

だったよな。
で、俺が答えた人物というか、解答がそれだから、
試しに入れただけだよ」
と、
ホウセイが笑いながら話すと、
「あー、
そういうことか。
でも、
俺も同じ解答だったぞ。
ということは・・・」
木太郎はホウセイの話しを訊くと、
急に鼻をひくひくさせながら、
股間を掻きながら、何か考え始めたのだった。
それとは、対照的に、
永久は、
「あのさあ、
その問題の解答としては、
二人とも不正解じゃないのか。
書くのは、
漢字で、
しかも、
フルネームだぞ」
と、
永久が深い考えもなしに言うと、
「そうか！」
と、

ホウセイは声をあげると、
また、
そのファイルの解凍画面のパスワードを入力するところに、
文字を打ち込んでいったのだった。

ホウセイが次に打ち込んだパスワードは、

ｍｉｚｕｋｉｔａｒｏｕｔｕｒｕｍａｋｅｈｏｕｓｅｉ

という、
木太郎と自分のフルネームをアルファベットの小文字に直したもの
のだったが、
ホウセイの閃きとは裏腹に解凍できなかった。
「アルファベットに拘らず、
漢字でいいんじゃないか」
永久がそう言ったので、
「そうか。
もとこのことだから、

ｔｅｓｔ．ｚｉｐ

は罠かもな。
よし、
漢字で入れるぞ」
ホウセイは、
今度は、

水木太郎鶴負ホウセイ

と、
二人のフルネームを入れたが、
また、
解凍できなかった。
「ホウセイがかたかなだからじゃないか？」
と、
今度は木太郎が鼻をほじりながら言うと、
「しょうがないだろ。
本名なんだから」
と、
ホウセイが言うと、
「だから、
もとこの問題は、

今回、
選抜された１０人の生徒の中で、
不合格となると思う生徒のフルネームを漢字で書いて、
その理由を簡潔に書きなさい

だろ。
ホウセイのところを適当な漢字をあてて、入れてみろよ」
と、
永久がまた自分の意見を言うと、
「問題にこだわるなら、理由もいるんじゃないか？」
と、
木太郎が自分の意見を言いだしたので、
「じゃあ、
俺が解答を書いたとおり、そのまんま試しに入れてみるか」
と言って、
ホウセイは、

木太郎とホウセイ以外ということしかありません。
理由はやる気が違うからです。

と、

自分の解答を思い出して打ち込もうとしたが、
今度は、文字数オーバーで、全部入力できなかった。
「ダメだ・・・」
ホウセイはそこで考え込むと、
「本当の正解を入力しないといけないんじゃないか？」

と、

永久がまた新たな意見を言いだしたのだった。

「パスワード2」

「本当の正解って？
そんな話し、合宿の途中で消えちゃったしな。
あのとき、
２０７号室に泊まらされたアスカちゃんのことかな」
と、
木太郎が鼻をほじりながら、永久の方を見ると、
横から、
ホウセイが、
「でも、アスカちゃんも名前はカタカタなだぞ。
うーん．．．」
と言って、
首を傾げると、
「だったら、
１０人の中で、
漢字だけの名前の奴の名をアルファベットで入れてみれば、
試しにいいじゃないか」
と、
木太郎がまた鼻をほじりながら、
新しい意見を言った。
「だな。
えーと、
そうすると．．．
なんだ！
漢字だけの名前は、
俺、永久浪人、
水木太郎、

落田中並、
しかいないじゃないか」
永久が指を折って、数を数えながら、
そう言った。
「3人なら、すぐだ。
じゃあ、永久からいくか」
ホウセイは、
早速、
入力を始めたが、
永久ではダメだった。
続き、
木太郎もダメで、
残るは、
皮肉にも、
もとこを殺すハメになった、
オチタだけだった。
「もし、オチタだったら、何か怖いよなあ」
と、
ホウセイも木太郎も思ってはいたが口には出さないことを、
永久は言ったのだった。
永久がそう言ったが、
ホウセイはその言葉をわざと無視するかのように、
「あいつ、
落田中並（おちたちゅうへい）
って、ジジ臭い名前だったよな」
と笑いながら言うと、
ochitacyuuhei
と、

解凍ソフトのパスワード入力欄にその文字を素早く入力したが、
やはり、
解凍できなかった。
「おかしいなあ。
最初のテストの解答だろ・・・」
と、
永久が残念そうに呟いたとき、
「そうか！
最初のテストは、
俺たちが選抜されたときのテストのことかもしれないぞ。
たしか、
問題は・・・」
と、
ホウセイが言うと、
木太郎が、
素早く、
「忘れたのかよ。
あの変な問題を。

二つのテーマのうち、
一つを９００字から９９９字までの文字数（句読点含む）でまとめなさい。
１，私花久素子の魅力について
２，私花久素子のイヤなところ

だよ。
でも、

９００字以上のパスワードはないだろう」
と、
鼻をほじりながら、
それは違うというような表情で言うと、
「いや、
俺の解答は一応９００文字以上なんだが、
結局、
構成がうまくいかなくて、
同じことの繰り返しにしたんだ。
多分、
アレで合っていると思うけどな」
と、
ホウセイはかなり自信ありげに言うと、
「この文字はどっちかな」
と呟いてから、
「まあ、どっちかは合っているだろうから、
入力してみるか」
と言って、
マウスをいじってから、
パソコンのキーボードに手をかけたのだった。

「パスワード3」

そして、
ホウセイは、

utukusisugiru

と、

解凍ソフトのパスワード入力欄に
その文字をゆっくりと入力したが、
やはり、解凍できなかった。
「入力の方じゃなくて、
文字の方だったのか」
ホウセイが、
何か意味不明なことをつぶやくと、
今度は、

utukushisugiru

と素早く入力すると、
何と、
見事に解凍に成功したのだった。
「すげえ！
でも・・・」
木太郎は嬉しい反面、
ある疑問を抱いたのだった。

木太郎の様子がおかしかったので、
ホウセイが、
「おい、木太郎。
どうした？」
と、
つい木太郎が嫌がる呼び方をしたところ、
木太郎はいつものように怒ることもなく、
鼻をひくひくさせながら、
「ちょっと、おかしいと思ってな。
そのパスワードで解凍できたということは、
もとこは、
隠していたＳＤカードをホウセイに渡すつもりだったということだろう」
「ああ、そうなるな」
木太郎の言葉にホウセイがそれだけ言って頷くと、
「でも、
もとこはもとめ先生だけじゃなく、
生徒までをも皆殺しすることを考えていたんだろう。
だったら、
何で、
ホウセイだけわかるパスワード
を入れたＳＤカードなんかを残していたんだろう。
殺す予定の人間にＳＤカードを残す必要はないだろう。
うーん・・・
このＳＤカードを隠すときまでは、
皆殺しをする気がなかったことなのかな。
その後で気が変わったのかな。
うーん・・・
変だな」
と、

木太郎は鼻をひくひくさせながら、
最後の方はつぶやくように言ったのだった。
「たしかに、その疑問はあるけど、
下手に考える前に、
せっかく、解凍したんだから、
解凍後のフォルダの中身を見てから、
考えようぜ」
と、
永久が言ったので、
「それもそうだな」
「ああ」
ホウセイも木太郎もそれだけ言って、
ホウセイが、
早速、
フォルダを開いたのだった。

「フォルダとホウセイ宛の文書ファイル」

解凍したｔｅｓｔフォルダを開くと、
その中には、
ｈｏｕｓｅｉｋｕｎｈｅというタイトルの、
　ひとつのワード形式のファイルと、
ｍａｒｕｈｉ１から３
というタイトルの３つのフォルダが入っていた。
「やっぱり、
ホウセイにあげる予定のＳＤカードだったのか」
木太郎は後ろから覗き込みながら、
鼻をひくひくさせてつぶやくと、
ホウセイは、
ふーと一呼吸おいてから、
まず、
自分宛のワード形式のファイルを開いたのだった。
　早速、
ホウセイはそのファイルの中の文書を読み始めた。
そんなに長い文章ではなかったので、
後ろから覗き込んでいた、
木太郎も、
永久も、
すぐ読めた。
そして、
文章を読み終えたホウセイは他の３つのフォルダを開こうともせず、
黙り込んだまま俯いていた。
後ろにいた木太郎も、

「いったい、
これは・・・」
と言って口籠もった。
そして、
永久は、
「まさか、本当の悪魔は・・・。
おい、気落ちしないで、フォルダの中身を見るんだ。
おい、
ホウセイ!」
と、
永久にしては珍しく大きな声を出したのだった。

「ホウセイ宛の文書ファイル2」

ホウセイ宛の文書ファイルの中身は次のとおりだった。

鶴負ホウセイくんへ

このファイルを見ている、
ということは、
パスワードがわかったのね。
さすが、ホウセイくん。
なーんて、
ファイル名にヒントがあるし、
このSDカードをあげたときに、
ヒントまで出してあげたから、
簡単すぎたわね。
今回の合宿はいろいろと楽しかったでしょう。
最後のサプライズも結構ひやっとしたかな？
それとも、
二人の演技は大根ですぐバレたかな。
で、肝心なことだけど、
このカードに入れた画像は、
木太郎くんにも見せちゃダメよ。
木太郎くんはおしゃべりだからね。
ホウセイくんだから、
信用してあげることにしたんだから。
それから、

その中身のことも絶対秘密よ。
いいわね。
もし、約束を破ったときは、
次の合宿のときにもっと怖い思いさせるからね。
それから、
明日か、
明後日会っても、
知らんぷりでいるのよ。
でも、今後ともよろしくね。

花久素子

「三つのフォルダ」

最初のフォルダに入っていたのは、
例の永久の裸の画像数枚だけだった。
次のフォルダに入っていたのは、
例のコンテストの時の画像が多数入っていた。
そして、
三つめのフォルダには、
某ブランドのスクールバッグに、
コミック数冊を一度に入れるところ
を撮影した画像が何枚も入っていた。
バッグと手を中心に撮影されているので、
顔まで写っていないが、
制服がオンシラーズ高校のものであることは、
3人にすぐわかった。
「万引きか。
でも、これじゃあ、顔が写ってないので、誰だかわからないぞ。
でも・・・」
もとこのホウセイ宛のメッセージを見て、
もとこによる生徒皆殺しという計画が実はもとこが考えた芝居だ
と気づいて、泣きそうな表情なホウセイ、木太郎とは対照的に、
冷静な永久は3つ目のフォルダの中の画像を1枚1枚、
真剣に見ていた。
そして、
「そうか。
バッグとこの特徴的なネイルで、
撮影したもとこはもちろん、
本人は自分が万引きしたときの写真だとわかるんだな。

うーん・・・
あれっ？
ネイルの種類が違うのがある。
ということは、
万引きしていたのは、
二人か？
でも、
こんなネイルしていた女子いたかな」
永久が呟くように言うと、
「万引きがバレたから、普通に戻したんだろう。
でも、他の女子ならわかるんじゃないか。
これが動機で・・・」
ホウセイはそこまで話すと、泣きそうになったのか、黙り込んだ。
「畜生！
犯人は、
多分、
チウメとアスカの奴だな。
芝居はオオシマさんともとめ先生か。
俺たちがあんなことしなければ・・・」
木太郎は犯人を決めつけたように、
チウメとアスカの名を呼びつけで言った後、
泣き出したのだった。

「屋敷の呪い？」

「木太郎、泣くな。
俺たちのせいじゃない。
もとこ、
いや、
もとこ先生のいたずらも度が過ぎたんだ。
あんなところに無線機を置いていたり、
外に聞こえるように大声で話していたのは、
俺たちを脅かすためだったんだよ。
きっと、
ナイフをすり替えた犯人たちも、
俺たちより先にそれに気づき、
俺たちと同様に、
本気にしたんだろうな。
冷静に考えれば、
変な話しだ。
俺たち全員がもとこ先生の芝居にひっかかって、
あんなことまで考えたのは、
この屋敷の呪いかもしれない。
とにかく、
この後は、
犯人がチウメちゃんとアスカちゃんかどうか、
ＳＤカードの中の爪から特定するんだ。
それですべておしまいだ」
永久は、
木太郎が偽造したメールのこともあるのか、
さほど、

もとこには同情していないようで、冷静に話した。
「犯人にちゃんなんか付けるなよ！」
木太郎が涙を拭いながら鼻声で言う。
「それはそうだが、
二人が怪しいことに間違いはないが、
爪を確認するまでは断定はできないからな。
そう興奮するな」
ようやく落ちついてきたのか、
それとも我慢しているだけなのか、
ホウセイも木太郎とは違って冷静に話した。
すると、
「ホウセイよく冷静でいられるな。
俺には無理だ。
二人が犯人だと確定したら、殺すしかない。
それが俺たちにできる最低限のお詫びだ」
と、
木太郎がとんでもないことを言いだしたので、
「やめろ！
殺人者だから、殺してもいいとは限らないだろう。
俺たちは、
あのときどうかしていたんだ。
きっと、これもこの屋敷の呪いだ。
いいか。
まずは、
犯人を特定することが先だ。
もとこ先生も、
木太郎が犯人を殺しても喜ばないぞ」
「もとこ先生のときは殺すしかないと言っていたくせに」
永久と木太郎が言い争いになりそうになったので、
「あのときは、

もとこ先生がオオシマさんと組んで俺たちを殺そうとしていたから、
ああいう話しになっただけだ。
木太郎もあのときは殺人否定派だったんだから、とにかく落ちつけ。
永久の言うとおり、
犯人を特定させるの先だ。
いいな。
俺だって悔しいが、もうしょうがない」
ホウセイがそう言って、
木太郎の肩をやさしく叩いたのだった。

「疑問」

「それからだな。
今、
この三つのフォルダを見て思ったんだが、
犯人を特定する前に俺には少し、疑問な点が3つある。
ひとつは、
何故、脅迫のネタとなる永久の裸の写真と、
万引きの写真が、
俺宛のフォルダに入っていたかだ。
もうひとつは、
それと対照的に、
もとめ先生の整形デブの写真が、
何故、
このSDカードには入っていないかだ。
最後は何故こんな場所にSDカードが隠されていたかだ」
ホウセイは最初こそ自分宛にもとこが書いた手紙のようなファイルを見たときは、気落ちしていたが、
何故か、
このときにはもう冷静になっていた。
すると、
永久が、
「ホウセイは、
本当はもとこの計画は本物で、
このSDカードはもとこの計画が遂行された後に、
自分が犯人じゃないと警察をごまかすために、
周到に用意されていただけだ、
と言うのか？」

ホウセイが挙げた疑問点から、
そのように、
自分なりに考えて言うと、
「あー・・・
そういう見方もできるのか？」
と言って、
ホウセイは疑問を感じてはいたものの
そこまでは考えていなかったので、
首を捻ったのだった。

「疑問と反論」

それまで、泣いていて黙って二人の話を聞いていた木太郎が、
ようやく泣き終わると、
「ホウセイや永久がああいうことになって、
もとこ先生の計画が本物だった
と自分に思い聞かせたい気持ちはよくわかるよ。
俺もその方がすっきりする。
たしかに、そういう疑問もある。
だけどな、
ホウセイ宛の文書をよく読んでみろ。
ここだ」
と言って、
ホウセイ宛の文書ファイルを開いて、
該当箇所を指さしてから、
「いいか。

このＳＤカードをあげたときに、
ヒントまで出してあげたから、
簡単すぎたわね。

とあるだろう。
警察を欺くために、そこまで書くだろうか。
それに、
今、永久が話したように、もとこ先生が周到に計画して、
こんなＳＤカードを用意していたとすれば、

もとこ先生にすれば、
もとめ先生の整形前のデブの偽造画像が
いずれパソコンから復元されるはずだ
ということも予想できたんじゃないか。
このＳＤカードにもとめ先生の整形前のデブの写真が入っていないのは、
偽造画像だからで、
また、
もとめ先生とは俺たちが思っていた程仲が悪くないというより、
実際は、あんな芝居をする程、仲が良かったんじゃないかな。
だから、偽造したあんな画像まで、
ホウセイに渡す気がなかったというだけじゃないのか。
それから、
永久の裸の画像と二人の女性との万引きの画像をそのＳＤカードに入れたのは、
二人の女生徒にもう１枚のＳＤカードを取られて、
ノートパソコンに入れてあった画像が消された場合、
万一、復元できないための保険みたいなもんじゃないのか。
もとこ先生は、
画像がなくなったフリをして、
次の合宿をまた開催して、
今回みたいに、
合宿が始まったら、
永久と二人の女生徒を脅すつもりだったんじゃないかな。
だから、
ここ、

それから、
その中身のことも絶対秘密よ。
いいわね。
もし、約束を破ったときは、
次の合宿のときにもっと怖い思いさせるからね。
それから、
明日か、
明後日会っても、
知らんぷりでいるのよ。

って、
次にまた合宿を開催することと、
約束を破ったときの場合のことを脅すように書いてあるんじゃないかな」
と、
木太郎は、
このように、

もとこの作成した文書ファイルの内容は信頼できるものだ
と主張したのだった。

「別れる意見」

「そんな甘いこと言えるのは、
もとこの怖さを知らないからだよ。
木太郎の言うとおりなら、
何で、
俺の裸の写真までホウセイに渡すんだ?
そんなの不要だろう。
俺の写真もあの変態のもとこには貴重だから、
あんなところに隠したんだろう。
いくら、
もとこのファンだったからって、
あんなファイルに騙されてはダメだ」
永久は、
今話したことだけでなく、
木太郎がもとこの名前で送った不気味なメール
を実際にもとこが永久宛に送ったものだ
と確信していることもあり、
もとこには不信感や恐怖感を抱いていたので、
すぐ木太郎の意見に反論した。
すると、
ホウセイは木太郎の方をちらっと見てから、
「何故、
もとこ先生が俺に永久のあんな裸の写真まで入れたＳＤカード
を渡そうとしていたかは、
たしかに、理由はわからない。
だがな、
正直に話すと・・・」

ホウセイはそこまで話すと、
また、
木太郎の方をちらっと見た。
すると、
木太郎が、
「ごめん。
実は永久がもとこ先生に怯えるようになった原因
を作ったメールは、
俺が、
イケメンの永久がもとこ先生を避けるようにするように、
もとこの名で送ったんだ。
女好きだとデマを流したのも俺だ。
たしかに、
もとこ先生には意地悪なところや、
変わったところもあるが、
あのホウセイ宛の文書ファイルを抜きにしても、
もとこ先生の今までの言動を見ると、
とても、
俺たちを皆殺しにするように考えていた
とは思えない。
いたずらくらいは考えていたとは思うけどな。
で、
さっき話したと同じで、
永久の裸の写真を残していたのは、
ホウセイ宛の文書ファイルにあったように、
もとこ先生は、
次の合宿も考えていて、
また、
それをネタに永久を脅かして、
何らかのサプライズを考えていたんだ

と思うな」
と、
木太郎が永久に頭を下げてから、
そのように話すと、
永久は、
「そうか・・・
あの不気味なメールは
木太郎がもとこの名で偽造したものだったのか。
うん・・・
待てよ・・・」
と呟くように言うと、
何か閃いたのか、
急に黙り込んだと思うと、
「このホウセイ宛の文書ファイルを作成したのは
本当にもとこかな」
と、
木太郎もホウセイも考えていないことを、
突然言いだしたのだった。

「永久が辿り着いた真相？」

「どういうことだ？」
ホウセイが永久の方を見る。
「もしかしたら、
この文書ファイルも偽造かもしれないって、
閃いたのさ。
そして、
そう考えると、
今回の事件の真相が見えてくる気がすんだ」
と、
永久がもとこから遅れられてきたメールが、
木太郎が偽造したものだと知ったとたん、
自分なりに今回の事件の真相に辿り着いたような言い方をした。
「もとこ先生が皆殺しを考えていなかったとしたら、
誰が何の目的で、
もとこ先生を庇うような俺宛の文書ファイルを偽造するんだよ。
そんな必要はないじゃないか？」
泣きやんだ木太郎が永久にすぐ言い返した。
「いや、あるんだよ。
俺の推理を確かめるには、オオシマさんと話す必要がある。
彼ももとこ先生のいたずらの共犯者だと思うからな」
「まさか、地下まで行って、会う気かよ」
永久の言葉に少しびびったように、ホウセイが言うと、
「いや、無線機を取りに行って、
俺が直接話すから」
永久は話しているうちに自信を持ちだしたのか、
そう言うと、

ホウセイも木太郎も少し考えてから、
「先に永久が考えた、今回の事件の真相を話せよ。俺宛の文書が永久の言うとおり、偽造なら、下手にオオシマと接触するのは危険だろ」
「そうだ。まず、永久が考えた真相というのを話せよ」
と、
それぞれ言ったのだった。

「永久が辿り着いた真相？2」

「まあ、俺の推理を聞かない限り、
俺を信用できないってことだな」
永久が苦笑いをすると、
「当たり前だろ。
永久だろうが、
ホウセイだろうが、
俺たちの推理は二転三転しているんだから、
そんなこと言われて、
はい、そうですかと言えるか。
それに、
あのホウセイ宛の文書ファイルが偽物だ
と言うんだからな」
完全に落ち込んでいた木太郎が、
ホウセイ宛の文書ファイルが偽物かもしれない
という永久の話しを聞いてから、
かなりの元気を取り戻したようだった。
「わかったよ。
でも、俺の推理を聞いて、
また、二人とも落ち込むなよ。いいな」
永久が言うと、
「そんな推理なのか？」
「とにかく、話せよ」
ホウセイも木太郎も少し嫌そうな顔をしながら、
それぞれ言った。
「じゃあ、話すぞ。
でも、驚くなよ。

結論から言うと、
今回の事件は、
もとこ先生のいたずら計画と、
例の万引き写真を利用して完全犯罪を企んだ人間の計画が、
あるハプニングから失敗した事件だというのが、
俺の推理だ」
と、
永久が自信ありげに話すと、
「前置きはいいから、
先にその悪魔のような犯人を話せよ」と、
ホウセイはそこまで聞いても、
永久のその推理
を信用していないような感じで言ったのだった。

「永久が辿り着いた真相？3」

永久は、
「わかった。
結論から言うよ。
今回の悪魔のような犯人は、
もとめ先生。
あっ、先生いらないな。
で、
共犯というか、
利用されたのが、
アスカちゃんとチウメちゃんだ
あのホウセイ宛の文書ファイルは、
もとこの潔白を証明するためのもの
というより、
もとこの行為がただのいたずらで、
もとこと半姉妹である、
自分の血は汚れていなく、
自殺する必要もないということにするために、
周到に用意したものなんだ」
と、
自信ありげにそこまで話したところで、
「永久、じゃあ、
何故、もとめ先生は自殺したんだよ？
おかしいじゃないか」
と、
木太郎が鼻をひくひくさせながら言うと、
「俺のさっきの話しを聞いてなかったのかよ。

今回の事件が、
例の万引き写真を利用して完全犯罪を企んだ人間の計画が、
あるハプニングから失敗した事件だ
ということを。
俺が今話したその人間が、
もとめなんだよ！」
永久は今度はもとめの名前を呼びつけにして、
強い口調で断言したのだった。

「永久が辿り着いた真相？4」

そして、
永久は自分が推理した内容を、
要約すればもっと短くできるのに、
長々と話し始めたのだった。
一応、
木太郎も、
ホウセイも、
その推理を最後まで口を挟まず聞いていたが、
永久が満足げに話し終えると、
ホウセイは腕を組んだまま、
木太郎は鼻をほじったり股間を掻いたりして、
それぞれ納得できない、
という表情のまま黙り込んでいた。
「何だよ。
二人とも、
俺の推理に不満があるようだな。
なら、
疑問点を話してみろよ。
今、話したとおりなら、すべて辻褄は合うんだぞ」
と、
二人の顔を順に見たのだった。
すると、
「たしかに、
もとめ先生が、
結局、
自殺することになったところまではな。

だけどな・・・」
ホウセイはそこまで話して、
まだ、
永久の推理に反論するだけの考えがまとまっていなかったので、
口籠もってしまったのだった。

「永久が辿り着いた真相？5」

ホウセイが口籠もってしまったので、
今度は、
木太郎が、
「ちょっと待てよ。
永久の推理だからな。
まず、
もとこ先生が中心になって、
もとめ先生とオオシマとの3人で、
最後の夜に生徒達を脅かす計画を立てた、
ということだよな。
で、
その計画とは、
まず、
永久を強請って、
もとめともとこが仲が悪く、
もとめが殺意を抱いてもいいように見せかけるために、
もとめ先生が整形デブだった、
という噂を流すように命令した。
次に、
万引きをしたアスカちゃんとチウメちゃんが演劇部だ
ということもあって、
最初は二人のどちらかあるいは双方に無線機を発見させて、
もとこの皆殺し計画を生徒達に伝えるよう強請った。
そして、
さらに、
その話しをした後、

生徒達にわざともとこを縛り上げさせて、
殺人肯定派と否定派に別れさせるようアスカちゃんとチウメちゃんに命令した。
そして、
殺人肯定派に回るアスカちゃんには、
もとめ先生にその事実を告げるようにも命令し、
殺人否定派に回るチウメちゃんには、
もとめ先生がもとこ先生を殺そうとするところを、
偽物のナイフを持った生徒が止め、
代わりに偽装殺人をさせることを提案、
実行するように命じた。
そして、
他方、
驚いたもとめ先生がわざと暴れて、
自殺未遂し、
生徒達を動揺させる。
そして、
機会をうかがって、
生徒たちが動揺しているところに、
もとことオオシマがひょっこり現れ、
生徒達をさらに驚かす
という、
ある意味いたずらのような計画だった。
このとき、
ナイフは、
もとめ先生が本物をキッチンから持ち出すだけの予定だった。
どうせ、
もとめ先生の行動は制止されるはずだったから
本物でも構わなかったということだよな。
ところが、

もとこ先生も、
アスカちゃんも、
チウメちゃんも知らないうちに、
もとめ先生が、
キッチンにあった本物のナイフとチウメの部屋にあった偽物のナイフ
をこっそりすり替えた。
たしかに、
ここまでは、
ホウセイが言うように、
ここまでは一応辻褄は合うんだが、
なんかなあ」
と、
永久の推理をまとめながら、
鼻をひくひくさせたのだった。

「永久が辿り着いた真相？に対する疑問」

木太郎が永久の推理
を簡単にまとめてそこまで話した後、
ホウセイが、
「そうだ。
そこまででも疑問がある。
もとこ先生は、
何故アスカちゃんは別にして、
チウメちゃんが偽物のナイフを持ってきていたこと
を知っていたんだ。
今までの話しでは、
もとこ先生は知らないはずだぞ」
と、
永久の推理の前半部分のひとつの問題点を指摘すると、
「ああ、そのことか。
たしかに、もとこ先生はアスカちゃんが
例の自殺未遂の演技の現場にはいなかった。
だから、
そこで俺もそこのところで、
一度は躓きかけたんだが、
アスカちゃんが偽物のナイフを護身用に身に付けていた
ということを思い出し、
もとこ先生は入浴時というか、
着替えをアスカちゃんがしているときに、
アスカちゃんがナイフを持っていることに気づいたんだよ。
それで、
アスカちゃんたちが入浴しているときか何かに、

それをいじって偽物だ
と確かめたわけだ。
もしかしたら、
それが例のいたずらを思いつくきっかけになったんじゃないかな。
それで、
その後で、
もとこ先生が、
アスカちゃんとチウメちゃん
を脅して今回の芝居に強力するよう命令したときに、
チウメちゃんも同じナイフ
を持っていることを二人から聞かされたんだよ」
と、
永久はそこまで考えていたのか、
自信満々に答えた。
「まあ、
もとこ先生が、
アスカちゃんのナイフに、
入浴の際の着替え時に気づいた点
もかなり強引な推理だけど、
それより、
二人からチウメちゃんも偽物のナイフを持っている
と仮に聞かされたにしても、
なんで、
アスカちゃんのナイフじゃなくて、
チウメちゃんのナイフを使うことにしたんだよ。
その理由がわからないぞ」
と、
木太郎が鼻をほじりながら、
すぐ言い返した。
すると、

永久はにやりと笑うと、
「本当にわからないのか？」
と珍しくやや挑発的に言って、
まず、
木太郎の方を見てからホウセイの方を見たのだった。

「永久が辿り着いた真相？に対する疑問2」

永久のやや挑発的な言葉に対し、
木太郎もホウセイも答えられずにいると、
「いいか。
アスカちゃんは、偽物のナイフ
を護身用に身につけていたわけだ。
他方、
チウメちゃんは自分の部屋に偽物のナイフ
を置いていたわけだ。
で、
アスカちゃんは一度自殺の芝居をしていて、
ずっと護身用に偽物のナイフを所持していたことは、
女子はみんな知っているから、
万一、
女子の誰かにアスカちゃんがナイフ
を所持していないことがバレたら、
せっかくのもとこ先生の仕組んだいたずらも
すぐバレる可能性があるから、
敢えて、身に着けずに部屋に放置したままのチウメちゃんのナイフ
を使うことにしたんだよ」
と、
永久にしては、
疑問を呈した木太郎も予想していない、
それなりに筋の通った答えをしたので、
木太郎にとっては予想外で、
ただ、鼻をひくひくさせながら、
何か他に反論できないか

と考えていたのだった。
他方、
ホウセイは、
「それはそれでいいよ。
でもさ。
今の永久の話だと、
殺人否定派に回ったグループの生徒には
アレが芝居だ
とわかるから、
全部の生徒にサプライズ
というわけにはいかないんじゃないか？」
と、
木太郎の質問に永久が答えるまでの間に感じていた違和感
をはっきりとした疑問にして、
永久に訊いたのだった。

「永久が辿り着いた真相？に対する疑問」

「たしかに、
もとこ先生については、
チウメちゃん以外にはサプライズは、
もとこ先生を刺し殺してしまう
というサプライズはないけど、
殺人否定派には、
次には、
最低限、
もとめの自殺の演技というサプライズを、
もとこ先生は計画していたんだろうな。
生徒達が動揺している間に、
俺の考えだと、
オオシマが登場するということまで考えていた
と思う」
と、
永久がそこまで考えていたのか、即答した。
すると、
木太郎が、
「でも、自殺未遂だったろ」
と言い返すと、
「だから、それはもとめが犯人だからさ。
で、
もとめはたった1回じゃ、あれだから、
2回目にも自殺のフリをしようとしたら、
ヒトメちゃんから奪い取ったナイフが本物だったんで、
本当に死んでしまったんだよ。

ある意味、バチだな」
と、
永久がさらにすぐ反論すると、
ホウセイが、
「やっと永久の推理の間違いに気づいたぞ」
と言って、
「永久の推理だと、
もとめ先生が自殺をしようとして、
チウメちゃんたちに制止された後、
チウメちゃんが、
もとめ先生が自殺の演技の際に使って、
落としたナイフをくそたの部屋で回収した、
ということになるんだろう。
でも、
チウメちゃんは、
偽物のナイフの所持者だから、
そのナイフを回収した際に、
それが本物じゃなく、
偽物だったことがすぐわかるんじゃないのか？
それだけじゃない。
さらに、
その後に、
また、
俺が置き忘れた本物のナイフを拾って、
2本あったはずの本物のナイフと偽物のナイフのうち、
本物の方を、
もとめ先生のいる前でヒトメちゃんに預けるなんて、
おかしいんじゃないか」
と、
ホウセイは、

永久の推理の問題点を指摘したのだった。

「永久が辿り着いた真相？と永久の反論」

すると、
永久は、
「ホウセイ、
今話したことは間違ってるよ。
もとめ先生の自殺未遂の後の、
偽物のナイフのことについては、
俺はそこまで話してない。
いいか。
レイカちゃんは、
血のついた偽物のナイフを持って、
怯えるようにして、
トイレの中で構えていたんだぞ。
ということはだな。
もとめ先生が自殺したときには、
偽物のナイフは部屋のどこかに落ちていたのさ。
もとめ先生が最初の自殺騒ぎをしたときには、
もとめ先生が使用した偽物のナイフは誰にも回収されず、
くそたの部屋のどこかに落ちたままになっていたんだ。
そうじゃないと、
レイカちゃんが偽物のナイフを所持していたことと、
それに血痕がついていたことの説明がつかないだろ」
と、
永久は予め考えていたのか、
すぐ反論した。
すると、
今度は木太郎が、

鼻をひくひくしながら、
「うーん？
辻褄は合ってるんだけど、
なんか、おかしいなあ。
自殺を試みた人間のそばに刃物を置いたままにするかな。
普通、取り上げて、隠すだろ。
この辺はどう考えているんだ？」
と、
木太郎が永久の方を見た。

「永久の推理と嘘」

すると、
永久はまるで人が変わったように、
平然として、
そして、
自信ありげに話し出した。
「木太郎、
その疑問は当然だ。
だけど、
もとめ、ヒトメちゃん、レイカちゃん、チウメちゃんの４人だけがくそたの部屋に残された後の行動について、
ヒトメちゃんも、
チウメちゃんも、
嘘をついているんだ。
実際に、
あのとき、
もとこ先生の部屋の様子をうかがいに行ったのは、
チウメちゃん、
レイカちゃんではなく、
ヒトメちゃんとレイカちゃんなんだよ。
いいか。
俺の推理だと、
チウメちゃんは、
アレが自分たちも協力して、
もとこ先生たちが仕組んだ芝居だ、
と知っていたから、

確認になんか行く必要はないからな」
この永久の話しに、
「それなら、
レイカちゃんもそうじゃないか？」
と、
木太郎が鼻をひくひくさせながら、
反論すると、
「レイカちゃんは、
俺とくそたがレイカちゃんの部屋に隠れているときに、
自分の部屋を開けようとした
って、前に話しただろ。
だから、
レイカちゃんは、
自分の部屋に何らかの用事があったんだ。
トイレかもしれないしな。
それから、
ヒトメちゃんの性格だと一人で見に行くのは怖い
とか言ったんだろうな。
それで、
３人の中では、一番しっかりしているチウメちゃんが
もとめ先生を見張ることにしたんだろう。
チウメちゃんはもとめ先生が共犯で、自殺も演技だ
ということを知っているから、
一人で大丈夫だと残りの二人に話したんだろうな」
と、
永久は、
すぐ反論したのだった。

「永久の推理と嘘2」

しかし、
木太郎もホウセイも、
永久の反論には納得しなかった。
「まず、
あの二人が、
ヒトメちゃんがナイフを取られたことに関して
嘘を言うのはわかるけど、
何で、
様子をうかがいに行った女子のことまで嘘を言う必要があるんだ。
ヒトメちゃんとチウメちゃんが
まだ嘘をついてることは、その様子からわかるけど、
そこまで嘘をつく必要はないだろう。
それがひとつの疑問。
まあ、
それはまだ小さい疑問の方だが、
俺が納得できないのは、
今の永久の推理だと、
レイカちゃんが
ああまで怯えていた理由の説明ができないはずだ。
ピンときてないようだから、
もっと詳しく話すが、
レイカちゃんが、
偽物のナイフを所持していた理由は
今の反論で一応辻褄は合う。
だけどな、
スコップはともかく、

レイカちゃんは、
普通なら、
触りたくもないはずのもとめ先生が自殺に使ったナイフを持ち出してまで、
トイレの中でじっと隠れて怯えていたんだぞ。
だけど、
永久の推理では、
　レイカちゃんがそこまで怯える必要はないだろ。
もとめ先生は1回自殺未遂をしているんだから、
2回目に自殺をしたとしても、
そうは驚かないだろうし、
ましてや、
武器を持って逃げる必要もないし、
あんなに怯える必要もないからな」
と、
まず、
ホウセイが再反論したのだった。

「永久の推理と怯えと嘘の理由」

「そうだ！
ホウセイが正しい！
チウメちゃんはまだしも、
ヒトメちゃんがそこまで嘘をつく理由はない！
残念だったな、永久」
木太郎が、
先に真相を推理されて悔しかったのか、
鼻をほじりながら少しバカにしたような感じで、
ホウセイに同調して言う。
しかし、
永久は、
そういう木太郎の態度には慣れていたので、
怒りもせず落ちついた感じで、
「普通は
ホウセイや木太郎の思っているとおりかもしれないけどな。
でも、
レイカちゃんが怯え、
ヒトメちゃんが脅かされる理由があったとしたら、
どうなるのかな？」
と言って、
ホウセイと木太郎の顔を見た。
「怯えと嘘の理由？
わかって話してるのかよ」
木太郎は今度は股間を掻きながら、そう言った。
「ああ。

いいかな。
これまでの俺の推理だと、
ヒトメちゃんは最初は芝居の話しは知らなかった。
他方、
レイカちゃんは、
おちたがもとこを刺したのは芝居だと確信していた。
その二人がもとこの部屋に様子をうかがいにいくことになったときの状況
を考えてみろよ。
くそたの部屋に残った４人のうちで、
アレがお芝居だ
と思っていなかったのはヒトメちゃんだけだ。
実際、もとめは違うけど、芝居のつもりではいた。
このとき、
他のメンバーの戻りが遅いとき、
４人の心境は、
それぞれ違ったはずだ。
レイカちゃんとチウメちゃんは芝居がバレてしまって何かあったのか不安で、
ヒトメちゃんの場合は、
こんな殺人みたいなことが起きてしまい凄く不安になっていたことと、
いなくなったメンバーがこの後、
どんなことをするのか心配だったに違いない。
で、
もとめの場合は、
自分がナイフをすり替えたので、
きっと、
殺人否定派と芝居だと知った殺人肯定派のそこにいない生徒の中で、

誰がナイフをすり替えたか議論でもしているんではないか、
と内心思っていて、
自分がすりかえ犯ではないことを共犯のアユメちゃん、
チウメちゃんも含め、
生徒たち全員に確信させるにはどうすればいいか、
を、
それぞれ考えていたと思う」
永久がそこまで話すと、
焦れったそうにしていた木太郎が口を挟んだのだった。

「永久の推理と怯えと嘘の理由2」

「くどいなあ。
いいよ。
そんな心境なんて、
俺たちが問題にしているのは、
何で、
レイカちゃんがあんなに怯えていて、
ヒトメちゃんがあんな大嘘つく理由があるかなんだよ。
結論から話せよ」
木太郎がまた鼻をほじりながら焦れったそうに口を挟む。
「焦るなって。
４人の心境を話したのは、
　そういう心境で結局ヒトメちゃんとレイカちゃんが様子をうかがいにいったので、
　これも想像だけど、
おそらく、
ヒトメちゃんがかなり不安がっていたので、
二人で、
もとこの部屋に様子をうかがいに行くとき、
レイカちゃんがこっそりヒトメちゃんに本当のことを話した、と思うんだよ。
だから、レイカちゃんは、いきなり、もとこの部屋に入らず、まず、
ヒトメちゃんにもとこの部屋の様子をうかがわせて、
不安を取り除こうとしたら、
結果は違ったことになっていたことをヒトメちゃんが盗み聞きして、

また、レイカちゃんもその耳で確認したんだよ。
それで、
自分たちの計画とは全然違うことになったのに驚いて、
ヒトメちゃんの方が話しが違うということを多分言いだして、
レイカちゃんの部屋で話しをしようとしたら、
俺たちが先に部屋に入り、鍵を閉めていたから、
開いているはずのレイカちゃんの部屋にまで鍵がかかっていたで、
二人共、さらに怖くなり、
もとめとチウメちゃんの待つ部屋に戻る前に、
どこかの部屋で話しをしたんだと俺は考えている」
と、
永久がまた自信ありげに自分の意見を長々と話すと、
「おい、結論から話せよ。
そんなダラダラした話しじゃ、
怯えと嘘の理由が全然わからないだろ」
と、
木太郎はまた股間を掻きながら、
焦れったそうに少し大きな声を上げたのだった。

「永久の推理と怯えと嘘の理由3」

木太郎の様子を見た永久は、
「焦り過ぎだけど、
また、反論される
と思ってこうして順を追って説明してるんだけどな。
じゃあ、先に話す。
レイカちゃんは、
芝居のはずが本当にもとこが死んだことを盗み聞きして、
チウメちゃんが予めナイフをすり替えて、
自分にわざと本物のナイフを取らせて、
それをオチタに渡させた
と確信して、
チウメちゃんが恐くなっていたんだよ。
それで、
何も知らないヒトメちゃんに例の芝居の話しなどをしたんだ。
レイカちゃんの怯えの理由のひとつは、まず、それ」
と、
永久がまた話し始めたところで、
「うーん？
おかしいな。
じゃあ、何故、このこと二人はチウメちゃんともとめ先生のいる部屋に戻って
行ったんだよ」
と、
木太郎がまた口を挟んだ。
「だから、最後まで訊けよ」
「木太郎、

なんとなく、
俺は永久の推理の概要はわかってきた。
正しいかは別だけどな。
だから、最後まで訊こう」
と、
永久に続き、ホウセイが言ったので、
「わかったよ」
木太郎が鼻をほじりながら、
少しふてくされたように言う。
「じゃあ、続けるぞ。
で、
今の質問の答えにもなるけど、
まず、
ヒトメちゃんはレイカちゃんの話し
を半分くらいしか信用していなかったのと、
レイカちゃんの話しのとおりなら、戻らない
と自分たちも危ないと思って、
もとめとチウメちゃんのいる部屋へ戻って、
もとこが死んだことをとぼけているように、
レイカちゃんに話したんだよ。
多分、
ヒトメちゃんは、
チウメちゃんが犯人なら、
もとこが死んだことは知っているから、
二人が平気な顔で、
もとこの部屋の前で他の生徒たちが揉めているとか話せば、
チウメちゃんの様子でわかる
と思ったんだろうな。
で、
結局、レイカちゃんも戻らないで、

自分がやられたら困るので、ヒトメちゃんの意見に従ったんだ。
ただ、万一のことを考えて、キッチンへ行って、
ナイフを取りに行ったんだけどなかったんだけど、
ホウセイが落としたナイフをヒトメちゃんが見つけて、
どこか目についてしまうとこに、入れていたんだろうな。
で、
二人が部屋に戻ったとたん、
もとめが、
ヒトメちゃんの持っていたナイフを見つけると、
それを奪って、
いきなり自殺を試みて、
本当に死んでしまったんだろうな。
ただ、ナイフだから、即死じゃなかったはずで、
死ぬ間際に、
きっと、
「あんたたち、もとこに寝返ったのね」
とか、
何か、凄い言葉をもとめが吐いたんだろうな。
それで、
レイカちゃんは余計恐くなり、
多分、最初のもとめの自殺未遂のとき、
落ちていたままになっていた返り血を浴びたナイフ
をもとめが使ったナイフだと思い込んで、
そのナイフを拾って、そのまま一人で先に逃げたんだろうな」
と、
永久が長々と自分の推理を話しているとき、
また、
木太郎が永久の話しの途中で、
「おかしいな」
と鼻をほじりながら、今度はホウセイを意識して、

小さな声で呟いたのだった。

「永久の推理と怯えと嘘の理由４」

永久は、
木太郎の呟きを聞き逃さず、
「どこがおかしいんだ？」
と木太郎の方を見て訊いたのだった。
「いいのか？
話しの途中で？」
「まあ、今話したところまでで、
ひとつの区切りだからな。
疑問があるなら言ってみろ」
木太郎の言葉に、
永久は自分の推理にかなり自信があるのか、
そんな言い方をしたのだった。
「言ってみろか。
いつ、そんな自信家になったんだ。
まあ、いい。
おかしいと言ったのは、
何で、
最初のときにもとめ先生が自殺の演技に使ったナイフが、
もとめ先生の血が飛び散ってかかるような場所に落ちていたかということと、
これは今永久の話しを聞いていて気づいただが、
レイカちゃんは本物のナイフを知っているはずなのに、
何で、
偽物のナイフを持って逃げたんだ？
この二つの点はおかしいだろ」
と、

木太郎が疑問点を指摘すると、
ホウセイも、
「たしかにそうだな」
とだけ言った。
すると、
永久は平然とした表情で、
「前者の疑問点は、
落ちていたナイフは、レイカちゃんとヒトメちゃんがまだくそたの部屋にいたときに、
多分、
チウメちゃんの影に隠れて床に落ちていただけで、
二人がいなくなった後も、
床に放置されていたままだったんだろうな。
何故なら、
チウメちゃん自身はもとめ先生が本当に自殺する気のないことをわかっていたからな。
次、
後者の点は、
レイカちゃんは多分目が悪い。
また、
オチタにナイフを渡したときもチウメちゃんの話しを鵜呑みにして、
それが偽物かをオチタと同様確認していない。
だから、
ナイフの違いに気づかなかった。
それだけだ」
とすぐ答えたのだった。

「永久の推理と怯えと嘘の理由5」

永久の反論に対し、
木太郎もホウセイも、
永久の推理には何か違和感があったが辻褄は合っていたので、
すぐ言い返すことはできなかった。
永久は二人が反論してこないことを確認すると、
さらに話しを続けた。
「疑問点は解消されたかな。
話しを続けるぞ。
もとめ先生が本当に自殺し、
レイカちゃんが逃げた後、
おそらく、
実際は、
チウメちゃんが、
ヒトメちゃんを、
なんでそんなナイフを持ち込んだのかと、
かなりきつい感じで責めたんだろうな。
ヒトメちゃんは、
レイカちゃんから、
例の芝居の話しと、
チウメちゃんが芝居の提案して偽物のナイフ
を本物にすり替えてもとこを殺させたんだろう
という話しを聞いていただけじゃなく、
さっきも話したように、
もとめ先生が死ぬ間際に、

「あんたたち、

もとこに寝返ったのね」
とか、
何か、
凄い言葉をもとめが吐いたことから、
チウメちゃんが犯人だ、
と確信して、
おそらく、
チウメちゃんにレイカちゃんからは何も聞いてないフリをして、
ただ、謝るだけ謝って、
後は、チウメちゃんに指示されたとおり、
行動することにしたわけさ。
自分が、
チウメちゃんが犯人だ
と知っていることがバレたら殺されるかもしれないからな。
他方、
チウメちゃんは、
ヒトメちゃんのおどおどした様子や、
レイカちゃんが逃げたことや、
もとめの最後の言葉から、
自分がヒトメちゃんに疑われていることに気づくと共に、
同じように偽物のナイフを持っていたアスカちゃんが自分を陥れた、
と思い込んだんだろうな。
それで、
自分を犯人だ
と疑っているヒトメちゃんなら、
自分の言うとおり嘘の証言をしてくれると思って、

ああ言った嘘を考えて、
どうにかして、
自分が疑われないようにすることと、
アスカちゃんが犯人だ
という証拠をつかもうとしたわけさ。
まあ、
真相はだいたいこんなところだろう」
永久は自分の推理を最後まで話して、
ため息をついたのだった。

「永久の推理と木太郎とホウセイ」

永久の話しを聞き終えたホウセイも、
その真似をするかのように、
「はー」
と大きなため息をつき、
木太郎は、
鼻をひくひくさせながら、
「うーん・・・」
と唸り声を上げたあと、
落ちつきなく部屋の中をうろちょろし始めた。
「二人が納得できない気持ちはわかるが、
現実はこんなもんだ。
俺の推理に矛盾やおかしな点があるなら言えよ」
と、
永久は、
ホウセイと木太郎のいかにも不満そうな表情を見て、
わざとやや挑発的に言ったが、
ホウセイも木太郎も
すぐには反論を思いつかなかったので、
何も言い返しはしなかった。
そこで、
「後は、
オオシマさんと連絡を取って、
それから、
ヒトメちゃん、
チウメちゃんの順に話しを聞いて、
俺の推理が正しいことを確認すれば、

二人には気の毒だが、
事件は解決だ。
それでいいな」
と、
永久は自信満々に言い切ると、
「さて、
無線機は最後はどの部屋に置いたっけな」
と言って、
ホウセイと木太郎の方を順に見たのだった。

「永久の推理と無線機と異論」

すると、
ホウセイが、
「無線機は、
たしかくそたの部屋にあるはずだが、
話しを訊く順序には反対だな。
ヒトメちゃん、
チウメちゃん、
オオシマの順の方が確実だ。
オオシマが完全にシロだとは、
まだ断定できないからな」
と、
永久に異論を述べると、
「だけど、
あのホウセイ宛の文書ファイルには、
二人の芝居ってあったけど・・・
あー、そうか！
アレは偽造だったな。
もとめが真犯人ならオオシマも共犯かもしれないということだな。
なるほど」
永久はひとりで自分の推理を前提に納得していた。
「今回の真犯人は、
結局、
もとめ先生とオオシマか？
うーん、
それだとまだ不気味だな」
永久の推理には納得していなかった木太郎がオオシマも共犯

と聞いたとたん、考えが変わったのか、
鼻をひくひくさせながら、そういうことを言いだした。
「木太郎、
俺は永久の推理が正しければ、オオシマも共犯の可能性があると思って、
さっきのような意見を言っただけど、
まだ、
オオシマが共犯だと決まったわけじゃないし、
そこまで心配はしないでいいよ」
と、
ホウセイが言うと、
「ホウセイはまだ俺の推理に疑問があるようだな。
まあ、しょうがない。
とにかく、
無線機を取って、
まず、
ホウセイの意見のとおり、
ヒトメちゃんから話しを訊こう。
ヒトメちゃんの話し次第では、
俺もまた考えを変えるかもしれないから」
「まあ、それしかないな。
ホウセイ、行こうぜ。
遅いってくそたに怒鳴られるぞ。
あー、
その前にちょっとトイレ」
と、
永久の言葉に、
木太郎はそれだけ言うと、
さっさとトイレに入っていったのだった。
（続く）

「永久の推理とくそたの部屋に行く前に」

「くせえーーー！
木太郎！
こんなときに」
「人間誰でもするんだよ。
嫌なら隣の部屋で待ってろ」
「俺たちもトイレ行っておくか？
みんなも、限界だろう。
男子はいいけど女子をどうするかだな」
「それはくそたの部屋で決めよう。
とにかく、くせえから、
隣の部屋に行こうぜ」
「じゃあ、俺は違う部屋にする」
「なんだよ！
永久もかよ。済ましたら
じゃあ、この部屋の前で集合な」
「わかった」
「ああ」
こうして、
３人は別々の部屋でトイレで、
用を足すことに決めたのだった。
そして・・・

「永久の推理とトイレの後で」

「まさか、
オオシマがなんてことはないよな」
と呟きながら、
木太郎がまず用を済ますと、
そっと、
部屋を出て辺りを見渡すと、
ホウセイがすぐやってきた。
「木太郎、早かったな」
「普通だよ。
オオシマが一瞬いるかもって、
部屋出るときはドキドキしたけどな」
「いるわけないだろ。
で、永久の推理はどう思う?」
ホウセイが木太郎と話していると、
急に声をひそめて訊く。
「一応、筋は通っているんだけど、
なんとなく違うような気がするんだよな」
「俺もだ。特にもとめ先生が真犯人なら、
本物のナイフと偽物のナイフとを間違えて自殺するかな?」
「なんだよ!
それ永久に言えば良かったじゃないか?」
「いや、
一瞬、俺はそうも考えたんだけど、
レイカちゃんも偽物と本物間違えてただろ、
って、
反論されたら、水掛け論だから、

早くヒトメちゃんの話を聞いた方が早いと思ってさ。
だから、やめたんだ」
「あー、そうか。
来た、話しはやめだ」
永久がすぐそばの部屋からすっきりしたような表情で、
出てくると、二人は話しをやめた。
永久は、
「くそたの部屋にいる女子を
どうやって、トイレにいかせてあげるか？
名案ないかな」
と、
自分はかなりトイレを我慢していたのか、
本題ではないことを二人に訊いたのだった。

「永久の推理とトイレ」

すると、
木太郎は、
「永久、
自分の推理に自信があるなら、
まったく問題のない、
アユメちゃんを自由にして、
アユメちゃんを付き添いにして、
順番にトイレに行ってもらえば、
いいじゃないか。
なっ！　ホウセイ」
と、
少し意地悪い感じで、
いつものように鼻をほじりながらいった。
「俺は別に自分の推理に自信がないわけじゃないさ。
ただ、手の内をまだ見せたくないだけだ。
アユメちゃんだけ、自由にしたら、
他の3人に気づかれるだろう」
永久がすぐ言いきかせると、
「だったら、
こうしよう。
まず、チウメちゃんとアスカちゃんは互いに疑りあっているからダメ。
最初は
ヒトメちゃんだけに話しを訊きたいと嘘を言って、
だから、
ヒトメちゃんを自由にはできない。

消去法で、
アユメちゃんを一時的に自由にして、
順番に付き添ってもらって、
その代わり、俺たちは万一の場合に備えて、
スコップとかの武器を持ってトイレの外で待つ。
これなら、別にいいだろ」
と、
ホウセイが言うと、
永久は黙って頷いたが、
木太郎がにやけながら、
「でもさあ、
同じ部屋で俺とか永久みたいに小の方じゃなかったら、
どうすんだ？」
とくだらないことを言ってきたので、
「だったら、さっきみたいに別の部屋でさせればいいだろ」
と、
ホウセイが呆れた顔で言うと、
「でも、外で待つのは男子だろ」
と、
木太郎がしつこく言ってきたので、
「そこまで考えるなよ。
女子を木太郎や永久と一緒にするな！
もう行くぞ」
と、
ホウセイは怒って、
木太郎を無視してさっさとくそたの部屋に向かって
歩いて行ったのだった。

「トイレとくそたの部屋」

「おい、何で、怒るんだよ」
「こんな時にくだらないこと心配するからだよ」
「くだらないか？」
「はっきり言って、くだらない」
「そうかな」
「ホウセイを追うぞ」
「まあ、いいや」
木太郎と永久はそんな会話を少しだけして、
慌ててホウセイを追いかけた。

ホウセイは、
くそたの部屋の前に入ると、
ノックをしてから、
ドアノブを捻ったが、
鍵がかかっていたので、
「俺だ。
ホウセイだ」
「ちょっと、今、入れない」
ホウセイが扉の外から大声をあげると、
中から、
おちたの声がした。
「入れない？
入れられないの間違いだろ」

「うーん。
入れないのは同じだ。
いいから、
ちょっと待っててってくれよ。
くそた、
早くしてくれー」
後から追いかけてきて、
そのやりとりを聞いていた木太郎が、
「だから、
俺が心配していたように、
もうそういう時間なんだよ」
と、
鼻をほじりながら、
にやりと笑った。
「そういう？」
「ホウセイも鈍いな。
木太郎の話したこと、
真面目に考えた方がいいぞ。
女子もそうで、
仮に、
アレしてしまったら、
大変な屈辱だからな」
「アレ？」
「永久、こいつは便秘だな。
だから、鈍いんだよ」
「うん？」
「待とう」
「それがいい」
「うーん？
オチタ！

なるべく早くしろよ」
ホウセイたちがそんなやりとりをしていると、
いきなり扉が開いたかと思うと、
プーンと嫌な臭いがしてきたのだった。

「トイレタイムとホウセイの作戦」

「こりゃ、ひどい臭いだな」
「木太郎が言うな」
「くそたを見張らせて、
女子をおちたの部屋に移動させるか」
「ああ」
木太郎、ホウセイ、永久はまず残る女子たち
を順におちたの部屋に移動させた。
そして、
おちたがトイレからすっきりした顔で出てきて、
くそたと一緒におちたの部屋に来ると、
くそたとおちたに、
女子にもトイレに行かせることを話し、
ホウセイの話したとおりに実行するよう指示し、
念のため、
永久が、くそたたちと同じように見張ることになった。

くそた、おちた、永久をおちたの部屋に残し、
木太郎とホウセイは、
鼻をつまんだまま、
まず、
くそたの部屋で無線機を見つけると、
「ここは臭いから、
俺の部屋に行こうぜ。
何か、作戦考えてるんだろ」
と、

木太郎がホウセイに言って、
二人は木太郎の部屋に行った。

そこで、
ホウセイは、
ヒトメから話しを聞く前に、
トイレタイムが済んだら、
いったん、
女子をひとりづつ、
木太郎の部屋に呼び出し、
簡単な質問だけをすることを提案した。
それは、ヒトメに本格的に話しを聞く前に他の女子の話を聞いたフリをして、
ヒトメにプレシャーを与える作戦だった。

そして、
無事トイレタイムも終わり、
一通り、４人の女子に簡単な質問をした後、
再び、
ヒトメと永久を木太郎の部屋に呼びだしたのだった。

「ヒトメの事情聴取とホウセイの作戦」

比較的軽いヒトメを抱いた永久が、
木太郎の部屋に入るなり、
ホウセイが、
「ヒトメちゃん、
何故、嘘をついたんだ。
ああ、ごめん。
ヒトメちゃんの意思じゃないんだよな。
おい、
永久、
彼女をそこにベッドに寝かせて、楽にしてやれよ」
と、
ヒトメをいきなり脅かすような言い方をして後、
急にやさしくそう言った。
「そのつもりだたけどな。
口にくわえさせたままのハンカチもはずすぞ」
永久はそれだけ言うと、
ヒトメを木太郎のベッドの上にホウセイたちの方が
見えるような位置で寝かせて、
ヒトメが話せるようにした。
すると、
今度は木太郎がいつもと違って、真顔で、
「もとめ先生は自殺かな?
それとも、殺されたのかな。
それとも、
誰かのせいで死んじゃったのかな」
と、

わざと曖昧な言い方をした。
すると、
ヒトメは急に泣き出した。
「泣いてちゃ、答えにならないよ。
正解は誰かのせいで死んじゃったんだな」
と、
永久が言うと、
ヒトメは黙ったまま、頷いた。
「と言っても、
ヒトメちゃんがトイレに行っている間に、
もとめ先生が自殺したというワケではなく、
違うことが原因なんだな」
と、
今度はホウセイが訊くと、
ヒトメはまだ泣きながらも、
少し考えてから、
黙って頷いたのだった。

「ヒトメの事情聴取とホウセイの作戦2」

「二人ともその言い方ひどいじゃないか。
別にヒトメちゃんはわざとやったわけじゃないんだからさ。
殺人犯みたいな言い方するなよ」
木太郎が鼻をほじりながら、ホウセイの作戦どおりに言う。

ヒトメは急に悔しそうな表情になったかと思うと、
「あたしが殺人犯だと誰かが言ったの？」
と言って、
ホウセイと永久の方を順に見る。
「それは言えないな」
「ああ、約束だから」
ホウセイと永久はわざととぼけた言い方をすると、
「チウメでしょ。
チウメなんでしょ。
違うのよ」
ヒトメは、
ホウセイの作戦にまんまとはまり、
自らチウメの名前を出したが、
「さあ？」
「約束だからな」
ホウセイと永久はヒトメにさらに話しをさせようと、
わざとまたとぼけてみせたのだった。　すると、
「あれはあたしも悪かったけど、
チウメも、
もとめ先生も悪いのよ」
と、

ヒトメは弁解するようにそう言ったのだった

「真の悪魔？」

そして、
さらに、
ヒトメは、
訊かれてもいないのに、
「でも、
本当の悪魔は、
もとこ先生じゃなく」
と、
そこまで話して、
ホウセイたちが
思わずヒトメの意外な言葉に驚きの表情を見せてしまったがために、
そこで急に話すのをやめてしまったのだった。
ヒトメが急に黙り込んだので、
ホウセイが、
最初に、
その理由は自分たちがその言葉に思わず驚き、
それを顔に出してしまったがために、
ヒトメにそのことを悟られると共に、
ヒトメ自身は、
ホウセイたちがもとめを悪魔だ
と思い込んでいるに違いないので、
余計な話しをしない方がいいと思って黙り込んだに違いない
と思って、
わざと、
「ヒトメちゃん、
安心して。

木太郎と永久はどう思っているか、
知らないけど、
俺だけはもとめ先生、チウメちゃん、ヒトメちゃんの3人が、
今回の悪魔というより、
今回の真犯人だったとは思っていないから。
正直に話してくれないかな」
と、
わざと木太郎と永久は名前を出した3人が共犯だと疑っている
と思わせるような言い方をした。
すると、
ホウセイの言葉からホウセイの意図に気づいた木太郎は、
「俺はずばりもとめ先生とヒトメちゃんの仕業だ
と思っていたんだけどな。
今の感じだと違うのか？」
と、
わざとそう言って、鼻をひくひくさせた。
そして、
永久も木太郎の言葉で、
ホウセイと木太郎の意図に気づいて、
「俺は、悪いけど、チウメちゃんとヒトメちゃんが共犯で、
罪をもとめ先生になすりつけようとして自殺に見せかけたんだ
と思ったんだけど、
違うのかな」
と、
やはり、
わざと嘘を言ったのだった。

「もとめの言葉」

すると、
ヒトメは3人の作戦にひっかかったのか、
「違うのよ。
あたしでも、
もとめ先生でも、
チウメでも、
もちろん、
もとこ先生でも、
ないの。
レイカもあのときの様子じゃ、
違うみたい。
多分、
アスカかアユメのどちらかか、
または、
両方が、
本当の悪魔なの。
もとこ先生があたしたちを皆殺しにして、
もとめ先生のせいにするというのは、
もとこ先生ともとめ先生が考えた、
この合宿最後のサプライズだったの。
もちろん、
オオシマさんも協力してのことなんだけど。
で、
もとめ先生が死んじゃったのは、
事故というか、勘違いが原因なの。
もちろん、

あたしが一番悪いんだけど。
で、レイカが誤解して」
そこまで、
ヒトメが早口でまくしたてたところで、
意外な彼女の言葉に驚いたホウセイが、
「アレは、
もとこ先生ともとめ先生が仕組んだ芝居？」
最初の方の疑問点を口にした。
「あたしももとめ先生から話しを聞くまでは
知らなかったのよ」
「えっ？
どういうこと？」
ヒトメの言葉だけからは、
必ずしも自分の推理が間違っている
とは思っていない永久が訊くと、
「だから、お芝居のことよ」
と、
ヒトメは永久の質問している意味を勘違いして、
そう答えたのだった。

「女の涙に弱い木太郎と永久と嘘」

ヒトメが泣き出したので、
木太郎と永久は少し動揺したが、
ホウセイだけは意外にクールで、
泣き出したヒトメに対し、
「今の話しはおかしいな。
泣いてもダメだよ。
まだ、嘘をついてるんだろ」
と言って、
少し怖い表情をして、
ヒトメを睨んだのだった。
「おい、ホウセイ」
「どこが嘘なんだよ」
永久と木太郎は、
ヒトメが泣いていたので、
逆にホウセイの方を睨みつけた。
「忘れたのかよ。
ついさっき、
ヒトメちゃんは、
例の芝居について、

あたしももとめ先生から話しを聞くまでは知らなかったのよ。

って、話していたんだぞ。
だけど、

今の話しじゃ、そんな機会ないじゃないか？
おかしいだろ。
女の涙に騙されるなよ！」
と言い返して、
ホウセイは、
逆に木太郎と永久を睨み返した。
「あー・・・」
「そうだった」
マヌケにも二人は、
ヒトメが泣き出したことで少し動揺していたのか、
ホウセイが指摘したヒトメの話しの矛盾に気づいていなかったのだった。

「嘘？」

木太郎と永久も、
ホウセイに指摘されてヒトメの話しの矛盾に気づき、
ヒトメの方を見ると、
彼女は、
「あー、ごめんなさい。
肝心なことを忘れていて。

もとめ先生が
「ほらね」
と言う前に、
「これはあたしたちのサプライズなのよ」
とだけ言ったの。
それから、
ああなってしまって」
ヒトメがまだ涙を流しながら鼻声で話すと、
「うーん？
それでもおかしいな」
と、
ホウセイがくそれだけ言って、
ヒトメをじっと睨むように見ると、
木太郎も永久も疑いのまなざしでヒトメを見た。
すると、
「あー、ごめんなさい・・・
芝居のことは、
レイカが逃げて、

チウメと二人でもとめ先生の遺体をベッドに運んだ後に、
チウメから聞いて、
二人でこれはまずいと思って、
前みたいな嘘をつくことにしたの・・・
混乱してたから、
あんなこと話してしまったけど、
本当なのよ・・・」
と、
ヒトメがそこまで話すと、
また、
泣き出した。
すると、
ホウセイが、
木太郎と永久の方をちらっと見た後、
「ふーん」
とだけ言うと、
「じゃあ、また、交代だな」
と言ったので、
永久が黙ってヒトメの口を、
以前のように、
ハンカチで猿ぐつわのようにして、
話せないようにした後、
木太郎と永久と二人で
ヒトメをくそたたちのいる部屋に運びに行ったのだった。

「チウメの話し」

ホウセイが、
ヒトメの話しの不自然な点を考えている間に、
木太郎と永久の二人が、
今度はチウメを部屋に運んできて、
ヒトメと同じように、
ベッドの上に寝かせて、
猿くつわのようなハンカチーフだけをはずして、
ヒトメと同じような質問をした。
そして、
チウメの話しも、
最初の部分、
チウメが気づいたら、
くそたの部屋に残っていたのは、
チウメともとめとヒトメだけになっていたところまでは
ヒトメとまったく同じ内容だった。
そこで、
今度は、
ホウセイが、
ヒトメと同じ話しなのに、
わざとらしく、
「えっ？
本当にレイカちゃんまで、くそたの部屋から出ていっていったの？
確認するけど、
本当かな？」
と、

チウメの話しがあたかも嘘のような感じで言った。
すると、
チウメは、
「本当だけど、
まさか、
ヒトメが違うことを話したの？」
と、
チウメがホウセイから視線を微妙に避けながら、
そう言った。
そこで、
ホウセイはチウメの様子から、
「今は話せない。
まずは、全部、話しを聞かないとね。
今は重要な点の確認だけ。
話しの食い違い部分は、
チウメちゃんの話しを全部聞いてから、
また、改めて、質問するよ」
と、
チウメが暗にヒトメが違う話をしている
と思い込むような言い方をしたのだった。

「チウメの話し2」

「で、チウメちゃんの話しだけだと、
くそたの部屋に残っていたのは、
チウメちゃんともとめ先生とヒトメちゃんの3人だけになったはずだけど、
その後、どういうことがあったの？」
ホウセイは、
わざと、
ヒトメが違う話をしているとチウメに思い込ませるような話しをした。
「それで、
私はあのときはオチタくんのお芝居だと思っていたから、
なんとなく、おかしくなって、つい笑ってしまったの。
そうしたら、
何故か、
もとめ先生まで笑いだしたの」
と、
チウメが話したところで、
永久が思わず、
「今、何故かって言ったよね」
と口を出してしまったのだった。
「ゴホン・・・」
ホウセイがわざとらしくセキをした後、永久の方をちらっと見て、
今は黙っているように目で合図した。
永久とホウセイの様子が明らかにおかしかったので、
チウメは、
「ヒトメは違うことを話しているのね」

と、
ホウセイの目を見ると、
「さあ・・・
今は言えない。
これまでのことが嘘じゃないんなら、
ヒトメちゃんがどう話したなんか気にしないで、
堂々と本当のことを話せばいいんじゃないかな」
と、
ホウセイは
チウメをわざと挑発するような言い方をしたのだった。
すると、
「それもそうですね。
私は嘘はついてませんから。
えーと、
もとめ先生も何故か笑いだしたところからですよね」
と言って、
チウメは少し不機嫌そうな表情を見せた後、
すぐ普段の表情に戻って話しを続けたのだった。

「チウメの話し3」

「ああ」
ホウセイがそれだけ言うと、
「すると、
ヒトメが、

あんなことが起きたのに、なんで、二人とも笑えるの。
いくら、
もとこが悪魔だからって、死んじゃったのよ

って、
私ともとめ先生を睨みつけてきたの。
そうしたら、
もとめ先生が、
近くに落ちていたナイフを拾って、
それを
ヒトメに向けたの。
私もびっくりしたけど、
ヒトメもびっくりして、
慌てて、
その手でもとめ先生が持っていたナイフを振り払ったの。
そうしたら、
もとめ先生が、

今のは冗談よ。

って、笑いながら言ったんだけど、
その表情がなんとなくそのときには私には暗く見えたの。
私がそう感じたのは、もとめ先生の表情を見て、
いくら悪魔のような姉でも、死んだのは辛いのでわざと笑ってごまかしているのかな
と思ったので、

アレはお芝居でもとこ先生は無事ですから、
安心してください

って、
実際は違ったんだけど、
私は芝居だ
と思っていたのでそう話したの。
で、
私がその理由を話そうとしたら、
そのすぐ後に、
レイカがまっ青な顔して、
手にナイフを持って戻ってきたの。
そして、

本当にもとこが死んじゃった、

って、

言ったの。
私は最初は冗談か
と思ったんだけど、
レイカの顔が真っ青だったんで、
思わず、
もとめ先生の方を見たら、
その隙に、
驚いたヒトメが、
何故か、
レイカの持っていたナイフを、
いきなり、
レイカから奪ったの。
そうしたら、
それを、
また、
もとめ先生が奪って、

これ？

とか言って、
いきなり、
自分の手首をそのナイフで切りつけたの。
そうしたら、
大量の血がもの凄い勢いで飛び散ったの。
で、
それを見た、
レイカが悲鳴を上げたかと思うと、
そのまま逃げだしたわけ。
それで、
私もヒトメもワケがわからなくなって」

と、

チウメが話したところで、

ホウセイが、

「ここまでの話しは本当なの？」

と、

また、チウメの話しの一部がまるで嘘のような言い方をして、

チウメの方を見たのだった。

「チウメの話しの矛盾とヒトメの話し

「はい。私は嘘はついてません」
と、
チウメはホウセイの目を見て、はっきりとした口調で言ったところ、
「じゃあ、とりあえず、話しはここまで。
木太郎、永久、チウメちゃんをまたくそたの部屋に戻してきて、
変わりにヒトメちゃんを連れてきてくれるか」
と言うと、
永久が、
「わかった、木太郎もいいな」
と即答し、
木太郎は二人が何かに気づいたと感じたのか、黙って頷くと、
永久と二人で、
チウメの口をまたハンカチーフで猿ぐつわのような感じで縛ると、
素早く、
彼女を連れて行った。

そして、
永久と木太郎が、
ヒトメをまた連れてくると、
部屋の前で待っていたホウセイが、
「とりあえず、
ヒトメちゃんは隣の部屋に寝かせておいてくれるかな」
と言ったので、
二人は黙って頷き、

ヒトメを隣の部屋に運んでから、
ホウセイの待つ部屋に戻ってきたのだった。

そうして、
また、
ホウセイ、木太郎、永久の3人だけになると、
ホウセイが、
「チウメちゃんが明かに嘘を言っていることがわかったか?」
と言って、
永久と木太郎の顔を順に見たのだった。

「チウメの話しの矛盾とヒトメの話し2」

「そこはまだ断定できないが、
チウメちゃんは本来なら、
オチタが
もとこが刺したナイフが本物であることを知りえないはずなのに知っていたのだから、
ナイフすり替え犯の単独犯か最低でもその共犯であることに間違いはない」
と、
ホウセイが言うと、
木太郎も永久も黙って頷いた。
そして、
「だから、
チウメちゃんは、
ナイフを取りに部屋に戻ったとき、
自分では取らず、
レイカちゃんに取らせたわけだな。
それで、
レイカちゃんは、
もとこの部屋の様子を知って、
本当にもとこが死んだことを知ってから、
くそたの部屋に戻ったとき、
もとめ先生が自殺しているのと、部屋の雰囲気か何かから、
チウメちゃんが犯人だと確信して、すぐ逃げ出したんだな」
と、
永久が言った。
「多分な。

チウメちゃんがあのとき自分でナイフを取っていたら、
すぐ本物か偽物かわかるはずだからな。
後は、
木太郎がさっき話したように、
もとめ先生が関与していたか、
もとめ先生は芝居だと思っていたか、
そして、
別に共犯がいたかだな」
と、
ホウセイが言うと、
木太郎が鼻をひくひくさせながら、
「ヒトメちゃんのさっきの様子だと、
ヒトメちゃんも、
まだ何か嘘を言っているんだと思うけど、
この後どうする？」
と言って、
ホウセイと永久の方を見たのだった。
（続く）

「ついに真相解明か？」

「その前に、
例のＳＤカードの画像だと、
万引き犯は二人いた。
一人はチウメちゃんなんだろうな。
そして、
もう一人の万引き犯がヒトメちゃんか、
あるいは、
今回のナイフすりかえ犯の共犯にほぼ間違いないと思うな。
ヒトメちゃんの話しがおかしいのは、
ヒトメちゃんも万引き犯で、
チウメちゃんに脅かされているのか、
それとも、
共犯だからかな」
と、
ホウセイが言うと、
「こうは考えられないか、
ホウセイ宛の文書ファイルは本物。
もとめ先生も悪魔ではなく、
もとこ先生に協力しただけ。
とすると、
本物のナイフはヒトメちゃんが奪われたものではなく、
ヒトメちゃんかチウメちゃんが、
もとめ先生に、
レイカちゃんを脅すために自殺のフリ
をするようにとわざと渡したんじゃないのかな」
と、

永久が言うと、
木太郎が鼻をひくひくさせながら、
「それもおかしいぞ。
もし、永久の話しどおりなら、
もとめ先生、チウメちゃん、ヒトメちゃんの3人はレイカちゃん
が来る前に、
オチタのやったことが芝居だ
という話しをしていたことになるんじゃないのか?」
と、
木太郎が言うと、
「そうか!
それなら、すべてが辻褄が合う」
と言って、
ホウセイが手を叩いたのだった。

「ついに真相解明か？2」

「本当にわかったのか？」
木太郎が鼻をほじりながら、
ホウセイの方を見ると、
「ああ、多分」
「多分かよ」
ホウセイの言葉に、
永久が少しがっかりしたような表情をすると、
「多分でも、
永久の推理よりは真相に近いと思う。
話すぞ」
ホウセイがそう言うと、
他の二人は黙って頷く。
「いいか。
レイカちゃんが部屋を出た後に、
もとめ先生が、
チウメちゃんと、
レイカちゃんにだけ、
本当のことを話してしまったんだ。
多分、
二人の話の中で、
もとめ先生が笑ったというのは、
そのことなんだ。
チウメちゃんが笑ったのは、
計画がうまく言ったので、
つい顔に出てしまっただけで、
それをヒトメちゃんが後で指摘したんだろう。

だから、
この辺りの二人の話は合致しているんだよ。
で、
問題はこの後、
いいか。
まず、
もとめ先生が、
もとこ先生と一緒に計画を立てたサプライズが
予想以上にうまく成功したので、
思わず、
笑ってしまったんだ。
で、
そこで笑ったままだと、
誤解を受けるので、
今回の芝居のこと。
つまり、
ホウセイ宛の文書ファイルに書かれているような話し
をするしかなくなったんだよ。
ここまではどうかな？」
と言って、
ホウセイは
自信ありげに他の二人の顔を順に見た。

「ついに真相解明か？3」

「いいんじゃないか」
木太郎は偉そうに股間を掻きながらそれだけ言う。
「そうすると、
犯人はヒトメちゃんとチウメちゃんだったわけだな。
ただ、
ひとつ疑問がある。
もとめ先生と、
ヒトメちゃん、チウメちゃんがグルでないなら、
ああいう芝居を思いついたのは、
偶然だったというわけか？」
と、
永久がホウセイの話しの矛盾は指摘しないが、
なんとなく、
しっくりしていないような表情で言うと、
「まあ、そこはな。
もとこ先生、もとめ先生側と、
俺たちが同じ芝居を偶然考えつくというのは、
なんとも説明しようがないが、
結論から言うと、それしか考えられない。
で、だ」
と、
ホウセイが話すと、
「もう、あの二人に、
ちゃん、
なんて、
つかなくていいんじゃないか。

とんでもない悪魔だぞ」
と、
急に木太郎が鼻をひくひくさせながら言い出すと、
「まだ、確実じゃないから、我慢しろよ。
大好きだったもとこ先生が殺されたことがほぼ確実になって、
怒りが突然込み上げてくるのもわかるけどさ。
とにかく、
ホウセイの話しの続きを聞こう」
と言って、
永久がホウセイをなだめる。
「木太郎、
少し我慢してくれ。
俺だって、ちゃん、なんて、つけたくはないけどな。
で、
問題はその後だ。
もとめ先生から、
実は、
生徒皆殺し計画はサプライズというか、芝居・・・」
ホウセイが急に口籠もる。
「どうした？
ホウセイ？」
永久がホウセイの方を見ると、
「実際にもとこ先生を刺したのは、
もとめ先生じゃなく、
オチタなんだぞ。
でも、
もとめ先生は芝居だ
と思っていたんだぞ。
これはどういうことを意味すると思う？」
と言って、

ホウセイは二人の顔を順に見た。

「ついに真相解明か？4」

永久がホウセイの問いに、
「オチタが、
もとめ先生ともとこ先生の計画の共犯というか、
仲間だったのか。
あるいは、
殺人否定派グループにもとめ先生ともとこ先生の仲間がいたのか。
だけど、ナイフをオチタに渡したのはレイカちゃんだよな」
そこまで話すと、
「オチタかレイカちゃんのどちらかが、
もとめ先生ともとこ先生の芝居の仲間だったのか？」
と、
ホウセイが言うと、
「そう言えば、
二人の演技は大根ですぐバレたかな。
って、
もとこ先生の文書ファイルにあったな。
ということは、仲間はオチタか」
と、
木太郎が鼻をひくひくさせながら言うと、
ホウセイも永久も、
「あのオチタがか？」
「でもなあ」
とだけ言って、
考え込んでしまったのだった。

「ついに真相解明か？5」

しばらく、
考え込んでいた3人の中で、
木太郎が鼻をひくひくさせながら、
「必ずしもオチタとは限らないぞ。
もとめ先生ともとこ先生とグルなら、
あの場で芝居を提案すればいいからな。
うん・・・」
と言いかけると、
「例のもとこを殺したフリをする芝居を提案したのは、
ホウセイだったって話しじゃないか」
と、
永久が言う。
「俺は違うよ」
ホウセイが慌てて否定すると、
「わかってるって、
あのもとこ先生の文書ファイルを見ればな。
いいか。
あのとき、
殺人否定派は、
俺、ホウセイ、オチタ、レイカちゃん、チウメ、
一応、ちゃんつけて、チウメちゃんだけがもとこ先生の部屋にいた。
だから、
ホウセイが芝居を提案しなくても、
他の誰かが芝居を提案した可能性がある。
俺は違うし、ホウセイもオチタも違う。
多分、レイカちゃんも、

だとすると、
やはり、
チウメちゃん？」
と、
木太郎が永久とホウセイの方を見ると、
永久が、
「今度こそ、真相がわかったぞ」
と、
大きな声を出したのだった。

「ついに真相解明か？6」

永久の話しを聞いた、
木太郎がよくやるように鼻をほじりながら、
「本当かよ。
俺は、

二人の演技は大根ですぐバレたかな。
とのもとめ先生のあの文書の二人が誰かを考えていたら、
まったく、わからなくなったんだからな。
俺より頭がいいとは思えない、
永久にわかるのかよ」
と、
少しバカにするように言ったのだった。
しかし、
永久は木太郎の性格をよく知っていたので、
怒ることもなく、
「ああ。
木太郎は演技のことを勘違いしているんだよ。
多分、ホウセイもな。
二人とも、
もとこ先生のあの文書ファイルの演技は、
もとこ先生を刺すときの演技のことだと思ってるだろう。
でも、違うんだよ」
と話したところで、
ホウセイが先に、
「そうか！
そういうことか！」

と、

永久が言おうとしたことに気づいたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2366k/

「キモ男三人衆セカンド、変態黒女教師と永久屋敷の呪い？」

2011年11月2日02時16分発行